

Oracle® Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition

管理者ガイド



リリース 11.2.13

F26628-05

2023年6月

ORACLE®

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 管理者ガイド、リリース 11.2.13

F26628-05

Copyright © 2009, 2023, Oracle and/or its affiliates.

著者: EPM Information Development Team

This software and related documentation are provided under a license agreement containing restrictions on use and disclosure and are protected by intellectual property laws. Except as expressly permitted in your license agreement or allowed by law, you may not use, copy, reproduce, translate, broadcast, modify, license, transmit, distribute, exhibit, perform, publish, or display any part, in any form, or by any means. Reverse engineering, disassembly, or decompilation of this software, unless required by law for interoperability, is prohibited.

The information contained herein is subject to change without notice and is not warranted to be error-free. If you find any errors, please report them to us in writing.

If this is software, software documentation, data (as defined in the Federal Acquisition Regulation), or related documentation that is delivered to the U.S. Government or anyone licensing it on behalf of the U.S. Government, then the following notice is applicable:

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs) and Oracle computer documentation or other Oracle data delivered to or accessed by U.S. Government end users are "commercial computer software," "commercial computer software documentation," or "limited rights data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, reproduction, duplication, release, display, disclosure, modification, preparation of derivative works, and/or adaptation of i) Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs), ii) Oracle computer documentation and/or iii) other Oracle data, is subject to the rights and limitations specified in the license contained in the applicable contract. The terms governing the U.S. Government's use of Oracle cloud services are defined by the applicable contract for such services. No other rights are granted to the U.S. Government.

This software or hardware is developed for general use in a variety of information management applications. It is not developed or intended for use in any inherently dangerous applications, including applications that may create a risk of personal injury. If you use this software or hardware in dangerous applications, then you shall be responsible to take all appropriate fail-safe, backup, redundancy, and other measures to ensure its safe use. Oracle Corporation and its affiliates disclaim any liability for any damages caused by use of this software or hardware in dangerous applications.

Oracle®, Java, and MySQL are registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

Intel and Intel Inside are trademarks or registered trademarks of Intel Corporation. All SPARC trademarks are used under license and are trademarks or registered trademarks of SPARC International, Inc. AMD, Epyc, and the AMD logo are trademarks or registered trademarks of Advanced Micro Devices. UNIX is a registered trademark of The Open Group.

This software or hardware and documentation may provide access to or information about content, products, and services from third parties. Oracle Corporation and its affiliates are not responsible for and expressly disclaim all warranties of any kind with respect to third-party content, products, and services unless otherwise set forth in an applicable agreement between you and Oracle. Oracle Corporation and its affiliates will not be responsible for any loss, costs, or damages incurred due to your access to or use of third-party content, products, or services, except as set forth in an applicable agreement between you and Oracle.

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて

ドキュメントのフィードバック

1 FDMEE の使用

サポートされているソース・システム	1-1
ファイルベースのデータ・ロード	1-1
サポートされている EPM System ターゲット・アプリケーション	1-2
FDMEE の主な利点	1-2
FDMEE アプリケーション・フォルダのアーキテクチャ	1-3
データへのドリル	1-6
ドリル・スルー	1-7
FDMEE ランディング・ページへのドリル・スルー	1-8
FDMEE のアーキテクチャ	1-8
FDMEE での Oracle Data Integrator の構成	1-10
Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムに基づくデータ・サーバーの設定	1-11
物理スキーマの設定	1-12
ODI コンテキスト・コードの設定	1-12
JD Edwards と統合するための ODI の設定	1-13
セキュリティ	1-18
統合プロセスの概要	1-20
一般会計データの抽出	1-20
EPM アプリケーションからのデータのライトバック	1-20
メタデータの統合	1-21
一般会計の統合の理解	1-21
要件	1-22
必須ディメンション	1-22
Enterprise Resource Planning (ERP)システム・プロパティから供給されるメンバ ー・プロパティ	1-23
ディメンションの処理方法	1-27

言語の処理方法	1-28
通貨の処理方法	1-29
メタデータ・ルールの定義	1-30
ソース・システム階層の EPM ディメンションへのロード	1-37
FDMEE のナビゲート	1-38
ツールバー	1-38
ヘルプ	1-38
「タスク」ペインのオプション	1-38
ワークフロー・タスク	1-39
設定タスク	1-39
グリッドでのデータの操作	1-40
FDMEE ユーザー・インタフェース要素	1-41
「詳細検索」オプション	1-42
POV バーの使用	1-43
ロケーション POV の選択	1-43
期間 POV の設定	1-44
カテゴリ POV の設定	1-45
POV のロックおよびロック解除	1-45
管理タスク	1-46
プロファイル・リストの事前定義	1-47
システムレベルのプロファイルの設定	1-47
アプリケーションレベルのプロファイルの設定	1-58
ユーザー・レベルのプロファイルの設定	1-63
セキュリティ・オプションの設定	1-65
ソース・システムの設定	1-72
Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムの登録	1-72
ファイルベースのソース・システムの登録	1-74
登録済ソース・システムの削除	1-74
登録済ソース・システム詳細の編集	1-75
ファイルベースのデータ・ロード定義の追加	1-75
ソース・アダプタの操作	1-76
ターゲット・アプリケーションの登録	1-78
カスタム・ターゲット・アプリケーションの作成	1-81
参照ディメンションの追加	1-83
アプリケーションのディメンションの詳細の定義	1-84
Essbase および Planning のアプリケーション・オプションの定義	1-85
Profitability and Cost Management アプリケーションの登録	1-94
Financial Management のアプリケーション・オプションの定義	1-97
登録済ターゲット・アプリケーションの削除	1-108

ターゲット・アプリケーション名の複数回の再利用	1-109
ソース会計エンティティの選択	1-110
一般会計職責の割当て	1-111
ソース会計エンティティ・グループの操作	1-111
Excel データのロード	1-113
Excel へのダウンロード	1-113
Excel からのアップロード	1-115

2 統合タスク

インポート・フォーマットの操作	2-1
インポート・フォーマットの定義	2-2
インポート・フォーマット情報の表示	2-2
インポート・フォーマットの追加	2-2
インポート・フォーマットの削除	2-5
例による問合せ	2-5
インポート・フォーマット・マッピングの定義	2-5
インポート・フォーマット・マッピングの定義	2-7
Enterprise Resource Planning (ERP)セグメントのソース・ディメンションの連結	2-8
インポート式の追加	2-9
インポート式タイプ	2-10
処理順序	2-13
ファイルベース・マッピングのインポート・フォーマットの定義	2-13
ファイルベースのソースのソース・ディメンションの連結	2-18
インポート・フォーマット・ビルダーの使用	2-19
すべてのデータ型データ・ロード	2-21
すべてのデータ型データ・ロード・プロセスの説明	2-21
すべてのデータ型ロード方法の設定	2-22
すべてのデータ型ロード方法の設定	2-23
インポート・フォーマットのデータ型の設定	2-24
複数列データ型のインポート・フォーマットの設定	2-25
LINEITEM フラグを使用した EPM アプリケーションへの増分データのロード	2-30
複数列数値データのロード	2-33
データ・ファイルからの列としての期間のロード	2-36
ライトバック・マッピング	2-38
EPM アプリケーション間でのデータの同期用のインポート・フォーマットの定義	2-39
Enterprise Resource Planning (ERP) と EPM アプリケーション間でのデータの同期のインポート・フォーマットの定義	2-40
ライトバック・マッピングの定義(E-Business Suite および PeopleSoft のみ)	2-42

ロケーションの定義	2-42
期間マッピングの定義	2-45
グローバル・マッピング	2-48
アプリケーション・マッピング	2-49
ソース・マッピング	2-50
カテゴリ・マッピングの定義	2-52
グローバル・マッピング	2-52
アプリケーション・マッピング	2-53

3 データの統合

データのロード	3-1
メンバー・マッピングの作成	3-1
「明示」方式を使用したマッピングの作成	3-3
「範囲」方式を使用したマッピングの作成	3-4
「含む」方式を使用したマッピングの作成	3-5
マルチディメンション方式を使用したマッピングの作成	3-5
マルチディメンショナル・マッピングでの特殊文字の使用	3-7
「類似」方式を使用したマッピングの作成	3-7
「類似」マッピングのソース値式での特殊文字の使用	3-8
自動マップ・ワイルドカード	3-10
ターゲット値式での特殊文字の使用	3-13
ターゲット値のフォーマット・マスク・マッピング	3-14
メンバー・マッピングの無視	3-17
メンバー・マッピングのインポート	3-18
Excel テンプレート(マッピング・テンプレート)のダウンロード	3-20
Excel マッピングのインポート	3-22
メンバー・マッピングのエクスポート	3-23
メンバー・マッピングの削除	3-24
メンバー・マッピングの復元	3-24
データを抽出するためのデータ・ロードのルールの定義	3-25
データ・ロード・ルールの詳細の定義	3-25
ファイルベース・ソース・システムのためのデータ・ロード・ルールの詳細の定義	3-45
Planning および Essbase のソース・パラメータの定義	3-47
Financial Management のソース・パラメータの定義	3-48
データ・ロードのルールの管理	3-50
データ・ロードのルールの編集	3-50
データ・ロードのルールの実行	3-51
データ・ロード・ルールのスケジュール	3-55

データ・ロードのルール・ステータスの確認	3-56
データ・ロードのルールの削除	3-56
ターゲット・オプションの使用	3-56
カスタム・オプションの作成	3-57
Financial Management への為替レートのロード	3-57
ドリル・スルーの使用	3-59
ドリル領域の作成	3-60
ドリル・スルー・コンポーネント	3-61
ドリル・スルー URL のサーバー・コンポーネントの追加	3-62
ドリル・スルー URL の詳細コンポーネントの追加	3-63
ドリル・スルーの結果の表示	3-64
EPM Cloud との統合	3-67
Secure Sockets Layer (SSL)証明書の構成	3-68
前提条件	3-71
EPM Cloud デプロイメントの設定	3-71
EPM Cloud またはオンプレミス・アプリケーションへのデータのロード	3-72
EPM Cloud アプリケーションのエクスポート	3-72
データ・ロード・ワークベンチの使用方法	3-72
ワークフロー・グリッド	3-73
データの処理	3-73
ワークベンチ・データ・グリッドの使用方法	3-78
プロセス詳細の表示	3-85
Oracle ERP Cloud Oracle General Ledger アプリケーションの統合	3-88
統合プロセスの説明	3-89
ソース接続の構成	3-90
インポート・フォーマットの操作	3-93
ロケーションの定義	3-94
カテゴリ・マッピングの定義	3-96
データ・ロード・マッピング	3-96
データ・ロード・ルールの追加	3-98
Oracle General Ledger の調整期間の処理	3-99
データ・ロード・ルールのフィルタの追加	3-101
Oracle ERP Cloud へのドリル・スルー	3-104
Oracle ERP Cloud へのライトバック	3-104
Oracle ERP Cloud への予算のライトバック	3-104
Oracle ERP Cloud - Oracle General Ledger への実績のライトバック	3-109
Excel 試算表ファイルを使用したデータのインポート	3-113
テキスト形式の試算表ファイルと Excel 形式の試算表ファイル	3-114
Excel 試算表テンプレートのダウンロード	3-114

Excel 形式の試算表テンプレートの定義	3-114
Excel を使用した複数期間データ・ロードの追加	3-115
Excel マッピングのインポート	3-116
仕訳テンプレートを使用したデータのインポート	3-117
仕訳テンプレートのロードに関するその他の考慮事項	3-117
Financial Management の仕訳の統合	3-117
仕訳テンプレートのダウンロード	3-119
仕訳テンプレートの定義	3-119
仕訳の処理	3-122
ユニバーサル・データ・アダプタを使用したデータのロード	3-125
Oracle Database Integrator (ODI)でのユニバーサル・データ・アダプタの定義	3-126
SAP HANA の構成	3-129
FDMEE でのユニバーサル・データ・アダプタの操作	3-130
ユニバーサル・データ・アダプタのソース・システムとインポート・フォーマット	3-136
ユニバーサル・データ・アダプタ・ソース・システムとロケーション	3-137
ユニバーサル・データ・アダプタ関連ソースのためのデータ・ロード・マッピング	3-138
ユニバーサル・データ・アダプタ関連ソースのためのデータ・ロード・ルール	3-138
Data Relationship Management と FDMEE の統合	3-141
統合の設定	3-141
Data Relationship Management および FDMEE のロケーション	3-143
Data Relationship Management と FDMEE のメタデータ・ルール	3-143
Data Relationship Management からのデータ・ロード・マッピングのインポート	3-145
Financial Close Management と FDMEE との統合	3-146
データ・ロード、同期およびライトバック	3-147
概要	3-147
データの同期およびライトバック	3-147
データの同期	3-147
ライトバック	3-156

4 ロジック勘定科目

ロジック勘定科目の概要	4-1
ロジック・グループの作成	4-1
単純なロジック・グループ内での勘定科目の作成	4-2
ロジック・グループ・フィールド	4-2
演算子と値/式	4-3
式および関数	4-4
値/式	4-7
シーケンス	4-8

エクスポート	4-8
要約されたロジック勘定科目の作成	4-8
複雑なロジック勘定科目の作成	4-8
複雑なロジックの例 1: CashTx	4-10
インポート済の値のサンプル	4-11
インポート済勘定科目名のサンプル	4-11
最終結果	4-11
複雑なロジックの例 2: CashTx	4-11
インポート済の値のサンプル	4-12
ロジック・メンバー	4-12
最終結果	4-12

5 確認ルール

確認レポートの概要	5-1
確認ルール・グループの作成	5-1
確認ルールの作成	5-2
ルール・ロジック	5-4
ルール・ロジック・エディタを使用した確認ルールの作成	5-4
ルール・ロジックの追加	5-6
フリー・フォーム・テキストとしてのルール・ロジック文の追加	5-13
確認ルール式のテスト	5-14
BSO Essbase キューブの確認レポートの実行	5-15
確認エンティティ・グループの作成	5-16

6 バッチ処理

バッチ定義の操作	6-1
バッチ・グループの追加	6-8
バッチの実行	6-8
オープン・バッチの使用	6-9
オープン・バッチ・ファイルの名前フォーマット	6-9
命名規則	6-10
オープン・バッチ・インポートおよびエクスポート・ロード方法	6-11
オープン・バッチの作成	6-11
E-Business Suite との統合を実行するオープン・バッチの作成	6-13
複数期間のオープン・バッチの作成	6-14
ジョブのスケジュール	6-16
スケジュール済ジョブの取消し	6-19

バッチ・スクリプトの操作	6-19
パスワードの暗号化の使用	6-20
データ・ロード・ルール用バッチ・スクリプトの実行	6-21
データ・ロード・ルール用パラメータの設定	6-21
メタデータ・ルール用バッチ・スクリプトの実行	6-22
メタデータ・ルール用パラメータの設定	6-22
HR データ・ルール用バッチ・スクリプトの実行	6-23
HR データ・ルール用パラメータの設定	6-23
バッチ・スクリプトの実行によるマッピング・ルールのインポート	6-24
マッピング・ルールをインポートするためのパラメータの設定	6-24
ライトバックに対するデータ・ロード・ルール用バッチ・スクリプトの実行	6-25
バッチの実行	6-25
バッチを実行するためのパラメータの設定	6-25

7 スクリプトの作成と使用

概要	7-1
Jython の基本概要	7-1
スクリプト・エディタの使用	7-2
概要	7-2
スクリプト・エディタの起動	7-2
スクリプト・エディタのレイアウト	7-2
インポート・スクリプトの使用	7-3
概要	7-3
インポート・スクリプトの作成	7-3
インポート・スクリプト・パラメータ	7-4
インポート・フォーマットへのインポート・スクリプトの割当て	7-5
インポート・スクリプト関数の使用	7-6
先頭文字の抽出	7-6
中央の文字の抽出	7-7
文字列の末尾の抽出	7-8
分割関数の使用	7-8
Skip 関数(条件スキップ)の使用	7-9
一時変数の保管と取得	7-10
一時変数の保管	7-11
一時変数の取得	7-12
インポート・スクリプトのサンプル	7-14
マッピング・スクリプトの使用	7-15
概要	7-15

マッピング・スクリプトの作成	7-16
マッピング・スクリプトでの Jython オブジェクトの使用	7-18
マッピング・スクリプトのサンプル	7-20
イベント・スクリプトの使用	7-21
概要	7-21
FDMEE でサポートされているイベント・スクリプト	7-22
イベント・スクリプトの作成	7-25
スクリプト内からの FDMEE の実行の停止	7-26
インポート・フォーマットの動的変更	7-26
イベント・スクリプトにおけるファイル・システム・オブジェクトの使用	7-27
イベント・スクリプトのサンプル	7-28
カスタム・スクリプトの使用	7-30
概要	7-30
カスタム・スクリプトの作成	7-30
カスタム・スクリプトの操作	7-30
カスタム・スクリプト・グループの追加	7-31
スクリプトの登録	7-31
カスタム・スクリプトの実行	7-33
コマンドラインからのカスタム・スクリプトの実行	7-33
Jython を使用したカスタム・スクリプトのサンプル	7-34
データ・ロード・ルールの送信	7-35
レポートの送信	7-38
JAVA API の使用	7-40
概要	7-40
Java API リスト	7-41
Jython スクリプトでの UNICODE 文字の使用	7-51
スクリプトを開発するための JAVA IDE の使用	7-52
Visual Basic	7-54

8 **FDMEE** レポート

FDMEE レポート	8-1
問合せ定義の操作	8-1
レポート定義の操作	8-3
レポート・グループの追加	8-3
レポート・グループへのレポートの関連付け	8-3
レポート・テンプレートの作成	8-4
翻訳済レポート・テンプレート用の XLIFF ファイルの作成	8-5
レポートの実行	8-6

FDMEE の詳細レポート	8-8
監査レポート	8-8
勘定科目追跡ワイルドカード(ターゲット勘定科目、期間、カテゴリ)	8-8
勘定科目追跡 - フリーフォーム(ターゲット勘定科目、期間、カテゴリ)	8-9
ロケーションのマップ・モニター	8-9
ユーザーのマップ・モニター	8-10
確認レポート	8-11
確認レポート	8-12
確認レポート期間範囲(カテゴリ、開始期間、終了期間)	8-12
確認レポート(警告あり)	8-12
検証エンティティ・シーケンス別の確認レポート	8-13
基本試算表レポート	8-13
TB の現在のロケーション、ターゲットあり(カテゴリ、期間)	8-13
TB の現在のロケーション、ルールあり(カテゴリ、期間)	8-14
TB の現在のロケーション、すべてのディメンション - ターゲット、ターゲット・エンティティ / 勘定科目別(カテゴリ、期間)	8-14
TB の現在のロケーション、すべてのディメンション - ターゲット(カテゴリ、期間)	8-15
TB の現在のロケーション、ターゲット勘定科目別(カテゴリ、期間)	8-15
TB の現在のロケーション、ターゲット・エンティティ 勘定科目別(カテゴリ、期間)	8-16
TB の変換済の現在のロケーション(ターゲット・エンティティ / 勘定科目別)	8-16
リスト・レポート	8-16
ロケーション別のインポート・フォーマット	8-17
ロケーションのリスト	8-17
ロケーション分析	8-17
ディメンション・マップ(ディメンション)	8-17
POV のディメンション・マップ(ディメンション、カテゴリ、期間)	8-18
プロセス・モニター・レポート	8-18
プロセス・モニター(カテゴリ、期間)	8-18
プロセス・ステータス期間範囲(カテゴリ、開始期間、終了期間)	8-19
プロセス・モニター、すべてのカテゴリ(カテゴリ、期間)	8-19
差異レポート	8-20
勘定科目追跡差異	8-20
試算表差異	8-20

A FDMEE REST API

FDMEE の URL 構造	A-1
データ・ルールの実行	A-1
バッチ・ルールの実行	A-5

データ・マッピングのインポート	A-6
データ・マッピングのエクスポート	A-9
レポートの実行	A-11

B **FDMEE によって使用されるソース・システム表**

E-Business Suite ソース・システム表	B-1
PeopleSoft Enterprise Financial Management ソース・システム表	B-3
PeopleSoft コミットメント・コントロール・ソース・システム表	B-4
E-Business Suite 表のシノニムの作成	B-5

C **Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムでの代替スキーマの作成**

D **ステージング表**

FDMEE ステージング表	D-1
「ソースからインポート」に使用されるステージング表	D-2
ドリル・スルーに使用されるデータ表	D-2
ターゲットにエクスポートに使用されるビュー	D-2

E **TDATAMAPSEG 表のアーカイブ**

F **PeopleSoft コミットメント・コントロール**

G **レポート問合せ表のリファレンス**

TDATASEG 表のリファレンス	G-1
TLOGPROCESS 表のリファレンス	G-5

H **システム・メンテナンス・タスク**

アプリケーション・フォルダの保守	H-2
プロセス表の保守	H-2
EBS GL 残高表の保守	H-2
PeopleSoft 元帳表の保守	H-3
アプリケーションによるデータ表の保守	H-3

I Jython、Eclipse および Python の設定

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Oracle サポートへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>、聴覚に障害があるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントに対するフィードバックを送るには、Oracle Help Center トピックのページの下部にあるフィードバック・ボタンをクリックします。
epmdoc_ww@oracle.com に電子メールを送信することもできます。

1

FDMEE の使用

サポートされているソース・システム

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は次の一般会計データをサポートします:

- ファイル・ベースのデータ・ロードにより、ユーザーは区切りファイルまたは固定幅テキスト・ファイルから残高をインポートできます。
- テキスト・ファイルと Excel ファイル
- Oracle E-Business Suite 11i
- Oracle E-Business Suite 12
- Oracle Financials Cloud
- PeopleSoft Enterprise Financial Management 9
- PeopleSoft コミットメント・コントロール
- SAP ERP Financial
- SAP BW (Business Warehouse)
- JD Edwards 一般会計システム

統合にはデータ・ロードとドリル・スルーが含まれます。

さらに FDMEE は、オープン・インタフェース・アダプタをサポートします。オープン・インタフェース・アダプタを使用すると、インタフェース表を使用して、任意のソース・システムからデータをインポートできます。

各ソース・システムでサポートされるテクノロジーの詳細は、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 動作保証マトリックス*を参照してください。

ファイルベースのデータ・ロード

ファイルベースのインポートおよびライトバックは、Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・データに直接接続できないが、テキスト・ファイルでソースのデータを使用できるユーザーのためにサポートされています。固定幅ファイルでも区切りファイルでも、すべてのファイルをターゲット EPM アプリケーションに容易にインポートできます。たとえば、ソース・システムから生成された試算表レポートを取得して、インポート・フォーマット機能を使用して Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition にマップできます。勘定科目、エンティティ、データ値などのファイルにおける場所や、データ・インポート時にどの行をスキップするかをシステムに指示できます。この機能を利用すると、ビジネス・ユーザーが任意のソースのデータを容易にインポートでき、ターゲット・アプリケーションにロードする際に技術的な支援がほとんど必要ありません。

また、EPM システムからファイル・システムにデータを抽出またはライトバックする方法を決定するデータ・ロード・ルールを定義することもできます。たとえば、予算データをライトバックする必要がある場合があります。

サポートされている EPM System ターゲット・アプリケーション

サポートされる Oracle Enterprise Performance Management System ターゲット・アプリケーション(Oracle Hyperion EPM Architect および Classic)は次のとおりです:

- Oracle Hyperion Planning
- Oracle Hyperion Financial Management (Tax Provision アプリケーションを含む)
- Oracle Essbase 集約ストレージおよび Essbase ブロック・ストレージ。Essbase がスタンドアロン・モードでデプロイされた場合、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で直接実行できないため、Shared Services に登録する必要があります。また、スタンドアロン Essbase に依存する Planning アプリケーションも、FDMEE で直接機能しません。
- Oracle Hyperion Profitability and Cost Management
- Account Reconciliation Manager (ARM)

ノート:

EPM システム製品が分散環境にインストールされている場合は、ファイルをインスタンス間で処理できるように、FDMEE とターゲット・アプリケーションが同じオペレーティング・システム上に存在することをお勧めします。これは、Linux および Windows でのファイルの処理方法に関連します。Linux では行の最後に改行文字のみありますが、Windows では改行文字と復帰改行文字があります。別の方法として、イベント・スクリプトを使用して異なるファイル・フォーマットを変換できます。

FDMEE の主な利点

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でサポートされる主な利点は次のとおりです:

- ユーザー・エクスペリエンスの向上 - Oracle Enterprise Performance Management System での統合。FDMEE ユーザー・インタフェースは、Oracle Hyperion Planning および Oracle Hyperion Financial Management ユーザー・インタフェースと一貫性があります。
- パフォーマンスの向上 - ユーザー・インタフェースおよびデータ・ロード・パフォーマンスの向上
- 緊密な Oracle Hyperion Shared Services 統合 — Shared Services のすべてのネイティブ機能がサポートされています(例: ユーザー・グループ)。
- Internet Explorer および Firefox ブラウザのサポート

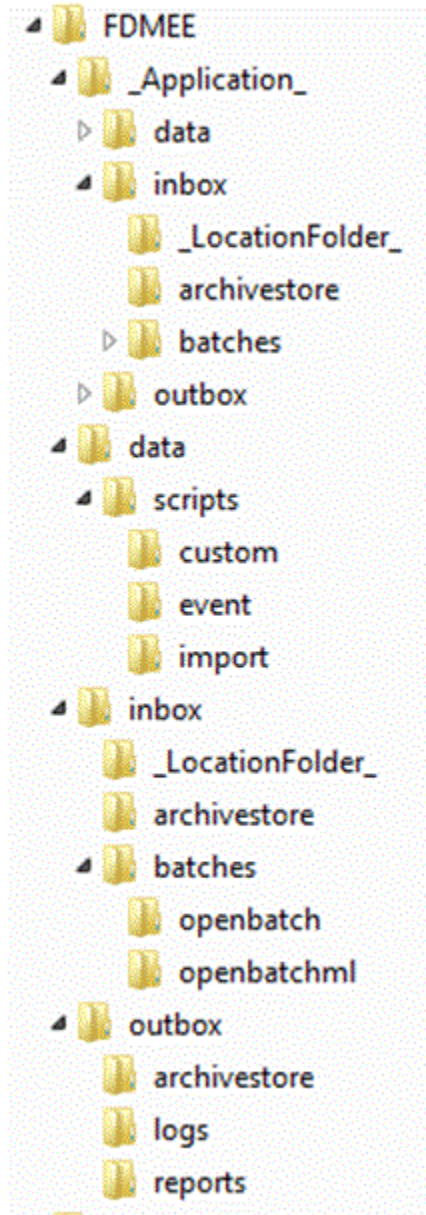
- Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Lifecycle Management のサポート - 他の EPM System 製品と同様の、ライフサイクル管理の一貫したサポート
ライフサイクル管理アプリケーションをリリース 11.1.2.3 から 11.1.2.4 に移行できます。
- 複数のプラットフォームのサポート — すべてのサポート対象プラットフォーム。
- 整合性のあるスケーリングおよびロード・バランシング - すべてのスケール・アウト構成
およびロード・バランシング・ステップは他の EPM System 製品と整合性があります。
Oracle® Enterprise Performance Management System デプロイメント・オプション・ガイ
ドも参照してください。
- FDMEE をプライマリ・ゲートウェイとして使用して、オンプレミスとクラウドベースの
アプリケーションを統合できます。この機能を使用すると、EPM ユーザーはクラウド・
デプロイメントを既存の EPM ポートフォリオに適用できます。
- データ同期 - アプリケーションのディメンショナリティに関係なく、EPM アプリケーシ
ョン間で簡単にデータを移動でき、その際に EPM ソース・アプリケーションからデー
タ・ファイルを作成する必要はありません。ソースおよびターゲット EPM アプリケーシ
ョンを指定して、データをマップします。強力なマッピング機能がすでに使用可能な場
合、データはあるアプリケーションから別のアプリケーションに簡単に変換できます。た
とえば、データを同期すると、レポート用に Financial Management から Oracle Essbase
にデータを移動できます。
- すべての EPM アプリケーション(Accounts Reconciliation Manger を除く)から
Enterprise Resource Planning (ERP)アプリケーションへのライトバックのサポート。こ
の機能を使用すると、Planning で作成された予算を Peoplesoft または Oracle E-Business
Suite ERP GL にライトバックしたり、調整仕訳を Financial Management から E-
Business Suite や Peoplesoft などの ERP システムに移行するなど、大きな利点がありま
す。他のターゲット・システムは、引き続きカスタム・アプリケーション・フレームワー
クを使用する必要があります。

FDMEE アプリケーション・フォルダのアーキテクチャ

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、アプリケーション・ルート・フォルダに作成されるフォルダのセットを使用します。アプリケーション・ルート・フォルダは、システム管理者によって FDMEE がインストールされているサーバーに作成され、FDMEE の「構成」の「システム設定」で定義されます。

基本的なファイル構造を作成するには、「システム設定」画面の「**アプリケーション・フォルダの作成**」ボタンをクリックします。また、アプリケーション・フォルダとロケーション・フォルダを作成することもできます。アプリケーション・フォルダを使用しない場合、ロケーション・フォルダは最上位レベルの inbox に作成されます。アプリケーション・フォルダを使用する場合、ロケーション・フォルダは関連するアプリケーション・フォルダ内に作成されます。

可能なフォルダ構造の例を示します。



標準の FDMEE アプリケーションでは次のフォルダ構造が使用されます:

表 1-1 FDMEE アプリケーションのフォルダ構造


フォルダ	説明
data	data フォルダには、システムによってロードされた各ファイルのコピーが含まれます。また、スクリプト・ディレクトリのルート・フォルダでもあります。このフォルダ内の各ファイルには一意の名前が割り当てられ、データ・ロード・ワークベンチで金額をクリックするか、「ドリルスルー」画面から開くことができます。

表 1-1 (続き) FMEE アプリケーションのフォルダ構造

フォルダ	説明
scripts	これは、custom、event および import フォルダの最上位フォルダです。これらのタイプのスクリプトは、これらのフォルダに格納されます。
custom	custom - Visual Basic または Jython スクリプトで記述されたカスタム・スクリプトが含まれます。
event	event - 指定したシステム・イベントに対して実行され、Visual Basic または Jython スクリプトで記述されたスクリプトが含まれます。
import	import - インポート・フォーマットに関連付けられ、インポート処理ステップ中に実行されるスクリプトが含まれます。これらのスクリプトを記述できるのは Jython のみです。
inbox	inbox は、ソース・ファイルのインポート元のデフォルト・ディレクトリであり、すべての元帳抽出ファイルの中央リポジトリとして使用します。ソース・ファイルは、アクセス可能なすべてのディレクトリから取得できるため、インポート・ファイルをこのディレクトリに配置する必要はありません。 ユーザーによって作成されたすべてのロケーションにフォルダを作成するオプションを選択すると、これらは inbox に作成されます。inbox には、batches ディレクトリおよび archivestore ディレクトリが含まれます。 将来の使用のために予約されています。
archivestore	
batches	batches は、最上位レベルのフォルダで、ファイルの格納には使用されません。
openbatches	openbatches は、ファイルがシステムによって格納される場所です。これらのファイルには名前に視点が含まれるため、ユーザー・インタフェースで POV を設定しなくてもシステムによって 1 つ以上のファイルが選択およびロードされます。これは、一度に多数のファイルをロードする必要がある場合に非常に有用です。
openbatchesml	openbatches フォルダと同様です。ただし、これらのファイルでは 1 つのファイルに複数の期間が含まれます。

表 1-1 (続き) FDMEE アプリケーションのフォルダ構造

フォルダ	説明
outbox	outbox フォルダには、FDMEE によって作成されるエクスポート・ファイル、ターゲット・アプリケーションのエラー・ログ・ファイル、ドリル領域ロード・ファイルおよびターゲットのドリル・ロード・ログが格納されます。
archivestore	将来の使用のために予約されています。
logs	ロード処理で生成された EPM-APPLICATION-NAME_PROCESS-ID.log 形式のログが格納されます。これらのログは、FDMEE の「プロセスの詳細」ページでログの表示リンクを使用して表示できます。
reports	reports フォルダには、バッチ・レポート・プロセスによって生成されたレポート出力(PDF、HTML または XLS)が格納されます。このフォルダには、オフライン・モードで実行したレポートの出力も含まれます。

 ノート:

アプリケーションのフォルダ構造を作成するには、「アプリケーション設定」画面でルート・フォルダを定義し、「**アプリケーション・フォルダの作成**」オプションを選択します。たとえば、指定されたアプリケーションに対してのみスクリプト・セットを実行する場合は、アプリケーション・フォルダを使用する必要があります。

データへのドリル

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition を使用してデータにドリルすると、値を構成する内容など、質問に対する回答が得られます。データのドリルには、ドリルアップとドリルダウン、ドリル・バックおよびドリル・スルーの 3 タイプのドリル・プロセスが使用できます。

ドリルアップとドリルダウンを使用すると、EPM のディメンションや階層に移動でき、集約されているメンバーを確認できます。たとえば、期間ディメンション・メンバー「Q4」をドリルダウンすると、「Jan」、「Feb」および「Mar」を確認できます。

ドリル・バックを使用すると、EPM アプリケーション(Oracle Hyperion Planning など)から、データが格納されて抽出されたソース・アプリケーションに移動できます。たとえば、Planning からドリル・バックを開始し、データが Oracle Financials Cloud のアプリケーションに格納されている場合、Oracle Financials Cloud に戻ります。

ドリル・スルーを使用すると、**FDMEE** 内のソース残高から、データが抽出されたソース・システムに戻ることができます。これによって、ソース値を構成する詳細(トランザクション)データを確認できます。

ドリル・スルー

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition には、EPM アプリケーションから一般会計ソースにドリル・スルーするためのフレームワークが用意されています。人事データの場合、ドリル・スルーはサポートされません。ユーザーは **FDMEE** を介してソース・システムの詳細にドリル・スルーできます。

ドリル領域を作成する機能は「ターゲット・アプリケーション」オプションで有効化されます。**FDMEE** はシナリオごとにドリル領域を作成します。任意のキューブの場合(**Planning** プラン・タイプまたは **Essbase** データベース、ドリル領域の名前はシナリオ・メンバーの **FDMEE_<name** 名です)。ドリル領域を作成する場合、**FDMEE** はディメンションがドリルに対して有効かどうかを確認します。データ・ロードで選択された有効なディメンションのメンバーは、ドリル領域フィルタに含まれます。ディメンションが有効になっていない場合、シナリオ、バージョン、年および期間のディメンションがデフォルトで有効になります。追加のディメンションを有効にでき、後続のデータ・ロードでは新規に有効化されたディメンションのメンバーが考慮されます。ドリルの作成に使用されたドリル領域に以前に含まれていたディメンションを無効化する場合、それらのディメンションのメンバーは後続のデータ・ロード時に削除されません。必要に応じて、古いメンバーを手動で削除できます。

ノート:

ソース・システムが **Oracle E-Business Suite/Peoplesoft** で、メタデータ・ルールがある場合、そのメタデータ・ルールに基づいてドリル領域が作成されます。それ以外の場合は、データ・ロード・マッピングのターゲット・メンバーに基づいて作成されます。年、期間、シナリオについては、**FDMEE** では監査情報を使用してドリル領域が作成されます。

ノート:

Oracle Smart View for Office および Oracle Hyperion Financial Reporting では、データ・ソースが **Oracle Hyperion Financial Management**、**Oracle Hyperion Planning**、**Oracle Essbase** および **Oracle Hyperion Profitability and Cost Management** の場合にのみドリル・スルーできます。

ノート:

Financial Management の仕訳および会社間トランザクションに対しては、ドリル・スルーはサポートされていません。

ドリル・スルーする際に、データが **FDMEE** でロードされている場合、ランディング・ページは **Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace** の新しいタブまたは新しいウィンドウで表示されます。ランディング・ページは、ソース・システム内のデータ

へのゲートウェイです。FDMEE ランディング・ページへのドリル・スルーを参照してください。

FDMEE ランディング・ページへのドリル・スルー

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のランディング・ページには、一般会計勘定科目と、EPM アプリケーションのセルに移入するために使用されたハイパーリンク付きの残高が表示されます。リンク付きデータ値をクリックすると、ソース・システムにドリル・スルーし、選択した一般会計勘定科目に関連する仕訳入力を表示できます。

残高までドリル・スルーして、ソース・システムからロードされたデータを表示できます。ログイン検証後に Oracle General Ledger の「残高」ページに移動すると、特定の期間について EPM アプリケーションに表示されるドリル値に使用される一般会計勘定科目がリストされた表を参照できます。

この表には、すべての一般会計勘定科目の分類がハイパーリンク付きで表示され、Oracle General Ledger の仕訳行ページに深くドリル・インできます。これにより、選択した Oracle General Ledger 勘定科目に関連する仕訳帳入力を参照できます。

PeopleSoft Enterprise Financial Management に移動すると、ログイン検証後に元帳照会ページが表示されます。これにより、仕訳照会ページに情報を表示できます。ドリル・スルー機能の詳細は、*PeopleSoft Enterprise General Ledger 9.1 PeopleBook* を参照してください。

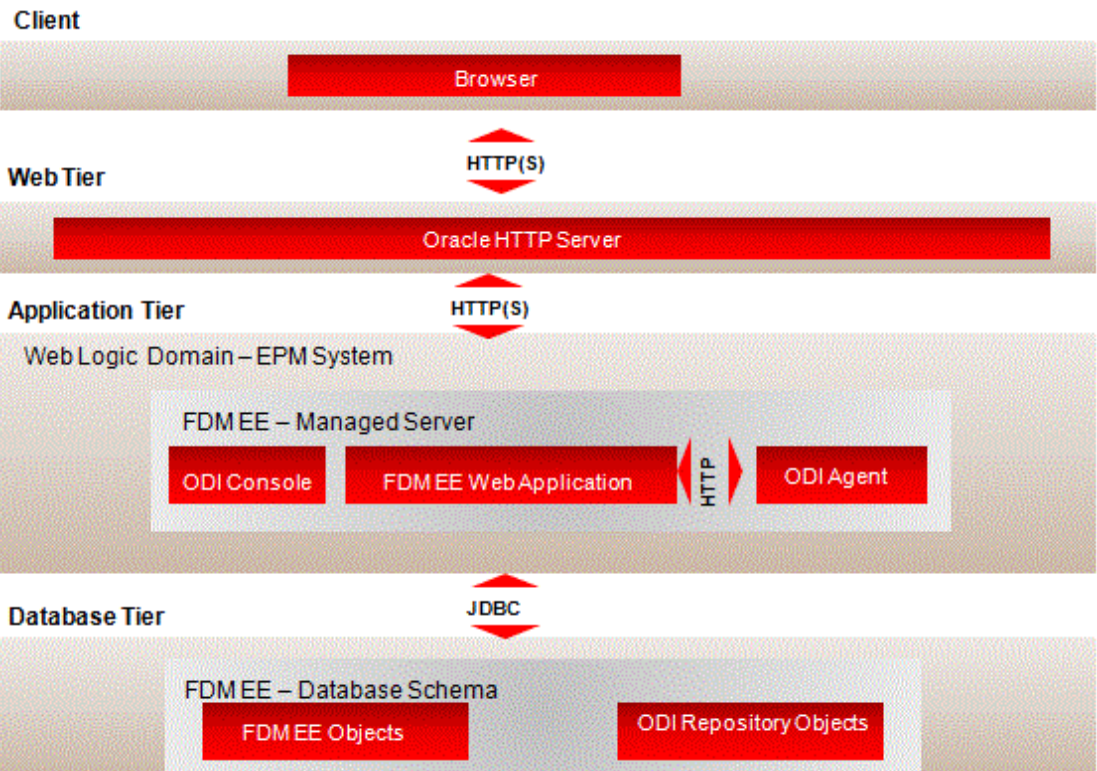
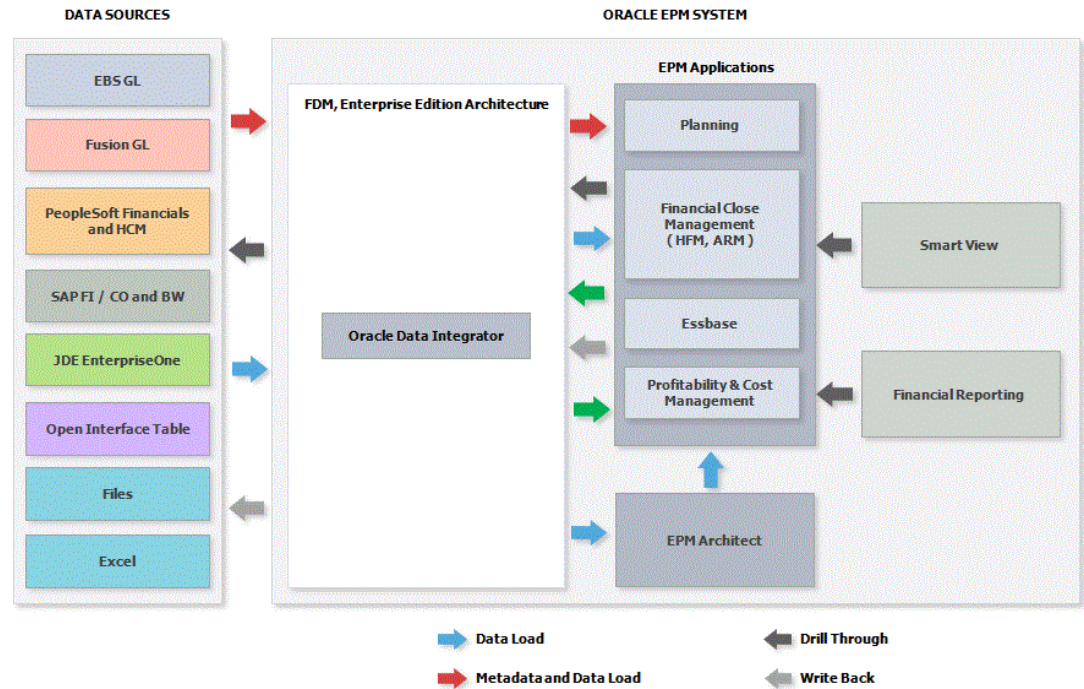
FDMEE のアーキテクチャ

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、Enterprise Resource Planning (ERP)システムを Oracle の Hyperion EPM アプリケーションと統合するための主要アプリケーションです。FDMEE は Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace を介してアクセスされ、Oracle Hyperion Shared Services を使用してユーザーが認証されます。統合のキーは、基礎となるエンジンである Oracle Data Integrator にあります。

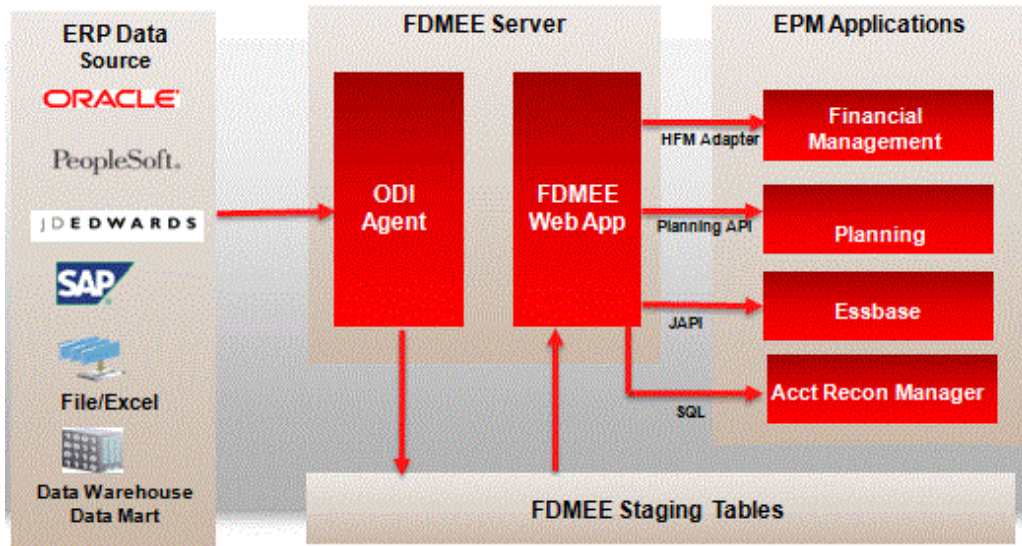
FDMEE は、Oracle Data Integrator の上位にあり、EPM アプリケーションに対するメタデータおよびデータの移動を調整します。アプリケーション・サーバーは複数のプラットフォームにデプロイでき (*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の動作保証マトリックス*を参照)、Oracle Hyperion Financial Management、Oracle Hyperion Planning、Profitability、Account Reconciliation Manager および Oracle Essbase などの EPM アプリケーションに接続します。

FDMEE によってインストールおよび使用される ODI エージェントは、FDMEE ユーザー・インタフェース、FDMEE バッチ、Windows または Lynx バッチを使用して実行される FDMEE ジョブなど、FDMEE 処理の一部として起動されるプロセス専用です。FDMEE リポジトリは、製品に含まれる FDMEE オブジェクトを排他的に使用するため、またはこれらのオブジェクトに対して顧客がカスタマイズを行うためのものです。FDMEE で使用される ODI エージェントまたはリポジトリを顧客が他の用途に使用することはできません。他の ODI の処理には別のエージェントとリポジトリを使用する必要があります。

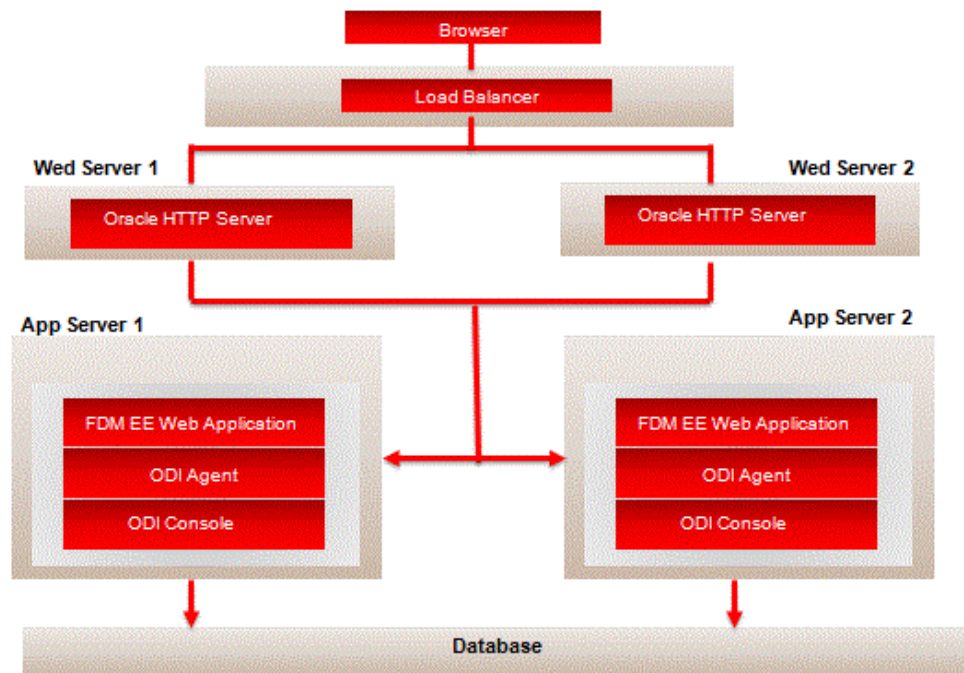
次の図に、FDMEE の技術アーキテクチャの構造を示します:



次の図は、FDMEE のデータの流れを示しています。



次の図は、FDMEE の高可用性を示しています：



FDMEE での Oracle Data Integrator の構成

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、定義済ソースからデータまたはメタデータを抽出し、抽出したアーティファクトを Performance Management Architect インタフェース表に移入するかクラシック・アプリケーションに移入するエンジンである Oracle Data Integrator に依存します。EPM System インストーラは、FDMEE がインストールされる際に ODI をインストールしま

す。インストーラは ODI マスターおよび作業リポジトリと ODI J2EE エージェントもインストール・プロセスで構成します。

また、FDMEE を使用する前に、Oracle Data Integrator で手動の構成ステップを実行する必要があります。

 **ノート:**

ファイル以外のソースからデータをロードする場合は ODI のみ構成します。ファイルベースのデータ・ロードはそのまま動作するので、追加の ODI 構成は不要です。

1. Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムに基づいてデータ・サーバーを設定します。
2. 物理スキーマを設定します。
3. ODI コンテキスト・コードを設定します。

Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムに基づくデータ・サーバーの設定

ソース・メタデータまたはソース・データ(あるいはその両方)に使用される Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムに基づいて、該当するデータ・サーバーを設定する必要があります。

Enterprise Resource Planning (ERP) ソース(Oracle E-Business Suite、PeopleSoft、SAP)からインポートする場合は、次に示す該当するデータ・サーバーを設定します。

- EBS_DATA_SERVER - E-Business Suite 一般会計の場合
- PSFT_FMS_DATA_SERVER - PeopleSoft General Ledger および Commitment Control の場合
- JDE_DATA_SERVER - JD Edwards Enterprise (JDE) General Ledger の場合
- SAP_SERVER - SAP FICO

サーバー接続情報を更新するには:

1. Oracle Data Integrator コンソールにアクセスします。
2. 「参照」 タブを選択します。
3. 「トポロジ」 を展開します。
4. 更新する稼働データ・サーバーを選択し、「編集」 をクリックします。
 たとえば、「EBS_DATA_SERVER」 または 「PSFT_FMS_DATA_SERVER」 を選択します。
5. 「データ・サーバーの編集」 の 「JDBC 詳細」 で、「JDBC ドライバ」 に JDBC ドライバを入力します。
 たとえば、oracle.jdbc.OracleDriver と入力します。
6. 「JDBC URL」 に JDBC URL アドレスを入力します。

たとえば、jdbc:oracle:thin:@<host>:<port>:<sid>と入力します

7. 「ユーザー」にユーザー名を入力します。
8. 「JDBC パスワード」にパスワードを入力します。
9. 「保存」をクリックします。

物理スキーマの設定

物理スキーマを更新するには:

1. Oracle Data Integrator コンソールにアクセスします。
2. 「参照」タブを選択します。
3. 「スキーマ」を展開します。
4. 「物理スキーマ」を展開します。
5. 更新するスキーマを選択し、「編集」をクリックします。

たとえば、「EBS_DATA_SERVER」または「PSFT_FMS_DATA_SERVER」を選択します。

6. 「スキーマ名」に、スキーマ名を大文字で入力します。
7. 「保存」をクリックします。

▲ 注意:

最初の構成の完了後、Oracle Data Integrator トポロジ・マネージャの物理スキーマに対する Enterprise Resource Planning (ERP)システム接続情報を切り替えると、重大な問題が発生することがあります。たとえば、Oracle Data Integrator トポロジ・マネージャの ERP Test Instance1 を指す 1 つの物理スキーマ(ERPTEST)の使用を開始してから、Oracle Data Integrator に新しいコンテキストを作成しないまま、この物理スキーマの接続情報を ERP Test Instance2 を指すように変更すると、重大な問題が発生することがあります。正しい手順は、それぞれ異なる ERP インスタンスを指す 2 つの物理スキーマ(ERPTEST1 および ERPTEST2)を作成することです。次に、2 つのコンテキストを作成し、該当する物理スキーマをコンテキスト内の論理スキーマに関連付けます。

ODI コンテキスト・コードの設定

デフォルトの「GLOBAL」ODI コンテキスト・コードを設定できます。ODI コンテキスト・コードは、Oracle Data Integrator に定義されているコンテキストを参照します。コンテキストはソースおよびターゲットの接続情報をグループ化します。

デフォルトの「GLOBAL」ODI コンテキスト・コードを設定するには:

1. Oracle Data Integrator コンソールにアクセスします。
2. 「参照」タブを選択します。
3. 「コンテキスト」を展開します。

4. 「グローバル」更新を選択して、「編集」をクリックします。
5. 「コンテキストの編集 Global」の「コンテキスト名」に GLOBAL と入力します。
 大文字のみで「GLOBAL」と入力します。
6. 「デフォルト・コンテキスト」を選択します。
7. 「保存」をクリックします。

JD Edwards と統合するための ODI の設定

JD Edwards と統合するために ODI を設定するには:

1. **JD Edwards EnterpriseOne データ・アクセス・ドライバ(DAD)**をダウンロードします:
 - a. [My Oracle Support](#) をクリックして、**マイ・サポート**を表示します。
 - b. 「パッチと更新版」タブを選択してから「**JD Edwards パッチ**」を選択します。
 - c. **JDEdwards** に、次のように入力します: EnterpriseOne Tools Releases。
 - d. 「リリース」で、「**すべてのリリース**」を選択します。
 - e. 「プラットフォーム」で、**複数プラットフォーム**を選択します。
 - f. 「説明」(*text*)で、***Data Access Driver***と入力します。
 ワイルドカード検索であるため、アスタリスクを含めます。
 - g. 「**ライセンス契約**」チェック・ボックスを選択します。
 - h. 「**検索**」をクリックします。
 - i. プラス記号(+)をクリックし、**Tools 9.2,*データ・アクセス・ドライバ**をダウンロード・バスケットに追加します。

ノート:

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、JD Edwards Tools 9.2.5 以上をサポートしています。JDE Tools 9.2.x.x を使用している場合、9.2.x.x DAD ドライバを使用してください。

- j. アイテムのハイパーリンクをクリックし、ツールのリリース固有アイテムをダウンロードします。
2. DAD ドライバをコピーするには:

DAD ドライバの拡張子は.par ですが、解凍はできません。

 - a. アーカイブ・ファイルを一時ディレクトリに解凍します。
 - b. JAR ファイル DADriver_EAR.jar を抽出(解凍)します。
 - c. DADriver_EAR.jar から抽出した内容を、EPM_MIDDLEWARE_HOME\odi\sdk\lib ディレクトリにコピーします。
3. JD Edwards システム管理者に次のファイルを提供するよう依頼します:
 - jdbj.ini
 - jas.ini

- jdelog.properties

これらのファイルは、JD Edwards Server Manager を使用して JD Edwards EnterpriseOne データ・アクセス・ドライバを登録すると生成されます。

4. **JDE アプリケーション・サーバー**から EPM_MIDDLEWARE_HOME\odi\sdk\lib ディレクトリに jas.ini ファイル、jdbj.ini ファイルおよび jdelog.properties ファイルをコピーします。
5. jas.ini ファイルの**セキュリティ・サーバー**が正しく設定されていることを確認します。
6. 次のようにして、jdbj.ini ファイルを確認して編集します:

- a. JD Edwards アプリケーションのデータベースが Oracle の場合は、tnsnames.ora ファイルの場所を更新します:

たとえば、jdbj.ini ファイルの
tns=EPM_MIDDLEWARE_HOME\user_projects\config\dbclient\tnsnames.ora
を変更します。

スラッシュまたは円記号(バックスラッシュ)を使用できます。

- b. {JDBj-BOOTSTRAP SESSION} スタンザとパスワード値を暗号化します。
スタンザに変更がない場合、更新する必要はありません。
- c. .INI ファイルのパスワード暗号化を変更するには、サーバー・マネージャを使用します。
- d. [JDBj-RUNTIME PROPERTIES] スタンザにある次のパラメータ値を設定します:

```
resultSetTimeout=-1
```

```
transactionTimeout=-1
```

```
usageExecutionThreshold=20000
```

```
usageResultSetOpenThreshold=120000
```

```
usageTracking=false
```

```
msSQLQueryTimeout=1800000
```

- e. tnsnames.ora ファイルを編集します。
tnsnames.ora エントリが存在する場合は、コピーして名前を変更します。

tnsnames.ora ファイルには、次のように JDE サーバーへの参照を含める必要があります。

```

jdeprod =

  (DESCRIPTION =
    (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST = example.domain.com) (PORT =
1521))

    (CONNECT_DATA =

      (SERVER = DEDICATED)

      (SERVICE_NAME = jdeprod)

    )

  )
  
```

tnsnames.ora ファイルは EPM_MIDDLEWARE_HOME\user_projects\config\dbclient\tnsnames.ora にあります。

7. jdelog.properties ファイルを編集し、ファイル内のすべての参照で必要に応じてログ・レベルを設定します。
 - a. 本番環境では、重大なエラーのみがログ・ファイルにレポートされるよう、ログ・レベルは SEVERE に設定します。
 - b. log の jdelog.properties でのファイル・パスを EPM_MIDDLEWARE_HOME\user_projects\domains\EPMSys\server\ErpIntegrator0\logs に変更します。
 たとえば、ファイルで検出されたすべてのインスタンスで FILE=EPM_MIDDLEWARE_HOME\user_projects\domains\EPMSys\server\ErpIntegrator0\logs\eldriver.log と指定します。
8. jdbj.ini ファイルに指定されているサーバーに ODI サーバーからアクセスできることを確認してください。
 これを行うには、コマンドラインからサーバーに ping を発行します。
9. 環境変数 JAVA_HOME および TEMP が正しく設定されていることを確認します。
 JAVA_HOME は環境変数であり、EPM_MIDDLEWARE_HOME\jdk160_35\bin 下の java.exe を指しています
 TEMP はユーザー変数であり、%USERPROFILE%\AppData\Local\Temp を指しています。
 環境変数を設定するには、マシンの再起動が必要な場合があります。
10. JD Edwards で Microsoft SQL Server または IBM データベースを使用している場合は、JDBC ドライバをダウンロードして DOMAIN_HOME/lib ディレクトリにコピーします。

通常、これは EPM_MIDDLEWARE_HOME\user_projects\domains\EPMSys\lib ディレクトリです。

データベース・プラットフォーム用の JDBC ドライバのサポートされるバージョンは、JD Edwards Tools のドキュメントを参照してください。

11. jdbj.ini ファイルで"environment"を検索し、環境値を書き留めます:

```
[JDBj-BOOTSTRAP SESSION]
```

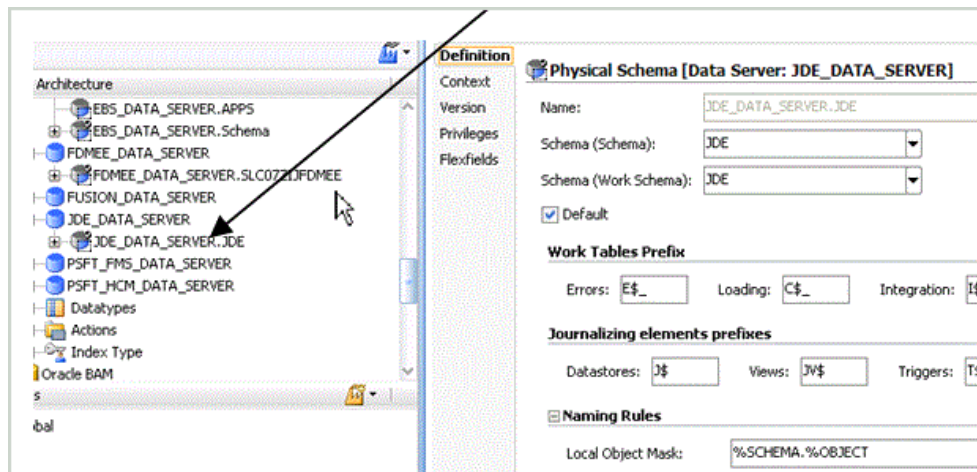
```
user=JDE
```

```
password=ACHCJKEBHCJKBKEEGLDDFKBCLBCDCBDCMJBMPGKLN0
```

```
role=*ALL
```

```
environment=JDV920
```

12. 「ODI Studio」、「トポロジ」、「テクノロジー」、「Oracle」の順に選択し、「JDE_DATA_SERVER」を選択します。



- a. 「定義」セクションで、次の値を指定します:
- i. 「ユーザー」で、**JDE_USER** と指定します。
 - ii. 「パスワード」で、**JDE_USER** と指定します。
- b. 「JDBC」セクションで、値は次のようにする必要があります:
- **JDBC Driver** com.jdedwards.jdbc.driver.JDBCdriver
 - **JDBC URL** jdbc:oracle:enterpriseone://
JDV920;RMNEQN=1;enterpriseone.role=*ALL
- c. 「物理スキーマ」で、ユーザーの **JDE** を選択します。
 物理スキーマである 2 番目の(インデントされた)JDE サーバーを選択します。

13. FMEE サービスを再起動します
14. 「Oracle Data Integrator」で、ODI エージェントを使用して JDE テスト接続を実行します。
 - a. 「ODI Studio」から、「Oracle Data Integrator」を起動します。
 - b. 「物理アーキテクチャ」、「テクノロジー」、「Oracle」の順に選択し、「JDE_Data_Server」を選択します。
 ローカル・エージェントではなく、ODI Agent を使用して JDE テスト接続をテストします。
 - c. 「接続のテスト」をクリックします。
 - d. 「接続をテストします」で、「OracleDI Agent」を選択して「テスト」をクリックします。
 - e. 「物理アーキテクチャ」、「エージェント」、「OracleDI Agent」の順に選択して右クリックし、「テスト」を選択します。
 テストが成功すると、情報ウィンドウが表示されます。
15. 次のファイルを FMEE サーバーの場所
 EPM_MIDDLEWARE_HOME\EPMSys11R1\products\FinancialDataQuality\odi\11.2.0
 .0\workrep から ODI Studio がインストールされているサーバーにコピーします:
 - MFOL_JDE_Adapter_Model.xml
 - MFOL_JDE_Adapter_Project.xml
 - PROJ_JDE_Adapter_Project.xml
 次:
 - a. 「ODI Studio」および「デザイナー」から、次の手順を実行します:
 - i. 「プロジェクト」を選択します。
 - ii. 「プロジェクトのインポート」を選択します。
 - iii. インポート・タイプ INSERT_UPDATE を選択します。
 - iv. 「ファイル・インポート・ディレクトリ」から、ファイルがコピーされたディレクトリを選択します。
 - b. 「ODI Studio」、「デザイナー」および「モデル」から、「モデル・フォルダのインポート」を選択して次の手順を実行します:
 - i. 「モデル」を選択します。
 - ii. 「モデル・フォルダのインポート」を選択します。
 - iii. インポート・タイプ INSERT_UPDATE を選択します。
 - iv. ファイル・インポート・ディレクトリの選択を選択します。
 - v. 「ファイル・インポート・ディレクトリ」から、ファイルがコピーされたディレクトリを選択します。
16. FMEE サービスを再起動します。
17. JDE_Adapter.xml ファイルを FMEE サーバーの場所
 EPM_MIDDLEWARE_HOME\EPMSys11R1\products\FinancialDataQuality\odi\11.2.0
 .0\adapters から FMEE アプリケーション受信ボックスにコピーします。
 その後、次の手順を実行します:

- a. ワークスペースにログインします。
- b. FDMEE に移動し、「設定」から「ソース・アダプタ」を選択します。
- c. 「インポート」を選択し、受信ボックスから **JDE_Adapter** をインポートします。

JDE ソース・システムからデータをロードするための統合を定義する準備ができました。

セキュリティ

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は次の役割をサポートします:

表 1-2 セキュリティ役割とタスクの説明

FDMEE の役割	役割ごとのタスク
管理者	アプリケーションを管理し、FDMEE のアクションを実行します。管理者の役割でログインすると、すべてのリンクが「タスク」ペインに表示されます。
統合の作成	ソース・システムとターゲット・システム間でデータを統合するマッピングを作成します。ユーザーは、様々な実行時オプションを使用してデータ・ルールを定義できます。
ドリル・スルー	<p>「統合の作成」役割でログインすると、「タスク」ペインに「データ・ロード」、「メンバー・マッピング」、「HR データ・ロード」、「メタデータ」、「プロセスの詳細」のリンクが表示されます。</p> <p>ソース・システムにドリル・スルーできるかどうかを制御します。</p> <p>FDMEE では、この役割は FDMEE のランディング・ページにドリルできるかどうかを制御し、ソース・システムへのドリルを制御します。</p>

ノート:


ルールを実行したり、ソース・システム登録、ターゲット・システム登録またはソース会計エンティティを表示、作成、編集または削除することはできません。

表 1-2 (続き) セキュリティ役割とタスクの説明

FDMEE の役割	役割ごとのタスク
統合の実行	実行時パラメータを使用してデータ・ルールを実行し、実行ログを表示します。
HR 統合	<p>Oracle または PeopleSoft Enterprise Financial Management からデータを抽出する必要がある FDMEE ユーザーにはこの役割を付与し、データ・ルールを実行できるようにする必要があります。</p> <p>「統合の実行」役割でログインすると、ワークフロー・タスクに「データ・ロード・ワークベンチ」、「データ・ロード」、「メンバー・マッピング」、「HR データ・ロード」、「メタデータ」、「プロセスの詳細」のリンクが表示されます。</p> <p>人事データ・ルールを実行し、ランタイム・パラメータを設定します。トランザクション・ログを表示できます。</p>
中間 2-9	中間レベルの役割 2~9 は管理者によって定義されます。

 **ノート:**

ソース・システム登録、ターゲット・システム登録またはソース会計エンティティを表示、作成、編集または削除することはできません。

 **ノート:**

FDMEE ユーザーが定義できるのは、アクセス権を持つターゲット・アプリケーションに対するマッピングのみです。

 **ノート:**

現在、Oracle Hyperion Planning および Oracle Essbase では、メンバー・レベルのセキュリティを使用していません。

統合プロセスの概要

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition を使用して、Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムのメタデータおよびデータを次の方法で統合できます:

- 一般会計データの抽出
- EPM アプリケーションからのデータのライトバック
- メタデータの統合

一般会計データの抽出

次のプロセスに従い、一般会計のメタデータおよびデータを抽出し、EPM ターゲット・アプリケーションにプッシュします:

1. ソース・システム固有の Oracle Data Integrator と Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の詳細を追加することにより、FDMEE にソース・システムを登録します。
2. ターゲット・アプリケーションを FDMEE で使用できるように登録します。
3. ソース会計エンティティを選択します。
4. インポート・フォーマットおよびロケーションを定義します。
5. メタデータ・ルールを作成します。
6. 年ディメンションおよび期間ディメンションの期間マッピングを作成します。
7. カテゴリ・マッピングを作成します。
8. メンバー・マッピングとデータ・ロードのルールを作成します。
9. メタデータ・ルールを実行してメタデータを Oracle Hyperion Financial Management、Oracle Hyperion Planning アプリケーションおよび Oracle Hyperion Profitability and Cost Management にインポートします。

Oracle Hyperion EPM Architect を使用する場合、これらのアプリケーションのデプロイまたは再デプロイも行います。

10. データ・ルールを実行し、ソース・システムからデータを抽出してターゲット・アプリケーションにプッシュします。データまたはメタデータ(あるいはその両方)が FDMEE ステージング表にステージングされ、ソース・システムから抽出されて、ターゲット・アプリケーションにロードされます。

ロードされたデータは、各ターゲット・アプリケーション(Planning、Financial Management または Oracle Essbase)によって様々な目的に使用されます。さらに、ソース・データは、アプリケーションの Web フォームまたは Oracle Smart View for Office および Oracle Hyperion Financial Reporting からのドリル・スルーに使用することもできます。

EPM アプリケーションからのデータのライトバック

次のプロセスに従い、EPM アプリケーションから使用中の一般会計ソース・システムにデータをライトバックします:

1. 一般会計データの抽出のステップ 1-5 およびステップ 7-8 を実行します。
2. 必要なセグメントまたはチャートフィールドのライトバック・マッピングを定義します。
EPM アプリケーションをソースとして選択し、Enterprise Resource Planning (ERP)をターゲットとして選択できます。これにより、仕訳インタフェース表に書き込まれます。
3. データ・ロード・ルールを実行して、サポートされるターゲット・アプリケーション (Oracle Hyperion Planning、Oracle Essbase 集約ストレージ、Essbase ブロック・ストレージおよび Oracle Hyperion Financial Management)から一般会計ソース・システムにデータをプッシュします。

 ノート:

SAP 一般会計ソース・システムにデータをライトバックできません。

 ノート:

Financial Management からのライトバックは、Oracle E-Business Suite General Ledger のみに限定されます。EPM からレガシーまたはその他のサポートされていない Enterprise Resource Planning (ERP)システムにデータをライトバックするには、カスタム・ターゲット・アプリケーションにデータを抽出することをお勧めします。データの抽出後、データ・ファイルを Enterprise Resource Planning (ERP)システムに使用できる形式に変換し、インポートする必要があります。

4. Oracle General Ledger または PeopleSoft 一般会計のプロセスを実行し、E-Business Suite または PeopleSoft Enterprise Financial Management にデータをロードします。

メタデータの統合

Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムのメタデータおよびデータを統合します。

一般会計の統合の理解

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、一般会計ソース・システムから EPM アプリケーションへのデータのロードと、ターゲットの Oracle Hyperion Planning アプリケーションから一般会計ソース・システムへのデータのライトバックをサポートしています。

- 一般会計ソース・システムからのデータのロード — FDMEE では、一般会計ソース・システムからのデータのロードをサポートしています。FDMEE では、メタデータ(Oracle E-Business Suite および PeopleSoft Enterprise Financial Management のディメンション・メンバーおよび階層のみ)と Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムのデータの両方をロードできます。
- 一般会計ソース・システムへのデータのライトバック - FDMEE では、データを Planning、Oracle Essbase 集約ストレージ、Essbase ブロック・ストレージ、Oracle

Hyperion Financial Management から抽出して、一般会計ソース・システムにロードできます。

ライトバックに対するデータ・ロードは、SAP および JD Edwards では使用できません。これらの Enterprise Resource Planning (ERP)システムおよび他のレガシー・アプリケーションへのライトバックに推奨される方法は、データをカスタム・アプリケーション(データ・ファイル)に抽出し、ERP システムに受け入れられるフォーマットに変換して仕訳としてインポートする方法です。

要件

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の使用を開始する前に、次の点に注意してください:

- EPM のディメンション要件を満たしていることを確認してください:
EPM アプリケーションは、ディメンションを任意に組み合わせて構築できます。組合せには、選択したアプリケーションの必須ディメンションが含まれている必要があります。[Enterprise Resource Planning \(ERP\)システム・プロパティから供給されるメンバー・プロパティ](#)で、メンバー・プロパティが Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムからどのように供給されるかを説明しています。
- EPM のメンバー要件を満たしていることを確認してください:
 - メンバーの重複 - メンバー名が重複する問題を回避するためのベスト・プラクティスとして、各ディメンションに一意の接頭辞または接尾辞を追加し、各メンバーが常に一意になるようにしてください。
 - 別名メンバーの重複 - アプリケーションに重複する別名メンバーがある場合、ターゲット・アプリケーション内で重複を除去することが重要です。重複を除去しないと、Oracle Hyperion EPM Architect にアプリケーションをデプロイする際に、検証エラーが発生します。

ノート:

Performance Management Architect での別名検証エラーを回避するため、ソースの説明は一意である必要があります。

ソース・システムからターゲット EPM アプリケーションにディメンションを移動する場合、命名規則を理解しておく必要があります。Performance Management Architect の場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect 管理者ガイド』を参照してください。Oracle Hyperion Planning の場合は、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。Oracle Hyperion Financial Management の場合は、『Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド』を参照してください。

必須ディメンション

EPM アプリケーションは、選択したアプリケーションに必要なものがディメンションの組合せに含まれている場合に、任意の組合せを使用して構築できます。たとえば、Oracle Hyperion Planning には、Oracle Hyperion Financial Management 以外のアプリケーションにある様々なディメンションが必要です。

必須ディメンションおよび Oracle Hyperion EPM Architect アプリケーションのプロパティの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect 管理者ガイド』を参照してください。Planning クラシック・アプリケーションの詳細は、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。Financial Management クラシック・アプリケーションの詳細は、『Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド』を参照してください。Oracle Essbase クラシック・アプリケーションの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

次のディメンションは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition との統合の際に特別な考慮が必要です。

- 勘定科目
- 通貨
- エンティティ
- シナリオ
- バージョン
- ビュー
- 年
- 期間

前述のリスト以外にも、カスタム・ディメンションで FDMEE によって設定されたプロパティをレビューします。[カスタム](#)を参照してください。

Enterprise Resource Planning (ERP)システム・プロパティから供給されるメンバー・プロパティ

必須ディメンションごとに、特定のプロパティを定義する必要があります。Oracle Hyperion Planning、Oracle Hyperion Financial Management または Oracle Essbase アプリケーション (あるいはその組合せ)に関連する必須のディメンション・プロパティ。

ノート:

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では必須プロパティの一部は設定されますが、すべてが設定されるわけではありません。

勘定科目

勘定科目ディメンションは、通常の勘定科目の階層を表します。勘定科目は、エンティティとシナリオの財務データをアプリケーションに保管します。各勘定科目には、会計の動作を定義する収益、費用などのタイプがあります。勘定科目ディメンションは、選択した勘定体系または事業部門のディメンション・マッピング定義に定義されているとおり、ソース会計エンティティから EPM 勘定科目ディメンションにマップされます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で設定されるプロパティを次に示します(設定されていないプロパティは、アプリケーションまたは Oracle Hyperion EPM Architect によってデフォルト設定されます)。

表 1-3 勘定科目ディメンションに必要なプロパティ

プロパティ	アプリケーション・タイプ	移入方法/値
連結勘定科目タイプ	連結	収益、費用、資産または負債のドメインを持つソース会計エンティティ内の勘定科目タイプから移入されます。ソース・タイプが資本である場合は、 Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションによって使用される負債に変更されます。
勘定科目タイプ	Planning	収益、費用、資産、負債または資本のドメインを持つソース会計エンティティ内の勘定科目タイプから移入されます。
差異レポート	Planning、Essbase 集約ストレージおよび Essbase ブロック・ストレージ	勘定科目タイプが費用である場合は「 費用 」に設定されます。それ以外の場合は、「 費用外 」に設定されます。(デフォルトは「費用外」です)。
「説明」、表示文字列	システム	ソース会計エンティティの説明から移入されます。
タイム・バランス	Planning、Essbase 集約ストレージ、Essbase ブロック・ストレージ	損益計算書勘定科目(収益および費用)の場合、 Planning アプリケーションでは「 フロー 」に設定されます。 Essbase 集約ストレージおよびブロック・ストレージ・アプリケーションでは「 期末 」に設定されます。 貸借対照表勘定科目(資産、負債および資本)の場合、「 残高 」に設定されます。 これらのプロパティはメタデータ・ルールの作成時に設定できます。 メタデータ・ルールの定義 を参照してください。

エンティティおよび会社間

エンティティ・ディメンションは、管理構造および法的な報告構造などの会社の組織構造を表します。エンティティは、部門、子会社、工場、地域、国、法的部門、事業部門、部署、その他の組織単位などを表すことができます。エンティティは無制限に定義できます。

会社間ディメンションは、勘定科目に存在するすべての会社間残高を表します。このディメンションは、勘定科目ディメンションと **Oracle Hyperion Financial Management** の任意のカスタム・ディメンションを組み合わせる予約ディメンションです。

Financial Management の場合、エンティティ・ディメンションのメンバーにおいて、会社間メンバーであるメンバーに **IsICP** プロパティが設定されていることが必要です。アプリケーションが移入されると、**Oracle Hyperion EPM Architect** により、**ICP** (会社間)エンティティとしてフラグ設定されているエンティティ・メンバーに基づいて適切なメンバーが **ICP** (会社間)ディメンションに移入されます。


E-Business Suite には、ソース・セグメントをエンティティ・ディメンションにマップするシナリオとして次の2つがあります: 1) 会社間セグメントがソース勘定体系に存

在します。2) 会社間セグメントがソース勘定体系に存在しません。PeopleSoft では、ビジネス・ユニットがエンティティにマップされ、関連会社が ICP にマップされます。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で設定されるプロパティを次に示します(設定されていないプロパティは、アプリケーションまたは Performance Management Architect によってデフォルト設定されます。)

表 1-4 エンティティおよび会社間の必須プロパティ

プロパティ	アプリケーション・タイプ	移入方法/値
名前	連結、システム	ソース会計エンティティ内のコード/値から移入されます。
説明	システム	ソース会計エンティティ内の名前から移入されます。
IsICP	連結	<p>ソース内に会社間セグメントが存在する場合、このフラグは、定義されているルールに従って自動的に設定されます。</p> <p>会社間セグメントが存在しない場合、このプロパティの設定方法を指定します。エンティティおよび会社間を参照してください。</p> <p>ICP トランザクション・データを正しくロードするには、ICP に参加する勘定科目に対してプロパティ ISICP ="Y"を手動で設定する必要があります。Performance Management Architect では、プロパティ・グリッドを使用してプロパティを変更できます。Financial Management クラシック・アプリケーション管理を使用する場合、メタデータを抽出し、更新してから、再インポートします。プロパティを変更した後、ICP トランザクションに関するデータを正しくロードできるようになります。</p>
通貨	連結、Essbase、Planning	<p>Financial Management ターゲット・アプリケーションの場合:</p> <p>エンティティ通貨は、エンティティ・ディメンションのマッピング・ルールに定義されているデフォルトに基づいて設定されます。(すべてのメンバーに同じ通貨が割り当てられます。)管理者として、ソースの機能通貨がデフォルトのエンティティ通貨と一致していることを確認してください。</p>

 ノート:

FDMEE 統合の一部として設定されるのはこれらのプロパティのみであり、他のプロパティはすべて新しいメンバーの作成時にデフォルト設定されます。プロパティが元々 FDMEE によって設定された場合、後でそのプロパティを変更すると、プロパティは上書きされます。

シナリオ

シナリオ・ディメンションは、予算、実績、予測などの一連のデータを表します。たとえば、実績シナリオは、過去と現在の企業経営を表す一般会計のデータを含むことができます。予算シナリオは、対象とする企業経営を表すデータを含むことができます。予測シナリオは一般に、将来の期間の予測に対応するデータを含みます。リーガル・シナリオは、リーガル GAAP のフォーマットとルールに従って計算されたデータを含むことができます。

バージョン

バージョン・ディメンションは EPM アプリケーションに固有で、通常、ソース会計エンティティにソースはありません。このディメンションは必須であるため、メンバー・マッピングに必要なデフォルト値を「類似」マッピング・タイプを使用して指定する必要があります。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でデータ・ルールを定義する場合は、抽出したデータに含める必要な"バージョン"を選択します。バージョン・ディメンションはソース・システムから抽出されないため、特定のプロパティを定義する必要はありません。

ビュー

ビュー・ディメンションは、カレンダー・インテリジェンスの様々なモードを表します。たとえば、期別、年次累計および四半期累計などの頻度があります。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、四半期レベルよりも下のレベルのデータのみを抽出します。このビューは、データ・ルール定義の一部として選択します。データが抽出されると、ビュー選択が各行のディメンションの値として含まれます。[データを抽出するためのデータ・ロードのルールの定義](#)を参照してください。通常、ビュー・ディメンションはソース・システムから抽出されないため、特定のプロパティを定義する必要はありません。ただし、データ抽出プロセスの前に、手動でビュー・ディメンションのすべてのメンバーを作成する必要があります。

年および期間

ソース・システム・カレンダーと年ディメンションおよび期間ディメンション間のマッピングは、[期間マッピングの定義](#)で説明されている期間マッピング機能を使用して管理されます。期間マッピングを実行する前に、必要な年メンバーおよび期間メンバーを作成します。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で、データ抽出プロセスおよび「期間マッピング」ページに含めるカレンダー期間を選択し、データに割り当てる適切なターゲット年ディメンションおよびターゲット期間ディメンションを定義します。年ディメンションおよび期間ディメンションはソース・システムから抽出されないため、特定のプロパティを定義する必要はありません。

ノート:

Oracle Hyperion Planning アプリケーションの場合、期間ディメンションの各分岐には同じ数の子が必要です。たとえば、Q4 には、10月、11月、12月の子と、Oracle Hyperion EPM Architect の調整期間が含まれます。

別名

Oracle Hyperion Planning と Oracle Essbase では、言語をサポートするために別名ディメンションまたは別名表が必要です。次の特別な考慮事項に留意してください:

- 別名ディメンションには、「デフォルト」という名前のメンバーが含まれる必要があります。
- ディメンション名が Oracle Hyperion EPM Architect Planning アプリケーションの別名と異なる場合、ドリル・スルーのランディング・ページはデータを返しません。
- ディメンション内に別名表メンバーを作成する場合、E-Business Suite または PeopleSoft に表示される名前と同じ名前を使用してこれらを定義します。これは、NLS_LANGUAGE 列の値です。

カスタム

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で設定されるプロパティを次に示します(設定されていないプロパティは、アプリケーションまたは Oracle Hyperion EPM Architect によってデフォルト設定されます。)

表 1-5 カスタム・ディメンションに必要なプロパティ

プロパティ	アプリケーション・タイプ	移入方法/値
名前	システム	E-Business Suite では、この値はセグメント名から移入されます。 PeopleSoft Enterprise Financial Management では、この値はチャートフィールド値から移入されます。
説明	システム	E-Business Suite では、この値はセグメント値から移入されます。 PeopleSoft Enterprise Financial Management では、この値はチャートフィールド値から移入されます。

ディメンションの処理方法

Oracle Hyperion EPM Architect アプリケーションでは、ディメンションの抽出プロセスにより、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で作成されたマッピング・ルールの詳細に基づいてインタフェース表にディメンション・メンバーが移入されます。クラシック Oracle Hyperion Planning および Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションでは、ディメンション抽出プロセスによって、FDMEで作成されたマッピング・ルールの詳細に基づきディメンション・メンバーがアプリケーションに直接移入されます。

抽出プロセスの一部として、Enterprise Resource Planning (ERP)システム・プロパティから供給されるメンバー・プロパティで説明されているように、定義された特定のプロパティを使用して、ディメンション・メンバーがターゲットの Performance Management Architect ディメンションに直接ロードされます。ディメンション・メンバーのロードに加えて、適切な言語をサポートするために関連する別名エントリもロードされます。

EPMA の共有ディメンションは、ロードのために共有ライブラリから直接選択されることはありません。FDME は、メタデータ・ルールに含めるターゲット・アプリケーションのディ

メンションを示し、ターゲット・アプリケーションを更新するときに共有ライブラリを自動的に更新します。共有ライブラリのディメンションを直接ロードすることはできません。Enterprise Resource Planning (ERP) ソースからロードできるようにターゲット・アプリケーションに含める必要があります。

FDMEE のディメンション抽出プロセスは次のとおりです:

1. 一般会計セグメントまたはチャートフィールドの値セットをソース・システムから抽出します。
 - クラシック Financial Management または Planning にマップされたソースの勘定体系セグメントまたはチャートフィールドに関連する一般会計セグメントの値セット・メンバーまたはチャートフィールド・メンバーのみが抽出されます。
 - メンバーは、ターゲット・インスタンスのステージング表にロードされます。ステージング表へのロード前に、FDMEE により、対応する EPM アプリケーション・ディメンションに対して定義されている接頭辞がセグメント値に割り当てられます。
2. 単一のセグメントまたはチャートフィールドにマップされたディメンションを処理します。

クラシック・アプリケーションの場合、ディメンションはターゲット・アプリケーションに直接ロードされます。ディメンションのインタフェース表は単一の一般会計セグメントまたはチャートフィールドにマップします。これは、ステップ 1 でロードされたステージング表からのデータのフィルタ処理(ディメンションにマップされているセグメント値セットに基づく)と、対応するディメンション・メンバーのインタフェース表およびディメンション・メンバーのプロパティ配列表(別名用)のロード処理から構成されます。

ほとんどの場合、次元は、E-Business Suite ソース・システムの単一セグメントまたは PeopleSoft ソース・システムの単一チャートフィールドとしてソースの勘定体系からターゲットの次元にマップされ、ソース次元内の開始ノードを新しい次元の基準として選択します。

3. 複数のセグメントまたはチャートフィールドにマップされたディメンションを処理します。

Performance Management Architect の場合、複数の E-Business Suite の一般会計勘定体系セグメントまたは PeopleSoft のチャートフィールドからマップされたディメンションのためにメンバーのインタフェース表が移入されます。個々のセグメント値を連結して、ディメンション・メンバーの値を作成する必要があります。

ディメンション抽出プロセスは、必要なメンバーのエントリ、プロパティ、別名エントリを、それらがソース・システムに存在する場合は作成し、存在しない場合はデフォルトをそれらのプロパティに適用します。ユーザーはソース・システム値が使用できなかった場合、または異なる値が必要な場合に、メンバーのプロパティを更新する必要があります。

場合によっては、ターゲット・ディメンションのメンバーを 1 つ以上のソース・セグメントを連結して作成できます。ディメンションが連結セグメントとしてマップされると、ソース階層のユーザー定義走査順序に基づいて新しいディメンションが連結されたメンバー・ターゲット階層の中に作成されます。

言語の処理方法

ソース・システムの登録の一部として、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、ベース言語に加えて使用可能なソース・システム

言語のリストを取得します。ベース言語とは通常、Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムがインストールされる際に選択された言語です。ベース言語ではない、追加で利用できる言語は、「使用可能な言語」と呼ばれます。

ターゲット・アプリケーションで定義された言語にマップされたソース・システムからの言語は、FDMEE ブラウザの選択で選択可能な言語には依存しません。ブラウザで使用可能な言語は、Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムおよびターゲット EPM アプリケーションで使用可能な言語と異なる可能性があります。FDMEE がサポートする言語の詳細は、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の動作保証マトリックス*を参照してください。

ターゲット・アプリケーションを FDMEE で使用できるように登録する場合、ターゲット・アプリケーションの登録ページの「デフォルト言語」列が次のように使用されます:

- 「デフォルト言語」ドロップダウン・リストに表示される言語は、FDMEE でサポートされる言語です。これらの言語は背後で Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システム言語にマップされます。
- Oracle Essbase および Oracle Hyperion Planning アプリケーションの別名ディメンションには、必須の「デフォルト」メンバーがあります。ターゲット・アプリケーションの登録時に選択した FDMEE の言語が、「デフォルト」メンバーに自動的にマップされます。FDMEE の言語はメンバーの説明のソース言語にマップされるため、ソース・システム内のベース言語または使用可能なソース言語を「デフォルト」別名メンバーにマップします。処理中、メンバーの説明の FDMEE ソース言語に別名メンバーが正確に一致する場合は、その他すべての言語が残りの別名メンバーにマップされます。

 **ノート:**

言語の処理は、Essbase アプリケーションおよび Planning アプリケーションにとって同じです。

 **ノート:**

Oracle Hyperion Financial Management の言語は、ターゲット・アプリケーションの登録ページで選択したデフォルト言語に基づいて処理されます。

[ターゲット・アプリケーションの登録](#)を参照してください。

通貨の処理方法

データ・ルールを定義する際に、Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムから為替レートを抽出する方法を指定できます。ターゲット・アプリケーションの複数通貨オプションが有効になっている場合は、為替レートの処理方法を指定できます。

すべての為替レートが抽出され、AIF_HS_EXCHANGE_RATES 表に挿入されます。この表には、各通貨の ISO 通貨コードを使用してソース・システムからデータが移入されます。ISO 数値コードは、このプロセスでは使用されません。

為替レートは、AIF_HS_EXCHANGE_RATES 表内の ISO 通貨コードと、複数通貨の Planning または Financial Management アプリケーションで定義された通貨との照合に基づいて

Oracle Hyperion Planning または Oracle Hyperion Financial Management にプッシュされます。(ISO 通貨コードを使用して Planning または Financial Management アプリケーションの通貨を設定することは重要です)。このプロセスの一部として再計算されるものはないためです。

アプリケーションのデフォルト通貨で入力されるデータは、ロケールにロードされません。

 **ノート:**

為替レートに対して交差の確認は実行されません。また、為替レートはドリルスルーできません。

メタデータ・ルールの定義

メタデータ・ルールは、一度作成すれば、その後は必要に応じて再実行できます。

一般会計ソース・システムの場合:

- **E-Business Suite** ソース・システムの場合、勘定体系は、様々な値セットを持った複数の一般会計セグメントで構成され、これらのセグメントがディメンションにマッピングされることで、ディメンションのメンバーおよび階層が取得されます。
- **PeopleSoft Enterprise Financial Management** の場合も同じように、チャートフィールドがディメンションにマッピングされることで、ディメンションのメンバーおよび階層が取得されます。

 **ノート:**

メタデータ・ルールは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の人事ソース・システムとの統合では使用されません。

メタデータ・ルールを定義する前に:

- **Oracle Hyperion Financial Management** ターゲット・アプリケーションでは特殊文字はサポートされていないため、ソース・システムのデータに特殊文字が含まれないことを確認します。
- ソース・システムおよびターゲット・アプリケーションを、FDMEE で使用できるように登録します。[Enterprise Resource Planning \(ERP\) ソース・システムの登録](#) および [ターゲット・アプリケーションの登録](#) を参照してください。
- 登録されたソース・システムからソース会計エンティティを選択します。[ソース会計エンティティの選択](#) を参照してください。
- インポート・フォーマットを定義します。[インポート・フォーマットの操作](#) を参照してください。
- ロケーションを定義します。[ロケーションの定義](#) を参照してください。

 **ノート:**

Oracle Hyperion EPM Architect は共有ディメンションとローカル・ディメンションをサポートします。FDMEE もアプリケーションの共有ディメンションおよびローカル・ディメンションをサポートします。

メタデータ・ルールを定義するプロセスの概要は次のとおりです:

1. メタデータ・ルールを作成します。
2. ディメンションを選択します。
3. マッピングの詳細を定義し、会社間セグメントの処理方法を決定します。
4. ディメンション属性を定義します。[ディメンション属性の定義](#)を参照してください。
5. **オプション:** 抽出するセグメントの階層またはチャートフィールドのツリーを定義します。
6. メタデータ・ルールを保存して実行します。
7. **オプション:** 抽出のステータスを確認します。[プロセス詳細の表示](#)を参照してください。

メタデータ・ルールを作成するには:

1. 「ワークフロー」タブの「メタデータ」で、「メタデータ・ルール」を選択します。

 **ノート:**

各ターゲット・アプリケーションの同じ元帳またはビジネス・ユニットに対して、複数のメタデータ・ルールを作成することはできません。

2. 「POV」バーからメタデータ・ルールに使用する場所を選択します。
3. 「追加」をクリックします。
ディメンション・マッピングのサマリー・グリッドの上部に空白行が表示されます。
4. 「マッピング」詳細領域の「ディメンション」から、ディメンションを選択します。
インポート・フォーマットに基づいてディメンションが一覧表示されます。
ディメンションを選択すると、「ディメンションの分類」フィールドが事前に入力されます。
5. 選択したディメンションごとにマッピングの詳細を定義します。
6. ディメンションごとにステップ 4 から 5 を繰り返します。
7. 「保存」をクリックします。

メタデータ・ルール詳細の定義

単一セグメントまたは単一チャートフィールドのマッピングでは、ソースとターゲット・ディメンション・メンバーとの間の単純な 1 対 1 のマッピングを定義します。単一セグメントまたは単一チャートフィールドのマッピングを作成する場合は、オプションで次の内容を定義できます:

- メンバーの接頭辞または接尾辞のタイプと値
- ソース・システムから抽出するセグメント階層
- 孤立メンバーの処理
- 勘定科目の統計的な処理

マッピングの詳細を定義するには:

1. **オプション: 「接頭辞/接尾辞のタイプ」** で、「**接頭辞**」または「**接尾辞**」を選択します。
2. **「接頭辞/接尾辞の値」** で、メンバーの接頭辞または接尾辞を入力します。

メンバー接頭辞は、ソース・メンバー・コードの前に挿入されます。オプションではありますが、対象のメンバーがターゲット・アプリケーションに存在しない場合、対応するディメンションに対して定義されている接頭辞をセグメント値に付けることは重要です。

メンバー接尾辞は、ソース・メンバー・コードの後に挿入されます。

ノート:

次のステップを実行して親から始まる階層領域を定義する場合、Oracle Hyperion Planning、Oracle Essbase および Oracle Hyperion Financial Management ではメンバーは同じルート下にある親にロール・アップできない点に注意してください。抽出の際には、すべてのノードが 1 つの親を持つ階層を指定します。E-Business Suite では、セグメント値を 2 つの親へロールアップできるインスタンスがサポートされています。

3. **「名前を別名に連結」** を選択して、名前と別名を連結します。
4. **「EPMA オプション」** で、EPMA メタデータ・ロード・オプションを選択します。

メタデータのロード・オプション:

- プライマリとしてマージ - 「プライマリとしてマージ」ではすべてのセクションが処理され、ソースには存在するが、共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションには存在しない新規ディメンション、メンバー、関係、プロパティおよび関連付けが追加されます。ディメンション、メンバー、関係、プロパティまたは関連付けが除去されることはありません。ソースで指定されているディメンション、関係、メンバーまたはプロパティが共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションに存在する場合、ソースで指定された値で上書きされます。(メンバーは移動されませんが、上書きされます。)ソースに含まれていないプロパティは、共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションでは変更されません。

 ノート:

あるメンバーが1つのディメンションで複数のインスタンスを持つ場合、「IsPrimary」列で、どのインスタンスがプライマリで、どのインスタンスが共有かを指定します。IsPrimary パラメータはオプションですが、使用を強くお勧めします。定義しないままにすると、デフォルトの「TRUE」に設定され、メンバーがプライマリであると想定されます。IsPrimary パラメータを定義しないか、プライマリとして定義されたメンバーが重複する場合、インポート結果ファイルに警告が表示されます。

- 移動としてマージ - このモードでは、IsPrimary で TRUE に設定したメンバーのみが処理され、他のものは無視されます。処理中、メンバーのプライマリのロケーションを指定する最初の行が実行され、別のプライマリのロケーションを指定している後続の行はすべて無視されて、警告メッセージが表示されます。
- 置換 - すべての新規要素が追加され、すべてのプロパティ更新が行われます。ソースで指定されていないメンバーやメンバー関係は、共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションから除去されます。置換モードを使用すると、親の下のメンバーの順序も変更できます。ソースに含まれていないプロパティは、共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションでは変更されません。

このモードでは、インポート・ファイルで定義されていないかぎり (IsPrimary で FALSE に設定)、共有メンバーは作成されません。このモードにより、新規の親の下にあるプライマリ・メンバーを検出し、移動として処理できます。

 ノート:


「置換」オプションには、「順序変更タイプ」および「既存メンバーの順序変更」オプションが表示されません。

5. E-Business Suite ソース・システムの場合:

- a. Planning および Essbase アプリケーションの場合 — 勘定科目ディメンションのマッピングの詳細。「**貸借対照表勘定科目のタイム・バランス・プロパティ**」と「**損益計算書勘定科目のタイム・バランス・プロパティ**」を選択します。

タイム・バランス・プロパティにはサマリー期間の値の計算方法を指定します。「フロー」に設定すると、期間合計として要約期間のすべての値の集約になります。「タイム・バランス」プロパティが「バランス」に設定されている場合、期間合計のサマリー期間の終了値とみなされます。

- b. 「**階層領域**」タブから、「**追加**」をクリックして階層領域を定義します。

- c.  をクリックするか、または最上位の親を入力します。


- d. 「**基本階層**」を選択します。

基本階層は階層の基本となる部分で、同じ親を共有する階層の部分を示します。基本階層のすべての非共有メンバーには、「データの保管」プロパティが設定されています。ただし、共有メンバーには「データの保管」を設定できません。

- e. 階層の接頭辞または接尾辞を選択し、次に接頭辞/接尾辞の値を入力します。

親の接頭辞は親のみに適用されます。代替ロールアップ階層を使用可能にするには、接頭辞/接尾辞の値を親メンバーにのみ適用します。親メンバーは共有できない、一意の名前を持ちます。また、親メンバーはデータを保管しません。

6. PeopleSoft ソース・システムの場合:

- a. 「階層領域」タブから、「追加」をクリックして階層領域ツリーを定義します。
 - b. 「ツリー」に、階層構造のツリー名を入力します。
ツリーは、選択したデータベース・フィールドの集計規則のグループを表す階層構造を示します。たとえば、ツリーには、レポート目的で製造口ケーションの集計やロール・アップの方法を指定できます。また、どの部署をテリトリに、どのテリトリを地域に、どの地域を国に集計するかを指定することにより、ツリーで組織内のレポート関係を表すこともできます。同様に、ツリーでカタログ内のアイテムを分類することもできます。
 - c. 「発効日」で、ツリーの発効日を指定します。
ツリーで発効日を使用すると、新しいオブジェクト、部署、レポート関係または組織構造を事前に指定し、それらが自動的に発効するように設定できます。また、現在のデータまたは履歴データに関するレポートの作成時に、過去、現在または将来の発効日をツリーで使用することもできます。
 - d.  をクリックするか、または最上位の親を入力します。
 - e. 「基本階層」を選択します。
基本階層では、親を共有する他の階層部分は共有されます。これらを「データの保管」に設定することはできません。ただし、非共有メンバーには「データの保管」プロパティが設定されています。基本階層のすべての非共有メンバーには、「データの保管」プロパティが設定されています。ただし、共有メンバーには「データの保管」を設定できません。
 - f. 階層の接頭辞または接尾辞を選択し、次に接頭辞/接尾辞の値を入力します。
親の接頭辞は親のみに適用されます。代替ロールアップ階層を使用可能にするには、接頭辞/接尾辞の値を親メンバーにのみ適用します。親メンバーは共有できない、一意の名前を持ちます。また、親メンバーはデータを保管しません。
 - g. 「ソース孤立メンバーの処理方法の選択」で、孤立メンバーの処理方法を選択します。
 - 無視 - 孤立メンバーはソースから抽出されません。
 - ルート・メンバーとして作成 - ルート・メンバーが作成され、孤立メンバーは作成されません。すべてのメンバーが階層の最上位レベルに作成されます。
 - 子として作成 - 孤立メンバーは、「子として作成」フィールドの右側の入力フィールドで指定したメンバーの子として配置されます。
7. Planning のみ: 勘定ディメンションおよびエンティティ・ディメンションの「プラン・タイプ」を選択します。
 8. Financial Management のみ: エンティティ・ディメンションをマップする場合は、ソース・システムに応じて会社間セグメントの次の詳細を入力します:
 - 会社間セグメント値
 - 会社間のデフォルトについて、「はい」または「いいえ」を選択します。

会社間セグメントが定義されているシナリオでは、会社間セグメントに基づいて会社間トランザクションが識別されます。通常、会社間における売掛金および買掛金の会計処理に必要な標準勘定科目セットは1つです。

会社間セグメントが定義されていないシナリオでは、標準勘定科目セグメントに基づいて明示的に会社間トランザクションを指定します。通常、取引パートナー会社間の売掛金勘定および買掛金勘定のすべての組合せがあります。会社間における売掛金および買掛金の状態は、これらの標準勘定科目を使用した場合にのみ特定されます。

9. 「保存」をクリックします。

ディメンション属性の定義

「属性」タブには、ディメンションの属性リストを含む表があります。属性ごとにデフォルト値を指定できます。次に示すように、属性値はアプリケーション・タイプとディメンションによって異なることに注意してください。

ノート:

デフォルト値は検証されていません。有効な値の詳細は、アプリケーションのドキュメントを参照してください。

表 1-6 アプリケーション・タイプ別ディメンション属性

アプリケーション・タイプ	ディメンション	属性
Planning	勘定科目	貸借対照表のタイム・バランス 損益計算書のタイム・バランス データ・ストレージの親(子ノードとは異なったものにする親ノードのデフォルトを設定します。場合によっては、子および親のデータ・ストレージ属性は同じでないことで、親のこの属性に適切なデフォルトを指定できます。) データ・ストレージ 費用レポート
HFM	勘定科目	勘定科目タイプ 連結勘定科目タイプ カスタム 1 最上位メンバー カスタム 2 最上位メンバー カスタム 3 最上位メンバー カスタム 4 最上位メンバー
HFM	エンティティ	IsICP 通貨
Essbase	勘定科目	

PeopleSoft ソース・システムのメタデータ属性を指定するには:

1. 「属性」タブで、「追加」をクリックします。

2. 「貸借対照表のタイム・バランス」、「損益計算書のタイム・バランス」 および 「支出レポート」 で、サマリー期間の値の計算方法を指定します。

「フロー」に設定すると、期間合計としてサマリー期間のすべての値の集約になります。「タイム・バランス」プロパティが「バランス」に設定されている場合、期間合計のサマリー期間の終了値とみなされます。

システム・デフォルトを使用するには、「システム・デフォルトの使用」をクリックします。

カスタム・デフォルト値を指定するには:

1. 「属性」タブを選択します。
2. 属性のデフォルト値を入力します。
3. カスタム・デフォルト値を使用するには、「システム・デフォルトの使用」フィールドをクリアします。
4. 「保存」をクリックします。

メタデータ・ルールの管理


次のタスクを実行できます:

- メタデータ・ルールの編集 - [メタデータ・ルールの編集](#)を参照してください。
- メタデータ・ルールの実行 - [メタデータ・ルールの実行](#)を参照してください。
- メタデータ・ルール・プロセスの詳細の確認 - [メタデータ・ルールの削除](#)を参照してください。
- メタデータ・ルールのディメンション・マッピングまたは階層の削除 - [メタデータ・ルール・ステータスの確認](#)を参照してください。

メタデータ・ルールの編集

実行中でないメタデータ・ルールは変更できます。

メタデータ・ルールを編集するには:


1. 「ワークフロー」タブの「メタデータ」で、「ロケーション」を選択します。
2. 「ロケーション名」を入力するか、 をクリックしてロケーションを選択します。
3. 必要に応じて、ディメンション・マッピングまたはマッピングの詳細を追加または変更します。
4. 「保存」をクリックします。

メタデータ・ルールの実行

メタデータ・ルールを実行することにより、更新をロードし、データをターゲット・アプリケーションにプッシュできます。送信されたルールはすべて Oracle Data Integrator によって処理されます。

メタデータ・ルールを送信するには:

1. 「ワークフロー」タブの「メタデータ」で、「メタデータ・ルール」を選択します。

2. 「**メタデータ**」で、「**ロケーション名**」を入力するか、 をクリックしてロケーションを選択します。
3. メタデータ・ルールを選択します。
4. 「**実行**」をクリックし、「**OK**」をクリックします。

メタデータ・ルール・ステータスの確認

メタデータ・ルールを実行した後、「プロセスの詳細」ページでステータスを確認できます。「メタデータ」ページで「プロセスの詳細」ページへリンクする「ステータス」アイコンをクリックし、プロセスの詳細を表示します。[プロセス詳細の表示](#)を参照してください。


ヒント:

ルールのステータスは Oracle Data Integrator で確認することもできます。

メタデータ・ルールの削除

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で作成したメタデータ・ルールのマッピングの詳細のディメンション・マッピングまたは階層を削除できます。

メタデータ・ルールのディメンションまたは階層を削除するには:

1. 「**ワークフロー**」タブの「**メタデータ**」で、「**メタデータ・ルール**」を選択します。
2. 「**メタデータ**」で、「**ロケーション名**」を入力するか、 をクリックしてロケーションを選択します。
3. 「ディメンション・マッピング」または「階層領域」領域の行を選択します。
4. 「**削除**」をクリックします。

ソース・システム階層の EPM ディメンションへのロード

ターゲット・システムのメタデータおよび階層構造と同様、ソース・システムのメタデータは時間経過とともに変化します。

ビジネス機能および組織における更新により頻繁に変化するため、階層構造の管理は継続的なプロセスです。ソース・システムとターゲット・システムの間で階層を管理する場合、ユーザーは一般的に、新しい階層を作成するか、古い階層を新しい階層に置き換えるか、または階層を更新します。

システム間の階層の管理は、階層のサイズ、システム更新間の待ち時間、および運用システムに対する分析システムの必要性などから困難になります。一般会計の統合プロセスの一部として階層を管理する場合は、次の点に注意してください:

- ソース・システムとターゲット・アプリケーションの階層管理間の操作は、ターゲット内でのマージにより階層を作成または更新することのみです。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ではターゲット・アプリケーション内の階層またはメンバーは削除されません。追加のメンバーまたは階層が指定されない場合、それらは FDMEE により無視されます。
- ソース・システムからターゲット・システムに階層を統合する場合、ターゲットのルート・ノードとしての役割を果たすノードをソースから選択します。

- 統合によって、階層がターゲット・システムにプッシュされ、処理中に発生したエラーは報告されます。
「プロセスの詳細」ページを使用して、FDMEE でログに記録されたエラーを表示できます。また、「ログ」リンクを選択し、Oracle Data Integrator のログ・ファイルを確認することもできます。Oracle Hyperion EPM Architect アプリケーションの場合、ジョブ・コンソール内でもプロファイル作成エラーを表示できます。詳細は、[プロセス詳細の表示](#)または該当の製品ドキュメントを参照してください。
- ディメンション・マッピングでの階層選択はオプションですが、少なくとも、階層内にはないメンバーの処理方法は指定する必要があります。たとえば、選択したノードの子を孤立として作成したり、孤立を継承しないように選択することができます。(このオプションは、Performance Management Architect にのみ適用されます)。


FDMEE のナビゲート

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace では、「ナビゲート」メニューから Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition にアクセスできます。(「ナビゲート」、「管理」、「データの同期」の順に選択)

ツールバー

標準ツールバーは、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の共通機能に使用されます。詳細については『*Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド*』を参照してください。

ヘルプ

選択した Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition オプションがコンテキスト依存ヘルプに対応している場合は、 をクリックします。

FDMEE 固有のその他のヘルプ・トピックをすべて表示するには、[Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理](#)を参照してください。

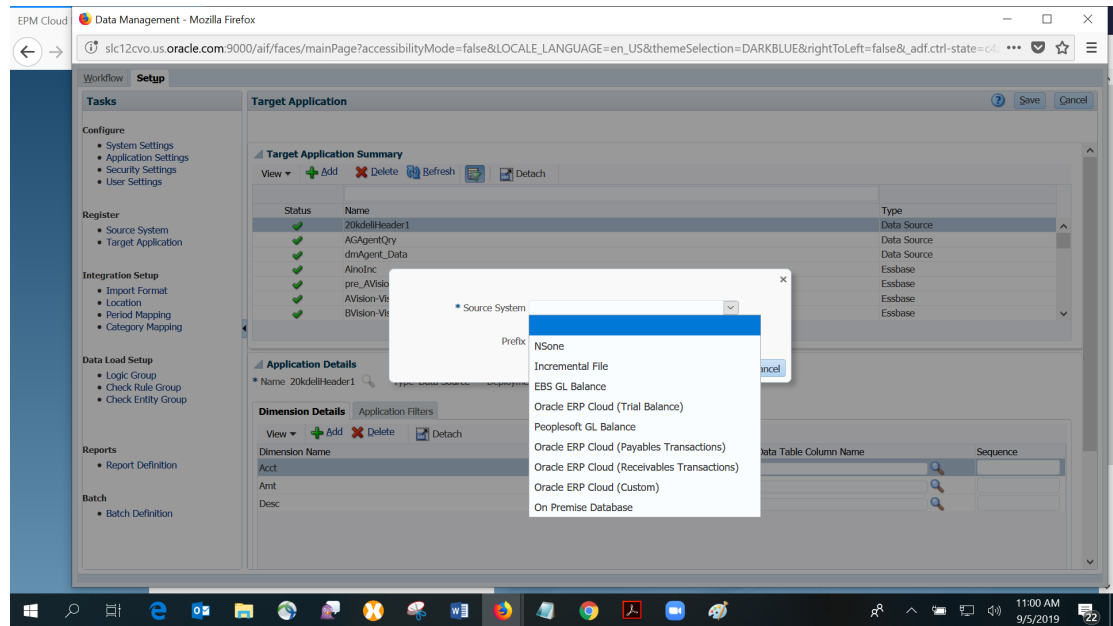
その他のすべてのヘルプについては、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の最新のドキュメント、ヘルプ・トピックおよびビデオにアクセスするためのハブである Oracle Cloud Help Center を参照してください。

Cloud Help Center の URL:

[Oracle Cloud Help Center](#).

「タスク」ペインのオプション

「タスク」ペインは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ワークスペースの左にあるサイズ変更可能なウィンドウです。これを使用して、FDMEE のオプションや機能に簡単にアクセスできます。「タスク」ペインは、「ワークフロー」タブおよび「設定」タブで構成されます。



ワークフロー・タスク

「ワークフロー」タブから、Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムのメタデータとデータを Enterprise Performance Management (EPM)ターゲット・アプリケーションに統合できます。

ファイルおよびその他のソース・システムからデータをロードすることもできます。

- データのロード
 - データ・ロード・ワークベンチ
 - データ・ロード・ルール
 - データ・ロード・マッピング
- メタデータ—メタデータ・ルール
- HR データ・ロード -人事データ・ロードのルール
- その他
 - バッチ実行
 - レポート実行
 - スクリプトの実行
- モニター—プロセスの詳細

設定タスク

「設定」タブで、ソース・システムとターゲット・システムの管理、レポート定義とバッチ定義の指定、アプリケーション設定の管理を行うことができます。


使用可能なタスク:

- 構成

- システム設定
- アプリケーション設定
- セキュリティ設定
- ユーザー設定
- 登録
 - ソース・システム
 - ターゲット・アプリケーション
 - ソース会計エンティティ
 - ソース・アダプタ
- 統合設定
 - インポート・フォーマット
 - ロケーション
 - 期間マッピング
 - カテゴリ・マッピング
 - Excel インタフェース
- データ・ロードの設定
 - ロジック・グループ
 - 確認ルール・グループ
 - 確認エンティティ・グループ
- スクリプト
 - スクリプト・エディタ
 - スクリプトの登録
- レポート
 - 問合せ定義
 - レポート定義
- バッチ—バッチ定義

グリッドでのデータの操作

ほとんどの画面では、1つ以上のグリッドにデータが表示されます。グリッド・データを操作するには、1つ以上のアクションを実行します:

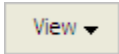
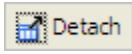
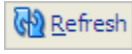
- レコードを追加するには、「**追加**」をクリックします。
- 削除するには、レコードを選択して「**削除**」をクリックします。
- グリッドのすべてのレコードを削除するには、「**すべて削除**」をクリックします。
- レコードを編集するには、セル内をクリックして入力を開始します。該当する場合は、編集する値を選択して、をクリックすることもできます。

- 列内のアイテムを検索するには、値の列の上にある空白のフィールドに検索値を入力して **[Enter]** を押します。値が一致した場合は、最初の項目として表示されます。
- 行に対するすべての変更を取り消すには、行を選択して **「取消し」** をクリックします。
- 行に対するすべての変更を保存するには、**「保存」** を選択します。

FDMEE ユーザー・インタフェース要素

次の要素は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の各ページで共通です。

表 1-7 FDMEE の各ページに共通の要素

ボタン	説明
	<p>ビューをカスタマイズします。次のオプションがあります:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 列 - 「すべて表示」を選択してすべての列を表示したり、表示する個々の列を選択することもできます。 • デタッチ - 列グリッドをデタッチするために使用します。グリッドをデタッチすると、列は独自のウィンドウに表示されます。デフォルト・ビューに戻るには、「表示」 を選択し、次に アタッチ を選択するか、「閉じる」 をクリックします。 • 列の順序変更 - 表示される列の順序を変更するために使用します。列を選択し、右側にあるボタンを使用して列の順序を変更します。
	<p>列グリッドをデタッチするために使用します。グリッドをデタッチすると、列は独自のウィンドウに表示されます。デフォルト・ビューに戻るには、「表示」 を選択し、次に アタッチ を選択するか、「閉じる」 をクリックします。</p>
	<p>データをリフレッシュします。たとえば、ルールを送信する場合、リフレッシュすることにより、ステータスが 「実行中」 から 「完了」 に変更されるかどうかを確認します。</p>

ノート:

「リフレッシュ」は、FDMEE 設定画面には表示されません。

表 1-7 (続き) FDMEE の各ページに共通の要素

ボタン	説明
	<p>フィルタ行を切り替えるために使用します。フィルタ行を使用して、特定の列に表示される行をフィルタするためのテキストを入力できます。</p> <p>特定の列についてフィルタに使用できるテキストがあれば入力し、[Enter]をクリックします。たとえば、「プロセスの詳細」ページで特定のロケーションに対するプロセスのみを表示するには、「ロケーション」テキスト・ボックスにロケーションの名前を入力します。</p> <p>例による問合せボタンは、次の FDMEE 設定画面に表示されます: 「ターゲット・アプリケーション」、「ソース会計エンティティ」、「インポート・フォーマット」、「ロケーション」、「データ・ロード・ワークベンチ」、「プロセスの詳細」。</p> <p>フィルタをクリアするには、テキスト・ボックス内のフィルタ条件テキストを削除し、[Enter]を押します。</p> <p>テキストはすべて大文字と小文字が区別されません。</p>
	<p>ターゲット・アプリケーション、メンバー、一般会計職責などの、ページ上のアーティファクトを選択するのに使用します。「検索」ボタンをクリックすると、「検索して選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。使用可能な詳細検索オプションで追加の検索条件を入力できる場合もあります。「詳細検索」オプションを参照してください。</p>

「詳細検索」オプション

「検索」ボタンは多くの Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ページで共通です。「検索」ボタンを選択すると、「詳細検索」ボタンが使用可能な場合、追加の検索条件を入力できます。「詳細検索」オプションに表示されるフィールドは、選択しているアーティファクトにより異なります。次の演算子がサポートされています:

- 次で始まる
- 次で終わる
- 次と等しい
- 次と等しくない
- 次より小さい
- 次より大きい
- 次以下
- 次以上
- 範囲
- 次の間以外

- 次を含む
- 次を含まない
- 空白である
- 空白でない

POV バーの使用

データ・ロード・ワークベンチでは、POV バーに現在の値が表示されます:

- ロケーション
- 期間
- カテゴリ
- データ・ルール

Location **KS7DIM_EB5TB** Period **Jan-08** Category **Actual** Rule **KS7DIM_EB5TB** Source **File** Target **KS7DIM**

デフォルトでは、カテゴリ POV に割り当てられているデータ・ルールのみが表示されます。

ソース・システムおよびターゲット・アプリケーションが、コンテキスト情報として表示されます。

ロケーション POV の選択

別のロケーション POV を選択するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。
2. POV バーで、「ロケーション」フィールドをダブルクリックします。

3. 「視点の選択」の「ロケーション」に新しいロケーションの文字列の全部または一部を入力し、「OK」をクリックします。
4. オプション: 別のロケーションで検索するには、「ロケーション」ドロップダウンから「詳細」をクリックし、「検索して選択: ロケーション」画面でそのロケーションに移動して「OK」をクリックします。
5. オプション: 「視点の選択」で、「デフォルトとして設定」を選択して新しいロケーションをデフォルトのロケーションとして使用します。
 POV の選択がデフォルトとして設定されているとき、ユーザー・プロファイルはデフォルトの選択とともに更新されます。
6. 「OK」をクリックします。

期間 POV の設定

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 管理者は、すべてのユーザーのアクティブな会計期間を制御します。この機能により、ユーザーがデータを正しくない期間に間違っロードすることを防止できます。FDMEE にログインすると、アプリケーションがグローバル期間値を特定して、POV を現在の値に自動的に設定します。

別の期間 POV を選択するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。
2. POV バーで、「ロケーション」フィールドをダブルクリックします。
3. 「視点の選択」の「期間」に新しい期間の文字列の全部または一部を入力し、「OK」をクリックします。

4. **オプション:** 別の期間で検索するには、「期間」ドロップダウンから「詳細」をクリックし、「検索して選択: 期間」画面でその期間に移動して「OK」をクリックします。
5. **オプション:** 「視点の選択」で、「デフォルトとして設定」を選択して新しい期間をデフォルトの期間として使用します。
 新規 POV の選択がデフォルトとして設定されているとき、ユーザー・プロファイルはデフォルトの選択とともに更新されます。
6. 「OK」をクリックします。

カテゴリ POV の設定

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 管理者は、すべてのユーザーに対してアクティブなデータ・カテゴリを制御します。この機能により、ユーザーがデータを正しくないカテゴリに間違っロードすることを防止できます。

ノート:


デフォルトで、「データ・ロード・ルール」画面が表示されるとき、*current* POV カテゴリに対するデータ・ロード・ルールのみがすべて表示されます。POV カテゴリに関係なくすべてのカテゴリのデータ・ロード・ルールをすべて表示するには、「データ・ルールのサマリー」から「表示」、「すべてのカテゴリ」の順に選択します。

別のカテゴリ POV を選択するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。
2. POV バーで、「ロケーション」フィールドをダブルクリックします。
3. 「視点の選択」の「カテゴリ」で、新しいカテゴリを選択し、「OK」をクリックします。
4. **オプション:** 「ルール」で、カテゴリ POV に割り当てられたルールを選択します。
5. 「デフォルトとして設定」を選択して、新しいカテゴリをデフォルトのカテゴリとして使用します。
 POV がデフォルトとして設定されているとき、ユーザー・プロファイルはデフォルトの選択とともに更新されます。
6. 「OK」をクリックします。

POV のロックおよびロック解除

POV をロックすると、ユーザーはデータを変更できなくなります。期間またはカテゴリのロケーションをロックしている場合、ユーザーは検証レポートをインポート、検証、エクスポートまたは再実行できません。

ロケーションがロックされている場合、ロック記号()が POV バーに表示されます。

ロックされた POV が「ロック解除」された場合、ロックされている POV のデータのみがロードされます。

「POV ロック」のオプションは次のとおりです:

- POV のロック
- POV のロック解除
- すべてのロケーションのロック
(すべてのロケーションのロックおよびすべてのロケーションのロック 解除機能は、すべてのロケーション画面の「POV のロック」で管理者のみが使用できます。[すべての\(POV\)ロケーションのロックおよびロック解除](#)を参照してください。
- すべてのロケーションのロック 解除

POV のロックは次の場所で参照されます。

- データ・ロード・ワークベンチ
- データ・ロード・ルール
- バッチ実行

POV をロックするには:

1. 「ワークフロー」 タブの「データ・ロード」 で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。
POV バーは、「データ・ロード・ルール」 画面と「バッチ実行」 画面にも表示されます。
2. POV バーで、「ロケーション」 をダブルクリックします。
3. 「視点の選択」 で、「POV のロック」 をクリックします。
(「POV のロック」 および「POV のロック解除」 オプションは、すべてのロケーション画面の「POV のロック」 で管理者が「ロケーションごとのロックの解除を許可」 オプションを使用してのみ使用できます。[すべての\(POV\)ロケーションのロックおよびロック解除](#)を参照してください。
メッセージ「選択した POV をロックしますか。ロックされた POV にはデータをロードできません。」が表示されます。
4. 「POV のロックの確認」 で、「OK」 をクリックします。
情報メッセージは POV がロックされていることを示します。
5. オプション: ロックされた POV のロックを解除するには:
 - a. POV バーで、「ロケーション」 フィールドをダブルクリックします。
 - b. 「視点の選択」 で、「POV のロック解除」 をクリックします。
 - c. 「OK」 をクリックします。
情報メッセージは POV が正常にロック解除されたことを示します。

管理タスク

システム、アプリケーションおよびユーザー・プロファイルを設定します。ソース・システムおよびターゲット・アプリケーションの登録にも使用します。

次も参照:

- [プロファイル・リストの事前定義](#)
- [ソース・システムの設定](#)

- ターゲット・アプリケーションの登録
- ソース会計エンティティの選択
- 一般会計職責の割当て
- ソース会計エンティティ・グループの操作
- Excel データのロード

プロファイル・リストの事前定義

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、事前定義済のプロファイル・リストを使用します。様々なビジネス・ニーズに対応するため、これらのプロファイルの値を定義できます。プロファイルは次のレベルで設定できます:

- システム(システム全体に適用)
- アプリケーション(特定のターゲット・アプリケーションに適用)
- ユーザー(特定のユーザーに適用)
- セキュリティ(役割、レポート、バッチ、カスタム・スクリプト、ロケーション)

システムレベルのプロファイルの設定

システム設定は、システム全体に適用されるシステム・レベル・プロファイルを更新またはクリアする場合に使用します。

システム設定を定義するには:


1. 「設定」タブの「構成」で、「システム設定」を選択します。
2. 「システム設定」の「プロファイル・タイプ」で、「システム設定」画面に表示する特定のプロファイルを選択します。

使用可能なプロファイル・タイプ:

- すべて
- ファイル - 「ファイル」プロファイル・タイプを選択すると、ファイル特有のシステム設定に加えて、「アプリケーション・フォルダの作成」ボタンが表示されます。この機能により、アプリケーション・ルート・ディレクトリ設定で指定したパスにフォルダ構造が作成されます。
- ODI - ODI のパスワードおよびリポジトリ接続情報を設定する場合に使用します。この情報が追加または変更されていると、「ODI 接続の確認」をクリックして ODI エージェントへの接続が正常に作成されたかどうかを表示できます。
- その他 - EPMA データ・ソース、ユーザーの言語、ユーザー・インターフェースのテーマ、デフォルトの確認レポートに関連付けるプロファイルを設定する場合に使用します。
- POV

選択するプロファイル・タイプによって、画面で追加または変更できる設定が決まります。

3. オプションを選択して、新しい値を「値」に追加します。

「選択」フィールドに  が表示されている場合、その値で検索できます。

 ノート:

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition をインストールおよび構成している場合は、Oracle Data Integrator は自動的にインストールおよび構成されます。Oracle Data Integrator のデータベースは FDMEE と同じデータベース内にあり、Oracle Data Integrator エージェントは FDMEE 管理対象サーバーに配置されます。インストールのデフォルトを指定または変更する前に、Oracle Data Integrator について完全に理解し、Oracle Data Integrator のドキュメント・セットを確認してください。

4. 「保存」をクリックします。

表 1-8 システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
すべて	すべてのプロファイル・タイプを含む	

表 1-8 (続き) システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
ファイル	アプリケーション・ルート・フォルダ	<p>このフィールドに指定したアプリケーション・ルート・ディレクトリをサーバー上で設定してください。</p> <p>FDMEE を使用する際の最初のステップとして、「アプリケーション・フォルダの作成」オプションを実行する必要があります。</p> <p>アプリケーション・ルート・フォルダは、FDMEE アプリケーションのルート・ディレクトリを指定します。このフォルダは FDMEE サーバーに存在し、すべての FDMEE アクティビティのルート・フォルダとして機能します。このパラメータに基づいて、FDMEE は、ログ・ファイルや生成されたファイルとレポートをこのルート・ディレクトリ内の適切なフォルダに保存します。この設定ステップとは別にパラメータをサーバー上で設定する必要があります。</p> <p>「ファイル」プロファイル・タイプを選択した場合、「システム設定」画面に「アプリケーション・フォルダの作成」ボタンが表示されます。この機能により、このフィールドに指定したパスにフォルダ構造が作成されます。フォルダ構造は次のとおりです(それぞれにサブフォルダが含まれます):</p> <pre>data inbox outbox</pre> <p>inbox 内で、ロケーションが、「ロケーション」オプションに追加されるときに作成されます。FDMEE アプリケーション・フォルダのアーキテクチャも参照してください。</p> <p>アプリケーション・レベルのフォルダを指定し、「アプリケーション・フォルダの作成」オプションを選択すると、スクリプト・フォルダを含むアプリケーション用のフォルダのセットが作成されます。アプリケーションに固有のスクリプトをこのフォルダ内に作成します。これはアプリケーション間で異なるイベント・スクリプトの場合、特に重要です。アプリケーション・レベルのフォルダを設定しない場合は、アプリケーションごとに異なるイベント・スクリプトを使用できません。</p> <p>Universal Naming Convention (UNC)パスを指定する場合、フォルダの共有アクセス権で、読取り/書込み操作のための DCOM ユーザーへのア</p>

表 1-8 (続き) システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
		<p>クセスを許可する必要があります。 Oracle Hyperion Financial Management および FDMEE が別個のサーバー上にある場合は、アプリケーション・ルート・フォルダに Universal Naming Convention (UNC)パスを使用します。必要な UNC 定義の指定については、サーバー管理者にお問い合わせください。</p> <p>UNC パスを入力しない場合は、絶対パスを入力する必要があります。たとえば、C:\Win-Ovu31e2bfiefdmeと指定します</p>



"8.3"表記は、別名としては受け入れられていますが、**Microsoft** のオペレーティング・システムには存在しません。また、スペースを含むフォルダ名の正しい **UNC** パスの代替として使用できないことにも注意してください。

表 1-8 (続き) システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
ファイル	ロケーション・フォルダの作成	ロケーションの作成時に、inbox にロケーション・フォルダを作成するようにシステムに指示します。指定できる値は「はい」または「いいえ」です。このオプションは一度設定したら変更しないでください。この設定はオプションですが推奨します。
ファイル	アーカイブ・モード	<p>アーカイブされたファイルをアーカイブ・ロケーションにコピーするか移動するかを指定します。「コピー」、「移動」または「なし」を設定します。「コピー」を選択すると、ファイルはinboxに残されず、「移動」を選択すると、ファイルはアーカイブ・フォルダにコピーされ、inboxから削除されます。</p> <p>data という名前のフォルダがアーカイブ・フォルダです。</p> <p>ファイルがアーカイブ・ロケーションに移動されると、ファイル名が次のように変更されます:</p> <pre><Process ID><Year><Month><Day>.<Original Extension></pre> <p>たとえば、ソース・ファイル名が BigFile.csv であり、このファイルが期間 Mar-07 に期間キー 03/01/2007 でロードされ、プロセス ID が 983 であった場合、結果のファイル名は 98320070301.csv となります。</p>
ファイル	ファイル・アップロードのワイルドカードを除外	<p>アップロードできないファイル拡張子を指定します。</p> <p>*.*と入力すると、すべてのファイルをアップロードできなくなります。</p>
ファイル	バッチ・サイズ	<p>ファイルからメモリーに一度に読み込まれる行数を指定します。このパラメータは主にパフォーマンスのために使用されます。データがロードされるとき、この設定により、キャッシュに格納されるレコード数が決まります。たとえば、1000 を指定した場合、1,000 件のレコードがキャッシュに格納されます。同様に、5000 を指定した場合、5,000 件のレコードがキャッシュに格納されてコミットされます。この設定をサーバー・メモリーによって決定し、必要に応じて調整します。</p>

表 1-8 (続き) システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
ファイル	ファイルの文字セット	<p>テキストを作成、保管および表示するためにビット組合せを文字にマッピングする方法を指定します。</p> <p>各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。</p> <p> をクリックして使用可能な文字セットを表示します。</p> <p>エンコーディングとは、テキストの作成、保管、表示のためにビット組合せを文字にマッピングすることです。</p> <p>ソース・ファイルがサポートされていない形式のいずれでもない場合、エンコーディングを UNICODE に変換します。</p>
ファイル	暗号化パスワード・フォルダ	<p>暗号化されたパスワードを格納するファイルを配置するディレクトリを指定します。</p> <p>この暗号化パスワード・フォルダは、「構成ファイルの更新」ボタンとともに使用します。バッチ・スクリプトの操作を参照してください。</p>
ファイル	ファイルへのワークベンチ・エクスポート形式	<p>データをエクスポートするとき、必要なファイル形式を選択します。</p> <p>使用可能なファイル形式は次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> • CSV (*.csv) • Excel (*.xls) <p>エクスポートのデフォルトのファイル形式は CSV です。</p>
ODI	ODI ユーザー名	<p>Oracle Data Integrator マスター・リポジトリへのアクセスに使用される Oracle Data Integrator のユーザー名を指定します。たとえば、Supervisor と入力します。</p> <p>この設定は ODI の構成時に自動的に定義されますが、必要に応じてカスタマイズできます。</p>
ODI	ODI パスワード	<p>Oracle Data Integrator マスター・リポジトリへのアクセスに使用される Oracle Data Integrator のデータベース・スキーマを指定します。たとえば、Master と入力します。</p> <p>この設定は ODI の構成時に自動的に定義されますが、必要に応じてカスタマイズできます。</p>

表 1-8 (続き) システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
ODI	ODI 実行リポジトリ	すべてのシナリオが格納されるリポジトリを指定します。たとえば、 ERPI_REF と入力します。 この設定は ODI の構成時に自動的に定義されますが、必要に応じてカスタマイズできます。
ODI	ODI 作業リポジトリ	ランタイム・オブジェクトを含むリポジトリを指定します(実行)(例: シナリオ)。作業リポジトリは 1 つのマスター・リポジトリとのみリンクできます。 たとえば、 FDMEE_WORK_REF と入力します
ODI	ODI マスター・リポジトリ・ドライバ	ODI マスター・リポジトリのドライバを指定します。 この設定は ODI の構成時に自動的に定義されますが、必要に応じてカスタマイズできます。
ODI	ODI マスター・リポジトリ URL	Oracle Data Integrator のマスター・リポジトリがインストールされているサーバーの URL を指定します。 この設定は ODI の構成時に自動的に定義されますが、必要に応じてカスタマイズできます。 たとえば、 jdbc:oracle:thin:@serverdatabase.oracle.com:1521:orcl と入力します。
ODI	ODI マスター・リポジトリ・ユーザー	Oracle Data Integrator マスター・リポジトリのユーザー名を指定します。 この設定は ODI の構成時に自動的に定義されますが、必要に応じてカスタマイズできます。
ODI	ODI マスター・リポジトリのパスワード	Oracle Data Integrator マスター・リポジトリのパスワードを指定します。 この設定は ODI の構成時に自動的に定義されますが、必要に応じてカスタマイズできます。
その他	EPMA データ・ソース名	EPMA インタフェース・データ・ソースの「EPMA データ・ソース名」を指定します。
その他	ユーザーの言語	FDMEE のユーザーが使用するバージョンのシステムのデフォルト言語を選択します FDMEE は、ユーザー言語を使用して、列タイトルやセグメント名などの言語データを問合せします。

表 1-8 (続き) システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
その他	ユーザー・インタフェースのテーマ	デフォルトのテーマには、ユーザー・インタフェースに表示されるすべての色、スタイル、および一般に使用されるアイコンが含まれています。 FDMEE は、デフォルト値として BLAF+を使用します。
その他	デフォルトの確認レポート	デフォルトの確認レポートとして使用する確認レポートのタイプを指定します。次にシード済確認レポートを示しますが、新しいレポートを作成してここに指定できます: <ul style="list-style-type: none"> 確認レポート - 現在のロケーションに対する検証ルールの結果 (成功または失敗ステータス) を表示します。 確認レポートの期間範囲(カテゴリ、開始期間、終了期間) - カテゴリと選択した期間について検証ルールの結果を表示します。 確認レポート検証エンティティ・シーケンス別 - 現在のロケーションについて検証ルールの結果を表示します(成功または失敗ステータス)。検証エンティティ・グループに定義されたシーケンスでソートされています。 確認レポート(警告) - 現在のロケーションについて検証ルールの結果を表示します。警告の条件が一致する場合に、検証が検証ルールに記録されて表示されます。このレポートには、検証に合格したルールは表示されません。
その他	デフォルト交差レポート	システム・レベルでデフォルトの交差確認レポートとして使用する交差確認レポートのタイプを指定します。交差レポートは、データ・ロード・エラーを特定します。これは、「データ・ロード・ワークベンチ」のデータ検証ステップの一部として生成されます。使用可能なレポートのフォーマットは、動的列フォーマットと固定列フォーマットの 2 つです。固定列には、最大 4 つのカスタム・ディメンションが表示されます。
その他	バッチ・タイムアウト(分)	バッチ・ジョブを同期モード(即時処理)で実行する場合、ジョブの最大実行時間を指定します。同期モードでは、FDMEE はジョブの完了を待ってから制御を戻します。

表 1-8 (続き) システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
その他	イベント・スクリプト実行の有効化	「はい」を選択すると、データのロード前(BefLoad)や検証後(AftValidate)にアプリケーション・イベントの実行が有効になります。「いいえ」を選択すると、アプリケーション・イベントの実行が無効になります。
その他	SQL Server Database Provider	SQL Server Database Provider の名前を指定します。 指定できる SQL Server Database Provider: <ul style="list-style-type: none"> • SQLOLEDB • SQLNCLI10 (SQL Server 2008) • SQLNCLI11 (SQL Server 2012)
その他	ログ・レベル	ログに表示される詳細のレベルを指定します。ログ・レベル 1 を指定すると、詳細が最も少なく表示されず。ログ・レベル 5 を指定すると、詳細が最も多く表示されます。 ログは、「ログ」リンクを選択すると「プロセスの詳細」に表示されます。
その他	レポート精度の確認	最も重要な数字が一番左の 0(ゼロ)以外の数字で、最も重要でない数字が一番右の既知の数字の場合の丸め処理に使用する 10 進数の合計数を指定します。
その他	データ・エクスポート・オプション 「すべてのデータを上書き」を表示します	「ルールの実行」画面にある「エクスポート・モード」ドロップダウンに「すべてのデータを上書き」オプションを表示する場合は、「はい」を指定します。 すべてのデータの上書きを選択した場合は、次のメッセージが表示されます: 警告: 「すべてのデータを上書き」オプションでは、アプリケーション全体のデータがクリアされます。これは現在の視点に制限されません。このアクションを実行しますか?
その他	マップ監査を使用可能にする	マップ・モニター・レポート(ロケーションのマップ・モニターおよびユーザーのマップ・モニター)の監査レポートを作成するには、「はい」に設定します。この設定のデフォルト値は「いいえ」です。

表 1-8 (続き) システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
その他	アクセスしてソース・ドキュメントを開く	<p>FDMEE のランディング・ページにドリルダウンすると、この設定によって「ソース・ドキュメントを開く」リンク(データのロードに使用されたファイル全体を開きます)へのアクセス権が決定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 管理者 - 「アクセスしてソース・ドキュメントを開く」リンクは管理者ユーザーに限定されます。 • すべてのユーザー - 「アクセスしてソース・ドキュメントを開く」リンクはすべてのユーザーが使用できます。「すべてのユーザー」がデフォルト設定です。
その他	マップ・エクスポート・デリミタ	<p>メンバー・マッピングのエクスポート時に、列の区切り記号の値を設定します。</p> <p>使用可能な区切り記号は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • !(感嘆符) • ,(カンマ) • ;(セミコロン) • (縦線)
その他	マップ・エクスポートの Excel ファイル形式	<p>メンバー・マッピングをエクスポートする際に使用する Excel ファイル形式を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Excel 97-2003 ワークブック (*.xls) • Excel マクロ対応ワークブック (*.xlsm)

表 1-8 (続き) システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
その他	マップ LCM 形式	<p>データ・ロード・マッピングのエクスポート・オプションを移行(ライフサイクル管理)に設定します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none">個別データ・ロード・マッピングーマップは、ロケーションごとに個別にエクスポートされ、ロケーションごとに個別にインポートされます。各ロケーションにマップが多数ある場合、ロケーションごとに小さい単位でマップをロードできるため、この方法を使用します。この方法は、特定のロケーションのマップを選択的に移行する場合にも役立ちます。この方法では、既存のマップは削除され、スナップショットの新しいマップで置き換えられます。すべてのロケーションの結合データ・ロード・マッピングーマップは、すべてのロケーションについて、1つのアーティファクトでエクスポートされます。この方法では、スナップショットのマップがターゲット・システムの既存のマップにマージされます。これがデフォルトの設定です。

表 1-8 (続き) システム設定のプロファイル・オプション

プロファイル・タイプ	プロファイル・オプション	プロファイルの説明
その他	ドリル・タイプ UI	<p>Oracle Enterprise Performance Management Cloud でドリルダウンする際に使用するドリルスルー・ユーザー・インタフェースのタイプを選択します。</p> <p>使用可能なドリル・タイプ:</p> <ul style="list-style-type: none"> クラシックドリル・スルーのランディングには、標準のソースとターゲットのタブがあり、これらのタブには、一般会計勘定科目と、アプリケーションのセルに移入するために使用されたハイパーリンク付きの残高が表示されます。クラシック・ユーザー・インタフェースでは、ユーザーはドリルしたデータのカスタム・ビューを作成できません。 簡易ユーザー・インタフェースランディング・ページの標準のソースとターゲットのタブに加えて、ユーザーはドリルしたデータのカスタム・ビューを追加できます。 <p>ドリルスルーでのカスタム・ビューの使用の詳細は、ドリルスルー・ランディング・ページへのカスタム・ビューの追加を参照してください</p>
POV	デフォルト POV 期間	<p>デフォルト POV 期間を指定します。</p> <p>これらのプリファレンスが優先されるのは、「アプリケーション設定」または「ユーザー設定」に同等の設定がない場合です。</p>
POV	デフォルト POV カテゴリ	<p>デフォルト POV カテゴリを指定します。</p> <p>これらのプリファレンスが優先されるのは、「アプリケーション設定」または「ユーザー設定」に同等の設定がない場合です。</p>
POV	グローバル POV モード	<p>これが「はい」に設定されている場合、他の POV (アプリケーション・レベルとユーザー・レベルの POV)は無視されます。</p>

アプリケーションレベルのプロファイルの設定

アプリケーション設定は、ターゲット・アプリケーションに適用されるアプリケーションレベル・プロファイルを更新またはクリアする場合に使用します。

アプリケーション・レベルのプロファイルを設定するには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「アプリケーション設定」を選択します。

2. 「アプリケーション設定」の「ターゲット・アプリケーション」ドロップダウンで、アプリケーション・プロファイルを適用するターゲット・アプリケーションを選択します。
3. アプリケーション・レベルのプロファイル設定を選択します。
4. **オプション:** 設定をクリアするには、値を選択し、「削除」をクリックします。
値は表示されなくなりますが、削除されるのは保存した後です。
5. 「保存」をクリックします。

表 1-9 アプリケーション・レベルのプロファイル・オプション

オプション	説明
アプリケーション・ルート・フォルダ	<p>アプリケーション・ルート・フォルダは、EPM アプリケーションにデータをロードするために使用されるすべてのファイルを格納するルート・フォルダです。EPM アプリケーションごとに別のルート・フォルダを使用できます。</p> <p>このパラメータに基づいて、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、ログ・ファイルや生成されたファイルとレポートをこのルート・ディレクトリ内の適切なフォルダに保存します。この設定ステップとは別にパラメータをサーバー上で設定する必要があります。</p> <p>「アプリケーション・フォルダの作成」 ボタンを選択すると、このフィールドに指定したパスでのフォルダ構造の作成がシステムに指示されます。フォルダ構造は次のとおりです(それぞれにサブフォルダが含まれます):</p> <pre>data inbox outbox</pre> <p>アプリケーション・レベルのフォルダを指定し、「アプリケーション・フォルダの作成」オプションを選択すると、スクリプト・フォルダを含むアプリケーション用のフォルダのセットが作成されます。アプリケーションに固有のスクリプトをこのフォルダ内に作成します。これはアプリケーション間で異なるイベント・スクリプトの場合、特に重要です。アプリケーション・レベルのフォルダを設定しない場合は、アプリケーションごとに異なるイベント・スクリプトを使用できません。</p> <p>Universal Naming Convention (UNC)パスを指定する場合、フォルダの共有アクセス権で、読取り/書込み操作のための DCOM ユーザーへのアクセスを許可する必要があります。Oracle Hyperion Financial Management および FDMEE が別個のサーバー上にある場合は、アプリケーション・ルート・フォルダに Universal Naming Convention (UNC)パスを使用します。必要な UNC 定義の指定については、サーバー管理者にお問い合わせください。</p> <p>UNC パスを入力しない場合は、絶対パスを入力する必要があります。たとえば、<code>C:\Win-Ovu31e2bfiefdmee</code> と指定します</p>

表 1-9 (続き) アプリケーション・レベルのプロファイル・オプション

オプション	説明
ファイルの文字セット	<p>テキストを作成、保管および表示するためにビット組合せを文字にマッピングする方法を指定します。</p> <p>各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。</p>
デフォルト POV ロケーション	<p>デフォルト POV のロケーションを指定します。</p>
デフォルト POV 期間	<p>デフォルト POV 期間を指定します。</p>
デフォルト POV カテゴリ	<p>デフォルト POV カテゴリを指定します。</p>
ユーザーの言語	<p>FDMEE のユーザーが使用するバージョンのアプリケーションのデフォルト言語を選択します。</p>
ユーザー・インタフェースのテーマ	<p>アプリケーションの Oracle 設計パターンを設定します。</p> <p>FDMEE は、デフォルトのユーザー・インタフェース値として BLAF+ を使用します。</p>
デフォルト交差レポート	<p>アプリケーション・レベルでデフォルトの交差確認レポートとして使用する交差確認レポートのタイプを指定します。交差確認レポートは、データ・ロード・エラーを特定します。これは、「データ・ロード・ワークベンチ」のデータ検証ステップの一部として生成されます。使用可能なレポートのフォーマットは、<i>動的列</i>フォーマットと <i>固定列</i>フォーマットの2つです。固定列には、最大4つのカスタム・ディメンションが表示されます。</p>

表 1-9 (続き) アプリケーション・レベルのプロファイル・オプション


オプション	説明
デフォルトの確認レポート	<p>アプリケーション・レベルでデフォルトのレポートとして使用するレポートのタイプを指定します。次にシード済レポートを示しますが、新しいレポートを作成してここに指定できます:</p> <ul style="list-style-type: none"> 確認レポート - 現在のロケーションについて検証ルールの結果を表示します(成功または失敗ステータス)。 確認レポートの期間範囲(カテゴリ、開始期間、終了期間) - カテゴリと選択した期間について検証ルールの結果を表示します。 確認レポート検証エンティティ・シーケンス別 - 現在のロケーションについて検証ルールの結果を表示します(成功または失敗ステータス)。検証エンティティ・グループに定義されたシーケンスでソートされています。 確認レポート(警告) - 現在のロケーションについて検証ルールの結果を表示します。警告の条件が一致する場合に、検証が検証ルールに記録されて表示されます。このレポートには、検証に合格したルールは表示されません。
イベント・スクリプト実行の有効化	<p>「はい」を選択すると、データのロード前(BefLoad)や検証後(AftValidate)にアプリケーション・イベントの実行が有効になります。「いいえ」を選択すると、アプリケーション・イベントの実行が無効になります。</p>
ログ・レベル	<p>ログに表示される詳細のレベルを指定します。ログ・レベル 1 を指定すると、詳細が最も少なく表示されます。ログ・レベル 5 を指定すると、詳細が最も多く表示されます。</p> <p>ログは、「ログ」リンクを選択すると「プロセスの詳細」に表示されます。</p>
レポート精度の確認	<p>最も重要な数字が一番左の 0(ゼロ)以外の数字で、最も重要でない数字が一番右の既知の数字の場合の丸め処理に使用する 10 進数の合計数を指定します。</p>
データ・エクスポート・オプション「すべてのデータを上書き」を表示します	<p>「ルールの実行」画面の「エクスポート・モード」ドロップダウンに「すべてのデータを上書き」オプションを表示します。</p> <p>すべてのデータの上書きを選択した場合は、次のメッセージが表示されます: 警告: 「すべてのデータを上書き」オプションでは、アプリケーション全体のデータがクリアされます。これは現在の視点に制限されません。このアクションを実行しますか?</p>
マップ監査を使用可能にする	<p>マップ・モニター・レポート(ロケーションのマップ・モニターおよびユーザーのマップ・モニター)の監査レポートを作成するには、「はい」に設定します。この設定のデフォルト値は「いいえ」です。</p>

表 1-9 (続き) アプリケーション・レベルのプロファイル・オプション

オプション	説明
アクセスしてソース・ドキュメントを開く	<p>FDMEE のランディング・ページにドリルダウンすると、この設定によって「ソース・ドキュメントを開く」リンク(データのロードに使用されたファイル全体を開きます)へのアクセス権が決定されず。</p> <ul style="list-style-type: none"> 管理者 - 「アクセスしてソース・ドキュメントを開く」リンクは管理者ユーザーに限定されます。 すべてのユーザー - 「アクセスしてソース・ドキュメントを開く」リンクはすべてのユーザーが使用できます。「すべてのユーザー」がデフォルト設定です。
マップ・エクスポート・デリミタ	<p>メンバー・マッピングのエクスポート時に、列の区切り記号の値を設定します。</p> <p>使用可能な区切り記号は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> !(感嘆符) ,(カンマ) ;(セミコロン) (縦線)
マップ・エクスポートの Excel ファイル形式	<p>メンバー・マッピングをエクスポートする際に使用する Excel ファイル形式を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> Excel 97-2003 ワークブック(*.xls) Excel マクロ対応ワークブック(*.xlsm)

すべての(POV)ロケーションのロックおよびロック解除

すべてのロケーションのロック機能では、ターゲット・アプリケーション全体について現在の期間およびカテゴリに関連したすべてのロケーションをロックし、選択した POV にデータがロードされるのを防ぎます。ロケーションがロックされている場合、インポート、検証、エクスポートまたは検証の再実行を行えません。

ロケーションがロックされている場合、ロック記号()が POV バーに表示されます。

すべてのロケーションのロック機能は次の場所で参照されます。

- データ・ロード・ワークベンチ
- データ・ロード・ルール
- バッチ実行

「すべてのロケーションのロック解除」オプションも使用可能で、すべてのロックされたロケーションをロック解除できます。「視点の選択」画面で、ユーザーがロケーションごとに POV をロック解除できるようにオプションを指定できます。

個々の POV のロックおよびロック解除の詳細は、[POV のロックおよびロック解除](#)を参照してください

POV のすべてのロケーションをロックするには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「アプリケーション設定」を選択します。

2. 「アプリケーション設定」の「ターゲット・アプリケーション」ドロップダウンから、アプリケーション・プロファイルを適用するターゲット・アプリケーションを選択します。
3. **すべてのロケーションのロック**をクリックします。
4. 「期間」で、ロックする期間を選択します。
5. 「カテゴリ」で、ロックするカテゴリを選択します。
6. 「ロケーションごとのロックの解除を許可」をクリックし、「視点の選択」画面で、「POVのロック解除」オプションを指定します。

「ロケーションごとのロックの解除を許可」が無効化されている場合、「視点の選択」画面に、「POVのロック解除」および「POVのロック」フィールドは表示されません。
7. 「OK」をクリックします。

選択したターゲット・アプリケーションに対応するすべてのロケーションがロックされます。

すべてのロケーションの POV のロックを解除するには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「アプリケーション設定」を選択します。
2. 「アプリケーション設定」の「ターゲット・アプリケーション」ドロップダウンから、アプリケーション・プロファイルを適用するターゲット・アプリケーションを選択します。
3. 「すべてのロケーションのロック解除」をクリックします。
4. 「期間」で、ロック解除する期間を選択します。
5. 「カテゴリ」で、ロック解除するカテゴリを選択します。
6. 「OK」をクリックします。

選択したターゲット・アプリケーションに対応するすべてのロケーションのロックが解除されます。

ユーザー・レベルのプロファイルの設定

ユーザー設定は、ユーザーに適用されるユーザーレベル・プロファイルを更新またはクリアする場合に使用します。

ノート:

グローバル・モードが定義されると、POVのユーザー・レベル・プロファイルは適用できません。

ユーザー・レベルのプロファイルを設定するには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「ユーザー設定」を選択します。
2. 「ユーザー設定」で、追加または変更するオプションを選択します。
3. **オプション:** 設定をクリアするには、値を選択し、キーボードから、「削除」をクリックします。

値は表示されなくなりますが、削除されるのは保存した後です。
4. 「保存」をクリックします。

表 1-10 ユーザー・レベルのプロファイルの設定


オプション	説明
ファイルの文字セット	<p>テキストを作成、保管および表示するためにビット組合せを文字にマッピングする方法を指定します。</p> <p>各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれ文字は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。</p> <p> をクリックして、「検索して選択」画面に使用可能な文字セットを表示します。エンコーディングとは、テキストの作成、保管、表示のためにビット組合せを文字にマッピングすることです。</p> <p>ソース・ファイルがサポートされている形式のいずれでもない場合、エンコーディングを UNICODE に変換する必要があります。</p>
デフォルト POV ロケーション	デフォルト POV のロケーションを指定します。
デフォルト POV 期間	デフォルト POV 期間を指定します。
デフォルト POV カテゴリ	デフォルト POV カテゴリを指定します。
ユーザーの言語	ユーザー・バージョンの Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ユーザー・インタフェースのデフォルト言語を選択します。
ユーザー・インタフェースのテーマ	FDMEE ユーザー・インタフェースのユーザーが使用するバージョンのデフォルト・テーマを指定します。
デフォルトの確認レポート	<p>ユーザー・レベルでデフォルトの確認レポートとして使用する確認レポートのタイプを指定します。次にシード済確認レポートを示しますが、新しいレポートを作成してここに指定できます：</p> <ul style="list-style-type: none"> 確認レポート - 現在のロケーションについて検証ルールの結果を表示します(成功または失敗ステータス)。 確認レポートの期間範囲(カテゴリ、開始期間、終了期間) - カテゴリと選択した期間について検証ルールの結果を表示します。 確認レポート検証エンティティ・シーケンス別 - 現在のロケーションについて検証ルールの結果を表示します(成功または失敗ステータス)。検証エンティティ・グループに定義されたシーケンスでソートされています。 確認レポート(警告) - 現在のロケーションについて検証ルールの結果を表示します。警告の条件が一致する場合に、検証が検証ルールに記録されて表示されます。これには、検証に合格したルールは表示されません。

表 1-10 (続き) ユーザー・レベルのプロファイルの設定

オプション	説明
デフォルト交差レポート	ユーザー・レベルでデフォルトの交差確認レポートとして使用する交差確認レポートのタイプを指定します。交差レポートは、データ・ロード・エラーを特定します。これは、「データ・ロード・ワークベンチ」のデータ検証ステップの一部として生成されます。使用可能なレポートのフォーマットは、動的列フォーマットと固定列フォーマットの2つです。固定列には、最大4つのカスタム・ディメンションが表示されます。
ログ・レベル	ログに表示される詳細のレベルを指定します。ログ・レベル1を指定すると、詳細が最も少なく表示されます。ログ・レベル5を指定すると、詳細が最も多く表示されます。 ログは、「ログ」リンクを選択すると「プロセスの詳細」に表示されます。
マップ・エクスポート・デリミタ	メンバー・マッピングのエクスポート時に、列の区切り記号の値を設定します。 使用可能な区切り記号は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ! (感嘆符) , (カンマ) ; (セミコロン) (縦線)
マップ・エクスポートの Excel ファイル形式	メンバー・マッピングをエクスポートする際に使用する Excel ファイル形式を選択します。 <ul style="list-style-type: none"> Excel 97-2003 ワークブック(*.xls) Excel マクロ対応ワークブック(*.xlsm)

セキュリティ・オプションの設定

役割レベル・セキュリティ、レポート・セキュリティ、バッチ・セキュリティおよびロケーション・セキュリティのオプションを設定します。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、管理者がほとんどのユーザー・インタフェースおよびレポート機能のセキュリティを有効化できます。FDMEでは、5つのレベルのセキュリティをサポートしています：

- 役割レベルのセキュリティ - 各ユーザーがアクセスできるユーザー・インタフェースのコンポーネントへのアクセスを制御します。
- レポート・セキュリティ — 役割に割り当てられたレポート・グループに基づいて、実行できるレポートを制御します。
- バッチ・セキュリティ — 役割に割り当てられたバッチ・グループに基づいて、実行できるバッチを制御します。
- カスタム・スクリプト・セキュリティ — 役割に割り当てられたカスタム・スクリプト・グループに基づいて、実行できるカスタム・スクリプトを制御します。
- ロケーション・セキュリティ - ロケーションへのアクセスを制御します。

セキュリティ・レベルはユーザーに適用されます。ユーザーに割り当てられた役割とロケーションのセキュリティ・レベルは実行時に比較されます。ユーザーがアクセスしようとしている機能に割り当てられたレベルと等しいレベルがユーザーに割り当てられている場合、ユーザーは機能を使用できます。

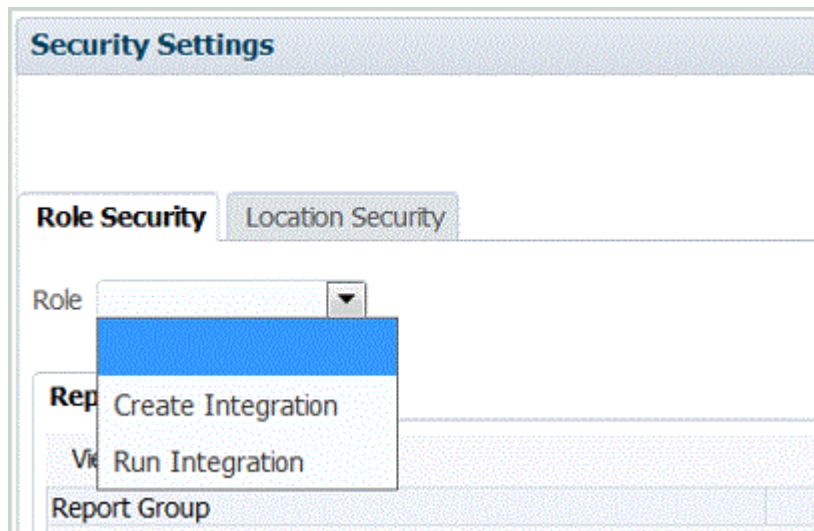
役割レベルのセキュリティ

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のセキュリティでは、サービス管理者およびパワー・ユーザーは役割の概念を使用してユーザー・インタフェース機能へのユーザー・アクセスをカスタマイズできます。役割とは、機能へのアクセス権をユーザーに付与する権限です。FDMEE では、特定の要件を集約および調整した機能がデフォルトの役割に割り当てられます。機能に役割が割り当てられた後は、ユーザーを Oracle Hyperion Shared Services でプロビジョニングすると、対応する役割がそれらのユーザーにマップされます。ユーザーに役割を付与するプロセスの詳細は、『Oracle(R) Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

役割レベルのセキュリティを追加するには:

1. 「設定」 タブの「構成」 で、「セキュリティ設定」 を選択します。
2. 「セキュリティ設定」 で、「ユーザー・インタフェース」 タブを選択します。
3. 「役割」 で、アクセスを割り当てる役割カテゴリを選択します。

役割のカテゴリによって、選択された役割に関連付けられる機能の表示が決まります。役割のリストを次に記載します。



4. 「レポート」 タブまたは「バッチ」 タブのいずれかを選択します。
5. 「選択」 で、役割に割り当てる関数を選択します。

役割セキュリティのレポート・グループへの割当ての詳細は、[レポート・セキュリティの定義](#)を参照してください。

役割セキュリティのバッチ・グループへの割当ての詳細は、[バッチ・セキュリティの定義](#)を参照してください。

役割セキュリティのカスタム・スクリプトへの割当ての詳細は、[カスタム・スクリプト・セキュリティの定義](#)を参照してください。

6. 「保存」 をクリックします。

表 1-11 役割と説明

役割	説明
管理者	FDMEE のすべての機能へのアクセス権を付与します。
統合の作成	FDMEE のメタデータ・ロード・ルールおよびデータ・ロード・ルールを作成します。
統合の実行	FDMEE のメタデータとデータ・ルールを実行し、実行時パラメータを入力します。トランザクション・ログを表示できます。
ドリル・スルー	FDMEE のランディング・ページにドリルできるかどうかを制御します。これによって、ソース・システムへのドリルが制御されます。
HR 統合	人事データ・ルールを実行し、ランタイム・パラメータを設定します。トランザクション・ログを表示できます。
中間 2-9	中間レベルの役割は管理者によって定義されます。

ユーザー・インタフェース・セキュリティの定義

ユーザー・セキュリティを追加するには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「セキュリティ設定」を選択します。
2. 「役割のセキュリティ」タブを選択します。
3. 「役割」から、アクセスを割り当てる役割を選択します。
4. 「ユーザー・インタフェース」タブを選択します。
5. 「関数」で、ユーザー・インタフェース・セキュリティを割り当てるユーザー・インタフェース関数を選択します。
6. 「保存」をクリックします。

レポート・セキュリティの定義

レポート・セキュリティを使用すると、選択したタイプ・グループにレポートを割り当てることができ、そのグループには役割が割り当てられます。この役割は、実行時にグループ内のすべてのレポートへのアクセス権を持ちます。

レポート・セキュリティを定義するには、選択したタイプのレポートをグループに割り当てます([レポート・グループの追加](#)を参照してください)。次に、レポート・グループを役割に割り当てます。この役割は、実行時にグループ内のすべてのレポートへのアクセス権を持ちます。

レポート・レベルのセキュリティを追加するには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「セキュリティ設定」を選択します。
2. 「役割」で、レポート・セキュリティを割り当てる役割を選択します。
使用可能な役割の詳細は、[役割レベルのセキュリティ](#)を参照してください。
3. 「レポート」タブを選択します。

4. 「レポート・グループ」の「選択」フィールドで、レポート・セキュリティを割り当てるレポート・グループを選択します。

The screenshot shows the 'Role Security' configuration page for the role 'Create Integration'. The 'Report' tab is active, and the 'Batch' button is visible. A table lists various report groups with a 'Select' checkbox for each. The 'Audit Reports' and 'Base Trial Balance Reports' rows have their checkboxes checked.

Report Group	Select
Audit Reports	<input checked="" type="checkbox"/>
Base Trial Balance Reports	<input checked="" type="checkbox"/>
Check Reports	<input type="checkbox"/>
Intersection Reports	<input type="checkbox"/>
Listing Reports	<input type="checkbox"/>
Location Analysis Reports	<input type="checkbox"/>
Process Monitor Reports	<input type="checkbox"/>
Tests	<input type="checkbox"/>
Variance Reports	<input type="checkbox"/>

5. 「保存」をクリックします。

「レポートの実行」を選択すると、「レポート・グループ」ドロップ・ダウンで使用可能なレポート・リストは役割セキュリティで選択されたレポートに基づきます。

The screenshot shows the 'Report Execution' page. A dropdown menu is open for the 'Report Group' field, listing various report groups. The 'Check Reports' option is highlighted. A 'Create Report Script' button is visible on the right side of the page.

バッチ・セキュリティの定義

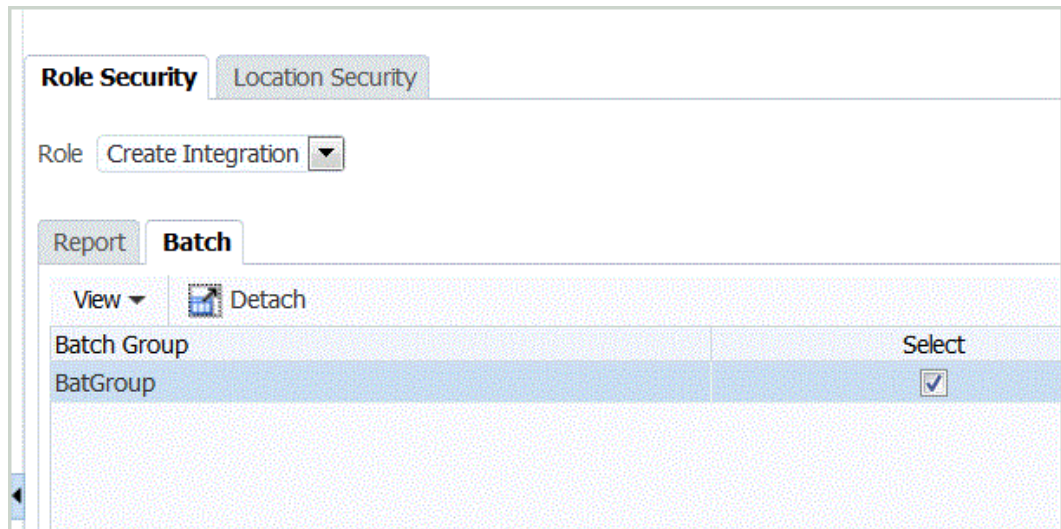
バッチ・セキュリティを使用すると、選択したタイプ・グループにバッチを割り当てることができ、そのグループには役割が割り当てられます。この役割は、実行時にグループ内のすべてのバッチへのアクセス権を持ちます。

バッチ・セキュリティを定義するには、選択したタイプのバッチをグループに割り当てます(バッチ・グループの追加を参照してください)。次に、バッチ・グループを役割

に割り当てます。この役割は、実行時にグループ内のすべてのバッチへのアクセス権を持ちます。

バッチ・セキュリティを追加するには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「セキュリティ設定」を選択します。
2. 「役割」で、バッチ・セキュリティを割り当てる役割を選択します。
使用可能な役割の詳細は、[役割レベルのセキュリティ](#)を参照してください。
3. 「バッチ」タブを選択します。



4. 「バッチ・グループ」で、「選択」からバッチ・セキュリティを割り当てるバッチ・グループを選択します。
5. 「保存」をクリックします。
「バッチ実行」を選択すると、**バッチ・グループ**で使用可能なレポート・リストは役割セキュリティで選択されたバッチに基づきます。

カスタム・スクリプト・セキュリティの定義

カスタム・スクリプト・セキュリティを定義するには、選択したタイプのカスタム・スクリプトをグループに割り当てます([カスタム・スクリプト・グループの追加](#)を参照してください)。次に、カスタム・スクリプト・グループを役割に割り当てます。この役割は、実行時にグループ内のすべてのカスタム・スクリプトへのアクセス権を持ちます。

役割レベルのセキュリティを追加するには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「セキュリティ設定」を選択します。
2. 「役割」で、カスタム・スクリプト・セキュリティを割り当てる役割を選択します。
役割のリストは、[表 1](#)を参照してください。
3. 「カスタム・スクリプト」タブを選択します。
4. 「カスタム・スクリプト・グループ」で、カスタム・スクリプト・セキュリティを割り当てるカスタム・スクリプト・グループを選択します。
5. 「保存」をクリックします。

ロケーションのセキュリティの定義

ロケーションへのユーザー・アクセスは、ロケーション・セキュリティによって決定されます。各ロケーションに作成するユーザー・グループを定義します。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション・セキュリティ(ロケーションへのユーザーのアクセス権)は、ロケーションのセキュリティ設定タブのオプションによって構成および適用されます。各ロケーションに作成するユーザー・グループを定義します。場所を作成または更新する場合、作成できるグループ数は場所のシステム設定で定義されています。また、「**ユーザー・グループの保持**」オプションによって、既存のすべてのロケーションに対するユーザー・グループを一括して作成することができます。

ロケーション・セキュリティが十分に実装される前に、いくつかの従属プロセスが発生します:

1. ロケーションが作成されると、ユーザー・グループが Oracle Hyperion Shared Services に自動的に作成されます。
ユーザー・グループには、ロケーションの名前およびユーザー・プリファレンスに基づいた追加の接頭辞と接尾辞情報が含まれています。さらに、ユーザー・グループには役割が付与されます。
2. 管理者は、ユーザーをユーザー・グループにプロビジョニングします。
3. ユーザーがログインすると、FDMEE では、ユーザーに割り当てられるグループが決定されます。
FDMEE では、グループ名に基づいてアクセス可能なロケーションが決定されません。
4. POV 領域はユーザー・アクセスに基づいてロケーションをフィルタします。

ノート:

Web サービスおよびバッチ・スクリプトが使用されても、ロケーションのセキュリティは保守されて適用されます。

「ロケーションのセキュリティ」タブを表示するには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「セキュリティ設定」を選択します。
2. 「ロケーションのセキュリティ」タブを選択します。

ロケーション・セキュリティのユーザー・グループを追加するには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「セキュリティ設定」を選択します。
2. 「ロケーションのセキュリティ」タブを選択します。
3. 「ロケーションのサマリー」グリッドで「追加」をクリックします。

LOCATION 名の行が追加されます。グループが保存されると、グループ名は Prefix_Location_Suffix という形式になります(例: FDMEE_LOCATION_DATA)。

接頭辞と接尾辞は、Common Shared Services (CSS)のグループの特定に役立ちません。

4. 「**セキュリティ設定の詳細**」グリッドで、「**説明**」フィールドにユーザー・グループの説明を入力します。

たとえば、Group for Creating and Running Integration と入力します。


5. 「**接頭辞**」フィールドに、「**FDMEE**」と入力します。

グループが保存されると、接頭辞がグループ名に追加されます。

 **ノート:**

アンダースコアは、グループ名の接頭辞または接尾辞でサポートされていません。

6. 「**接尾辞**」フィールドで、ユーザーにアクセスがプロビジョニングされている関数またはルールの名前を選択します。

 **ノート:**

アンダースコアは、グループ名の接頭辞または接尾辞でサポートされていません。

たとえば、次のように指定します:

- 統合の実行役割
- HR 統合役割
- 統合の作成役割
- ドリル・スルー役割
- 中間 2-9

グループが保存されると、接尾辞がグループ名に追加されます。

7. 適切な役割を選択して、ユーザー・グループにプロビジョニングされた役割のリストを選択します:

- 統合の作成
- ドリル・スルー
- 統合の実行
- HR 統合
- 中間 2-9

デフォルトでは、サービス管理者およびパワー・ユーザーのみが、FDMEE にアクセスしてデータ統合プロセスで操作できます。

使用可能な役割の詳細は、[役割レベルのセキュリティ](#)を参照してください。

8. 「**保存**」をクリックします。

9. ロケーションのユーザー・グループをまとめて作成するには、「**ユーザー・グループの保持**」をクリックします。

ロケーション別のセキュリティを無効にするには:

1. 「設定」タブの「構成」で、「セキュリティ設定」を選択します。
2. 「ロケーションのセキュリティ」タブを選択します。
3. 「ロケーション別のセキュリティを使用不可にする」をクリックします。
ロケーション別のセキュリティが無効の場合、メッセージ「ロケーション別のセキュリティが使用できません。この機能を使用可能にしますか?」が表示されます
4. 「保存」をクリックします。

ソース・システムの設定

場合によっては、複数の一般会計ソース・システムや人事ソース・システムを使用することがあります。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition を使用すると、どのインスタンスからでもデータとメタデータを抽出できます。

FDMEE でサポートされているソース・システムの詳細は、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System* の動作保証マトリックスを参照してください。

ノート:

1. ソース・システムを登録します。[Enterprise Resource Planning \(ERP\)ソース・システムの登録](#)を参照してください。
2. 必要に応じて、ソース・システムの設定を編集します。[登録済ソース・システム詳細の編集](#)を参照してください。
登録されているソース・システムの削除の詳細は、[登録済ソース・システムの削除](#)を参照してください。

ノート:

FDMEE のプロセスまたはジョブの表示の詳細は、[プロセス詳細の表示](#)を参照してください。

Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムの登録

ソース・システム・ページでは、登録されているすべてのソース・システムが「サマリーペイン内の表」に表示されます。デフォルトでは、次の列が表示されます:

- 名前 - ソース・システムの名前
- タイプ - ソース・システムのタイプ
- 説明 - ソース・システムの登録時に入力した説明。
- ドリル URL - ソース・システムの登録時に選択したドリル URL。

ソース・システムを追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ソース・システム」を選択します。

2. 「ソース・システム」で、「追加」をクリックします。
3. ソース・システム詳細を入力します:
 - a. 「ソース・システム名」で、ソース・システム名を入力します。
 - b. 「ソース・システムの説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
 - c. 「ソース・システム・タイプ」で、ソース・システム・タイプを選択します。

使用可能なソース・システム:

- E-Business Suite リリース 11i
- PeopleSoft Financials リリース 9
- JD Edwards Enterprise One
- SAP ERP Financial
- SAP BW (Business Warehouse)
- ファイル
- その他

- d. **ドリル URL** を入力します。

ドリル・スルー URL は、ドリル・スルーに使用する URL を示します。たとえば、<http://machinename.us.company.com:6362> と指定します

URL は E-Business Suite または PeopleSoft を起動するために使用されます。

URL が使用可能である場合、または必要なドリル・スルー・オプションを提供する JavaScript を指定する場合は、任意のロケーションにドリル・スルーできます。ドリル・スルーは、事前定義アダプタ、ファイルおよびオープン・インタフェース・ソースに対して使用可能です。

さらに、ソース・システムからロードされたデータが表示される Enterprise Performance Management (EPM) システム・アプリケーションから Oracle General Ledger または PeopleSoft Enterprise Financial Management にドリル・スルーできます。ハイパーリンクをクリックすると、Oracle General Ledger の「残高」ページまたは PeopleSoft Enterprise Financial Management の「照会」ページに移動できます。

JD Edward ソース・システムの場合は、JD Edwards の残高ページにドリル・スルーできます。

ノート:

Oracle Hyperion Financial Management の仕訳および会社間トランザクションに対して、ドリル・スルーはサポートされていません。

- e. 「ODI コンテキスト・コード」に、コンテキスト・コードを入力します。
ODI コンテキスト・コードは、Oracle Data Integrator に定義されているコンテキストを参照します。コンテキストはソースおよびターゲットの接続情報をグループ化します。
デフォルトのコンテキスト・コードは **GLOBAL** です。
4. **オプション:** PeopleSoft のコミットメント・コントロール機能を使用する場合、「**コミットメント・コントロールを使用可能にする**」を選択します。

[PeopleSoft コミットメント・コントロール](#)を参照してください。

5. 「保存」をクリックします。

ソース・システムを追加した後、表内のソース・システムを選択すると、下部ペインに詳細が表示されます。

ソース・システムを登録した後、ソース・システムを初期化する必要があります。ソース・システムを初期化すると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition に必要な、元帳、勘定科目などのすべてのメタデータがフェッチされます。また、ソース・システムで勘定体系、セグメント/チャートフィールド、元帳、職責などが新規に追加された場合もソース・システムを初期化する必要があります。

6. ソース・システムを初期化するには、「初期化」をクリックします。

 ノート:

ソース・システムのサイズによっては、初期化に数分かかる場合があります。

ファイルベースのソース・システムの登録

この手順を使用して、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で使用するファイルベースのソース・システムを登録します。

ソース・システム・ページでは、登録されているすべてのソース・システムが「サマリーペイン内の表」に表示されます。デフォルトでは、次の列が表示されます:

- 名前 - ソース・システムの名前
- タイプ - ファイルベースのソース・システムのみがソース・システムとしてサポートされます。
- 説明 - ソース・システムの登録時に入力した説明。
- ドリル URL - ソース・システムの登録時に入力したドリル URL。

ファイルベースのソース・システムを追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ソース・システム」を選択します。
2. 「保存」をクリックします。

ソース・システムを追加した後、表内のソース・システムを選択すると、下部ペインに詳細が表示されます。

登録済ソース・システムの削除

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でソース・システムを使用する予定がない場合は、登録済ソース・システムを削除できます。

▲ 注意:

登録済ソース・システムを削除する際は注意が必要です!ソース・システムを削除する手順の中で、ターゲット・アプリケーションが削除されます。ターゲット・アプリケーションを削除すると、他のアーティファクトが削除されます。登録済ソース・システムを削除すると、このソース・システムが「**ソース・システム**」画面から削除され、このソース・システムに関連付けられたすべてのインポート・フォーマット、ロケーション、メタデータ・ルールおよびデータ・ルールが削除されます。

登録済ソース・システムを削除するには:

1. 「**設定**」タブの「**登録**」で、「**ターゲット・アプリケーション**」を選択します。
「ターゲット・アプリケーション」ページを使用して、ソース・システムに対するルールまたはマッピングを持つすべてのターゲット・アプリケーションを削除します。
2. 「**設定**」タブの「**登録**」で、「**ソース・システム**」を選択します。
3. 「**ソース・システム**」で、削除するソース・システムを選択して「**削除**」をクリックします。

💡 ヒント:

削除を元に戻すには、「**取消し**」をクリックします。

4. 「**OK**」をクリックします。

登録済ソース・システム詳細の編集

ソース・システムの詳細が変更される場合があります。ソース・システム詳細は必要に応じて編集できます。ソース・システム・タイプを追加した後は変更できませんので注意してください。

登録済ソース・システム設定を編集するには:

1. 「**設定**」タブの「**登録**」で、「**ソース・システム**」を選択します。
2. ソース・システムを選択します。
3. 必要に応じて、ソース・システム詳細または ODI 詳細を編集します。
4. 「**保存**」をクリックします。

(新規セグメント、チャートフィールド値または階層の追加など)ソース・システムのメタデータを変更する場合、ソース・システムを初期化する必要があります。

5. 「**初期化**」をクリックします。

ファイルベースのデータ・ロード定義の追加

タイプが「ファイル」のソース・システムは、特定の記号で区切られた固定幅ファイルからデータをインポートするためにインポート・フォーマットで使用されます。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、ファイルベースのデータ・ロード・システムが自動的に作成されます。代替ファイルベースのデータ・ロード・ソース・システムを作成する場合は、次の手順に従います。

ファイルベースのインポート・フォーマットを使用するには、ファイルベースのデータ・ロードを定義する必要があります。

ファイルベースのデータ・ロード定義を追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ソース・システム」を選択します。
2. 「ソース・システム」で、「追加」をクリックします。
3. ソース・システム詳細を入力します:
 - a. 「ソース・システム名」に、ファイルベースのデータ・ロード・システム名を入力します。
 - b. 「ソース・システムの説明」で、説明を入力します。
 - c. 「ソース・システム・タイプ」で、「ファイル」を選択します。
 - d. 「ドリルスルー URL」に、ドリル・スルーに使用する URL を識別する URL を指定します。
 - e. 「ODI コンテキスト・コード」に、コンテキスト・コードを入力します。
4. 「保存」をクリックします。

ODI コンテキスト・コードは、Oracle Data Integrator に定義されているコンテキストを参照します。コンテキストはソースおよびターゲットの接続情報をグループ化します。

ファイルベースのデータ・ロード・システムを追加した後で、表でソース・システムを選択します。システムの詳細が下のペインに表示されます。

ソース・アダプタの操作

ソース・アダプタは Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition における統合フレームワークであり、これによりソース・システムから柔軟かつカスタマイズ可能な方法でデータを抽出できます。ソース・アダプタは、2つのコンポーネントで構成されています:

- Oracle Data Integrator (ODI)プロジェクト - データをソース・システムから抽出し、FDMEE ステージング表にロードするためのコードが含まれています。
- アダプタ定義 XML - 統合の定義が含まれています。これには3つのコンポーネントが含まれています。ソース列、パラメータおよびドリル URL です。

このフレームワークを使用して、事前にパッケージされたこれらの統合が提供されません:

- SAP ERP Financials
- JD Edwards
- 任意のソース・システムからロードするためのオープン・インタフェース

SAP 用の事前パッケージ統合の使用

SAP 用の事前パッケージ統合では、readme の指示を確認して必要な情報を Oracle の統合パートナーからダウンロードします。オラクル社は、Oracle Data Integrator (ODI) プ

プロジェクトおよびアダプタ定義 XML ファイルを提供します。SAP 統合では、統合パートナーが ODI プロジェクトおよびアダプタ XML を提供します。

事前パッケージ統合を使用するには:

1. ODI コンソールを使用して、**プロジェクト定義とモデル定義**を Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の作業リポジトリ設定にインポートします。
2. **アダプタ定義 XML** を、「システム設定」でアプリケーション・ルート・ディレクトリとして設定されたディレクトリ内のロケーションにコピーします。
3. 「ソース・アダプタ」画面を使用して、アダプタ XML ファイルをインポートします。

ファイルをインポートするには:

- a. 「設定」タブの「構成」で、「ソース・アダプタ」を選択します。
- b. 「ソース・アダプタ」で、「インポート」を選択します。
- c. 「インポートするファイルの選択」で、インポートするファイルに移動し、「OK」をクリックします。

ファイル名は、必要なアダプタによって異なります。たとえば、次を選択します:

- SAP_GLNew_Adapter.xml
- SAP_GLClassic_Adapter.xml
- SAP_PC_Adapter.xml
- SAP_CC_Adapter.xml
- SAP_AP_Adapter.xml
- SAP_AR_Adapter.xml

- d. **オプション:** ファイルを参照するには、「アップロード」を選択します。
 - e. 「アップロードするファイルの選択」で、「参照」をクリックしてインポートするファイルに移動し、「OK」をクリックします。
4. ソース列(ソース・アダプタで指定)とターゲット・アプリケーション・ディメンション間のマッピングを定義する新しいタイプの「ソース・アダプタ」のインポート・フォーマットを作成します。
 5. 「ロケーション」および「データ・ルール」を定義します。

データ・ルールを実行すると、インポート・フォーマットと関連付けられた新規の ODI シナリオを使用して、ソースからデータが抽出され、FDMEE ステージング表 (TDATESEG) でステージングされます。

ソース・アダプタの一般情報の定義

「ソース・アダプタのサマリー」セクションを使用して、ソース・アダプタに関するサマリー情報の表示、定義、削除、エクスポート、インポートおよびコピーを行います。

ターゲット・アプリケーションの登録

ノート:

詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud* データ統合の管理のアプリケーションの登録を参照してください。

ターゲット・アプリケーションを使用すると、*Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition* を異なるソース・システムとターゲット・アプリケーション間でデータを統合するためのプライマリ・ゲートウェイとして使用できます。これにより、ローカルの *Oracle Enterprise Performance Management Cloud* アプリケーション、ビジネス・プロセス・インスタンス間デプロイメント(クラウド間アプリケーション)およびカスタム・アプリケーションを既存の *EPM* ポートフォリオにデプロイできます。ソース・アプリケーションをターゲット・アプリケーションに統合するプロセスにより、データの可視性、整合性および検証システムが提供されます。

次のアプリケーション・タイプは、使用可能なターゲット・アプリケーションのタイプを示しています。

- ローカル - このアプリケーション・タイプは、現在のサービスのローカル *EPM* アプリケーション(オンプレミス・デプロイメント)を参照します。

統合を使用して既存のオンプレミス *ERP* アプリケーションからデータをインポートしたり、オンプレミス *EPM* アプリケーション間でデータを同期できます。

たとえば、*Oracle Hyperion Financial Management* ユーザーが *Oracle Hyperion Planning* のデータを追加したり、*Planning* ユーザーが他の *Planning* アプリケーションを追加することができます。また、この統合では、クラウドからオンプレミス・アプリケーションまたは他の外部レポート・アプリケーションへのライトバックも可能です。

- クラウド - このアプリケーション・タイプは、データ統合のためにリモート・サービスを使用するサービス・インスタンスを参照します。ビジネス・プロセス・インスタンスは、自己完結型ユニットで、多くの場合は *Web* サーバーとデータベース・アプリケーションを含んでいます。この場合、2つのビジネス・プロセス・インスタンス間の接続情報を選択する必要があります。

この機能を使用して、*EPM* のお客様はクラウド・デプロイメントを次のような既存の *EPM* ポートフォリオに適用できます

- *Planning* モジュール
- *Planning*
- *Financial Consolidation and Close*
- *Oracle Hyperion Profitability and Cost Management*
- *Tax Reporting*

ターゲット・アプリケーションを登録するには:

1. 「設定」タブを選択し、「登録」で「ターゲット・アプリケーション」を選択します。

2. 「ターゲット・アプリケーション」のサマリー・グリッドで「追加」をクリックし、デプロイメントのタイプを選択します。

使用可能なオプションは、「クラウド」(クラウド・デプロイメントの場合)または「ローカル」(オンプレミス・デプロイメントの場合)です。

クラウド・デプロイメントの場合は、ステップ3に進みます。

ローカル・デプロイメントの場合は、ステップ4に進みます。

3. クラウド・デプロイメントを登録するには、「クラウド」を選択し、「EPM クラウド資格証明」で次のステップを実行します。

- a. 「URL」で、サービスへのログオン時に使用するサービス URL を指定します。
- b. 「ユーザー名」で、クラウド・サービス・アプリケーションのユーザー名を指定します。
- c. 「パスワード」で、クラウド・サービス・アプリケーションのパスワードを指定します。
- d. 「ドメイン」で、クラウド・サービス・アプリケーションに関連付けられたドメイン名を指定します。

アイデンティティ・ドメインは、サービス・インスタンスへのアクセスを必要とするユーザーのアカウントを制御します。また、権限を持つユーザーがアクセスできる機能を制御します。サービス・インスタンスはアイデンティティ・ドメインに属します。

 ノート:

管理者はユーザーに表示されるドメイン名を更新できますが、FDMEE は、カスタマがサービスの契約をした際に指定された元のドメイン名を必要とします。FDMEE から EPM Cloud 接続を設定している場合は、ドメイン別名は使用できません。

- e. 「タイプ」でアプリケーションのタイプを指定し、「OK」をクリックします。

有効なアプリケーション・タイプ:

- Planning
- Essbase
- 連結
- Tax Reporting

「アプリケーションを表示」をクリックして、アプリケーションを選択することもできます。

- f. 「アプリケーション名」にアプリケーション名を入力します。

- g. 既存のターゲット・アプリケーションと同じ名前のターゲット・アプリケーションを登録するには、「接頭辞」で接頭辞を指定し、名前を一意にします。

接頭辞名が既存のターゲット・アプリケーション名に結合されます。たとえば、デモ用のターゲット・アプリケーションに既存の"Vision"アプリケーションと同じ名前を付ける場合は、**Demo** 接頭辞を割り当てて、ターゲット・アプリケーションに一意の名前を指定できます。この場合、FDMEE によって名前が結合され、**DemoVision** という名前が形成されます。

- h. 「OK」をクリックします。

The screenshot shows a dialog box titled "EPM Cloud Credentials". It contains the following fields and controls:

- * URL:
- * User Name:
- * Password:
- Domain:
- Type: (dropdown arrow)
- Application Name: (dropdown arrow)
- Prefix:
- Buttons: "Show Applications" (blue), "OK" (blue), "Cancel" (blue)

4. 「OK」をクリックします。
5. 「アプリケーション詳細」にアプリケーション名を入力します。
6. 「OK」をクリックします。
7. Essbase データベースを使用する場合、**Essbase データベース名**を選択します。
8. 「メンバーのリフレッシュ」をクリックします。
EPM Cloud からメタデータおよびメンバーをリフレッシュするには、「メンバーのリフレッシュ」をクリックする必要があります。
9. 「保存」をクリックします。
10. ディメンション詳細を定義します。
[アプリケーションのディメンションの詳細の定義](#)を参照してください。
オプション: すべてのディメンションが表示されない場合は、「**メタデータのリフレッシュ**」をクリックします。
11. アプリケーション・オプションを選択します。
Planning アプリケーションの詳細は、[Essbase および Planning のアプリケーション・オプションの定義](#)を参照してください。
Financial Management の詳細は、[Financial Management のアプリケーション・オプションの定義](#)を参照してください。

 **ノート:**

Account Reconciliation Manager に使用可能なアプリケーション・オプションはありません。

カスタム・ターゲット・アプリケーションの作成

Oracle Enterprise Performance Management Cloud からデータを抽出し、EPM Cloud アプリケーションにロードするのではなく、フラット・ファイルにデータをプッシュできるように、カスタム・ターゲット・アプリケーションを作成します。

カスタム・ターゲット・アプリケーションを使用すると、EPM でサポートされるソースからデータをロードし、そのデータを Oracle Essbase、Oracle Hyperion Planning および Oracle Hyperion Financial Management にロードするかわりにフラット・ファイルに抽出できます。必要なディメンショナリティを含むカスタム・ターゲット・アプリケーションを定義できます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、データをターゲット・アプリケーションにエクスポートするかわりに、カスタム・プロセスを使用して外部システムにロード可能なデータ・ファイルを生成します。

カスタム・ターゲット・アプリケーションを作成するときは、次の点に注意してください：

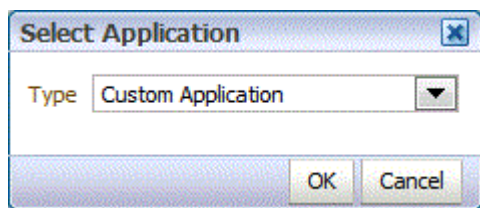
- データは、勘定科目、エンティティ、UD1、UD2 から UD20、金額という定義済の順序でファイルに書き込まれます。
- カスタム・アプリケーション定義を作成するときに指定したシーケンスが、マッピング処理の順序として使用されます。スクリプトに依存関係の処理順序が含まれる場合は、シーケンスに注意してください。
- データ・ルール — POV カテゴリは検証されません。
- データ・ロード・マッピング — ターゲット値はカスタム・アプリケーションに対して検証されません。
- データ・ロードの実行 — FDMEE で出力データ・ファイルが作成されます。データ・ファイルの名前は<Target App Name>_<Process ID>.dat です。これは、<APPL ROOT FOLDER>/outbox ディレクトリに書き込まれます。データ・ファイルには、「プロセスの詳細」ページの OUTPUT file 列からアクセスできます。

データ・ロード・ルールが実行されると、FDMEE でデータがエクスポートされます。


カスタム・ファイルを作成する場合は、「ファイルへのエクスポートを使用可能にする」オプションを「いいえ」に設定し、カスタム・イベント・スクリプトを BefExport に書き込んでデータ・ファイルを作成します。カスタム・プロセスを作成してターゲット・スクリプトに自動的にロードする場合は、BefExport スクリプトを記述してください。

カスタム・アプリケーションを定義するには：

1. 「設定」タブの「登録」で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
2. 「ターゲット・アプリケーション」サマリー・グリッドの「ターゲット・アプリケーション」で、「追加」をクリックします。
3. 「ローカル」ターゲット・アプリケーションを選択します。
4. 「アプリケーションの選択」で「カスタム・アプリケーション」を選択して「OK」をクリックします。



5. 「アプリケーション詳細」にアプリケーション名を入力します。
6. 「ディメンションの詳細」タブを選択します。
7. 「ディメンション名」を指定します。

8. 「ターゲット・ディメンション・クラス」を選択するか、をクリックして、アプリケーションで定義されていないディメンションごとに「ターゲット・ディメンション・クラス」を選択します。

ディメンション・クラスは、ディメンション・タイプによって定義されるプロパティです。たとえば、期間(Period)ディメンションがある場合、そのディメンションのクラスも Period となります。Essbase アプリケーションの場合は、勘定科目、シナリオおよび期間の各ディメンションに対して適切なディメンション・クラスを指定する必要があります。Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting アプリケーションの場合は、従業員、職階、ジョブ・コード、予算アイテムおよび要素の各ディメンションに対してディメンション・クラスを指定する必要があります。

9. 「データ表列名」で、ディメンション値が格納されるステージング表(TDASEG)の列の表列名を指定します。



をクリックし、データ表列名を検索して選択します。

10. 「シーケンス」に、マップが処理される順序を指定します。

たとえば、「勘定科目」が**1**、「製品」が**2**、「エンティティ」が**3**に設定されているとき、FDMEは、まず「勘定科目」ディメンションのマッピングを処理し、次に「製品」と「エンティティ」を順に処理します。

11. 「重複のディメンションに接頭辞を付加」を有効化するか、選択(「はい」に設定)し、メンバー名にディメンション名の接頭辞を付けます。





ロードされるメンバー名のフォーマットは、[Dimension Name]@[Dimension Member]です。このオプションを有効にすると、接頭辞付きのディメンション名がアプリケーションのすべてのディメンションに適用されます。ターゲットのディメンションに重複メンバーがある場合は、このオプションを選択できません。つまり、重複メンバーがディメンションをまたがるときのみこのオプションを選択します。

アプリケーションで重複メンバーがサポートされ、「重複のディメンションに接頭辞を付加」が無効化または選択解除(「いいえ」に設定)されている場合、ユーザーは完全修飾メンバー名を指定する必要があります。完全修飾メンバー名のフォーマットは、Essbase のドキュメントを参照してください。

 ノート:

Planning では重複メンバーはサポートされません。

12. 「アプリケーション・オプション」をクリックします。

Dimension Details		Application Options
View ▾  Detach		
Property Name	Value	Select
Enable export to file	Yes	
File Character Set		
Column Delimiter		

13. 「ファイルへのエクスポートを使用可能にする」で「はい」を選択すると、FDMEE がカスタム・ターゲット・アプリケーションのために出力データ・ファイルを作成します。

サーバーの outbox フォルダに、<LOCATION>_<SEQUENCE>.dat という名前形式のファイルが作成されます。たとえば、ロケーションの名前が「Texas」で次のシーケンスが「16」の場合、ファイル名は Texas_15.dat になります。ファイルはワークフロー・プロセスのエクスポートのステップで作成されます。

「ファイルへのエクスポートを使用可能にする」オプションを「いいえ」に設定した場合、実行ウィンドウで「ターゲットにエクスポート」オプションは使用できません。

14. 「ファイルの文字セット」でファイルの文字セットを選択します。

ファイルの文字セットによって、テキストを作成、保管および表示するためにビット組合せを文字にマッピングする方法が決まります。各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。

15. 「列の区切り記号」で、出力ファイルの列を区切るために使用される記号を選択します。

使用可能な列の区切り記号:

- ,
- |
- !
- ;
- :

16. **ダウンロードするファイル名**に、コピーするファイル名を入力します。

17. 「保存」をクリックします。

参照ディメンションの追加

参照ディメンションは、ターゲット・アプリケーションに対して作成し、データ列を割り当てることができます。マッピングおよび参照に使用されます。

参照ディメンションは Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でのみ使用され、ターゲット・アプリケーションのディメンシヨナリティには影響し

ません。また、メンバー・マッピング機能とともに使用して、複数のソース・セグメントやチャートフィールドをクロス参照し、ターゲット値を割り当てることができません。

参照ディメンションを追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
2. 「ターゲット・アプリケーション」サマリー・グリッドで、ターゲット・アプリケーションを選択します。
3. 「ディメンションの詳細」タブを選択します。
4. 「追加」をクリックします。

空白のディメンション名およびデータ表列名のエントリ・フィールドが表示されます。

5. 「ディメンション名」に、参照ディメンション名を入力します。
6. 「データ表列名」で、参照ディメンションの基となるデータ列を選択します。

ノート:

データ表列名の値は、選択したターゲット・ディメンションよりも大きいユーザー定義ディメンションにする必要があります。たとえば、アプリケーションに4つのカスタム・ディメンションがある場合は、「UD5」を選択します。


7. 「OK」をクリックします。

参照ディメンションが、ターゲット・ディメンション・クラス名「参照」で、ディメンション詳細リストに追加されます。参照ディメンションをソース・ディメンションとして使用するには、参照ディメンションをインポート・フォーマットでマッピングします。

アプリケーションのディメンションの詳細の定義

ディメンションの詳細は、アプリケーション・タイプごとに異なります。Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting アプリケーションおよび Oracle Essbase アプリケーションの場合は、必要に応じてディメンションを再分類し、ディメンション・クラスを変更します。


ディメンションの詳細を定義するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
2. 「ターゲット・アプリケーション」サマリー・グリッドで、Essbase または Oracle Hyperion Planning アプリケーションを選択します。
3. 「ディメンションの詳細」タブを選択します。
4. 「ターゲット・ディメンション・クラス」を選択するか、 をクリックして、アプリケーションで定義されていないディメンションごとに「ターゲット・ディメンション・クラス」を選択します。

ディメンション・クラスは、ディメンション・タイプによって定義されるプロパティです。たとえば、期間(Period)ディメンションがある場合、そのディメンション

のクラスも **Period** となります。Essbase アプリケーションの場合は、勘定科目、シナリオおよび期間の各ディメンションに対して適切なディメンション・クラスを指定する必要があります。Public Sector Planning and Budgeting アプリケーションの場合は、従業員、職階、ジョブ・コード、予算アイテムおよび要素の各ディメンションに対してディメンション・クラスを指定する必要があります。

5. **オプション: 「メタデータのリフレッシュ」** をクリックし、ターゲット・アプリケーションからアプリケーション・メタデータを同期します。
6. **「データ表列名」** で、ディメンション値が格納されるステージング表(TDATASEG)の列の表列名を指定します。

 をクリックし、データ表列名を検索して選択します。


7. **「シーケンス」** に、マップが処理される順序を指定します。

たとえば、「勘定科目」が **1**、「製品」が **2**、「エンティティ」が **3** に設定されているとき、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、最初に「勘定科目」ディメンションのマッピングを処理し、次に「製品」と「エンティティ」を順に処理します。

8. **「保存」** をクリックします。

ターゲット・アプリケーションが **FDMEE** で使用できるようになります。

ヒント:

ディメンションの詳細を編集するには、ターゲット・アプリケーションを選択した上で、必要に応じてアプリケーションまたはディメンションの詳細を編集します。「ターゲット・アプリケーション」ページでアプリケーションをフィルタ処理するには、列見出しの上にフィルタ行が表示されていることを確認してください。(フィルタ行を切り替えるには、 をクリックします。)次に、フィルタに使用するテキストを入力します。

Essbase および Planning のアプリケーション・オプションの定義

Oracle Essbase および Oracle Hyperion Planning アプリケーションのアプリケーションの詳細およびディメンションの詳細を定義します。

Essbase および Planning アプリケーションに対して、アプリケーションの詳細およびディメンションの詳細を定義した後で、アプリケーション・オプションを定義します。

ノート:

データを Planning にロードするユーザーには、Essbase 管理者または Planning 管理者権限がプロビジョニングされている必要があります。

Essbase または Planning アプリケーションにアプリケーション・オプションを定義するには:

1. **「設定」** タブの **「登録」** で、**「ターゲット・アプリケーション」** を選択します。

2. 「ターゲット・アプリケーション」 サマリー・グリッドで、Planning ターゲット・アプリケーションまたは Essbase ターゲット・アプリケーションを選択します。
3. 「アプリケーション詳細」 でアプリケーションの詳細およびディメンションの詳細を定義した後、「アプリケーション・オプション」 タブを選択します。
4. 必要に応じてアプリケーション・オプションを完了します。
5. 「保存」 をクリックします。

表 1-12 Essbase および Planning アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
データ・ファイルのパーズ	Essbase へのファイルベースのデータ・ロードが正常に終了したときに、データ・ファイルをアプリケーションの outbox ディレクトリから削除するかどうかを指定します。「はい」を選択するとファイルが削除され、「いいえ」を選択するとファイルが保存されます。
重複メンバーのディメンションに接頭辞を付加	このオプションが「はい」に設定されている場合、メンバー名にディメンション名が接頭辞として付けられます。ロードされるメンバー名のフォーマットは、[Dimension Name]@[Dimension Member]です。このオプションを有効にすると、接頭辞付きのディメンション名がアプリケーションのすべてのディメンションに適用されます。ターゲットのディメンションに重複メンバーがある場合は、このオプションを選択できません。つまり、重複メンバーがディメンションをまたがるときだけこのオプションを選択します。 アプリケーションで重複メンバーがサポートされ、「接頭辞」が「いいえ」に設定されている場合、ユーザーは完全修飾メンバー名を指定する必要があります。完全修飾メンバー名のフォーマットは、Essbase のドキュメントを参照してください。

 ノート:

Planning では重複メンバーはサポートされません。

表 1-12 (続き) Essbase および Planning アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
アプリケーション・アクセスのグローバル・ユーザー	<p>Essbase および Planning アプリケーションへのシングル・サインオン・ログオンを上書きするオプション。</p> <p>ユーザー名がこのオプションに指定されている場合、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のサインオン・ユーザー名ではなく、このユーザー名を使用して Essbase/Planning アプリケーションにアクセスします。</p> <p>Planning アプリケーションへの管理者アクセス、または Essbase アプリケーションへのアプリケーション/データベース・マネージャ・アクセス(あるいはその両方)ができるユーザーのユーザー名を指定します。</p>
バッチ・サイズ	<p>ファイルにデータを書き込むために使用されるバッチ・サイズを指定します。デフォルト・サイズは 10,000 です。</p>
ロード方法	<p>TDATESEG ステージング表から Essbase にデータをロードする方法を指定します。</p> <p>使用可能な方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> • ファイル — データは、アプリケーションの outbox ディレクトリ(「システム設定」で定義済)のデータ・ファイルに書き込まれます。ファイル名のフォーマットは、<APPLICATION NAME>_<PROCESS_ID>.dat です。これが Essbase にロードされます。 • SQL — データをロードするための SQL 方法を使用します。SQL ロード方法はデフォルトです。 <p>SQL 方法では、アプリケーション・ファイル・タイプ ESSSQL が作成されます。</p>
エンティティ 計算方法の確認	<p>確認エンティティの計算方法を指定します。</p> <p>使用可能な方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 動的 — 確認エンティティ・データは、取得時にデータに基づいて計算されます。「動的」に設定すると、デフォルトの Essbase 計算が実行されます。 • 計算スクリプト — 確認エンティティ・データは定義済の計算スクリプトに基づいて計算されます。
メンバーの説明のソース言語	<p>メンバーの説明のデフォルト言語を選択します。</p> <p>言語の処理方法を理解するには、言語の処理方法を参照してください。</p>

表 1-12 (続き) Essbase および Planning アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
ドリル領域	<p>「はい」を選択すると、ドリル領域が作成されます。ドリル可能領域は、ドリル・スルー機能を使用して作成されます。</p> <div data-bbox="1084 462 1380 730" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p> ノート:</p> <p>FDMEE は、人事データに対するドリル・スルーはサポートしていません。</p> </div> <p>FDMEE からデータをロードすると、ドリル領域が Planning データにロードされます。</p> <p>FDMEE はシナリオごとにドリル領域を作成します。任意のキューブの場合(Planning プラン・タイプまたは Planning データベース、ドリル領域の名前はシナリオ・メンバーの FDMEE_<名>です)。ドリル領域を作成する場合、FDMEE はディメンションがドリルに対して有効かどうかを確認します。</p> <p>データ・ロードで選択された有効なディメンションのメンバーは、ドリル領域フィルタに含まれます。ディメンションが有効になっていない場合、シナリオ、バージョン、年および期間のディメンションがデフォルトで有効になります。追加のディメンションを有効にでき、後続のデータ・ロードでは新規に有効化されたディメンションのメンバーが考慮されます。ドリルの作成に使用されたドリル領域に以前に含まれていたディメンションを無効化する場合、それらのディメンションのメンバーは後続のデータ・ロード時に削除されません。必要に応じて、古いメンバーを手動で削除できます。</p>
日付フォーマット	<p>ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、MM/DD/YY という形式を使用して日付を入力します。</p>
自動増分のライン・アイテムのデータ・ディメンション	<p>Planning で指定したデータ・ディメンションに一致するデータ・ディメンションを選択します</p> <p>LINEITEM フラグを使用した、増分データのロードに使用されます。LINEITEM フラグを使用した EPM アプリケーションへの増分データのロードを参照してください。</p>

表 1-12 (続き) Essbase および Planning アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
自動増分のライン・アイテムのドライバ・ディメンション	<p>Planning で指定したドライバ・ディメンションに一致するドライバ・ディメンションを選択します。</p> <p>LINEITEM フラグを使用した、増分データのロードに使用されます。LINEITEM フラグを使用した EPM アプリケーションへの増分データのロードを参照してください。</p>
メンバー名にはカンマを使用できません	<p>カンマを含むディメンション・メンバー名を Planning にエクスポートするには、「はい」を選択します。そうでない場合は、「いいえ」を選択します。</p>
管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にする	<p>管理ユーザーがデータをロードする際に、データ検証を有効にします。この場合、データのロード中にデータ入力フォーム内のすべてのデータ検証が実施されます。強化された検証のために、データ・ロードのパフォーマンスは低下します。</p> <p>このオプションが「はい」に設定されると、管理者および非管理者のデータ・ロードに対して同じ方法でデータが検証されます。検証には、セキュリティ・チェック、交差検証、読取り専用セル、動的計算セルなどが含まれます。また、拒否または無視された行の詳細なエラー・リストを使用でき、追加の Planning 権限は必要ありません。ただし、管理者の場合であってもパフォーマンスが低下することがあります。</p> <p>このオプションが「いいえ」(デフォルト値)に設定されていると、管理者によるデータ・ロードはアウトライン・ロード・ユーティリティ(OLU)を使用して実行されます。この場合、パフォーマンスは向上しますが、なんらかの理由で無視された行の詳細なエラー・レポートは取得できません。</p>

 **ノート:**

「要員」で増分データ・ロードを使用している場合、「**管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にする**」を「いいえ」に設定する必要があります。

表 1-12 (続き) Essbase および Planning アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
Smart View からのビューのドリル	<p>Oracle Smart View for Office のドリルスルー・レポートでカスタマイズされた属性ディメンション・メンバー名を表示するときに、ワークベンチから列のカスタム・ビューを指定します。</p> <p>カスタム・ビューは、データ統合のワークベンチ・オプションで作成および定義します。カスタム・ビューが定義され、Smart View からのビューのドリル・フィールドで指定されている場合、Smart View でドリルスルー・セルをクリックして「新規シートとして開く」を選択すると、ワークベンチで定義されているビューに基づいてドリルスルー・レポートが開きます。</p> <p>アプリケーション・オプション・ページでビューが定義されていない場合は、デフォルト・ビューが使用されます。つまり、属性ディメンションではカスタマイズされたメンバー名が Smart View に表示されません。</p>

Essbase での重複メンバーの使用

次の表は、Oracle Essbase アプリケーションで重複メンバーが参照される方法の詳細を示しています

表 1-13 Essbase アプリケーションで重複メンバーが参照される方法

シナリオ	修飾名の構文	例
世代 2 に重複メンバー名が存在する	[DimensionMember]. [DuplicateMember]	[Year].[Jan]
アウトラインに重複メンバー名が存在するが、ディメンション内では一意である	[DimensionMember]@[DuplicateMember]	[Year]@[Jan]
重複メンバー名は一意的の親を持つ	[ParentMember]. [DuplicateMember]	[East].[New York]
世代 3 に重複メンバー名が存在する	[DimensionMember]. [ParentMember]. [DuplicateMember]	[Products].[Personal Electronics]. [Televisions]
重複メンバー名が名前付き世代またはレベルに存在し、メンバーはその世代またはレベルでは一意である	DimensionMember@[GenLevelName] [DuplicateMember]	[2006]@[Gen1] [Jan]
シナリオによっては、区別する祖先メソッドがショートカットとして使用されます。	DifferentiatingAncestor]. [Ancestors...].[DuplicateMember]	[2006].[Qtr1].[Jan]

計算スクリプトの使用

データを Oracle Essbase または Oracle Hyperion Planning にロードすると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でカスタムの計算スクリプトを実行できます。計算スクリプトとは一連の計算コマンド、等式および式で


あり、これらを使用すると、データベース・アウトラインによる定義以外の計算を定義できます。計算スクリプトは **Essbase** および **Planning** で定義されます。

カスタム計算スクリプトは、ターゲット・アプリケーションと確認エンティティ・グループでサポートされます。ターゲット・アプリケーションの場合:

- スクリプトをパラメータ化して、各スクリプトにパラメータを指定できます。
- データ・ロードの前後に実行するようにスクリプトを割り当てます。
- スクリプトには適用可能スコープを割り当てます。「アプリケーション」レベル、「カテゴリ」レベル、「ロケーション」レベルおよび「データ・ルール」レベルにスコープを設定できます。最低レベルに割り当てられたスクリプトは、上位レベルのスクリプトよりも優先されます。データ・ルールが最低レベルで、アプリケーションが最高レベルです。1つのレベルのスクリプトだけが実行されます。

計算スクリプトを追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
2. 「計算スクリプト」タブで計算スクリプトを選択します。

3.  をクリックして、「パラメータ」ウィンドウを表示します。

4. Planning アプリケーションの場合のみ、計算スクリプトに定義されたパラメータを取得するための「プラン・タイプ」を選択します。

5. 「追加」をクリックして、スクリプト・パラメータを追加します。

6. スクリプトに定義されたパラメータを選択します。

また、「参照」をクリックしてパラメータを選択し、「OK」をクリックすることもできます。パラメータ名を手動で入力することもできます。


7. 定義済の値を「スクリプト値」で選択するか、「カスタム」を選択して独自のスクリプト値を指定します。

8. オプション: 「スクリプト値」フィールドで「カスタム」を選択した場合は、「カスタム」に値を入力します。

たとえば、**0001** と入力します。

9. 「OK」をクリックします。

10. 「スクリプト名」にスクリプトの名前を指定します。

11.  をクリックして、計算スクリプトのパラメータを追加します。

[計算スクリプトの使用](#)を参照してください。

12. 「スクリプト・スコープ」で適用可能スコープを選択します。

最低レベルに割り当てられたスクリプトが上位レベルのスクリプトよりも優先されることに注意してください。

使用可能なスコープ(降順):

- アプリケーション(デフォルトのスコープ)
- カテゴリ
- ロケーション
- データ・ルール

13. 「**スコープ・エンティティ**」で、スクリプト・スコープに関連付ける特定の値を選択します。
 たとえば、スクリプト・スコープが「ロケーション」の場合は、アプリケーションに関連付けられているロケーションを選択します。
 「スコープ・エンティティ」は「アプリケーション」スクリプト・スコープに対して無効です。
14. 「**イベント**」で、計算スクリプトを実行するイベントを選択します。
 使用可能なイベント：
 - データ・ロード前
 - データ・ロード後
 - 確認前
 - 確認後
15. 「**シーケンス**」に、スクリプトが実行される順序を指定します。
 複数のスクリプトを1つのイベントで実行できるため、このシーケンス値によって各スクリプトを実行する順番を指定します。任意の数を入力できますが、数がイベント内で一意である必要があります。
16. 「**保存**」をクリックします。

計算スクリプトのパラメータの追加


計算スクリプト内の値リストを特定して定義することで、スクリプトをパラメータ化できます。パラメータ値を値リストに対して事前に定義できます。たとえば、「POV 期間」、「POV ロケーション」、「POV カテゴリ」、「グループ・エンティティの確認」およびすべてのデータ・ロード・エンティティが対象になります。

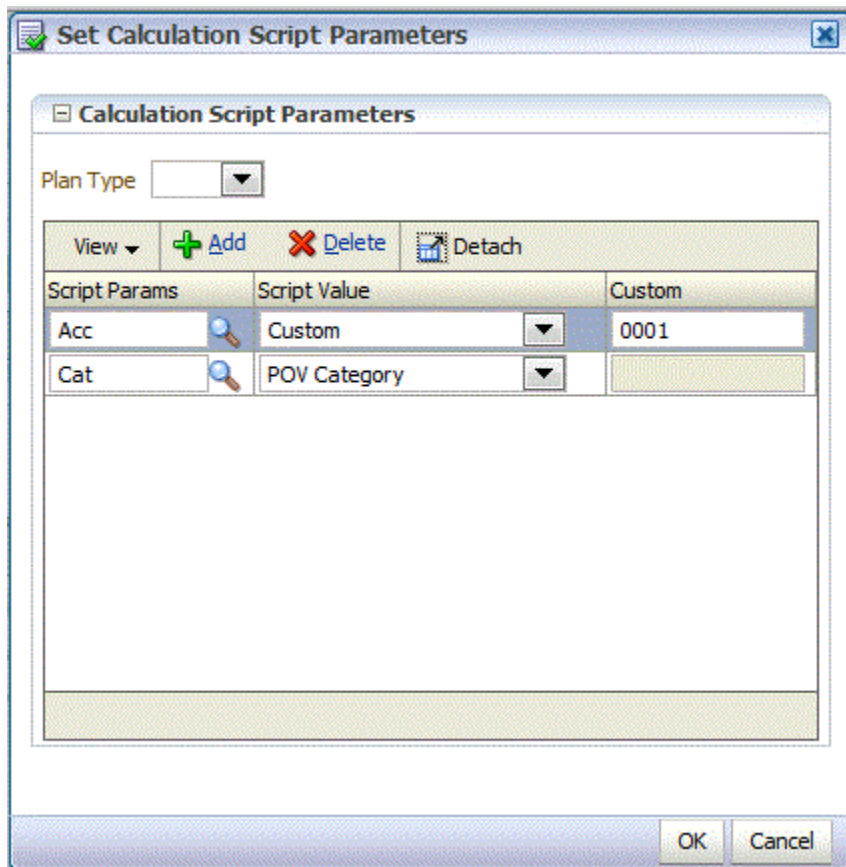
また、カスタム・パラメータを指定することもできます。その場合は、Oracle Essbase フィルタ構文を入力できます。

さらに、「ロケーション」表の「統合オプション 1」～「統合オプション 4」フィールドに保管されている値を参照して、計算ロジックを推進します。「ロケーション・オプション 1」、「ロケーション・オプション 2」、「ロケーション・オプション 3」および「ロケーション・オプション 4」の値を参照できます。この場合、パラメータとして渡されるのと同じ文字列が、「ロケーション」表の「統合オプション」フィールドに保管される必要があります。

同じく、パラメータについてデータ・ルールの4つのオプション・フィールドを参照することもできます。これらのフィールドは、「データ・ルール・オプション 1」、「データ・ルール・オプション 2」、「データ・ルール・オプション 3」および「データ・ルール・オプション 4」です。データ・ルールに追加される列は、RULE_OPTION1、RULE_OPTION2、RULE_OPTION3 および RULE_OPTION4 と呼ばれます。

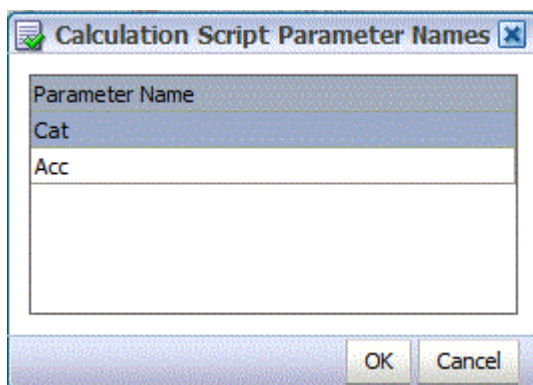
計算スクリプトのパラメータを追加するには:

1. 「**計算スクリプト**」タブで、計算スクリプトを追加または選択します。
2.  をクリックして、計算スクリプトのパラメータを追加します。
3. **Planning アプリケーションの場合のみ**: 勘定ディメンションおよびエンティティ・ディメンションの「**プラン・タイプ**」を選択します。




4. 「スクリプト・パラメータ」で、スクリプトに対して定義されているパラメータを選択します。

「参照」アイコンをクリックして、パラメータを選択し、「OK」をクリックできます。



5. 「スクリプト値」で、計算スクリプトを適用する値を選択し、「OK」をクリックします。

カスタム・スクリプト・パラメータを追加するには:

1. 「計算スクリプト」タブで、計算スクリプトを追加または選択します。
2.  をクリックして、計算スクリプトのパラメータを追加します。

3. 「**スクリプト・パラメータ**」で、スクリプトに対して定義されているパラメータを選択します。
「**参照**」アイコンをクリックして、パラメータを選択し、「**OK**」をクリックできます。
4. 「**スクリプト値**」で、「**カスタム**」を選択し、「**OK**」をクリックします。
5. 「**カスタム**」に、カスタム値のフィルタ構文を入力します。
たとえば、**0001**と入力します。

Profitability and Cost Management アプリケーションの登録

Oracle Hyperion Profitability and Cost Management アプリケーションを登録します。

Profitability and Cost Management は Oracle Essbase アプリケーション定義と同様に登録されます。データ・ストレージおよび計算にも、Essbase を使用します。

Profitability and Cost Management アプリケーションを登録するには:

1. 「**設定**」タブの「**登録**」で、「**ターゲット・アプリケーション**」を選択します。
2. 「**ターゲット・アプリケーション**」サマリー・グリッドで、「**追加**」をクリックします。
3. 「**追加**」ドロップダウンから「**ローカル**」を選択します。
4. 「**アプリケーションの選択**」の「**タイプ**」で、「**Essbase**」を選択します。
5. 「**アプリケーション名**」から、Profitability and Cost Management アプリケーションを選択し、「**OK**」をクリックします。
6. 「**接頭辞**」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
7. 「**OK**」をクリックします。

Profitability and Cost Management アプリケーション・オプションの定義

Oracle Hyperion Profitability and Cost Management アプリケーションを登録した後、アプリケーション・オプションを定義できます。

Profitability and Cost Management アプリケーションのオプションを定義するには:

1. 「**設定**」タブの「**登録**」で、「**ターゲット・アプリケーション**」を選択します。
2. 「**ターゲット・アプリケーション**」サマリー・グリッドで、「**Profitability and Cost Management**」ターゲット・アプリケーションを選択します。
3. 必要に応じて、次の表からアプリケーション・オプションを選択します。

Table 1-14 Profitability and Cost Management アプリケーション・オプションおよび説明

プロパティ	値
ドリル領域	<p>「はい」を選択すると、ドリル領域が作成されます。ドリル可能領域は、Profitability and Cost Management のデータに対してドリル・スルー機能を使用するために作成されます。</p> <div data-bbox="1120 493 1453 871" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; background-color: #E6F2FF;"> <p> Note:</p> <p>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、人事データへのドリル・スルーをサポートしていません。</p> </div> <p>ドリル可能な領域の URL を使用すると、Oracle Essbase、Oracle Smart View for Office および Oracle Hyperion Financial Reporting で適切なランディング・ページにドリルできます。</p> <p>FDMEE からデータをロードすると、ドリル領域が Oracle Hyperion Planning データにロードされます。</p> <p>ドリル領域には、Planning のエンティティ/勘定科目/シナリオ/年/期間、FDMEE に戻るための URL、および領域名が含まれます。Essbase の場合、ドリル領域に使用するディメンションを選択します。使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。</p>
メンバーの説明のソース言語	<p>メンバーの説明のデフォルト言語を選択します。言語の処理方法を理解するには、言語の処理方法を参照してください。</p>
バッチ・サイズ	<p>ファイルにデータを書き込むために使用されるバッチ・サイズを指定します。デフォルト・サイズは 10,000 です。</p>

Table 1-14 (Cont.) Profitability and Cost Management アプリケーション・オプションおよび説明

プロパティ	値
エンティティ 計算方法の確認	<p>確認エンティティの計算方法を指定します。</p> <p>使用可能な方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> 動的 — 確認エンティティ・データは、取得時にデータに基づいて計算されます。 "dynamic"はデフォルトの確認エンティティ計算方法です。 計算スクリプト — 確認エンティティ・データは定義済の計算スクリプトに基づいて計算されます。 <p>計算方法を「動的」に設定すると、Essbaseでの連結中にデフォルト計算が実行されます。計算方法を「計算スクリプト」に設定すると、「エンティティの確認」画面で指定したスクリプト名を使用してターゲット・システムで連結が実行されます。</p>
重複メンバーのディメンションに接頭辞を付加	<p>「はい」に設定すると、メンバー名にディメンション名が接頭辞として付けられます。ロードされるメンバー名のフォーマットは、[Dimension Name]@[Dimension Member]です。このオプションを有効にすると、接頭辞付きのディメンション名がアプリケーションのすべてのディメンションに適用されます。ターゲットのディメンションに重複メンバーがある場合は、このオプションを選択できません。つまり、重複メンバーがディメンションをまたがるときだけこのオプションを選択します。</p> <p>アプリケーションで重複メンバーがサポートされ、「接頭辞」が「いいえ」に設定される場合、ユーザーが完全修飾メンバー名を指定する必要があります。完全修飾メンバー名のフォーマットは、Essbaseのドキュメントを参照してください。</p>



Note:

Planning では重複メンバーはサポートされません。

Table 1-14 (Cont.) Profitability and Cost Management アプリケーション・オプションおよび説明

プロパティ	値
ロード方法	<p>TDATESEG ステージング表から Essbase にデータをロードする方法を指定します。</p> <p>使用可能な方法は次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> ファイル — データは、アプリケーションの outbox ディレクトリ(「システム設定」で定義済)のデータ・ファイルに書き込まれます。ファイル名のフォーマットは、<APPLICATION NAME>_<PROCESS_ID>.dat です。これが Essbase にロードされます。 ファイル・ロード方法では、アプリケーション・ファイル・タイプ ESSFILE が作成されます。 SQL — データをロードするための SQL 方法を使用します。SQL ロード方法がデフォルトのロード方法です。 SQL 方法では、アプリケーション・ファイル・タイプ ESSSQL が作成されます。
データ・ファイルのパージ	<p>Essbase へのファイルベースのデータ・ロードが正常に終了したときに、データ・ファイルをアプリケーションの outbox ディレクトリから削除するかどうかを指定します。「はい」を選択するとファイルが削除され、「いいえ」を選択するとファイルが保存されます。</p>

Financial Management のアプリケーション・オプションの定義

Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションのアプリケーションの詳細およびディメンションの詳細を定義します。

Financial Management アプリケーションに対して、アプリケーションの詳細およびディメンションの詳細を定義した後で、アプリケーション・オプションを定義します。

Financial Management のアプリケーション・オプションを定義するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
2. 「ターゲット・アプリケーション」サマリー・グリッドで、「Financial Management」ターゲット・アプリケーションを選択します。
3. 「アプリケーション詳細」でアプリケーションの詳細を定義した後、「アプリケーション・オプション」タブを選択します。
4. 必要に応じてアプリケーション・オプションを完了します。

Financial Management アプリケーションのオプションは次のとおりです。

5. 「保存」をクリックします。

表 1-15 Financial Management アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
交差の確認	「データ・ロード・ワークベンチ」の「検証」ステップで、Financial Management データの交差(勘定科目やエンティティなど)を確認できるようになります。デフォルト設定は「はい」です。
ライン・アイテムの詳細のロード	Financial Management へのライン・アイテムの詳細のロードを使用可能にします。 使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。
ライン・アイテムの詳細のロード・タイプ	セルに対して、ライン・アイテムの詳細とサマリーのデータのどちらをロードするかを指定します。デフォルトは「詳細のロード」で、選択したセルの詳細が表示されます。(勘定科目にライン・アイテムを含めることができるかどうかを指定します。)この設定が「サマリーのロード」の場合、セルにはサマリー情報が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> サマリーのロード 詳細のロード
データ・ロードを使用可能にする	データ・ロード・プロセスを使用可能にします。 使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。
処理のロード	データをロードするためのプロセスを選択します。ファイルをアプリケーションにロードする前に、無効なレコードがないかファイルをスキャンする場合は、「スキャン」を選択します。ファイルのみをロードする場合は、「ロード」を選択します。 <ul style="list-style-type: none"> スキャン — データを検証し、無効なレコードを「ログ」にリストします。このオプションが選択されると、データはターゲット・アプリケーションにロードされません。 ロード — データを検証してターゲット・アプリケーションにロードします。

表 1-15 (続き) Financial Management アプリケーションのオプションと説明


オプション	説明
ロード方法	<p>データ・ファイルをアプリケーションにロードするための方法を選択します。使用可能なロード方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> 置換 - アプリケーション内のデータをロード・ファイル内のデータで置換します。「置換」オプションでは、データ・ファイル内のシナリオ、年、期間、エンティティおよび値の一意的な組合せごとに、アプリケーションのすべての勘定科目値がクリアされ、データ・ファイルから値がロードされます。 <div data-bbox="933 703 1372 1102" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p> ノート:</p> <p>特にデータが非常に大きいときやファイルに出資比率データが含まれている場合は、データ・ファイルをロードするために、「置換」モードを使用していくつかの小さなファイルを作成できます。ファイルが大きすぎる場合は、ファイルをロードしようとすると、エラー・メッセージが表示されます。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> マージ - アプリケーション内のデータをロード・ファイル内のデータで上書きします。データ・ファイルとアプリケーションに視点がある場合は、アプリケーションにある各視点のデータが、データ・ファイルの値で上書きされます。データ・ロード・ファイルによって変更されていないアプリケーションのデータはアプリケーションに残ります。「マージ」オプションと一緒に「ファイル内の累計」オプションを選択すると、データ・ファイル内の同じ視点の値がすべて加算され、この値でアプリケーション内のデータが上書きされます。視点があるデータ・ファイルのみにある(アプリケーションにはない)場合は、データ・ファイルの各視点の値がアプリケーションにロードされます。 累計 - 「累計」オプションは、アプリケーションのデータに、ロード・ファイルのデータを累計するときに選択します。データ・ファイルの一意的な視点ごとに、ロード・ファイルの値がアプリケーションの値に加算されます。

表 1-15 (続き) Financial Management アプリケーションのオプションと説明


オプション	説明
	<div style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; background-color: #E6F2FF;"> <p> ノート:</p> <p>システム勘定科目のデータは累積されません。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <p>セキュリティを基準にして置換 - アクセス権のあるメンバーのみがロードされる置換モードでデータ・ロードを実行します。このオプションにより、アクセス権のない勘定科目がある場合も、置換モードでデータ・ロードを実行できます。サブキューブの期間に対して「クリア」操作を行うと、アクセス権のあるセルのみがクリアされます。データ、セル・テキストおよびライン・アイテムの詳細はクリアされますが、セルの添付はクリアされません。</p>
ファイル内の累計	<p>「ファイル内の累計」オプションは、「マージ」オプションおよび「置換」オプションと一緒に使用できます。データ・ロード・ファイルに同じ視点の複数のデータ行が含まれる場合、このオプションは、最初にファイルのデータを累計し、選択したロード・オプションに基づいて、アプリケーションに合計をロードします。データ・ファイルの一意の視点ごとに、ロード・ファイルの値がアプリケーションの値に加算されます。たとえば、ファイル内に 10、20 および 30 がある場合、60 がロードされます。使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。</p>
所有権あり	<p>ロードしているファイルに所有権データが含まれる場合は、このオプションを指定する必要があります。データ・ファイルに出資比率が含まれている場合、またはデータを共有している場合にこのオプションを選択しないと、ファイルをロードするときにエラーが発生します。使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。</p>
データの保護を使用可能にする	<p>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で、データ・ロード中に上書きされないように、指定された保護値に基づいてターゲットシステム・データを保護できるようにします。このオプションは、FDMEE 以外の方法を使用してターゲット・システムにデータを入力する場合に使用します。</p> <p>使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。</p>

表 1-15 (続き) Financial Management アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
保護 - セル・テキストを含める	<p>「データの保護を使用可能にする」が使用可能な場合(データ・ロード中に上書きされないようにターゲットシステム・データを保護します)、テキストをデータ・セルにロードするかどうかを指定します。</p> <p>データ保護の一部としてセル・テキストを含める場合は、「はい」を選択します。</p> <p>データ保護の一部としてセル・テキストを除外する場合は、「いいえ」を選択します。</p>
保護値	<p>「データの保護を使用可能にする」を使用可能にした場合、ロード・ステップ中に保護する値を指定します。このフィールドの値は、ディメンション間で Financial Management 内のディメンション値である必要があります。</p> <p>たとえば、「Protect This」と入力します。</p>
保護演算子	<p>演算子(=または<>)を選択します。「データの保護を使用可能にする」オプションが使用可能な場合にのみ使用されます。このオプションにより、保護するデータが「保護値」と等しい(=)または等しくない(<>)ことを示すことができます。</p>
仕訳のロードを使用可能にする	<p>仕訳ファイルのロードを使用可能にします。</p> <p>作業中、却下済、提出済、承認済および転記済の仕訳と、標準および繰返しの仕訳テンプレートをロードできます。連結プロセスによって作成されるため、自動連結仕訳はロードできません。</p> <p>このオプションのデフォルト設定は「いいえ」です。</p> <p>この設定は、「ロケーション」画面でロケーションに対して設定されたデータ値についても使用できます。いつものようにしてデータを仕訳として Financial Management にロードするかを決定します。</p> <p>使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。</p>

表 1-15 (続き) Financial Management アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
ドリル領域	<p>「はい」を選択すると、ドリル領域が作成されます。</p> <p>ドリル可能領域定義は、一般会計ソース・システムからロードされたデータを定義し、FDMEE にドリル可能なデータを指定するために使用されます。</p> <p>データ・グリッドおよびデータ・フォームでは、領域をロードした後、ドリル可能なセルは、セルの左上隅の薄青のアイコンによって示されます。セルのコンテキスト・メニューに定義済の表示名が表示され、続いて指定された URL が開かれます。</p> <p>領域定義ロード・ファイルは、次の情報で構成されています：</p> <ul style="list-style-type: none"> シナリオ、年、期間、エンティティ、勘定科目 表示名(セル・コンテキスト・メニュー)と URL(ドリル先)
セル・テキストのロードを使用可能にする	<p>テキストおよびドキュメントのデータ・セルへのロードを使用可能にします。FDMEE は、ドキュメントを EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialDataQuality/data ディレクトリにアーカイブします。</p> <p>使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。</p>

 ノート:

FDMEE では、複数のセル・テキストを **Financial Management** の交差にロードしません。追加モードを使用したロードが実行され、すでにセル・テキストを含む交差に新しいセルが追加された場合、追加されるのではなく、古いセル・テキストが新しいセル・テキストで置換されます。

表 1-15 (続き) Financial Management アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
連結を使用可能にする	<p>データ・ロード内の連結を使用可能にします。連結は、依存エンティティからデータを収集し、親エンティティにデータを集約するプロセスです。連結を開始すると、指定したシナリオ、年、期間、エンティティおよび値に対して連結プロセスが実行されます。また、同じ年のそれ以前の期間と子孫に対する連結が以前に実行されていない場合は、そのプロセスの一部として、その期間と子孫すべてに対する連結が実行されます。連結プロセスでは、影響を受けた各エンティティおよび値に対して、すべての計算ルール関数が実行され、必要に応じて、子エンティティから親エンティティに変換するために換算プロセスが実行されます。</p> <p>使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。</p>

表 1-15 (続き) Financial Management アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
連結タイプ	<p>データ・ロードの連結タイプを選択します。</p> <p>使用可能な連結タイプ:</p> <ul style="list-style-type: none"> <p>影響 - 連結(影響ありの連結)オプションは、計算ステータスが CN または CN ND の親エンティティに使用できます。親エンティティに対してこのオプションを選択すると、現在の年の現在の期間または以前の期間に算出ステータスが CN、CN ND、CH、TR、TR ND であった選択済の親の連結パス内にある依存エンティティに対して、計算(計算、換算、連結)が実行されます。連結が必要なエンティティのみが更新されるため、連結が最も効率的なオプションです。</p> <p>現在の期間や同じ年度内のそれまでの期間で、ステータスが NODATA のプロセス単位がすべて無視されます。現在の期間で、ステータスが OK または OK SC のプロセス単位が、再計算、再換算または再連結されることはありません。選択した親の過去の期間に、ステータスが CN か CN ND のプロセス単位がある場合は、本年度内で、親に影響のあった最初の期間から現在の期間までのすべてのデータに対して連結が実行されます。</p> <p>「データのあるものすべて」オプションは、ステータスとは無関係にあらゆる親エンティティに対して使用できます。親エンティティに対してこのオプションを選択すると、現在の期間またはそれ以前の期間で、(ステータスには関係なく)データが含まれている選択した親の連結パス内のすべての依存エンティティが連結されます。また、依存エンティティに対しても計算ルールが実行されます。ゼロが含まれるか、データのないエンティティに対しては連結は実行されません。このオプションは、メタデータの変更にシステム・ステータスを OK SC から OK に更新するのに便利です。</p> <p>現在の期間や同じ年度内のそれまでの期間で、ステータスが NODATA のプロセス単位がすべて無視されます。現在の期間でステータスが OK または OK SC の連結オプション単位が、再計算、再換算および再連結されます。選択した親の過去の期間に、ステータスが CN か CN ND のプロセス単位がある場合は、本年度内で、親に影響のあった最初の期間から現在の期間までのすべてのデータに対して連結が実行されます。</p> <p>すべて - 「すべてを連結」オプションは、ステータスには関係なく、あらゆる親エンティティに対して使用できます。親エン</p>

表 1-15 (続き) Financial Management アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
	<p>ティティに対してこのオプションを選択すると、ステータスには関係なく、選択した親の連結パス内のすべてのプロセス単位に対して計算が実行されます。データの有無にかかわらず、すべてのエンティティが連結されます。このオプションは、以前の期間からの更新が必要な場合や、データのないエンティティを割当てを使用してロードする必要がある場合に便利です。データのないエンティティが除外されず、連結パフォーマンスに重大な影響を与える可能性があるため、このオプションは慎重に使用する必要があります。</p> <p>現在の期間で、ステータスが NODATA のプロセス単位が、計算、換算および連結されます。現在の期間で、ステータスが OK または OK SC のプロセス単位が、再計算、換算および再連結されます。選択した親の過去の期間に、ステータスが CN か CN ND のプロセス単位がある場合は、本年度内で、親に影響のあった最初の期間から現在の期間までのすべてのデータに対して連結が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> エンティティ — 各エンティティの親に対するコントリビューションを計算し、すべてのコントリビューションを合計して、連結した数に達するようにします。 エンティティのみを強制 — 選択したコントリビューション値すべてについて計算を強制的に実行し、連結した数値に達するようにします。
計算の強制を使用可能にする	<p>連結の実行前のデフォルト計算呼出しの実行を使用可能にします。</p> <p>使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。</p>
換算の強制を使用可能にする	<p>選択したすべてのセルのデータの強制的な換算を使用可能にします。</p> <p>使用可能にする場合は「はい」を選択し、使用不可にする場合は「いいえ」を選択します。</p>
換算レベル	<p>データのロード時の行および列の換算レベル(換算に含めるレベル)を指定します。使用可能なレベル:</p> <ul style="list-style-type: none"> <Entity Curr Adjs> <Entity Curr Total> <Entity Currency> <Parent Curr Adjs> <Parent Curr Total> <Parent Currency> (デフォルト)
複数ロードのゼロのロードを使用可能にする	<p>「はい」を選択すると、複数期間ロード中に0値がロードされます。</p>

表 1-15 (続き) Financial Management アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
仕訳ステータス	<p>特定のステータスの仕訳をロードするには、そのステータスを選択します。仕訳ステータスは、仕訳の現在の状態を示します。</p> <p>使用可能な仕訳ステータス:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1 — 作業中: 仕訳が作成されました。保存はされていますが、完了していない場合があります。たとえば、ラベルや単一エンティティを割り当てる必要がある可能性があります。 • 2 — 送信済: 仕訳が承認のために送信されました。 • 3 — 承認済: 仕訳の転記が承認されました。 • 4 — 転記済: 仕訳の調整がデータベースに転記されました(デフォルト)。 • 5 — 仕訳が却下されたか、転記が戻されています。
仕訳デフォルト値	<p>仕訳のデフォルト値を指定します。このオプションのデフォルト設定は<Entity Curr Adjs>です。</p> <p>使用可能な値は次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Contribution Adjs] • [Parent Adjs] • <Entity Curr Adjs> • <Parent Curr Adjs>
エンティティごとの JV ID が使用可能な仕訳	<p>ロードされているエンティティに仕訳 ID (仕訳番号)を割り当てます。</p> <p>「はい」を選択すると、POV の各エンティティに 1 つの仕訳 ID が割り当てられます。「いいえ」を選択すると、POV のすべてのデータに 1 つの仕訳 ID が割り当てられます。仕訳をロードする場合にのみ、このオプションが使用されます。</p> <p>デフォルト設定は「はい」です。</p> <p>このオプションは、データとしてインポートされる FDMEE データのみに適用されます。仕訳インタフェースを介してインポートされるデータには適用されません。FDMEE にインポートされる通常のデータは、Financial Management に仕訳としてロードできます。また、Financial Management では、すべての仕訳が JV ID を持つ必要があるため、このオプションにより、FDMEE が JV ID の作成方法を決定できます。</p>

表 1-15 (続き) Financial Management アプリケーションのオプションと説明

オプション	説明
仕訳の調整属性	仕訳サブセクションで使用される仕訳の調整属性を選択します。 使用可能な属性は次のとおりです: <ul style="list-style-type: none"> • B—貸借一致 • U—貸借不一致 • E—エンティティで貸借一致 このオプションが使用されるのは、仕訳を Financial Management にロードする場合のみです。デフォルト設定は「U-貸借不一致」です。
開始レートの通貨レート勘定科目	Financial Management ターゲット・アプリケーションの開始レートの通貨レート勘定科目を指定します。
終了レートの通貨レート勘定科目	Financial Management ターゲット・アプリケーションの終了レートの通貨レート勘定科目を指定します。
平均レートの通貨レート勘定科目	Financial Management ターゲット・アプリケーションの平均レートの通貨レート勘定科目を指定します。
メンバーの説明のソース言語	メンバーがロードされる際の説明のソース言語を指定します。 使用できる言語がドロップダウンに表示されます。
アプリケーション・アクセスのグローバル・ユーザー	Financial Management アプリケーションへのシングル・サインオン・ログオンを上書きするオプション。ユーザー名がこのオプションに指定されている場合、 FDMEE のサインオン・ユーザー名ではなく、このユーザー名を使用して Financial Management アプリケーションにアクセスします。 Financial Management アプリケーションへの管理者アクセスができるユーザーのユーザー名を指定します。

Financial Management での会社間パートナ・ディメンションの有効化

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、Oracle Hyperion Financial Management で使用される会社間パートナ(ICP)ディメンションをサポートします。ICP ディメンションとは、勘定科目に対して存在しているすべての会社間残高のコンテナのことです。ICP は、会社間トランザクションの詳細を追跡および消去するために、勘定科目ディメンションおよびカスタム・ディメンションを組み合わせて使用する予約済のディメンションです。

FDMEE で ICP 取引を扱うときは、次の点に注意してください:

- ICP 取引はファイルからしかロードできません。
- インポート・フォーマットにタイプが"ICPTRANS"のディメンションが含まれる場合は、ICP 取引のロードとみなされます。

- インポート・フォーマットにタイプが ICPTRAN のディメンションが含まれない場合、通常のデータ・ロードとみなされます。
- ICP 取引が有効になっているとき、次の属性が含まれます:
 - 属性 1 – 取引 ID
 - 属性 2 – 取引サブ ID
 - 属性 3 – 参照 ID
 - 属性 4 – 取引日
 - 属性 5 – エンティティの通貨での金額
 - 属性 6 – 取引通貨
 - 属性 7 – 換算レート
 - 属性 11 – コメント

ICP 取引はインポート・フォーマットに含まれます。

Financial Management アプリケーションを登録すると、「ICP 取引を使用可能にする」オプションを使用できるようになります。このオプションが有効な場合、追加の ICP 取引が「ディメンションの詳細」に追加されます。これらのディメンションは、「ICPTRANS2 (ICP 取引)」というディメンションの分類で登録されました。値の属性はデータ表の列"ATTR"に保管されます。ICP ディメンションのソース値はマッピングによって変換できません。変換が必要な場合は、別のディメンション・マップのスクリプトを使用します。[エンティティおよび会社間](#)も参照してください。

会社間パートナー・ディメンションを有効にするには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
2. 「ターゲット・アプリケーション」サマリー・グリッドで、「Financial Management」アプリケーションを選択します。
3. 「ディメンションの詳細」タブを選択します。
4. 「ICP 取引を使用可能にする」をクリックします。
5. 「メタデータのリフレッシュの確認」ウィンドウが表示されたら、「**続行して後で保存**」をクリックして ICP 取引を追加します。

この場合、ICP 取引を保存するには、「**保存**」をクリックしてディメンション詳細とともに取引を保存します。

ICP 取引をただちに追加および保存するには、「**保存**」をクリックします。

6. 「**保存**」をクリックします。

登録済ターゲット・アプリケーションの削除

登録済ターゲット・アプリケーションを削除する場合には注意が必要です。登録済ターゲット・アプリケーションを削除すると、「ターゲット・アプリケーション」画面からそのターゲット・アプリケーションが削除され、さらにそのアプリケーションに関連付けられているメタデータおよびデータ・ルールもすべて削除されます。

登録済ターゲット・アプリケーションを削除するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。

2. 「ターゲット・アプリケーション」でターゲット・アプリケーションを選択し、「削除」をクリックします。
3. 「OK」をクリックします。

ターゲット・アプリケーションを削除すると、そのアプリケーションには削除のマークが付き、インポート・フォーマット・オプションやロケーション作成オプションを含むメタデータやデータ・ルールの処理に使用できなくなります。また、そのターゲット・アプリケーションに関連する既存のルールもすべて削除されます。

ノート:

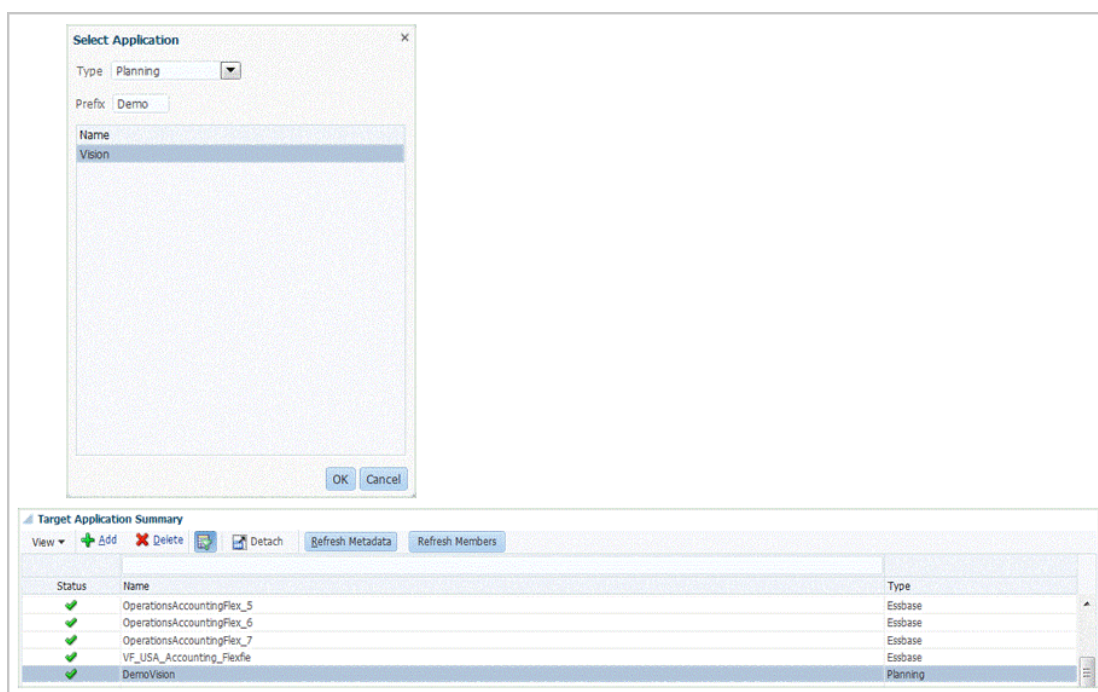
ターゲット・アプリケーションが削除され、処理が正常に終了した後、「ターゲット・アプリケーション」画面を使用して、同じアプリケーションを設定し、ルールを再定義します。

4. 「保存」をクリックします。

ターゲット・アプリケーション名の複数回の再利用

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、同じ名前でのターゲット・アプリケーションの登録をサポートしています。この機能は、サービス環境が複数あり、各環境のアプリケーション名が同じ場合、または開発環境と本番環境でアプリケーション名が同一の場合に使用できます。この機能により、アプリケーションが **FDMEE** に正常に登録され、ターゲット・アプリケーションのリスト内で正しく識別できるよう、アプリケーションを登録する際にアプリケーション名に接頭辞を追加できます。

次の例では、ターゲット・アプリケーション名"Vision"が選択され、接頭辞に"Demo"という名前が指定されています。これにより、新しいターゲット・アプリケーションの名前は"DemoVision"になります。



Status	Name	Type
✓	OperationsAccountingFlex_5	Essbase
✓	OperationsAccountingFlex_6	Essbase
✓	OperationsAccountingFlex_7	Essbase
✓	VF_USA_Accounting_Flexfe	Essbase
✓	DemoVision	Planning

接頭辞付きのターゲット・アプリケーションは下位互換性がないため、17.10 以前のリリースには移行できません。以前のリリースに移行できるのは、接頭辞名の付いていないターゲット・アプリケーションのみです。

接頭辞の追加の詳細は、[ターゲット・アプリケーションの登録](#)を参照してください。

ソース会計エンティティの選択

会計エンティティを選択し、メタデータまたはデータの抽出元となる E-Business Suite 元帳または PeopleSoft 事業部門を指定します。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で使用するソース・システムを登録および初期化した後、統合に使用するソース・システム会計エンティティ(元帳またはビジネス・ユニット)を選択します。セグメントおよびチャートフィールドは、E-Business Suite および PeopleSoft に固有の用語です。

ソース・システム内のソース会計エンティティを選択するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ソース会計エンティティ」を選択します。
2. 「ソース会計エンティティ」で、「エンティティ」タブを選択します。
3. ソース・システム・タイプを選択します。
4. ソース・システムを選択します。

ソース会計エンティティがグリッド内に表示されます。列ヘッダーをクリックすると、列をソートできます。「エンティティ」タブには、次の列があります:

E-Business Suite ソース・システムの場合:


- 選択 - チェック・マークは、会計エンティティ(元帳)が使用可能であることを示します。
- 会計エンティティ - 元帳の名前
- 勘定体系 - 勘定体系の名前
- 通貨 - E-Business Suite 元帳の機能通貨
- カレンダ - E-Business Suite 元帳のカレンダ。E-Business Suite 元帳は、勘定体系、通貨およびカレンダの集まりです。たとえば、4-4-5、週次、勘定などがあります。
- 職責名 - 一般会計ドリルスルー職責を表示します。ユーザーが E-Business Suite にドリル・スルーできるように、FDMEE でドリル・スルー職責を設定する必要があります。選択した職責には、E-Business Suite で選択した元帳のサマリー仕訳および仕訳詳細を表示する権限が必要です。

PeopleSoft ソース・システムの場合:

- 選択 - ビジネス・ユニットを使用可能にするには、チェック・ボックスを選択します。
 - ビジネス・ユニット - ビジネス・ユニットの名前
 - 通貨 - ビジネス・ユニットの基本通貨
5. E-Business Suite ソース・システムの場合、一般会計の「職責名」を選択します。[一般会計職責の割当て](#)を参照してください。

6. FDMEE で使用可能にする元帳またはビジネス・ユニットごとに、チェック・ボックスを選択します。
7. 「保存」をクリックします。


💡 ヒント:

ビジネス・ユニットまたは会計エンティティをフィルタするには、列ヘッダーの上
にフィルタ行が表示されていることを確認してください。(フィルタ行を切り替え
るには、をクリックします)。次に、フィルタに使用するテキストを入力します。

一般会計職責の割当て

E-Business Suite 一般会計では、システム管理者がユーザーの一般会計職責を割り当てます。一般会計職責は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で E-Business Suite 仕訳サマリー・ページにドリル・スルーのために必要な認証を提供します。

一般会計職責を割り当てるには:

1. 「ソース会計エンティティ」の「職責名」列で、をクリックして**一般会計職責**を選択します。
職責名は、ユーザーがソース・システムへのドリル・スルー時にログインする際の職責 ID です。職責名を選択するのは、ドリル・スルーする場合のみです。それ以外の場合は、空白のままにします。
2. 必要に応じて、ソース・システムで選択したすべての元帳に対して前述のプロセスを繰り返します。
3. 「保存」をクリックします。

ソース会計エンティティ・グループの操作

会計エンティティ・グループは、共通の会計エンティティ(たとえば、同じ勘定体系、同じカレンダーまたは同じ通貨など)のロジック・グループです。会計エンティティ・グループは、1回のデータ・ルール実行で複数の会計エンティティからデータを抽出するために使用します。複数の会計エンティティが複数の会計エンティティ・グループに属することができるため、同じデータの共有が容易になります。

会計エンティティ・グループを操作するには、次のことに注意してください:

- 会計エンティティ・グループと一緒に使用できるのはデータ・ルールのみです。
- ロケーションのデータ・ルールに会計エンティティが含まれる場合、ルールは定義内の会計エンティティによって制限されます。この場合、ロケーションのデータ・ルールは会計エンティティ・グループを使用できません。
- 場所のデータ・ルールに会計エンティティがない場合、会計エンティティまたは会計エンティティ・グループを定義内で指定する必要があります。データ・ルールの実行では、単一の会計エンティティまたは会計エンティティ・グループ内のすべての会計エンティティからデータが抽出されます。
- ライトバックに対するデータ・ロード・ルールは、定義内の1つの会計エンティティのみを受け入れます(会計エンティティ・グループは受け入れません)。

- メタデータ・ルールは定義内の1つの会計エンティティしか受け入れません(会計エンティティ・グループは受け入れません)。
- Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、エンティティは同じ勘定体系に属する必要はありません。

ソース会計エンティティ機能の「エンティティ・グループ」タブを使用して、会計エンティティ・グループを表示および管理します。「エンティティ・グループ」タブは、「エンティティ・グループ」(この領域に新規グループの追加が可能)と「エンティティ・グループのエンティティ」(この領域から会計エンティティの追加が可能)の2つの領域から構成されます。

ソース会計エンティティ・グループを追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ソース会計エンティティ」を選択します。
2. 「ソース会計エンティティ」で、「エンティティ・グループ」タブを選択します。
3. ソース・システム・タイプを選択します。
4. 「エンティティ・グループ」グリッドで、「追加」をクリックします。
空白の名前行と説明行がグリッドの先頭に追加されます。
5. 「名前」に、会計エンティティ・グループの名前を入力します。
6. 「説明」に、会計エンティティ・グループの説明を入力します。
7. 「エンティティ・グループのエンティティ」グリッドで、追加する会計エンティティを選択します。

ソース会計エンティティが「エンティティ・グループのエンティティ」グリッドに表示されます。列ヘッダーをクリックすると、列をソートできます。「エンティティ・グループのエンティティ」グリッドに次の列が表示されます:

E-Business Suite ソース・システムの場合:

- 選択 - チェック・マークは、会計エンティティ (元帳)が使用可能であることを示します。
- 会計エンティティ - 元帳の名前
- 勘定体系 - 勘定体系の名前
- 通貨 - E-Business Suite 元帳の機能通貨
- カレンダー - E-Business Suite 元帳のカレンダー。E-Business Suite 元帳は、勘定体系、通貨およびカレンダーの集まりです。たとえば、4-4-5、週次、勘定などがあります。
- 職責名 - 一般会計ドリルスルー職責を表示します。ユーザーが E-Business Suite にドリル・スルーできるようにするには、FDMEE でドリルスルー職責を設定する必要があります。選択した職責には、E-Business Suite で選択した元帳のサマリー仕訳および仕訳詳細を表示する権限が必要です。

PeopleSoft ソース・システムの場合:

- 選択 - チェック・ボックスを選択して、会計エンティティ・グループのビジネス・ユニットを使用可能にします。
 - ビジネス・ユニット - ビジネス・ユニットの名前
 - 通貨 - ビジネス・ユニットの基本通貨
8. 「保存」をクリックします。

Excel データのロード

Excel からロード機能を使用して、Microsoft Excel ワークブックとの間でデータをロードします。この機能により、各行を手動で入力せずに大量のアプリケーション情報をロードし、SQL アクセスなしでデータを表にプッシュできます。

使用可能なオプションは次のとおりです:

- Excel にダウンロード—エンティティを選択し、データを対応する表から Excel スプレッドシートにダウンロードします。
- Excel からアップロード—1 つ以上の範囲を表すソース・データを Excel スプレッドシートからインポートします。

▲ 注意:

この方法でデータをロードすると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition によってデータは検証されません。この方法を使用する場合、ユーザーがデータを検証する必要があります。

Excel へのダウンロード

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition エンティティを選択し、対応する表から Excel スプレッドシートにデータをダウンロード(エクスポート)できます。

Excel にダウンロードする場合は、Excel ファイルのフォーマットに次を含める必要があります:

- 表名
- 2 番目の行の列名
- 表からのデータ

次の例は、期間エンティティが Excel でマップされる方法を示しています:

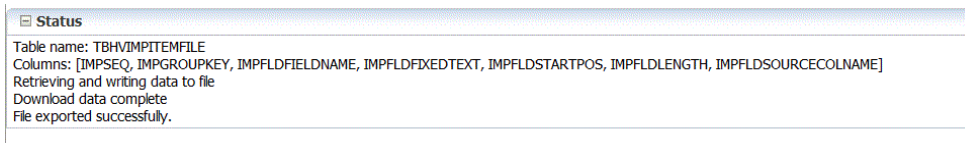
TPOVPERIOD					<- Table Name
PERIODKEY	PRIORPERIODKEY	PERIODEDESC	PERIODTARGETM	YEARTARGET	<- Column Name
1/1/2013	12/1/2012	Jan-13	Jan	2013	<- Data
2/1/2013	1/1/2013	Feb-13	Feb	2013	
3/1/2013	2/1/2013	Mar-13	Mar	2013	

データを Excel スプレッドシートにダウンロードするには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「Excel インタフェース」を選択します。
2. 「Excel インタフェース」、「Excel にダウンロード」および「エンティティ・タイプ」から、データをダウンロードする FDMEE エンティティを選択します。

使用可能なエンティティ・タイプ:

- アプリケーション・カテゴリのマッピング
 - アプリケーション期間マッピング
 - バッチ定義
 - バッチ・グループ
 - バッチ・ジョブ
 - カテゴリ・マッピング
 - 確認エンティティ・グループ
 - 確認エンティティ・アイテム
 - 確認エンティティの詳細
 - 確認エンティティのヘッダー
 - データ・ルール
 - データ・ルール・パラメータ
 - インポート・フォーマットの詳細-アダプタ
 - インポート・フォーマットの詳細-ERP
 - インポート・フォーマットの詳細-ファイル
 - インポート・フォーマットのヘッダー
 - ロケーション
 - ロジック・グループの詳細
 - ロジック・グループのヘッダー
 - 期間マッピング
 - ソース期間マッピング
 - ユーザー設定
 - その他(表名のプロンプト)
3. **オプション: 「その他」** エンティティ・タイプを選択した場合は、「**表名**」フィールドに表の名前を入力します。
4. **「ファイル」** に、データのダウンロード先の Excel ファイルの名前を入力します。
「選択」 をクリックして選択画面上のファイルに移動し、新しいファイル名を入力してから **「ダウンロード」** をクリックして、ファイルをダウンロードすることもできます。
5. **「ダウンロード」** をクリックします。
- Excel スプレッドシートがアップロードされると、ダウンロードされた表および列の名前が示され、「ファイルが正常にインポートされました。」というメッセージが表示されます。



6. **オプション:** ダウンロードした Excel ファイルを開くには、「ファイル」フィールドの横で「**選択**」をクリックします。

選択画面で、Excel スプレッドシートを選択して「**ダウンロード**」をクリックします。

Excel スプレッドシートを保存するか開きます。

Excel からのアップロード

インポート・ソースとして使用される Excel スプレッドシートは 1 つ以上の範囲を表します。範囲の最初のセルには、インポートする Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 表の名前が含まれます。範囲の 2 番目の行には、最初の行で識別される表の列名が含まれます。3 番目以降の行には、FDMEE にロードされるデータが含まれます。

範囲名の先頭には FDMEE のインポート識別子 *ups* が付いています(例: *upsCategory*)。インポートする表が関連している場合は、子表の前に親表をインポートする必要があります。範囲名はアルファベット順に処理されます。親-子の順序が正しくなるようにするには、*upsAParent* および *upsBChild* などの範囲名を割り当てます。

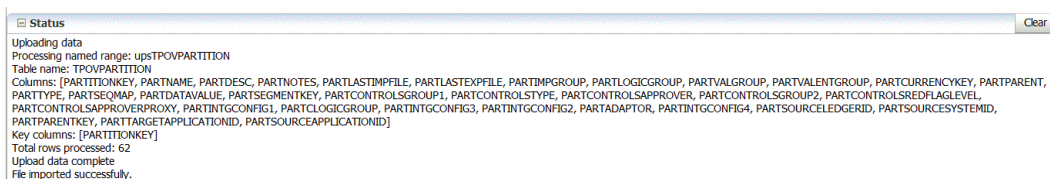
また、Excel からデータをアップロードする際には、次の動作に注意してください:

- データは挿入のみ可能です。更新または削除はできません。
- データは検証されません。
- FDMEE で重複する行が検出された場合、その行はスキップされます。

Excel スプレッドシートからデータをアップロードするには:

1. 「**設定**」タブの「**統合設定**」で、「**Excel インタフェース**」を選択します。
2. 「**Excel インタフェース**」および「**Excel からアップロード**」の「**ファイル**」に、アップロードする Excel ファイルの名前を入力します。
「**選択**」をクリックして選択画面上のファイルに移動し、「**OK**」をクリックして、ファイルを選択することもできます。
3. 「**アップロード**」をクリックします。
4. **オプション:** ダウンロードした Excel ファイルを開くには、「**ファイル名**」フィールドの横で「**選択**」をクリックします。
5. **オプション:** 「**アップロード**」をクリックして、代替ディレクトリから Excel スプレッドシートを参照して選択することもできます。

Excel スプレッドシートが適切にアップロードされると、「**ステータス**」ペインに処理された範囲が示され、「**ファイルが正常にインポートされました。**」というメッセージが表示されます。



2

統合タスク

次も参照:

- [インポート・フォーマットの操作](#)
- [ロケーションの定義](#)
- [期間マッピングの定義](#)
- [カテゴリ・マッピングの定義](#)

インポート・フォーマットの操作

インポート・フォーマットは、次のようなソースのレイアウトを定義します:

- ソース・システムから抽出されるフィールドおよび Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ステージング表へのデータの格納方法。
- ソース・アダプタに基づく統合のための、Oracle Hyperion Planning ソース・システムおよびターゲット・アプリケーションの列のデータ・フォーマット情報とマッピング情報。
- ソース・システムのセグメントまたはチャートフィールドとディメンションとの間のマッピング(メタデータ・ロードおよびデータ・ロード・プロセスで使用されます)。
- EPM ディメンションとソース・システムのセグメントまたはチャートフィールドとの間のマッピング(ライトバック・プロセスで使用されます)。
- ソース・アダプタに基づく統合のマッピング情報
- データの同期のためのソースとターゲットの EPM ディメンション間のマッピング情報。

次の画面ショットは、Vision_account.txt の一部を示します。インポート・フォーマットで、これらの列の場所を定義し、ターゲット・アプリケーションのディメンションにマップします。

```
1100;01;Cash In Bank;122.75;145.31;;12.30;55.67
1100-1011-000-00;01;Dallas National Bank;140,320;78.42; ;09.08;07.06
1100-1012;01;Midland Bank & Trust;115000.00;654.12;45.39;05.04;0.00
1190;01;Petty Cash;130.00;41.27;999.11;01.00;12.98
1190-101;01;Sales;204.00;77.33;46.31;15.94;23.46
1515;01;Prepaid Deposits;107.00;88.00;0.00;9.32;"2.45"
1515-101;01;CPI Market Security;501.00;93.44;57.38;34.76;-145e-3
1516-201;01;CPK Market Security;787.00;0.00;11.35;01.4;-4.56
1520-101-11;01;PIY Market Security;45.00;19.87;47.39;-12.65;-04.56
1522-121-11;01;MyPIY Market Security;25.10;39.47;57.76;-22.85;-02.53
2520-1101;01;betwCPI Market Security;187.00;12.00;7.30;02.54;-123e-2
2215-104;01;bet2 CPI Market Security;57.00;18.02;44.00;0.0000000012;33.62
```

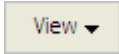
インポート・フォーマットは1つの会計エンティティに対して作成されます。ただし、同じ勘定体系を持つ複数の会計エンティティからデータをインポートする場合は、代表の会計エンティティを使用して1つのインポート・フォーマットを定義し、それを使用して同じ勘定体系を持つすべての会計エンティティに対しデータをインポートします。

インポート・フォーマットの定義

「インポート・フォーマット」サマリー・セクションを使用して、インポート・フォーマットのサマリー情報の表示、追加および削除を行います。

インポート・フォーマット情報の表示

表 2-1 インポート・フォーマットの表示オプションと説明

表示のオプション	説明
	<p>ビューをカスタマイズします。次のオプションがあります:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 列 - データ・グリッドで表示する列を次の中から選択します。 <ul style="list-style-type: none"> - すべて表示 - 名前 - ソース・システム - 会計エンティティ - ソース・アダプタ - ターゲット・アプリケーション • 列の順序変更 - 列の順序を変更するために使用します。このオプションを選択すると、「列の順序変更」画面が表示されます。列を選択し、右側にあるスクロール・ボタンを使用して列の順序を変更します。 • デタッチ/アタッチ - データ・グリッドから列をデタッチします。デタッチされた列は、独自のウィンドウに表示されます。デフォルト・ビューに戻るには、「表示」を選択し、次に「添付」を選択するか、「閉じる」をクリックします。 • 例による問合せ - フィルタ行の切替えに使用します。フィルタ行を使用して、特定の列に表示される行をフィルタするためのテキストを入力できます。フィルタをクリアするには、テキスト・ボックス内のフィルタ条件テキストを削除し、[Enter]を押します。テキストはすべて大文字と小文字が区別されます。

インポート・フォーマットの追加

インポート・フォーマットは、次の3つのセクションで構成される「インポート・フォーマット」画面で操作します:

- インポート・フォーマットのサマリー - ソースおよびターゲット・アプリケーションに関連する一般的な情報を表示します。
- インポート・フォーマットの詳細 - インポート・フォーマット情報を追加して保持できます。
- インポート・フォーマット・マッピング - インポート・フォーマット・マッピング情報を追加して保持できます。

Enterprise Resource Planning (ERP)ソースのインポート・フォーマットを追加するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」サマリー・タスク・バーで、「追加」を選択します。
「インポート・フォーマット」画面の上部グリッドに、行が追加されます。
3. 「名前」に、インポート・フォーマットのユーザー定義の識別子を入力します。
このインポート・フォーマットにマッピングが作成された後で、このフィールドの値を変更することはできません。
4. 「ソース」で、ソース・システムを選択します。
5. 「ターゲット」で、ターゲット・システムを選択します。
6. オプション: 「連結文字」で、複数のセグメントをソースに指定する場合に2つのセグメントの連結に使用する文字を指定します。
連結文字を指定して連結メンバーを設定します。
ARM 以外のデータ・ロードおよびメタデータ・ロードの場合、アンダースコア文字(_)が2つのセグメントの連結に使用されます。ARM データ・ロードの場合、「類似」方法を使用するマッピングではアンダースコア文字は使用できません。そのため、ARM マッピングの場合、データ・ロード・マッピングの詳細には別の連結文字を指定します。
7. 「説明」に、インポート・フォーマットの説明を入力します。
8. 「会計エンティティ」で、会計エンティティを選択します。
E-Business Suite ソース・システムの場合、会計エンティティは元帳です。PeopleSoft ソース・システムの場合、会計エンティティはビジネス・ユニットです。
9. ソース・アプリケーションからターゲット・アプリケーションへのインポート・マッピングを定義します。

[インポート・フォーマット・マッピングの定義](#)を参照してください。

1対1のマッピングおよび多対1のマッピングに関する詳細は、[インポート・フォーマット・マッピングの定義](#)を参照してください。

ファイルベースのデータ・ロード・システムにインポート・フォーマットを追加するには:


1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」サマリー・タスク・バーで、「追加」を選択します。
「インポート・フォーマット」画面の上部グリッドに、行が追加されます。
3. 「名前」に、インポート・フォーマットのユーザー定義の識別子を入力します。
このインポート・フォーマットにマッピングが作成された後で、このフィールドの値を変更することはできません。
4. 「説明」に、インポート・フォーマットの説明を入力します。
5. 「ソース」で、ソース・システムの「ファイル」を選択します。
6. 「ファイル・タイプ」でファイルのフォーマットを選択します。
 - 固定 - 数値データ
[ファイルベース・マッピングのインポート・フォーマットの定義](#)を参照してください。
 - 区切り - 数値データ

ファイルベース・マッピングのインポート・フォーマットの定義を参照してください。

- 複数列 - 数値データ
複数列数値データのロードを参照してください。
 - 区切り - すべてのデータ型
インポート・フォーマットのデータ型の設定を参照してください。
 - 固定 - すべてのデータ型
インポート・フォーマットのデータ型の設定を参照してください。
 - 複数列 - すべてのデータ型
7. ファイル・タイプが区切りタイプである場合は、「**ファイル区切り文字**」フィールドで区切り文字のタイプを選択します。

使用可能な区切り記号:

- カンマ(,)
 - 感嘆符(!)
 - セミコロン(;)
 - コロン(:)
 - 縦線(|)
 - タブ
 - チルダ(~)
8. 「**ターゲット**」で、ターゲット・システムを選択します。
9. 「**ドリル URL**」に、ドリルスルーに使用される URL を入力します。

「**ドリル URL**」エディタを表示するには、をクリックします。

10. 「**マッピング**」セクションで、任意のディメンションをマップします。
11. 「**保存**」をクリックします。

ファイルベース・マッピングのインポート・フォーマットを定義するには、[ファイルベース・マッピングのインポート・フォーマットの定義](#)を参照してください。

インポート・フォーマットおよびデータ・ロード・ルール

インポート・フォーマットで選択したソース・タイプとターゲット・タイプに応じて、いくつかのタイプのデータ・ロード・ルールを作成できます。

表 2-2 データ・ロード・ルール

ソース・システム	ターゲット・システム
ERP (Enterprise Resource Planning)	EPM (Enterprise Performance Management)

表 2-3 ライトバック・ルール

ターゲット・システム	ソース・システム
EPM	ERP

表 2-4 データの同期

ソース・システム	ターゲット・システム
EPM	EPM

インポート・フォーマットの削除


インポート・フォーマットを削除するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」の「インポート・フォーマット」サマリー・グリッドからインポート・フォーマットを選択し、「削除」をクリックします。
3. 「インポート・フォーマットの削除」で、「OK」をクリックします。

例による問合せ

例による問合せ機能を使用して、「インポート・フォーマットのサマリー」セクションでインポート・フォーマットをフィルタ処理できます。インポート・フォーマット名でフィルタするには、フィルタ行が列のヘッダーの上に表示されていることを確認します

例による問合せを行うには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」の「インポート・フォーマット」タスク・バーで、を選択します。
列見出しの上に空白行が表示されます。
3. 表示される行をフィルタ処理するためのテキストを入力します。

インポート・フォーマット・マッピングの定義

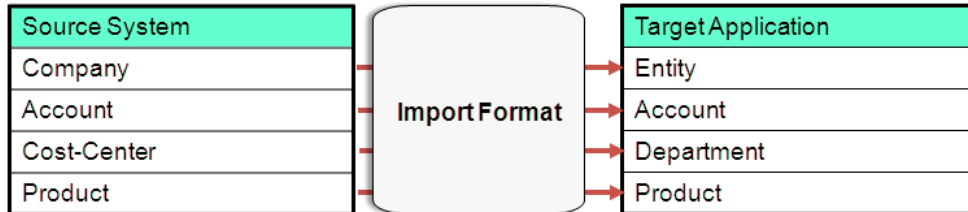
インポート・フォーマットはソース・ファイルまたはシステムのコンテンツ構造を識別します。インポート・フォーマットを作成する場合、設定およびソースとターゲット・システムのディメンション間のインポート・フォーマット・マッピング定義を定義します作成できるのは次のとおりです:

- **1から1へのマッピング** - 単一セグメントおよび単一チャートフィールドのマッピング:
 - ソース・セグメントのメンバーとターゲット・ディメンションのメンバーとの間に単純な1対1マッピングを定義します。
 - ソース値セットからすべてのメンバーをターゲット・ディメンションのメンバーとして取得します。

 **ノート:**

このトピックは、ファイルベースのデータ・ロード定義には該当しません。

次の図は、ソース・システムのセグメントまたはチャートフィールドと EPM ターゲット・アプリケーションのディメンションとの、1 から 1 へのマッピングを示したものです。



 **ノート:**

ソースの各メンバーは、ターゲット・ディメンションの単独のメンバーとして作成されます。

 **ノート:**

1 つのディメンションに対するマップを含むマッピング・ファイルをインポートする場合、ディメンション名がファイルの最初のフィールド内にある必要があります。

- **複数から 1 へのマッピング** - ソース内の複数のセグメントまたはチャートフィールドを連結して、1 つの EPM ディメンション・メンバーにマッピングすることが可能です。

複数のディメンションが、連結された単一のセグメントにマッピングされた場合、ソース階層に対して定義した走査順序に基づいて、連結されたメンバーのターゲット・ディメンションとして新しいディメンションが作成されます。ターゲット・ディメンションとして連結できるセグメントの数は無制限です。次の表は、セグメントからディメンションへのマッピング方法を示したものです。この例では、2 つのセグメント(「会社」および「部署」)が 1 つのディメンション(「エンティティ」)にマッピングされています。

表 2-5 セグメントから EPM ディメンションへのマッピング

セグメント/チャートフィールド	EPM ディメンション
会社	エンティティ
部門	

表 2-5 (続き) セグメントから EPM ディメンションへのマッピング

セグメント/チャートフィールド	EPM ディメンション
製品	製品
勘定科目	勘定科目

- Oracle E-Business Suite や PeopleSoft のような Enterprise Resource Planning (ERP) ソースの任意の数のソース・セグメントを連結します。

インポート・フォーマット・マッピングの定義

インポート・フォーマットを定義する場合は、Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムのメタデータおよびデータ・ルールに対してインポート・フォーマット・マッピングを定義します。

Enterprise Resource Planning (ERP) システムのインポート・フォーマット・マッピングを定義するには:

1. 「設定」 タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマットのサマリー」 セクションから、インポート・フォーマットを選択します。
3. インポート・フォーマット・マッピング・セクションに移動します。
4. 「追加」で、ターゲットを選択します。
5. 「ソース列」から、マップ元のソース列を指定します。

E-Business Suite ソース・システムの場合は、ソースの複数セグメントを連結して 1 つの EPM ターゲット・ディメンションにマッピングできます。ドロップダウン・リストには、インポート・フォーマットの詳細を定義した際に選択した会計エンティティに対するソース・システムのすべてのセグメントが表示されます。

ノート:

エントリを確認し、「セグメント 1」、「セグメント 2」および「セグメント 3」を入力した場合、これらのセグメントが順序どおりに表示されていることを確認します。たとえば、「セグメント 3」が「セグメント 1」の前に来てはいけません。順序どおりにセグメントを入力しないとエラーが発生する可能性があります。

Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションでは、ターゲット・ディメンションのタイプが「エンティティ」の場合、セグメントを連結することはできません。通常、E-Business Suite の会社間セグメントまたは PeopleSoft の関連会社セグメントは、いずれかの会社または事業部門に関するものです。連結が不可能になっているのは、ICP ディメンション値を特定できるようにするためです。

PeopleSoft ソース・システムの場合、必要に応じてチャートフィールドを選択します。ドロップダウン・リストには、インポート・フォーマットに対して選択した会計エンティティ(ビジネス・ユニット)のソース・システム・チャートフィールドが表示されます。

ターゲット・アプリケーションが ARM データ・ロード・タイプの場合、連結文字を指定して連結メンバーを設定できます。

ARM 以外のデータおよびメタデータ・ロードの場合、アンダースコア文字(_)が2つのセグメントの連結に使用されます。ARM データ・ロードの場合、「類似」方法を使用するマッピングではアンダースコア文字は使用できません。そのため、ARM マッピングの場合、データ・ロード・マッピングの詳細には別の連結文字を指定します。

6. EPM およびファイルベースのソース・システムの場合は、「式」フィールドに式を追加できます。[インポート式の追加](#)を参照してください。
7. 「保存」をクリックします。

Enterprise Resource Planning (ERP)セグメントのソース・ディメンションの連結

「インポート・フォーマット」では、Enterprise Resource Planning (ERP)セグメントを連結したり、連結されたコードの組合せでマッピングを定義したりできます。連結では、無制限の数の連結可能なセグメントを使用した一連のデータ・ロード・マッピングが容易になります。

連結の順序は、列の挿入順序に基づきます。

Oracle E-Business Suite メタデータ・ロードでは、連結されたディメンションをロードする場合、そのロードに階層が関連付けられている必要はありません。PeopleSoft ソース・アプリケーションでは、E-Business Suite とは異なる方法でメタデータ・ロードが処理されます。PeopleSoft ソース・アプリケーションの場合、階層を連結されたディメンションに関連付ける必要があります。これは、PeopleSoft のメタデータ・ロードにおける必須条件です。

ノート:

Financial Consolidation and Close では、インポート処理時に勘定科目ディメンションを他のディメンションに連結できないことに注意してください。

ソース・ディメンションを連結するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」サマリー・タスク・バーで、インポート・フォーマットを選択します。
3. インポート・フォーマット詳細セクションの「連結文字」で、連結文字を選択します。

ARM 以外のデータ・ロードおよびメタデータ・ロードの場合、アンダースコア文字(_)が2つのセグメントの連結に使用されます。ARM データ・ロードの場合、「類似」方法を使用するマッピングではアンダースコア文字は使用できません。

4. 「データ・ロード・マッピング」で、「追加」をクリックします。
5. 「ディメンション行」を選択し、ターゲット・ディメンションを選択します。
6. 「ソース列」で、ターゲットに連結する1つ目のソース列を選択します。

たとえば、2つのソース列(ダッシュで区切られた会社と勘定科目)を設定するには、会社のソース列を選択します。

7. 「データ・ロード・マッピング」で、「追加」をクリックします。
8. 「ソース列」で、ターゲットに連結する2つ目のソース列を選択します。


 **ノート:**

EPM ソース・タイプのみ、「式」フィールドに値を指定できます。

9. 連結するソース列ごとにステップ 4-8 を繰り返します。

KSESSB_EBS: Mappings

Data Load Mapping Write Back Mapping

Add  Delete

Source	Target Dimension
Ledger	Organization
Fund	Organization
Organization	Organization

10. 「保存」をクリックします。

インポート式の追加

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition には、ほぼすべての試算表ファイルを FDME データベースに読み込んで解析できる一連の強力なインポート式が用意されています。フィールドの「式」列に高度な式を入力します。インポート式は、インポート・ファイルから読み込まれた値を演算します。

インポート式のスタックおよび処理順序も参照してください。

インポート・フォーマット式を追加するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」のインポート・フォーマット・マッピング・グリッドから、ファイルベースのソース列を選択します。
3. 「式」で、インポート式を指定します。
4. オプション: 式タイプおよび値を「式の追加」フィールドで指定することもできます。

a.  をクリックします。

b. 「式の追加」の「式タイプ」で、式タイプを選択します。

使用可能な式の数とタイプは、変更しているフィールドに応じて異なります(「勘定科目」や「勘定科目の説明」など)。

c. 「式の値」で、式に対応する値を入力し、「OK」をクリックします。

5. インポート・フォーマット・マッピングで、「OK」をクリックします。

インポート式タイプ

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でサポートされる式:

- 標準以外の数値符号規則
- ヨーロッパ式表記から米国式表記への変換
- 先行文字入力によるフィールドのパディング
- 後続文字入力によるフィールドのパディング
- 整数係数および小数係数による乗算
- ゼロの抑制の使用不可

標準以外の数値符号規則

標準以外の数値符号規則の管理には、Sign 式が使用されます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、前後にマイナス記号の付いた数値およびカッコで囲まれた数値を負数と解釈します。他の先行文字や後続文字を使用して負数を表すこともできます。カスタム記号を定義するには、Sign=[正の文字列],[負の文字列]という形式の式を使用します。

たとえば、正数の後に DR (1,000.00DR)、負数の後に CR (1,000.00CR)が続く場合、式は Sign=DR,CR になります。

<>の間の数も負数として扱われます。たとえば、(100.00)および<100.00>を指定した場合、両方とも負数として扱われます。

正数が符号なしの(1,000.00)で、負数の後に CR (1,000.00CR)が続く場合、式は Sign=,CR になります。

借方と貸方の列の表示

分割された数値列を解析するには、DRCRSplit 式を使用します。デフォルトで、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、「金額」フィールドの数値を借方と見なします。ただし、借方値を左側、貸方値を右側に各自配置できます。

表 2-6 DRCRSplit 式の例

勘定科目番号	説明	借方	貸方
1000-000-00	現金-営業勘定科目	68,603.91	
1010-000-00	現金-FANB-AP		177,216.16

DRCRSplit のフォーマットは DRCRSplit=Mid Point of the DR and CR columns です。これにより、FDMEE は左右の配置を解釈して正しい符号を割り当てることができます。

ファイルのインポート時は、貸方金額には負の符号が割り当てられ(したがって、正数として解釈されます)、借方金額は変更されないままです(したがって、負数として解釈されます)。

ヨーロッパ式表記から米国式表記への変換

(,)フォーマットから(,)フォーマットへ数値フォーマットの変換をトリガーするには、`Fill=EuroToUS` 式を「金額」フィールドとともに使用します。

先行文字入力によるフィールドのパディング

`FillL=LeadingFill` 式は、フィールドを先行文字で埋めるために使用されます。テキスト値が指定された入力式より短い場合、入力式の指示に従ってパディングされます。

後続文字入力によるフィールドのパディング

`Fill=TrailingFill` 式は、フィールドを後続文字で埋めるために使用されます。テキスト値が指定された入力式より短い場合、入力式の指示に従ってパディングされます。たとえば、勘定科目番号が **103950-** で、式 `Fill=000000000` を使用した場合、インポート後の勘定科目番号は **103950-000** となります。また、勘定科目番号が **243150** で、式 `Fill=111111111` を使用した場合、インポート後の勘定科目番号は **243150111** となります。

整数係数および小数係数による乗算

ユーザー定義値を係数として、ソース・ファイルの金額に乗算するには、`Factor=Value` 式を使用します。このタイプの式では、数値因子によりファイル・データを拡張できます。この式を使用すると、データを2倍または半分にできます。`Factor=Value` は `Factor=Value` として表され、値はユーザー定義の整数または小数であり、この値によりデータが乗算されます。インポート式は、「式」フィールドの「金額」列に入力されます。

ゼロの抑制の使用不可

データ・ロード・プロセス時にゼロの抑制を無効にする場合、`NZP` 式を使用します。デフォルトで、**Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** は試算表で残高がゼロの勘定項目を無視します。環境によっては、勘定科目をすべてロードして、ゼロである必要がある値を確実に置換する必要があります。「金額」フィールドの「式」列に `NZP` と入力すると、ゼロの抑制を使用不可にできます。

インポート式のスタック

1つのフィールドで複数のインポート式を使用できます。式をスタックするには、式をセミコロンで区切ります。階層化された式が処理される順序を考慮してください。

たとえば、総勘定元帳の「金額」列のインポート式をスタックするには、式 `Script=ParseAcct.py;Fill=0000000` を入力します。

インポート・フォーマットでの複数期間データ・ロードの定義

会計年度全体または複数年に対して日付をロードする場合は(予算および予測データ用など)、複数期間ファイルを使用してデータをロードできます。複数期間のファイルベースのロードでは、複数の列に複数の期間のデータを含む1つのファイルをインポートできます。

複数期間のデータ・ロードを定義するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。

2. 「インポート・フォーマット」の「インポート・フォーマット」サマリー・グリッドから、複数期間のデータ・ロードを定義するファイルを選択します。
3. 「ファイル・タイプ」で、**複数期間 - 数値データ**を選択します。

4. 「ファイル区切り文字」で、ソース・ファイルに基づいて区切りを選択します。
5. ターゲット・アプリケーション・ディメンションでソース・ファイル列番号をマッピングして、列マッピングを追加します。

Source Column	Field Number	Expression	Add Expression	Target
Account	1			Account
Amount	4			Amount
Custom1	2			Custom1
Entity	3			Entity
				Version

6. 「金額」の「式」列から、「式の追加」エディタをクリックします。

7. インポート・フォーマット・マッピング式の追加画面の「式タイプ」ドロップダウンから「**Column=start,end**」を選択します。
8. 式の値から、ソース・ファイルの最初の金額の列番号を入力し、次にソース・ファイルの最後の金額の列番号を入力します。
たとえば、ソース・ファイルが1月から12月までの値を予測しており、1月の金額が列6から始まる場合、12月の金額は17にあります。この場合、6, 17を指定すると、式の値には、列6から始まる金額が含まれ、次に12月までの次の12か月の値がロードされます。
9. 「保存」をクリックして、インポート・フォーマットを保存します。
10. オプション: 必要な場合、複数期間のインポート・フォーマットを含むロケーションを作成します。

詳細は、[ロケーションの定義](#)を参照してください。

11. オプション 必要な場合、データ・ロード・ルールを作成します。

詳細は、[データを抽出するためのデータ・ロードのルールの定義](#)を参照してください。

12. 「データ・ロード」の「データ・ロード・ルール」から、「実行」を実行してデータ・ロード・ルールを実行します。

詳細は、[データ・ロードのルールの実行](#)を参照してください。

 ノート:

複数期間インポート・フォーマットのあるロケーションは、データ・ロード・ワークベンチから実行できません。データ・ロード・ルールを使用してのみ実行されます。

処理順序

「金額」フィールドを除くすべてのフィールドについて、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition はスタックされた式を次の順序で処理します。

1. スクリプト
2. Fill または FILL

「金額」フィールドでスタックされた式を **FDMEE** が処理する順序は次のとおりです:

1. DRCSRsplit
2. Fill=EuroToUS
3. スクリプト
4. Sign
5. Scale
6. NZP

ファイルベース・マッピングのインポート・フォーマットの定義

ソースがファイルベースのデータ・ロードである場合、ソース・システムから抽出されるフィールド(列)とステージング表へのデータの格納方法を決定する、設定およびインポート・フォーマット・マッピング定義を定義します。

インポート・フォーマットの操作方法の詳細は、[インポート・フォーマットの操作](#)を参照してください。インポート・フォーマットにおけるすべてのデータ型のデータ・ロードの操作方法の詳細は、[すべてのデータ型データ・ロード・プロセスの説明](#)を参照してください。

次のオプションに基づいてインポート・フォーマット定義にマッピング行を追加できます:

- スキップ
- 通貨
- 属性
- 説明
- ディメンション行

表 2-7 インポート・フォーマット定義のオプション

インポート定義のオプション	説明
スキップ	<p>「スキップ」オプションは、スキップする入力ファイル内の行を指定する場合に使用します。たとえば、データがない行や負の数の行、あるいは特定の勘定科目の行です。スキップ行の指定は、データ行と同じ方法で定義されます。システムは、入力ファイル内の指定されたロケーションで、「式」フィールドに入力されたテキストと完全に一致するテキストを検索します。</p> <p>システムは、金額のロケーションにスペースや数値以外の文字がある入力ファイルの行を自動的にスキップします。このため、スキップの指定が必要になるのは、入力ファイルの行の金額と同じロケーションに金額以外のデータが存在する場合のみです。たとえば、入力ファイルに"date"という名前のラベルが含まれる場合があります。エントリをスキップ行に追加して、テキスト"date"の開始列、テキスト長、照合のための正確なテキストを指定します。</p> <p>「スキップ」行オプションは、固定と区切りのどちらのファイル・タイプでも使用できます。</p>

表 2-7 (続き) インポート・フォーマット定義のオプション


インポート定義のオプション	説明
属性	<p>TDATESEG 表には、選択した入力ファイルから値をインポートできる 40 の属性列が含まれています。入力ファイル内の属性のロケーションを指定(開始位置と長さを指定)するか、処理中に値を入力(属性の値を「式」フィールドに入力)できます。「式」フィールドに属性の値を入力した場合、開始位置と長さは必要ありません。</p> <p>属性フィールドは、通常はドリルスルー URL の作成や、履歴またはドキュメントのニーズのために使用されます。データ・ロード・ワークベンチでの検索とフィルタ処理に使用できるように、属性フィールドにデータを移入することもできます。</p> <p>各属性列には最大 300 文字まで含めることができます。</p>

 **ノート:**


Financial Consolidation and Close または Tax Reporting のソースを明示期間マッピング・タイプと統合する場合、マッピング年(SRCYEAR)およびマッピング期間(SRCPERIOD)が ATTR2 列に、年が ATTR3 列に格納されます。このため、Financial Consolidation and Close からデータをインポートするときは、属性列 ATTR2 および ATTR3 を他のディメンション・マッピングに使用しないでください。

同様に、増減のソース属性をターゲット・ディメンションにマップするときは、増減を ATTR1 列にマ

表 2-7 (続き) インポート・フォーマット定義のオプション

インポート定義のオプション	説明
	<div data-bbox="1084 373 1377 514" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 5px;"> <p>アップするための別のマップが自動的に作成されます。</p> </div>
説明	<p>TDATESEG 表には、2つの説明列があります。これらの列は属性列と同じ方法でロードできます。説明を含む入力行にロケーションを指定するか、明示的な値を指定できます(マッピング表の「式」フィールドに値を入力)。</p>
通貨	<p>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、選択されたロケーションのデフォルト通貨とは異なる通貨を表すデータのロード機能をサポートしています。このオプションを使用すると、入力行に、関連する金額フィールドの通貨を指定するロケーションを指定できます。ファイル・インポート・フォーマットでは、データの各行に通貨を指定するか、選択したインポート・フォーマットを使用するロケーションに通貨を指定します。</p> <div data-bbox="1084 1066 1377 1360" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 5px;"> <p> ノート:</p> <p>通貨が正しく指定されない場合は、データをロードするときに問題が発生することがあります。</p> </div>
ディメンション	<p>FDMEET では、ディメンション指定を同じ行の複数のロケーションに分散するときに、インポート・フォーマットで1つのディメンションに複数のエントリを指定できます。この機能を使用すると、ファイルベースのデータのフィールドを連結できます。このオプションを使用するには、ディメンションを選択して、開始位置と終了位置および式を選択します。</p>

固定長の数値データ・ファイルのインポート・フォーマットを定義するには:

 ノート:

固定長のすべてのデータ型、データ・ファイルのインポート・フォーマットの定義の詳細は、[インポート・フォーマットのデータ型の設定](#)を参照してください

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」の「インポート・フォーマット」サマリー・グリッドからファイルを選択します。
3. **インポート・フォーマット詳細**グリッドで、「追加」ドロップダウンから追加する行のタイプを選択します。

使用可能なオプション:

- スキップ行
- 通貨行
- 属性行
- 説明行
- デイメンション行

4. 「開始」で、列が開始するファイル上の位置を指定します。

5. 「長さ」に列の長さを入力します。


6. 「式」に、列の内容を上書きする式を入力します。

定数を入力する場合、開始位置と長さを入力します。開始位置「1」と長さ「1」を使用します。

[インポート式の追加](#)を参照してください。

7. 「保存」をクリックします。

区切りタイプの数値データ・ファイルのインポート・フォーマットを定義するには:

 ノート:

区切りタイプのすべてのデータ型、データ・ファイルのインポート・フォーマットの定義の詳細は、[インポート・フォーマットのデータ型の設定](#)を参照してください

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」の「インポート・フォーマット」サマリー・グリッドからファイルを選択します。
3. 「データ・ロード・マッピング」セクションで「追加」をクリックし、追加するタイプまたは行を選択します。

使用可能なオプションは次のとおりです:

- 通貨行
- 属性行

- 説明行
 - ディメンション行
4. 「**フィールド番号**」で、インポートするフィールドを入力します。
複数期間データ・ロードの列式を指定すると、「式」フィールドでは「フィールド番号」の値が無視されます。
 5. 「**式**」フィールドで、フィールドの内容を上書きする式を入力します。
[インポート式の追加](#)を参照してください。
 6. 「**保存**」をクリックします。

ファイルベースのソースのソース・ディメンションの連結

ファイルベース・ディメンションをターゲット・アプリケーション・ディメンションのソースとして連結します。連結では、無制限の数の連結可能なフィールドを使用した一連のデータ・ロード・マッピングが容易になります。

ファイルベースのソース・ディメンションを連結するには:

1. 「**設定**」タブの「**統合設定**」で、「**インポート・フォーマット**」を選択します。
2. 「**インポート・フォーマット**」サマリー・タスク・バーで、ファイルのインポート・フォーマットを選択します。
固定ファイルと区切りファイルの両方のソース列を連結できます。
3. 「**データ・ロード・マッピング**」で、「**追加**」をクリックします。
4. 「**ディメンション行**」を選択し、ターゲット・ディメンションを指定します。
5. 「**ソース列**」で、連結する1つ目のソース列を選択します。
6. 「**フィールド番号**」で、インポートするファイルのフィールド番号を指定します(テキストが選択された際のファイルのフィールド番号にデフォルト設定されます)。
7. 「**データ・ロード・マッピング**」で、「**追加**」をクリックします。
8. 「**ディメンション行**」を選択し、ステップ4と同じターゲット・ディメンションを指定します。
9. 「**ソース列**」で、連結する2つ目のソース列を選択します。
10. 連結に追加するソース列ごとにステップ5-6を繰り返します。
11. ソース列の間に連結文字を使用するには:
 - a. 「**追加**」をクリックし、ターゲット・ディメンションを指定します。
 - b. 「**ソース列**」フィールドに、連結文字を識別する名前を入力します。
たとえば、「**区切り**」と入力します。
 - c. 「**フィールド番号**」に、**1**以上を入力します。
連結文字列に対してフィールド番号を指定する場合は、**0**を入力しないでください。
 - d. 「**式**」フィールドに、連結されたソース列の区切りに使用する連結文字を入力します。
たとえば、**,(カンマ)**または**.(ピリオド)**を入力します。

12. 「保存」をクリックします。

Source Column	Field Number	Expression	Add Expression	Target
Account	1			Account
Delimiter	1	.		Account
SubAccount	2			Account

インポート・フォーマット・ビルダーの使用

ソース・システムがファイルベースのデータ・ロードである場合、開始位置とフィールド長を入力するかわりに、インポート・フォーマット・ビルダー機能を使用してソース・フィールドをターゲット・ディメンション・メンバーにグラフィカルにマップします。この機能は、固定およびデリミタ付きファイルの両方で使用可能です。

ノート:

インポート・フォーマット・ビルダーでは、タブ区切りファイルがサポートされません。

インポート・フォーマット・ビルダーを使用してインポート・フォーマットを割り当てるには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」サマリー・グリッドで、ファイルベースのソース・システムを選択します。
3. インポート・フォーマット・マッピング詳細グリッドで、「ビルド・フォーマット」をクリックします。
4. 「ロードするファイルの選択」でインポートするファイルを検索して選択し、「OK」をクリックします。

ロードするファイルを選択する以外に、次のことができます。

- `inbox` ディレクトリ下に新しいフォルダを作成します。
- ファイルを削除します。
- ファイルをダウンロードします
- ファイルをアップロードします

ファイルのコンテンツがインポート・フォーマット・ビルダー画面に表示されます。

```

MatchMixAll Demo.TRN - file containing transactions for match TID with TID, and match by Account for Demo

!FILE_FORMAT = 1.0
!VERSION = 1.0.0

!SCENARIO = ActMon
!YEAR = 2006
!PERIOD = December
!C2=[None]
!C3=[None]
!C4=[None]

!INTERCOMPANY DETAIL
!Column_Order=Entity;Partner;Account;Cl;TransID;SubID ;RefID ;TransCurr;TransAmt ;EntCurrAmt ;Date

*transactions to be matched using TID with TID
    
```

5. インポートするテキストを選択します。
6. 「ソース・ディメンション名として選択したテキストを割当て」で、「ディメンション・マッピングの詳細の入力」画面でソース・ディメンション名を指定するには、「N」を選択します。

選択したテキストをソース・ディメンション名として使用し、ソース・ディメンション・メンバーとターゲット・ディメンション・メンバー間の1対1マッピングを使用するには、「Y」を選択します。

7. ディメンション・マッピングの詳細を変更するには、「ディメンションの割当て」をクリックします。

「ソース・ディメンション名として選択したテキストを割当て」で「N」を選択した場合は、ディメンション詳細を追加または変更する必要があります。

8. 「ディメンション・マッピングの詳細の入力」の「ソース・ディメンション名」で、選択したテキストを割り当てるソース・ディメンションの名前を指定します。
9. 「ターゲット・ディメンションの選択」で、ソース・ディメンションのマップ先のターゲット・ディメンションを選択します。
10. 「選択フィールド番号」で、ファイルをインポートするフィールド番号を指定します(テキストが選択された際のファイルのフィールド番号にデフォルト設定されています)。
11. 「OK」をクリックします。

ソース・ディメンション情報を割当てまたは変更すると、情報が「新規マッピングの追加」サマリー・グリッドに表示されます。

Add New Mapping			
Delete			
Source Column	Field Number	Target	
Account	1	Account	

すべてのデータ型データ・ロード

すべてのデータ型のロード方法を使用すると、次のデータ型がサポートされるデータ・ファイルを Oracle Hyperion Planning にロードできます。

- 数値
- テキスト
- スマートリスト
- 日付

また、選択したカレンダー期間の複数の残高列を含むデータ・ファイルをロードできます。

ノート:

「セキュリティ保護されたすべてのデータ型」では、インポートで指定された通貨にのみロードされます。

ノート:

すべてのデータ型のロード方法は、Oracle Hyperion Profitability and Cost Management ではサポートされていません。

すべてのデータ型データ・ロード・プロセスの説明

すべてのデータ型ロード方法を使用する場合、概して次の点に注意します。

1. ターゲット・アプリケーション機能の「アプリケーション・オプション」タブで、「**ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型**」または「**セキュリティ保護されたすべてのデータ型**」のいずれかのロード方法を選択します。
2. 「**インポート・フォーマット**」オプションで、すべてのデータ型ロード方法に対する**ファイル・タイプ**を選択します。
3. 複数列型の場合のみ、データ・ロード・ルールで複数列データ型に対してドライバ・ディメンション・メンバーを割り当てます。ドライバ・ディメンションは、データのロード先のメンバーです。ドライバ・ディメンションは複数列型にのみ適用できます。区切り型や固定型には適用できません。ヘッダー・レコードやメンバー式が割り当てられていない場合、インポート・フォーマットまたはデータ・ロード・ルールの「メンバー・セクタ」画面でメンバーを選択できます。
4. **データ・ロード・ワークベンチ**で、データ列のデータ型の値を確認します。
データ・ロード・ワークベンチには、金額列ではなくデータ列が表示されます。

- a. **ソースからインポート**機能を使用して、ソース・システムからデータをインポートします。データのインポート、マップおよび検証など、必要な変換を実行します。
- b. ソース・データを検証します。
- c. Oracle Hyperion Planning アプリケーションにデータをエクスポートします。

Planning でのデータのロード方法の詳細は、*Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド*のアウトライン・ロード・ユーティリティに関する項を参照してください。







すべてのデータ型ロード方法の設定

勘定科目、期間、年、シナリオ、バージョン、通貨、エンティティ、ユーザー定義のディメンション、属性、UDA、為替レート、スマート・リストおよびプランニング・ユニット階層のメタデータおよびデータをロードする際は、使用する方法を選択できます。

ノート:

数値データをロードするには、「**数値データのみ**」ロード方法を使用します。

1. 「**設定**」タブを選択し、「**登録**」で「**ターゲット・アプリケーション**」を選択します。
2. 「**ターゲット・アプリケーション**」の「**ターゲット・アプリケーション**」サマリー・グリッドで「**追加**」をクリックし、「**ローカル**」または「**クラウド**」を選択します。
使用可能なオプションは、「**クラウド**」(クラウド・デプロイメントの場合)または「**ローカル**」(オンプレミス・デプロイメントの場合)です。
3. 「**ターゲット・アプリケーション**」の「**アプリケーション・オプション**」で、「**ロード方法**」ドロップダウンから「**セキュリティ保護されたすべてのデータ型**」を選択します。

Dimension Details Application Options		
View ▾	 Detach	
Property Name	Value	Select
Load Method	All data types with security	
Batch Size	10000	
Drill Region	No	
Purge Data File	No	
Date Format	MM-DD-YYYY	
Data Dimension for Auto-Increment Line Item		
Driver Dimension for Auto-Increment Line Item		
Member name may contain comma	Yes	

使用可能なロード方法の説明:

- ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型。
この方法では、データとドライバのディメンション、および Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションの一意的識別子を定義する必要があります。「データ・ロード・ルール」の「ターゲット・オプション」タブで、「自動増分のライン・アイテムのデータ・ディメンション」フィールドと「自動増分のライン・アイテムのドライバ・ディメンション」フィールドに、データ・ロードとドライバ・ディメンションを定義します。

このオプションの詳細は、[LINEITEM フラグを使用した EPM アプリケーションへの増分データのロード](#)を参照してください。

- 数値 - 数値データのみをロードします。この方法では、Oracle Hyperion Planning データ・セキュリティは適用されません。
- セキュリティ保護されたすべてのデータ型 - 数値、テキスト、スマートリスト、日付データ型をロードします。Planning 管理者がデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されません。Planning の管理者以外のユーザーがデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されます。

データは、500K のセルのチャンクでロードされます。

4. 「日付フォーマット」ドロップダウンで、日付データのフォーマットを指定します。

- DD-MM-YYYY
- MM-DD-YYYY
- YYYY-MM-DD

5. 「保存」をクリックします。

すべてのデータ型ロード方法の設定

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition には、「数値データのみ」と「セキュリティ保護されたすべてのデータ型」の2つのエクスポート・ロード方法があります。「セキュリティ保護されたすべてのデータ型」では、インポートで指定された通貨にのみロードされます。

勘定科目、期間、年、シナリオ、バージョン、通貨、エンティティ、ユーザー定義のディメンション、属性、UDA、為替レート、スマート・リストおよびプランニング・ユニット階層のメタデータおよびデータをロードする際は、使用する方法を選択できます。

ノート:

数値データをロードするには、「数値データのみ」ロード方法を使用します。

1. 「設定」タブを選択し、「登録」で「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
2. 「ターゲット・アプリケーション」の「ターゲット・アプリケーション」サマリー・グリッドで「追加」をクリックし、「ローカル」または「クラウド」を選択します。

使用可能なオプションは、「クラウド」(クラウド・デプロイメントの場合)または「ローカル」(オンプレミス・デプロイメントの場合)です。

3. 「ターゲット・アプリケーション」の「アプリケーション・オプション」で、「ロード方法」ドロップダウンから「セキュリティ保護されたすべてのデータ型」を選択します。

使用可能なロード方法の説明:

- 数値 - 数値データのみをロードします。この方法では、Oracle Hyperion Planning データ・セキュリティは適用されません。
- セキュリティ保護されたすべてのデータ型 - 数値、テキスト、スマートリスト、日付データ型をロードします。Planning 管理者がデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されません。Planning の管理者以外のユーザーがデータをロ

ードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されます。Planning の管理者以外のユーザーがロードできるデータは、500,000 セルのみです。

4. 「日付フォーマット」ドロップダウンで、日付データのフォーマットを指定します。
 - DD-MM-YYYY
 - MM-DD-YYYY
 - YYYY-MM-DD
5. 「保存」をクリックします。

インポート・フォーマットのデータ型の設定

データをロードする際、インポート・フォーマットに対するデータ型を指定します。

- 区切り - 数値データ
 - 固定 - 数値データ
 - 複数列 - 数値データ
 - 区切り - すべてのデータ型
 - 固定 - すべてのデータ型
 - 複数列 - すべてのデータ型
1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
 2. 「インポート・フォーマット」サマリー・タスク・バーで、「追加」を選択します。
「インポート・フォーマット」画面の上部グリッドに、行が追加されます。
 3. 「名前」に、インポート・フォーマットのユーザー定義の識別子を入力します。
このインポート・フォーマットにマッピングが作成された後で、このフィールドの値を変更することはできません。
 4. 「ソース」で、ソース・システムを選択します。
 5. 「ターゲット」で、ターゲット・システムを選択します。
 6. 「説明」に、インポート・フォーマットの説明を入力します。
 7. 「インポート・フォーマット」の「ファイル・タイプ」で、非数値型のデータ・ファイルを選択します。

次のオプションがあります：

- 固定 - 数値データ
[ファイルベース・マッピングのインポート・フォーマットの定義](#)を参照してください。
- 区切り - 数値データ
[ファイルベース・マッピングのインポート・フォーマットの定義](#)を参照してください。
- 複数列 - 数値データ
[複数列数値データのロード](#)を参照してください。
- 区切り - すべてのデータ型
[インポート・フォーマットのデータ型の設定](#)を参照してください。

- 固定 - すべてのデータ型
[インポート・フォーマットのデータ型の設定](#)を参照してください。
 - 複数列 - すべてのデータ型
8. ファイル・タイプが区切りタイプである場合は、「**ファイル区切り文字**」フィールドで区切り文字のタイプを選択します。
 - カンマ(,)
 - 感嘆符(!)
 - セミコロン(;)
 - コロン(:)
 - 縦線(|)
 - タブ
 - チルダ(~)
 9. 「**ドリル URL**」に、ドリルスルーに使用される URL を入力します。
 10. 「**マッピング**」セクションで、任意のディメンションをマップします。
 11. インポート・フォーマット式を追加します。
 12. 「**保存**」をクリックします。

複数列データ型のインポート・フォーマットの設定

次に示すように、列式とドライバ式の組合せを使用して複数列からデータをロードできます。

- 列式を使用して、インポートする列を指定します。連続する列のセットも連続しない列のセットもインポートできます。

連続する列は、開始と終了の列を使用して指定します。たとえば、5,10 は、列 5 から 10 までのことです。

連続しない列は、column1 | column2 | column3 を使用して指定します。たとえば、5 | 7 | 10 は、インポート列 5、7 および 10 のことです。
- ドライバ式を使用して、各列のディメンションおよびターゲット値を指定します。ドライバ・ディメンションは、データのロード先のメンバーです。ロードごとに 1 つのドライバ・ディメンションを持つことができますが、ドライバ・ディメンションに対して複数メンバーを定義できます。ドライバ・ディメンションは複数列型にのみ適用できます。

データ・ルールにおけるメンバーの割当ては、複数期間の割当てと同様です。ヘッダー・レコード、インポート・フォーマット(メンバー式)またはデータ・ルールでドライバ・メンバーを割り当てることができます。インポート・フォーマットにヘッダー・レコードまたはメンバー式を指定しない場合、データ・ロード・ルールでメンバーを選択できます。

詳細は、[データ・ドライバに対するインポート式の追加](#)および[ドライバ・ディメンション・メンバーの割当て](#)を参照してください。
- 複数列型の場合、1 ヘッダー、複数行ヘッダーまたはヘッダー指定なしをインポート・フォーマットに使用できます。これらは異なるフォーマットです。

 ノート:

インポート・フォーマットでは、データ・フィールドにドライバ・ディメンションに対する列定義が定義されている必要があります。ドライバが「勘定科目」の場合、インポート・フォーマットにはソース列とフィールド、または勘定科目ディメンションの開始および終了期間が含まれている必要があります。これはファイル内の有効なフィールド、またはファイル内の有効な開始と終了の位置である必要があります。プロセスによって参照はされませんが、プロセスの実行について有効である必要があります。

- 1つのヘッダー・レコードを持つファイルの場合、フォーマット Driver=<Dimension Name>; Header=<Row Number>; Column=<Column Numbers>を使用します。

たとえば、インポート・フォーマット定義

Driver=Account;HeaderRow=1;Column=2,4 を次のサンプル・データ・ファイルに適用します。

```
Entity,ACCT1,ACCT2,ACCT3
Entity01,100,200,300
```

これによって、行1はヘッダーでデータは行2から始まることシステムに示されます。列2で、エンティティが最初の値で、次の3つの列は ACCT1、ACCT2 および ACCT3 の値です。

- 複数行ヘッダーを持つファイル(ドライバ・メンバーはデータ列と並ばない)の場合、変更されたヘッダー式を使用できます。たとえば、次のデータ・ファイルのようにデータを Essbase からエクスポートする場合、データ列ヘッダーは新規行で、データは並びません。

```
"Period","Consolidation","Data Source","Currency","Intercompany","Entity","Movement","Multi-GAAP","Product","Scenario","Years","View","Account"
"FCOS Sales","FCOS Cost of Sales"
"Jan","FCOS Entity Input","FCOS Data Input","Entity Currency","FCOS No Intercompany","01","FCOS No Movement","FCOS_Local
GAAP","P_110","Actual","FY15","FCOS_Periodic",3108763.22,2405325.62
"Jan","FCOS Entity Input","FCOS Data Input","Parent Currency","FCOS No Intercompany","01","FCOS No Movement","FCOS_Local
GAAP","P_110","Actual","FY15","FCOS_Periodic",3108763.22,2405325.62
```

複数行ヘッダーの場合、ドライバ情報を含むヘッダー行をシステムに示します。ヘッダー行が Header=2,1 と指定された場合、ヘッダーが行2から始まり、ドライバ・メンバーが列1から始まるということです。

別の例として、たとえば、2つ目のヘッダーが A、B、C、D で、これらの値の列が 10 から 13 までとします。列式を 10|12,13 に設定した場合、B メンバーとその値(列 11)はスキップされます。

- データ・ファイルにヘッダー・レコードのない複数列をロードするには、インポート・フォーマット定義 Driver = <Dimension Name>; Member = <List of Members>; Column=<Column Numbers>を使用します。ソース・レコード内のソース列をスキップする場合、この方法を使用します。

たとえば、インポート・フォーマット定義 Driver=Account;member=ACCT1,ACCT2, ACCT3;Column=2,4; を次のデータ・ファイルに適用します。


```
Entity01,100,200,300
```

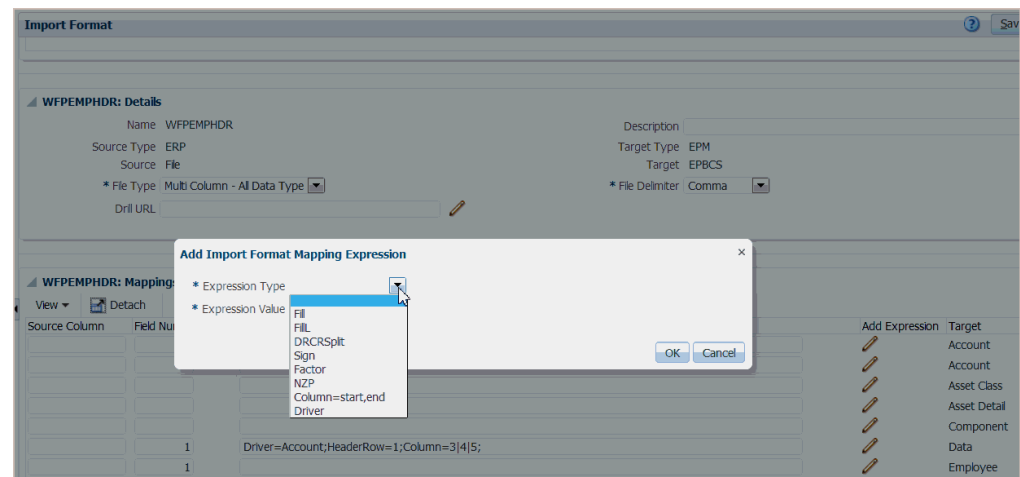
エンティティを最初の値として含め、次の3つの列に ACCOUNT のドライバ・ディメンション・メンバー値である ACCT1、ACCT2 および ACCT3 を使用するようシステムに示します。

- データ・ソース・アプリケーション・タイプの場合、ドライバのディメンションを割り当てますが、システムからは行1がヘッダーとして割り当てられます。「インポート・フォーマット・マッピング式の追加」画面から列を選択して、複数の列をロードできます。

データ・ドライバに対するインポート式の追加

数値以外のデータのインポート式を追加するには:

- 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
- 「インポート・フォーマット」のインポート・フォーマット・マッピング・グリッドから、データ・ソース列を選択します。
- 「式」で、インポート式を指定します。
- オプション: 式タイプおよび値を「式の追加」フィールドで指定することもできます。
 -  をクリックします。
 - 「式タイプ」ドロップダウンから「ドライバ」を選択します。



- 「インポート・フォーマット・マッピング式の追加」でドライバを入力する際、式の値を入力し、「OK」をクリックします。

Add Import Format Mapping Expression

* Expression Type: Driver

* Dimension: Account

Member(s):

Header Row: 1

Column(s): 3|4|5

Description: Use this expression to load multiple columns of data of all data types. Supported data types are Numeric, Text, Smartlist, Date.

Example: Driver=Account;HeaderRow=2;Column=3|5,8; -> Column's dimension is Account; Import column 3 and 5 through 8; Header Row 2 is used to determine values for Account.

Example: Driver=Account;Member="OWP_Employee Type","OWP_FTE","OWP_Applicable Union Code","OWP_Merit Month";Column=3|4|7|5; -> Column's dimension is Account; Import columns 3,4,5,7; Target values for Account are listed after Member. For column to specify a range use ,(Comma). For example 3,8 is column 3 through 8. Use | to specify distinct column 3|6|8 is columns 3,6,8.

OK Cancel

「**ディメンション**」で、式を適用するディメンションを選択します。

「**メンバー**」で、ディメンション・メンバーを選択します。「メンバー・セクタ」画面でメンバーを検索し、選択することもできます。

Member Selector

Dimension: Account

Plan Type: OEP_WFP

Refresh Members

Tree View List View

Member List

- Account
 - No Account
 - System Members
 - OWP_Workforce Planning - Accounts
 - OWP_Workforce Planning Assumptions
 - OWP_Workforce Expenses
 - OWP_wCount
 - OWP_YTD Accounts
 - OWP_FYTD Total Salary
 - OWP_FYTD Total Salary (Prior)
 - OWP_CYTD Total Salary
 - OWP_CYTD Total Salary (Prior)
 - OWP_Workforce Project Integration Accounts
 - Exchange Rates

Selected Members

Account

Rows Selected: 1

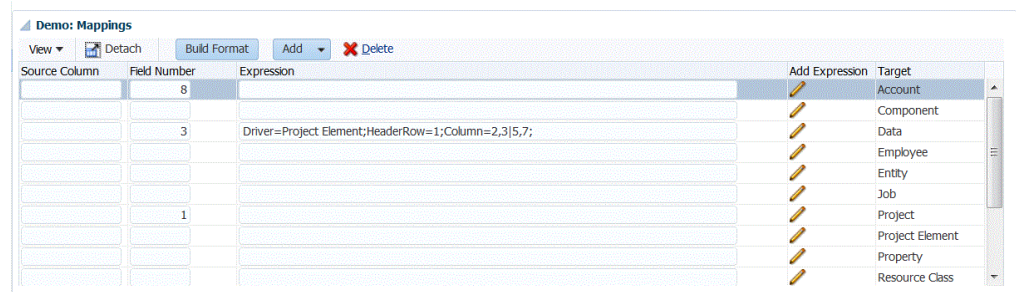
OK Cancel

「**ヘッダー行**」で、式のファイルのヘッダー行を選択します。

「**列**」で、式のデータ列を指定します。DATA 列の範囲を使用するには、カンマ(,)を使用して列を指定します。連続しない DATA 列を使用するには、パイプ(|)区切り文字を使用して列を指定します。

- d. 「**OK**」をクリックします。

次の例では、"Project Element"は最初のヘッダー行のドライバ・メンバーで、連続した行"2,3"と連続しない行"5,7"が含まれます。



ドライバ・ディメンション・メンバーの割当て

ドライバ・ディメンション・メンバーはデータ・ルール(およびヘッダー・レコードまたはインポート・フォーマット(メンバー式))で割り当てることができます。このタブは、インポート・フォーマットにメンバーが指定されていない場合、またはインポート・フォーマットにヘッダー行が指定されていない場合にのみデータ・ロード・ルールに表示されます。

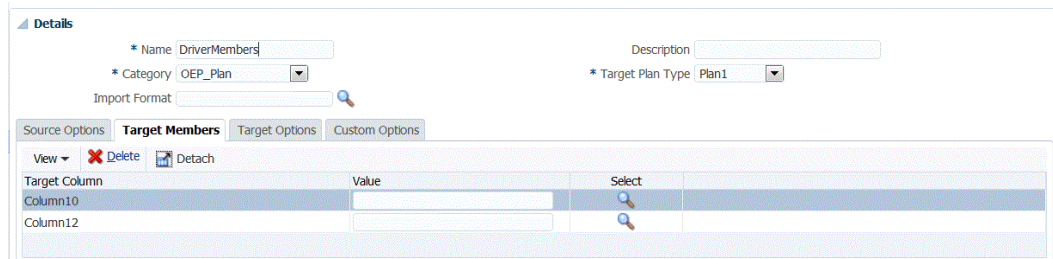
1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「データ・ロード」サマリー領域で「追加」をクリックし、新規データ・ロード・ルールを追加するか、POV バーからロケーション名を変更し、データ・ロード・ルールを選択します。

データ・ロード・ルールの追加の詳細は、[ファイルベース・ソース・システムのためのデータ・ロード・ルールの詳細の定義](#)を参照してください。

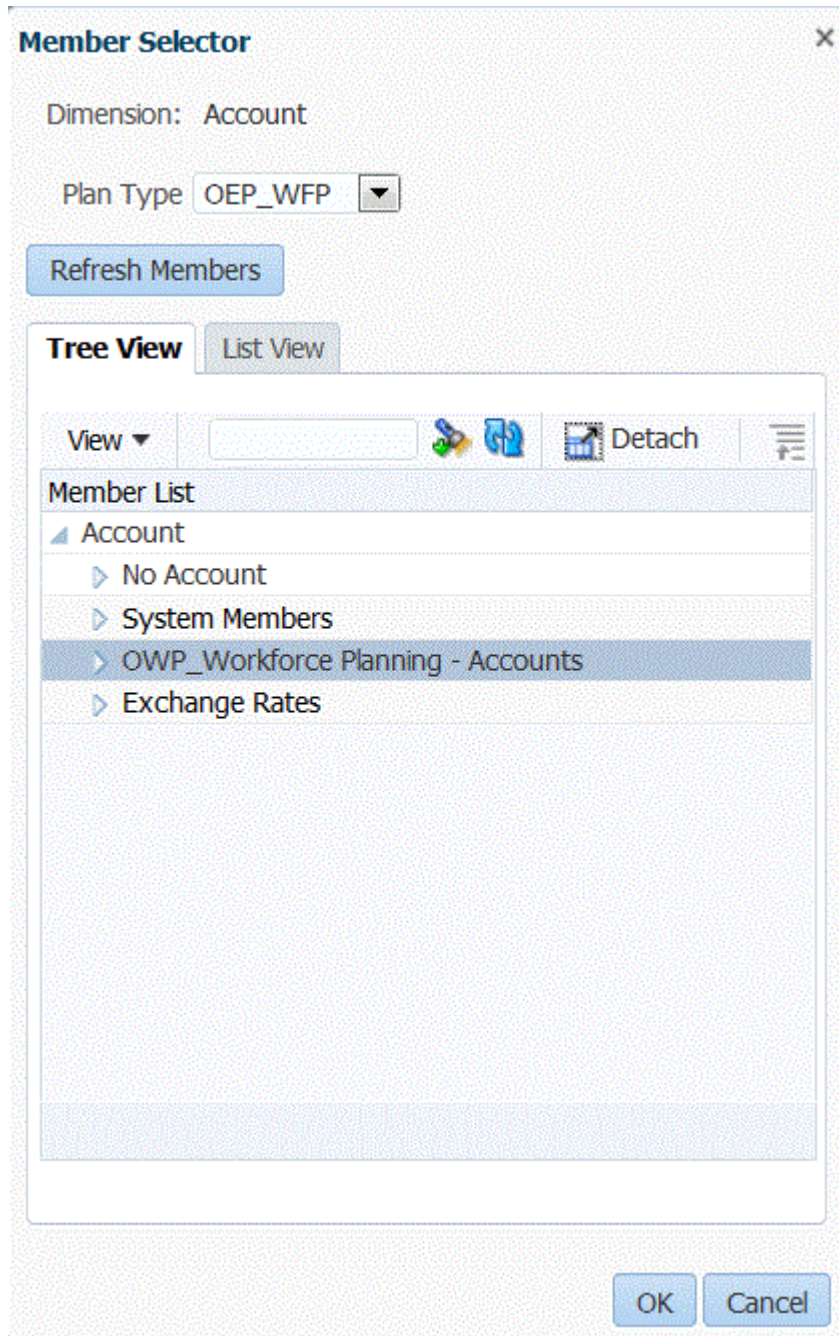
3. 「ターゲット・メンバー」タブを選択します。

このタブは、ドライバ・ディメンション・メンバーがインポート・フォーマットに定義されていない場合にのみ表示されます。

ドライバ・ディメンション・メンバーの選択対象の列は編集可能です。



4. 「値」フィールドに、ヘッダー・レコードまたはメンバー式で使用するドライバ・ディメンション・メンバーの名前を入力します。
5. オプション: ドライバ・ディメンション・メンバーを検索するには、「検索」ボタンをクリックし、「メンバー選択」画面でドライバ・ディメンションに移動します。



6. 「保存」をクリックします。

LINEITEM フラグを使用した EPM アプリケーションへの増分データのロード

LINEITEM フラグを使用して、ライン・アイテム詳細をデータ・ロード・ファイルに含め、EPM アプリケーションへ一意のドライバ・ディメンション識別子に基づいてデータ・ロード・ディメンションの子に対する増分データ・ロードを実行できます。このロード方法は一意の識別子を指定した行がフォームにすでに存在する場合に、データが上書きされることを指定します。行が存在しない場合、データ・ロード・ディメンションの親メンバーの下に十分な子メンバーが存在すると、データは入力されます。

たとえば、次に示すサンプルのソース・データ・ファイルから従業員の所得の詳細を、ターゲットの EPM アプリケーションにロードできます。

```
Emp,Job,Pay Type,Amount
"Stark,Rob",Accountant,Bonus_Pay,20000
"Molinari,Sara",Sales Manager,Bonus_Pay,22000
"Matthew,Peter",Sales Associate,Bonus_Pay,5000
```

次に、ターゲットの Oracle Hyperion Planning アプリケーションを示します。

Scenario	Version	Currency	Entity	Project	Years	Employee	Job
OEP_Plan	OEP_Working	USD	Sales US	No Project	FY16	Stark,Rob	Accountant
Jan							
	No Property	OWP_Value					
Earning1	Bonus Pay	25,000					
Earning2							
Earning3							
Earning4							
Earning5							

LINEITEM 構文を使用する場合、ドライバ・メンバー値以外は同一のディメンションを持つレコードがデータ・ファイルに含まれる可能性があります。

次のデータ・ファイルでは、レコードに同じディメンションがありますが、**acct_date** 列(ドライバ・メンバー)の値が異なります。この場合、データ・レコードを一意にするドライバ・メンバー(つまり、例の場合は **acct_date** 列)を識別する必要があります。

```
Entity,Employee,Version,asl_EmployeeType,acct_date,acct_text,SSTax Rate1
<LINEITEM("ParentMember")>,No Employee,Baseline,Regular,1-1-2001,Text1,0.4
<LINEITEM("ParentMember")>,No Employee,Baseline,Regular,1-1-2002,Text2,0.4
<LINEITEM("ParentMember")>,No Employee,Baseline,Regular,1-1-2003,Text3,0.5
```

上の使用事例をサポートするには、**LOOKUP** ディメンションを作成し、「インポート・フォーマット」オプションでドライバ・メンバー列をこのディメンションにマップします。ディメンションの名前は **LineItemKey** で開始する必要があります。たとえば、**LineItemKey** という名前の **LOOKUP** ディメンションを作成し、任意のデータ列名(**UD8** など)を割り当てます。「インポート・フォーマット」オプションで、**LineItemKey** ディメンションをデータ・ファイルの 5 番目の列(**acct_date**)にマップし、**LIKE** (*から*へ)データ・マッピングを使用します。他のタイプのデータ・マッピングも使用して、検索ディメンションに移入できます。必要な場合は、さらに **LOOKUP** ディメンションを作成して、データ・レコードを一意に識別します。設定の残りは同じです。

この機能を使用するには、**Planning** と **Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** の両方でステップを実行します。

1. **Planning** を起動します。
2. 「データ・ロードの設定」画面で、「データ・ロード・ディメンション」と「ドライバ・ディメンション」を選択します。

Planning において、**Earning1** と **Earning2** は、**勘定科目** ディメンションのメンバーです。**プロパティ**・ディメンションの**プロパティなし**メンバーに、様々な所得タイプがロードされ、**所得**の値が**プロパティ**・ディメンションの **OWP_Value** にロードされています。

「データ・ロードの設定」画面の詳細は、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

3. FDMEE を起動し、「設定」、「インポート・フォーマット」の順に選択します。
4. **インポート・フォーマット・マッピング**・グリッドで、データ・ソース列を選択します。
5. 「式」に、データ・ドライバのインポート式を追加します。

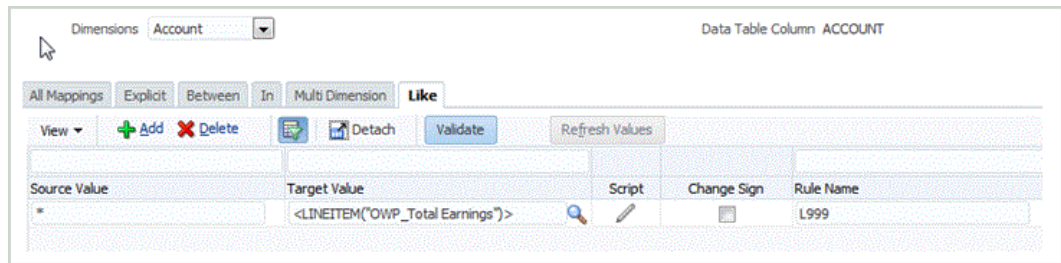
たとえば、**Driver=Property;member="No Property","OWP_value";Column=3,4** というインポート・フォーマット式を追加します。

Source Column	Field Number	Expression	Add Expression	Target
	3			Account
				Asset Class
				Asset Detail
				Component
Pay Type	1	Driver=Property;member="No Property","OWP_value";Column=3,4		Data
Emp	1			Employee
				Entity
Job	2			Job
				Market

FDMEE へのドライバ追加の詳細は、[データ・ドライバに対するインポート式の追加およびドライバ・ディメンション・メンバーの割当て](#)を参照してください。

6. 「ワークフロー」から、「データ・ロード・マッピング」を選択します。

「データ・ロード・マッピング」で、ターゲット・ディメンシオナリティへのソース・ディメンシオナリティの変換方法を指定します。次の「類似」マッピングに示すように、「所得」のソース値(アスタリスクで表示)は、「勘定科目」ディメンションの **OWP_Total Earnings** にロードされています。



7. 「ワークフロー」から、「データ・ロード・ルール」を選択します。
8. 「ターゲット・オプション」タブを選択します。
9. 「ロード方法」ドロップダウンから、「ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型」を選択します。
10. 「自動増分のライン・アイテムのデータ・ディメンション」で、Planning で指定したデータ・ディメンションに一致するデータ・ディメンションを選択します。
この例では、データ・ディメンションは「勘定科目」です。
11. 「自動増分のライン・アイテムのドライバ・ディメンション」で、Planning で指定したドライバ・ディメンションに一致するドライバ・ディメンションを選択します。
この例では、ドライバ・ディメンションは「プロパティ」です。

Dimension Details		
Application Options		
Property Name	Value	Select
Load Method	All data types with auto-increment of line item	
Batch Size	10000	
Drill Region	Yes	
Purge Data File	Yes	
Date Format	MM-DD-YYYY	
Data Dimension for Auto-Increment Line Item	Account	
Driver Dimension for Auto-Increment Line Item	Property	
Member name may contain comma	Yes	

複数列数値データのロード

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition により、選択済ディメンションの複数のディメンション・メンバーのデータを単一のデータ行でロードできます。ロードするメンバーの定義は、ロード・ファイルのヘッダー・レコードまたはインポート・フォーマット定義に含めることが可能です。

データ・ファイルは次のようになります:


- 複数列の数値データがヘッダーなしで含まれたテキスト・データ・ファイルを連続する期間へ。開始および終了の期間を持つデータ・ロード・ルールを実行します。
- 複数列の数値データが含まれたテキスト・データ・ファイルを列ヘッダーとして期間または他のディメンションへ。次のものを指定します。
 - データ・ファイル内に列ヘッダー
 - インポート・フォーマット内に列ヘッダー・メンバー・リスト
 - データ・ルール内に列ヘッダー・メンバー

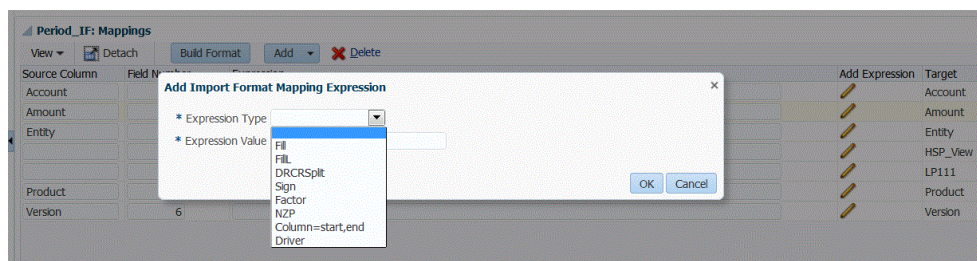
- 複数列の数値データが含まれた Excel データ・ファイルを列ヘッダーとして期間へ。Excel ファイルにはヘッダーが含まれる場合と含まれない場合があります。

複数列数値データをロードするには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」サマリー・タスク・バーで、「追加」を選択します。「インポート・フォーマット」画面の上部グリッドに、行が追加されます。
3. 「名前」に、インポート・フォーマットのユーザー定義の識別子を入力します。このインポート・フォーマットにマッピングが作成された後で、このフィールドの値を変更することはできません。
4. 「説明」に、インポート・フォーマットの説明を入力します。
5. 「ソース」で、ソースに対して「ファイル」を選択します。
6. 「ファイル・タイプ」ドロップダウンで、ファイルのフォーマットとして「複数列 - 数値データ」を選択します。
7. 「ファイル区切り文字」ドロップダウンで区切り文字のタイプを選択します。

使用可能な区切り記号:

- カンマ(,)
 - 感嘆符(!)
 - セミコロン(;)
 - コロン(:)
 - 縦線(|)
 - タブ
 - チルダ(~)
8. 「ターゲット」で、「EPM」を選択し、任意の EPM アプリケーションをターゲットとして選択します。
 9. オプション: 「ドリル URL」に、ドリルスルーに使用される URL を入力します。
 10. 「マッピング」セクションで、「金額」ディメンションを選択し、をクリックします。
 11. 「式タイプ」ドロップダウンから「Column=start,end」を選択します。



12. 「式の値」で、インポートする列を指定します。

連続する列のセットも連続しない列のセットもインポートできます。金額(データ)列の範囲を使用するには、カンマ(,)を使用して列を指定します。連続しない金額列を使用するには、パイプ(|)区切り文字を使用して列を指定します。

連続する列は、開始と終了の列を使用して指定します。たとえば、5,10 は、列 5 から 10 までのことです。

連続しない列は、column1 | column2 | column3 を使用して指定します。たとえば、5 | 7 | 10 は、インポート列 5、7、および 10 のことです。

Add Import Format Mapping Expression

* Expression Type

* Expression Value

Description Use this expression to specify number of amount columns
Example -> 11,22 ->Columns 11 through 22 will be considered amount columns

13. **オプション:** 任意のドライバおよびファイルのヘッダー行を式に指定します。

14. 「OK」をクリックします。

Source Column	Field Number	Expression	Add Expression	Target
Account	1			Account
Amount	1	Driver=Account;HeaderRow=1;Column=1,3		Amount
Custom1	6			Custom1
Entity	4			Entity
Version	5			Version

15. 「保存」をクリックします。

複数列の数値データが含まれたテキスト・データ・ファイルを期間にロードするには:

1. 複数列数値データをロードするにはのステップ 1-12 を実行します。
2. 「式タイプ」ドロップダウンから「ドライバ」を選択します。
3. 「インポート・フォーマット・マッピング式の追加」で、「ディメンション」をデフォルト・ドライバ・ディメンション「期間」のままにします。
4. 「期間」でロードする期間ドライバ・ディメンション・メンバーを選択し、「OK」をクリックします。

引用符を使用して期間を指定します。たとえば、"Dec-9"と入力します。

「インポート・フォーマット・マッピング式の追加」で期間ドライバ・メンバー・ディメンションを指定しない場合、データ・ロード・ルールで期間メンバーを指定できます。ステップ 5 から 11 を参照してください。

Add Import Format Mapping Expression

* Expression Type: Driver

* Dimension: Period

Period(s): "Dec-9"

Header Row:

Column(s): 4,5

Description: Use this expression to load multiple columns of data of all data types. Supported data types are Numeric, Text, Smartlist, Date.

Example: Driver=Account;HeaderRow=2;Column=3|5,8; -> Column's dimension is Account; Import column 3 and 5 through 8; Header Row 2 is used to determine values for Account.

Example: Driver=Account;Member="OWP_Employee Type","OWP_FTE","OWP_Applicable Union Code","OWP_Merit Month";Column=3|4|7|5; -> Column's dimension is Account; Import columns 3,4,5,7; Target values for Account are listed after Member. For column to specify a range use ,(Comma). For example 3,8 is column 3 through 8. Use | to specify distinct column 3|6|8 is columns 3,6,8.

OK Cancel

5. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
6. 「データ・ロード・ルール」画面で、データ・ロード・ルールに使用するPOVを選択します。
7. 複数列数値データのロードに使用するデータ・ロード・ルールを追加または選択します。
8. 「インポート・フォーマット」で、複数列数値のロード用に設定されたインポート・フォーマットを選択します。
9. オプション: 「ソース・オプション」タブで、ソース・オプションを選択します。
10. 「列ヘッダー」タブを選択し、数値列の開始と終了の日付を指定します。

次の場合、「列ヘッダー」タブで開始と終了の日付を追加するよう求められます。

- テキスト・ファイルが、データ・ファイルのヘッダー・レコード、インポート・フォーマットまたはデータ・ルールにヘッダーを持ちません。
- Excel ファイルを使用するすべての場合。ヘッダー情報が Excel ファイルに指定されている場合、開始と終了の範囲内の期間のみが処理されます。

Source Options **Column Headers** Target Options Custom Options

View ▾ Detach

Column Number	Value
4	Dec-24
5	Jun-24

11. データ・ロード・ルールを保存し、実行します。

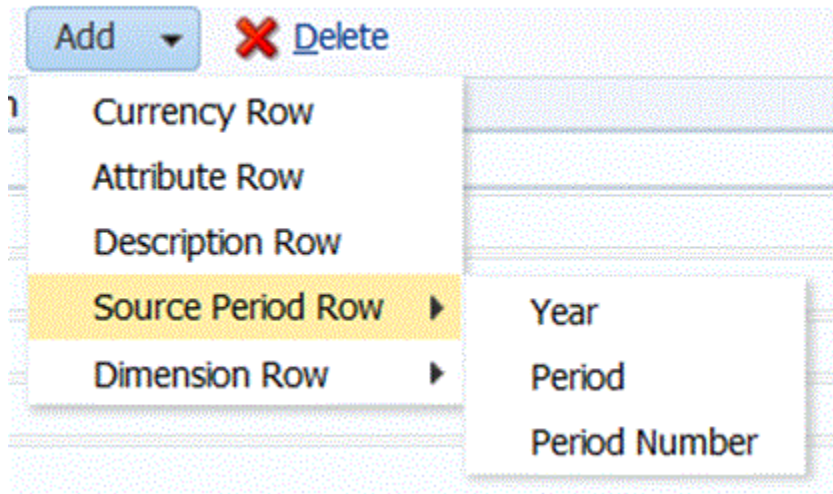
データ・ファイルからの列としての期間のロード

期間ディメンションは、データ・ファイルの列としてサポートされます。1つのファイルに複数期間のデータがある場合、ターゲット・アプリケーションにロードされるデータ・ファイルの各データ行に年と期間を含めることができます。

インポート・フォーマットを介したロード定義およびデータ・ロード・ルールを定義し、データ・ファイルから期間を列としてロードします。

データ・ファイルから期間を列として含めるには:

1. 「設定」 タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」 サマリー・タスク・バーで、Financial Consolidation and Close 連結アプリケーションまたはファイルを選択します。
通常これは、年と期間などの複数期間を含む1つのファイルです。
3. インポート・フォーマット詳細マッピング・グリッドでソース列を選択し、「追加」をクリックします。



4. 含める期間行を選択します。
 - a. 「年」行にマップするには、「ソース期間行」をクリックし、「年」を選択してターゲット・アプリケーションの「年」ディメンションにマップします。
 - b. 「ソース列」で、「年」行にマップするディメンションを選択します。
 - c. 「フィールド番号」で、インポートするファイルのフィールド番号を指定します(テキストが選択された際のファイルのフィールド番号にデフォルト設定されます。)
 - d. 「式」で、「年」行に適用する式を指定します。
 - e. 期間行にマップするには、「追加」をクリックし、「ソース期間行」、「期間」の順に選択します。
 - f. 「フィールド番号」で、インポートするファイルのフィールド番号を指定します(テキストが選択された際のファイルのフィールド番号にデフォルト設定されます。)
 - g. 「式」で、「期間」行に適用する式を指定します。
 - h. 期間番号行にマップするには、「追加」をクリックし、「ソース期間行」、「期間番号」の順に選択します。
 - i. 「フィールド番号」で、インポートするファイルのフィールド番号を指定します(テキストが選択された際のファイルのフィールド番号にデフォルト設定されます。)
 - j. 「式」で、「期間番号」行に適用する式を指定します。
5. 「保存」をクリックします。
6. データ・ロード・ルールのパラメータを指定し、実行します。

データを抽出するためのデータ・ロードのルール¹の定義を参照してください。

ライトバック・マッピング

EPM アプリケーションから取得し、Oracle E-Business Suite または PeopleSoft にライトバックする統合を設定する場合、次の点を考慮してください:

- ライトバックに対するデータ・ロード・ルールを作成する前に、ライトバック・マッピングを作成します。ライトバック・マッピングはメンバー・レベルで発生します。(たとえば、Oracle Hyperion Planning アプリケーションから Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムへのデータのロード。)
- ライトバック・マッピングを作成して、送信ディメンション・メンバーをソース・セグメント・メンバーで置き換えます。具体的には、予算のライトバック中に、送信ディメンション・メンバーをセグメント値で置き換えるときにライトバック・マッピングが参照されます。

次のインタフェース表では、ライトバック・プロセスに対するデータ・ロード用に書き込みセキュリティ権限が必要です:

E-Business Suite

- GL_INTERFACE
- GL_INTERFACE_CONTROL
- GL_BUDGET_INTERFACE

標準の PeopleSoft — PS_HPYPB_ACCT_LN

PeopleSoft コミットメント・コントロール

- PS_HYP_KK_BD_HDR
- PS_HYP_KK_BD_LN

ライトバック・マッピングを作成するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 必要な場合、「インポート・フォーマット」で、「ライトバック・マッピング」タブを選択します。
3. 「ソース・ディメンション」で、ソース・ディメンションにマップするソース・ディメンションを選択します。
4. **オプション:** Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でライト・バック・マッピングを自動的に作成するには、**自動作成**をクリックします。

ライトバック・マッピングを作成するようプロンプトが表示されたら、「OK」をクリックします。

5. 「保存」をクリックします。

EPM アプリケーション間でのデータの同期用のインポート・フォーマットの定義

インポート・フォーマットは、Oracle Hyperion Planning アプリケーションから Financial Consolidation and Close ターゲット・アプリケーション・ディメンションへ格納およびプッシュするフィールド(列)を決定します。

EPM アプリケーション間でのデータの同期用のインポート・フォーマットを追加するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」サマリー・タスク・バーで、「追加」を選択します。
「インポート・フォーマット」画面の上部グリッドに、行が追加されます。
3. 「名前」に、インポート・フォーマットのユーザー定義の識別子を入力します。
このインポート・フォーマットにマッピングが作成された後で、このフィールドの値を変更することはできません。
4. 「説明」に、インポート・フォーマットの説明を入力します。
5. 「ソース」で、ソース・システムを選択します。
EPM ソース・システムについて、データの移動元の EPM ソース・アプリケーションまたはファイルを選択します。
Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムについて、データの移動元の ERP ソース・アプリケーション(Oracle E-Business Suite、Peoplesoft Financials など)を選択します。
6. 「ターゲット」で、ターゲット・システムを選択します。
EPM ソース・ターゲットについて、データの移動先の EPM ソース・アプリケーションを選択します。
Enterprise Resource Planning (ERP) ターゲット・システムで、データを移動する先の ERP ターゲット・アプリケーションを選択します。
E-Business Suite ターゲット・システムを使用する場合は、勘定体系を入力する必要があります。会計エンティティはロケーションまたはデータ・ルール・レベルで取得されます。
7. 「ドリル URL」でドリル情報を指定します。
8. EPM または Enterprise Resource Planning (ERP) アプリケーションからのインポート・マッピングを定義します。

EPM ソース・アプリケーションから EPM ターゲット・アプリケーションへのインポート・マッピングを追加するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」の「インポート・フォーマット」サマリー・グリッドから、EPM ソース・アプリケーションを選択します。
3. インポート・フォーマット詳細グリッドの「ソース列」で、マップするディメンションを選択します。
4. オプション: 必要に応じて、「追加」ドロップダウンからディメンション・タイプを選択して、他のディメンションを追加します。

使用可能なオプション:

- 通貨行
 - 属性行
 - 説明行
 - デイメンション行
5. 「**式**」フィールドに、インポート・フォーマットに対する式またはインポート・スクリプトを入力します。
定数を入力するときも、開始位置と長さを入力する必要があります。開始位置「1」と長さ「1」を使用します。
[インポート式の追加](#)を参照してください。
 6. 「**保存**」をクリックします。

Enterprise Resource Planning (ERP)と EPM アプリケーション間でのデータの同期のインポート・フォーマットの定義

また、データ同期によって、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は Oracle Enterprise Performance Management System アプリケーション・デイメンションを Enterprise Resource Planning (ERP)セグメント/チャートフィールドにマップできます。

Enterprise Resource Planning (ERP)から EPM へのマッピングを作成するには:

1. 「**設定**」タブの「**統合設定**」で、「**インポート・フォーマット**」を選択します。
2. 「**インポート・フォーマット**」の「**インポート・フォーマット**」サマリー・グリッドから、Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・アプリケーションを選択します。

このフィールドで選択した値に応じて、「ソース」フィールドに登録済の Enterprise Resource Planning (ERP)ソースと ERP ソース・タイプに応じたファイルのみが表示されるか、登録済 EPM アプリケーションが表示されます。

たとえば、EPM ソース・タイプの「ソース」は Oracle Hyperion Financial Management または Oracle Hyperion Planning になります。

3. **インポート・フォーマット詳細**グリッドの「**ソース列**」ドロップダウンから、マップするデイメンションを選択します。
4. **オプション**: 必要に応じて、「**追加**」ドロップダウンからデイメンション・タイプを選択して、他のデイメンションを追加します。

使用可能なオプションは次のとおりです:

- 通貨行
 - 属性行
 - 説明行
 - デイメンション行
5. 「**式**」フィールドに、インポート・フォーマットに対する式またはインポート・スクリプトを入力します。

定数を入力するときも、開始位置と長さを入力する必要があります。開始位置「1」と長さ「1」を使用します。

[インポート式の追加](#)を参照してください。

6. 「保存」をクリックします。

EPM から Enterprise Resource Planning (ERP)への(ライトバック)マッピングを作成するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」の「インポート・フォーマット」サマリー・グリッドから、EPM ソース・アプリケーションを選択します。
3. 「セグメント」を選択します。
4. 「明示」タブ、「範囲」タブ、「マルチ・ディメンション」タブまたは「類似」タブのいずれかを選択して、マッピングのタイプを選択します。
 - **明示** - ソース値との完全一致がターゲット値に置き換えられます。たとえば、ソース値「ABC」は、ターゲット値「123」に置き換えられます。「明示」ライトバック・マッピングは、データ・ロードおよびデータ・ライトバック・ルールに対しても同様に作成されます。[「明示」方式を使用したマッピングの作成](#)を参照してください。
 - **範囲** - ソース値の範囲が1つのターゲット値に置き換えられます。たとえば、「001」から「010」までの範囲が1つの値「999」に置き換えられます。「範囲」ライトバック・マッピングは、データ・ロードおよびデータ・ライトバック・ルールに対しても同様に作成されます。[「範囲」方式を使用したマッピングの作成](#)を参照してください。
 - **含む** - 「含む」マッピングでは、非シーケンシャルなソース勘定科目のリストを1つのターゲット勘定科目にマッピングできます。この場合、複数の勘定科目が1つのルール内で1つの勘定科目にマッピングされ、「明示」マップでは必要な複数のルールを作成する必要がなくなります。
 - **類似** - ソース値内の文字列との一致がターゲット値に置き換えられます。たとえば、ソース値「Department」がターゲット値「Cost Center A」に置き換えられます。[「類似」方式を使用したマッピングの作成](#)を参照してください。

ライトバック・マッピングは、データ・ロード・プロセス中に追加された文字の削除またはストリップの方法を提供します。類似ライトバック・マッピングは、データ・ロードと同様に、しかし逆に作成されます。
 - **マルチ・ディメンション** - 複数のソース列値に基づいてメンバー・マッピングを定義します。

 **ヒント:**

「値のリフレッシュ」をクリックすると、ソース・システムのドロップダウン・リストに表示されるセグメントまたはチャートフィールド値のリストがリフレッシュされます。これは、データ・ライトバック・データ・ロードに「明示」、「範囲」、「類似」、「マルチ・ディメンション」のマッピングを作成する場合に特に便利です。

ライトバック・マッピングの定義(E-Business Suite および PeopleSoft のみ)

インポート・フォーマットを定義する際は、データ・ライトバック・ルールに対して EPM アプリケーションからのインポート・フォーマット・マッピングも定義できません。

ライトバック・インポート・フォーマット・マッピングを定義するには:

1. 「**インポート・フォーマット**」で、「**インポート名**」を選択します。
2. 「**ソース**」で、「**Planning**」または「**Essbase**」をソース・システムとして選択します。
3. 「**ターゲット**」で、「**EBS**」または **PeopleSoft** をターゲット・システムとして選択します。
4. **会計エンティティ**を選択します
Oracle E-Business Suite の場合は、「**元帳**」を選択します。
PeopleSoft の場合は、「**ビジネス・ユニット**」を選択します。
5. 「**保存**」をクリックします。

ロケーションの定義

ロケーションは1つのソース・システムに関連付けられますが、そのシステムの複数の元帳からデータをインポートできます。各ロケーションにはインポート・フォーマットが割り当てられており、ディメンショナリティが同じである複数のターゲット・アプリケーションに対して同一のインポート・フォーマットを使用できます。

ロケーション機能では、統合オプション機能を使用して、フリー・フォーム・テキストまたは値を指定することもできます。ロケーションに入力されたテキストまたは値は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition スクリプトで使用できます。

ノート:

同じソース・システムとアプリケーションを組み合わせ、重複するロケーションを作成できます。

インポート・ロケーションを作成、変更、および削除するには:

1. 「**設定**」タブの「**統合設定**」で、「**ロケーション**」を選択します。
2. 「**ロケーション**」で、「**追加**」をクリックします。
3. 「**ロケーション詳細**」の「**名前**」にロケーション名を入力します。
4. 「**インポート・フォーマット**」にインポート・フォーマットを入力します。

インポート・フォーマットはソース・ファイルの構造を表し、ソース・ファイルのインポート・ステップで実行されます。FDMEE では、ソース・データに直接接続

はできないが、テキスト・ファイルにソース・データを持つユーザーのため、ファイルベースのインポートがサポートされています。ロケーションとともに使用するには、対応するインポート・フォーマットが存在する必要があります。

さらに:

- ソース・システムはインポート・フォーマットに基づき自動的に移入されます。
- 「ソース」フィールドに、インポート・フォーマットに基づいてソース・アプリケーションが表示されます。



をクリックしてインポート・フォーマットを選択することもできます。

5. 「**会計エンティティ**」で、ロケーションに使用するソース・システムの会計エンティティ(ビジネス・ユニットまたは元帳)を指定します。

E-Business Suite ソース・システムの場合、会計エンティティは元帳です。PeopleSoft ソース・システムの場合、会計エンティティはビジネス・ユニットです。

ここで会計エンティティを選択した場合、「データ・ロード・ルール」に会計エンティティが自動的に移入されます。


ここで会計エンティティを指定しなかった場合、データ・ルールで会計エンティティを指定できます。これにより、1つのロケーションから複数の元帳のデータを複数のビジネス・ユニットにロードできます。

複数のロケーションに、複数のインポート・フォーマットを使用できます。たとえば、最初のロケーション、元帳1のインポート・フォーマットを定義できます。次に、元帳2用にもう1つのインポート・フォーマットを定義します。このような場合には、同一のインポート・フォーマットを使用する複数のロケーションを作成することもできます。また、複数の同一ターゲット・アプリケーションに対して複数のロケーションを定義することもできます。この場合、ビジネス・ユニットまたは元帳ごとに複数のロケーションを定義し、それらの間でインポート・フォーマットを再使用できます。

6. 「**ターゲット・アプリケーション**」で、このロケーションに関連付けるターゲット・アプリケーションを指定します。



をクリックしてターゲット・アプリケーションを検索することもできます。

7. **オプション**: 入力するか、をクリックして「**会計エンティティ**」を選択します。(E-Business Suite の場合は、元帳を選択します。PeopleSoft の場合は、ビジネス・ユニットを選択します。)
8. 「**機能通貨**」で、そのロケーションの機能通貨を指定します。

ノート:

Financial Consolidation and Close および Tax Reporting のユーザーの場合: 通貨が固定されている場合に、エンティティ通貨ではなく実際の通貨に対してデータをロードするには、「ロケーション」オプションの「機能通貨」フィールドで通貨を設定します。インポート・フォーマットに「通貨」行を追加してマップすることもできます。[インポート・フォーマットの定義](#)を参照してください。

Financial Consolidation and Close では、親入力、コントリビューション入力および換算通貨入力をこのフィールドで指定し、仕訳を作成してエンティティ通貨以外の異なる通貨に転記することもできます。

9. 「親のロケーション」に、ロケーションに割り当てられた親を入力します。

親マッピングは他のロケーションとのマッピングの共有に使用されます。親ロケーションにマッピングを入力します。関連するロケーションが同じマッピングを使用できます。複数のロケーションが親を共有できます。この機能は、複数のロケーションが勘定科目の1つのチャートを使用している場合に役立ちます。子または親のマッピング表を変更すると、子と親のすべてのロケーションに適用されます。

10. 「データ値」で、複数ディメンションのターゲット・システムとの統合にのみ使用する特別なディメンションを指定します。

このディメンションは、データのロード・ロケーションと関連付けられます。Oracle Hyperion Financial Management では、データ値は値ディメンションです。FDMEE がロード・ファイルを作成すると、ディメンション値はロケーションごとにロードされた各データ行に入力されます。たとえば、データ値ディメンションは、Financial Management 内の値ディメンションと関連付けられます。デフォルトで、Financial Management と統合する際このフィールドに値を入力しない場合、データ値<EntityCurrency>がデフォルト値になります。

「検索」が選択されると、FDMEE が Financial Management に接続して、有効なデータ値のリストを取得します。FDMEE は、Financial Management から値を取得し、FDMEE が作成した行(元の値と調整データ値の連結)を追加します。FDMEE は、このように新たに作成された行を使用して、Financial Management への仕訳のロードを管理します。

データ値選択画面で FDMEE が作成する行を次に示します:

- [Contribution Adjs];[Contribution Adjs]
- [Contribution Adjs];[Parent Adjs]
- [Contribution Adjs];<Entity Curr Adjs>
- [Contribution Adjs];<Parent Curr Adjs>
- [Parent Adjs];[Contribution Adjs]
- [Parent Adjs];[Parent Adjs]
- [Parent Adjs];<Entity Curr Adjs>
- [Parent Adjs];<Parent Curr Adjs>
- <Entity Curr Adjs>;[Contribution Adjs]
- <Entity Curr Adjs>;[Parent Adjs]
- <Entity Curr Adjs>;<Entity Curr Adjs>
- <Entity Curr Adjs>;<Parent Curr Adjs>

11. オプション: 「ロジック勘定科目グループ」で、ロケーションに割り当てる論理勘定科目グループを指定します。

ロジック・グループには、ソース・ファイルがロードされた後に生成される1つ以上のロジック勘定科目が含まれます。論理勘定はソース・データから導き出される計算済勘定です。

ロジック・グループの値のリストは、作成先のターゲット・アプリケーションに基づいて自動的にフィルタされます。

12. オプション: 「確認エンティティ・グループ」で、ロケーションに割り当てる確認エンティティ・グループを指定します。

確認エンティティ・グループをロケーションに割り当てた場合、確認レポートは、グループで定義されているすべてのエンティティについて実行されます。確認エンティティ・グループをロケーションに割り当てない場合、確認レポートは、ターゲット・システムにロードされたエンティティごとに実行されます。FDMEE 確認レポートは、ターゲット・システム、FDMEE ソース・データまたは FDMEE 変換済データから値を直接取得します。

確認エンティティ・グループの値のリストは、作成先のターゲット・アプリケーションに基づいて自動的にフィルタされます。

13. **オプション: 「確認ルール・グループ」** で、ロケーションに割り当てる確認ルール・グループを指定します。

システム管理者は、確認ルールを使用してデータの整合性を強化します。確認ルールのセットが確認ルール・グループ内に作成され、確認ルール・グループがロケーションに割り当てられます。続いて、データがターゲット・システムにロードされた後、確認レポートが生成されます。

確認ルール・グループの値のリストは、作成先のターゲット・アプリケーションに基づいて自動的にフィルタされます。


14. 「保存」をクリックします。

15. **オプション:** 次のタスクを実行します:

- 既存のロケーションを編集するには、変更するロケーションを選択し、必要に応じて変更を加えます。次に、「保存」をクリックします。
- ロケーションを削除するには、「削除」をクリックします。

ロケーションを削除すると、ロケーションは、「メタデータ」、「データ・ロード」など、その他のすべての FDMEE 画面から削除されます。

ヒント:

ロケーション名でフィルタするには、フィルタ行が列ヘッダーの上に表示されていることを確認します。(フィルタ行を切り替えるには、 をクリックします。)次に、フィルタに使用するテキストを入力します。

スクリプトで使用するフリー・フォーム・テキストまたは値を指定するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「ロケーション」を選択します。
2. 「ロケーション詳細」で、「統合オプション」タブをクリックします。
3. 「統合オプション」の「統合オプション 1」 - 「統合オプション 4」にフリー・フォーム・テキストまたは値を指定し、「OK」をクリックします。

情報は、「ロケーション」表の「統合オプション」フィールドでアクセスできます。

期間マッピングの定義

ビジネス要件および法的要件に基づき、各種のカレンダー(たとえば、月、週、また日のカレンダー)を自由に使用できます。また EPM システムでは、アプリケーションの要件に応じて異なるカレンダー(期間のレベルが異なるカレンダーなど)を使用することもできます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムのデータがターゲット EPM アプリケーションへ抽出される

ため、ソースである ERP ソース・システムの期間とターゲットである EPM アプリケーションの期間の間の期間マッピングを定義することにより、マッピング関係を確立します。

 ノート:

データ・ルールを定義する前に、期間マッピングを定義します。期間マッピングにより、Enterprise Resource Planning (ERP) カレンダーと EPM アプリケーションの年または期間との間のマッピングが定義されます。次の 3 つの方法で期間マッピングを定義できます:

- **グローバル・マッピング** - 様々なタイプのソース・カレンダーのある複数のソース・システムからデータを取得するターゲット・アプリケーションが多くない場合は、グローバル・マッピングを定義します。グローバル・マッピングを使用すると、個々のマッピングにおいて、様々な期間を使用できます。最初のステップとして、グローバル・マッピングを定義します。
- **アプリケーション・マッピング** - 複雑な期間のタイプがある様々なソース・システムからデータを取得しているターゲット・アプリケーションが多数存在する場合は、グローバル・マッピングの他にアプリケーション・マッピングを作成できます。アプリケーション・マッピングを定義すると、ターゲット期間の月を必要に応じて変更できます
- **ソース・マッピング** - アダプタに基づく統合のソース期間マッピングを指定します。

グローバル・マッピング - サンプル月期間マッピング

次の表に、ソースの 1 か月ごとのカレンダーと、ターゲット・アプリケーションの月ごとの期間とのマッピングを示します。

 ノート:

グローバル・マッピングは、最も小さな粒度で定義する必要があります。たとえば、1 か月ごとのカレンダーと 1 週間ごとのカレンダーがある場合は、最も小さい粒度レベルでグローバル・マッピングを定義します。この場合、期間キーは週レベルとなり、週を月にマッピングすることになります。粒度レベルがより大きな期間に対してはアプリケーション・マッピングを作成できません。

表 2-8 サンプル月期間マッピング

期間キー	前期間キー	期間名	ターゲット 期間の月	ターゲット 期間の四半 期	ターゲット 期間の年	ターゲット 期間の日	ターゲット 年度
Jan 1 2010	Dec 1 2009	2010 年 1 月 1 日	1 月	Q1			FY10
Feb 1 2010	Jan 1 2010	2010 年 2 月 1 日	2 月	Q1			FY10

表 2-8 (続き) サンプル月期間マッピング

期間キー	前期間キー	期間名	ターゲット 期間の月	ターゲット 期間の四半 期	ターゲット 期間の年	ターゲット 期間の日	ターゲット 年度
Mar 1 2010	Feb 1 2010	2010 年 3 月 1 日	3 月	Q1			FY10
April 1 2010	March 1 2010	2010 年 4 月 1 日	4 月	Q2			FY10
May 1 2010	April 1 2010	2010 年 5 月 1 日	5 月	Q2			FY10

グローバル・マッピング - サンプル週期間マッピング

次の表に、Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムの週次カレンダーが EPM アプリケーションの月次の期間にマッピングされる方法を示します。

表 2-9 サンプル週期間マッピング

期間キー	前期間キー	期間名	ターゲット 期間の月	ターゲット 期間の四半 期	ターゲット 期間の年	ターゲット 期間の日	ターゲット 年度
Jan 26 2009	Jan 19 2009	2010 年 1 月 26 日	1 月	Q1			FY09
Feb 2 2009	Jan 26 2009	2010 年 2 月 2 日	2 月	Q1			FY09
Feb 9 2009	Feb 2 2009	2010 年 2 月 9 日	2 月	Q1			FY09
Feb 16 2009	Feb 9 2009	2010 年 2 月 16 日	2 月	Q1			FY09

アプリケーション・マッピング - 1 か月ごとのカレンダー・ソースをソースとするターゲット・アプリケーションの例

次の表に、1 か月ごとのカレンダーをソースとするターゲット・アプリケーションの例を示します。このマッピングは、「アプリケーション・マッピング」タブで実行します。

表 2-10 アプリケーション・マッピングの例 - 1 か月ごとのカレンダー・ソースを使用したターゲット・アプリケーション#1

期間キー	ターゲット期間 の月	ターゲット期間 の四半期	ターゲット期間 の年	ターゲット期間 の日	ターゲット年度
Jan 1 2009	1 月	Q1			FY09
Feb 1 2009	2 月	Q1			FY09
Mar 1 2009	3 月	Q1			FY09

アプリケーション・マッピング - 1 週間ごとのカレンダー・ソースをソースとするターゲット・アプリケーション#2 の例

次の表に、1 週間ごとのカレンダーから導出されるターゲット・アプリケーションの例を示します。このマッピングは、「アプリケーション・マッピング」タブで実行します。

表 2-11 アプリケーション・マッピングの例 - 1 週間ごとのカレンダー・ソースを使用したターゲット・アプリケーション#2

期間キー	ターゲット期間 の月	ターゲット期間 の四半期	ターゲット期間 の年	ターゲット期間 の日	ターゲット年度
Jan 26 2009	1 月	Q1			FY09
Feb 2 2009	2 月	Q1			FY09
Feb 9 2009	2 月	Q1			FY09
Feb 16 2009	2 月	Q1			FY09

 ノート:

損益計算書勘定科目の重複集計を避けるため、ある年の調整期間が翌会計年度の期間に含まれるようなマッピングを定義しないようにしてください。

調整期間マッピング - 期間キーの調整期間へのマッピング

 ノート:

YTD が Enterprise Resource Planning (ERP) ソースとして選択されている場合、調整期間が期末残高となります(期間 12 が置換されます)。PTD の場合、調整期間が期間 12 に追加されます。

表 2-12 調整期間マッピングの例 - 期間の調整期間へのマッピング

期間キー	カレンダー	調整期間	説明
Dec-2003	会計 13	13-03	2003 年の調整期間
Dec-2004	会計 13	13-04	2004 年の調整期間
Dec-2005	会計 13	13-05	2005 年の調整期間
Dec-2007	会計 13	13-07	2007 年の調整期間

 ノート:

ソースが PeopleSoft General Ledger の場合、調整期間マッピングを関連する会計年度とともに設定します。

グローバル・マッピング

1 つのグローバル・マッピングを定義して、個々のマッピングに対する様々な期間をマッピングできます。

グローバル・マッピングを定義するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「期間マッピング」を選択します。
2. 「グローバル・マッピング」タブを選択します。
3. 「追加」をクリックします。
4. 期間キーを選択します。
5. 前の期間キーを選択します。
6. 次を入力します:
 - a. 期間名; 2005年8月など。
 - b. ターゲット期間の月; 8月など。
 - c. ターゲット期間の四半期
 - d. ターゲット期間の年
 - e. ターゲット期間の日
 - f. ターゲット年度

 ノート:

「データ・ストレージ」プロパティが「ラベルのみ」、「動的計算」、または「動的計算/保管」に設定されている Oracle Hyperion EPM Architect の期間ディメンションのメンバーは表示されません。

7. 「保存」をクリックします。

アプリケーション・マッピング

特定のターゲット・アプリケーションに対して特別な期間マッピングを定義する場合には、アプリケーション・マッピングを定義できます。ここで作成するマッピングは個別のターゲット・アプリケーションに適用します。

アプリケーションに対して期間マッピングを作成するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「期間マッピング」を選択します。
2. 「アプリケーション・マッピング」タブを選択します。
3. 「ターゲット・アプリケーション」で、ターゲット・アプリケーションを選択します。
4. 「追加」をクリックします。
5. 期間キーを選択します。
6. 次を入力します:
 - a. ターゲット期間の月
 - b. ターゲット期間の四半期
 - c. ターゲット期間の年
 - d. ターゲット期間の日
 - e. ターゲット年度

7. 「保存」をクリックします。

ソース・マッピング

ソース・マッピングには、明示期間マッピングと調整期間マッピングがあります。明示期間マッピングを作成して、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の期間がソース・システムのカレンダー期間に正しくマップされるようにできます。調整期間マッピングは、データ・ロード・ルールを作成時に「調整期間を含む」オプションを選択する場合にのみ使用されます。

「ソース・マッピング」タブは、2つの領域で構成されています：

- マスター・ソース・システムおよびマッピング・タイプを選択します。
- グリッド - 期間マッピングを定義します。マッピングは、グローバル・マッピングで定義された期間に対してのみ定義できます。新規の **FDMEE** 期間は、このタブでは作成できません。

Oracle E-Business Suite および PeoplesSoft ソース・システムの場合、明示システムまたは調整システムを選択できます。その他すべてのシステムの場合、明示的マッピングのみを選択できます。

ノート:

「データ・ルール」で、「デフォルト」期間マッピングまたは「明示」期間マッピングを選択できます。「期間マッピング」を選択した場合、ソース期間は期間キーおよび前期間に基づいてマップされます。

ソース・マッピングを作成するには：

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「期間マッピング」を選択します。
2. 「ソース・マッピング」タブを選択します。
3. 「ソース・システム」で、ソース・システムを選択します。
4. 「マッピング・タイプ」で、「明示」を選択します。

SAP および JD Edwards ソース・システムの場合、「明示」期間マッピングを選択する必要があります。それ以外のシステム(たとえば、ファイルベース)では、「明示」または「調整」を選択できます。

5. 「追加」をクリックします。
6. ソース・システムの**期間名**を入力して、「OK」をクリックします。




ノート:

バッチ・スクリプトで使用する場合、期間名にスペースを含めることはできません。

7. ソース・システムの**期間キー**を入力して、「OK」をクリックします。
8. ソース・システムの**カレンダー**を入力して、「OK」をクリックします。

9. ソース・システムの **GL 期間**を入力して、「OK」をクリックします。
「GL 期間番号」は、期間名に基づいて値が事前に入力されます。
10. ソース・システムの **GL 名**を入力して、「OK」をクリックします。
11. **オプション**:マッピングの説明を入力します。
12. 「保存」をクリックします。

ソース期間マッピングを作成するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「期間マッピング」を選択します。
2. 「期間マッピング」で、「ソース・マッピング」タブを選択します。
3. 「ソース・システム」で、ソース・システムを選択します。
4. 「追加」をクリックします。
5.  をクリックし、ソース・システムの**期間キー**を選択して、「OK」をクリックします。
6.  をクリックし、ソース・システムの**カレンダー**を選択して、「OK」をクリックします。
7.  をクリックし、ソース・システムの**調整期間**を選択して、「OK」をクリックします。
8. **PeopleSoft ソース・システムの場合のみ**: 「GL 期間の年」に一般会計期間の年を入力します。

PeopleSoft の調整機関の定義には年の値が含まれないため、PeopleSoft ソース・システムには一般会計期間の年が必要です。PeopleSoft からの調整期間データを適切にマップするには、PeopleSoft のすべての調整期間に対してソース会計期間と会計年度の交差を定義します。


9. **オプション**:マッピングの説明を入力します。
10. 「保存」をクリックします。

予算期間マッピングを作成するには(PeopleSoft コミットメント・コントロールの場合のみ):

1. 「ソース・マッピング」を選択します。
2. 「ソース・システム」で、ソース・システムを選択します。
3. 「追加」をクリックします。
4. 「マッピング・タイプ」で、「予算」を選択します。



ノート:

PeopleSoft コミットメント・コントロールからは、予算期間データのみ抽出できます。ソース・カレンダー/期間は、PeopleSoft のコントロール予算定義に基づいています。

5. 「期間名」で、期間名を指定します。
 をクリックして、期間名を検索することもできます。

 ノート:

バッチ・スクリプトで使用する場合、期間名にスペースを含めることはできません。

6. ソース・システムの**カレンダー**を入力して、「OK」をクリックします。
 をクリックして、カレンダー名を検索することもできます。
7. ソース・システムの**GL 期間**を入力して、「OK」をクリックします。 をクリックし、GL の期間名を検索して選択することもできます。
「GL 期間番号」には、期間名に基づいて値が自動的に事前に入力されます。
8. **オプション**:マッピングの説明を入力します。
9. 「**保存**」をクリックします。

 ヒント:

マッピングを削除するには、マッピングを選択し、「**削除**」をクリックします。

カテゴリ・マッピングの定義

 ノート:

カテゴリ・マッピングを定義して、ソース・システムのデータを分類し、ターゲット EPM シナリオ・ディメンション・メンバーにマッピングします。たとえば、Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションで、ソース・システムの実際の残高を格納するための「実績」と呼ばれるシナリオ・ディメンション・メンバーを持つことができます。Oracle Hyperion Planning アプリケーションでは、同じソース・システム・データは、シナリオ・ディメンション・メンバー「現在」を使用して格納されます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition では、1つのカテゴリ・マッピングを作成して両方に1つの名前を与え、それぞれのシナリオを表すことができます。

グローバル・マッピング

1つのグローバル・マッピングを定義すると、個々のマッピングに対して様々なシナリオ・ディメンションをマッピングできます。

グローバル・カテゴリ・マッピングでは、複数のアプリケーションにわたってマッピングを定義できます。たとえば、ほとんどの場合、実績のソース・カテゴリを実績のターゲットにマップするケースです。しかし、実績を現在にマップするターゲット・アプリケーションがある場合もあります。この場合、アプリケーションごとにグローバル・マッピングを上書きできます。

 **ノート:**

バッチ・スクリプトを使用する場合、特殊文字を含む名前、およびスペースを使用しないでください。コマンドラインから実行する場合、一部の文字は問題を発生させる可能性があります。


グローバル・データ種別マッピングを定義するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「カテゴリ・マッピング」を選択します。
2. 「グローバル・マッピング」を選択します。
3. 「追加」をクリックします。
空白のエントリ行が表示されます。
4. 「カテゴリ」に、カテゴリの名前を入力します。
5. 「説明」に、カテゴリの説明を入力します。
6. 「頻度」で、カテゴリの頻度を選択します。
カテゴリは、日次、月次、四半期ごと、年次など、期間マッピングで定義された頻度を示します。
7. ターゲット・カテゴリを入力します。
8. 「保存」をクリックします。
9. **オプション:** 次のタスクを実行します:
 - マッピングを編集するには、マッピングを選択し、必要に応じて変更した後、「保存」をクリックします。
 - マッピングを削除するには、「削除」をクリックします。

アプリケーション・マッピング

アプリケーション・マッピングは、グローバル・マッピングとは異なり、ターゲット・アプリケーションに対して定義できます。

アプリケーション・カテゴリのマッピングを定義するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「カテゴリ・マッピング」を選択します。
2. 「カテゴリ・マッピング」で、「アプリケーション・マッピング」タブを選択します。
3. 「ターゲット・アプリケーション」から、ターゲット・アプリケーションを選択します。
4. 「追加」をクリックします。
空白のエントリ行が表示されます。
5. カテゴリを選択します。
6. ターゲット・カテゴリを入力するか、 をクリックしてターゲット・カテゴリを検索します。
7. 「保存」をクリックします。
8. **オプション:** 次のタスクを実行します:

- マッピングを編集するには、マッピングを選択し、必要に応じて変更します。次に、「**保存**」をクリックします。
- マッピングを削除するには、「**削除**」をクリックします。

3

データの統合

次も参照:

- [データのロード](#)
- [データ・ロード、同期およびライトバック](#)

データのロード

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition とは、ビジネス・アナリストが標準化された財務データ管理プロセスを開発し、任意のソース・システムからのデータを検証できると同時に、コストおよび複雑さを削減できるソリューションです。FDMEE によって、財務ユーザーはソース・データを定義し、データを必要なターゲット・フォーマットに変換するためのマッピング・ルールを作成し、定期的なデータ・ロード・プロセスを実行および管理する統合プロセスを完全に制御できます。

ノート:

データを Oracle Hyperion Financial Management にロードするには、有効な Financial Management ユーザーであることが必要です。また、"管理者"または"拡張分析"の役割を割り当てられている必要があります。

メンバー・マッピングの作成

メンバー・マッピングは、ソース値に基づいて、ターゲット・ディメンショナリティへのソース・ディメンショナリティの変換方法を指定する際に使用します。データ・ロード時にメンバー・マッピングが参照されることにより、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、ターゲット・アプリケーションにロードされるデータをディメンション化する方法を決定できます。単一ディメンション内のソース・メンバーとターゲット・ディメンション・メンバー間の関係が定義されます。メンバー・マッピングは、ターゲット・ディメンションごとに作成する必要があります。

5つのタイプのメンバー・マッピングがあります。


- **明示** - ソース値との完全一致がターゲット値に置き換えられます。
- **範囲** - ソース値の範囲が1つのターゲット値に置き換えられます。
- **含む** - 非シーケンシャルなソース値のリストを1つのターゲット値にマッピングできます。
- **マルチ・ディメンション** - ソース・セグメント/チャートフィールドの組合せに対してターゲット値が割り当てられます。
- **類似** - ソース値内の文字列との一致がターゲット値に置き換えられます。

次の表は、メンバー・マッピングの例です。現金-101、現金-102 および現金-103 は、1つの EPM メンバー(現金)にマップされています。

表 3-1 セグメント・メンバーを EPM メンバーにマップする方法

セグメント/チャートフィールド・メンバー	EPM メンバー
現金-101	現金
現金-102	現金
現金-103	現金
費用-1	費用
費用-2	費用

ソース値には、特殊文字を使用できます。「類似」マッピングのソース値式での特殊文字の使用およびターゲット値式での特殊文字の使用を参照してください。

 ノート:

マルチディメンショナル・マッピングのターゲット値は、明示的なメンバー名である必要があります。ワイルドカードまたは特殊文字はサポートされません

メンバー・マッピングを定義するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「データ・ロード・マッピング」で、「ロケーション」を選択します。
3. 「ディメンション」を選択します。
4. 「明示」タブ、「範囲」タブ、「マルチ・ディメンション」タブまたは「類似」タブのいずれかを選択して、マッピングのタイプを選択します。

 ノート:

ディメンションにメタデータ・マッピングを定義する場合、FDMEE によって「類似」メンバー・マッピングが自動的に作成されます。メンバーの接頭辞を入力する場合、同じメンバーの接頭辞がメンバー・マッピング内のターゲット値として自動的に入力されます。システムによって生成されたマッピングのルール名および説明フィールドには、「DEFAULT」と表示されます。データが抽出されると、ユーザー定義のマッピングが最初に抽出されてから、システムによって生成されたマッピングが抽出されます。

「タイプ」オプション:

- **明示** - ソース値との完全一致がターゲット値に置き換えられます。たとえば、ソース値「ABC」がターゲット値「123」に置き換えられます。「明示」方式を使用したマッピングの作成を参照してください。
- **範囲** - ソース値の範囲が 1 つのターゲット値に置き換えられます。たとえば、「001」から「010」までの範囲が 1 つの値「999」に置き換えられます。「範囲」方式を使用したマッピングの作成を参照してください。

- **含む** - 「含む」マッピングでは、非シーケンシャルなソース値のリストを1つのターゲット値にマッピングできます。この場合、複数の値が1つのルール内で1つの値にマッピングされ、明示マップでは必要な複数のルールを作成する必要がなくなります。たとえば、ソース勘定科目 **1503**、**1510** および **1515** をターゲット勘定科目 **15000010** にマッピングできます。
- **マルチ・ディメンション** - 指定された複数のソース値の組合せに対してターゲット値が割り当てられます。
たとえば、ソース値の組合せがエンティティ **-001**、**002** 部署 **-ABC**、**XYZ** 勘定科目 **-1222**、**1333** の場合、勘定科目ディメンションに割り当てられるターゲット値は **1200** です。
- **類似** - ソース値内の文字列との一致がターゲット値に置き換えられます。たとえば、ソース値「**Department**」がターゲット値「**Cost CenterA**」に置き換えられます。「**類似**」方式を使用したマッピングの作成を参照してください。

変換用のソース値を処理する場合、特定のソース値に複数のマッピングが適用される場合があります。優先度の順位は、「明示」、「範囲」、「含む」、「マルチ・ディメンション」、「類似」の順です。「範囲」タイプと「類似」タイプ間ではマッピングが重複する場合があります。

マッピング・タイプ内の優先度は、ルール名により決定されます。ルールは、マッピング・タイプ内のルール名のアルファベット順に処理されます。「数字」も順序付けに使用できます。たとえば、十単位または百単位で採番する場合は、既存のルールの間新しいルールを挿入できます。たとえば、ルールに **10**、**20**、**30** の番号が付いている場合は、**25** から開始するルールを追加します。そうすると、他のルールの名前を変更する必要がありません。

ノート:

バッチ・スクリプトを使用する場合、特殊文字を含む名前、およびスペースを使用しないでください。コマンドラインから実行する場合、一部の文字は問題を発生させる可能性があります。



ヒント:

「**値のリフレッシュ**」をクリックすると、表示されるセグメントまたはチャートフィールド値のリストがリフレッシュされます。この操作は、明示的なマッピングを作成する際に役に立ちます。

「明示」方式を使用したマッピングの作成

「明示」マッピングでは、ソース値との完全一致をターゲット値に置き換えることができます。明示的なマッピングを使用して、ソースのメンバーをターゲット・アプリケーションに明示的にマッピングします。たとえば、**Account1** をターゲット・アプリケーションの **Account100** にマッピングすることができます。これにより、ターゲット・アプリケーションにロードされるデータ・ファイルをディメンション化する方法を明示的に定義できます。


「明示」マッピングを作成するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「ディメンション」からディメンション名を選択します。
3. 「明示」タブを選択します。
4. 「追加」をクリックします。
5. 「ソース値」に値を入力するか、 をクリックして値を選択します。
「類似」マッピングのソース値式での特殊文字の使用を参照してください。
6. オプション: マッピングの説明を入力します。
7. 「ターゲット値」を入力するか、 をクリックしてメンバーを選択します。
ターゲット値式での特殊文字の使用を参照してください。
8. 指定したターゲット勘定科目の符号を反転するには、「符号の変更」を選択します。
9. 「説明」にマッピングの説明を指定します。
10. 「ルールに適用」を選択すると、マッピングがロケーション内の特定のデータ・ルールのみにも適用されます。
同じロケーションのこれ以外のデータ・ルールには、マッピングは適用されません。
デフォルトでは、あるロケーションで指定されたマッピングはロケーション内のすべてのデータ・ルールにも適用可能です。
11. 「保存」をクリックします。

「範囲」方式を使用したマッピングの作成

「範囲」マッピングでは、ソース値の範囲をカンマで区切って入力できます。ソース値の範囲は、1つのターゲット値に置き換えられます。範囲マッピングは、元帳のいくつかの勘定科目をプランで1つの勘定科目に連結する場合に使用します。

「範囲」マッピングを作成するには:


1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「ディメンション」からディメンション名を選択します。
3. 「範囲」タブを選択します。
4. 「追加」をクリックします。
5. ソース値を「ソース値」範囲に入力します。
6. 「ターゲット値」を入力するか、 をクリックしてメンバーを選択します。
ターゲット値は、ディメンション・メンバー名です。ターゲット値式での特殊文字の使用を参照してください。
7. 指定したターゲット勘定科目の符号を反転するには、「符号の変更」を選択します。
8. 「ルール名」に値を入力します。
9. 「説明」にマッピングの説明を入力します。

10. 「**ルールに適用**」を選択すると、マッピングがロケーション内の特定のデータ・ルールのみ適用されます。
 同じロケーションのこれ以外のデータ・ルールには、マッピングは適用されません。
 デフォルトでは、あるロケーションで指定されたマッピングはロケーション内のすべてのデータ・ルールに適用されます。
11. 「**保存**」をクリックします。

「含む」方式を使用したマッピングの作成

「含む」マッピングでは、非シーケンシャルなソース勘定科目のリストを1つのターゲット勘定科目にマッピングできます。この場合、複数の勘定科目が1つのルール内で1つの勘定科目にマッピングされ、「明示」マップでは必要な複数のルールを作成する必要がなくなります。

「含む」マッピングを作成するには:

1. 「**ワークフロー**」タブの「**データ・ロード**」で、「**データ・ロード・マッピング**」を選択します。
2. 「**データ・ロード・マッピング**」で、「**追加**」をクリックします。
 空白の行が追加されます。
3. 「**ディメンション**」からディメンション名を選択します。
4. ソース値を「**ソース値**」範囲に入力します。
 ソース値は Enterprise Resource Planning (ERP)セグメント値です。In マッピングでは、非シーケンシャルなソース値を指定できます。ソース値はカンマで区切り、100,199 のように指定します。
5. 「**ターゲット値**」を入力するか、 をクリックしてメンバーを選択します。
6. 指定したターゲット勘定科目の符号を反転するには、「**符号の変更**」を選択します。
7. 「**ルール名**」に値を入力します。
8. 「**説明**」で、「含む」マッピングの説明を入力します。
9. 「**ルールに適用**」を選択すると、マッピングがロケーション内の特定のデータ・ルールのみ適用されます。
 同じロケーションのこれ以外のデータ・ルールには、マッピングは適用されません。
 デフォルトでは、あるロケーションで指定されたマッピングはロケーション内のすべてのデータ・ルールに適用されます。
10. 「**保存**」をクリックします。

マルチディメンション方式を使用したマッピングの作成

マルチディメンション・マッピングを使用すると、複数のソース列値に基づいてメンバー・マッピングを定義できます。この機能を使用すると、ターゲット・アプリケーションで使用可能でないディメンションにデータをロードできます。たとえば、勘定科目ディメンションのマッピングは、エンティティ、製品およびプロジェクトのソース値に基づいて定義できます。マルチディメンション・マッピングでは、ソース値の組合せに基づいてターゲット値を導出します。さらに、ターゲット・アプリケーション登録に、参照ディメンションを追加できます。これらのディメンションは、ターゲット・アプリケーションに存在しないソース・


ディメンションを含みます。これらにより、マルチディメンション・フィルタの作成の柔軟性が増します。これで、条件付きのデータ・ロードが容易になります。

 **ノート:**

マルチディメンショナル・マッピングを使用する場合、ソースは 75 文字以下である必要があります。

複数のディメンションを使用してマッピングを作成するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「ディメンション」からディメンション名を選択します。
3. 「マルチ・ディメンション」タブを選択します。
4. 「マルチ・ディメンション」で、「編集」をクリックします。
5. 「ルール名」で、ルールの名前を入力します。
6. 「ターゲット値」で、ターゲット・ディメンション・メンバーを指定します。

 をクリックして、ターゲット値を選択することもできます。

マルチディメンショナル・マッピングのターゲット値は、明示的なメンバー名である必要があります。ワイルドカードまたは特殊文字はサポートされません

7. ソース勘定科目の値の符号を反転するには、「符号の変更」を選択します。
8. 「説明」にマッピングの説明を入力します。
9. 「追加」をクリックして、マッピング条件を指定するための空白行を作成します。
10. 「ディメンション」で、追加するディメンションを選択します。

コンテキストとして、「ソース・セグメント/チャートフィールド」列と「データ表」列が表示されます。

11. 「条件」で、値をマッピングする方法を選択します。

使用可能な条件:

- 明示
- 範囲
- 類似
- 含む

12. 「値」で、ディメンション・メンバー名を指定します。
13. ステップ 9 から 12 までを繰り返して、複数の条件を指定します。
14. 「ルールに適用」を選択すると、マッピングがロケーション内の特定のデータ・ルールだけに適用されます。

同じロケーションのこれ以外のデータ・ルールには、マッピングは適用されません。

デフォルトでは、あるロケーションで指定されたマッピングはロケーション内のすべてのデータ・ルールに適用可能です。

15. 「保存」をクリックします。

マルチディメンショナル・マッピングでの特殊文字の使用

ソース値とターゲット値の式では、特殊文字を使用できます。これらの文字(通常は?および*)には、1文字以上の接頭辞または接尾辞を追加でき、その接頭辞または接尾辞でソース値がフィルタ処理されます。

特殊文字は次のとおりです。

- アスタリスク(*) - アスタリスク(*)は、ソース値を表します。アスタリスク(*)には、1文字以上の接頭辞または接尾辞を追加でき、その接頭辞または接尾辞でソース値がフィルタ処理されます。ワイルド・カードまたはストリップ(ライトバックに対するデータ・ロード)は、ソース内に存在するものは何でも取得し、それをターゲット列に、通常は接頭辞を追加して入れます。アスタリスク(*)は、ソース値を表します。アスタリスク(*)には、1文字以上の接頭辞または接尾辞を追加でき、その接頭辞または接尾辞でソース値がフィルタ処理されます。ワイルド・カードは、ソース内に存在するものは何でも取得し、それをターゲット列に、通常は接頭辞を追加して入れます。
- 疑問符(?) - 疑問符(?)は、ソース値から1文字を削除します。1つ以上の疑問符(?)を式で使用できます。また、疑問符と他の式を組み合わせて使用することもできますたとえば、A??は、Aで始まり、その後2文字が続くメンバーを検索し、そのメンバーを選択するか、2文字を取り除きます。

複数のディメンションの場合、ソース・ディメンションは引き渡される値であり、ワイルド・カードはその値にのみ適用されます。ディメンションは複数ディメンション・ルールに存在でき、ワイルド・カードを使用できます。接頭辞/接尾辞は、ターゲット・ディメンション(ルールが置かれているディメンション)に等しいソースにのみ適用されます。

「類似」方式を使用したマッピングの作成

「類似」マッピングでは、入力したソース値の文字列との一致を、ターゲット値に置き換えることができます。

「類似」マッピングを作成するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「ディメンション」からディメンション名を選択します。
3. 「類似」タブを選択します。
4. 「追加」をクリックします。
空白の行が追加されます。
5. 「ソース値」に文字列を入力します。

ソース値は Enterprise Resource Planning (ERP)セグメント値です。ソースの「類似」ライトバック・マッピングでは、特殊文字がサポートされています。「類似」マッピングのソース値式での特殊文字の使用を参照してください。

6. 「ターゲット値」を選択するか、 をクリックしてメンバーを選択します。

ターゲット値は、EPM ディメンション・メンバー名です。ターゲットの「類似」ライトバック・マッピングでは、特殊文字がサポートされています。ターゲット値式での特殊文字の使用を参照してください。

7. 指定したターゲット勘定科目の符号を反転するには、「**符号の変更**」を選択します。
8. 「**ルール名**」に値を入力します。
9. 「**説明**」に「類似」の説明を入力します。
10. 「**ルールに適用**」を選択すると、マッピングがロケーション内の特定のデータ・ルールだけに適用されます。
同じロケーションのこれ以外のデータ・ルールには、マッピングは適用されません。
デフォルトでは、あるロケーションで指定されたマッピングはロケーション内のすべてのデータ・ルールに適用されます。
11. 「**保存**」をクリックします。

「類似」マッピングのソース値式での特殊文字の使用

ソース値およびターゲット値の式には、1つ以上の特殊文字を指定できます。特殊文字は、「類似」マッピングでのみサポートされています。

- **アスタリスク(*)**

アスタリスク(*)は、ソース値を表します。アスタリスク(*)には、1文字以上の接頭辞または接尾辞を追加でき、その接頭辞または接尾辞でソース値がフィルタ処理されます。ワイルド・カードまたはストリップ(ライトバックに対するデータ・ロード)は、ソース内に存在するものは何でも取得し、それをターゲット列に、通常は接頭辞を追加して入れます。

- **疑問符(?)**

疑問符(?)は、ソース値から1文字を削除します。1つ以上の疑問符(?)を式で使用できます。また、疑問符と他の式を組み合わせることもできますたとえば、A??は、Aで始まり、その後に2文字が続くメンバーを検索し、そのメンバーを選択するか、2文字を取り除きます。

- **<1>、<2>、<3>、<4>、<5>**

連結された値を持つ行を処理し、対応するセグメント値(セグメント番号で識別される)を抽出します。各セグメントは、アンダースコア(_)で区切られます。1つのソース値式では、1つのセグメント値しか抽出できません。ソース・メンバーでは、区切り文字としてアンダースコア(_)記号を使用する必要があります。


 **ノート:**

<1>、<2>、<3>、<4>、<5>は疑問符(?)とは併用できませんが、アスタリスク(*)とは併用できません。

- **<空白>**

空白文字(スペース)を含む行のみを処理します。

ソース・メンバーが" "である式のみが<BLANK>として読み込まれます。この場合、一重引用符が単一のスペース文字を囲みます。ソースに NULL があり、,,のように、または" "で囲まれるスペースとして表示される場合は、NULL は<BLANK>として解釈されません。' <space char>式のみ解釈されます。

 ノート:

<BLANK>表記はソースとターゲットの両方の式で使用できます。ターゲット式で使用する場合は、ターゲットに空白が書き込まれます。

任意の空白フィールドについて Peoplesoft 仕訳インタフェース表にライトバックする場合は、<BLANK>ターゲットを使用します。

単一セグメント、連結セグメント、チャートフィールドのディメンション・マッピングの場合も、同様です。

表 3-2 特殊文字を使用した式の例

使用する特殊文字	マッピング・タイプ	ソース値	ターゲット値	結果	ノート
*	データのロード	*	1000	1000 の戻り値は 1000 WXYZ の戻り値は 1000	この例では、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ですべての行が処理されて、ソース値がデフォルト値 1000 で上書きされています。この式では、WXYZ も 1000 を返します。ソース値 FDME E にアスタリスクを 1 つ入力したため、すべてのソース値がターゲット値 1000 に置き換わります。
*	データのロード	*	*	1000 の戻り値は 1000 WXYZ の戻り値は WXYZ	この例では、 FDME E ですべての行が処理され、ソース値は同じ値に置き換わります。
*	ストリップ	*	A*	101 の戻り値は A101	すべてのソース・メンバーを処理し、前に「A」を追加します。

表 3-2 (続き) 特殊文字を使用した式の例

使用する特殊文字	マッピング・タイプ	ソース値	ターゲット値	結果	ノート
*	ストリップ	*_DUP	*	1000_DUP の戻り値は 1000	「_DUP」で終わるソース値のみを処理して、それを除去します。
?	ストリップ	?*	*	A1000 の戻り値は 1000 B2000 の戻り値は 2000	この結果、1文字以上のソース値のみが処理されます。最初の文字を取り除きます。
?	ストリップ	*????	*	1000_DUP の戻り値は 1000 A1000 の戻り値は A	この結果、4文字以上のソース値のみが処理されます。末尾の4文字を取り除きます。
<1>, <2>, <3>, <4>, <5>	データのロード	<1>	*	01_420 の戻り値は 01	
<1>, <2>, <3>, <4>, <5>	データのロード	<2>	*	01_420 の戻り値は 420	
<1>, <2>, <3>, <4>, <5>	データのロード	<3>	*	01_420_AB_CC1_001 の戻り値は AB	
<1>, <2>, <3>, <4>, <5>	ストリップ	?<1>	*	A01_420 の戻り値は 01	
<BLANK>	データのロード	<BLANK>	[None]	' ' の戻り値は [None] '01_ ' の戻り値は [None]	一重引用符は説明用です。

自動マップ・ワイルドカード

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、ソースとターゲットのメンバーにワイルドカード文字(*および?)を許可することでターゲット勘定科目またはターゲット・エンティティの派生が可能になります。ソース列およびターゲット列にワイルドカード文字があるマッピング表レコードは、自動マップとみなされます。

FDMEE は、ターゲット値を検証しません。

自動マップの例

表 3-3 自動マップの例

ルール名	ルール説明	ソース値	ターゲット勘定科目
w0011--	現金勘定科目	0011??	Cash.??

総勘定元帳の試算表レコードの例

表 3-4 総勘定元帳の試算表レコードの例

GL 勘定科目	センター	説明	金額
001100	0160000	銀行預金	1000.00
001101	0000000	企業 LB 現金	2000.00
001116	0001000	小口現金	1000.00
223500	0160000	AP	5000.00

レコード変換結果

表 3-5 レコード変換結果

GL 勘定科目	Hyperion 勘定科目
001100 0160000	Cash.00
001101 0000000	Cash.01
001116 0160000	Cash.16

変換プロセスの説明

自動マップ・エントリの条件(Like 0011??)によって、総勘定元帳試算表から最初の 3 つのレコードが取得されます。自動マップ・エントリの「ターゲット勘定科目」列にはワイルドカード文字が含まれているため、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition はソース勘定科目を検索し、ターゲット勘定科目内のワイルドカード文字をソース勘定科目内の実際の文字に置換する必要があります。

「ターゲット勘定科目」にある Cash の後の 2 つの疑問符を置換するには、「ソース値」にある ?? で表されたソース勘定科目文字を使用します。

マッピング・スクリプトを使用した条件マッピング

条件マッピングを使用すると、ソース・メンバーはハードコード化されたターゲット・メンバーでなく、スクリプト式にマッピングされます。条件マッピングはルールベースのマッピング(Between、In、Like)に対してのみ有効です。「ターゲット値」列に #SCRIPT または #SQL を配置して、条件マッピングをアクティブにできます。Jython スクリプトには #SCRIPT を、SQL スクリプトには #SQL を使用します。条件付きマッピングをディメンション処理順序とともに使用すると、ディメンション・マッピングの結果に基づいたマッピングが使用可能に

なります。つまり、すでに処理されたディメンション・マッピングです。マッピング・スクリプトの使用を参照してください。

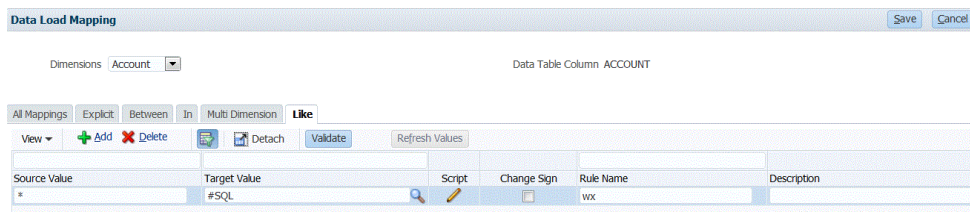
 ノート:

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、Jython スクリプトは、条件マッピングではサポートされていません (#SCRIPT は、ターゲット値列では使用できません。)

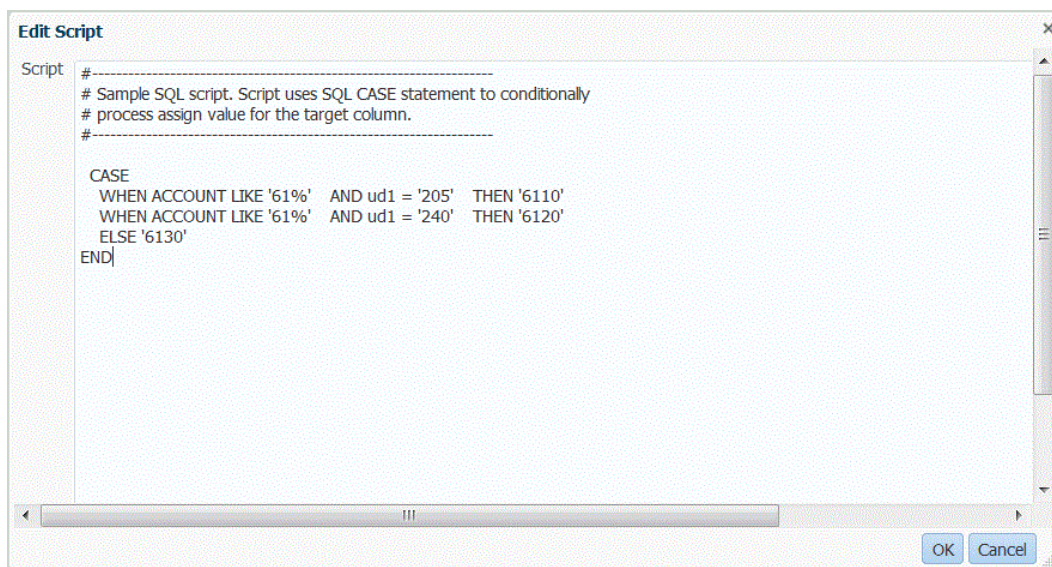
条件付きマッピングを適用するには:

1. 「ワークフロー」 タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「データ・ロード・マッピング」で、「追加」をクリックします。
空白の行が追加されます。
3. 「ディメンション」からディメンション名を選択します。
4. 「範囲」、「含む」,または「類似」 タブを選択します。
5. ソース値を「ソース値」範囲に入力します。
6. 「ターゲット値」に「#SQL」と入力します。
Jython スクリプトを使用するには、#SCRIPT を入力します。詳細は、マッピング・スクリプトでの Jython オブジェクトの使用を参照してください。

鉛筆アイコンが有効になります。



7. 鉛筆アイコンをクリックします。
8. 「スクリプトの編集」画面で、SQL スクリプトを指定します。
このサンプル・スクリプトでは、SQL CAST 文を使用して、ターゲット列に割り当てられる値を条件付きで処理します。



FDMEET は、エラーのチェックやスクリプトの検証を行いません。テスト環境のデータ・ファイルでスクリプトをテストし、その結果を検証する必要があります。

9. 「**ルール名**」に、マッピング・スクリプトで使用するデータ・ロード・ルールを指定します。
10. 「**保存**」をクリックします。

ターゲット値式での特殊文字の使用

アスタリスク(*)はターゲット式でのみ使用でき、アスタリスク(*)文字には任意の数の接頭辞または接尾辞を追加できます。ルールを実行すると、アスタリスク(*)が結果のソース値(独自のソース式がある場合もあれば、ない場合もあります)に置き換えられ、ターゲット式で指定した任意の接頭辞または接尾辞に連結されます。例:

ターゲット値:

A*

結果:

1000 = A1000

ターゲット値:

*_DUP

結果:

1000 = 1000_DUP

 ノート:

データ・マッピングではターゲット値の式で<空白>がサポートされており、すべてのマッピング・タイプ(「類似」、「範囲」、「明示」、マルチ・ディメンション)で使用できます。Enterprise Resource Planning (ERP) GL インタフェース表にデータを書き込むと、ワークフロー・プロセスの検証ステップに合格するために<BLANK>表記をターゲット・ディメンション・マッピングに使用できます。たとえば、Peoplesoft 仕訳インタフェース表にライトバックする場合、<BLANK>の仕様は、ユーザーがチャート・フィールド値に値を指定する必要がなく、ライトバック・データを正常に検証する必要がある場合に使用できます。

ターゲット値のフォーマット・マスク・マッピング

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、ターゲット・メンバーに対して書式マスクを指定する機能をサポートします。フォーマット・マスクでは、ソース・メンバー詳細とオプションのユーザー定義テキストの組合せに基づいて、ターゲット・メンバーを定義します。この機能は、ソース・メンバーの一部、追加の接頭辞、接尾辞、またはターゲットの置換テキストに基づいてターゲット・メンバーを指定する際に便利です。

フォーマット・マスクは、明示以外のすべてのマッピング・タイプのターゲット・メンバー指定で使用できます。このマッピング・タイプの一般的な用法は、ソースからのセグメントの置換、文字列操作でのセグメントの置換、接頭辞または接尾辞を使用した文字列演算でのセグメントの置換の3つのカテゴリに分けられます。

#FORMAT マッピング・タイプのコンポーネント

#FORMAT タイプ・マッピングは、次のコンポーネントで構成されます:

表 3-6 #Format マッピング・タイプのコンポーネント

コンポーネント	説明
#FORMAT	FORMAT マッピング・タイプがターゲット・メンバーに指定されたことを示します。

表 3-6 (続き) #Format マッピング・タイプのコンポーネント

コンポーネント	説明
<format mask>	<p>ユーザー定義のフォーマット・マスク。フォーマットの定義には次の文字が使用されます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • ?— ソース・メンバーまたはメンバー内のセグメントで特定位置にある文字を含みます。 • #— ターゲット・メンバーを作成するときにソースの 1 文字をスキップ(削除)します。 • 文字 - ユーザー定義の文字をターゲットにそのまま含めます。接頭辞、接尾辞、固定文字列または必要な文字のために使用されます。これは、特別なフォーマット・マスク文字と組み合わせて使用できます。 • *— ソース・セグメントまたはソースのすべての文字を含めます。セグメントの唯一のフォーマット・マスク文字として*を使用すると、セグメント全体の値がソースからコピーされます。 <p>#または?記号と組み合わせて*を使用すると、残りの未使用の文字すべてが引き継がれます。</p> <p>*は、ワイルドカード文字で、?または#で指定されていない残りの文字を採用します。たとえば、ソースが abcd の場合に*を使用すると、ターゲットは abcd になります。ターゲットが?#*の場合、結果は acd になります。</p> <p>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でセグメント内に"*"がある場合、"*"の後に指定されているものはすべて、フォーマットで指定された"文字"以外無視されます。</p>
<segment delimiter>	<p>オプションのセグメント区切り記号は、ソース・メンバーとターゲット・メンバーのセグメントを区切るために使用される文字を定義します。このルール・タイプではソースとターゲットの区切り記号を同じにする必要があります。セグメント・デリミタが指定されていない場合、フォーマット・マスクはセグメント指定またはデリミタに依存せずにメンバー全体に適用されます。</p>

#FORMAT マッピングの例

次に、#FORMAT のすべてのオプションを使用する例を示します:

表 3-7 #Format マッピング・タイプの例

ソース	ターゲット	結果
12345-6789-012-3456ABC-001	#FORMAT("??*-GROUP-AA##? #*X-GROUP","-") 説明: 最初のセグメントの最初の 3 文字を採用し、2 番目のセグメント全 体を採用し、3 番目のセグメントをテ キスト「GROUP」で置換し、4 番目 のセグメントに接頭辞として AA を 付けて、3 番目と 4 番目の文字を削除 し、5 番目の文字は保持し、6 番目 の文字を削除し、ABC は保持して接頭 辞 X を付けて、5 番目のセグメントを テキスト「GROUP」で置換します。	123-6789-GROUP-AA5ABCX- GROUP

セグメントの置換

ソース・メンバーのフォーマットをターゲット・メンバーの定義として使用する際に、ソースの値を再利用するかわりに、ソース・セグメントの一部を置換できます。たとえば、ソースを 4 番目のセグメントでフィルタリングし、7 番目のセグメントを明示的な値で置換して、その他のセグメントの値を次のように保持する必要があります:

ソース:

```
?????-?????-?-012000000-?????-???-?????-?????-?????-?????-??  
??
```

ターゲット:

```
?????-?????-?-012000000-?????-???-GROUP-?????-?????-?????-???
```

文字列演算を伴うセグメントの置換

置換するセグメントにおいて文字列演算を実行できます。たとえば、値 11002293 があり、セグメントを書き込むときに、下 4 桁または上 6 桁だけを使用する必要があります。メンバー 11002293 を使用する例:

- 最初の 2 文字を無視すると、結果は 002293 になります。#FORMAT("##*")を使用します。
- 最後の 3 文字を切り捨てると、結果は 11002 になります。#FORMAT("?????")を使用します。
- 最初の 2 文字を無視し、最後の 3 文字を切り捨てると、結果は 002 になります。#FORMAT("##???")を使用します。

文字列演算と接頭辞および接尾辞を使用するセグメントの置換

ソースのセグメント値をターゲットの対応セグメントでそのまま使用できます。たとえば、ソースが A100 の場合、値をターゲットの値としてマップできるため、この値をターゲットの値としてマップします。この場合、ソースに対してワイルドカードを使用し、ターゲットの該当セグメントにソースに基づいて明示的な値を指定します。

 ノート:

この他の文字列演算が必要な場合は、スクリプトを使用してください。

#FORMAT マッピング・タイプの使用

#FORMAT マッピング・タイプを使用するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「ディメンション」でディメンション名を選択します。
3. 「範囲」、「含む」または「類似」タブを選択します。
4. 「追加」をクリックします。
5. 「ソース値」に、マッピングするセグメントを入力します。

たとえば、「類似」タブで、「ソース値」フィールドに 12345-6789-012-3456ABC-001 と入力します。

6. #FORMAT(<format mask>, <segment delimiter>)を使用して、ターゲット・メンバーのフォーマット・マップを選択します。

たとえば、#FORMAT("??*-*-GROUP-AA##?#*X-GROUP", "-") と入力します。

[#FORMAT マッピング・タイプのコンポーネント](#)を参照してください。

7. 指定したターゲット勘定科目の符号を反転するには、「符号の変更」を選択します。
8. 「ルール名」に値を入力します。
9. 「説明」にマッピングの説明を入力します。
10. 「ルールに適用」を選択すると、マッピングがロケーション内の特定のデータ・ルールのみにも適用されます。
デフォルトでは、あるロケーションで指定されたマッピングはロケーション内のすべてのデータ・ルールにも適用されます。
11. 「保存」をクリックします。

ステップ 5 と 6 で作成したフォーマット・マップを適用した結果は、123-6789-GROUP-AA5ABCX-GROUP です。

メンバー・マッピングの無視

ディメンション・メンバーへのデータのロードは無視できます。

メンバー・マッピングを無視するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. ソース値を選択し、「ターゲット値」に **ignore** と入力します。

たとえば、ビジネス・ユーザーが部門 101、103 および 105 に関連するデータの抽出は必要ないとします。ソース値 101、103 および 105 で **In** マッピングを指定し、ターゲット値に **ignore** を指定します。このようにすると、部門 101、103 および 105 に関連するデ

ータは抽出されませんが、「インポート・フォーマット」オプションではアプリケーションに書き込まれません。

メンバー・マッピングのインポート

選択したCSVファイルおよびTXTファイルからメンバー・マッピングをインポートし、マッピングを作成できます。メンバー・マッピングのインポートでは、ターゲット・メンバーに対する検証または検証なしオプションとともに、マージ・モードまたは置換モードもサポートします。

メンバー・マッピングのインポートは、オンライン・モードでもオフライン・モードでも実行できます。

また、Excelからマッピングをインポートしたり、Excelテンプレートをダウンロードすることもできます。

[Excelマッピングのインポート](#)および[Excelテンプレート\(マッピング・テンプレート\)のダウンロード](#)を参照してください

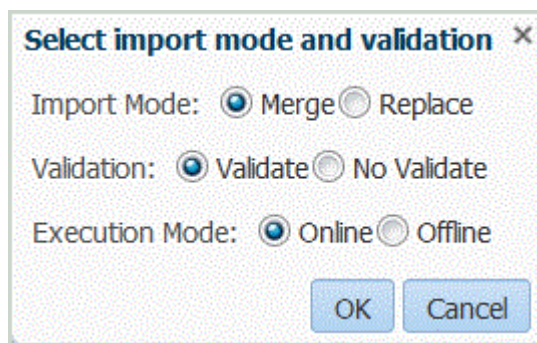
メンバー・マッピングをインポートするには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「インポート」ドロップダウンから、次のいずれかを選択します:
 - 現在のディメンション
 - すべてのディメンション
 - Excelからインポート
[Excel試算表ファイルを使用したデータのインポート](#)を参照してください。
 - Excelテンプレートのダウンロード
[Excel試算表テンプレートのダウンロード](#)を参照してください。

インポートするファイルの選択画面が表示されます。

3. インポートするファイルに移動し、「OK」をクリックします。
4. オプション: 必要な場合は、「アップロード」をクリックして、インポートするファイルに移動してから、「OK」をクリックします。

「インポート・モードと検証を選択してください」画面が表示されます。



5. 「インポート・モード」から、インポート・モードを選択します:

- マージ - アプリケーション内のデータをデータ・ロード・ファイル内のデータで上書きします。
 - 置換 - データ・ロード・ファイルのディメンションの値をクリアし、既存ファイルの値で置換します。Oracle Hyperion Planning アプリケーションの場合、Planning アプリケーションの場合、置換ではまず、ロードする年、期間、シナリオ、バージョンおよびエンティティ・ディメンションのデータがクリアされ、既存のファイルの値に置き換えられます。
6. 「**検証**」から、メンバー・マッピングを検証することを選択します。
- 検証では、インポートされた一般会計におけるすべてのデータに対応するマッピングがあることが確認されます。
7. 「**実行モード**」で、インポートを実行するモードを選択します:
- オンライン - インポートを即時に処理します。
 - オフライン - インポートをバックグラウンドで実行します。
8. 「**OK**」をクリックします。

メンバー・マッピング・インポート・ファイルで、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、次のいずれかの文字を列区切り文字としてサポートします:

- ,
- |
- ;

列の順序:

- ソース値
- ターゲット値
- ルール名
- ルール説明

 **ノート:**

ターゲット勘定科目の前にマイナス記号を追加すると、「符号の変更」が選択された状態でインポートされます。

表 3-8 ソース・タイプのマッピング

列	マッピング
100, Cash, 100, Explicit Mapping	明示マッピング
100>199, Cash, R2, Between Mapping	「>」は BETWEEN マッピングを示します。
1*, Cash, R3, Like Mapping	「*」は LIKE マッピングを示します。

表 3-8 (続き) ソース・タイプのマッピング

列	マッピング
#MULTIDIM ACCOUNT=[4*] AND UD3=[000],Cash,R4,Multi Dimension Mapping	「#MULTIDIM」は複数のディメンションのマッピングを示します。マッピングに使用される実際の列名は、「データ表列名」です。複数のディメンションのマッピングを作成する一番簡単な方法は、ユーザー・インタフェースによりマッピングを作成し、それをファイルにエクスポートする方法です。その後で、追加のマッピングを適用して、ファイルを変更できます。
10, 20, In Mapping	IN マッピングの場合、ソース値は" "で囲まれてカンマ(,)で区切られます。たとえば、IN 10, 20 はインポート・ファイルのソース列で"10,20"として定義されます。

Excel テンプレート(マッピング・テンプレート)のダウンロード

「データ・ロード・マッピング」で、インポート機能を使用して、Excel マッピングを選択してインポートし、マッピングをマージするか置換するかを指定できます。適切にフォーマットされた Excel マッピング・テンプレートは、EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialDataQuality/templates ディレクトリに保存されます。

マッピング・テンプレートには、接続するターゲット・アプリケーションから Oracle Hyperion Financial Management ディメンションを直接取り出すマクロ・スクリプトも含まれます。

Excel テンプレートを Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition サーバーにアップロードし、Excel ファイルをデータ・ロード・ルールでロードするファイルとして選択するか、ファイル名が空白の場合にシステムによってプロンプトがいつ表示されるかを選択する必要があります。処理されるファイルが Excel ファイルかどうかはシステムによって判断され、ファイルのロードに必要なフォーマットが読み取られます。

Excel でマッピング・テンプレートを使用する場合:

- マップ・テンプレートに空白行を含めないでください。
- テンプレートに行を挿入することは可能ですが、新しい行は指定された領域に保持する必要があります。
- 各テンプレートでサポートされるのは、1つのディメンションです。

Excel テンプレートをダウンロードするには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「すべてのマッピング」タブを選択します。
3. 「インポート」ドロップダウンで「Excel テンプレートのダウンロード」を選択します。

Maploader.xls ファイルがダウンロードされます。ハード・ドライブにファイルをコピーまたは保存します。

4. Maploader.xls ファイルを開きます。

5. 「マップ」タブを選択します。
6. セル B1 に「ロケーション」、セル B2 に「ロケーション ID」と入力し、セル B3 の「ディメンション」ドロップダウンからディメンションを選択します。
7. 次の各フィールドに入力します:
 - a. 「ソース」に、ソース・ディメンション値を入力します。

ソース・ディメンションを入力するときにワイルドカードと範囲を指定できます。

 - 無制限の文字に対応するワイルドカード — 無制限の文字を示すためにアスタリスク(*)を使用します。たとえば、「548*」または「*87.8」と入力します。
 - 1文字プレースホルダーに対応するワイルドカード — 1文字のプレースホルダーを示すために疑問符(?)を使用します。たとえば、
 - 548??98
 - ??82???
 - ??81*
 - **範囲** — カンマ(,)を使用して範囲を示します(ワイルドカード文字は使用できません)。たとえば、「10000,19999」のように範囲を指定します。

(この範囲では、10000 から 19999 までのすべての値が評価されます。)

この場合、FDMEE で 10000 から 19999 までのすべての値が対象になります。
 - **「含む」マップ** — カンマ(,)を使用してエントリを区切ります(ワイルドカード文字は使用できません)。少なくとも3つのエントリを指定する必要があります。そうしないと、マップが「範囲」マップを示します。たとえば、「10,20,30」のように「含む」マップを指定します。
 - **マルチディメンション・マッピング** — #MULTIDIM を使用して、マルチディメンション・マッピングを指定します。DIMENSION NAME=[VALUE]と値を入力します。値は、ワイルドカード、範囲および「含む」マップと同様に指定します。次の例の検索基準は、77 で開始し UD1 が 240 のすべての勘定科目です。たとえば、#MULTIDIM ACCOUNT=[77*] AND UD1=[240]です。
 - b. **ソースの説明**に、ソース値の説明を入力します。
 - c. 「ターゲット」に、ターゲット・ディメンション値を入力します。
 - d. 「符号の変更」に **True** を入力して、「勘定科目」ディメンションの符号を変更します。「勘定科目」ディメンションの符号を保持する場合は、「**False**」を入力します。この設定を使用できるのは「勘定科目」ディメンションをマッピングするときだけです。
 - e. マッピングを特定のデータ・ルール名に適用する際は、「**データ・ルール名**」にデータ・ルール名を入力します。

 **ノート:**

明示マッピングを追加する場合、ルール名はソース値と同じにする必要があります。

	A	B	C	D	E
1	FDM Location:	TEXAS			
2	FDM Location ID:	751			
3	Dimension:	Account			
4					
5					
6	Source	Source Description	Target	Rule Name	Convert (True/False)
7		IDDataMap			
8		SrcDesc	TargKey		ChangeSign
9	1*	Acct Like 1		*w1b9	FALSE
10	4110,4120,4140	Acct in 4110,4120,4140		4110 w411010	FALSE
11	6*	Acct in 6 range		6110 w6x11	FALSE
12	7000,7999	Acct in 7000 range		#SCRIPT w700012	FALSE

Excel マッピングのインポート

インポート・オプションを選択し、Excel マッピングを選択して、Excel マッピングをインポートできます。

ノート:

Excel テンプレートを使用するマッピング・ルールのインポートでは、マッピング・スクリプトを指定する場所はありません。

Excel マッピングをインポートするには:

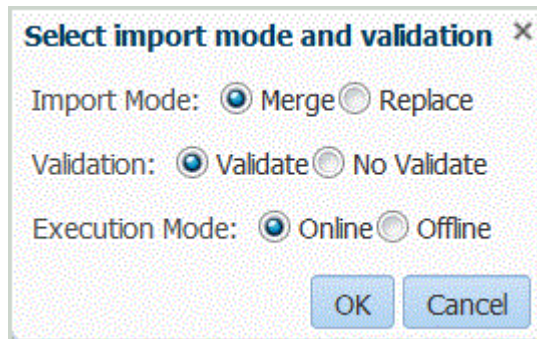
1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「すべてのマッピング」タブを選択します。
3. 「インポート」ドロップダウンで、「Excel からインポート」を選択します。
4. 「インポートするファイルの選択」で、インポートする Excel ファイルを選択し、「OK」をクリックします。

ノート:

事前にエクスポートされた Excel 2010 または 2016 ファイルをインポートしている場合、インポートする前にファイルを開きます。このステップでは、インポート・プロセスに必要な Excel ファイルのマクロが起動します。

5. オプション: 必要な場合は、「アップロード」をクリックして、インポートするファイルに移動してから、「OK」をクリックします。

「インポート・モードと検証を選択してください」画面が表示されます。



6. 「インポート・モード」から、インポート・モードを選択します：
 - マージ - アプリケーション内のデータを Excel データ・ロード・ファイル内のデータで上書きします。
 - 置換 - Excel データ・ロード・ファイルのディメンションの値をクリアし、既存ファイルの値で置換します。
7. 「検証」から、メンバー・マッピングを検証することを選択します。
インポートされた一般会計におけるすべてのデータに対応するマッピングがあることを確認します。
8. 「実行モード」で、インポートを実行するモードを選択します：
 - オンライン - インポートを即時に処理します。
 - オフライン - インポートをバックグラウンドで実行します。
9. 「OK」をクリックします。
10. 「OK」をクリックします。
マッピングは、デフォルトのデータ・ロード・ルールを継承し、システム生成マッピングという説明を表示します。
明示マッピングを使用する場合、データ・ルール名はソース値と同じであることが必要です。

メンバー・マッピングのエクスポート

メンバー・マッピングを、選択したファイル(Excel ファイル)にエクスポートできます。

メンバー・マッピングをエクスポートするには：

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「エクスポート」を選択します。
3. 「エクスポート」ドロップダウンで、方法を選択します。
エクスポート・オプション：
 - 現在のディメンション
 - すべてのディメンション
 - Excel にエクスポート

4. エクスポート方法が「現在のディメンション」および「すべてのディメンション」の「ファイル・ロケーションの指定」で、「ファイル名」にファイル名を指定するか、エクスポートするファイルに移動して「OK」をクリックします。

「Excel にエクスポート」方法の場合、マッピングは Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートされます。必要に応じて XLS ファイルを開くか保存します。

Excel にエクスポートすると、その形式で再インポートすることはできません。

ファイルがエクスポートされると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition によって「ファイルが正常にエクスポートされました。」というメッセージが表示されます。

5. オプション: 「アップロード」または「ダウンロード」をクリックして、エクスポートするファイルに移動して、「OK」をクリックします。

メンバー・マッピングの削除

すべてのメンバー・マッピングを削除するか、マッピングが追加されたタブがあるマッピングだけを削除できます。現在のディメンションのすべてのマッピングを削除するか、行のみ削除することができます。

選択したタブからメンバー・マッピングを削除するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. マッピングを削除するタブを選択します。
たとえば、明示タイプ・マッピングを表示するには「明示」タブを選択します。
すべてのマッピングを表示するには、「すべてのマッピング」タブを選択します。
3. マッピングを選択し、**マッピングの削除**をクリックします。
複数のマッピングを削除するには、[Shift]キーを使用して複数のマッピングを選択します。
すべてのマッピングを削除するには、[Ctrl]+[A]キーを使用します。
4. 「選択したデータ・ロード・マッピングを削除してよろしいですか？」で、「OK」をクリックします。
5. 「保存」をクリックします。

ノート:

すべてのマッピングを削除するには、「すべてのマッピングの削除」を選択します。

メンバー・マッピングの復元

メンバー・マッピングの復元では、現在のセッションで行われたマッピングが削除され、視点に基づいてマッピングが復元されます。

メンバー・マッピングは、POV の最後のデータ・ロードからのみ復元できます。

メンバー・マッピングを復元するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「マッピングの復元」を選択します。
3. 「マッピングの復元の確認」で、「OK」をクリックします。

データを抽出するためのデータ・ロードのルール定義

データ・ロードのルールにメンバー・マッピングを定義した後、ソース・システム内の元帳またはビジネス・ユニットにデータ・ロードのルールを定義します。データ・ロード・ルールを使用すると、各期間に再利用可能な統合定義を作成できます。期間およびカテゴリに対し、ユーザーが指定した視点が使用されます。データ・ロードのルールは、設定しておいたロケーションに定義されます。データ・ロード・ルールは次に対して固有です:

- ロケーション
- E-Business Suite ソース・システムの元帳
- PeopleSoft Enterprise Financial Management ソース・システムのビジネス・ユニット

ターゲット・アプリケーションに複数のデータ・ロードのルールを作成することにより、複数のソースからターゲット・アプリケーションにデータをインポートできます。データ・ロード・ルールを作成するために使用する概略手順は、次のとおりです。

1. データ・ロードのルールを作成します。
2. データ・ロードのルール詳細を定義します。
3. データ・ロードのルールを実行します。

データ・ロード・ルールの詳細の定義

「データ・ロード」画面でデータ・ロード・ルールを作成および変更します。「データ・ロード・ルール」画面ウィンドウのセクション:

- データ・ルールのサマリー
- データ・ロードの詳細
- ソース・フィルタ(次の4つのタブで構成: ソース・オプション、ターゲット・メンバー(ドライバが指定されているファイルベースのデータ・ロード・ルール用)、ターゲット・オプションおよびカスタム・オプション)

[ターゲット・オプションの使用\(ロケーション別\)](#)および[ターゲット・アプリケーションの登録](#)を参照してください。

[カスタム・オプションの作成](#)を参照してください。

ノート:

データ・ロード・ルールを作成する前に、ソース・システムのデータからターゲット・アプリケーションに特殊文字が挿入されないよう確認してください。

また、バッチ・スクリプトを使用する場合、特殊文字を含む名前、およびスペースを使用しないでください。コマンドラインから実行する場合、一部の文字は問題を発生させる可能性があります。

データ・ロード詳細をソース・システム用に定義するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「データ・ロード」サマリー領域で、「追加」をクリックします。
3. 「詳細」の「名前」にデータ・ロード・ルール名を入力します。
4. 「カテゴリ」を選択します。

リストされているカテゴリは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の設定で作成したカテゴリです。[カテゴリ・マッピングの定義](#)を参照してください。

5. 「期間マッピング・タイプ」で、データ・ルールごとに期間マッピング・タイプを選択します。

有効なオプション:

- デフォルト - データ・ルールでは、FDMEE で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、データ・ルール実行に含まれている各 FDMEE 期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。
- 明示 - データ・ルールでは、FDMEE で定義されている明示期間マッピングを使用して、データ・ルール実行に含まれる各 FDMEE 期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。明示期間マッピングにより、期間が開始日および終了日で定義されていない追加の General Ledger データ・ソースをサポートできます。
- なし - ソース・アダプタでこのオプションを使用すると、ソース期間マッピングが無視されます。したがって、インポートされたデータ行はすべて、データ・ルール実行で選択された FDMEE 期間にマップされます。

これらのオプションは、ファイルベースの定義に使用できません。

表 3-9 期間マッピング・タイプ

ロケーション・タイプ	インポート・フォーマット・タイプ	期間マッピングデフォルト	明示期間マッピング明示	期間マッピング	調整期間を含む
会計エンティティあり	標準	はい	はい	N/A	はい
会計エンティティなし	標準	はい	はい	N/A	はい
会計エンティティあり	ソース・アダプタ	N/A	N/A	はい	明示: はい なし: N/A
会計エンティティなし	ソース・アダプタ	N/A	N/A	はい	明示: はい なし: N/A

6. **オプション:** 説明を入力します。
7. 「ターゲット・プラン・タイプ」から、ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。
8. ソース・オプションを選択します。

次のオプションは、ソース・システムに応じて「詳細」セクションまたは「ソース・オプション」セクションに表示される場合があります。

- ターゲット・プラン・タイプ(Oracle Hyperion Planning および Oracle Essbase) - そのプラン・タイプに関連するディメンション、メンバーおよびデータ値のみを含むプラン・タイプを選択します。プラン・タイプは、このデータ・ロード・ルールの POV ロケーションに応じてソースまたはターゲット・システムに適用されます。

FDMEE では、最大 6 つのプラン・タイプ(カスタムおよび Planning アプリケーションを含む)のデータ・ロードがサポートされます。

- ゼロの残高 - SAP の場合は、「ゼロの残高」オプションを選択します。
 - 含む - 任意の理由で残高 0(ゼロ)が含まれます。
たとえば、借方 5 と貸方 5 がある場合、金額ゼロが含まれます。
 - アクティビティなしの除外 - 期首借方残高、期首貸方残高、期間借方および期間貸方が 0 (begin_bal_dr、begin_bal_cr、period_dr、period_cr が YTD 残高タイプについてすべて 0)の場合、または期間借方および期間貸方の期間残高タイプが期間(period_dr、period_cr が期別残高タイプについて 0 に等しい)の場合、ゼロの残高は除外されます。
 - ゼロの純残高の除外 - 年次累計残高タイプについて期首借方残高 - 期首貸方残高 + 期間借方 - 期首貸方 + 期間借方 - 期間貸方 = 0 (YTD 残高タイプについて begin_bal_dr - begin_bal_cr + period_dr - period_cr = 0)の場合、または期間借方 - 期間貸方 = 0(期別残高タイプについて period_dr - period_cr = 0)の場合、ゼロの純残高は除外されます。

次の例では、各「ゼロの残高を含む」オプションが勘定科目残高に与える影響を示します。

表 3-10 「ゼロの残高」オプション

金額	期首残高	借方取引	貸方取引	期末残高
4000	40000	0	40000	0
5000	50000	25000	75000	0
6000	0	0	0	0
7000	0	35000	35000	0

「ゼロの残高」が「含む」の場合、ゼロの残高の勘定科目はすべて含まれるため、勘定科目 4000、5000、6000 および 7000 はこの条件に当てはまります。

 ノート:

「ゼロの残高を含む」オプションは、データを Peoplesoft から取り出す場合には適用できません。

「ゼロの残高」に「アクティビティなしの除外」が選択されている場合、期首、取引および期末の残高がすべてゼロでアクティビティがないため、勘定科目 6000 のみが除外されます。勘定科目 4000、5000 および 7000 は抽出されます。

「ゼロの残高」に「ゼロの純残高の除外」が選択されている場合、期末残高がゼロのため、勘定科目 4000、5000、6000 および 7000 が除外されます。

- 調整期間を含む - 調整期間を含める場合に選択します。

調整期間は、FDMEE の調整期間がソース・システムの調整期間に正しくマップされるようにします。

期間 13 を 12 月/期間 12 に明示的にマップし、「調整期間を含む」オプションを選択すると、次のようになります:

- YTD 残高について、期間 13 が期末残高になります。
- PTD 残高について、期間 13 と 12 月/期間 12 が追加されます。

ソース・オプションを定義するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「データ・ロード・ルール」でデータ・ロード・ルールを選択するか、「追加」をクリックします。
3. 「ソース・オプション」タブを選択します。
4. ソース・システムに基づいて、ソース・オプションまたはソース・フィルタ・オプションを入力します。

ソース・フィルタ・オプション:

- E-Business Suite ソース・システムの場合、[E-Business Suite ソース・システムのソース・フィルタ・オプションの定義](#)を参照してください。
 - Oracle Hyperion Financial Management ソース・システムの場合、[Financial Management のソース・フィルタ・オプションの定義](#)を参照してください。
Financial Management ソース・パラメータの詳細は、[Financial Management のソース・パラメータの定義](#)を参照してください。
 - JD Edwards ソース・システムの詳細は、[JD Edwards GL ソース・システムのためのソース・フィルタ・オプションの定義](#)を参照してください。
 - ファイルベースのソース・システムの詳細は、[ファイルベース・ソース・システムのためのデータ・ロード・ルールの詳細の定義](#)を参照してください。
5. **オプション:** 複数列のデータ・ロードを行う場合、「列ヘッダー」タブを選択し、数値列の開始と終了の日付を指定します。
[複数列数値データのロード](#)を参照してください。
 6. **オプション:** ターゲット・オプションを使用するには、「ターゲット・オプション」タブを選択し、任意のオプションを選択します。
 7. **オプション:** 「カスタム・オプション」を選択し、データ・ロード・ルールと関連付けるテキストを指定すると、フリー・フォーム・テキストまたは値を指定できます。
[カスタム・オプションの作成](#)を参照してください。
 8. 「保存」をクリックします。

E-Business Suite ソース・システムのソース・フィルタ・オプションの定義

データ・ロードのマッピング詳細を定義する際、抽出するデータを定義できます。これには、次を抽出するかどうかが含まれます:

- 金額タイプ - 通貨金額、統計金額のみ、または通貨金額と統計金額の両方

- 勘定科目の借方と貸方の合計がゼロになり、期間アクティビティがない、ゼロ残高勘定科目。
- 調整期間 - 調整期間内の残高を抽出するかどうかを決定
- 標準残高または平均残高 - 平均残高には、貸借対照表データのみが含まれます。
- ソース残高タイプ - 実績、予算または予算引当

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、ソース会計エンティティの有効なタイプ「実績」、「予算」および「予算引当」を使用して、転送するデータを分類します。通常、シナリオ・ディメンションには勘定体系のセグメントをマップしないため、データ・ルール定義の一部としてデフォルト・メンバーを選択します。

機能通貨建ての残高を抽出できます。機能通貨建ての残高が、選択した元帳またはビジネス・ユニットの基本通貨を単位として保管されます。たとえば、取引が複数の通貨で入力された場合、すべての取引残高の合計は機能通貨で表されます。

入力済残高を抽出することもできます。これは、主要元帳に割り当てられた機能/現地通貨以外の通貨に関連付けられている残高です。

また、FDMEE では、ユーザーが指定した通貨でデータをインポートできます。この場合、残高をソース・システムで指定された通貨に換算する必要があります。これはソース Enterprise Resource Planning (ERP)システム内の通貨換算プロセスを実行することで実現できます。(FDMEE では通貨換算は実行されません。)

Oracle E-Business Suite では、コミットメント・データの表示を呼び出すページは提供されていません。

E-Business Suite ソース・システムのデータ・ロード・ソース・フィルタを定義するには:

1. 「ワークフロー」 タブの「データ・ロード」 で、「データ・ロード・ルール」 を選択します。
2. 「データ・ロード・ルール」 でデータ・ロード・ルールを選択するか、「追加」 をクリックします。
3. 「ソース・オプション」 タブを選択します。
4. 「会計エンティティ」 で、ソース・システムの値リストから会計エンティティを指定します。

会計エンティティはこのフィールドで、またはロケーションの詳細入力時に選択できます。会計エンティティのないロケーションのデータ・ルールの場合、会計エンティティを選択することを要求されます。

この機能は、標準インポート・フォーマットを使用しているロケーションでデータ・ルールに対してのみ適用されます。

データ・ルールが実行された後は、会計エンティティを変更できません。

5. ロケーションが会計エンティティ・グループに関連付けられている場合、「会計エンティティ・グループ」 で会計エンティティ・グループ名を指定します。

ロケーションのデータ・ルールに会計エンティティが含まれる場合、ルールは定義内の会計エンティティによって制限されます。この場合、ロケーションのデータ・ルールは会計エンティティ・グループを使用できません。

6. 「調整期間を含む」 で、「はい」 または「いいえ」 を選択します。

調整期間は、FDMEE の調整期間がソース・システムの調整期間に正しくマップされるようにします。

期間 13 を 12 月/期間 12 に明示的にマップし、「調整期間を含む」オプションを選択すると、次のようになります:

- YTD 残高について、期間 13 が期末残高になります。
- PTD 残高について、期間 13 と 12 月/期間 12 が追加されます。

7. 「金額タイプ」を選択します:

- 通貨
- 統計 - 入力した通貨または機能通貨のいずれで残高を表すかの選択は、適用されません。
- 「通貨」および「統計」

8. 「通貨タイプ」から、残高を抽出する通貨タイプを選択します。

9. 「ゼロの残高」ドロップダウンでゼロの残高オプションを選択します:

- 含む - 任意の理由で残高 0(ゼロ)が含まれます。
たとえば、借方 5 と貸方 5 がある場合、金額ゼロが含まれます。
- アクティビティなしの除外 - 期首借方残高、期首貸方残高、期間借方および期間貸方が 0 (`begin_bal_dr`、`begin_bal_cr`、`period_dr`、`period_cr` が YTD 残高タイプについてすべて 0)の場合、または期間借方および期間貸方の期間残高タイプが期間(`period_dr`、`period_cr` が期別残高タイプについて 0 に等しい)の場合、ゼロの残高は除外されます。
- ゼロの純残高の除外 - 年次累計残高タイプについて期首借方残高 - 期首貸方残高 + 期間借方 - 期首貸方 + 期間借方 - 期間貸方 = 0 (YTD 残高タイプについて `begin_bal_dr - begin_bal_cr + period_dr - period_cr = 0`)の場合、または期間借方 - 期間貸方 = 0(期別残高タイプについて `period_dr - period_cr = 0`)の場合、ゼロの純残高は除外されます。

次の例では、各「ゼロの残高を含む」オプションが勘定科目残高に与える影響を示します。

表 3-11 「ゼロの残高」オプション

金額	期首残高	借方取引	貸方取引	期末残高
4000	40000	0	40000	0
5000	50000	25000	75000	0
6000	0	0	0	0
7000	0	35000	35000	0

「ゼロの残高」が「含む」の場合、ゼロの残高の勘定科目はすべて含まれるため、勘定科目 4000、5000、6000 および 7000 はこの条件に当てはまります。

「ゼロの残高」に「アクティビティなしの除外」が選択されている場合、期首、取引および期末の残高がゼロでアクティビティがないため、勘定科目 6000 のみが除外されます。勘定科目 4000、5000 および 7000 は抽出されます。

「ゼロの残高」に「ゼロの純残高の除外」が選択されている場合、期末残高がゼロのため、勘定科目 4000、5000、6000 および 7000 が除外されます。

10. 「符号方法」で、データがロードされた際に金額の符号を反転する方法を選択します。

使用可能な方法:

- 絶対 — 次のルールに基づいてデータをロードします:

表 3-12 絶対符号ルール

勘定科目タイプ	GL (GAAP)	EPM (絶対)
収益	通常は負数	符号は反転
負債	通常は負数	符号は反転
資本	通常は負数	符号は反転
費用	通常は正数	符号の変更なし
資産	通常は正数	符号の変更なし

- ソースと同じ - ソース・システムに記録されているものと同じ符号をロードします。
- ソースと逆 - ソース・システムに記録されているものと逆の符号をロードします。

11. 「貸借対照表勘定科目の金額」 および 「損益計算書勘定科目の金額」 を選択します:

- **YTD** - 年次累計の勘定科目残高で、勘定科目残高は年の始まりから現在の期間まで累計されます。通常、貸借対照表勘定科目の金額(資産、負債、資本)は YTD 残高で指定します。(デフォルトは YTD です。)
- **期別** - 特定の期間の勘定科目残高です。通常、損益計算書勘定科目の金額(収益および費用)は期別残高で指定します。(デフォルトは PTD です。)

12. 「通貨タイプ」 から、残高を抽出する通貨タイプを選択します。

- **機能** - 選択した元帳または事業部門の基本通貨で保管される残高(現地通貨)
- **入力済** - 「通貨コード」フィールドで指定した、主要元帳に割り当てられた機能/現地通貨以外の通貨に関連付けられている残高。
- **換算済** - **FDMEE** では、ユーザーが指定した通貨でデータをインポートできます。この場合、残高をソース・システムで指定された通貨に換算する必要があります。このタスクは **Enterprise Resource Planning (ERP)** システム内の通貨換算プロセスを実行することで実現できます。(FDMEE では通貨換算は実行されません。)また、「通貨コード」フィールドで換算済の通貨コードを指定する必要があります。

13. 「通貨コード」 (「入力済」 および 「換算済」 通貨タイプのみ) から、入力済または換算済通貨タイプで使用する ISO 4217 通貨コードを選択します。

たとえば、EUR と入力してユーロ通貨コードを選択します。

14. 「残高方法」 を選択します:

- **標準** - Oracle General Ledger に、会計取引残高がそのまま保管されます。標準残高とも言われます。
- **平均** - 平均残高には、貸借対照表データのみが含まれます。金額タイプとして統計を選択した場合、「残高方法」は無視されます。

15. 抽出する残高タイプを選択します:


- **実績**
- **予算** - 「予算」ソース残高タイプを選択する場合、「追加」をクリックして、抽出対象に予算タイプを選択します。
- **予算引当** - 「予算引当」ソース残高タイプを選択する場合、「追加」をクリックして、抽出対象に予算引当タイプを選択します。


16. 抽出するセグメント値を選択します。

ソース一般会計システムからすべてのデータを抽出しない場合、ソースの調整セグメント別にデータをフィルタします。オプション:

- **すべて**
- **選択済**

Oracle E-Business Suite では、調整セグメントは、このレベルで調整借方と貸方が等しくなることを保証します。データ・ロードのルールを作成する場合、調整セグメントのすべてのメンバーまたは特定のメンバーのどちらに関連する一般会計残高を抽出できます。

調整セグメント値を選択するには、 をクリックし、次に、セグメント値を選択して、「OK」をクリックします。

値をクリアするには  をクリックし、次に、「調整セグメント値の選択」ダイアログ・ボックスで、任意の値をクリアして、「OK」をクリックします。

17. 期首、期末および「平均」為替レート・オプションを選択します。

Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムは、トランザクション処理に関する包括的な為替レート情報を保持しています。ターゲット・アプリケーションでは、為替レートを抽出することでこの情報を使用できます。ソース・システムからは期首、期末および平均レート・タイプを選択できます。(ソース・システム内のタイプは、これらのレート・タイプを明示的に定義していない場合がありますが、FDMEE インタフェース表内のレート・タイプにはマップされています。)

 **ノート:**

Oracle Hyperion Planning アプリケーションの場合、為替レートがロードされるのは、「クラシック」データ・ロード方法が選択された場合のみです。

 **ノート:**

為替レート・オプションを定義するのは、ターゲット・アプリケーションが複数通貨である場合のみです。

 **ノート:**

Account Reconciliation Manager アプリケーションの場合は、複数レート・オプションを選択しないでください。

18. 「保存」をクリックします。

19. ターゲット・フィルタ・オプションを定義します。

ターゲット・フィルタ・オプションを定義した後、データ・ルールを実行します。[データ・ロードのルールの実行](#)を参照してください。

PeopleSoft Enterprise Financial Management ソース・システムのソース・フィルタ・オプションの定義

データ・ロード・ルールの詳細を定義する際、次に説明するように、様々なデータ抽出オプションを指定できます。

PeopleSoft Enterprise Financial Management ソース・システムのソース・フィルタ・オプションを定義するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「データ・ロード・ルール」でデータ・ロード・ルールを選択するか、「追加」をクリックします。
3. 「ソース・オプション」タブを選択します。
4. 「金額タイプ」を選択します:
 - 通貨
 - 統計 - 入力した通貨または機能通貨のいずれで残高を表すかの選択は、適用されません。
 - 「通貨」および「統計」
5. 「符号方法」で、データがロードされた際に金額の符号を反転する方法を選択します。

使用可能な方法:

- 絶対 - デフォルトの借方または貸方の符号をロードします。

表 3-13 絶対符号ルール





勘定科目タイプ	GL (GAAP)	EPM (絶対)
収益	通常は負数	符号は反転
負債	通常は負数	符号は反転
資本	通常は負数	符号は反転
費用	通常は正数	符号の変更なし
資産	通常は正数	符号の変更なし

- ソースと同じ - ソース・システムに記録されているものと同じ符号をロードします。
 - ソースと逆 - ソース・システムに記録されているものと逆の符号をロードします。
6. 「貸借対照表勘定科目の金額」および「損益計算書勘定科目の金額」を選択します:
 - YTD - 年次累計の勘定科目残高で、勘定科目残高は年の始まりから現在の期間まで累計されます。通常、貸借対照表勘定科目の金額(資産、負債、資本)は YTD 残高で指定します。
 - 期別 - 特定の期間の勘定科目残高です。通常、損益計算書勘定科目の金額(収益および費用)は期別残高で指定します。
 7. 「通貨タイプ」から、残高を抽出する通貨タイプを選択します。
 - 機能 - 選択した元帳または事業部門の基本通貨で保管される残高(現地通貨)

- 入力済 - 「通貨コード」フィールドで指定した、主要元帳に割り当てられた機能/現地通貨以外の通貨に関連付けられている残高。

ノート:

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition が PeopleSoft から抽出する場合のデフォルトは POSTED_TOTAL_AMT です。入力済の通貨を選択すると、FDMEE は POSTED_TRAN_AMT から抽出します。基準金額が必要な場合は、代替スキーマを作成し、PS_LEDGER ビューを作成して金額を切り替えます。

8. 「通貨コード」から、入力済通貨タイプで使用する ISO 4217 通貨コードを選択します。
たとえば、**EUR** と入力してユーロ通貨コードを選択します。
9. 元帳グループを選択します。
10. 「元帳」を選択します。
PeopleSoft では、ビジネス・ユニットに複数の元帳グループを設定できます。FDMEE では、このリストに、元帳に関連する割当て済元帳グループのみが表示されます。
11. オプション: 帳簿コード値を選択するには、 をクリックし、帳簿コード値を選択して、「OK」をクリックします。
帳簿コードをクリアするには、 をクリックします。次に、「帳簿コードの選択」ダイアログ・ボックスで、帳簿コードをクリアし、「OK」をクリックします。
12. 予算値を選択するには、 をクリックして予算値を選択し、「OK」をクリックします。
予算値を指定するのは、選択した元帳のデータ表が Ledger_Budg である場合です。
予算値の選択を解除するには、 をクリックします。次に、「予算シナリオ値の選択」で、値をクリアし、「OK」をクリックします。
13. 「保存」をクリックします。
14. ターゲット・フィルタ・オプションを定義します。
ターゲット・フィルタ・オプションを定義した後、データ・ルールを実行します。
[データ・ロードのルールの実行](#)を参照してください。

SAP アダプタ用のソース・フィルタ・オプションの定義

ここでは、SAP 統合に関する背景情報と特定のアダプタの詳細について説明します。

SAP 統合プロセスのバックグラウンド

Oracle Data Integrator は、SAP からファイルにデータを抽出する ABAP プログラムを作成してから、そのファイルを FTP サーバーまたは共有ファイル・システムに転送します。ABAP プログラムは、ルールで定義されているインポート・フォーマットとオプションによるマッピングに基づいて生成されます。データ・ロード・ルールを実行

すると、ABAP プログラムが作成され、SAP システムにアップロードされます。SAP デプロイメントでは、ABAP プログラムは開発環境で作成および変更され、本番環境では変更されないようロックされます。

この要件をサポートするために、ODI では SAP ロード・ナレッジ・モジュールの `UPLOAD_ABAP_CODE` オプションが提供されています。開発環境ではこのオプションを "Yes" に設定し、本番環境では "No" に設定します。ABAP プログラムは、SAP トランスポート要求を使用して開発から本番に転送されます。

本番環境で実行される ABAP コードは変更されないため、ユーザーは開発環境と同じフォーマットでインポート・フォーマットを作成する必要があります。また、データ・ルールには、ABAP プログラムのロジックに影響を与えるオプションがあります。これらのオプションは、開発環境での設定値と同じ値に設定する必要があります。本番環境でデータ・ルールのこれらのオプションを変更しても、抽出プロセスに影響はありません。これらのオプションを変更する必要がある場合は、開発環境で変更してから、本番環境に ABAP コードをトランスポートしてください。ABAP コードの生成に影響を与えるオプションについては、SAP アダプタの各項で説明しています。

SAP_FDM_GLBALANCES_CLASSICS アダプタ用のソース・フィルタ・オプションの定義

SAP ソース・アダプタを使用してデータ・ロード・ルールを実行する前に、インポート・フォーマットの ODI シナリオを生成しておく必要があります。ODI シナリオが実行リポジトリに存在すれば、データ・ロード・ルールを何回でも実行できます。

SAP_FDM_GLBALANCES_CLASSICS アダプタ用のソース・フィルタ・オプションを定義するには:

1. 「勘定科目の説明を含む」で、次のいずれかを選択します:

- **はい** - GL 勘定科目の説明を含めます
- **いいえ** - 他のすべての条件を含めます

ABAP プログラムに影響を与えます

2. 「金額タイプ」で、次のいずれかを選択します:

- **期間累計** - 期間累計
- **YTD** - 年次累計

ABAP プログラムに影響を与えません

3. 「会社コード」で、英数字を使用して 4 文字以下の会社コードを指定します。

ABAP プログラムに影響を与えません

4. 「通貨タイプ」で、次のいずれかのタイプを指定します:

- **00** - 取引通貨
- **10** - 会社コード通貨
- **30** - グループ通貨

ABAP プログラムに影響を与えません

5. 「言語」で、大文字を使用した 2 文字以下の言語コードを指定します。

たとえば、英語には **EN** を指定します。

言語コードについては、SAP のドキュメントを参照してください。

ABAP プログラムに影響を与えません

6. 「元帳」で、英数字を使用した 2 文字以下の元帳コードを指定します。

ABAP プログラムに影響を与えません

7. 「レコード・タイプ」で、次のいずれかのレコード・タイプを選択します:

- 0 - 実績
- 1 - プラン

ABAP プログラムに影響を与えます

SAP_FDM_GLBALANCES_NEW アダプタ用のソース・フィルタ・オプションの定義

SAP ソース・アダプタを使用してデータ・ロード・ルールを実行する前に、インポート・フォーマットの ODI シナリオを生成しておく必要があります。ODI シナリオが実行リポジトリに存在すれば、データ・ロード・ルールを何回でも実行できます。

SAP_FDM_GLBALANCES_NEW アダプタ用のソース・フィルタ・オプションを定義するには:

1. 「金額タイプ」で、次のいずれかを選択します:

- 期間累計 - 期間累計
- YTD - 年次累計

ABAP プログラムに影響を与えません

2. 「会社コード」で、英数字を使用して 4 文字以下の会社コードを指定します。

ABAP プログラムに影響を与えません

3. 「通貨タイプ」で、次のいずれかのタイプを選択します:

- 00 - 取引通貨
- 10 - 会社コード通貨
- 30 - グループ通貨
- 40 - 国際決済通貨
- 50 - インデックス・ベース通貨
- 60 - グローバル企業通貨

ABAP プログラムに影響を与えません

4. 「勘定科目の説明を含む」で、次のいずれかを選択します:

- はい - GL 勘定科目の説明を含めます
- いいえ - 他のすべての条件を含めます

ABAP プログラムに影響を与えます

5. 「言語」で、大文字を使用した 2 文字以下の言語コードを指定します。

たとえば、英語には EN を指定します。

言語コードについては、SAP のドキュメントを参照してください。

ABAP プログラムに影響を与えません

6. 「元帳」で、英数字を使用した2文字以下の元帳コードを指定します。

ABAP プログラムに影響を与えません

7. 「レコード・タイプ」で、次のいずれかのレコード・タイプを選択します:

- 0 - 実績
- 1 - プラン

ABAP プログラムに影響を与えません

SAP_FDM_COST_CENTER アダプタ用のソース・フィルタ・オプションの定義

SAP ソース・アダプタを使用してデータ・ロード・ルールを実行する前に、インポート・フォーマットの ODI シナリオを生成しておく必要があります。ODI シナリオが実行リポジトリに存在する場合、データ・ロード・ルールを何回でも実行できます。

SAP_FDM_COST_CENTER アダプタ用のソース・フィルタ・オプションを定義するには:

1. 「アクティビティ・タイプ」で、次のいずれかを選択します:

- はい - アクティビティ・タイプを含めます
- いいえ - アクティビティ・タイプを含めません

ABAP プログラムに影響を与えます

2. 「アクティビティ・タイプの説明」で、アクティビティ・タイプの説明を含めるかどうかを選択します:

- はい - アクティビティ・タイプの説明を含めます
- いいえ - アクティビティ・タイプの説明を含めません

ABAP プログラムに影響を与えます

3. 「金額タイプ」で、次のいずれかを選択します:

- 期間累計 - 期間累計残高
- YTD - 年次累計残高

ABAP プログラムに影響を与えません

4. 「管理領域」で、英数字を使用して4文字以下の管理領域を指定します。

ABAP プログラムに影響を与えません

5. 「コスト要素の説明を含む」で、コスト要素の説明を含めるかどうかを選択します:

- はい - コスト要素の説明を含めます
- いいえ - コスト要素の説明を含めません

ABAP プログラムに影響を与えます

6. 「通貨タイプ」で、次のいずれかを選択します:

- 20 - 管理領域通貨
- 00 - 取引通貨
- 70 - コスト・センター通貨
- (空白) - 「数量」フィルタが「はい」、または「アクティビティ・タイプ」フィルタが「はい」の場合は、空白のままにしておきます。

ABAP プログラムに影響を与えます

7. 「**フロー・チェック**」で、次のいずれかを選択します:

- **外部** - 外部残高をロードします
- **内部** - 内部配賦をロードします

ABAP プログラムに影響を与えます

8. 「**言語コード**」で、大文字を使用した 2 文字以下の言語コードを指定します。

たとえば、英語には EN を指定します。

ABAP プログラムに影響を与えません

9. 「**元帳コード**」で、英数字を使用した 2 文字以下の元帳コードを指定します。

ABAP プログラムに影響を与えません

10. 「**統計キー数値**」で、統計キー数値の合計を抽出するかどうかを選択します:

- **はい** - 統計キー数値の合計のデータを抽出します
- **いいえ** - アクティビティ・タイプの合計のデータを抽出します

ABAP プログラムに影響を与えます

11. 「**グループ・コード**」で、次のいずれかのグループ・コードを選択します:

外部残高の場合、次のいずれかを選択します:

- **0101** — 抽出データはコスト・センター・グループ用です
- **0102** — 抽出データは勘定科目グループ用です

内部残高の場合、次のいずれかを選択します:

- **0101** — 抽出データはコスト・センター・グループ用です
- **0102** — 抽出データは勘定科目グループ用です
- **0104** — 抽出データは統計キー数値グループ用です
- **0105** — 抽出データは勘定科目グループ用です
- **(Null)** - グループは必要ありません

ABAP プログラムに影響を与えます

12. 「**値のタイプ**」で、次のいずれかを選択します:

- **04** - 実績
- **01** - プラン

ABAP プログラムに影響を与えません

SAP_FDM_PROFIT_CENTER アダプタ用のソース・フィルタ・オプションの定義

SAP ソース・アダプタを使用してデータ・ロード・ルールを実行する前に、インポート・フォーマットの ODI シナリオを生成しておく必要があります。ODI シナリオが実行リポジトリに存在すれば、データ・ロード・ルールを何回でも実行できます。

SAP_FDM_PROFIT_CENTER アダプタ用のソース・フィルタ・オプションを定義するには:

1. 「**金額タイプ**」で、次のいずれかを選択します:
 - **期間累計** - 期間累計残高
 - **YTD** - 年次累計残高ABAP プログラムに影響を与えません
2. 「**管理領域**」で、管理領域の値を指定します。
ABAP プログラムに影響を与えません。
3. 「**通貨タイプ**」で、次のいずれかを選択します:
 - **10** - 会社コード通貨
 - **00** - 取引通貨
 - **70** - 利益センター通貨
 - (空白) — 「**数量**」が「**はい**」に設定されている場合は、空白を選択します。ABAP プログラムに影響を与えません
4. 「**ダミー利益センター**」で、次のいずれかを選択します:
 - **はい** - ダミー利益センターと関連する残高を含めます。
 - **いいえ** - その他の条件を含めます。ABAP プログラムに影響を与えません
5. 「**言語**」で、大文字を使用した 2 文字以下の言語コードを選択します。
たとえば、英語には **EN** を指定します。
ABAP プログラムに影響を与えません
6. 「**元帳**」で、英数字を使用した 2 文字以下の元帳コードを選択します。
ABAP プログラムに影響を与えません
7. 「**統計キー数値**」で、統計キー数値の合計を抽出するかどうかを選択します:
 - **はい** - 統計キー数値の合計のデータを抽出します
 - **いいえ** - アクティビティ・タイプの合計のデータを抽出しますABAP プログラムに影響を与えます
8. 「**グループ・コード**」で、次のいずれかのグループ・コードを選択します:
 - **0106** - 利益センター・グループ
 - **0109** - 勘定科目グループ
 - (空白) - グループは必要ありませんABAP プログラムに影響を与えます
9. 「**レコード・タイプ**」で、次のいずれかのタイプを選択します:
 - **0** - 実績
 - **1** - プランABAP プログラムに影響を与えません

SAP_FDM_CUSTOMER_BALANCES アダプタ用のソース・フィルタ・オプションの定義

SAP ソース・アダプタを使用してデータ・ロード・ルールを実行する前に、インポート・フォーマットの ODI シナリオを生成しておく必要があります。ODI シナリオが実行リポジトリに存在すれば、データ・ロード・ルールを何回でも実行できます。

SAP_FDM_CUSTOMER_BALANCES アダプタ用のソース・フィルタ・オプションを定義するには:

1. 「**金額タイプ**」で、次のいずれかを選択します:
 - **期間累計** - 期間累計残高
 - **YTD** - 年次累計残高

ABAP プログラムに影響を与えません
2. 「**会社コード**」で、英数字を使用して 4 文字以下の会社コードを指定します。

ABAP プログラムに影響を与えません
3. 「**通貨タイプ**」で、次のいずれかを選択します:
 - **10** - 会社コード通貨
 - **00** - 取引通貨

ABAP プログラムに影響を与えません
4. 特定の顧客に対して残高が必要な場合は、「**顧客**」で、10 文字の顧客コードを指定します。

それ以外の場合は、空白に設定します。

ABAP プログラムに影響を与えません
5. 「**顧客の詳細**」で、顧客の詳細を含めるかどうかを選択します:
 - **はい** - 顧客の詳細を含めます
 - **いいえ** - 顧客の詳細を含めません

ABAP プログラムに影響を与えます
6. 「**フロー・チェック**」で、次のいずれかを選択します:
 - **オープン** - オープン・アイテムの残高をロードします
 - **クリア済** - クリアされたアイテムの残高をロードします
 - **すべて** - すべてのアイテムの残高をロードします

ABAP プログラムに影響を与えます
7. **特殊な GL 取引**で、次のいずれかを選択します:
 - **はい** - 特殊な一般会計の残高をロードします
 - **いいえ** - 他の残高をロードします

ABAP プログラムに影響を与えます
8. 「**取引パートナー**」で、取引パートナーの残高を含めるかどうかを選択します:
 - **はい** - 取引残高をロードします

- **いいえ** - 他の条件をロードします
ABAP プログラムに影響を与えません

SAP_FDM_VENDOR_BALANCES アダプタ用のソース・ファイル・オプションの定義

SAP ソース・アダプタを使用してデータ・ロード・ルールを実行する前に、インポート・フォーマットの ODI シナリオを生成しておく必要があります。ODI シナリオが実行リポジトリに存在すれば、データ・ロード・ルールを何回でも実行できます。

SAP_FDM_VENDOR_BALANCES アダプタ用のソース・フィルタ・オプションを定義するには:

1. 「金額タイプ」で、次のいずれかを選択します:

- **期間累計** - 期間累計残高
- **YTD** - 年次累計残高

ABAP プログラムに影響を与えません

2. 「会社コード」で、英数字を使用して 4 文字以下の会社コードを指定します。

ABAP プログラムに影響を与えません

3. 「通貨タイプ」で、次のいずれかを選択します:

- **10** - 会社コード通貨
- **00** - 取引通貨

ABAP プログラムに影響を与えません

4. 「フロー・チェック」で、次のいずれかを選択します:

- **オープン** - オープン・アイテムの残高をロードします
- **クリア済** - クリアされたアイテムの残高をロードします
- **すべて** - すべてのアイテムの残高をロードします

ABAP プログラムに影響を与えます

5. 特殊な GL 取引で、次のいずれかを選択します:

- **はい** - 特殊な一般会計の残高をロードします
- **いいえ** - 他の残高をロードします

ABAP プログラムに影響を与えます

6. 「取引パートナー」で、取引パートナーの残高を含めるかどうかを選択します:

- **はい** - 取引残高をロードします
- **いいえ** - 他の条件をロードします

ABAP プログラムに影響を与えません

7. 特定のベンダーに対して残高が必要な場合は、「ベンダー」で、10 文字のベンダー・コードを指定します。

それ以外の場合は、空白に設定します。

このフィルタに対する新しい ABAP コードはアップロードされません。

8. ベンダーの詳細で、ベンダーの詳細を含めるかどうかを選択します:

- **はい** - ベンダーの詳細を含めます
 - **いいえ** - ベンダーの詳細を含めません
- ABAP プログラムに影響を与えません

JD Edwards GL ソース・システムのためのソース・フィルタ・オプションの定義

データ・ロードのマッピング詳細を定義する場合、抽出するデータを定義します。例としては、会社コード、元帳タイプ、金額タイプを抽出するかどうかなどがあります。

JD Edwards GL ソース・システム用のソース・フィルタ・オプションを定義するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「データ・ロード・ルール」でデータ・ロード・ルールを選択するか、「追加」をクリックします。
3. 「ソース・オプション」タブを選択します。
4. 「金額タイプ」を選択します
期間累計残高には「期間累計」、または年次累計残高には「YTD」を選択します。
5. 「会社コード」を選択します。
英数字を使用して 4 文字以下の会社コードを指定します。
6. 「元帳」を選択します。
JD Edwards ソース・システムから英数字を使用して 2 文字以下で元帳を指定します。たとえば、元帳タイプには次のものが含まれます:
 - AA - 実績
 - BA - 予算
 - CA - 元の通貨取引
7. 「保存」をクリックします。

Financial Management のソース・フィルタ・オプションの定義

データ・ロード・ルールの詳細を定義する際、様々なデータ抽出オプションを指定できます。

仕訳は、シナリオ、年、期間、エンティティおよび値に基づいて抽出されます。

データ(仕訳された値メンバーを含む)の場合は、任意のディメンションを任意のメンバーまたは複数のメンバーでフィルタ処理できます。

個々のメンバーを選択できます。特定のメンバーを選択しないと、ディメンションのすべてのメンバーを抽出するとみなされます。ただし、メンバーを明示的に選択すると、ディメンションの横に複数の選択があることを示すプラス記号(+)が表示されません。

ソース・システムのソース・フィルタ・オプションを定義するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。

2. 「データ・ロード・ルール」で、データ・ロード・ルールを選択します。
3. 「ソース・オプション」タブを選択します。
4. 「追加」をクリックします。
5. 「ソース・フィルタ」領域で「追加」をクリックします。
6. 「ディメンション名」を選択します。
7. 「フィルタ条件」で、メンバー名を入力するか、またはフィルタ条件を指定します。
たとえば、Oracle Hyperion Financial Management の構文を使用して、メンバー名またはフィルタ条件を入力します。ディメンションによっては、予算データの抽出に使用するフィルタ条件として1つ以上のメンバーを選択できます。たとえば、エンティティ・ディメンションでは、E1、E5 および E6 の各メンバーを選択できます。

メンバー・セレクタを使用して、メンバーを選択することもできます。

- a.  (選択)をクリックして「メンバー選択」画面を表示し、メンバー・セレクタを使用してメンバーを選択します。次に、「OK」をクリックします。

「メンバー・セレクタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。メンバー・セレクタを使用すると、ディメンション内のメンバーを表示して選択できます。▶をクリックして、ディメンション内のメンバーを展開および縮小します。

「選択」ダイアログ・ボックスには、2つのペインがあり、ディメンションのすべてのメンバーが左側に表示され、選択内容が右側に表示されます。そのディメンションで使用可能なすべてのメンバーが表示される左ペインには、メンバー名および簡単な説明が表示されます(使用可能な場合)。選択内容が表示される右ペインには、メンバー名および選択タイプが表示されます。



(リフレッシュ)をクリックして、最新のメンバー・リストを表示できます。


ノート:

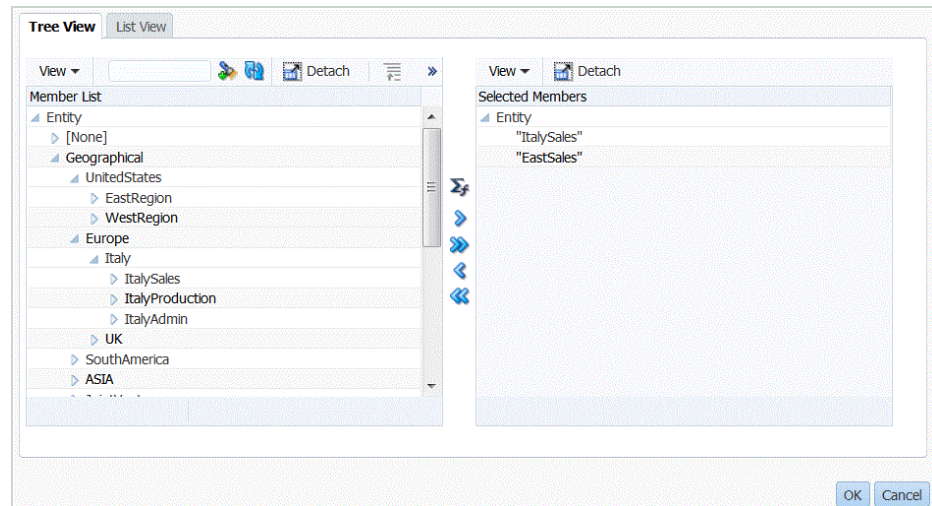
ディメンションにフィルタを割り当てます。フィルタを割り当てないと、サマリー・メンバーから番号も取得されます。


ノート:

Financial Management のフィルタとしてメンバー・リストを使用してデータ同期を実行するために、メンバー・リストをフィルタ・ボックスに入力できます。この場合、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、メンバー・セレクタからメンバー・リストを選択できません。Financial Management から取得するために FDMEE のメンバー・リストを使用する場合は、次の構文を使用します: {MemberListName}。(二重カウントをしないために、基本レベルのメンバーのみのメンバー・リストを使用する必要があります。)

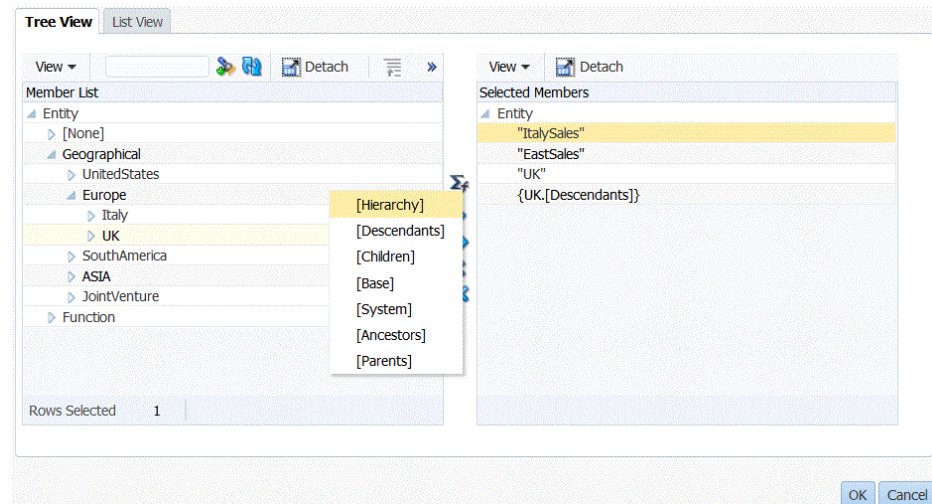
メンバー・セレクタを使用するには:

左側の使用可能なディメンションおよびメンバーのリストで、メンバーを選択して  をクリックします。そのメンバーは右側に移動され、「選択のタイプ」列には選択したオプションが表示されます。たとえば、「選択のタイプ」列に「子孫」が表示されます。




メンバーのリストからメンバーの選択を解除するには、  をクリックします

メンバーに関数を適用するには、左ペインでメンバーを選択して  をクリックします



o

ヒント:

選択したリストのすべてのメンバーをクリアするには、  をクリックします。

- b. 「OK」を2回クリックして、ソース・フィルタ詳細の定義を続行します。

選択したメンバーは、Oracle Essbase 構文で「フィルタ条件」フィールドに表示されます。

- c. 「保存」をクリックします。

ファイルベース・ソース・システムのためのデータ・ロード・ルールの詳細の定義

ファイルベースのデータ・ロード・システム用にデータ・ロードの詳細を定義する場合、単一の期間または複数の期間にデータをロードします。単一期間の場合、データ・ルールにファイル名を入力し、単一期間のルールを実行します。複数の期間をロードするには、各期間用のファイルを作成し、期間名または期間キーをファイル名に追加します。ルールを複数の期間で実行する場合、各期間のファイル名が作成され、適切なデータが POV にアップロードされます。

ファイルベースのソース・システム用にデータ・ロード詳細を定義するには:

1. 「名前」に、データ・ロード・ルール名を入力します。
2. 「カテゴリ」で、カテゴリを選択します。

リストされているカテゴリは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の設定(「実績」など)で作成したカテゴリです。[カテゴリ・マッピングの定義](#)を参照してください。
3. オプション: 「説明」で、データ・ロード・ルールの説明を指定します。
4. オプション: 「ターゲット・プラン・タイプ」ドロップから、ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。
5. オプション: 「インポート・フォーマット」で、ファイル・タイプが複数期間のテキスト・ファイル(連続期間または不連続期間)の場合は、ファイルで使用するインポート・フォーマットを選択し、インポート・フォーマットをオーバーライドできます。たとえば、単一または複数期間のデータ・ルールのインポート・フォーマットを指定して、同じロケーションから単一または複数期間のファイルをロードできます。この場合、選択されたインポート・フォーマットが、POV で選択されたロケーションと同じターゲットを持つ必要があります。インポート・フォーマットが指定されない場合、ロケーションのインポート・フォーマットが使用されます。

複数期間のテキスト・ファイルをロードする際は、ルールに対して選択された開始期間と終了期間によって、ファイル内の特定の期間が決定されます。

ファイルで、連続期間に対応する金額がない場合、データ・ロード・マッピングでそれぞれの金額列をデータ・ルールの必要な期間に明示的にマッピングできます。ルールを実行すると、明示的なマッピングで指定されたように、データが期間にロードされます。
6. オプション: 説明を入力します。
7. 「ディレクトリ」で、ファイルが存在する相対パスを入力します。
8. 「ソース・オプション」タブを選択します。
9. 「ファイル名」フィールドに、ファイルの静的な名前を入力します。

 ノート:

アポストロフィ文字(')はエスケープ文字と見なされ、ファイルを **FDMEE** にインポートできないため、ファイル名に使用しないでください。

ファイル名しか指定しない場合、ルールの実行ウィンドウで単一の期間に対してデータを入力する必要があります。

複数の期間をロードするには、各期間用のファイルを作成し、期間名または期間キーをファイル名に追加します。ルールを複数の期間で実行する場合、各期間のファイル名が作成され、適切な **POV** にアップロードされます。

 ノート:

バッチ・スクリプトで使用されている場合、期間名にスペースを含めることはできません。

FDMEE ディレクトリにあるファイルに移動するには、「**選択**」をクリックしてから「**選択**」画面のファイルを選択します。また、「**選択**」画面で「**アップロード**」を選択し、「**アップロードするファイルの選択**」画面のファイルに移動することもできます。

ファイル名を指定しないと、ルールを実行するときに、**FDMEE** によってファイル名を求めるプロンプトが表示されます。

10. データを複数の期間にロードするには、「**ファイル名の接尾辞タイプ**」ドロップダウンで、「**期間の説明**」または「**期間キー**」を選択します。

接尾辞がファイル名に付けられます。**FDMEE** は、接尾辞を追加した後でファイル拡張子を追加します。ファイル名を空白にすると、**FDMEE** は接尾辞付きのファイルを探します。ファイル名の接尾辞タイプを指定すると、ファイル名はオプションになり、ルールの実行ウィンドウでは必要ありません。

ファイル名の接尾辞タイプが期間キーの場合、接尾辞インジケータと期間の日付フォーマットがファイル名で(接尾辞セットとして)必要となり、有効な日付フォーマットとして検証される必要があります。

たとえば、次のように指定します:

- a. 1_Jan-2013.txt
- b. 1_Feb-2013.txt
- c. 1_Mar-2013.txt

この場合、ルールを実行するときに、**1.txt** を「ファイル名」フィールドに入力し、接尾辞インジケータとして「**期間名**」を選択します。次に、1月から3月の期間についてルールを実行します。

11. 「**期間キーの日付フォーマット**」で、**JAVA** 日付フォーマット(**SimpleDateFormat**)でファイル名に追加する期間キーのデータ・フォーマットを指定します。
12. 「**保存**」をクリックします。

Planning および Essbase のソース・パラメータの定義

Oracle Hyperion Planning および Oracle Essbase がソース・システムの場合、データの同期には追加でソース・パラメータを指定できます。

ノート:

Financial Consolidation and Close では、インポート処理時に勘定科目ディメンションを他のディメンションに連結できないことに注意してください。

ソース・オプションを定義するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「データ・ロード・ルール」で、Planning ソースおよび Essbase ソースのデータ・ロード・ルールを選択して「追加」をクリックします。
3. 「ソース・パラメータ」タブを選択します。
4. (Planning のみ): 「データの抽出オプション」で、抽出するメンバー・データのタイプを選択します。

メンバーは、計算に対してどのようなフラグが設定されているかに応じて、抽出できます。メンバーに「保管済」のフラグが設定されている場合、計算後、計算されたデータ値はそのメンバーと一緒にデータベースに保管されます。メンバーに「動的計算」のタグが付いている場合、そのメンバーのデータ値は取得時に計算されます。

ノート:

「データの抽出」オプションの以前の名前は、「動的算出データの抽出」でした。

使用可能なオプション:

- すべてのデータ - 保管されている値と、密ディメンションと疎ディメンションの両方について動的に計算された値が抽出されます。
「すべてのデータ」オプションは常に表示されますが、次の場合のみ機能します:
 - ASO レポート・アプリケーション
 - Planning およびハイブリッドが有効な Planning モジュール
- 保管された動的算出データ - 疎ディメンションは除き、密ディメンションについてのみ、保管されている動的に計算された値が抽出されます。
- 保管済データのみ - 保管されているデータのみを抽出します。動的に計算された値は、このタイプの抽出には含まれません。

 **ノート:**

「データ・ロード・ルール」画面で「動的算出データの抽出」オプションを「はい」に設定し、リーフ・レベル・メンバーの(レベル0)「データ・ストレージ」を「動的」に設定すると、抽出プロセスでデータが選択されなくなります。データが選択されるようにするには、メンバーの「データ・ストレージ」を「動的」以外に設定して、ソース・アプリケーションからの選択に値が含まれるようにします。

5. 「データの精度」で、エクスポートされる数値で表示される小数点以下の桁数を指定します。

データ精度とは、精度(正確さ)を重視した数値データのことで、データ値のサイズおよび小数点以下の桁数に応じて、数値フィールドによっては指数形式(678123e+008 など)で書き込まれることがあります。非常に大きい値から非常に小さい値までデータに幅がある場合、データ精度の使用もあり得ます。通常、出力ファイルは小さめであり、データ値の正確さは高めです。

このオプションのデフォルト値は 16 です。

6. 「データの小数点以下の桁数」で、エクスポートする小数点以下の最大桁数を指定します。

0 から 16 の値を指定します。値を指定しないと、エクスポートするデータの小数点以下の桁数(最大 16 桁)が使用されるか、「データの精度」オプションに値が指定されている場合はそれによって決まる値が使用されます。

このパラメータは、読みやすさを重視して使用します。出力データはストレート・テキスト形式です。データの小数点以下の桁数に関係なく、指定した数値が出力されます。特にデータの範囲が非常に大きい値から非常に小さい値に及ぶ場合、データが(整数部および小数部で)正確さを失う可能性があります。

デフォルトでは、数値データには 16 桁がサポートされています(小数部の桁を含む)。「データの精度」と「データの小数点以下の桁数」オプションをどちらも指定すると、「データの精度」オプションが無視されます。

7. 「保存」をクリックします。

Financial Management のソース・パラメータの定義

Oracle Hyperion Financial Management がソース・システムである場合のデータ同期では、追加のソース・パラメータ(仕訳ステータス、仕訳タイプ、残高タイプ、抽出するデータ型など)を指定できます。

ソース・パラメータ・オプションを定義するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「データ・ロード・ルール」で、データ・ロード・ルールを選択します。
3. 「ソース・パラメータ」リージョンに移動します。
4. 「追加」をクリックします。
5. 追加するパラメータ行を選択して、ドロップダウンからパラメータ値を選択します。
オプション:

- **仕訳ステータスの追加:** 抽出する仕訳ステータスを指定します。
仕訳ステータスは、仕訳の現在の状態を示します。仕訳ステータスは、仕訳を作成、送信、承認、却下、転記すると変わります。
オプション:
 - 作業中 - 仕訳が作成されています。保存はされていますが、完了していない場合があります。たとえば、ラベルや単一エンティティを割り当てる必要があります。
 - 送信済 - 仕訳が承認のために送信されました。
 - 承認済 - 仕訳の転記が承認されました。
 - 却下済 - 仕訳が却下されたか、転記が戻されています。
 - 転記済 - 仕訳の調整がデータベースに転記されました。
- **仕訳タイプの追加:** 仕訳のタイプを指定します。
 - 承認済自動逆仕訳 - 転記済の自動逆仕訳をロードします
 - 自動逆仕訳 - 次の期間に逆仕訳する必要がある調整が含まれている自動逆仕訳をロードします。つまり、借方と貸方を逆仕訳して、次の期間に仕訳を転記します。
 - 通常 - 置換モードで仕訳をロードし、これにより、新しい仕訳データがロードされる前に、仕訳ラベルのデータすべてがクリアされます。
- **残高タイプの追加:** 抽出する残高のタイプを指定します。
 - 貸借一致 - すべての借方と貸方の残高が一致しています。
 - 貸借不一致 - 借方と貸方の残高が一致していません。
 - エンティティで貸借一致 - エンティティの借方と貸方の残高が一致しています。
- **「抽出の種類」**で、次のいずれかを選択します。
 - データ - 基本レベルの入力データやいくつかの計算済データを、アプリケーションから抽出します。データを抽出するときは、シナリオ・ディメンションと年ディメンションのメンバーを指定する必要があります。期間、エンティティおよび勘定科目ディメンションでは、1つ以上のメンバーを指定できます。
 - 仕訳 - 基本レベルの入力データやいくつかの計算済データを、アプリケーションから抽出できます。データを抽出するときは、シナリオ・ディメンションと年ディメンションのメンバーを指定する必要があります。期間、エンティティおよび勘定科目ディメンションでは、1つ以上のメンバーを指定できます。
- **「動的勘定科目の抽出」**を選択して、動的勘定科目を抽出します。
動的勘定科目とは、データの要求時に動的に計算される値を持つ勘定科目です。動的勘定科目の値は保管されません。最も一般的な動的計算の種類は比率計算です。
動的勘定科目の抽出のオプション:
 - **はい** - 動的勘定科目が抽出されます。
 - **いいえ** - 動的勘定科目は抽出されません。
 デフォルトでは、動的勘定科目は抽出されません。
- **「算出データの抽出」**で、算出データを抽出するかどうかを指定します。
オプション:
 - 親エンティティの連結データ。
 - ルールに従って計算される勘定科目ディメンションとカスタム・ディメンションの基本メンバー。

- CustomTop メンバーおよび[ICPTop]メンバーと交差する親勘定科目。CustomTop メタデータの属性が空白または「すべて」の場合は、[None]メンバーが使用されます。

算出データの抽出のオプション:

- **はい** - 算出データが抽出されます。
- **いいえ** - 算出データは抽出されません。

デフォルトでは、算出データは抽出されません。

- **「派生データの抽出」**で、派生データを抽出するかどうかを指定します。派生データとは、他のデータ値(算出データや算術式など)から派生したデータのことです。
 - **はい** - 派生データが抽出されます。
 - **いいえ** - 派生データは抽出されません。

6. 「保存」をクリックします。

データ・ロードのルールの管理

次のタスクを実行できます:

- データ・ロード・ルールの編集 - [データ・ロードのルールの編集](#)を参照してください。
- データ・ロードのルールの実行 - [データ・ロードのルールの実行](#)を参照してください。
- データ・ロードのルールの削除 - [データ・ロードのルールの削除](#)を参照してください。
- データ・ロード・ルールを実行前に表示 - [データ・ロード・ワークベンチの使用](#)方法を参照してください。
- データ・ロード・ルールのスケジュール - [データ・ロード・ルールのスケジュール](#)
- データ・ルール・プロセスの詳細の確認 - [プロセス詳細の表示](#)を参照してください。

データ・ロードのルールの編集

データ・ロードのルールが実行プロセス中ではない場合、ルール詳細を変更できます。

データ・ルールを編集するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. データ・ロードのルールを選択します。
3. 必要に応じて、データ・ロードのルール詳細を変更します。
4. 「保存」をクリックします。

データ・ロードのルールの実行

データ・ロード・ルールを実行することにより、更新をロードし、データをターゲット・アプリケーションにプッシュします。データ・ロードのルールを送信するときには、データの抽出オプションを指定します。

送信されたルールはすべて **Oracle Data Integrator** によって処理されます。データ・ロードのルールを送信するときには、データの抽出オプションを指定します。

データ・ロード・ルールは、次の方法の1つを選択して実行できます:

- 「データ・ロード・ルール」画面でコマンドを実行します。
- 「データ・ロード・ワークベンチ」オプションに「ソース」オプションをインポートします。
- バッチの実行。[バッチの実行](#)を参照してください。
- バッチ・スクリプトの実行。[バッチ・スクリプトの操作](#)を参照してください。

データ・ロード・ルールが実行されると、**Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** でデータがロードされ、ユーザーがソース・データにドリル・スルーするためのドリル領域(オプション)が作成されます。

ノート:

Financial Consolidation and Close で YTD データをロードする場合、データは期別ビューに格納されます。この場合、ユーザーはこのオプションを選択し、ロードのためにファイルの YTD データが期間別データに変換されるよう前処理を実行する必要があります。

データ・ロード・ルールを実行するときには、いくつかのオプションがあります。

ノート:

データ・ロード・ルールが複数期間に対して実行される場合、エクスポート・ステップは全期間で1回のみ発生します。

- **ソースからインポート** - **FDMEE** により、ソース・システムからデータがインポートされ、必要な変換が実行されて、**FDMEE** ステージング表にデータがエクスポートされます。

このオプションは次の場合にのみ選択します:

- データ・ロードのルールを初めて実行している。
- ソース・システム内のデータが変更されている。ステージング表内のデータをエクスポート後にレビューしたときに、ソース・システム内のデータを変更する必要が生じた場合などです。

ソースからデータを初めてインポートした後では、ソース・システムのデータは変更されない場合がほとんどです。このとき、データが変更されなかった場合は、データをインポートし続ける必要はありません。

ソース・システム・データが変更された場合は、データを再計算する必要があります。

 **ノート:**

Oracle E-Business Suite およびソース・インポートでは、データ・ロード・ルール of 完全リフレッシュが必要です。リフレッシュを実行する必要があるのは、勘定体系ごとに一度のみです。

- **ターゲットにエクスポート** - ターゲット・アプリケーションにデータをエクスポートします。

このオプションは、ステージング表内のデータを見なおし、そのデータをターゲット・アプリケーションにエクスポートする必要があることを確認してから選択します。

 **ノート:**

これら両方のオプションを選択するのは、ソース・システム内のデータが変更され、かつ、データをターゲット・アプリケーションに直接エクスポートする場合のみにしてください。

Oracle Hyperion Planning 一般会計または Enterprise Resource Planning (ERP) のデータ・ロード・ルールを送信するには:

1. 「ワークフロー」 タブの「データ・ロード」 で、「データ・ロード・ルール」 を選択します。
2. 「データ・ロード・ルール」 で、データ・ロード・ルールを選択します。
3. 「実行」 をクリックします。

データ・ルールが Oracle Hyperion Financial Management ターゲット・アプリケーションに対して実行されると、ソースの為替レートが FDMEE インタフェース表 AIF_HS_EXCHANGE_RATES に対してのみ移入されます。Financial Management のコア為替レート表は更新されていません。

4. 「ルールの実行」 で、ソース・システムからデータまたはメタデータ(あるいはその両方)を抽出してターゲット・アプリケーションにプッシュするには、「ソースからインポート」 を選択してから、「開始期間」 と 「終了期間」 を選択します。

 **ヒント:**

FDMEE の外部のユーティリティを使用して、ステージング表内のデータを参照できます。エクスポートされたデータを確認した後、FDMEE に戻って変更を加え、ルールを再度実行します。ステージング表内の情報が正しいことが確実な場合は、ルールを再実行し、「ターゲットにエクスポート」 を選択します。

5. インポートされたすべてのソース・データを現在のマッピング表を使用して再マップし、すべての論理勘定科目を再作成するには、「再計算」 を選択します。

6. データをターゲット・アプリケーションにエクスポートするには、「**ターゲットにエクスポート**」を選択します。
7. 「**確認の実行**」を選択して日付を生成し、「**確認レポート**」を実行します。
8. 「**開始期間**」で、ソース・システムからデータをインポートする POV の開始期間を選択します。
9. 「**終了期間**」で、ソース・システムからデータをインポートする POV の終了期間を選択します。
10. 「**インポート・モード**」で、期間全体のデータをすべて一度に抽出するモードか、期間中にデータを徐々に抽出するモードのいずれかを選択します。

 **ノート:**

スナップショット・インポート・モードは、SAP ソース・システムからデータを抽出できる唯一の方法です。

データ抽出タイプ:

- **スナップショット** - 期間全体について選択したソース・セットをすべて抽出します
 - 選択した期間のソース・データが一度も実行されていない場合、FDMEE はデータをソースから抽出します。
 - 選択した期間のソース・データが実行された場合、FDMEE はデータをソースからではなく FDMEE ステージング表から抽出します。

同じ Enterprise Resource Planning (ERP) ソースから抽出するロケーションがある場合、FDMEE はデータを 1 回抽出します。選択した期間のデータを E-Business Suite から Financial Management にロードし、同じソースと期間について ARM への統合を実行する場合、FDMEE は E-Business Suite から再度取得せず、インタフェース表のデータを使用します。この結果、その後のデータ・ロードのパフォーマンスが大幅に向上します。最初の抽出に最も時間がかかり、その後の抽出は速くなります。

- **増分** - 前のデータ抽出後に追加されたレコードを抽出します
- **完全リフレッシュ** - ソース・システムからのクリーン抽出を実行し、その結果、指定したソース元帳(またはビジネス・ユニット)およびソース期間の、該当する FDMEE ステージング表内の既存のデータ行をクリアします。

 **ノート:**

インポート・モードのオプション(スナップショット、増分および完全リフレッシュ)は、標準インポート・フォーマットを使用するロケーションでデータ・ルールに対してのみ適用されます。

 ノート:

Account Reconciliation Manager (ARM)でデータ・ロードを完全リフレッシュモードで実行する場合は、データがあるすべてのロケーションを選択してください。そうしないと、ARM で選択されていないロケーションのデータが **FDMEE** には含まれ、**ARM** には含まれないこととなります。その結果、**FDMEE** の内容と **ARM** の内容に不一致が生じます。

11. 「**エクスポート・モード**」で、データをエクスポートするモードを選択します:

- データの保管 - ソースまたはファイルからデータをターゲット・アプリケーションに挿入して、現在の値を置き換えます。
- データの置換 — ターゲットの **POV** のデータをすべてクリアし、データ・ルールの実行時に指定された開始期間および終了期間パラメータ間のソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに **100** 行、次のロードに **70** 行が含まれるとします。この場合、**100** 行が削除され、**70** 行が **TDATASSEG** にロードされます。このロードの後、行の総数は **70** です。

Planning アプリケーションの場合、置換でロードする年、期間、シナリオ、バージョンおよびエンティティ・ディメンションのデータをクリアし、ソースまたはファイルからデータをロードします。**Planning** アプリケーションに **1** 年分のデータがある場合に **1** か月分のみをロードするとき、このオプションを使用すると、**1** 年分すべてがクリアされてからロードが実行されることに注意してください。

- データの追加 - ソースまたはファイルの値を、ターゲット・アプリケーションに存在する値に追加します。たとえば、ソースに **100** があり、ターゲットに **200** がある場合、結果は **300** になります。
- データの削除 - ソースまたはファイルの値を、ターゲット・アプリケーションに存在する値から引きます。たとえば、ターゲットに **300** があり、ソースに **100** がある場合、結果は **200** になります。
- すべてのデータを上書き - ターゲットのすべてのデータをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、**Planning** アプリケーションに **1** 年分のデータがある場合に **1** か月分のみをロードするとき、このオプションを使用すると、**1** 年分すべてがクリアされてからロードが実行されます。

すべてのデータの上書きを選択した場合は、次のメッセージが表示されます:
警告: 「すべてのデータを上書き」オプションでは、アプリケーション全体のデータがクリアされます。これは現在の視点に制限されません。このアクションを実行しますか?

Financial Management で使用可能なエクスポート・モード:

- マージ - アプリケーション内のデータをロード・ファイル内のデータで上書きします。データ・ファイルとアプリケーションに視点がある場合は、アプリケーションにある各視点のデータが、データ・ファイルの値で上書きされます。

 **ノート:**

データ・ロード・ファイルに、同じ視点のファイルの複数の値が含まれている場合は、最後の値のみがロードされます。

 **ノート:**

データ・ロード・ファイルによって変更されていないアプリケーションのデータはアプリケーションに残ります。

- 累計 - アプリケーション内のデータをロード・ファイル内のデータで累計します。データ・ファイルの一意の視点ごとに、ロード・ファイルの値がアプリケーションの値に加算されます。
- 置換 - アプリケーション内のデータをロード・ファイル内のデータで置換します。「置換」オプションでは、データ・ファイル内のシナリオ、年、期間、エンティティおよび値の一意の組合せごとに、アプリケーションのすべての勘定科目値がクリアされ、データ・ファイルから値がロードされます。**Planning** アプリケーションに 1 年分のデータがある場合に 1 か月分のみをロードするとき、このオプションを使用すると、1 年分すべてがクリアされてからロードが実行されることに注意してください。

 **ノート:**

置換オプションを選択することで、データのロード前に Essbase ASO キューブをクリアできます

- セキュリティを基準にして置換 - アクセス権のあるメンバーのみがロードされる置換モードでデータ・ロードを実行します。このオプションにより、アクセス権のない勘定科目がある場合も、置換モードでデータ・ロードを実行できます。サブキューブの期間に対して「クリア」操作を行うと、アクセス権のあるセルのみがクリアされます。データ、セル・テキストおよびライン・アイテムの詳細はクリアされますが、セルの添付はクリアされません。

12. 「**為替レートを含む**」を選択して為替レートをロードします。

13. 「**実行**」をクリックします。

「実行」をクリックすると、ドリル・スルー・パスを保護するため、ルールが更新できないようにロックされます。ルールのステータスを確認するには、[データ・ロードのルール・ステータスの確認](#)を参照してください。

データ・ロード・ルールのスケジュール

ジョブのスケジュール機能を使用すると、データ・ロード・ルールの実行回数を調整できます。

データ・ロード・ルールの実行をスケジュールするには:

1. 「**ワークフロー**」タブの「**データ・ロード**」で、「**データ・ロード・ルール**」を選択します。
2. 「**データ・ロード・ルール**」で、データ・ロード・ルールを選択します。

3. 「スケジュール」をクリックします。

ジョブのスケジュールの詳細は、[ジョブのスケジュール](#)を参照してください。

スケジュールされたジョブを取り消すには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「データ・ロード・ルール」で、データ・ロード・ルールを選択します。
3. 「スケジュールの取消し」をクリックします。

「スケジュールの取消し」を使用して Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ユーザー・インタフェースからジョブを取り消すと、ルールのスケジュールの全インスタンスが取り消されます。ルールの個々のスケジュールを選択的に取り消すことはできません。

データ・ロードのルール・ステータスの確認

データ・ルールを実行した後、「プロセスの詳細」ページでステータスを確認できます。[プロセス詳細の表示](#)を参照してください。

データ・ロードのルールの削除


Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で作成されたデータ・ロード・ルールを削除できます。実行中のデータ・ロード・ルールは削除できません。

ルールを削除すると、そのデータ・ルールを使用してロードされたデータもすべて削除されます。

ノート:

データ・ロードのルールを削除した後、ソース・システムを削除できます。削除の実行後、ユーザーは Enterprise Resource Planning (ERP) ソースへのドリル・スルーができなくなります。

データ・ロードのルールを削除するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「ロケーション名」を入力するか、 をクリックしてロケーションを選択します。
3. データ・ロードのルールを選択します。
4. 「削除」をクリックします。

ターゲット・オプションの使用

データ・ロード・ルールを使用する場合、(ターゲット・アプリケーション全体ではなく)ロケーション/データ・ロード・ルールに固有のターゲット・アプリケーションのオ

プシオンを指定できます。たとえば、ターゲット・オプション機能を使用してロケーションごとに異なるデータ保護の値を指定できます。

ノート:

ライト・バックのためのデータ・ロード・ルール of 必須ターゲット・オプションの詳細は、[Essbase および Planning のアプリケーション・オプションの定義](#)を参照してください。

統合情報を指定するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「POV」バーからロケーションを選択します。
3. 「ターゲット・オプション」タブを選択します。
4. 任意のオプションを追加または変更します。
[ターゲット・アプリケーションの登録](#)を参照してください。
5. 「保存」をクリックします。

カスタム・オプションの作成

統合オプション機能を使用すると、ロケーションまたはデータ・ロードに関してフリー・フォーム・テキストまたは値を指定できます。入力されたテキストまたは値は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition スクリプトで使用できます。

また、Oracle Data Relationship Management を使用してディメンションと階層を ERP システムから Data Relationship Management にエクスポートするか、データ・ロード・マッピングを Data Relationship Management から FDMEE にインポートする場合は、Data Relationship Management インポート・プロファイルおよびエクスポート・プロファイルを指定できます。

Data Relationship Management 統合は、「ターゲット・アプリケーション」画面で有効化されます。詳細は、[ターゲット・アプリケーションの登録](#)を参照してください。

統合情報を指定するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「カスタム・オプション」タブを選択します。
3. 「統合オプション1」 - 「統合オプション4」にフリー・フォーム・テキストまたは値を指定し、「OK」をクリックします。
指定した情報は、「ロケーション」表の「統合オプション」フィールドでアクセスできます。

Financial Management への為替レートのロード

Oracle Hyperion Financial Management ターゲット・アプリケーションにデータ・ルールを定義する際に、Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムから為替レートを抽出す

る方法を指定できます。為替レートは、開始レートの通貨レート勘定科目、終了レートの通貨レート勘定科目、平均レートの通貨レート勘定科目に対して取得されます(適用可能な場合)。

ターゲット・アプリケーションの複数通貨オプションが有効になっている場合は、為替レートの処理方法を指定できます。すべての為替レートが抽出され、AIF_HS_EXCHANGE_RATES 表に挿入されます。この表には、各通貨の ISO 通貨コードを使用してソース・システムからデータが移入されます。ISO 数値コードは、このプロセスでは使用されません。為替レートは、AIF_HS_EXCHANGE_RATES 表内の ISO 通貨コードと、複数通貨の Financial Management アプリケーションで定義された通貨との照合に基づいて Financial Management にプッシュされます。(ISO 通貨を使用して Financial Management アプリケーションの通貨を設定することは重要です)。

 **ノート:**

為替レートは、通常 [None] Entity メンバーにロードされます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、Financial Management アプリケーション設定を参照して、通貨(先)と通貨(元)ディメンションを自動的に表示します。

Financial Management に為替レートをロードするには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
2. 「ターゲット・アプリケーション」サマリー・グリッドで、「Financial Management」ターゲット・アプリケーションを選択します。
3. 「アプリケーション詳細」でアプリケーションの詳細を定義した後、「アプリケーション・オプション」タブを選択します。
4. 次のフィールドに勘定科目名を指定します。
 - 開始レートの通貨レート勘定科目
 - 開始レートの通貨レート勘定科目
 - 開始レートの通貨レート勘定科目

その他のアプリケーション・オプションの操作は、[ターゲット・アプリケーションの登録](#)を参照してください。

Dimension Details Application Options		
View ▾ Detach		
Property Name	Value	Select
Translation Level	<Parent Currency>	
Enable Zero Loading	No	
Journal Status	Posted	
Journal Default Value	<Entity Curr Adjs>	
Journal Enable JV ID per Entity	Yes	
Journal Balancing Attribute	Unbalanced	
Currency Rate Account for Beginning Rate	Beginning Rate	
Currency Rate Account for Ending Rate	Ending Rate	
Currency Rate Account for Average Rate	Average Rate	
Currency Rate Entity		
Global User for Application Access		
Source Language for Member Description	AMERICAN	

5. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
6. 「データ・ロード・ルール」でデータ・ロード・ルールを選択するか、「追加」をクリックします。
7. 「ソース・オプション」タブを選択します。
8. 期首、期末および「平均」為替レート・オプションを選択します。

Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムは、トランザクション処理に関する包括的な為替レート情報を保持しています。ターゲット・アプリケーションでは、為替レートを抽出することでこの情報を使用できます。ソース・システムからは期首、期末および平均レート・タイプを選択できます。(ソース・システム内のタイプは、これらのレート・タイプを明示的に定義していない場合がありますが、FDMEE インタフェース表内のレート・タイプにはマップされています。)

ソース・オプションの詳細は、[E-Business Suite ソース・システムのソース・フィルタ・オプションの定義](#)を参照してください。

ドリル・スルーの使用

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、Oracle Enterprise Performance Management System アプリケーションからオンプレミス・アプリケーションへのドリル・スルーを可能にするフレームワークを提供します。データ値のソースを理解する場合、またはワークスペースを終了せずに値の非常に細かい詳細が必要な場合に、ドリル・スルーを使用します。

FDMEE を使用してデータを EPM System ターゲット・アプリケーションにロードする場合、オプションのドリル領域フラグを指定できます。「はい」に設定すると、実際のデータに加えてドリル領域定義がターゲット・アプリケーションに渡され、セルがドリル可能であることが示されます。

EPM System アプリケーションからドリル・スルーしている場合、ランディング・ページは別個のワークスペース・タブに表示され、タブには Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーション内の選択済セルの金額を含むすべての行が表示されます。このランディング・ページから、ソース・ドキュメントを開いたり、定義されたソース・システムのランディング・ページへのドリルスルーを続行できます。

URL に基づいたドリル・スルーでは、データが存在するサーバーに接続する必要があります。ドリルスルーは、**FDMEE** を介してロードされたデータにのみ使用できます。また、ターゲット・アプリケーションでドリル・スルーが使用可能なため、ドリル・スルーが機能するためには、データ・ロード・マッピングに明示的なマッピングが少なくとも 1 つ含まれている必要があります。

リーフ・レベルまたはサマリー・レベルでドリル・スルーできます。サマリーからドリルダウンすると、**Oracle Hyperion Planning** データ・フォームまたはレポートでサマリー・メンバーを表示し、数字を構成する詳細ソース・データを表示できます。この機能を使用するには、「アプリケーション・オプション」タブで「サマリーからのドリルを有効にします」オプションを選択します。このオプションを有効にし、「ドリル領域の作成」オプションを「はい」に設定した状態でデータをロードすると、「ドリル」アイコンがサマリー・レベルで有効になります。1 つのディメンションに対して、ドリルできる下位メンバーの数は **1000** に制限されています。サマリーからドリルダウンを実行すると、ソース・データとターゲット・データが別々のタブに表示されます。

ドリルスルーの使用についてさらに学習するには、次のチュートリアル・ビデオを視聴してください。

- **SAP** へのドリルスルーの概要については、[概要: SAP 一般会計へのドリルスルーを参照してください](#)。
- **JD Edwards** へのドリルスルーの概要については、[概要: JD Edwards へのドリルダウンを参照してください](#)。
- **E-Business Suite** へのドリルスルーの概要については、[概要: E-Business Suite へのドリルスルーを参照してください](#)。
- **PeopleSoft** へのドリルスルーの概要については、[概要: PeopleSoft 一般会計へのドリルスルーを参照してください](#)。

ドリル領域の作成

ドリル領域は、ドリルスルー機能を使用して表示できる、**Oracle Enterprise Performance Management System** アプリケーションのデータ交差の名前付き領域です。ドリル領域内のデータは、**Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** により **EPM System** アプリケーションにロードされます。ワークスペースで、アプリケーションのデータ・フォームにドリル領域を表示できます。

ドリル領域には、**FDMEE** に戻るための **Uniform Resource Locator (URL)** と領域名が格納されます。ドリル領域を有効にすると、データのロードと連結が完了した後、**FDMEE** によって有効化されたドリル領域が **FDMEE** ターゲット・アプリケーションに移入されます。ドリル領域にセルが含まれている場合、そのセルはターゲット・アプリケーションでドリル可能とみなされます。**EPM System** アプリケーションでは、ドリル領域には「エンティティ」、「勘定科目」、「シナリオ」、「年」および「期間」ディメンションが含まれています。

FDMEE はシナリオごとにドリル領域を作成します。どのキューブ (**Oracle Hyperion Planning** プラン・タイプまたは **Planning** データベース) でも、ドリル領域の名前は、**FDMEE_<シナリオ・メンバーの名前>** になります。ドリル領域を作成する場合、**FDMEE** はディメンションがドリルに対して有効かどうかを確認します。

ソース・システムへのドリル領域は、**FDMEE** によってロードされたデータ交差が同一の場合にのみ機能します。たとえば、**\$5000** を **Entity2;Account2** の交差にロードした場合、**Entity2;ParentAccount2** の交差にはデータがロードされていないため、この交差からのドリルスルーはできません。

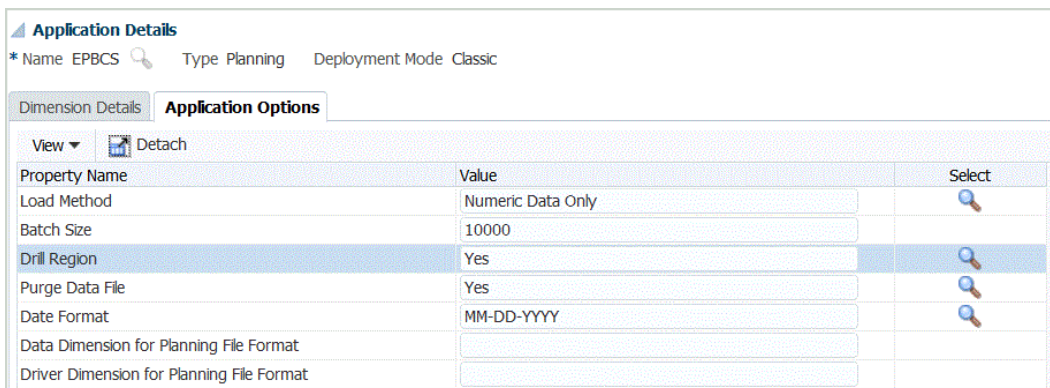
データ・ロードで選択された有効なディメンションのメンバーは、ドリル領域フィルタに含まれます。ディメンションが有効になっていない場合、シナリオ、バージョン、年および期間のディメンションがデフォルトで有効になります。追加のディメンションを有効にでき、後続のデータ・ロードでは新規に有効化されたディメンションのメンバーが考慮されます。ドリルの作成に使用されたドリル領域に以前に含まれていたディメンションを無効化する場合、それらのディメンションのメンバーは後続のデータ・ロード時に削除されません。必要に応じて、古いメンバーを手動で削除できます。

FDMEE ターゲット・アプリケーションのドリル領域を追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
2. 「ターゲット・アプリケーション」サマリー・グリッドで、EPM System ターゲット・アプリケーションを選択します。
3. 「アプリケーション・オプション」タブを選択します。
4. 「ドリル領域」に「はい」と入力します。


ノート:





管理者は、「ターゲット・アプリケーション」オプションで、アプリケーション・レベルでドリル領域設定を設定できます。また、データ・ロード・ルールで特定のターゲット・アプリケーションに対する設定を変更することもできます。



Application Details
* Name EPBCS Type Planning Deployment Mode Classic

Dimension Details **Application Options**

View  Detach

Property Name	Value	Select
Load Method	Numeric Data Only	
Batch Size	10000	
Drill Region	Yes	
Purge Data File	Yes	
Date Format	MM-DD-YYYY	
Data Dimension for Planning File Format		
Driver Dimension for Planning File Format		

5. 「保存」をクリックします。

ドリル・スルー・コンポーネント

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ランディング・ページは、ドリル・スルー URL によって呼び出されます。ドリルスルー URL は、次の 2 つのコンポーネントによって定義されます。


- サーバー・コンポーネント - 各ソース・システムに対して定義されます
- 詳細コンポーネント - ファイルベースの統合に対して手動で定義されます

ドリル・スルー URL のサーバー・コンポーネントの追加

次のステップを使用して、サーバー・コンポーネント・ドリル・スルー URL を Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で定義します。サーバー・コンポーネントがソース・システム定義に追加されます。

ノート:

ドリル・スルー URL を追加するには:

1. 「設定」 タブの 「登録」 で、「ソース・システム」 を選択します。
2. ドリル・スルーを追加するファイルを選択します。
3. 「ドリル・スルー URL」 で、 をクリックします。
4. 「ドリル・スルー URL」 編集ウィンドウに、ドリル・スルーに使用する URL を識別する URL を指定します。

使用する URL には、request-response メソッド、プロトコルおよびリソース名が含まれている必要があります。

プロトコル識別子は、リソースのフェッチに使用されるプロトコルの名前を示します。Hypertext Transfer Protocol (HTTP) は、通常はハイパーテキスト・ドキュメントを提供します。HTTP は、様々なタイプのリソースへのアクセスに使用される多くのプロトコルの 1 つにすぎません。他のプロトコルには、ファイルなどがあります。

クライアントとサーバー間で使用可能な request-response メソッドは、次のとおりです。

- **Get** - フォーム・データは URL にエンコードされます。たとえば、GET@http://www.server.com/ と指定します。方法が指定されない場合、GET が request-response とみなされます。
- **Post** - メッセージ本文にフォーム・データが表示されます。たとえば、POST@http://www.server.com/ と指定します。

リソース名はリソースの完全アドレスです。リソース名のフォーマットは使用するプロトコルによって異なりますが、HTTP を含む多くのプロトコルでは、リソース名に次のコンポーネントの 1 つ以上が含まれます:

- ホスト名 - リソースが存在するマシンの名前を指定します。
- ファイル名 - マシン上のファイルへのパス名。
- ポート名 - 接続先のポート番号(通常はオプション)。

リソース情報を指定する際には、http://<SERVER>:<PORT>の形式を使用します


この URL は、ドリル・スルー URL のサーバー・コンポーネントを識別します。インポート・フォーマットには、詳細なコンポーネントを含めます。

5. 「OK」 をクリックし、「保存」 をクリックします。

ドリル・スルー URL の詳細コンポーネントの追加

詳細コンポーネントは、ドリル・スルー URL のパラメータ値を定義します。ドリル・スルー URL 内にハードコードされていない値は、表の列名への参照を使用して TDATASEG 表から、またはインポート・フォーマットに指定された列名への参照を使用して参照できます。CCID (Oracle E-Business Suite アプリケーションのコード組合せ ID) などの各データ行で異なるドリル・スルー属性は、入力ファイルに含めて、インポート・フォーマットの属性列にマップする必要があります。ドリル URL をフォーマットする際、`$<TDATASEG_COLUMN>$`表記を使用して TDATASEG 表から、または`$$<IMPORT_FORMAT_COL>$$`表記を使用してインポート・フォーマットから、これらのパラメータを参照できます。

ドリル・スルー URL の詳細コンポーネントを追加するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマットのサマリー」セクションから、インポート・フォーマットを選択します。
3. インポート・フォーマットの詳細セクションの「ドリル URL」で、 をクリックします。
4. 「追加」をクリックし、インポート・フォーマット名、ソース、ターゲット、ファイル・タイプおよびファイル区切り文字を指定します。
5. 「ドリル URL」編集ウィンドウで、ドリル・スルー URL のパラメータを指定します。

パラメータには、特定のソース・システムの必須情報、および実際のドリル領域に移入するために使用される属性が含まれる可能性があります。

属性は、TDATASEG 表のソース列(ディメンション)を参照します。開始位置と長さを指定することにより、入力ファイル内の属性のロケーションを指定できます。

次の例では、ドリル・スルー URL を使用して E-Business Suite ソース・システムにドリル・スルーできます。

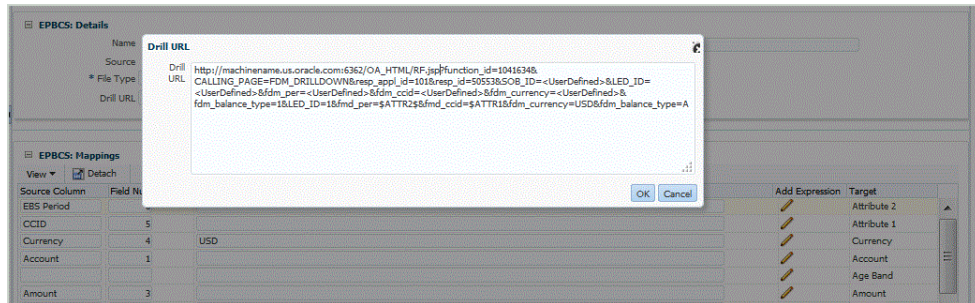
ドリル・スルーのために選択された属性に加えて、関数 ID、呼出し元ページ、Resp_Appl_ID および Resp_id が指定されます。

関数 ID は E-Business Suite システム固有です。E-Business Suite システムがインストールされ構成されるときに生成されます。呼出し元ページ・パラメータは、HTTP 呼出し元を示します。これは、URL に FDM_DRILLDOWN としてハードコードされています。

Resp_Appl_ID および Resp_id パラメータは、E-Business Suite からのアプリケーション ID と責任 ID です。これらは、不明な場合は -1 に設定できます。最初の認証で入力しなかった場合には、E-Business Suite ソース・システムで、ユーザー名、パスワードおよび責任の入力を求めるプロンプトが表示されます。属性には次のものが含まれる場合があります。

- SOB_ID - 帳簿 ID の内部セット
- LED_ID - 内部元帳 ID
- fdm_per - E-Business Suite 期間名。この値は、E-Business Suite システム内の期間名と同じである必要があります。

- fdm_ccid - 要求された勘定科目のコード組合せ ID (CCID)。
- fdm_currency - E-Business Suite 元帳通貨
- fdm_balance_type - "A"は実績、"B"は予算



6. インポート・フォーマットの「マッピング」グリッドで、ソース列の列をドリル・スルー先のターゲット・アプリケーションのディメンションにマップします。
7. 「OK」をクリックし、「保存」をクリックします。

ドリル・スルーの結果の表示

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition によってロードされたデータのドリル・スルーを設定する際、Oracle Enterprise Performance Management System アプリケーションでデータ・フォームを選択して、一般会計勘定科目と、オンプレミス・アプリケーションのセルに移入するために使用されたハイパーリンク付きの残高を表示できます。

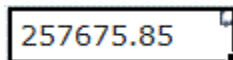
FDMEE によってロードされたデータのドリル・スルーを設定する際、Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションでデータ・フォームを選択して、一般会計勘定科目と、オンプレミス・アプリケーションのセルに移入するために使用されたハイパーリンク付きの残高を表示できます。

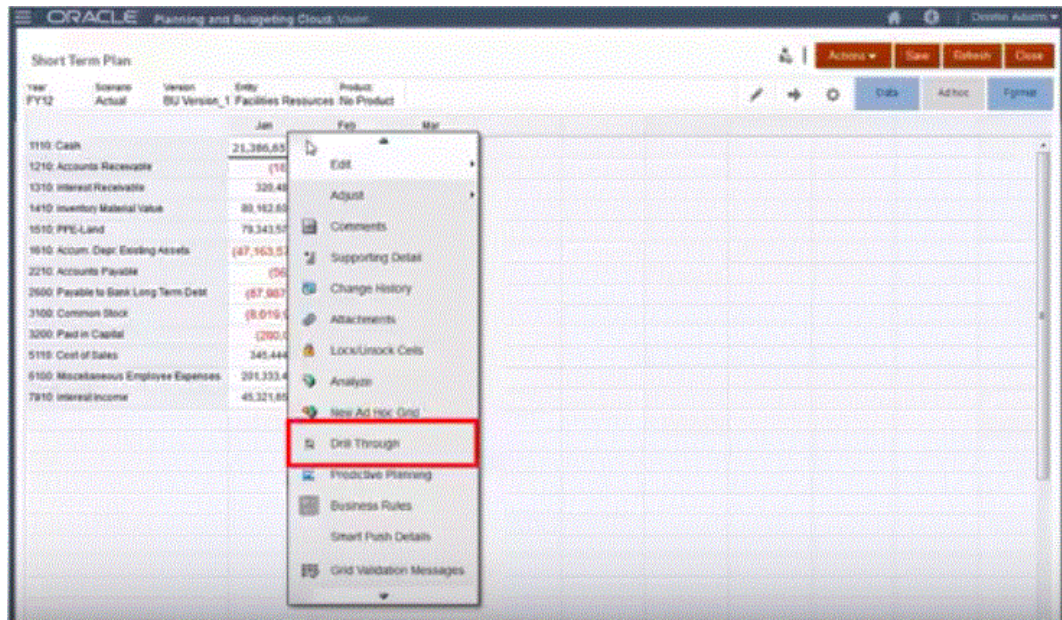
リンク付きデータ値から、ランディング・ページからソース・システムにドリル・スルーし、選択した勘定科目に関連する仕訳入力および補助元帳入力を表示できます。

オンプレミス・アプリケーションでドリル・スルーの結果を表示するには

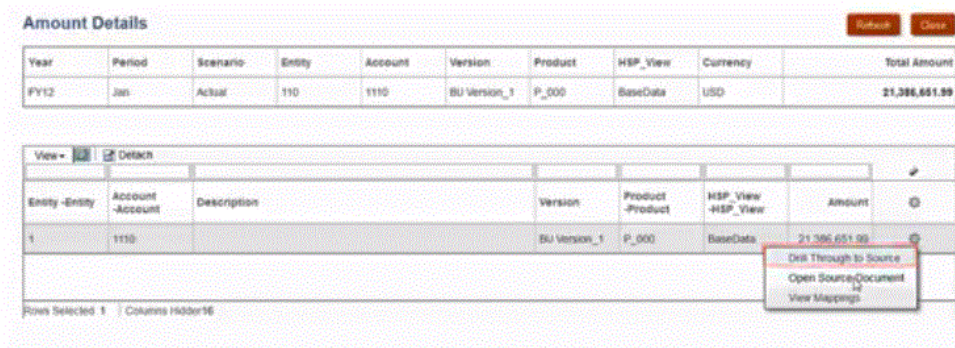
1. EPM Cloud アプリケーションで、ロードされたソース・データのデータ・フォームを開きます。
2. ドリルダウン・データを含んでいるセルで、「アクション」、「ドリル・スルー」の順にクリックします。

セルの右上隅にある「ドリル・スルー」アイコンは、ドリルスルー・データがあることを示します。

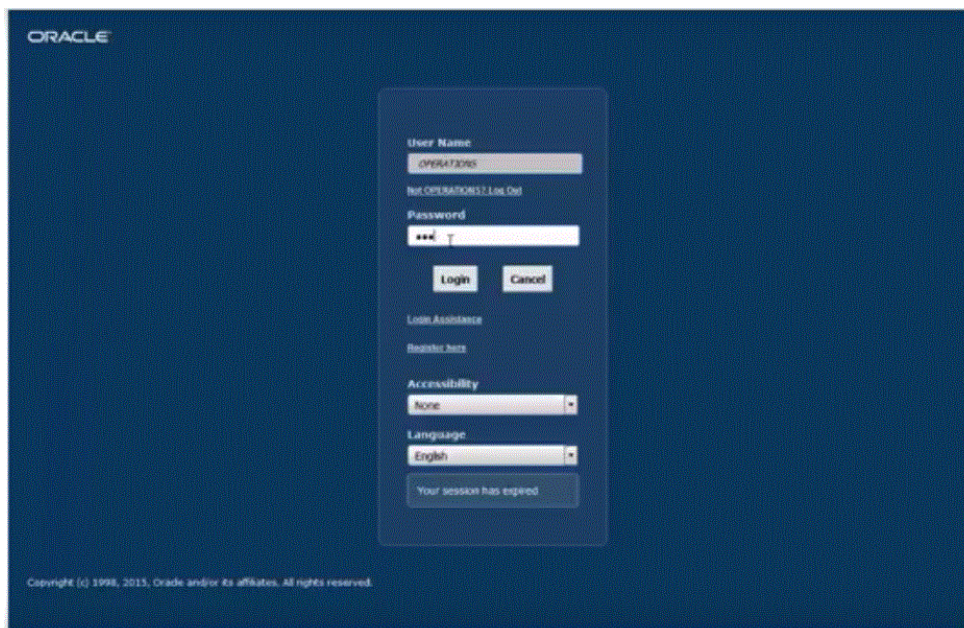




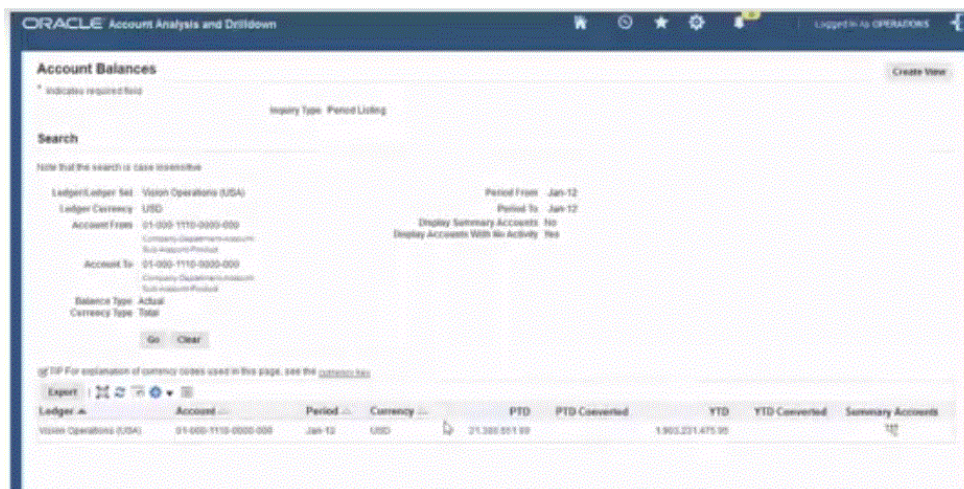
3. 「ソースにドリル・スルー」をクリックします。
4. ランディング・ページから、「ドリル・スルー」アイコンをクリックします。



5. 「ソースにドリル・スルー」をクリックします。
6. 必要な資格証明を入力して、オンプレミス・アプリケーションにログインします。
次の例では、Oracle E-Business Suite のログイン画面を示しています。



7. 表示する詳細レベルにドリルダウンします。
次の例では、残高をサポートする元帳詳細にドリル・スルーできます。



次の例では、残高をサポートする補助元帳にドリル・スルーできます。

Account Balances > Journal Lines: 01-000-1110-0000-000, Jan-12

Ledger: Vision Operations (USA)
Ledger Currency: USD
Account Description: Operations-No Department-Cash-No Sub Account-No Product
Balance Type: Actual

Search

Specify parameters and values to filter the data that is displayed in your results set.

Show table data when all conditions are met.
 Show table data when any condition is met.

Batch is: _____
Journal is: _____
Line is: _____
Source is: _____

Go Clear Add Another Accounted Credit Add

GL TIP: For explanation of currency codes used in this page, see the [currency codes](#) page.

Batch	Journal	Line	Source	Category	Currency	Entered Debit	Entered Credit	Accounted Debit	Accounted Credit
Receivables A 4794812 8865107	Jan-12 Receipts CAD	1	Receivables	Receipts	CAD	532,634.00		637,186.73	
Receivables A 4794812 8865107	Jan-12 Receipts EUR	1	Receivables	Receipts	EUR	77,882.97		77,882.97	
Receivables A 4794812 8865107	Jan-12 Receipts USD	1	Receivables	Receipts	USD	20,671,572.29		20,671,572.29	

Return to Account Balances

次の例では、残高に関連する追加情報を表示できます。

Account Balances > Journal Lines > View Journal Entry Lines

Ledger: Vision Operations (USA)
Period: Jan-12
Currency: USD
Account: 01-000-1110-0000-000

GL Batch Name: Receivables A 4794812 8865107
GL Journal Entry Name: Jan-12 Receipts CAD
Accounted DR: 637186.73
Accounted CR:

Advanced Search

Specify parameters and values to filter the data that is displayed in your results set.

Show table data when all conditions are met.
 Show table data when any condition is met.

Balancing Segment is: _____
Natural Account Segment is: _____
GL Date is: _____

Go Clear Add Another Accounted CR Add

Select Subledger Journal Entry Line: View Transaction View Journal Entry Export

Select Ledger	Account	Account Description	GL Date	Accounting Class	Accounted DR	Accounted CR	Supporting References
Vision Operations (USA)	01-000-1110-0000-000	Operations-No Department-Cash-No Sub Account-No Product	29-Jan-2012	Cash	637,186.73		

EPM Cloud との統合

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、オンプレミス・アプリケーションとクラウドベースのアプリケーションを統合するためのプライマリ・ゲートウェイとして使用できます。この機能を使用して、EPM ユーザーはクラウド・デプロイメントを既存の EPM ポートフォリオに適用できます。統合を使用して既存のオンプレミス ERP アプリケーションからデータをインポートしたり、オンプレミス EPM アプリケーションからデータを同期できます。たとえば、Oracle Hyperion Financial Management ユーザーが Oracle Hyperion Planning のデータを追加したり、Planning ユーザーが他の Planning アプリケーションを追加することができます。また、この統合にはクラウドからオンプレミス・ア

アプリケーションまたは他の外部レポート・アプリケーションへのライト・バックも含まれます。

このタイプの統合は、次のようなソースをサポートします：

- サポートされるソースのオンプレミス ERP アプリケーションと Oracle Fusion Cloud EPM
- オンプレミス EPM アプリケーションと Oracle Fusion Cloud EPM
- Oracle Fusion Cloud EPM とオンプレミス EPM アプリケーション
- Oracle Fusion Cloud EPM と EBS/Peoplesoft GL
- Oracle Fusion Cloud EPM とカスタム・アプリケーションを使用するオンプレミス外部ソース
- Oracle General Ledger とオンプレミス EPM アプリケーション
- Financial Consolidation and Close アプリケーションとオンプレミス・アプリケーション

 **ノート:**

確認ルールはサポートされていません。

ハイブリッドなデプロイメントについてさらに学習するには、このチュートリアル・ビデオを視聴してください。



チュートリアル・ビデオ

Secure Sockets Layer (SSL)証明書の構成

Oracle Enterprise Performance Management Cloud で使用する SSL 証明書を構成するには、この手順のステップを使用します。SSL は、Web サーバーと Web ブラウザ間で暗号化された接続を構築する暗号化テクノロジーです。

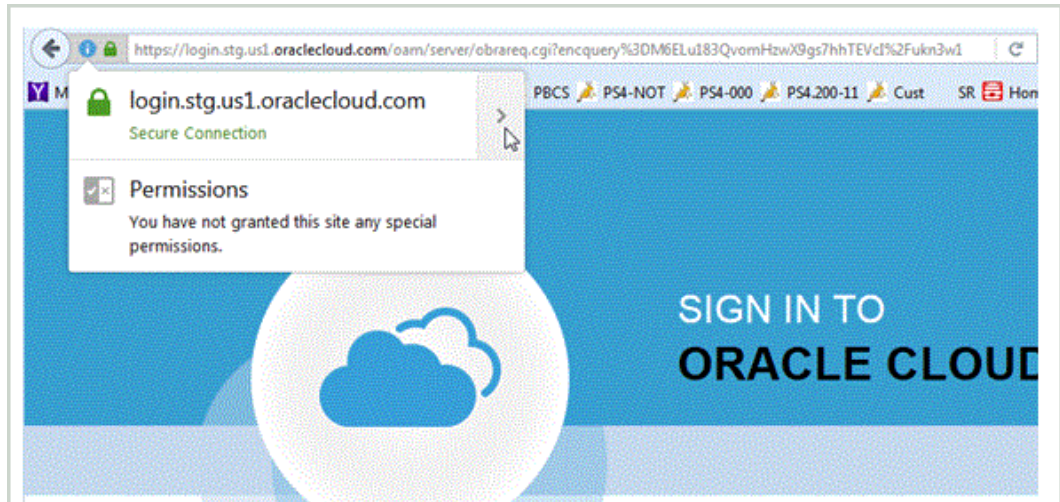
 **ノート:**

Oracle Essbase が Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition サーバー以外のサーバーにあり、SSL を有効にしている場合は、FDMEE が Essbase に接続できるように Essbase をインストール/更新します。

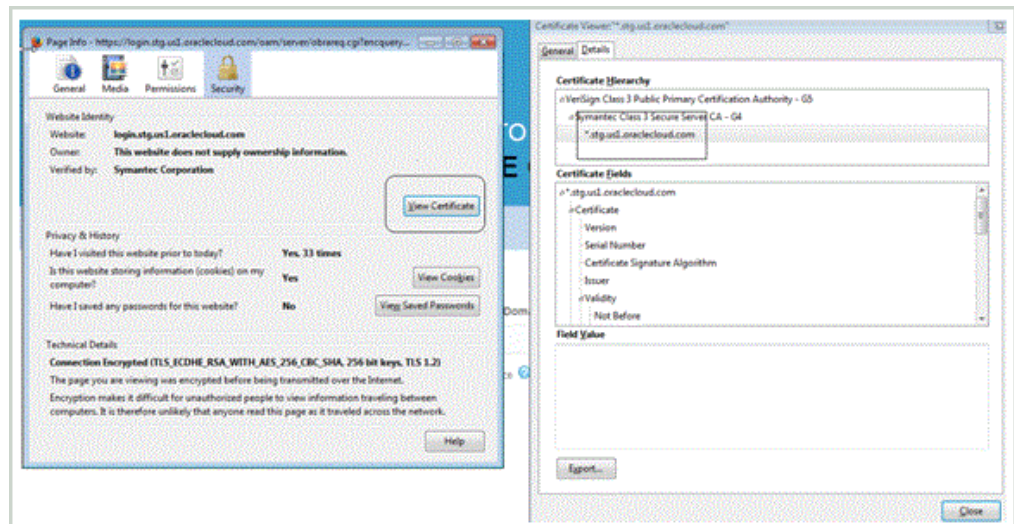
SSL 証明書を構成するには:

1. EPM Cloud サイトの SSL 証明書をエクスポートします。

次の例は、Mozilla Firefox ブラウザのダウンロード情報を示しています。



- a. URL で証明書タイプをダウンロードするには、「**ロック**」をクリックします。
- b. サイトを選択し、証明書を表示します。



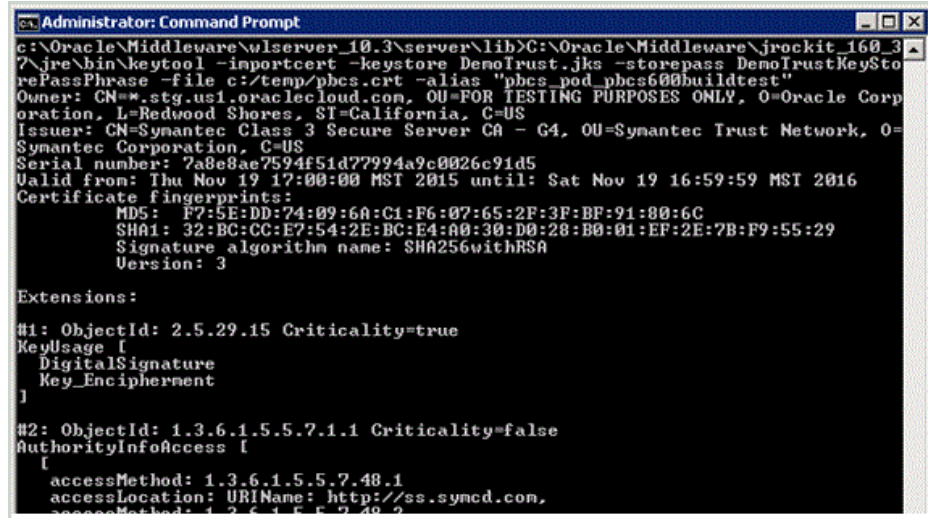
- c. 階層のドメインをクリックし、証明書を保存します。
 - d. 名前 **pbcs.crt** を割り当てます。
2. 証明書ファイルをサーバーにコピーし、証明書を **WebLogic** キーストアにインポートします。

📝 ノート:

次の手順は **Web Logic** のデモ・キー・ストア用です。本番データ・ストアを使用している場合は、それに合わせてパラメータを変更します。

- a. コマンド・プロンプトで、**cd C:\Oracle\Middleware\wlserver_10.3\server\lib** と入力します。

- b. 次のように入力します: `C:\Oracle\Middleware\jdk1.8.0_181\jre\bin\keytool -importcert -keystore DemoTrust.jks -storepass DemoTrustKeyStorePassPhrase -file c:/temp/pbcs.crt -alias "pbcs_pod_name"`



```
Administrator: Command Prompt
c:\Oracle\Middleware\wlsuser_10.3\server\lib>C:\Oracle\Middleware\jrocket_160_3
7\jre\bin\keytool -importcert -keystore DemoTrust.jks -storepass DemoTrustKeySto
rePassPhrase -file c:/temp/pbcs.crt -alias "pbcs_pod_pbcs600buildtest"
Owner: CN=*.stg.us1.oraclecloud.com, OU=FOR TESTING PURPOSES ONLY, O=Oracle Corp
oration, L=Redwood Shores, ST=California, C=US
Issuer: CN=Symantec Class 3 Secure Server CA - G4, OU=Symantec Trust Network, O=
Symantec Corporation, C=US
Serial number: 7a8e8ae7594f51d77994a9c0026c91d5
Valid from: Thu Nov 19 17:00:00 MST 2015 until: Sat Nov 19 16:59:59 MST 2016
Certificate fingerprints:
    MD5:  F7:5E:DD:74:09:6A:C1:F6:07:65:2F:3F:BF:91:80:6C
    SHA1: 32:BC:CC:E7:54:2E:BC:E4:A0:30:D0:28:B0:01:EF:2E:7B:F9:55:29
Signature algorithm name: SHA256withRSA
Version: 3

Extensions:
#1: ObjectID: 2.5.29.15 Criticality=true
KeyUsage [
    DigitalSignature
    Key_Encipherment
]
#2: ObjectID: 1.3.6.1.5.5.7.1.1 Criticality=false
AuthorityInfoAccess [
    accessMethod: 1.3.6.1.5.5.7.48.1
    accessLocation: URIName: http://ss.symcd.com,
    accessMethod: 1.3.6.1.5.5.7.48.2
```

"file"に、ディレクトリと証明書ファイル名を指定します。

"alias"に、適切な名前を指定します。

3. WebLogic 管理コンソールを使用して、2 つの WLS SSL 設定を変更します。
- WebLogic 管理コンソールにログインします。
 - ロックして編集を選択します。
 - 「サーバー」を選択し、ErpIntegrator0 を選択します。
 - 「SSL」を選択し、「詳細」を展開します。
 - JSEE SSL を有効にします。

WebLogic Server では、Java Secure Socket Extension (JSSE)に基づいた SSL 実装を使用します。JSSE は SSL および TLS 用の Java 標準フレームワークであり、ブロック IO API と非ブロック IO API の両方、およびいくつかの一般的に信頼されている認証局(CA)を対象とした参照実装が含まれています。

JSSE ベースの SSL 実装では、SSL を介して、Certicom SSL 実装を使用する Weblogic Server バージョン 8.1 以降のインスタンスと相互運用します。つまり、WebLogic Server と JSSE SSL が SSL クライアントまたは SSL サーバーとして使用される場合は、SSL を介して、Certicom SSL 実装を使用する WebLogic Server (バージョン 8.1 以降)のインスタンスと通信できます。

詳細は、JSSE ベース SSL 実装の使用を参照してください: https://docs.oracle.com/middleware/12213/wls/SECMG/ssl_jsse_impl.htm#SECMG494

- ホスト名の検証で、カスタムのホスト名の検証を選択します。
- カスタムのホスト名の検証に、`weblogic.security.utils.SSLWLSWildcardHostnameVerifier` を入力します。
- 変更を保存してアクティブにします。

The screenshot shows the 'Advanced' configuration section with the following settings:

- Hostname Verification:** Custom Hostname Verifier
- Custom Hostname Verifier:** weblogic.security.utils.SE
- Export Key Lifespan:** 500
- Use Server Certs:**
- Two Way Client Cert Behavior:** Client Certs Not Requested
- Cert Authenticator:** (empty field)
- SSLRejection Logging Enabled:**
- Allow Unencrypted Null Cipher:**
- Inbound Certificate Validation:** Builtin SSL Validation Only
- Outbound Certificate Validation:** Builtin SSL Validation Only
- Use JSSE SSL:**

A 'Save' button is located at the bottom left of the configuration area.

4. FDMEE サーバーを再起動します。
各 FDMEE サーバーで、前述のステップを実行する必要があります。

前提条件

ハイブリッド EPM デプロイメントを使用するための要件を次に示します:

- Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition がインストールされ構成済であること。
- Oracle Fusion Cloud EPM へのサブスクライブ
- URL およびユーザー名の詳細

EPM Cloud デプロイメントの設定

Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションは、EPM Cloud アプリケーションのターゲット・アプリケーション・タイプおよび **Cloud** のデプロイメント・モードで登録されます。プロンプトが表示されたら、接続情報を指定します。インポート・フォ

フォーマット、ロケーション、データ・ルールなど、他のすべての設定定義は、他の EPM アプリケーションと同じ方法で定義されます。

EPM Cloud またはオンプレミス・アプリケーションへのデータのロード

Oracle Enterprise Performance Management Cloud にデータをロードするための基本データ・フロー:

1. EPM Cloud アプリケーションをターゲット・アプリケーションとして Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition に登録します。
EPM Cloud またはオンプレミス・アプリケーションの登録の詳細は、[ターゲット・アプリケーションの登録](#)を参照してください。
これを実行するには、「設定」タブの「登録」で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
2. ソースを EPM Cloud またはオンプレミス・アプリケーションにマッピングするインポート・フォーマットを定義します。
3. 通常の手順を使用するのと同じ方法で、ロケーション、データ・ロード・マッピングおよびデータ・ロード・ルールを定義します。

EPM Cloud アプリケーションのエクスポート

Planning から Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition へのエクスポート・データ・プロセスは次のとおりです:

1. Oracle Enterprise Performance Management Cloud をライトバック用に FDMEE ERP アプリケーションへまたはデータ同期用に FDMEE EPM アプリケーション (カスタムまたは他の EPM)へマップするインポート・フォーマットを定義します。
2. 上で作成したインポート・フォーマットのロケーションを追加します。
3. データのロードを実行すると、オンプレミスの FDMEE で EPM Cloud 用の DATAEXPORT 計算スクリプトが生成されます。この計算スクリプトは、EPM Cloud で実行され、出力ファイルは FDMEE にダウンロードされます。
4. 適用可能なターゲット・ディメンションに対してマップを追加します。
5. ファイルがダウンロードされると、ライトバック/データ同期ワークフロー・プロセスが実行されます。

データ・ロード・ワークベンチの使用方法

データ・ロード・ワークベンチ機能は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でのソース・システムのデータのインポート、表示と確認およびエクスポートのフレームワークを提供します。

ワークベンチの主な機能は、次のとおりです:

- インポート、検証、エクスポートおよび確認のオプションのある対話型ロード・プロセス。
- 「ソース(すべて)」/「ソース(マップ済)」/「ターゲット」/「ソースとターゲット」の値を表示するためのプロビジョニング

- 即時参照用の PTD/YTD 値表示
- 「有効」、「無効」、「無視」および「すべてのデータ」のオプションの表示
- オンラインおよびオフラインのロード・プロセス
- 履歴ロードの間合せオプション
- Excel への履歴ロードのエクスポート
- ワークベンチからのソースへのドリル・バック
- Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションの仕訳のロード、チェックおよび転記

ノート:

「統合の実行」役割でログインすると、「タスク」ペインに「データ・ロード・ワークベンチ」、「データ・ロード」、「メンバー・マッピング」、「HR データ・ロード」、「メタデータ」、「プロセスの詳細」のリンクが表示されます。

データ・ロード・ワークベンチは、4つのセクションで構成されています:

- ワークフロー・グリッド
- POV バー: [POV バーの使用](#)を参照してください。
- ステータス
- データ・グリッド

ワークフロー・グリッド

各ワークフロー・ステップおよびそれにより行われる処理を次に示します:

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、魚アイコンを使用して各ステップのステータスを示します。ワークフロー・ステップが正常に完了すると、魚がオレンジ色になります。ステップが失敗した場合、魚はグレーになります。

ノート:

%EPM_ORACLE_HOME%\epmstatic\aiif\images\general フォルダの ProcessSucceeded アイコンと ProcessFailed アイコンを置換して、成功したプロセスと失敗したプロセスを示すアイコンをカスタマイズできます。

データの処理

ステップ 1: ソース・データのインポート

ソースからインポート機能は、Oracle Data Integrator でソース・システムからデータのインポートを可能にし、データのインポート、マップおよび検証など、必要な変換を実行します。

また、ソースからインポート機能を使用すると、ソースをオンライン(即時処理)またはオフライン(バックグラウンドで実行)でインポートすることもできます。

この機能は次の場合のみ選択します:

- データ・ロード・ルールを初めて実行します。
- ソース・システムのデータが変更されています。ステージング表内のデータをエクスポート後にレビューしたときに、ソース・システム内のデータを変更する必要性が生じた場合などです。

ソースからデータを初めてインポートした後では、ソース・システムのデータは変更されない場合がほとんどです。変更されていないデータをインポートし続ける必要はありません。

ソース・データをインポートするには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。
2. **オプション:** ソース・ファイルをインポートすると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は現在の POV を使用して、ロケーション、カテゴリおよび期間を決定します。

別のソース・ファイルをインポートするには、POV を変更する必要があります。POV の変更の詳細は、[POV バーの使用](#)を参照してください。

3. 画面の上部で、「インポート」をクリックします。
4. 「実行モード」で、ソースをインポートするモードを選択します。
 - オンライン - ODI ではデータを同期モード(即時処理)で処理します。
 - オフライン - ODI ではデータを非同期モード(バックグラウンドで実行)で処理します。



をクリックし、「プロセスの詳細」ページに移動して、ODI ジョブの進捗状況をモニターします。

5. 「OK」をクリックします。
インポートの魚がオレンジ色に変わります。

ステップ 2: ソース・データの検証

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のソース・データの検証によって、すべてのメンバーが有効なターゲット・システム勘定科目にマップされているか確認します。ソース・ファイル内にマップされていないディメンション・マップがある場合、検証エラーが発生します。検証では、ディメンション・マッピングとソース・ファイルを比較し、マッピングされていないディメンションを特定します。すべてのディメンションが正しくマッピングされるまで、プロセス・フローを続行できません。

検証プロセスを実行するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。
2. 「検証」を選択します。

マッピング・エラーのない検証

検証に成功すると、オレンジ色の検証を示す魚のアイコンが Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 画面のヘッダーに表示されます。

マッピング・エラーを含んだ検証

新たに追加されたディメンション・メンバーがマッピングされていないために、ディメンション・メンバーをソース・システムに追加すると検証エラーが生成されることがあります。ディメンション・メンバーがマッピングされていない場合、検証の魚はグレーになり「検証エラー」画面がワークベンチで起動します。ここではマッピングされていない(未定義の)ディメンション・メンバーの数が示されます。検証を再度実行する前に、マッピングされていないディメンション・メンバーを修正する必要があります。

Dimension Name	Source Value	Description
Ledger	No Source ENTITY	

変換表のエラーを修正するには:

1. 「検証」画面の上位リージョンで、修正が必要な行をハイライトします。
2. マッピングされていない勘定科目を修正します。

「検証エラー」画面の上位リージョンで、マッピングされていないアイテムがソース 値に挿入され、下位リージョンはそのソース値があるすべての行を表示します。たとえば、上位リージョンでソース値 01 のエンティティ・ディメンションの値が表示される場合、ENTITY = '01'のすべての行が下位リージョンに表示されます。

[インポート・フォーマット・マッピングの定義](#)を参照してください。

3. 「検証」をクリックし、検証フォームをリフレッシュします。

検証プロセスを渡すソース・データをターゲット・システムにロードできます。

マッピング・エラーの修正

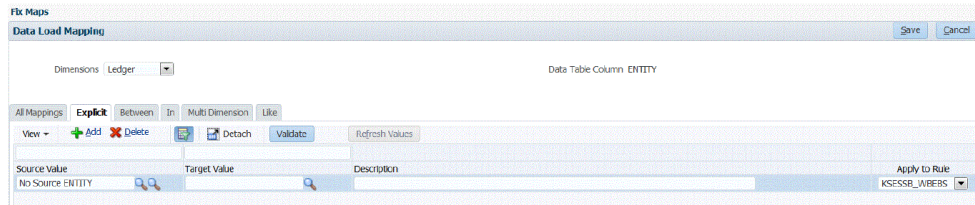
「データ・ロード・ワークベンチ」で、マッピングのエラーが発生した場合にマッピング・エラーを表示し、即時に修正できます。

マッピング・エラーを修正するには:

1. 「データ・ロード・ワークベンチ」で「検証エラー」タブを選択します。

Dimension Name	Source Value	Description
Ledger	No Source ENTITY	

2. 「マップの修正」を選択してマッピングにアクセスします。
3. 「データ・ロード・マッピング」画面で任意のエラーを修正します。



4. 「検証」をクリックし、「保存」をクリックします。

Financial Management データ交差の検証

検証ステップを実行するとき、Oracle Hyperion Financial Management ユーザーは Financial Management ターゲット・アプリケーションから交差確認レポートを実行して、データの交差(勘定科目やエンティティなどのセル・ステータス)などのデータを検証できます。

交差確認レポートは、データ・ロード・ワークフローのデータ検証ステップの一部として生成されます。

この機能は、「アプリケーション・オプション」の「交差の確認」オプションで有効になります。

交差確認を実行するには:

1. 「検証」画面の一番上で「交差確認レポートの生成」をクリックします。
2. プロンプトが表示されたら、交差確認レポートを保存するか開きます。
3. 検証エラーを修正し、検証ステップを再実行します。

[交差確認レポート・エラー](#)を参照してください。

ステップ 3: ターゲット・アプリケーションへのデータのエクスポート

ソース・データが検証プロセスを完了した後、「エクスポート」オプションを使用してデータをターゲット・アプリケーションにエクスポートします。このオプションは、データ・グリッド内のデータを見なおし、そのデータをターゲット・アプリケーションにエクスポートする必要があることを確認してから選択します。

Oracle Hyperion Planning および Oracle Essbase のためにデータをエクスポートするとき、データの保管、加算および減算を行うことができます。Planning および Essbase の場合、すべてのデータを上書きできます。


Oracle Hyperion Financial Management の場合、データのマージ、累計、置換、およびセキュリティ・データによる置換を実行できます。

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理を使用してマッピング・ルールをエクスポートするとき、関連するすべてのマッピング・スクリプトが含まれます。

マッピング・ルールの CSV または Excel 形式へのエクスポートにはスクリプトは含まれません。

データ・ロードのルールを送信するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。
2. **オプション:** ソース・ファイルをインポートすると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は現在の POV を使用して、ロケーション、カテゴリおよび期間を決定し、次の処理を実行します: 別のソース・ファイルをインポートするには、POV を変更する必要があります。[POV バーの使用](#)を参照してください。
3. 画面の上部で、「エクスポート」をクリックします。
4. 「実行モード」ドロップダウンから、ソース・データをターゲット・アプリケーションにエクスポートするモードを選択します。
 - オンライン - ODI ではデータを同期モード(即時処理)で処理します。
 - オフライン - ODI ではデータを非同期モード(バックグラウンドで実行)で処理します。

 をクリックし、「プロセスの詳細」ページに移動して、ODI ジョブの進捗状況をモニターします。
5. 「OK」をクリックします。

ステップ 4: データの確認

データをターゲット・システムにエクスポートした後で、確認ステップを実行して、現在の POV の確認レポートを表示します。確認レポート・データが現在の POV に対して存在しない場合は、空白のページが表示されます。

確認レポートが実行される時に使用されるデフォルトのレポート・タイプを選択できます。「レポート」ページの「発行タイプ」フィールドは、デフォルトで、選択したレポートタイプ値に設定されます。このフィールドの選択肢は、PDF、Excel、Word、リッチ・テキストおよび HTML です。

ノート:

ワークベンチから確認レポートを実行し、開いた場合、サーバー上の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition フォルダには保存されません。

Validation Group: COMMA7DIM		Location: COMMA7DIM
		Category: Actual
		Period: 2005-03-01
Pass		
EastSales		
Account	Value	
Sales - Sales	1,322,378.76	
Purchases - Purchases	581,846.65	
LaborCost - LaborCost	317,370.90	
End of Data		

ワークベンチ・データ・グリッドの使用方法

データ・グリッドには、メイン・グリッドに次の2つのタブがあります:

- データのロード/POVのロード - これを使用して、ソース・システムのデータのインポート、表示と確認およびエクスポートを行います。
- ソース・データへのドリル・スルー
- マッピング詳細の表示

表アクションにあるオプションを選択することにより、データ・グリッド上で次の作業を実行します:

- データの表示
- データのフォーマット
- データの表示
- ロードされたデータを [Microsoft Excel](#) で開く
- 例による問合せ
- データの固定
- データのデタッチ
- テキストの折返し
- データ・セルへのセル・テキストとドキュメントの添付

データの表示

データの表示では、次のようなデータを表示する方法が複数用意されています。

表 - グリッドに表示するソースまたはターゲット・データを選択します。

- ソース(すべて) - マップ済およびマップされていないソースのディメンションを表示します(ENTITY、ACCOUNT、UD1、UD2、... AMOUNT)。
- ソース(マップ済) - マップ済のソースのディメンションのみを表示します。

- ターゲット - ターゲットのディメンションのみを表示します(ENTITYX、ACCOUNTX、UD1X、UD2X、...AMOUNTX)。
- ソースとターゲット - ソースとターゲットの両方のディメンションを表示します (ENTITY、ENTITYX、ACCOUNT、ACCOUNTX、UD1、UD1X、AMOUNT、AMOUNTX)。

列 - データに表示する列を選択します。

- すべて表示
- エンティティ
- 勘定科目
- バージョン
- 製品
- 部門
- STAT
- 金額
- ソース金額

 **ノート:**

Oracle E-Business Suite および PeopleSoft の場合、「勘定科目の説明」も表示できます。

固定/固定解除 - 列を所定の位置にロックし、データ・グリッドをスクロールしても見えるようにします。固定オプションを使用するには、列見出しを選択する必要があります。列の固定を解除するには、列を選択し、ショートカット・メニューから「固定解除」を選択します。

デタッチ/アタッチ - データ・グリッドから列をデタッチします。デタッチされた列は、独自のウィンドウに表示されます。デフォルト・ビューに戻るには、「表示」を選択し、次に連結を選択するか、「閉じる」をクリックします。

ソート - 昇順または降順の列のソート順を変更するために使用します。「ソート」を選択してから「拡張」を選択することにより、複数レベルのソート(最大3レベルまでの昇順および降順)が使用可能です。詳細ソート画面から、第1のソート基準列を選択してから、第2の基準列を選択し、さらに第3の基準列を選択します。

「詳細検索」オプションに表示される検索フィールドは、選択しているアーティファクトにより異なります。

列の順序変更 - 列の順序を変更するために使用します。このオプションを選択すると、「列の順序変更」画面が表示されます。列を選択し、右側にあるスクロール・ボタンを使用して列の順序を変更します。

例による問合せ - フィルタ行の切替えに使用します。フィルタ行を使用して、特定の列に表示される行をフィルタするためのテキストを入力できます。特定の列についてフィルタに使用できるテキストがあれば入力し、**[Enter]**をクリックします。フィルタをクリアするには、テキスト・ボックス内のフィルタ条件テキストを削除し、**[Enter]**をクリックします。入力するテキストはすべて大文字と小文字が区別されます。

データのフォーマット

列幅をピクセル数またはパーセンテージの単位で変更できます。テキストが列幅を超える場合は、各セルのテキストを自動的に折り返すこともできます。

列幅を変更するには:

1. サイズを変更する列を選択します。
2. 表アクション・バーから、「**フォーマット**」を選択し、次に「**サイズ変更**」を選択します。
3. 最初の「**幅**」フィールドに、変更するサイズの値を入力します。
列幅は 1 から 1000 の値で選択できます。
4. 2 番目の「**幅**」フィールドで、サイズ変更の単位として「**ピクセル**」または「**パーセンテージ**」を選択します。
5. 「**OK**」を選択します。

列のテキストを折り返すには:

1. 折り返すテキストのある列を選択します。
2. 表アクション・バーから、「**フォーマット**」を選択し、次に「**折返し**」を選択します。

データの表示

データ・グリッドに表示する次のようなデータのタイプを選択できます:

- 有効なデータ - 正しくマップされ、ターゲット・アプリケーションにエクスポートされたデータ。
- 無効なデータ - 正しくマップされず、その結果、データがターゲットにエクスポートされない 1 つ以上のディメンション。
- 無視されたデータ - ターゲットへのエクスポート時にソース値を無視するユーザー定義の明示的マップ。このタイプのマップは、メンバー・マッピングで特別なターゲット・メンバーに値 **ignore** を割り当てて定義します。
- すべてのデータ - すべての有効、無効および、無視されたデータを表示します。

データのタイプを表示するには:

1. 「**表示**」を選択します。
2. 次のいずれかから選択します:
 - 有効なデータ
 - 無効なデータ
 - 無視されたデータ
 - すべてのデータ

ソース・データのドリル・スルーおよびマッピングの表示

データがデータ・ロード・ワークベンチで表示されている場合、ソースまでドリル・スルーして、マッピングを表示し、ソース・ドキュメントを開くことができます。

 **ノート:**

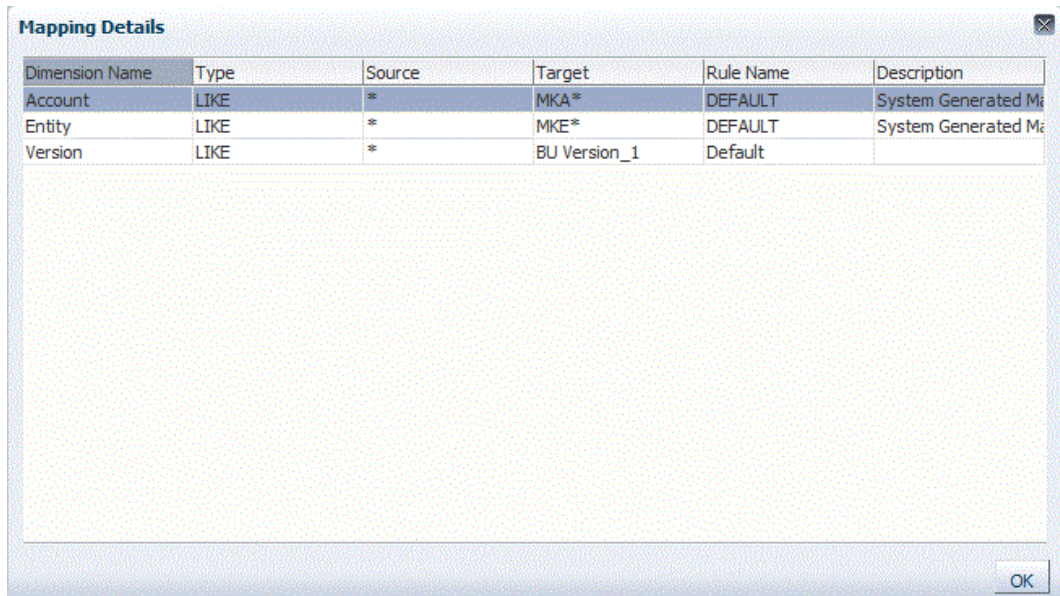
ソース・システムが Oracle E-Business Suite/Peoplesoft で、メタデータ・ルールがある場合、そのメタデータ・ルールに基づいてドリル領域が作成されます。それ以外の場合は、データ・ロード・マッピングのターゲット・メンバーに基づいて作成されます。年、期間およびシナリオについて、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では監査情報を使用してドリル領域を作成します。

ソース・マッピングにドリル・スルーするには:

1. データ・グリッドに表示するデータのタイプを選択します。
データの表示を参照してください。
2. 「ソース金額」列から、金額を選択します。
3. ソース金額のリンクをクリックして、「ソースにドリル・スルー」を選択します。

ソース・マッピングの詳細を表示するには:

1. データ・グリッドに表示するデータのタイプを選択します。
データの表示を参照してください。
2. ソース金額列から、金額を選択します。
3. ソース金額のリンクをクリックして、「マッピングの表示」を選択します。



Dimension Name	Type	Source	Target	Rule Name	Description
Account	LIKE	*	MKA*	DEFAULT	System Generated M...
Entity	LIKE	*	MKE*	DEFAULT	System Generated M...
Version	LIKE	*	BU Version_1	Default	

ロードされたデータを Microsoft Excel で開く

ワークベンチでデータを確認する場合は、金額から Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムにドリルダウンできます。ソース・システムでは、データがロードされた粒度で表示されます。

Microsoft Excel でロードされたデータを開き、データがどのように定義されているかを確認できます。

ノート:

Excel からエクスポートされたデータは、「システム設定」のファイルへのワークベンチ・エクスポート形式の設定に応じて CSV (*.csv) または Excel (*.xls) ファイル形式でエクスポートされます。エクスポートのデフォルトのファイル形式は CSV です。詳細は、[システムレベルのプロファイルの設定](#)を参照してください。


ロードされたデータを Microsoft Excel で開くには:

1. 表アクション・バーから、 をクリックします。
2. ロードされたデータを Microsoft Excel で開きます。

例による問合せ

例による問合せ機能を使用して、特定の列に表示される行をフィルタ処理します。特定の列についてフィルタに使用できるテキストがあれば入力し、**[Enter]** をクリックします。フィルタをクリアするには、テキスト・ボックス内のフィルタ条件テキストを削除し、**[Enter]** をクリックします。入力するテキストはすべて大文字と小文字が区別されます。

例による問合せを行うには:

1. 表アクション・バーから、 をクリックして、フィルタ行を有効にします。
フィルタ行は、この機能を使用する列の上に表示されます。
2. 列内の値をフィルタ処理するテキストを入力し、**[Enter]** をクリックします。

ノート:


フィルタにテキストを入力する場合、入力するテキストまたは部分テキストの大文字と小文字は区別されます。大文字と小文字の区別は正確に一致する必要があります。たとえば、接頭辞が「HR」であるターゲット・アプリケーションをすべて検索する場合、「Hr」または「hr」と入力することはできません。

データの固定

「固定」機能を使用して、列を所定の位置にロックし、データ・グリッドをスクロールしても見えるようにします。

列を固定するには:

1. 固定する列を選択します。

2. 表アクション・バーから、をクリックします。


列の固定を解除するには:

1. 固定された列を選択します。
2. ショートカット・メニューで「**固定解除**」を選択します。

データのデタッチ

デタッチ機能を使用して、データ・グリッドから列をデタッチします。グリッドをデタッチすると、列は独自のウィンドウに表示されます。デフォルト・ビューに戻るには、「**表示**」を選択し、次に**アタッチ**を選択するか、「**閉じる**」をクリックします。

列をデタッチするには:

1. デタッチする列を選択します。
2. 表アクション・バーから、をクリックします。
データ・グリッドが別のウィンドウに表示されます。


データ・グリッドに列を再アタッチするには:

1. 再アタッチする列を選択します。
2. 表アクション・バーから「**表示**」、**アタッチ**の順に選択します。

テキストの折返し

テキストが列幅を超える場合は、各セルのテキストを自動的に折り返すことができます。

列のテキストを折り返すには:

1. 折り返すテキストのある列を選択します。
2. をクリックします。



データ・セルへのセル・テキストとドキュメントの添付

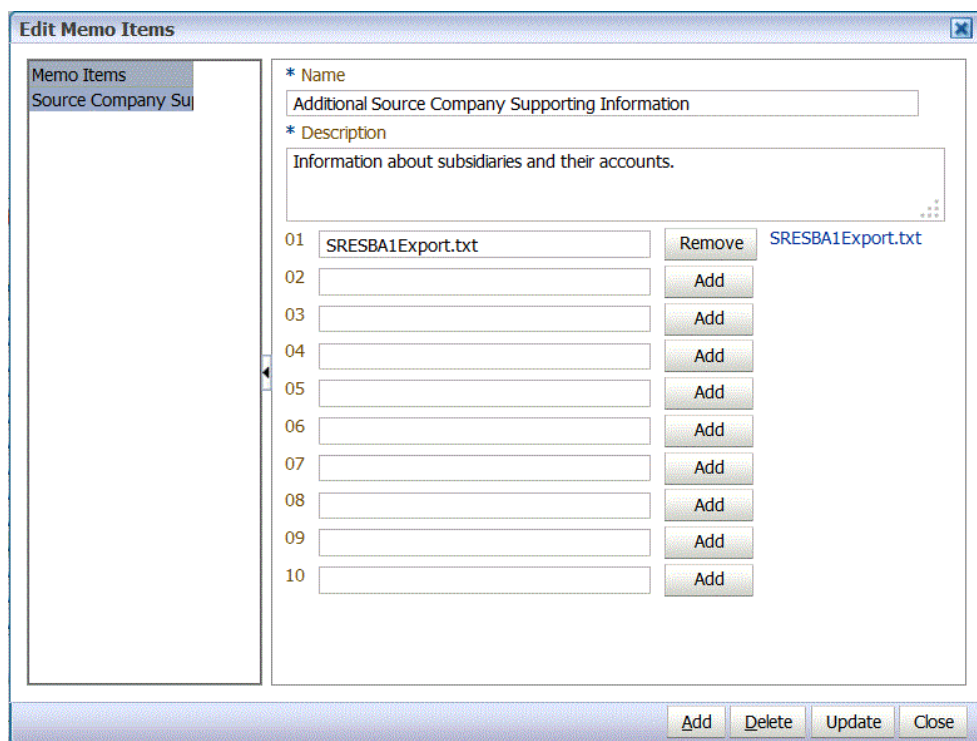
セル・テキスト機能により、テキストとドキュメントをデータ・セルに添付できます。必要に応じてセル・テキストの複数のインスタンスを追加できます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、ドキュメントを EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialDataQuality/data ディレクトリにアーカイブします。セル・テキストは Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションだけでエクスポートできます。

ノート:

FDMEE では、複数のセル・テキストを Financial Management の交差にロードしません。追加モードを使用したロードが実行され、すでにセル・テキストを含む交差に新しいセルが追加された場合、追加されるのではなく、古いセル・テキストが新しいセル・テキストで置換されます。

セル・テキストを割り当ててドキュメントを添付するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。
2. 「データ・ロード・ワークベンチ」でデータ・セルを選択します。
3. 列見出しの「メモ」列()で、データ・セルの左にあるメモ・リンク()をクリックします。
4. 「メモ・アイテムの編集」で、「追加」をクリックします。
5. 「名前」フィールドにメモの名前を入力します。
6. 「説明」フィールドにメモの説明を入力します。
7. 「追加」(添付フィールドの右側)をクリックします。
8. 「選択」画面で添付を参照して選択し、「OK」をクリックします。



9. 「更新」をクリックします。
10. 「閉じる」をクリックします。
11. オプション: 添付を削除するには、「削除」(添付フィールドの右側)をクリックします。

交差確認レポート・エラー

交差確認レポートがデータ検証ステップの一部として生成される際、エラーが発生すると、交差確認レポートによりエラーに関する情報が提供されます。

4つの交差確認レポート・エラーがあります:

- 無効な交差

- 書込み不可
- 交差のロック
- 無効なメンバー

無効な交差(赤で強調表示)

無効な交差エラーは次のエラーにより発生します:

- 交差が無効です。
- ICP メンバーが勘定科目に対して無効です。ICP は ICP 階層の"TopCustom"の子である必要があります。
- 勘定科目で会社間アクティビティは許可されていません。ICP メンバー値を "([ICP None])"に設定するか、勘定科目を変更する必要があります。
- エンティティで会社間アクティビティは許可されていません。ICP メンバー値を "([ICP None])"または有効な ICP エンティティに設定する必要があります。
- カスタム・メンバーが勘定科目に対して無効です。カスタム・メンバーはカスタム階層の"TopCustom"の子である必要があります。

書込み不可(紫で強調表示)

書込み不可エラーは次により発生します:

- 読取りおよび書込みアクセス権がありません。(Oracle Hyperion Financial Management セル・ステータスは、読取りアクセス権なしまたは書込みアクセス権なしです。)
- Financial Management セル・ステータスは、書込み可能で、ライン・アイテムをサポートできますが、セルが IC 取引をサポートしません。
- Financial Management セル・ステータスが導出です。
- Financial Management セル・ステータスが親レベルの入力です。

交差のロック(紫で強調表示)

ロックされた交差です。(Financial Management セル・ステータスはロック済です。)

無効なメンバー(オレンジで強調表示)

無効なメンバー・エラーは次により発生します:

- ターゲット・メンバーが Financial Management で無効であるか、Financial Management でユーザーにそれに対するアクセス権がありません。
- 自身との会社間は制限されています。ICP ディメンション値は、エンティティ・ディメンション値と同じにはできません。

プロセス詳細の表示

プロセスの詳細ページを使用して、送信されたルール・ステータスおよびログを表示し、データ・ロード中にセルが拒否されたときに検証レポートをダウンロードします。

 **ノート:**



「プロセスの詳細」ログは7日ごとにページされます。ログをダウンロードする必要がある場合は、EPMAutomate を使用してログをローカル・フォルダにダウンロードします。コマンドは downloadFile です。例: epmautomate downloadfile "[FILE_PATH]/FILE_NAME"。詳細は、**Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作を参照してください**

データ・ルールのプロセスの詳細を表示するには:

1. 「ワークフロー」タブの「モニター」で、「プロセスの詳細」を選択します。

「プロセスの詳細」ページが開き、すべてのソース・システムのプロセスが表示されます。プロセスごとに次の列が表示されます:

- **プロセス ID** - 自動的に生成された ID 番号
- **ステータス** - プロセスのステータスを示すビジュアル・インディケータが表示されます。アイコンの上にカーソルを置くと、画面のヒントが表示されます。使用可能なステータス:

-  — ルールが正常に処理されました
-  — ルールの実行が正常に完了しませんでした

- **ログ** - 「表示」をクリックするとログ・ファイルが表示されます。
- **ロケーション** - ロケーション名を表示します
- **プロセス名** — プロセスのタイプ


プロセスのタイプには、次のものがあります:

- **データ・ロード** - データ・ロードのルールを実行すると開始されます。
- **メタデータ・ロード** - メタデータ・ロードのルールを実行すると開始されます。
- **HR ロード** - HR データ・ロードのルールを実行すると開始されます。
- **プロセスのページプロセスの削除** - ターゲット・アプリケーションやソース・システムなどのアーティファクトを削除すると開始されます。
- **ソース・システムの初期化** - ソース・システムを初期化すると開始されます。

- **ルール名** - ルールの名前
- **ソース・システム** - ソース・システムの名前
- **会計エンティティ** - ソース会計エンティティの名前
- **ターゲット・アプリケーション** - ターゲット・アプリケーションの名前
- **ODI セッション番号** - Oracle Data Integrator 内のセッション番号。これを使用して Oracle Data Integrator 内のセッションを検索できます。

 ノート:

ODI セッション番号は、データがオフライン実行中に処理される場合のみ「プロセスの詳細」に存在します。

- **ジョブ ID** — Oracle Hyperion EPM Architect のジョブ ID
 - **処理者** - プロセスを開始したユーザー ID
 - **ステータスのリセット** - プロセスが長時間にわたって「実行中」ステータスのままである場合、ステータスを「失敗」にリセットします。
 - **リンク** - プロセス・ステップのログ情報を表示します。ファイル・インポートの場合、スキップされた行が表示されます。**Oracle Hyperion Planning** へのエクスポートの場合、拒否された行などが表示されます。
 - **出力リンク** - データ・ロード中に拒否されたデータ・セルおよび拒否の理由を示す検証エラー・レポートをダウンロードします。検証エラー・レポートは、検証失敗の理由を表示オプションが「はい」に設定されている場合にのみ使用できます。
2. 詳細を表示するプロセスを選択します:
- **ステータス** - プロセス・ステップごとにステータスが表示されます。プロセスが失敗したポイントを表示することにより、問題をトラブルシューティングできます。
 - **プロセス・ステップ** - プロセス内のステップを表示します。
 - **プロセス開始時間** - プロセス・ステップが開始された時間。
 - **プロセス終了時間** - プロセス・ステップが終了した時間。
 - **ログ** - ログが存在する場合、「表示」をクリックすると、ログの内容が表示されます
3. **オプション**: 表示される行をフィルタするには、列ヘッダーの上にフィルタ行が表示されていることを確認してください。(フィルタ行を切り替えるには、 をクリックします。) 次に、フィルタに使用するテキストを入力します。
- 次のものでフィルタできます。
- プロセス ID
 - ロケーション
 - ルール名
 - ソース・システム
 - 会計エンティティ
 - ターゲット・アプリケーション

 ノート:

フィルタにテキストを入力する場合、入力するテキストまたは部分テキストの大文字と小文字は区別されます。たとえば、接頭辞が「HR」であるターゲット・アプリケーションをすべて検索する場合、「Hr」または「hr」と入力することはできません。フィルタリングの詳細は、[FDMEE ユーザー・インタフェース要素](#)を参照してください。

Oracle ERP Cloud Oracle General Ledger アプリケーションの統合

Oracle ERP Cloud リリース 11 以上を使用すると、Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger のデータを EPM アプリケーションと統合できます。この統合では、必要なソース元帳を Oracle ERP Cloud から選択し、いくつかの単純なマッピングを設定してボタンを押すと、データが EPM アプリケーションに取り込まれます。この統合は、手動で実行することも、特定の時間にスケジュールすることも可能です。

 ノート:

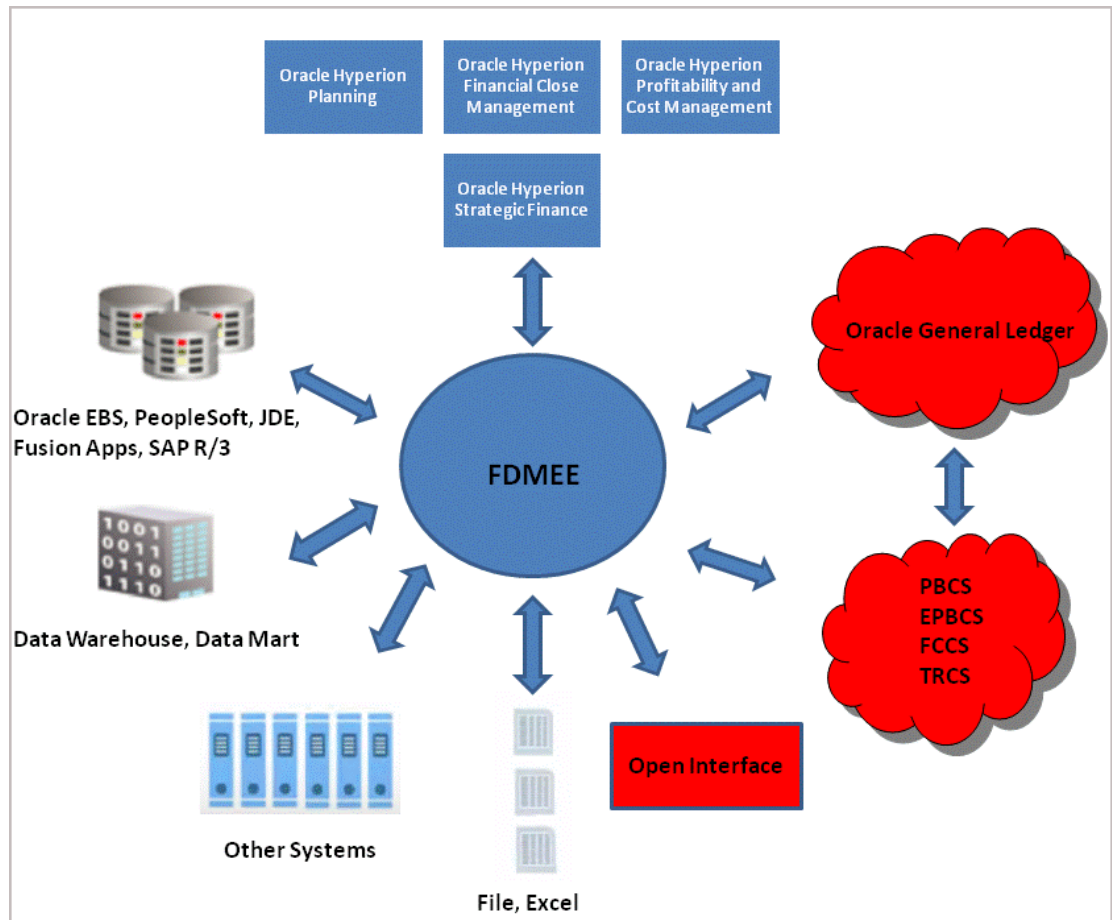
平均日次残高(ADB)元帳は、現在の統合ではサポートされません。

 ノート:

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では Oracle General Ledger との統合の一部として、Financials Accounting Hub (FAH)および Financial Accounting Hub Reporting Cloud Service (FAHRCS) もサポートされます。

統合により、ドリル定義が自動的に設定されます。

FDMEE では、データのロードのみでなく、Oracle ERP Cloud.へのライトバックも簡単になります。



統合プロセスの説明

概括的には、これは Oracle ERP Cloud からの Oracle General Ledger データを EPM アプリケーションと統合する方法です:

1. Oracle General Ledger ソース・システムおよび接続情報を設定し、次にソース・システムを初期化します。

初期化プロセスで Oracle General Ledger のデータが EPM アプリケーションに Oracle Essbase キューブとして取り込まれます。各 Essbase のターゲット・アプリケーションは、ソースの Oracle General Ledger の勘定体系定義を表します。

[ソース接続の構成](#)を参照してください。

2. Oracle General Ledger ソース・システムの Oracle General Ledger データを必要とする EPM ターゲット・アプリケーションを作成します。
3. 1つ以上のソース・システムからのデータを必要とするターゲット・アプリケーションを作成します。

Oracle General Ledger アプリケーションから EPM アプリケーションにデータをロードする場合は、EPM アプリケーションをターゲット・アプリケーション・タイプとして追加します(たとえば Oracle Hyperion Planning をターゲット・アプリケーション・タイプとして追加します)。

4. インポート・フォーマットを構築して、Oracle General Ledger と Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 内の EPM アプリケーション・ディメンション間の統合マッピングを設定します。
この項の [インポート・フォーマットの操作](#) を参照してください。
5. インポート・フォーマットを Oracle General Ledger セグメントに関連付けるために使用するロケーションを定義します。
この項の [ロケーションの定義](#) を参照してください。
6. Oracle General Ledger 残高がロードされる EPM アプリケーションのシナリオ・ディメンション・メンバーに対するカテゴリ・マッピングを作成します。
この項の [カテゴリ・マッピングの定義](#) を参照してください。
7. データ・ロード・マッピングを定義し、転送時に Oracle General Ledger の勘定体系値をディメンション・メンバーに変換します。
この項の [データ・ロード・マッピング](#) を参照してください。
8. 必要なフィルタを使用してデータ・ルールを定義し、ルールを実行します。
Essbase キューブのすべてのディメンションを含むデフォルト・フィルタが用意されています。キューブには重複するメンバーが含まれていることがあるため、完全修飾されたメンバー名が必要です。Essbase キューブにより Oracle General Ledger セグメントが減り、Oracle General Ledger で勘定体系と元帳は 1 対多の関係になります。
ルールの作成時、FDMEE でフィルタが作成されます。必要に応じてフィルタを変更できますが、削除はできません。(フィルタが削除されると、FDMEE でデフォルト値が再作成されます)。これらのフィルタの詳細は、[データ・ロード・ルールのフィルタの追加](#) を参照してください。
プロセスで Oracle ERP Cloud からデータが抽出され、FDMEE にロードされます。
[データ・ロード・ルールの追加](#) を参照してください。
9. **オプション:** Oracle ERP Cloud にデータをライトバックします。
Planning または Planning モジュール・ソース・システムから Oracle ERP Cloud にデータをライトバックするには、データ・ルールを設定します。この場合、Planning または Planning モジュール・アプリケーションに対してフィルタが適用されます。
オプションで、カスタム・ターゲット・アプリケーションを使用して、予算データを Planning からフラット・ファイルにライトバックできます。この出力ファイルは、他のアプリケーションにデータをロードするために使用できます。

ソース接続の構成

Oracle General Ledger と Oracle Enterprise Performance Management Cloud との統合を開始するには、まずソース・システム・タイプが Oracle ERP Cloud のソース・システムを作成して登録します。

ソース・システムと接続情報を指定したら、ソース・システムを初期化し、多くの Oracle Essbase ターゲット・アプリケーションの 1 つである Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition に Oracle General Ledger の勘定体系情報をコピーします。ダウンロードは、Oracle Hyperion Planning アプリケーシ

ョンの Essbase データベースとの統合です。実際のキューブは Oracle Smart View for Office で確認できます。

Oracle General Ledger と EPM アプリケーションとの統合を開始するには、まずソース・システム・タイプが「Oracle ERP Cloud」のソース・システムを作成して登録します。

ソース・システムを追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ソース・システム」を選択します。
2. 「ソース・システム」で、「追加」をクリックします。
3. ソース・システム詳細を入力します:
 - a. 「ソース・システム名」で、ソース・システム名を入力します。
ファイルに使用する Oracle General Ledger 名("General Ledger"や"Oracle General Ledger Financials"など)を入力します。このソースをライトバックにも使用する場合は、ソース・システム名にスペースが含まれていないことを確認してください。
 - b. 「ソース・システムの説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
 - c. 「ソース・システム・タイプ」で、Oracle ERP Cloud を選択します。
 - d. 「ドリル・スルー URL」で、次に示す Oracle ERP Cloud リリースの URL フォーマットのいずれかを指定します。
 - R13 - Oracle ERP Cloud リリース 13 の URL フォーマットが使用されます。
 - R12 - Oracle ERP Cloud リリース 12 以前の URL フォーマットが使用されます。
 - (Null) - Oracle ERP Cloud リリース 12 以前の URL フォーマットが使用されます。
 リリースの URL フォーマットを指定する以外に、サーバーを上書きする必要がある場合は、次に示す Oracle ERP Cloud リリースの URL フォーマットのいずれかを指定します。
 - R13@https://server - Oracle ERP Cloud リリース 13 の URL フォーマットと現在のサーバーが使用されます。
 - R12@https://server - Oracle ERP Cloud リリース 12 以前の URL フォーマットと現在のサーバーが使用されます。
 - e. 「Fusion Budgetary Control」フィールドの選択は解除したままにします。

The screenshot shows a form titled "Oracle General Ledger : Details". It contains the following fields and values:

- * Source System Name: Oracle General Ledger
- * Source System Type: Oracle ERP Cloud (dropdown menu)
- Source System Description: (empty field)
- Drill Through URL: R13
- Budgetary Control:

- f. 「アプリケーション・フィルタ」に、ソース・システムを初期化したときに返される Essbase アプリケーションの数を制限するフィルタ条件を指定します。

フィルタ条件は 1 つのみでも、複数でも指定できます。複数のフィルタ条件を使用する場合は、各フィルタ条件をカンマ(,)で区切ってください。

アプリケーション名をフィルタ条件として指定する場合は、Oracle ERP Cloud アプリケーションのフル・ネーム、ワイルドカード、または次に示すような、1 文字に対応するワイルドカードを指定できます。

- Vision (フル・ネーム)
- VF* (ワイルド・カード)
- VF??COA (1文字用のワイルド・カード)

Oracle General Ledger : Application Filter

Application Filter

初期化プロセスを実行すると、フィルタ条件に一致するすべてのアプリケーションがインポートされます。フィルタを指定しない場合は、すべてのアプリケーションがインポートされます。

4. 「ソース接続の構成」をクリックします。

「ソース接続の構成」画面を使用して、Oracle ERP Cloud への接続を構成します。

ソース接続の構成は、Oracle ERP Cloud のユーザー名とパスワードを保管するために使用されます。また、Oracle ERP Cloud のユーザー名とパスワードで使用する WSDL 接続も保管されます。

5. 「ユーザー名」に、Oracle ERP Cloud のユーザー名を入力します。

EPM Cloud と Oracle ERP Cloud の間で情報を送信するためのプロセス要求を開始する Oracle ERP Cloud ユーザーの名前を入力します。このユーザーには、"Financial Analyst"、"General Accountant"、"General Accounting Manager"などの Oracle General Ledger のジョブ役割が割り当てられている必要があります。

ノート:

Web サービスでは、シングル・サインオンのユーザー名とパスワードではなく、ネイティブのユーザー名とパスワードを使用する必要があります。

6. 「パスワード」に、Oracle ERP Cloud のパスワードを入力します。

このパスワードは、Oracle ERP Cloud のパスワードを変更するたびに更新する必要があります。

7. 「Web サービス URL」に、Fusion Web サービスのサーバー情報を入力します。たとえば、https://server と入力します。

R12 より前のバージョンのリリース URL フォーマットを使用している場合は、Web サービス URL へのログオンに使用されている URL の"fs"を **fin** に置換します。

R12 より後のバージョンのリリース URL フォーマットを使用している場合は、ログオンに使用されている URL の"fs"を **fa** に置換するか、または、**Web サービス URL** へのログオンに使用されているサーバーをコピーして貼り付けます。

8. 「接続のテスト」をクリックします。

9. 「構成」をクリックします。

「ソース・システム[ソース・システム名]構成が正常に更新されました」という確認メッセージが表示されます。

10. 「ソース・システム」画面で「初期化」をクリックします。

ソース・システムを初期化すると、元帳や勘定体系など、FDMEEに必要なすべてのメタデータがフェッチされます。また、ソース・システムで勘定体系、セグメント/チャートフィールド、元帳、職責などが新規に追加された場合もソース・システムを初期化する必要があります。

初期化プロセスには時間がかかることがあり、ジョブ・コンソールで進捗を確認できます。

 **ノート:**

Oracle General Ledger ソースを再初期化すると、アプリケーション期間マッピングがリセットされ、システムから削除されます。特定の期間マッピングが必要な場合は、「ソース期間マッピング」タブを使用して期間マッピングを指定します。

11. 「保存」をクリックします。

ソース・システムを追加した後、表内のソース・システムを選択すると、下部ペインに詳細が表示されます。

初期化プロセスには時間がかかることがあるため、ジョブ・コンソールで進捗を確認できます。

インポート・フォーマットの操作

ソースおよびターゲットを選択する際、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、ソースおよびターゲット列は自動的に移入されます。

 **ノート:**

Oracle General Ledger で、勘定体系とカレンダーの組合せごとに1つの Essbase キューブが作成されます。この場合、同じインポート・フォーマットを使用して、この勘定体系を共有する元帳からデータをインポートできます。元帳は、データ・ロード・ルールでフィルタとして指定できます。

インポート・フォーマットは、次の3つのセクションで構成される「インポート・フォーマット」画面で操作します:

- インポート・フォーマットのサマリー - ソースおよびターゲット・アプリケーションに関連する一般的な情報を表示します。
- インポート・フォーマットの詳細 - インポート・フォーマット情報を追加して保持できます。
- インポート・フォーマット・マッピング - インポート・フォーマット・マッピング情報を追加して保持できます。

Oracle General Ledger ベースのソース・システムのインポート・フォーマットを追加するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」サマリー・タスク・バーで、「追加」を選択します。

「インポート・フォーマット」画面の上部グリッドに、行が追加されます。

3. 「名前」に、インポート・フォーマットのユーザー定義の識別子を入力します。
このインポート・フォーマットにマッピングが作成された後で、このフィールドの値を変更することはできません。
4. 「説明」に、インポート・フォーマットの説明を入力します。
5. 「ソース」で、ドロップダウンから Oracle General Ledger 勘定体系を選択します。
6. 「ターゲット」で、EPM ターゲット・アプリケーションを選択します。
7. オプション: 「式」で任意のインポート式を追加します。
FDMEETには、実際に試算表ファイルを FDMEET データベースに読み込んで解析するための強力なインポート式のセットが用意されています。フィールドの「式」列に高度な式を入力します。インポート式は、インポート・ファイルから読み込まれた値を演算します。
詳細は、[インポート式の追加](#)を参照してください。
8. 「保存」をクリックします。

ロケーションの定義

ロケーションは、データのロードが Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で実行されるレベルです。各ロケーションにはインポート・フォーマットが割り当てられます。データ・ロード・マッピングおよびデータ・ロード・ルールがロケーションごとに定義されます。ロケーションを定義することにより、データのロード先を指定できます。さらに、ロケーションによって、ディメンションナリティが同じである複数のターゲット・アプリケーションに対して同一のインポート・フォーマットを使用できます。ただし、複数のインポート・フォーマットを使用している場合は、複数のロケーションを定義する必要があります。

ノート:

同じソース・システムとアプリケーションを組み合わせて、重複するロケーションを作成できます。


インポート・ロケーションを作成、変更、および削除するには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「ロケーション」を選択します。
2. 「ロケーション」で、「追加」をクリックします。
3. 「ロケーション詳細」の「名前」にロケーション名を入力します。
4. 「インポート・フォーマット」にインポート・フォーマットを入力します。

インポート・フォーマットはソース・システムの構造を表し、ソース・システムのインポート・ステップで実行されます。ロケーションとともに使用するには、対応するインポート・フォーマットが存在する必要があります。

さらに:

- ソース名はインポート・フォーマットに基づき自動的に移入されます。
- ターゲット名はインポート・フォーマットに基づき自動的に移入されます。

 をクリックしてインポート・フォーマットを選択することもできます。

5. 「機能通貨」で、そのロケーションの機能通貨を指定します。

 **ノート:**

予算をライトバックする予算管理の予算通貨を指定する必要があります。

6. 「親のロケーション」に、ロケーションに割り当てられた親を入力します。

親マッピングは他のロケーションとのマッピングの共有に使用されます。親ロケーションにマッピングを入力します。関連するロケーションが同じマッピングを使用できます。複数のロケーションが親を共有できます。この機能は、複数のロケーションが勘定科目の1つのチャートを使用している場合に役立ちます。子または親のマッピング表を変更すると、子と親のすべてのロケーションに適用されます。

 **ノート:**

ロケーションに親がある場合、子にマッピングが引き継がれます。ただし、マッピングに対する変更は、親ロケーションについてのみ実行できます。

7. **オプション: 「ロジック勘定科目グループ」** で、ロケーションに割り当てる論理勘定科目グループを指定します。

ロジック・グループには、ソース・ファイルがロードされた後に生成される1つ以上のロジック勘定科目が含まれます。論理勘定はソース・データから導き出される計算済勘定です。

ロジック・グループの値のリストは、作成先のターゲット・アプリケーションに基づいて自動的にフィルタされます。

8. **オプション: 「確認エンティティ・グループ」** で、ロケーションに割り当てる確認エンティティ・グループを指定します。

確認エンティティ・グループをロケーションに割り当てた場合、確認レポートは、グループで定義されているすべてのエンティティについて実行されます。確認エンティティ・グループをロケーションに割り当てない場合、確認レポートは、ターゲット・システムにロードされたエンティティごとに実行されます。FDMEE 確認レポートは、ターゲット・システム、FDMEE ソース・データまたは FDMEE 変換済データから値を直接取得します。

確認エンティティ・グループの値のリストは、作成先のターゲット・アプリケーションに基づいて自動的にフィルタされます。

9. **オプション: 「確認ルール・グループ」** で、ロケーションに割り当てる確認ルール・グループを指定します。


システム管理者は、確認ルールを使用してデータの整合性を強化します。確認ルールのセットが確認ルール・グループ内に作成され、確認ルール・グループがロケーションに割り当てられます。続いて、データがターゲット・システムにロードされた後、確認レポートが生成されます。

確認ルール・グループの値のリストは、作成先のターゲット・アプリケーションに基づいて自動的にフィルタされます。

10. 「保存」をクリックします。
11. **オプション:** 次のタスクを実行します:

- 既存のロケーションを編集するには、変更するロケーションを選択し、必要に応じて変更を加えます。次に、「保存」をクリックします。
 - ロケーションを削除するには、「削除」をクリックします。
- 削除したロケーションは、「データ・ロード」など、その他のすべての **FDMEE** 画面から削除されます。

ヒント:

ロケーション名でフィルタするには、フィルタ行が列ヘッダーの上に表示されていることを確認します。(フィルタ行を切り替えるには、 をクリックします。)次に、フィルタに使用するテキストを入力します。

画面の上部にあるドロップダウンを使用して、ターゲット・アプリケーションでロケーションをフィルタできます。

カテゴリ・マッピングの定義

カテゴリ・マッピングを定義して、ソース・システムのデータを分類し、ターゲット EPM シナリオ・ディメンション・メンバーにマッピングします。たとえば、Oracle General Ledger アプリケーションの実際の残高を格納するための「実績」と呼ばれるシナリオ・ディメンション・メンバーを持つことができます。Oracle Hyperion Planning アプリケーションでは、同じソース・システム・データは、シナリオ・ディメンション・メンバー「現在」を使用して格納されます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition では、1つのカテゴリ・マッピングを作成して両方に1つの名前を与え、それぞれのシナリオを表すことができます。

予算をライトバックする Planning のシナリオ・ディメンション・メンバーのカテゴリ・マッピングを作成します。

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「カテゴリ・マッピング」を選択します。
2. 「グローバル・マッピング」を選択します。
3. 「追加」をクリックします。
空白のエントリ行が表示されます。
4. 「カテゴリ」に、データのロード元となる Planning アプリケーションのシナリオ・ディメンション・メンバーに対応する名前を入力します。
5. 「ターゲット・カテゴリ」に、データのロード元となる Planning のシナリオ・ディメンション・メンバーの名前を入力します。
6. 「保存」をクリックします。

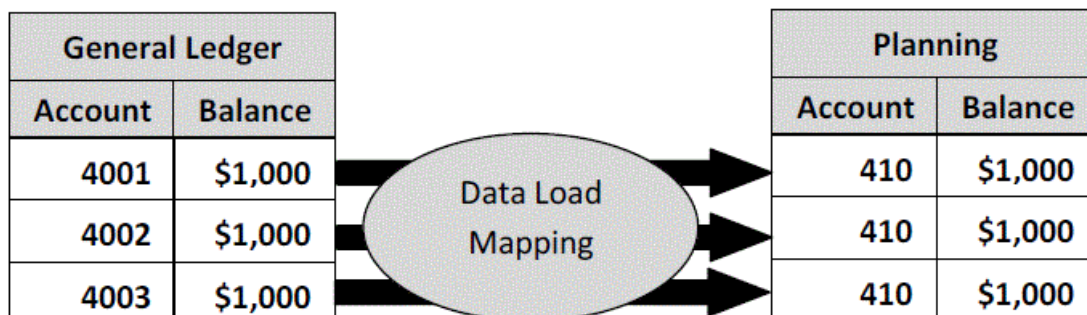
データ・ロード・マッピング

データ・ロード・マッピングにより、転送時に Oracle General Ledger の勘定体系値が EPM アプリケーションのディメンション・メンバーに変換されます。これにより、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は Oracle General Ledger の残高を分類できます。

次の例では、勘定体系セグメントに基づいて Oracle General Ledger で管理費用が 4001-4003 の範囲の勘定科目に分けられます。

Oracle Hyperion Planning では、管理費用の予算はディメンション値 410 の管理費用とされます。

データ・ロード・マッピングで、Oracle General Ledger の 4001-4003 の範囲の勘定科目の実績金額が Planning の 410 管理費用にマップされます。

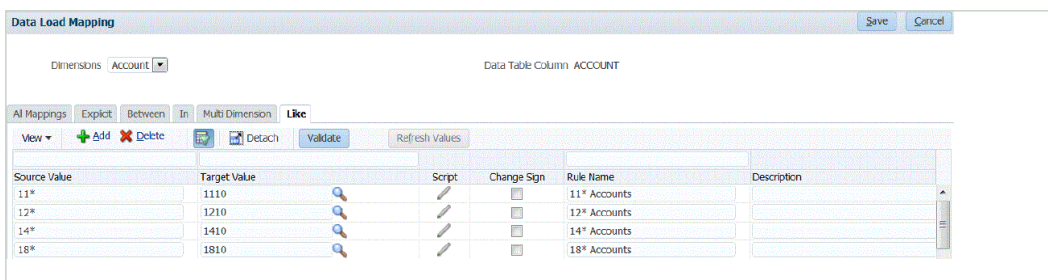


Planning のディメンション値と Oracle General Ledger の勘定体系値の間に差異が生じることがあります。また、予算策定時に勘定科目表のセグメントが使用されないことがあります。

たとえば、データ・ロード・マッピングを使用すると、予算策定に使用されない勘定体系セグメントに対してゼロの値(サブ勘定科目の値として"0000"など)を使用できます。

データ・ロード・マッピングを定義するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。



2. 「ディメンション」ドロップダウンから、マップするディメンションを選択します。
"*"は、すべての値を表します。データ・ロード・マッピングは、EPM アプリケーションの要件に基づく必要があります。

ロードの前に Oracle General Ledger の値に更新がない場合でも、ディメンションに対するデータ・ロード・マッピングを作成して FDMEE にターゲット値を作成するよう示す必要があります。

勘定科目ディメンションとエンティティ・ディメンションは Oracle General Ledger から転送されたものであるため、少なくとも、これらのディメンションの値はマップします。

その他の体系セグメントを転送する場合、各宛先ディメンションに対するマッピングを留意する必要があります。

3. 「ソース値」に、ターゲット・ディメンション・メンバーにマップするソース・ディメンション・メンバーを指定します。

すべての一般会計勘定科目を変更せずにそのまま Oracle Enterprise Performance Management Cloud にマップするには、「ソース値」に*を入力し、「ターゲット値」に*を入力します。

4. すべての一般会計勘定科目を変更せずにそのまま EPM アプリケーションにマップするには、「ソース値」に*を入力し、「ターゲット値」に*を入力します。
5. 「類似」タブを選択します。
6. 「ソース値」に、すべての値がマッピングを使用することを示す*を入力します。これらは、Oracle General Ledger の勘定体系の値です。値を直接入力します。
7. 「ターゲット値」に、予算情報のロードに使用する会計シナリオの値を入力します。EPM アプリケーションで使用される値を入力し、転送される Oracle General Ledger の実際の残高に保管します。

 **ノート:**

Account Reconciliation のソース・タイプを操作している場合は、**ソース・システム**または**サブシステム**(補助元帳)のいずれかをターゲット値として指定できます。

8. 「ルール名」に、Oracle General Ledger への予算額の転送に使用するデータ・ロード・ルールの名前を入力します。

 **ノート:**

ルールは、ルール名のアルファベット順に評価されます。明示的ルールには、ルール名がありません。評価の階層は、明示、(含む/範囲/複数)、類似の順です

9. 「説明」にマッピングの説明を入力します。
たとえば、「General Ledger にマップ」といった説明を入力します。
10. オプション: 「ルールに適用」で、マッピングがロケーション内の特定のデータ・ルールだけに適用されるよう選択します。
[メンバー・マッピングの作成](#)を参照してください。

データ・ロード・ルールの追加

ロケーションのメンバー・マッピングを定義したら、ソース・システムの元帳またはビジネス・ユニットに対するデータ・ロード・ルールを定義し、Oracle General Ledger からデータを抽出して EPM アプリケーションに移動します。

データ・ロードのルールは、事前に設定しておいたロケーションに定義されます。データ・ロード・ルールはロケーションに固有です。ターゲット・アプリケーションに複数のデータ・ロードのルールを作成することにより、複数のソースからターゲット・アプリケーションにデータをインポートできます。

データ・ロード・ルールは、作成されるのは1回ですが、転送のたびに使用されます。

同期のデータ・ロード・ルールを作成するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「POV バー」から、データ・ロード・ルールに使用するロケーションを選択します。

データ・ロード・ルールは、視点のコンテキスト内で処理されます。デフォルトの視点は自動的に選択されます。視点の情報は、画面下部にある **POV** バーに表示されます。

3. 「追加」をクリックします
4. 「名前」に、データ・ロード・ルールの名前を入力します。
5. 「カテゴリ」では、デフォルトのカテゴリ値を受け入れます。
リストされているカテゴリは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の設定で作成したカテゴリです。カテゴリ・マッピングの定義を参照してください。
6. 「期間マッピング・タイプ」で、データ・ルールごとに期間マッピング・タイプを選択します。

有効なオプション:

- デフォルト - データ・ルールでは、FDMEE で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、データ・ルール実行に含まれている各 FDMEE 期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。
- 明示 - データ・ルールでは、FDMEE で定義されている明示期間マッピングを使用して、データ・ロード・ルール実行に含まれる各 FDMEE 期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。明示期間マッピングにより、期間が開始日および終了日で定義されていない追加の Oracle General Ledger データ・ソースをサポートできます。
- 「保存」をクリックします。

Oracle General Ledger の調整期間の処理

Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションに残高をロードするときに、Oracle General Ledger ソース・システムからの調整期間を Oracle ERP Cloud に含めることができます。

EPM アプリケーションに残高をロードする際、Oracle General Ledger ソース・システムからの調整期間を Oracle ERP Cloud に含めることができます。

調整期間は、ソースからの通常期間に関連する追加の期間です。「調整期間」は、その年の決算期間より前に残高を調整するために設定される会計期間を表します。これらの期間は「per12」に調整されるため、「per13」と表されます。通常、調整期間内の日付は通常の会計期間と重複します。お客様は、会計カレンダーの最初の期間を参照する「年始期間」を使用して、前年の繰越残高額を調整できます。また、お客様は会計カレンダーの最後の期間を「年末期間」として設定して、現在の会計カレンダーのトランザクション・モードを調整できます。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、期間マッピングで調整期間をターゲット・アプリケーションの期間にマップする方法を指定して、調整が処理されます。調整の処理方法は、データ・ロード・ルールに指定されます。この機能により、Oracle General Ledger アプリケーションからのカレンダーおよび期間を EPM アプリケーションの期間にポイントするだけで、FDMEE で Oracle General Ledger ソース期間をマップできます。

データ・ロード・ルールを設定する際、調整期間マッピングが存在する場合は通常期間と調整期間にロードすることも、調整期間マッピングが存在する場合にのみ調整期間をロードすることもできます。

たとえば、期間 13 を 12 月/期間 12 にマップし、「調整期間を含む」オプションを選択すると、次のようになります。


- YTD 残高について、期間 13 が期末残高になります。

- PTD 残高について、期間 13 と 12 月/期間 12 が追加されます。

Oracle General Ledger ソース・システムからの調整期間を含めるには:

1. 「設定」 タブの「統合設定」で、「期間マッピング」を選択します。
2. 「ソース・マッピング」 タブを選択します。
3. 「ソース・システム」で、Oracle General Ledger ソース・システムを選択します。
4. 「ターゲット・アプリケーション」から、調整を適用する EPM アプリケーションを選択します。
5. 「マッピング・タイプ」から、「調整」を選択します。
6. 「追加」をクリックします。
7. 「ソース期間キー」で、Oracle General Ledger ソース・システムからマップする月の最終日を指定します。

ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、**MM/DD/YY** という形式を使用して日付を入力します。

 をクリックして、ソース期間キーを参照して選択することもできます。


「ソース期間キー」を選択すると、FDMEE によって **ソース期間** および **ソース期間年** フィールドが自動的に移入されます。

8. 「調整期間」で、Oracle General Ledger ソースからの調整期間の名前を指定します。

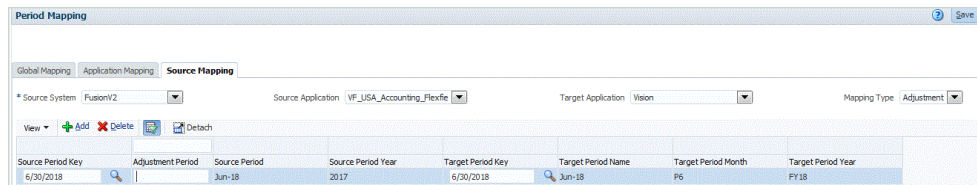
たとえば、Oracle General Ledger からの調整期間が **Adj-Dec-16** である場合は、このフィールドに「**Adj-Dec-16**」と入力します。

9. 「ターゲット期間キー」で、ターゲット・システムからマップする月の最終日を指定します。

ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、**MM/DD/YY** という形式を使用して日付を入力します。

 をクリックして、ターゲット期間キーを参照して選択することもできます。

「ターゲット期間キー」を選択すると、FDMEE によって **ターゲット期間名**、「**ターゲット期間の月**」 および 「**ターゲット期間の年**」 フィールドが自動的に移入されます。



The screenshot shows the 'Period Mapping' window with the 'Source Mapping' tab selected. It displays a table with columns for Source Period Key, Adjustment Period, Source Period, Source Period Year, Target Period Key, Target Period Name, Target Period Month, and Target Period Year. The values shown are: Source Period Key: 6/30/2018, Adjustment Period: Jun-18, Source Period: Jun-18, Source Period Year: 2017, Target Period Key: 6/30/2018, Target Period Name: Jun-18, Target Period Month: P6, Target Period Year: FY18.

Source Period Key	Adjustment Period	Source Period	Source Period Year	Target Period Key	Target Period Name	Target Period Month	Target Period Year
6/30/2018	Jun-18	Jun-18	2017	6/30/2018	Jun-18	P6	FY18

10. 「保存」をクリックします。
11. 「ワークフロー」 タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
12. 「POV バー」から、データ・ロード・ルールに使用するロケーションを選択します。

データ・ロード・ルールは、視点のコンテキスト内で処理されます。デフォルトの視点は自動的に選択されます。視点の情報は、画面下部にある **POV** バーに表示されます。

13. 「追加」をクリックします。

14. 「名前」に、データ・ロード・ルールの名前を入力します。

15. 「カテゴリ」で、デフォルトのカテゴリ値を指定します。

リストされているカテゴリは、FDMEE の設定時に作成したカテゴリです。

[カテゴリ・マッピングの定義](#)を参照してください。

16. 「期間マッピング・タイプ」で、データ・ルールごとに期間マッピング・タイプを選択します。

有効なオプション:

- デフォルト - データ・ルールでは、FDMEE で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、データ・ルール実行に含まれている各 FDMEE 期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。
- 明示 - データ・ルールでは、FDMEE で定義されている明示期間マッピングを使用して、データ・ロード・ルール実行に含まれる各 FDMEE 期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。明示期間マッピングにより、期間が開始日および終了日で定義されていない追加の Oracle General Ledger データ・ソースをサポートできます。

17. 「調整期間を含む」から、調整期間を処理するための次のいずれかのオプションを選択します。

- いいえ - 調整期間は処理されません。システムでは通常期間マッピング(「デフォルト」および「明示的」として設定されたマッピング)のみが処理されます。「**いいえ**」は調整処理のデフォルト・オプションです。
- はい - 「**はい**」を選択すると、通常期間と調整期間が含まれます。調整期間が存在しない場合は、通常期間のみが処理されます。
- はい(調整のみ) - 「**はい(調整のみ)**」を選択すると、調整期間のみが処理されます。ただし、調整期間が存在しない場合は、かわりに通常期間が取得されます。

18. 「保存」をクリックします。

ノート:

データ・ロード・ルールのフィルタの追加


フィルタを使用して、Oracle General Ledger ソースからの結果を制限します。

Oracle General Ledger からのデータのインポートに使用するデータ・ルールについては、フィルタを使用して結果を制限します。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、ルールの作成時にフィルタが自動的に作成されます。必要に応じてフィルタを変更できますが、削除はできません。(フィルタが削除されると、FDMEE でデフォルト値が再作成されます。)

データ・ロード・ルール・フィルタ:

Oracle General Ledger ディメンション	フィルタ
シナリオ	実績
残高	期末残高
金額タイプ	YTD
通貨タイプ	合計
その他のすべてのディメンション	'@ILvl0Descendants("All ' TARGET_DIMENSION_NAME ' Values)'

 **ノート:**

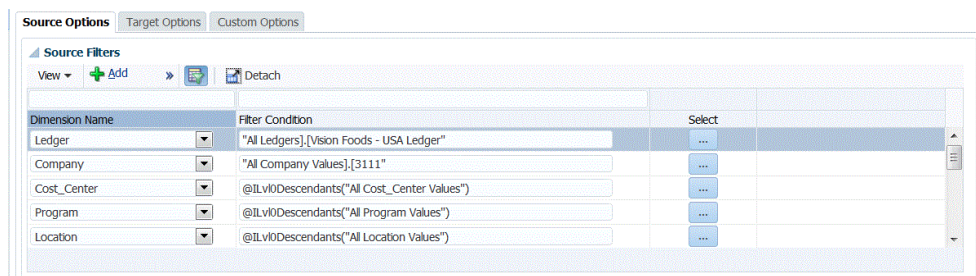
ドリル・スルーがサポートされるのは、Oracle General Ledger の勘定体系セグメントのリーフ・レベル・データをロードする場合のみです。サマリー・レベルのデータをロードした場合、ドリル・スルーは機能しません。


 **ノート:**

Oracle General Ledger から予算引当を取り込んで、それを Oracle Enterprise Performance Management Cloud で実績と組み合わせる場合は、実績のみでなく予算引当も含まれるようにデータ・ロード・ルールのデフォルトのディメンション・フィルタを変更します。


データ・ロード・ルールにフィルタを割り当てるには:

1. 「ワークフロー」 タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. フィルタを追加するデータ・ロードのルールを選択します。
3. 「ソース・オプション」 タブを選択します。



4. 「ソース・フィルタ」領域で  をクリックします。
5. 「ディメンション名」を選択します。

6. 「フィルタ条件」で、フィルタ条件を指定します。

- フィルタ条件テキスト・ボックスに、メンバー名またはフィルタ条件を入力します。
-  をクリックして「メンバー選択」画面を表示し、メンバー・セレクトタを使用してメンバーを選択します。次に、「OK」をクリックします。

「メンバー・セレクトタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。メンバー・セレクトタを使用すると、ディメンション内のメンバーを表示して選択できます。[+]および[-]を使用すると、ディメンション内のメンバーを展開および縮小できます。




「選択」ダイアログ・ボックスには、2つのペインがあり、ディメンションのすべてのメンバーが左側に表示され、選択内容が右側に表示されます。そのディメンションで使用可能なすべてのメンバーが表示される左ペインには、メンバー名および簡単な説明が表示されます(使用可能な場合)。選択内容が表示される右ペインには、メンバー名および選択タイプが表示されます。

それぞれのペインの上の「V」ボタンを使用して、メンバー・セレクトタの列を変更できます。

ノート:

ディメンションにフィルタを割り当てます。フィルタを割り当てないと、サマリー・メンバーから番号も取得されます。


メンバー・セレクトタを使用するには:

- a. 左側の使用可能なディメンションおよびメンバーのリストで、メンバーを選択して  をクリックします。
- b. メンバーのリストからメンバーの選択を解除するには、 をクリックします。
- c. メンバーに特殊なオプションを追加するには、 をクリックして、オプションを選択します。

メンバー・オプションで、「(含む)」は選択したメンバーを含むことを意味します。たとえば、「子(含む)」は選択したメンバーを含むメンバーのすべての子を追加し、「子孫(含む)」は選択したメンバーを含むすべての子孫を追加します。「子」を選択した場合、選択したメンバーは含まれず、その子のみが含まれます。

そのメンバーは右側に移動され、「選択のタイプ」列には選択したオプションが表示されます。たとえば、「選択のタイプ」列に「子孫」が表示されます。

ヒント:

選択したリストのすべてのメンバーをクリアするには、 をクリックします。

- d. 「OK」を2回クリックして、ソース・フィルタ詳細の定義を続行します。

選択したメンバーは、Oracle Essbase 構文で「フィルタ条件」フィールドに表示されます。

Oracle ERP Cloud へのドリル・スルー

ドリル・スルーで、Oracle ERP Cloud の勘定科目残高サマリー・ページを表示できます。

Oracle General Ledger と統合している場合、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、接続情報に基づいてドリル URL 定義を自動的に決定します(システムおよび固定情報など)。Oracle General Ledger にドリル・スルーする場合は設定する必要はありません。

Oracle ERP Cloud へのライトバック

Oracle General Ledger から予算対実績をレポートする場合は、予算を Oracle General Ledger にライトバックする必要があります。支出をオンラインで検証する場合は、予算を Budgetary Control にライトバックする必要があります。

この手順を使用して、Oracle Hyperion Planning 機能を使用して策定した元の予算および改訂済予算を Oracle General Ledger にライトバックします。

この手順は、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の予算改訂機能(他の手順を介して一般会計と Budgetary Control の EPM タイプ予算管理の両方で予算を自動的に更新します)を使用して策定した予算改訂をライトバックするためのものではありません。

Oracle General Ledger へのライトバックは、EPM タイプ予算管理について予算を Budgetary Control にライトバックするときにも自動的に実行されますが、Budgetary Control にライトバックする企業全体の予算の一部についてのみです。

詳細は、[公共部門のための財務の使用](#)を参照してください。

Planning ユーザーの場合、Oracle General Ledger への EPM Cloud 予算のライトバックについて学習するには、このチュートリアル・ビデオを視聴してください。



[チュートリアル・ビデオ](#)

Planning モジュール・ユーザーの場合は、[チュートリアル・ビデオ](#)を参照してください。

Oracle ERP Cloud への予算のライトバック

一般会計から予算対実績をレポートする場合は、予算を Oracle General Ledger にライトバックする必要があります。支出をオンラインで検証する場合は、予算を Budgetary Control にライトバックする必要があります。

この手順を使用して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の Oracle Hyperion Planning を使用して策定した元の予算および改訂済予算を Oracle General Ledger にライトバックします。

この手順は、EPM Cloud の予算改訂機能(別の手順を介して一般会計と Budgetary Control の EPM タイプ予算管理の両方で予算を自動的に更新します)を使用して策定した予算改訂をライトバックするためのものではありません。

Oracle General Ledger へのライトバックは、EPM タイプ予算管理について予算を Budgetary Control にライトバックするときにも自動的に実行されますが、Budgetary Control にライトバックする企業全体の予算の一部についてのみです。

詳細は、[公共部門のための財務の使用](#)を参照してください

Oracle General Ledger にライトバックするには:

1. Oracle General Ledger にディメンションをマップするインポート・フォーマットを作成します。
 - a. 「設定」 タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
 - b. 「追加」をクリックします。
 - c. 「名前」に、インポート・フォーマットの名前を入力します。
 - d. 「ソース」で、ドロップダウンから EPM アプリケーションの名前を選択します。
 - e. 「説明」に、インポート・フォーマットを識別するために使用できる説明を入力します。
 - f. 「ドリル URL」は、空白のままにしておきます。
 - g. 「保存」をクリックしてインポート・フォーマットを保存し、下部への移入を確認します。
 - h. 「インポート・フォーマット」画面の下部領域にスクロールして、EPM Cloud ディメンションを総勘定元帳のディメンションにマップします。
 - i. ターゲット・ディメンション「元帳」のソースをマップします。エンティティなどのディメンションを元帳にマップし、必要なデータ・ロード・マッピングを定義して Oracle General Ledger の名前に変換します。単一元帳にライトバックする場合、式列に元帳の名前を入力します。
 - j. 「ターゲット・オプション」をクリックし、「予算の名前」を選択します。
 - k. 「式」は、空白のままにしておきます。
ターゲットが予算名の場合、使用する会計シナリオの値を入力します。
2. ロケーションを作成します。
ロケーションは、Oracle General Ledger への予算額の転送を実行するために使用されます。インポート・フォーマットがロケーションに割り当てられます。複数のインポート・フォーマットを使用している場合は、複数のロケーションを定義する必要があります。
 - a. 「設定」タブの「統合設定」で、「ロケーション」を選択します。
 - b. 「追加」をクリックします。
 - c. 「名前」に、ロケーションの名前を入力します。
EPM アプリケーションから Oracle General Ledger への転送を開始すると、このロケーション名が表示されます。
 - d. 「インポート・フォーマット」で、転送中に使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。

 ノート:

「ソース」および「ターゲット」フィールド名はインポート・フォーマットに基づき自動的に移入されます。

- e. 「親のロケーション」に、ロケーションに割り当てられた親を入力します。親マッピングは他のロケーションとのマッピングの共有に使用されます。親ロケーションにマッピングを入力します。関連するロケーションが同じマッピングを使用できます。複数のロケーションが親を共有できます。この機能は、複数のロケーションが勘定科目の1つのチャートを使用している場合に役立ちます。子または親のマッピング表を変更すると、子と親のすべてのロケーションに適用されます。
- f. 「ソース」には、ソースが自動的に移入されます。
- g. 「機能通貨」で、そのロケーションの機能通貨を指定します。
- h. オプション: 「ロジック勘定科目グループ」で、ロケーションに割り当てるロジック勘定科目グループを指定します。
- i. オプション: 「確認エンティティ・グループ」で、ロケーションに割り当てる確認エンティティ・グループを指定します。
- j. オプション: 「確認ルール・グループ」で、ロケーションに割り当てる確認ルール・グループを指定します。
- k. ロケーションを保存します。

ロケーションの定義を参照してください。

3. 期間マッピングを作成します。

期間マッピングは、転送のために期間を Oracle General Ledger の会計カレンダー期間に変換する場合に使用されます。

ノート:



期間を指定する場合は、開始および終了期間が単一会計年度内にある必要があります。会計年度をまたがるデータ範囲を指定すると、データが重複します。

- a. 「設定」タブの「統合設定」で、「期間マッピング」を選択します。
- b. 「追加」をクリックし、予算額を受け取る各期間の個別行を追加します。
一般会計で元帳により使用される会計カレンダーからの期間名を使用します。
- c. 「期間キー」を定義します。
値を選択すると、期間キー、前期間キー、期間名およびターゲット期間の月に関する情報が自動的に移入されます。
 - **ターゲット期間の月** - このフィールドの値は、転送された金額を受け取る Oracle General Ledger の元帳の会計カレンダーと一致する必要があります。
 - **ターゲット期間の年** - («ターゲット期間の月」列で定義されている)会計期間に対応する値を使用します。




期間マッピングの定義を参照してください。

4. データ・ロード・ルールを定義します。

データ・ロード・ルールは、EPM アプリケーションから Oracle General Ledger に残高を転送するプロセスを送信するために使用されます。データ・ロード・ルールは、作成されるのは1回ですが、転送のたびに使用されます。

- a. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
 - b. 「POV バー」から、データ・ロード・ルールに使用するロケーションを選択します。
データ・ロード・ルールは、視点のコンテキスト内で処理されます。デフォルトの視点は自動的に選択されます。視点の情報は、画面下部にある POV バーに表示されます。
 - c. 「追加」をクリックします。
 - d. 「名前」に、データ・ロード・ルールの名前を入力します。
 - e. 「カテゴリ」では、デフォルトのカテゴリ値を受け入れます。
 - f. 「説明」に、一般会計残高の転送要求を開始したときにデータ・ロード・ルールを識別するための説明を入力します。
 - g. 「ターゲット・プラン・タイプ」で、プラン・タイプを選択します。
 - h. 「期間マッピング・タイプ」で、データ・ルールごとに期間マッピング・タイプを選択します。
有効なオプション:
 - デフォルト - データ・ルールでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、データ・ルール実行に含まれている各 FDMEE 期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。
 - 明示 - データ・ルールでは、FDMEE で定義されている明示期間マッピングを使用して、データ・ルール実行に含まれる各 FDMEE 期間にマップされたソース GL 期間を判断します。明示期間マッピングにより、期間が開始日および終了日で定義されていない追加の GL データ・ソースをサポートできます。
 - i. 「保存」をクリックします。
5. ソース・オプション・フィルタをライトバックのためのデータ・ロード・ルールに追加します。
- a. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
 - b. 「POV バー」から、データ・ロード・ルールに使用するロケーションを選択します。
データ・ロード・ルールは、視点のコンテキスト内で処理されます。デフォルトの視点は自動的に選択されます。視点の情報は、画面下部にある POV バーに表示されます。
 - c. フィルタを追加するデータ・ロードのルールを選択します。
 - d. 「ソース・オプション」タブを選択します。
 - e. 「ソース・フィルタ」領域で  をクリックします。
 - f. 「ディメンション名」を選択します。
 - g. 「フィルタ条件」で、フィルタ条件を指定します。
 - フィルタ条件テキスト・ボックスに、メンバー名またはフィルタ条件を入力します。
 -  をクリックして「メンバー選択」画面を表示し、メンバー・セレクタを使用してフィルタリングのための関数を選択します。次に、「OK」をクリックします。

メンバー・セレクトを使用するには:

- i. 左側の使用可能なディメンションおよびメンバーのリストで、メンバーを選択して  をクリックします。
- ii. メンバーのリストからメンバーの選択を解除するには、 をクリックします。
- iii. メンバーに特殊なオプションを追加するには、 をクリックして、オプションを選択します。

メンバー・オプションで、「(含む)」は選択したメンバーを含むことを意味します。たとえば、「子(含む)」は選択したメンバーを含むメンバーのすべての子を追加し、「子孫(含む)」は選択したメンバーを含むすべての子孫を追加します。「子」を選択した場合、選択したメンバーは含まれず、その子のみが含まれます。

そのメンバーは右側に移動され、「選択のタイプ」列には選択したオプションが表示されます。たとえば、「選択のタイプ」列に「子孫」が表示されます。

 **ヒント:**

選択したリストのすべてのメンバーをクリアするには、 をクリックします。

- iv. 「OK」を2回クリックして、ソース・フィルタ詳細の定義を続行します。
選択したメンバーは、Oracle Essbase 構文で「フィルタ条件」フィールドに表示されます。
6. データ・ロード・ルールを実行してライトバックします。
 - a. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
 - b. 「POV バー」から、データ・ロード・ルールに使用するロケーションと期間を確認します。
 - c. 「実行」を選択して、予算額を Oracle General Ledger に転送する要求を送信します。
 - d. 「ソースからインポート」で、予算情報を Planning にインポートすることを選択します。
 - e. 「再計算」は、空白のままにしておきます。
 - f. 「ターゲットにエクスポート」で、情報を Oracle General Ledger にエクスポートすることを選択します。
 - g. 「開始期間」で、転送する最早一般会計期間を選択します。

値のリストには、期間マッピングで定義したすべての一般会計期間が含まれます。これは通常、初回予算ロードの年の第1期間であり、Oracle General Ledger に転送される予算が更新された場合は、その年の現在の期間または将来の期間になります。

- h. 「**終了期間**」で、転送する最後の一般会計期間を選択します。
値のリストには、期間マッピングで定義したすべての一般会計期間が含まれます。
- i. 「**インポート・モード**」で、「**置換**」を選択して、「(「開始期間」オプションと「終了期間」オプションから)選択した期間範囲の Oracle General Ledger の既存予算情報を上書きします。
「**追加**」を選択すると、既存の金額を上書きせずに既存の Oracle General Ledger 予算額に情報を追加します。
- j. 「**実行**」をクリックします。

Oracle ERP Cloud - Oracle General Ledger への実績のライトバック

Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションの実績情報がすべてそろったら、EPM Cloud アプリケーションをソースとして定義し、Oracle ERP Cloud - Oracle General Ledger ターゲット・アプリケーションにデータをライトバックできます。

必要なフィルタを指定したら、実績値を EPM Cloud から抽出し、Oracle General Ledger に書き込むことができます。エクスポート・ワークフロー・ステップで、データはフラット・ファイルに書き込まれ、これがファイル・リポジトリにコピーされます。データがライトバックされると、General Ledger で仕訳が作成されます。

Oracle ERP Cloud 側で ERP システムを構成するときは、「一般会計残高キューブの作成」を使用して Oracle Fusion ERP Essbase キューブが作成されていることを確認してください。また、「シナリオ・ディメンション・メンバーの作成」ジョブを使用して Oracle Fusion ERP Essbase キューブでシナリオがすでに設定されている必要があります。

Oracle General Ledger にライトバックするには:

1. Oracle ERP Cloud/EPM Cloud 統合には、権限またはユーザー役割および統合されるすべての ERP 元帳を操作するためのデータ・アクセス権が必要です。
2. Oracle General Ledger にディメンションをマップするインポート・フォーマットを作成します。
 - a. 「**設定**」タブの「**統合設定**」で、「**インポート・フォーマット**」を選択します。
 - b. 「**追加**」をクリックします。
 - c. 「**名前**」に、インポート・フォーマットの名前を入力します。
 - d. 「**ソース**」で、ドロップダウンから EPM Cloud アプリケーションの名前を選択します。
 - e. 「**説明**」に、インポート・フォーマットを識別するために使用できる説明を入力します。
 - f. 「**ドリル URL**」は、空白のままにしておきます。
 - g. 「**ターゲット**」ドロップダウンで、Oracle General Ledger アプリケーションを選択します。
 - h. 「**ターゲット**」ドロップダウンで、EPM アプリケーションを選択します。
 - i. 「インポート・フォーマット」画面の下部領域にスクロールして、EPM Cloud ディメンションを総勘定元帳のディメンションにマップします。
 - j. ターゲット・ディメンション「元帳」のソースをマップします。

エンティティなどのディメンションを元帳にマップし、必要なデータ・ロード・マッピングを定義して **Oracle General Ledger** の名前に変換します。単一元帳にライトバックする場合、式列に元帳の名前を入力します。

- k. **オプション:** 各仕訳に対して追加の参照データ/属性データを入力する場合は、属性列を使用して列をマップします。

属性列、属性 1 から属性 10 は、REFERENCE1 から REFERENCE10 用に予約されています。この場合、REFERENCE 列をディメンションとして追加し、ターゲット・アプリケーションの ATTR 列にマップする必要もあります。たとえば、REFERENCE3 に入力する場合は、ディメンションの詳細を挿入して適切な名前を付け、属性タイプを割り当てて、データ列 ATTR3 を割り当てます。(ATTR11 から ATTR30 は、ATTRIBUTE1 から ATTRIBUTE20 用に予約されています。Attribute1 は ATTR11 に、Attribute2 は ATTR12 に、というように格納されます。)
 - l. 「式」は、空白のままにしておきます。
 - m. 「保存」をクリックしてインポート・フォーマットを保存し、下部への移入を確認します。
3. ロケーションを作成します。
ロケーションには、統合のデータ・ロード・ルールおよびマッピングが格納されます。インポート・フォーマットがロケーションに割り当てられます。複数のインポート・フォーマットを使用している場合は、複数のロケーションを定義する必要もあります。
- a. 「設定」タブの「統合設定」で、「ロケーション」を選択します。
 - b. 「追加」をクリックします。
 - c. 「名前」に、ロケーションの名前を入力します。

EPM Cloud から Oracle General Ledger への転送を開始すると、このロケーション名が表示されます。

EPM アプリケーションから Oracle General Ledger への転送を開始すると、このロケーション名が表示されます。
 - d. 「インポート・フォーマット」で、転送中に使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。

 **ノート:**

「ソース」および「ターゲット」フィールド名はインポート・フォーマットに基づき自動的に移入されます。

- e. 「親のロケーション」に、ロケーションに割り当てられた親を入力します。親マッピングは他のロケーションとのマッピングの共有に使用されます。親ロケーションにマッピングを入力します。関連するロケーションが同じマッピングを使用できます。複数のロケーションが親を共有できます。この機能は、複数のロケーションが勘定科目の 1 つのチャートを使用している場合に役立ちます。子または親のマッピング表を変更すると、子と親のすべてのロケーションに適用されます。
- f. 「ソース」には、ソースが自動的に移入されます。
- g. 「機能通貨」で、そのロケーションの機能通貨を指定します。

- h. **オプション: 「ロジック勘定科目グループ」** で、ロケーションに割り当てるロジック勘定科目グループを指定します。
 - i. **オプション: 「確認エンティティ・グループ」** で、ロケーションに割り当てる確認エンティティ・グループを指定します。
 - j. **オプション: 「確認ルール・グループ」** で、ロケーションに割り当てる確認ルール・グループを指定します。
 - k. ロケーションを保存します。
- [ロケーションの定義](#)を参照してください。
4. 「**設定**」 タブの 「**統合設定**」 で、 「**期間マッピング**」 を選択します。
 5. 必要に応じて期間マッピングを作成します。

期間マッピングは、転送のために期間を Oracle General Ledger の会計カレンダー期間に変換する場合に使用されます。

 **ノート:**

期間を指定する場合は、開始および終了期間が単一会計年度内にある必要があります。会計年度をまたがるデータ範囲を指定すると、データが重複します。

- a. 「**追加**」 をクリックし、実績金額を受け取る各期間の個別行を追加します。
一般会計で元帳により使用される会計カレンダーからの期間名を使用します。
 - b. 「**期間キー**」 を定義します。
値を選択すると、期間キー、前期間キー、期間名およびターゲット期間の月に関する情報が自動的に移入されます。
 - **ターゲット期間の月** - このフィールドの値は、転送された金額を受け取る Oracle General Ledger の元帳の会計カレンダーと一致する必要があります。
 - **ターゲット期間の年** - (「ターゲット期間の月」列で定義されている)会計期間に対応する値を使用します。

[期間マッピングの定義](#)を参照してください。
6. 「**ワークフロー**」 タブの 「**統合設定**」 で、 「**データ・ロード・ルール**」 を選択します。
データ・ロード・ルールは、EPM Cloud アプリケーションから Oracle General Ledger に残高を転送するプロセスを送信するために使用されます。データ・ロード・ルールは、作成されるのは1回ですが、転送のたびに使用されます。
 7. 「**POV バー**」 から、データ・ロード・ルールに使用するロケーションを選択します。
データ・ロード・ルールは、視点のコンテキスト内で処理されます。デフォルトの視点は自動的に選択されます。視点の情報は、画面下部にある **POV バー** に表示されます。
 8. 「**名前**」 で、データ・ロード・ルールの名前を指定します。
 9. 「**カテゴリ**」 から、 「**実績**」 を選択します。
 10. 「**インポート・フォーマット**」 から、ライトバックに関連付けるインポート・フォーマットを選択します。
 11. 「**ソース・オプション**」 をクリックします。

- a. 「**ファイル名**」で、ロード対象のデータが含まれるデータ・ファイル名を選択します。データ・ソース・アプリケーションの作成元ファイルと同じファイルにすることも、データと適切なヘッダーを含む別のファイルにすることもできます。

ファイル名しか指定しない場合、ルールの実行ウィンドウで単一の期間に対してデータを入力する必要があります。

複数の期間をロードするには、各期間用のファイルを作成し、期間名または期間キーをファイル名に追加します。ルールを複数の期間で実行する場合、各期間のファイル名が作成され、適切な POV にアップロードされます。

- b. 「**ディレクトリ**」で、ファイルが割り当てられているディレクトリを指定します。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ディレクトリ内のファイルに移動するには、「**選択**」をクリックし、「**選択**」画面でファイルを選択します。**選択**ページで「**アップロード**」を選択し、**アップロードするファイルの選択**ページでファイルに移動することもできます。

ファイル名を指定しないと、ルールを実行するときに、FDMEE によってファイル名を求めるプロンプトが表示されます。

- c. データを複数の期間にロードするには、「**ファイル名の接尾辞タイプ**」ドロップダウンで、「**期間名**」または「**期間キー**」を選択します。

接尾辞がファイル名に付けられます。FDMEE は、接尾辞を追加した後でファイル拡張子を追加します。ファイル名を空白にすると、FDMEE は接尾辞付きのファイルを探します。ファイル名の接尾辞タイプを指定すると、ファイル名はオプションになり、ルールの実行ウィンドウでは必要ありません。

ファイル名の接尾辞タイプが期間キーの場合、接尾辞インジケータと期間の日付フォーマットがファイル名で(接尾辞セットとして)必要となり、有効な日付フォーマットとして検証される必要があります。この場合、ルールを実行するときに、「1_.txt」を「ファイル名」フィールドに入力し、接尾辞インジケータとして「**期間名**」を選択します。次に、1月から3月の期間についてルールを実行します。

たとえば、次のように指定します:

- i. 1_Jan-2019.txt
- ii. 1_Feb-2019.txt
- iii. 1_Mar-2019.txt

- d. 「**期間キーの日付フォーマット**」で、ファイル名に追加する期間キーの日付フォーマットを JAVA 日付フォーマットで指定します。(SimpleDateFormat)。
- e. 「**保存**」をクリックします。

12. 「**ターゲット・オプション**」タブをクリックします。

データ・ロード・ルールを使用する場合、ターゲット・アプリケーション・オプションを使用して、(ターゲット・アプリケーション全体ではなく)ロケーション/データ・ロード・ルールに固有のオプションを指定します。

Source Options		Target Options	Custom Options
View ▾ Detach			
Property Name	Value		
Purge Data File	No		
Balance Type	Actual		
Journal Source	Adjustment		
Journal Category	Adjustment		

13. 「残高タイプ」から、「実績」を選択します。
14. 「仕訳ソース」で、Oracle ERP Cloud で定義された仕訳ソースと一致する仕訳ソースの説明を入力します。
15. 「仕訳カテゴリ」で、Oracle ERP Cloud の仕訳カテゴリと一致する仕訳カテゴリの説明を入力します。
16. 「保存」をクリックします。
17. データ・ロード・ルールを実行してライトバックします。
 - a. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
 - b. 「POV バー」から、データ・ロード・ルールに使用するロケーションと期間を確認します。
 - c. 「実行」を選択して、実績金額を Oracle General Ledger にライトバックする要求を送信します。
 - d. 「ソースからインポート」で、EPM Cloud アプリケーションから実績値情報をインポートすることを選択します。
 - e. 「再計算」は、空白のままにしておきます。
 - f. 「ターゲットにエクスポート」で、情報を Oracle General Ledger にエクスポートすることを選択します。
 - g. 「開始期間」で、転送する最早一般会計期間を選択します。
値のリストには、期間マッピングで定義したすべての一般会計期間が含まれます。これは通常、初回実績ロードの年の第 1 期間であり、Oracle General Ledger にライトバックされる実績値が更新された場合は、その年の現在の期間または将来の期間になります。
 - h. 「終了期間」で、転送する最後の一般会計期間を選択します。
値のリストには、期間マッピングで定義したすべての一般会計期間が含まれます。
 - i. 「インポート・モード」で、「置換」を選択して、(「開始期間」オプションと「終了期間」オプションから)選択した期間範囲の Oracle General Ledger の既存の実績情報を上書きします。
「追加」を選択すると、既存の金額を上書きせずに既存の Oracle General Ledger 実績値金額に情報を追加します。
 - j. 「実行」をクリックします。

Excel 試算表ファイルを使用したデータのインポート

Excel 試算表ファイルは、インポート画面で、1 つ以上の期間、カテゴリおよびロケーションにフォーマットされている Excel スプレッドシートです。

テキスト形式の試算表ファイルと Excel 形式の試算表ファイル

テキスト形式の試算表ファイルと Excel 形式の試算表ファイルは、2つの点で類似しています。どちらも現在の POV (カテゴリと期間) にロードされ、インポート・フォームで同じ「追加」および「置換」オプションを使用します。

テキスト形式の試算表ファイルと Excel 形式の試算表ファイルの相違点は1つです。テキスト・ファイルでは標準のインポート・フォーマットのみ使用できるのに対して、Excel データ・ファイルでは、インポート・フォーマットを使用しません。

Excel 形式の試算表テンプレートを使用する場合、テンプレートに1つ以上の期間が含まれることがあります。複数の期間のロードを行う場合は複数の期間を示すダミーのインポート・フォーマットを作成します。Excel ファイルに1つのデータ値のみ含まれる場合、インポート・フォーマットは必要ありません。

Excel 試算表テンプレートのダウンロード

Excel 試算表テンプレートをダウンロードするには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。
2. 「テンプレートのダウンロード」ドロップダウンで「試算表」を選択します。
3. 「開く」画面から、テンプレートを開くか保存し、「OK」をクリックします。

Excel 形式の試算表テンプレートの定義

Excel 形式の試算表テンプレートを定義するには、メタデータ・タグが含まれる名前付き領域の最初の行を定義します。この領域の外部に他の情報を定義できますが、システムでは名前付き領域内の情報のみが考慮されます。たとえば、テンプレートにはタイトルと金額の概要が含まれます。これらは名前付き領域の外側にあり、データをロードする際には処理されません。

テンプレートを使用してデータをロードする場合、システムは名前付き範囲の定義を使用して、ディメンションと関連データを探します。試算表テンプレートでは、事前定義済範囲は upsTB と呼ばれ、Excel の「名前の管理」オプションを使用して確認できます。

次のテンプレートには、1行のメタデータ(行1)と3行のインポート済データ(行5-7)があります。

「ディメンションの値」と「金額」は、行1に定義されたタグに基づいて、それぞれの列に移入される必要があります。ディメンション・タグを追加するには、列を追加します。行を追加することにより、データを追加します。

行または列を追加するときは、名前付き領域内に追加します。Excel によって領域定義が自動的に更新されます。領域の外部に行を追加した場合は、それらの新しい行または列を含むように領域を更新します。ディメンション列を追加するときは、ディメンション・タグを追加して、その列が勘定科目、エンティティ、会社間トランザクション、金額またはユーザー定義(UD)ディメンションのいずれであるかを指定します。エンティティ・ディメンションは「中央」のタグによって表されることに注意してください。

表 3-14 FDMEE ディメンション・タグと対応するタグ

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ディメンション	有効なタグ
勘定科目(必須)	A, Account, SrcAcctKey
中央(必須)	C, Center, SrcCenterKey
説明(オプション)	D, Description, SrcAcctDesc
会社間カウンタ・パーティ(オプション)	I, IC, ICCoParty
ユーザー定義 1 - ユーザー定義 20(オプション)	1-20, UD1-UD20, UserDefined1-UserDefined20
金額(必須)	V, Amount, SrcAmount

FDMEE で提供されるテンプレートでは、一部の行が非表示になっています。列および列タグを更新するには、これらの行の非表示を解除する必要があります。このためには、非表示行の上と下の行を選択してから、セルの高さを更新します。12.75 という設定がセルの標準の高さです。この設定では、シートの選択した範囲の非表示行がすべて表示されます。変更を行った後で、行を再び非表示にすることができます。

	A	B	C	D
1	Trial Balance Template			
2				
3				
4				
5	Account	Center	Description	Current Month
8				
9				
10				
11				

Excel を使用した複数期間データ・ロードの追加

Excel 試算表テンプレートを使用して、データを複数期間にロードすることもできます。これを行うには、複数期間インポート・フォーマットを使用してデータ・ルールを作成します。インポート・フォーマットは詳しいマッピングを含む必要はありません。定義が複数期間であることのみが必要です。複数期間データ・ルールを使用して、Excel 試算表ファイルをインポートできます。ダミーのインポート・フォーマットを作成して、複数の期間の仕様を選択するのみです。複数期間のデータをロードするには、列ヘッダーが V1:PeriodKey、V2:Periodkey などのフォーマットである必要があります。期間キーは YYYY/MM/DD 形式で指定してください。データ・ルールにソース期間マッピングを定義する必要はありません。範囲を更新し、追加の列が範囲に含まれるようにする必要もあります。次に、Excel ファイルのサンプルを示します。

ノート:

期間が連続しない場合は、タグに期間キー(V1:2016/1/31 など)を含める必要があります。期間が連続している場合は、期間キーが無視され、ルールの実行中に選択された開始/終了を使用して期間が定義されます。


 ノート:

Excel のテンプレートでは、タグとデータの 1 行目の間に空の行が必要です。

5	Account	Center	Description	Jan	Feb
6	A	C	D	V1-2013/1/1	V2-2013/3/1
8	Revenue		100	110	1,300
9	Expense		100	500	500
10					

Excel マッピングのインポート

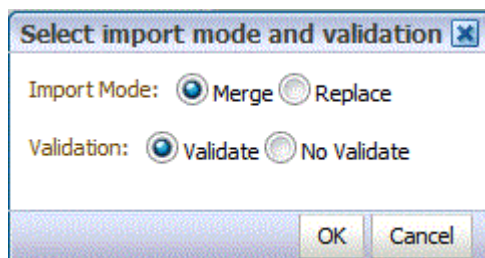
インポート・オプションを選択し、Excel マッピングを選択して、Excel マッピングをインポートできます。

 ノート:

Excel テンプレートを使用するマッピング・ルール of インポートでは、マッピング・スクリプトを指定する場所はありません。

Excel マッピングをインポートするには:

1. 「ワークフロー」 タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「すべてのマッピング」 タブを選択します。
3. 「インポート」 ドロップダウンから、「Excel からインポート」を選択します。
4. 「インポートするファイルの選択」 から、インポートする Excel ファイルを選択し、「OK」をクリックします。
5. 「インポート・モードと検証を選択してください」の「インポート・モード」で、インポート・モードを選択します。



- マージ - アプリケーション内のデータを Excel データ・ロード・ファイル内のデータで上書きします。

- 置換 - Excel データ・ロード・ファイルのディメンションの値をクリアし、既存ファイルの値で置換します。
6. 「検証」をクリックしてマッピングを検証します。
 7. 「OK」をクリックします。
- マッピングは、デフォルトのデータ・ロード・ルールを継承し、システム生成マッピングという説明を表示します。

仕訳テンプレートを使用したデータのインポート

Oracle Hyperion Financial Management では、データが基本レベル・エンティティに入力(ロード)された後、仕訳を使用してデータを調整します。仕訳には、アプリケーションで行われた変更の監査証跡機能があり、調整を行ったユーザーや、影響を受けた勘定科目、エンティティ、期間を特定できます。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、Financial Management の仕訳エントリを仕訳テンプレートにロードできます。このテンプレートは、仕訳エントリの入力画面としてフォーマットされた Excel スプレッドシートです。

FDMEE 仕訳テンプレートは通常、次のタイプの調整に使用されます:

- 総勘定元帳ファイルに対する GAAP 調整
- 総残高勘定のロールフォワード勘定科目への変換(開始、加算、減算、終了)
- 補足データ入力(ヘッド・カウント、比率など)

仕訳テンプレートのロードに関するその他の考慮事項

仕訳テンプレートをロードする際、次の事柄に注意してください:

1. 仕訳は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ユーザー・インタフェースにより手動でのみロードできます。オフライン・モードやバッチ・モードでは、仕訳をロードできません。
2. Oracle Hyperion Financial Management の仕訳グループは、仕訳ラベルを除いてサポートされていません。仕訳テンプレートの仕訳 ID は Financial Management へのロード時に仕訳ラベルとして使用され、グループは空白のままです。
3. 仕訳ごとにロードされる説明は 1 つのみで、ロード・プロセスでは、仕訳の説明として見つかった最後の説明が使用されます。
4. レガシー Oracle Hyperion Financial Data Quality Management 製品で提供されていた仕訳データ検証のための UpCheck 機能は、FDMEE では使用できません。ユーザーは、カスタム・イベント・スクリプトを使用して、類似機能を提供できます。[イベント・スクリプトの使用](#)を参照してください。

Financial Management の仕訳の統合

Oracle Hyperion Financial Management 仕訳機能を Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition と統合するには、FDMEE アプリケーション・オプションを設定し、データ値を統合する必要があります。

Financial Management アプリケーションのオプション

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で仕訳機能を使用する前に、次の Oracle Hyperion Financial Management アプリケーション・オプションを設定する必要があります:

- 仕訳のロードを使用可能にする
- エンティティごとの JV ID が使用可能な仕訳
- 仕訳の調整属性
- 仕訳ステータス

前述のオプションの設定の詳細は、[Financial Management のアプリケーション・オプションの定義](#)を参照してください。

データ値

データ値は、Oracle Hyperion Financial Management マルチディメンション・ターゲット・システムと統合する際のみで使用される追加のディメンションです。ディメンションの名前は「値」です。このディメンションのメンバーは[Contribution Adjs]と[Parent Adjs]です。データが Financial Management にロードされる時、データのロード先を示すために値ディメンションのメンバーを指定します。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション定義で、「データ値」フィールドに値ディメンションのエントリを指定します。「検索」リンクを選択すると「データ値」が「ロケーション」画面に設定されます。

FDMEE がロード・ファイルを作成すると、このディメンション値はこのロケーションによってロードされた各データ行に入力されます。Financial Management と統合するには、このフィールドに値を入力する必要があります。入力しないと、検証は失敗します。デフォルト値はデータ値<エンティティ通貨>です。

仕訳を Financial Management にロードする場合、データ・ロードと仕訳ロードのために値ディメンション・メンバーを指定できます。最初の「;」のフィールドはデータ・ロードに使用される値メンバー、「;」による 2 番目のフィールドは仕訳ロードの値メンバーです。

テンプレートを使用するとき、システムは、ロケーションの値メンバー・フィールドで";"で区切られた 2 番目のフィールドを探して、値メンバーを選択します。

「検索」が選択されると、FDMEE が Financial Management に接続して、有効なデータ値のリストを取得します。FDMEE は、Financial Management から値を取得し、FDMEE が作成した行(元の値と調整データ値の連結)を追加します。FDMEE は、このように新たに作成された行を使用して、Financial Management への仕訳のロードを管理します。

データ値選択画面で FDMEE が作成する行を次に示します:

- [Contribution Adjs];[Contribution Adjs]
- [Contribution Adjs];[Parent Adjs]
- [Contribution Adjs];<Entity Curr Adjs>
- [Contribution Adjs];<Parent Curr Adjs>
- [Parent Adjs];[Contribution Adjs]

- [Parent Adjs];[Parent Adjs]
- [Parent Adjs];<Entity Curr Adjs>
- [Parent Adjs];<Parent Curr Adjs>
- <Entity Curr Adjs>;[Contribution Adjs]
- <Entity Curr Adjs>;[Parent Adjs]
- <Entity Curr Adjs>;<Entity Curr Adjs>
- <Entity Curr Adjs>;<Parent Curr Adjs>

仕訳テンプレートのダウンロード

仕訳テンプレートを使用して仕訳をロードする場合、サーバーにアップロードされている仕訳テンプレートをデータ・ロード・ワークベンチから選択できます。テンプレートは既存の POV に関連付けられています。テンプレートに必要な値の入力が済んだら、リロード(サーバーにポスト)し、その POV に対する新規データ・ロード・ルールを作成して、データ・ロード・ルールに「仕訳」というロード・タイプを指定します。

仕訳テンプレートをダウンロードするには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。
2. POV で、ダウンロードする仕訳テンプレートに関連付けられている POV を選択します。
3. 「テンプレートのダウンロード」で、「仕訳」を選択します。
4. 「開く」画面で、テンプレートを開くか保存し、「OK」をクリックします。

仕訳テンプレートの定義

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 仕訳テンプレートを定義するには、メタデータ・ヘッダーを指定します。このメタデータ・ヘッダーは、FDMEE がテンプレートに含まれているデータを解釈するために使用します。メタデータは、どの列に勘定科目番号が含まれるか、どの期間をロードするかを FDMEE に示すための一連のタグで構成されます。ヘッダー情報やロードするデータの場所をシステムに示すために名前付き範囲が使用されます。仕訳テンプレートの場合、名前付き範囲は **upsJournal** と呼ばれます。次に示す詳細は、名前付き範囲内の関連する行に対応します。FDMEE に含まれるテンプレートには、行 16 から開始する範囲があり、メタデータは範囲内の行 1 から開始します。FDMEE で提供されるテンプレートの例を次に示します。

サンプルの仕訳テンプレートには、実際にインポートされたデータが 2 行と、メタデータが 5 行含まれます。行 1~5 にはメタデータ、行 6 と 7 にはデータ値が含まれます。

	A	B	C	D
1	ID-Texas100		1 Texas	
2			ACTUAL05	
3			1/31/2005	
4			A	
5	A	C	V	D
6	1100	Texas	500.00	Reclass Cash
7	1210	Texas	(500.00)	Reclass Cash

メタデータ構造

メタデータのヘッダー(行 1 から 5 まで)によって、このテンプレートで処理するデータの関連セグメントを見つける方法が Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition に指示されます。次の行 1~5 に関する項で、メタデータの各部分が FDMEE によって使用される方法を説明します。

行 1 (仕訳 ID とロケーション・タグ)

範囲の行 1 のタグが、仕訳 ID、およびデータのロード先である Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の設定に使用されます。仕訳 ID は「勘定科目」列の行 1 に配置する必要があります。ロケーション・タグを「金額」列の行 1 に配置します。

行 2 (FDMEE カテゴリ・タグ)

範囲の行 2 のタグは、仕訳がロードされる Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のカテゴリを設定します。カテゴリは、有効な FDMEE カテゴリであることが必要です。FDMEE カテゴリ・タグは「金額」列に配置する必要があります。

行 3 (FDMEE 期間タグ)

範囲の行 3 のタグは、データのロード先の期間を設定します。期間は Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の有効な期間であることが必要です。このタグは「金額」列に配置する必要があります。

行 4 (ロード方法タグ)

範囲の行 4 のタグは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 内での仕訳ロードの方法を設定します。同じ仕訳 ID の既存の仕訳に追加するには、文字「A」を入力します。同じ仕訳 ID の仕訳が同じ FDMEE 視点に存在する場合、新しい仕訳は以前発行された仕訳に追加されます。同じ仕訳 ID の既存の仕訳を置換するには、文字「R」を入力します。

同じ仕訳 ID の仕訳が同じ FDMEE 視点に存在する場合、新しい仕訳によって古い仕訳が置換されます。このタグは「金額」列に配置する必要があります。次の表では使用可能なタグを定義しています。「AZ」および「RZ」設定は、「A」と「R」の方法と同じように機能しますが、ゼロ値の金額がすべて抑制される点が異なります。

表 3-15 仕訳ロード方法と対応するタグ

方法	有効なタグ
仕訳の追加	A、Append
仕訳の置換(デフォルト)	R、Replace
仕訳の追加 - ゼロ抑制	AZ
仕訳の置換 - ゼロ抑制	RZ

行 5 (ディメンション・タグ)

行 5 のタグは、金額がロードされるディメンションを定義します。指定できるディメンション・タグを次の表に示します。

表 3-16 仕訳ロード方法と対応するタグ

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ディメンション	有効なタグ
勘定科目(必須)	A, Account, SrcAcctKey
中央(必須)	C, Center, SrcCenterKey
説明(オプション)	D, Description, SrcAcctDesc
会社間カウンタ・パーティ(オプション)	I, IC, ICCoParty
ユーザー定義 1 - ユーザー定義 20 (オプション)	1-20, UD1-UD20, UserDefined1-UserDefined20
金額(必須)	V, Amount, SrcAmount

仕訳テンプレート内での範囲名の作成

列の範囲はテンプレートにあらかじめ定義されており、行 5-13 の冒頭のセクションに入力し、必要な列を追加するだけです。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、名前付き範囲を評価して、POV、ロード方法およびロードするデータを特定します。

独自の仕訳テンプレートを作成するには、すべてのメタデータとデータ・セルを含み、接頭辞 *ups* で始まる範囲名を作成します。たとえば、標準テンプレートの場合、[upsStandardJV (B16 to J33)] という範囲名を作成します。

次の図は、仕訳テンプレートを表しています。このテンプレートでは、メタデータは行 1-5 ではなく、行 16-20 にあることに注意してください。テンプレートには、行 16 から始まる upsJournal があります。したがって、行 16-20 が upsJournal の最初の 5 行です。行 4-14 は、ユーザーによるメタデータ・ヘッダーの作成を支援する単純なインタフェースです。メタデータ情報はここに入力され、メタデータ・ヘッダーによって参照されます。

(仕訳データは、範囲に行を追加して、それぞれの列に入力する必要があります。最も簡単な方法は、行を既存の範囲に追加して、1 つの範囲だけを使用し、デフォルトの upsJournal を使用することです。ターゲット・アプリケーションのディメンシヨナリティに基づいて列をスプレッドシートに追加します。)

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	
1	Journal Details									24-Oct-16
2										
3										
4										
5	Journal ID:	JL_WestReg	Enter the Journal ID. It must be 10 or less characters							
6	Location:	FCCSAPP1	Enter the Location Name. It must match the value in POV in the User Interface							
7	Category:	Actual	Enter the Category Name. It must match the value in POV in the User Interface							
8	Period:	12/19/2016	Enter the Period Name. It must match the value in POV in the User Interface							
9	Load Method:	R	A = Append, R = Replace							
10										
11										
12										
13										
14										
15	Account	Entity	Intercompany	Movement	Multi GAAP	Custom1	Custom2	Amount	Description	
16	JL_WestReg							FCCSAPP1		
17								Actual		
18								12/19/2016		
19								R		
20	A	C	I	3	4	1	5	V	D	
22	1100	E1						1000.00	Reclass Cash	
23	1111	E1						(1000.00)	Reclass Cash	
24										
25										
26										
27										
28										
29										
30										
34										

仕訳テンプレートには、次のディメンションが含まれる必要があります。

- **勘定科目** - 仕訳勘定科目です(必須)。
- **エンティティ** - 仕訳エンティティです(必須)。
- **会社間** - (Financial Consolidation and Close で使用されない場合、オプション)。
- **増減** - 期間から期間へのデータの変化(必須)
- **複数 GAAP** - 期間から期間へのデータの変化(オプション)
- **カスタム 1、カスタム 2 ディメンション** - ターゲット・アプリケーションで使用されない場合、オプション
- **金額** - (必須)
- **説明** - (オプション)

仕訳の処理

仕訳の処理プロセスは次のとおりです:

1. 仕訳ファイルを inbox ディレクトリから Excel 形式でロードします。
2. 仕訳に入力された POV が Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の現在の POV と一致するかどうかを確認します。ups 範囲も確認されます。

仕訳をチェックインすると、FDMEE は、名前が ups で始まるすべての範囲のテンプレートを調べます。次に、各 ups 範囲で見つかったメタデータ・タグを調べて検証します。FDMEE は、無効な範囲を含んでいるメタデータ・セグメントをチェックインしません。

3. 仕訳を転記します。

仕訳のロード

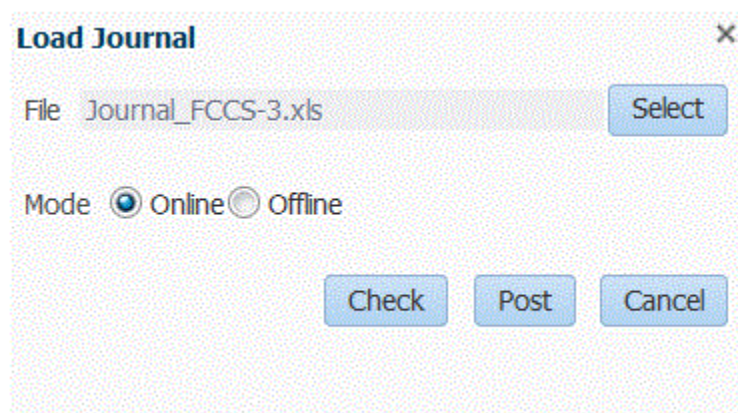
仕訳をロードするには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ワークベンチ」を選択します。

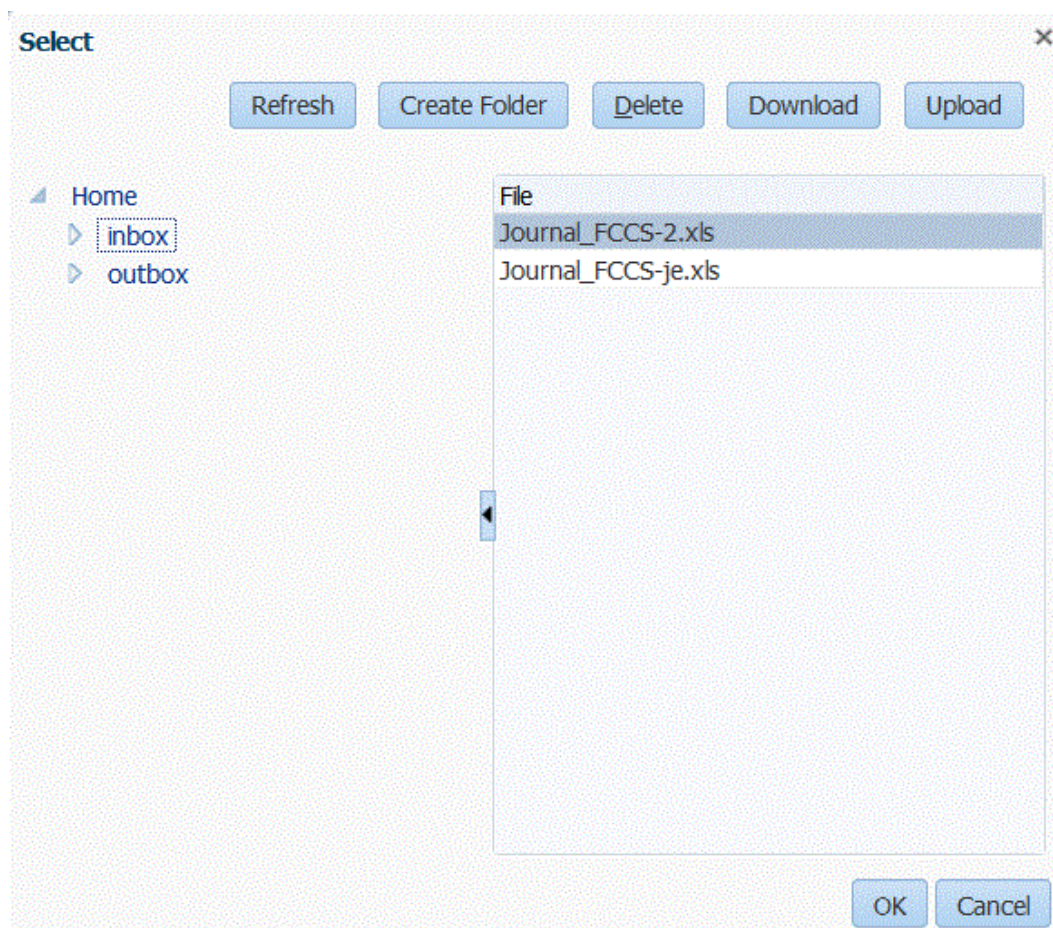
仕訳をロードすると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は現在の POV を使用して、ロケーション、カテゴリおよび期間

を決定します。別の POV を使用する場合は、データ・ロード・ワークベンチで別の POV を選択します。

2. 「仕訳のロード」をクリックします。



3. 「仕訳のロード」画面で仕訳ファイルを参照し、「選択」をクリックします。



- a. 仕訳テンプレートをアップロードしたサーバーから、ロードする仕訳テンプレートを
選択し、「OK」をクリックします。

仕訳が正常にロードされると、「確認」ボタンが有効になります。

 **ノート:**

FDMEE から Financial Consolidation and Close のターゲットに仕訳をロードする際、FDMEE(クラウド)で勘定科目タイプが判別されることを考慮し、貸方/借方を変換します。正数はすべて借方として、負数はすべて貸方としてロードされます。勘定科目タイプにその他の貸方または借方の符号を指定する必要がある場合は、データ・ロード・マッピングの符号の変更機能を使用するか、別のカスタマイズ方法を使用して、仕訳のロードの貸方/借方の変更を処理してください。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition (オンプレミス)から Financial Consolidation and Close のターゲットに仕訳をロードする際、FDMEE では勘定科目タイプが判別されないことを考慮するか、貸方/借方を選択してください。正数はすべて貸方として、負数はすべて借方としてロードされます。勘定科目タイプにその他の貸方または借方の符号を指定する必要がある場合は、データ・ロード・マッピングの符号の変更機能を使用するか、別のカスタマイズ方法を使用して、仕訳のロードの貸方/借方の変更を処理してください。

- b. **オプション:** 仕訳ファイルをダウンロードするには、「**ダウンロード**」をクリックし、仕訳ファイルを開くか保存します。
 - c. **オプション:** 仕訳ファイルをアップロードするには、「**アップロード**」をクリックし、アップロードするファイルに移動して、「**OK**」をクリックします。
4. 「**確認**」をクリックし、仕訳を検証してロードします。
仕訳の**確認**を参照してください。

仕訳の確認

仕訳は転記する前に確認する必要があります。このプロセスでは、仕訳の Excel ファイルに入力された POV が現在の POV と一致するかどうかを検証されます。また、ups 範囲が有効であることも確認されます。検証が正常終了すると、「転記」ボタンが有効になります。

 **ノート:**

仕訳のインポート・ファイルが XLS または XLSX でない場合、確認機能は使用できません。

仕訳をチェックするには:

1. 正常にロードされた仕訳ファイルが「**ファイル**」フィールドに表示されることを確認します。
仕訳ファイルは Excel ファイル・タイプ(.xls)である必要があります。
2. 「**確認**」をクリックします。
3. 処理方法について「**オンライン**」または「**オフライン**」を選択します。

オンラインでの確認はすぐに実行され、オフラインでの確認はバックグラウンドで実行されます。

仕訳の確認時、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、名前が ups で始まるすべての範囲について仕訳ファイルを調べます。次に、各 ups 範囲で見つかったメタデータ・タグを調べて検証します。FDMEE は、無効な範囲を含んでいるメタデータ・セグメントを確認しません。

FDMEE による仕訳の検証が終わると、「仕訳ファイルが正常に確認されました。」というメッセージが表示されます。

仕訳の転記

仕訳の検証(確認)が正常に終了したら、仕訳を転記できます。仕訳を転記すると、「インポート・フォーマット」画面に表示されたデータの追加または置換が行われます(仕訳内で指定されているロード方法により決定されます)。

仕訳を転記するには:

1. 仕訳を選択します。
2. 「**転記**」をクリックします。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で仕訳が転記されると、次のメッセージが取得されます: 仕訳ファイルが正常にロードされました。

仕訳のセキュリティ

「POV ロック」オプションが有効な場合は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 管理者およびエンド・ユーザーによる FDMEE グローバル POV への仕訳の転記は制限されます。

ユニバーサル・データ・アダプタを使用したデータのロード

ユニバーサル・データ・アダプタを使用すると、外部ソース表ビューの情報を(SQL 表からなど)、オープン・インタフェース表をバイパスして Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition に直接統合できます。このため、ソース・システムおよびソース・アダプタ詳細で、サポートされているデータ・ソースを確認できます。また、この機能によって、事前パッケージ済アダプタが使用できない場合、または事前パッケージ済アダプタから必要なデータが提供されない場合に、ユーザーが基礎となるデータベースへのアクセス権を持っているソース・データに簡単に接続することもできます。この機能は、任意のソース表またはビューへの直接統合を効果的に実現します。

ユニバーサル・データ・アダプタを FDMEE と統合するプロセスは、大まかには次のようになります:

1. Oracle Database Integrator で、ソース・システムのデータ・サーバーおよび物理スキーマを作成します。
2. ODI でアダプタの適切なテクノロジーに対して論理スキーマを作成し、物理スキーマにマップします。
3. FDMEE で、ソース・システムを登録します。
4. ソース・アダプタを作成します。
5. ターゲット・アプリケーションを(Oracle Enterprise Performance Management System アプリケーションとして)登録します。

6. インポート・フォーマットを作成(ソース表/ビューの列とターゲット・ディメンションをマップ)します。次に ODI シナリオを再生成します。
7. ロケーションを作成します。
8. 期間マッピングを作成します
9. カテゴリ・マッピングを作成します。
10. データ・ロード・マッピングを作成します。

Oracle Database Integrator (ODI)でのユニバーサル・データ・アダプタの定義

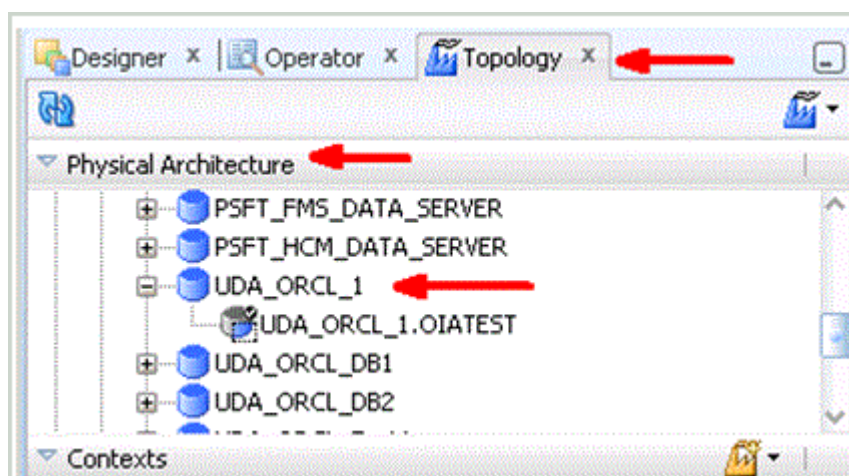
ユニバーサル・データ・アダプタは Oracle Data Integrator (ODI)に依存して、データをターゲット・アプリケーションにインポート、変換、検証およびエクスポートします。そのため、データを ODI 内の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition にシードする方法を指定する必要があります。

ユニバーサル・データ・アダプタ・ソースのデータ・サーバーおよび物理スキーマの作成

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition (Oracle、MSSQL Server、MySQL、Teradata および DB2)によって提供されるユニバーサル・データ・アダプタ用のデータ・サーバーおよび物理スキーマを作成する方法について説明します。

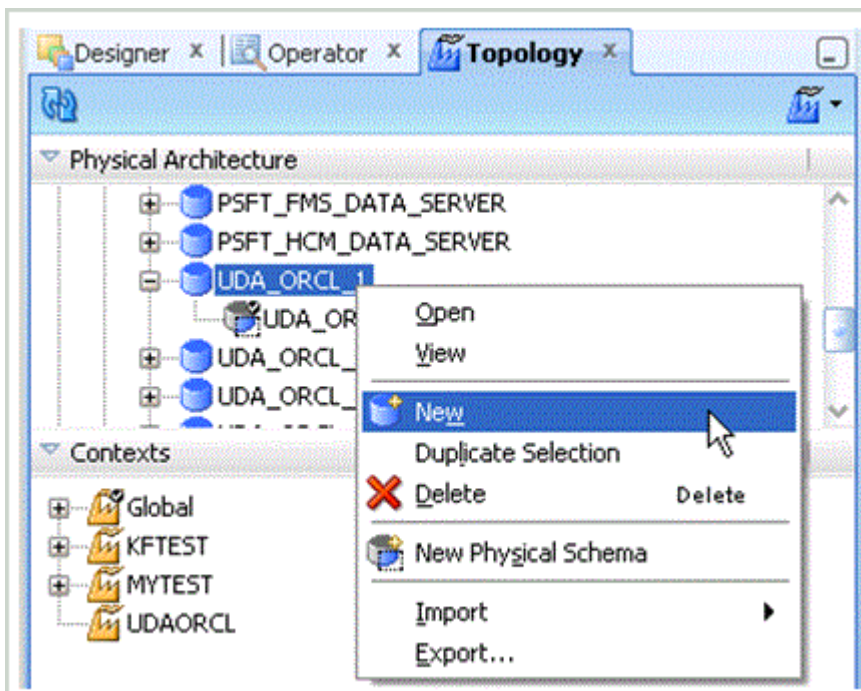
ユニバーサル・データ・アダプタ・ソースのデータ・サーバーおよび物理スキーマを作成するには:

1. **Oracle Data Integrator Studio (ODI)**を起動します。
2. 「トポロジ」、「物理アーキテクチャ」、「テクノロジー」の順に移動し、データ・サーバーのテクノロジーを選択します。

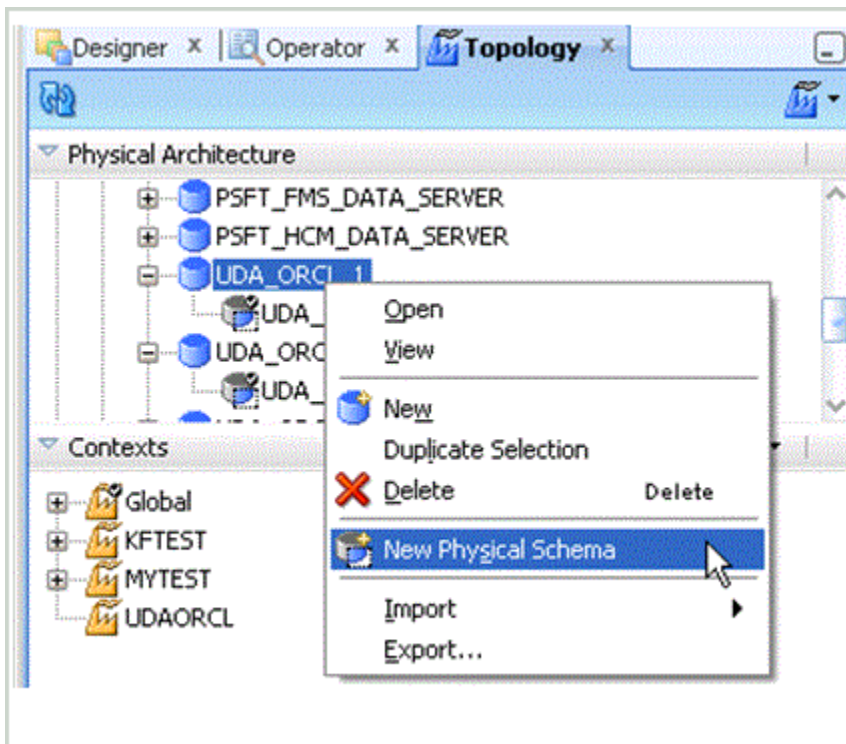


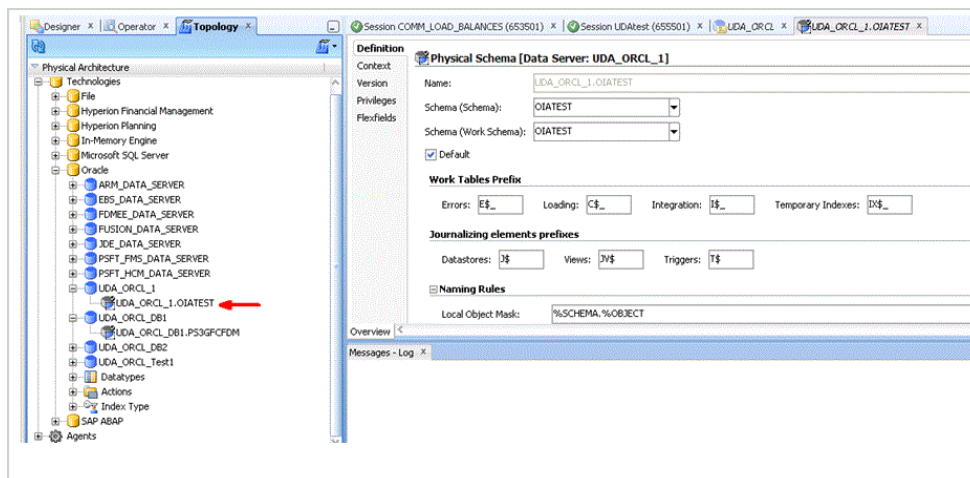
たとえば、「Oracle」または「Microsoft SQL Server」を選択します。

3. データ・サーバーを右クリックして「新規」を選択します。



4. 外部データベースの **JDBC** の詳細を入力します。
5. ステップ3で作成したデータ・サーバーを右クリックして「**新規物理スキーマ**」を選択します。

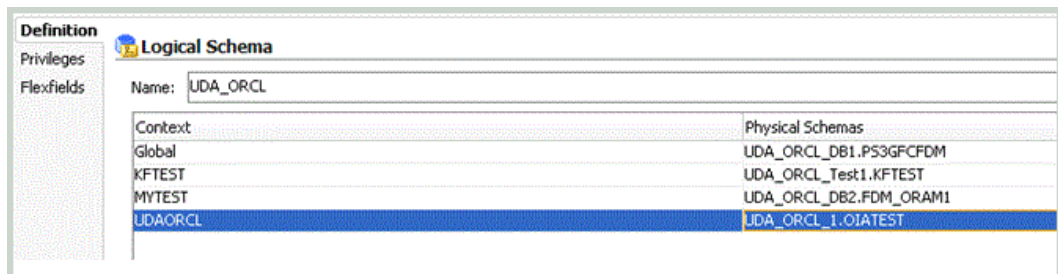
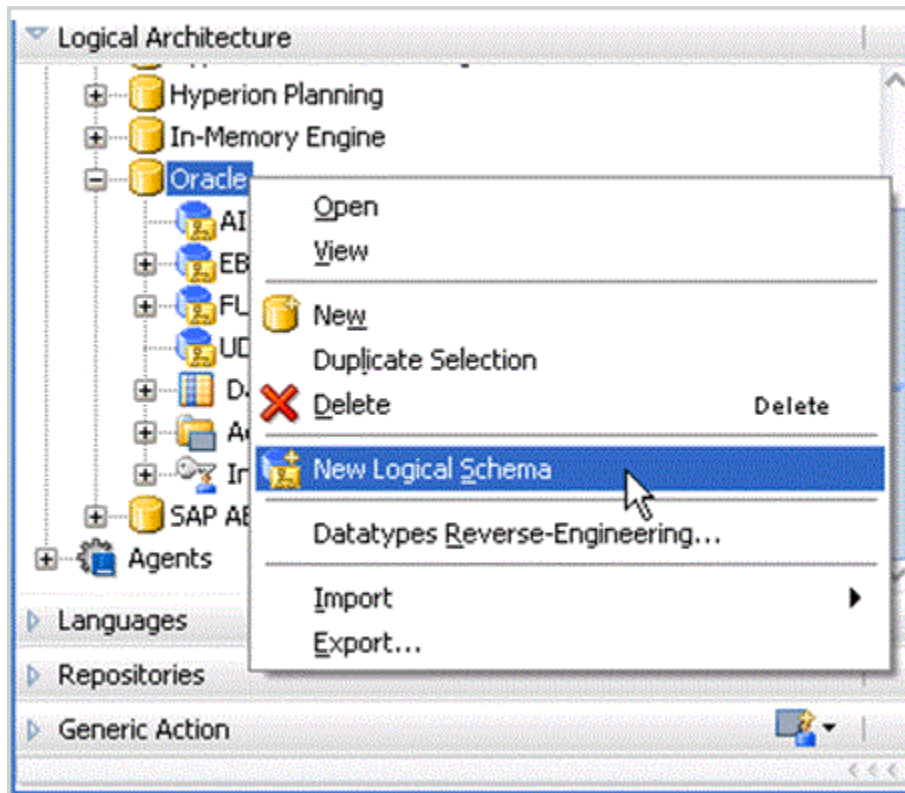




6. 「トポロジ」、「論理アーキテクチャ」、「テクノロジ」の順に移動し、論理スキーマのテクノロジを選択します。

次に示すとおり、データベース・テクノロジごとに論理スキーマに名前を付けます。

- ユニバーサル・データ(Oracle) - UDA_ORCL
- ユニバーサル・データ(SQL Server) - UDA_MSSQL
- ユニバーサル・データ(MySQL) - UDA_MYSQL
- ユニバーサル・データ(Teradata) - UDA_TD
- ユニバーサル・データ(DB2)—UDA_UDB
- ユニバーサル・データ(DB2 400)—UDA_DB2_400
- ユニバーサル・データ(SAP HANA)—UDA_HANA



SAP HANA の構成

SAP HANA を Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition とともに使用するには、次のステップが必要です。

SAP HANA を設定するには:

1. SAP HANA (njdbc.jar)への接続に使用する jdbc jar をターゲット・ロケーション:
 \Oracle\Middleware\user_projects\domains\EPMSysstem\lib にダウンロードします。
 jdbc jar ファイルは SAP によって提供されます。
2. <EPM_ORACLE_HOME>\products\FinancialDataQuality\odi\11.1.2.4.00\masterrep フォルダから SAP HANA テクノロジをインポートします。
3. 次の値を使用して、モデル・フォルダ"Universal Data Adapter Model"に SAP モデルを作成します:

- **名前** — HANA ソース
- **コード** — HANA ソース
- **テクノロジー** — SAP HANA
- **論理スキーマ** — UDA_HANA

 **ノート:**

モデル・フォルダ"Universal Data Adapter Model"が使用できない場合、次のロケーションからインポートします:
`<EPM_ORACLE_HOME>\products\FinancialDataQuality\odi\11.1.2.4.0\workrep。`

4. HANA Adapter Project をインポートします。
5. HANA への接続を作成し、コンテキスト内のそれに論理スキーマ UDA_HANA をマップします。

FDMEE でのユニバーサル・データ・アダプタの操作

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でのユニバーサル・データ・アダプタの構成および使用方法を説明します。

ユニバーサル・データ・アダプタのソース・システムの操作

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でユニバーサル・データ・アダプタを使用する前に、データのインポート元となるデータ・ソースを登録します。

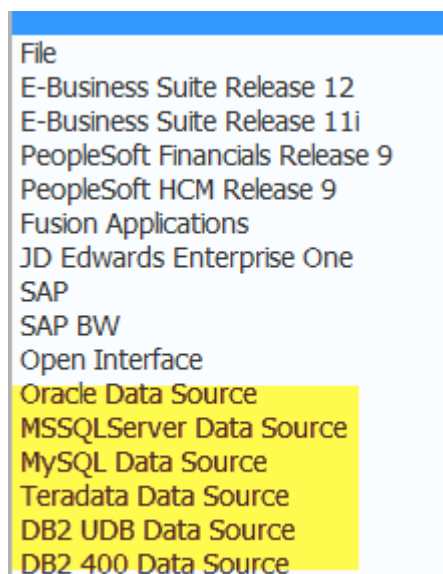
FDMEE では、次のデータ・ソースからのデータ抽出をサポートしています:

- Oracle データ・ソース – UDA_ORCL
- MSSQLServer データ・ソース – UDA_MSSQL
- MySQL データ・ソース – UDA_MYSQL
- Teradata データ・ソース – UDA_TD
- DB2 データ・ソース – UDA_UDB
- DB2 400 データ・ソース - UDA_DB2/400
- SAP Hana – UDA_HANA

ユニバーサル・データ・アダプタのソース・システムを追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ソース・システム」を選択します。
2. 「ソース・システム」で、「追加」をクリックします。
3. ソース・システム詳細を入力します:
 - a. 「ソース・システム名」で、ソース・システム名を入力します。
 データ・ソースに使用する名前("Oracle 売掛金データ"や"MYSQL 買掛金データ"など、特定のデータ・ソースを示す名前)を入力します。

- b. 「ソース・システムの説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
- c. 「ソース・システム・タイプ」で、ユニバーサル・データ・アダプタのソース・システムのタイプを選択します。



- d. 「ODI コンテキスト・コード」で、特定のインスタンスへの接続について ODI で定義されたコンテキスト・コードを指定します。

ODI コンテキスト・コードは、Oracle Data Integrator に定義されているコンテキストを参照します。コンテキストはソースおよびターゲットの接続情報をグループ化します。

同じシード済テクノロジー(Oracle、MSSQL、MYSQL、Teradata、DB2 または DB2 400)の別のインスタンスからデータが導出されている場合、同じテクノロジー・タイプの別のソース・システムを異なるコンテキストで登録できます。コンテキスト内で、ソース・システム・タイプに属している論理スキーマを別のインスタンスにマップする必要があります。

- 4. 「保存」をクリックします。

ソース・システムを追加した後、サマリー・リージョン内のソース・システムを選択すると、下部ペインに詳細が表示されます。

ユニバーサル・データ・アダプタ・ソース・システムとターゲット・アプリケーションの操作

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ターゲット・アプリケーションの機能では、ユニバーサル・データ・アダプタ・ソース・システムを操作する際に追加のステップが必要です。

ソース・アダプタの作成

ソース・アダプタは Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition における統合フレームワークであり、これによりソース・システムから柔軟かつカスタマイズ可能な方法でデータを抽出できます。ユニバーサル・ソース・アダプタを使用して Oracle

Data Integrator を構成すると、ODI はデータ・ルールの実行時に、ソースからターゲットにデータを変換する場合に使用される一時データ表(tdataseg_t)に直接データを抽出します。

ユニバーサル・データ・アダプタ機能を実装するもう 1 つのステップとして、ソース表から ODI を介して FDMEE にデータが移入される方法を指示する定義を作成します。

ソース・アダプタでは、FDMEE は次の 6 つのデータ・ソース用にソース・アダプタをシードおよび設定します。

- Oracle
- MSSQL
- MYSQL
- Teradata
- DB2
- DB2 400
- SAP Hana

ソース・アダプタを作成するには:

1. 「設定」 タブの 「登録」 で、「ソース・アダプタ」 を選択します。
2. 「ソース・アダプタ」 で、「ソース・アダプタ」 サマリー・タスク・バーから 「追加」 をクリックします。
「ソース・アダプタ」 サマリー・セクションに空白のエントリ行が追加されます。
「ソース・アダプタ」 詳細セクションで次のステップを完了します。
3. 「アダプタ・キー」 に、アダプタのユーザー定義の識別子を入力します。
4. 「アダプタ名」 に、アダプタのユーザー定義の名前を入力します。
5. 「ソース・システム・タイプ」 で、テクノロジー・タイプを選択します。

使用可能なオプション:

- Oracle
- MSSQL
- MYSQL
- Teradata
- DB2 UDB
- DB2 400
- SAP Hana

ソース・システム・タイプに基づいて、次のフィールドに自動的に移入されます。

- ODI パッケージ名
 - ODI プロジェクト・コード
6. 「表名」 で、ソースの表名を指定します。
 7. 「保存」 をクリックします。

ソース列の追加

ソース列を追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ソース・アダプタ」を選択します。
2. ユニバーサル・データ・アダプタを選択します。
3. 「表定義のインポート」をクリックして、列の詳細のすべてをソース表から戻します。
4. 「コンテキスト・コード」で、コンテキストを指定し、「OK」をクリックします。

ODI コンテキスト・コードは、Oracle Data Integrator に定義されているコンテキストを参照します。コンテキストはソースおよびターゲットの接続情報をグループ化します。

コンテキストが選択されると、「ソース列」タブにソース表のすべての列が表示されます。

5. オプション: 「列名」に、ソース列名を入力します。

デフォルトでは、ステップ3の「表定義のインポート」を選択した場合、「列名」に自動的に移入されます。

ユニバーサル・データ・アダプタのソースとしてビューを使用する場合、選択したテクノロジーの予約語である列名を含めないでください。たとえば、「Year」という語は、Teradataの予約語であり、ビューでは使用できません。

6. 列タイプに基づいて、「分類」で分類を選択します。

たとえば、次を選択します:

- 金額
- 年
- 期間
- 期間番号

7. オプション: 「表示名」に、インポート・フォーマットに使用する表示名を入力します。

デフォルトでは、ステップ3(「表定義のインポート」)を選択した場合、「表示名」に自動的に移入されます。通常は、列の機能名です。

パラメータの定義

「パラメータ」タブを使用して、ユニバーサル・データ・アダプタ用のパラメータ(フィルタ)のリストを指定します。パラメータ定義には、変換されていないパラメータ名と変換済プロンプトが含まれます。プロンプトは、データ・ルール・ページでの表示に使用されます。

パラメータを追加するには:

1. 「設定」タブの「登録」で、「ソース・アダプタ」を選択します。
2. ユニバーサル・データ・アダプタを選択します。
3. 詳細セクションで「パラメータ」タブを選択します。
4. 「パラメータ」タスク・バーで、「追加」を選択します。

「パラメータ名」、「パラメータ・データ・タイプ」、「条件」、「列名」、「デフォルト値」および「パラメータ・プロンプト」用のエントリ・フィールドが表示されます。

5. 「パラメータ名」に、パラメータ名を入力します。

たとえば、`p_actual_flag` と入力します。これは、ODI プロジェクトでのパラメータ名です。

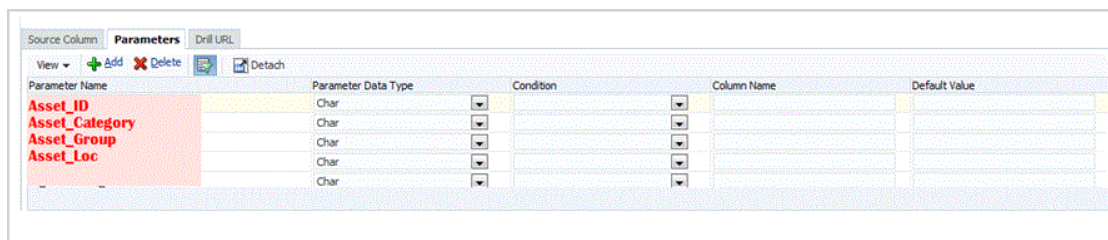
6. 「**パラメータ・データ・タイプ**」で、パラメータのデータ型を選択します
使用可能なデータ型:
 - 文字
 - 数値
 - 日付
7. 「**条件**」で、パラメータのタイプを指定します。
 - **明示** - 「データ・ルール」に明示的な値を入力するように要求されます。この値がソース表で正確に照合され、データが抽出されます。
 - **範囲** - 「データ・ルール」に範囲値を入力するように要求されます。この範囲の値がソース表で照合され、データが抽出されます。
含む - このタイプが選択されている場合、「データ・ルール」に複数の値を入力するように要求されます。それらの値がソース表で照合され、データが抽出されます。
 - **類似** - 「データ・ルール」に文字列を入力するように要求されます。その文字列で始まる値がソース表で照合され、データが抽出されます。
8. 「**列名**」に、フィルタとして使用するソース列名を入力します。
9. 「**デフォルト値**」に、「データ・ロード・ルール」画面でのデフォルト値を入力します。
「明示」値を入力する場合は、X、XX、XXX 形式を使用します。
「範囲」値を入力するときは、X および XX 形式を使用します。
10. 「**パラメータ・プロンプト**」に、「データ・ルール」画面でパラメータに表示されるラベルを入力します。
新規のパラメータが追加され、多言語環境にいる場合、ブラウザのロケールを適切な言語に設定し、必要に応じてその言語でプロンプトを編集します。
11. 「**保存**」をクリックします。
12. 「**テンプレート・パッケージの生成**」をクリックします。

この例は、固定資産データ表の一般的な構造を示しています:

Column Name	Data Type	Column Description
Asset_ID	Varchar	Asset Identification Code
Asset_Name	Varchar	Asset Name
Asset_Category	Varchar	Asset Category
Asset_Group	Varchar	Asset Group
Asset_PD	Date	Asset Purchase Date
Asset_ID	Date	Asset Inception Date
Asset_RD	Date	Asset Retirement Date
Asset_OC	Number	Asset Original Cost
Asset_AC	Number	Asset Additional Cost
Asset_RC	Number	Asset Retirement Value
Asset_AD	Number	Accumulated Depreciation
Asset_BV	Number	Asset Book Value
Asset_Location	Varchar	Asset Location

固定資産表のデータ構造では、黄色でマークした列をパラメータとして追加してデータ・ルールでフィルタとして使用できます。

前述の表を使用する「ソース・アダプタ」画面で、次のようにパラメータを作成できます：



ドリル・スルー用 URL の定義

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、ドリル・スルーで URL を使用するためのフレームワークを提供します。金額セル内のハイパー・リンクをクリックすると、ソース・システムが新規の EPM Workspace タブまたは新規ウィンドウ内に起動します。インポート・フォーマット・マッピングに基づいてソース・システムで様々なページにドリルするために、複数のドリル・スルー URL が提供されます。

ドリル・スルー URL を追加するには:

1. 「設定」 タブの 「登録」 で、「ソース・アダプタ」 を選択します。
2. 「ソース・アダプタ」 で、「ドリル URL」 タブを選択します。
3. 「ドリル URL」 タスク・バーで、「追加」 を選択します。

「ドリル URL 名」、「ドリル URL」、「要求方法」 および 「ドリル URL プロンプト」 のエントリ・フィールドが表示されます。

4. 「ドリル URL 名」 に、ドリル・スルー URL のユーザー定義名を入力します。
5. 「ドリル URL」 に、ドリル・スルーに使用される URL を入力します。

サーバーおよびポート情報のない URL を入力します。URL には、\$記号で囲まれた TDATASEG 表のパラメータ名および列名が含まれている必要があります。

たとえば、LEDGER_ID=\$ATTR1\$&GL_PERIOD=\$ATTR2\$を入力します。

前述の例では、ATTR1 の値は LEDGER_ID パラメータの値として渡され、ATTR2 は GL_PERIOD パラメータの値として渡されます。パラメータは&記号で区切られます。

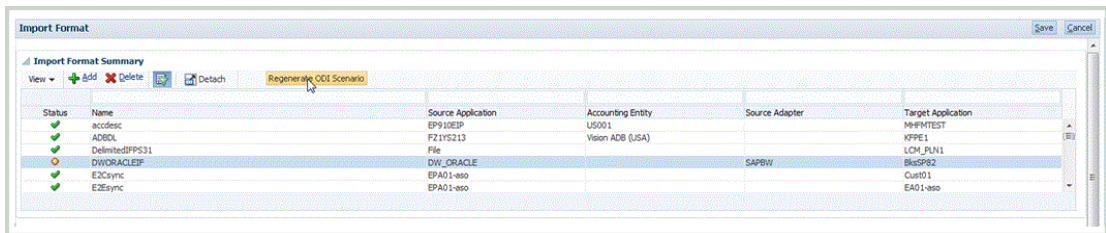
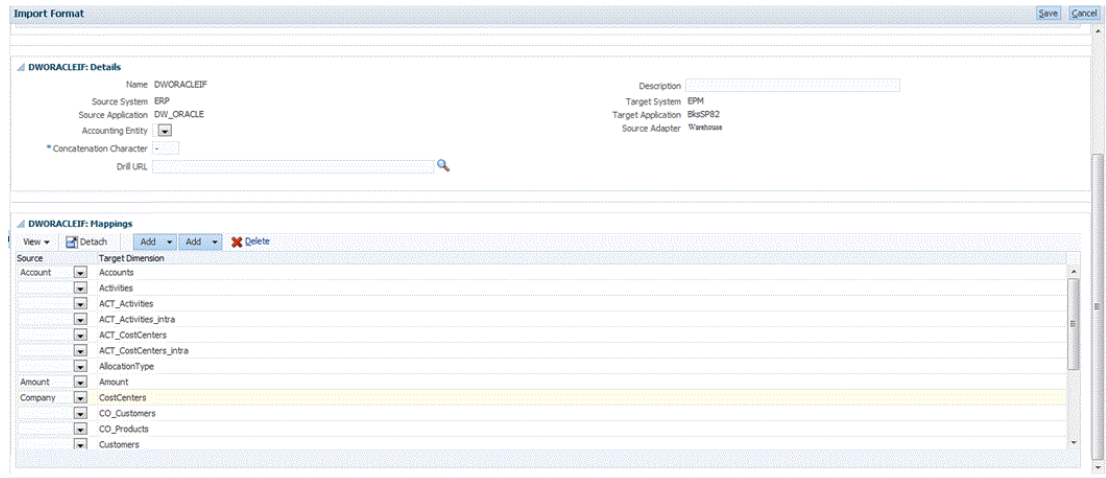
ドリル URL のフォーマットでクライアントとサーバー間の request-response を指定するには、次のいずれかを入力します。

- Get - フォーム・データは URL にエンコードされます。たとえば、GET@http://www.oracle.com/と指定します。方法が指定されない場合、GET が request-response とみなされます。
 - Post - メッセージ本文にフォーム・データが表示されます。たとえば、POST@http://www.oracle.com/と指定します。
6. 「ドリル URL プロンプト」 に、ドリルスルー・プロンプト用のユーザー定義プロンプトを入力します。

たとえば、Default と入力します。

ユニバーサル・データ・アダプタのソース・システムとインポート・フォーマット

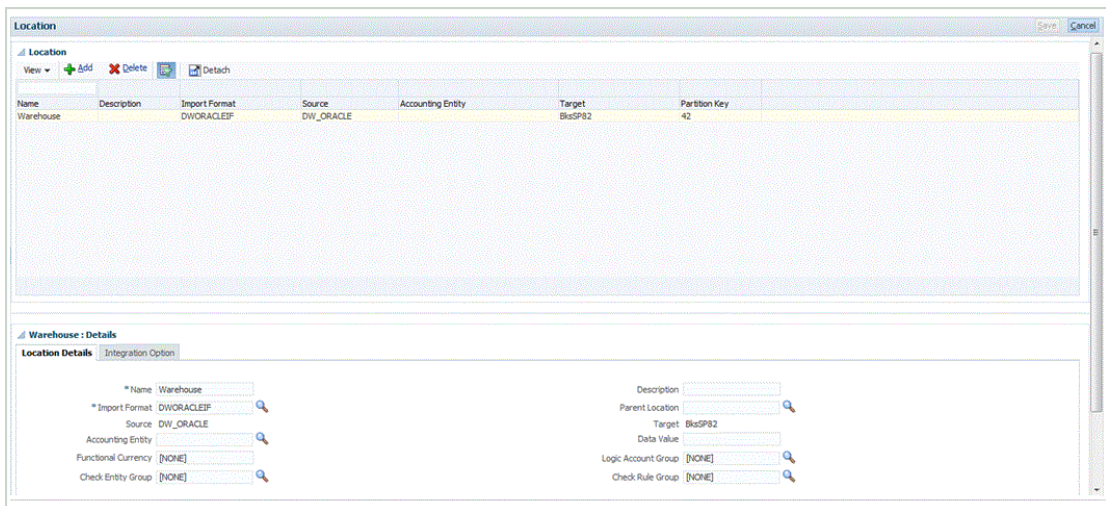
インポート・フォーマットでは、ソース・システムとターゲット・アプリケーションをマップし、ソース列とターゲット・ディメンションをマップできます。インポート・フォーマットの作成または変更後に、「ODI シナリオの再生成」をクリックします。



ユニバーサル・データ・アダプタ・ソース・システムとロケーション

ユニバーサル・データ・アダプタ・ソース・システムを使用する場合、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ロケーションで追加のステップは不要です。

ロケーションは通常、ユニバーサル・データ・アダプタ用に作成済のインポート・フォーマットをサポートします。



ユニバーサル・データ・アダプタ関連ソースのためのデータ・ロード・マッピング

指定されたディメンションのデータ・ロード・マッピングは、ファイルやその他のソース・システムと似ています。

ユニバーサル・データ・アダプタ関連ソースのためのデータ・ロード・ルール

データ・ロード・ルールを必要に応じて実行し、ソース・アプリケーションからターゲット・アプリケーションに残高をロードできます。

ソース・アダプタのパラメータ

「ソース・アダプタ」ページで定義されたパラメータは、ユーザーがデータ・ロード・マッピング・ルールで選択できます:

The screenshot shows the 'Source Adapter Details' page. It includes fields for Adapter Key (LDAORGL_1), Source System Type (Oracle Data Source), ODI Package Name (LDAORGL_1), Adapter Name (LDAORGL_1), Table Name (ORDERS), and ODI Project Code (APP_ORACLE). Below this is a 'Parameters' table with columns: Parameter Name, Parameter Data Type, Condition, Column Name, Default Value, and Parameter Prompt.

Parameter Name	Parameter Data Type	Condition	Column Name	Default Value	Parameter Prompt
City	Char	Explicit	City Name	New Delhi	Enter the City
Region	Char	Explicit	Region Name	North	Enter the Region

カテゴリ・マッピング

様々なターゲット・シナリオのディメンション・メンバーに基づいてカテゴリを作成できます。

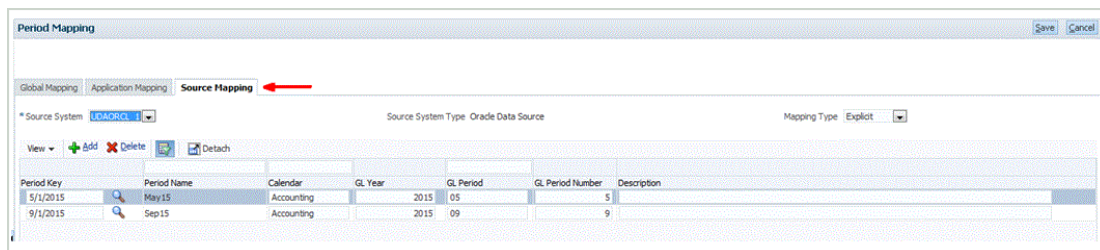
これを行うには、シナリオ・メンバーを割り当てて必要なカテゴリを作成します。これらのカテゴリは、データ・ルールの作成時に取得されます。

The screenshot shows the 'Category Mapping' dialog box. It has tabs for 'Global Mapping' and 'Application Mapping'. Below is a table with columns: Category Key, Category, Description, Frequency, and Target Category.

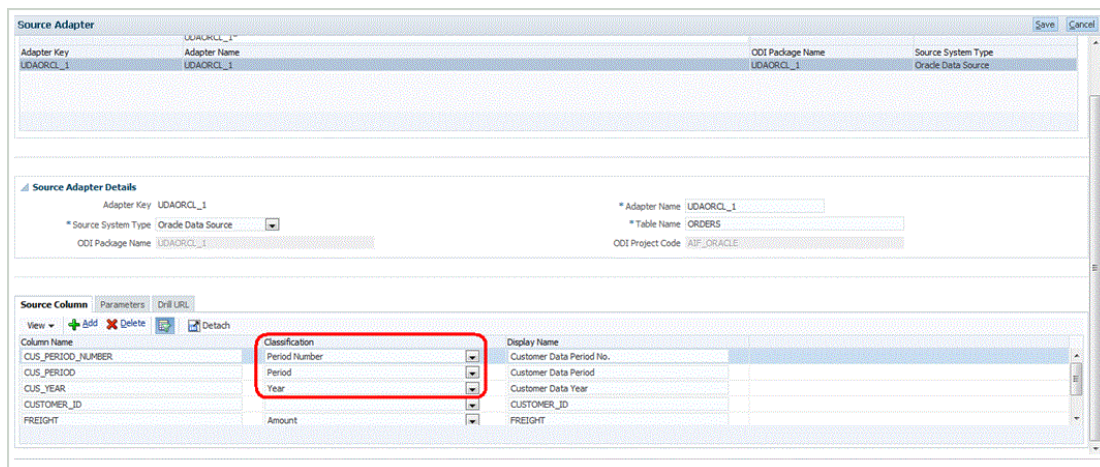
Category Key	Category	Description	Frequency	Target Category
1	Actual	Actual	Monthly	Actual
2	Budget		Monthly	Budget
3	Curr-QTR	QTR	Quarterly	Current
4	Current		Monthly	Current
5	Plan		Monthly	Plan
6	Plan_Act		Monthly	Actual

期間マッピング

「ソース・マッピング」タブで、ユニバーサル・データ・アダプタのソース・システムを選択し、必要に応じてマッピングを指定します。次の例では、「GL 年」、「GL 期間」および「GL 期間番号」が、それぞれ「年」、「期間番号」、「期間」として分類されたソース列と照合されます。



「GL 年」、「GL 期間」および「GL 期間番号」の各列は、次に示すように「ソース・アダプタ」画面でソース表の列の分類されたフィールドにマップされています。

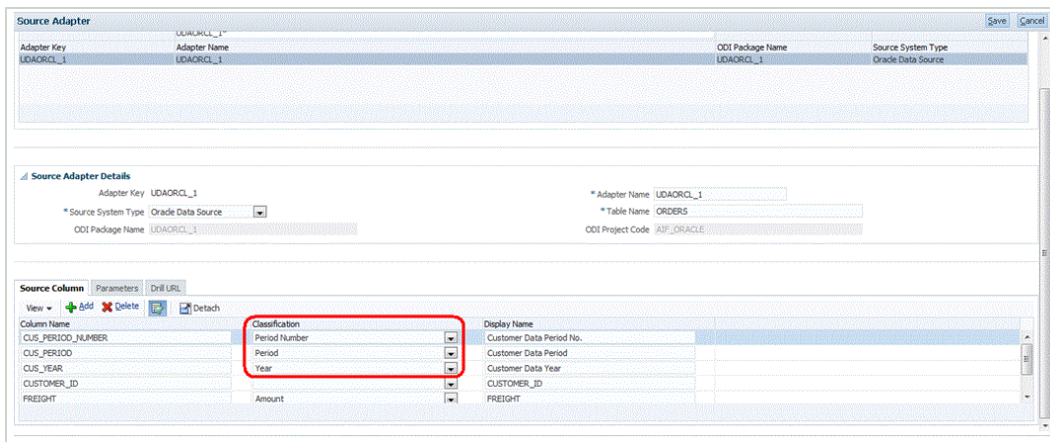


複数期間

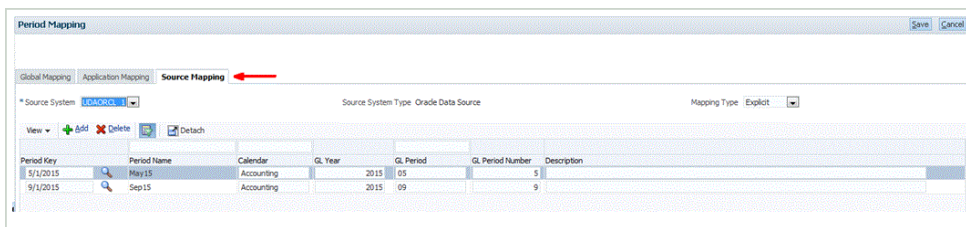
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、外部表/ビュー・データの複数期間データ・ロードをサポートしています。

外部表/ビュー・データの複数期間データ・ロードを設定するには:

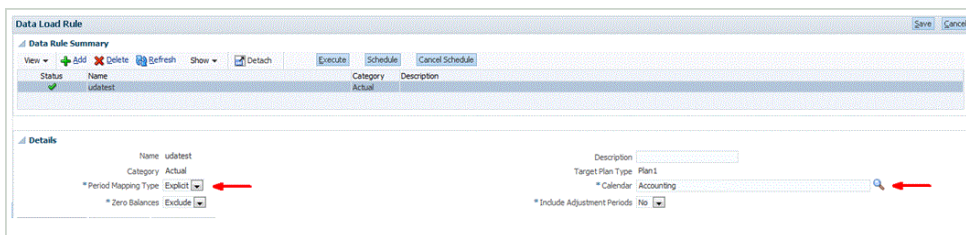
1. 「ソース・アダプタ」画面で、「年」、「期間」および「期間番号」のソース列を分類します。



2. 「期間マッピング」画面で、ソース・マッピングを定義します。
詳細は、[期間マッピングの定義](#)を参照してください。

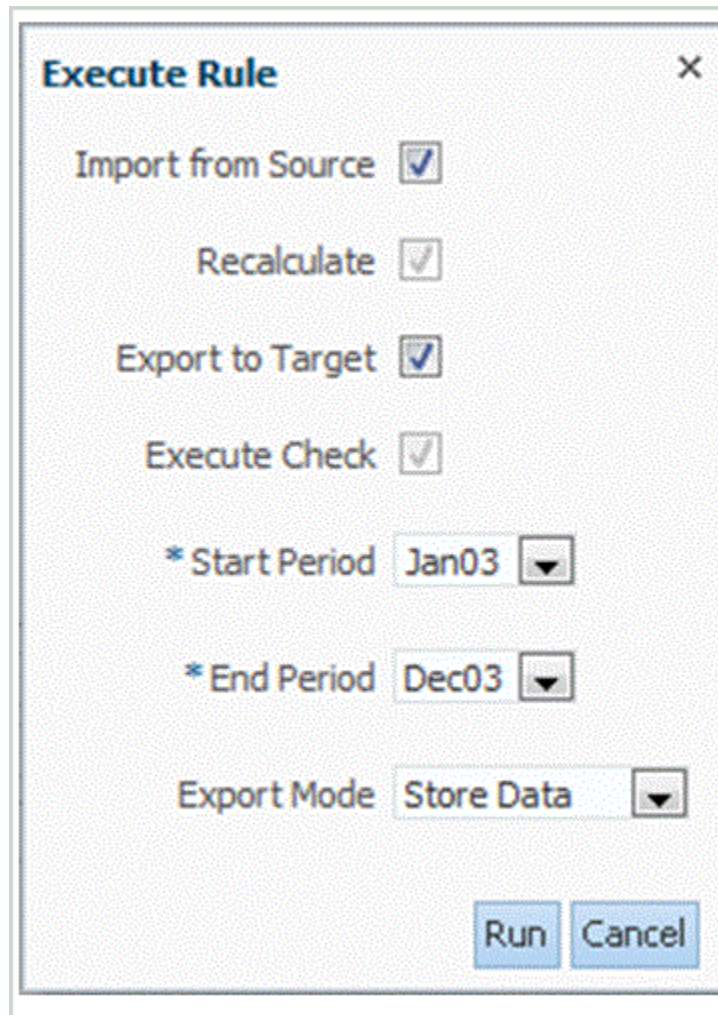


3. 「データ・ロード・ルール」で、「期間マッピング・タイプ」から「明示」を選択します
4. 「カレンダー」で、「ソース期間マッピング」画面で指定したカレンダーを選択します。



例 3-1 データ・ロード・ルールの実行

データ・ロード・ルールを実行する場合は、期間の範囲を指定します。



Data Relationship Management と FDMEE の統合

Oracle Data Relationship Management は、エンタープライズ内を全体的に移動する前にレポート構造を保持、分析および検証するためのハブとして機能します。これは、マスター・データ資産内での整合性を構築および維持するための変更管理ソリューションです。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition と組み合わせて使用すると、次を実行できます:

- ERP システムから Data Relationship Management へのディメンションおよび階層のエクスポート。
- ERP システムと EPM システムの統合のための Data Relationship Management からのデータ・ロード・マッピングのインポート。

統合の設定

Oracle Data Relationship Management と Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の統合はターゲット・アプリケーションで有効化されます。Data Relationship Management 統合が有効な場合は、メタデータを Data Relationship

Management にエクスポートしたり、Data Relationship Management からメンバー・マッピングをインポートできます。

ターゲット・アプリケーションを登録するには:

1. 「設定」 タブの 「登録」 で、「ターゲット・アプリケーション」 を選択します。
2. 「ターゲット・アプリケーション」 サマリー・グリッドの 「ターゲット・アプリケーション」 で、「追加」 をクリックします。
3. ターゲット・アプリケーションを追加するか、ターゲット・アプリケーションを選択します。

ターゲットの追加の詳細は、[ターゲット・アプリケーションの登録](#)を参照してください。

4. 「DRM を使用可能にする」 をクリックします。
5. 「アプリケーション詳細」 から、「DRM オプション」 タブを選択します。

Property Name	Value	Select
API Adapter URL	http://machine:5240/oracle/drm/apiadapter	
Web Service URL	http://machine:28080/oracle-epm-drm-webservices/Dr	
Username	css1	
Password	*****	
Import to DRM Profile (Metadata)	AR_CUSTOM_IP2	
Export from DRM Profile (Mapping)	AR_CUSTOM_Exp2	

6. 「アダプタ API URL」 で、Data Relationship Management API のアダプタ URL を指定します。

アダプタ URL では、Web サービスとの内部通信に使用される Data Relationship Management アプリケーションを指定します。

7. **Web サービス URL** で、Data Relationship Management Web サービスへのアクセスに使用される Web サービスの完全な Data Relationship Management Web Service Definition Language (WSDL)の URL を指定します。

oracle-epm-drm-webservices をデプロイする Web サービス・アプリケーションのマシン・コンピュータ名およびポート番号を入力します。

8. 「ユーザー名」 で、Data Relationship Management にアクセスするために使用するユーザー名を指定します。

9. 「パスワード」 で、Data Relationship Management にアクセスするために使用するパスワードを指定します。

10. **DRM プロファイルのインポート**で、インポート・プロファイルの名前を指定します。

インポート・プロファイルは、Data Relationship Management、インタフェース表、およびフラット・ファイルからディメンションを更新します。インポート・プロファイルを使用すると、マージされたディメンションの更新を共有ライブラリとマージしたり、ディメンションの内容全体を置き換えることもできます。インポート・プロファイルでは、ソースから対応する EPMA プロパティへ列をマッピングできます。

インポート・プロファイルには **FDMEE** ターゲット・アプリケーション名、**IP** アドレス、および **Data Relationship Management** ターゲット・アプリケーション名が含まれます。

インポート・プロファイルはロケーションの統合オプションタブで上書きできます。

インポート・プロファイルは **Data Relationship Management** で構築されます。**Data Relationship Management** にはテンプレート・プロファイルが付属しており、そのままそれを使用するか、カスタマイズできます。テンプレート・プロファイル名は **FDMEE** に保管されます。

11. 「**DRM プロファイルからエクスポート(マッピング)**」で、エクスポート・プロファイルの名前を指定します。

エクスポート・プロファイルを使用して、**Data Relationship Management** からセグメント値と階層をエクスポートできます。エクスポート・プロファイルは、様々なフォーマットでデータを出力するエクスポート・タイプに基づきます。エクスポート・タイプには、階層、比較、統合、バージョン、プロパティおよびログのエクスポートがあります。

DRM エクスポート・プロファイルには、**FDMEE** ターゲット・アプリケーション名、**IP** アドレス、および **Data Relationship Management** ターゲット・アプリケーション名が含まれます。

エクスポート・プロファイルはロケーションの統合オプションタブで上書きできます。

エクスポート・プロファイルは **Data Relationship Management** で構築されます。**Data Relationship Management** にはテンプレート・プロファイルが付属しており、そのままそれを使用するか、カスタマイズできます。テンプレート・プロファイル名は **FDMEE** に保管されます。

12. 「**ターゲット・アプリケーション**」で、「**保存**」をクリックします。
13. 「**DRM プロファイルのリフレッシュ**」をクリックして、インポート・プロファイル、エクスポート・プロファイルおよびドメインのリストを値リストに表示します。
14. ディメンション詳細を定義します。

[アプリケーションのディメンションの詳細の定義](#)を参照してください。

Data Relationship Management および **FDMEE** のロケーション

デフォルトでは、**Oracle Data Relationship Management** のインポート・プロファイルとエクスポート・プロファイルはアプリケーション・レベルで定義されます。**Data Relationship Management** データのインポートまたはエクスポート元のソース・システムが複数ある場合は、アプリケーション・レベルではなく、ロケーション・レベルでインポート・プロファイルまたはエクスポート・プロファイルを選択できます。これによって、選択したソース・システム(**EBS** または **PeopleSoft** など)からのソース値に対するエクスポート・マッピングのみが行われるように、**Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** ロケーションのコンテキストを指定できます。異なる **Data Relationship Management** インポート・プロファイルおよびエクスポート・プロファイルを「ロケーション」オプションの「統合オプション」タブで選択できます。

Data Relationship Management と **FDMEE** のメタデータ・ルール


ディメンションを **Data Relationship Management** にインポートして、プロパティを編集したり、ディメンションを管理できます。この情報は **Data Relationship Management** から他の **EPM** アプリケーションにエクスポートできます。ディメンションは、**Oracle Data Relationship Management** インポート・プロファイルを使用して **Data Relationship Management** 内の階層にマッピングされます。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、ERP システムから Data Relationship Management へのディメンションと階層のロードをサポートします。メタデータ・ロードの重要事項は次のとおりです:

- ディメンションごとに Data Relationship Management ドメインを指定する必要があります。このドメインは、Data Relationship Management の統合がターゲット・アプリケーションで有効になっている場合に必要です。LOV から、適切な DRM ドメインを選択します。
- ディメンション名はターゲット・ディメンションの名前です。
FDMEET では発効日を使用して階層バージョンを決定します。
- Data Relationship Management は複数の階層をサポートするため、FDMEET ではバージョンを親メンバーに連結しません。

Data Relationship Management のメタデータ・ルールを作成するには:

1. 「ワークフロー」タブの「メタデータ」で、「メタデータ・ルール」を選択します。

 **ノート:**

各ターゲット・アプリケーションの同じ元帳またはビジネス・ユニットに対して、複数のメタデータ・ルールを作成することはできません。

2. 「POV」バーからメタデータ・ルールに使用する場所を選択します。
3. 「追加」をクリックします。
ディメンション・マッピングのサマリー・グリッドの上部に空白行が表示されます。
4. 「統合オプション」の「マッピング」の詳細領域で、「ディメンション」からディメンションを選択します。
インポート・フォーマットに基づいてディメンションが一覧表示されます。
ディメンションを選択すると、「ディメンションの分類」フィールドが事前に入力されます。
5. 「DRM ドメイン」で、ドメイン名を選択します。
ドメインは管理者によって作成され、データ・マネージャ・ユーザー役割またはバージョン所有者によってバージョンに関連付けられます。
ドメインの例としては、勘定科目、エンティティ、部門、製品、従業員およびプロジェクトなどがあります。
6. 選択したディメンションごとにマッピングの詳細を定義します。
7. ディメンションごとにステップ 4 から 6 を繰り返します。
8. 「保存」をクリックします。

Mapping Details

Dimension Entity (Product-Entity) Dimension Classification Entity

Prefix/Suffix Type Prefix/Suffix Value

Concatenate Name to Alias

DRM Domain

Location **NK_DRM_PSFT** Period **Feb-33** Category **Actual** Source **PSFT APP1** Target **NKPLAN1**

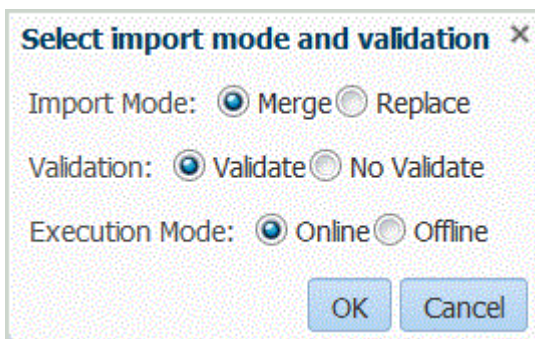
Data Relationship Management からのデータ・ロード・マッピングのインポート

Oracle Data Relationship Management からメンバー・マッピングをインポートできます。Data Relationship Management からのメンバー・マッピングのインポートでは、ターゲット・メンバーに対する検証または検証なしオプションとともに、マージ・モードまたは置換モードもサポートします。

マッピングが検証されてインポートされると、インポートされたマップが「データ・ロード・マッピング」画面に表示されます。

Data Relationship Management からメンバー・マッピングをインポートするには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. 「インポート」オプションから、「DRM からのインポート」を選択します。
3. 「インポート・モード」から、インポート・モードを選択します:
 - マージ - アプリケーション内のデータをデータ・ロード・ファイル内のデータで上書きします。
 - 置換 - データ・ロード・ファイルのディメンションの値をクリアし、既存ファイルの値で置換します。



Select import mode and validation

Import Mode: Merge Replace

Validation: Validate No Validate

Execution Mode: Online Offline

OK Cancel

4. 「検証」から、メンバー・マッピングを検証することを選択します。
検証によって、インポート済 GL 内のすべてのデータに、対応するマッピングがあるか確認します。
5. 「実行モード」で、インポートを実行するモードを選択します:
 - オンライン - インポートを即時に処理します。

- オフライン - インポートをバックグラウンドで実行します。
6. 「OK」をクリックします。
- 「DRM からのマップのインポートが正常に発行されました。」というメッセージが表示されます。
- DRM からのインポート・プロセスが正常に完了すると、データ・ロード・マッピングを編集および更新できます。
- 「プロセスの詳細」を使用してインポートのステータスを確認できます。

Financial Close Management と FDMEE との統合

全体の Financial Close プロセスの一部として、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition により、Enterprise Resource Planning (ERP)システムおよびファイルから EPM アプリケーションへのデータ・ロードを実行できます。

Oracle Hyperion Financial Close Management では期末決算処理を管理し、Financial Close Management 内からデータ・ロード・アクティビティを開始します。決算プロセスには期限があり、ワークフロー主導のため、Financial Close Management ユーザーは、タスク・アラートおよび通知に基づいてプロセスをトリガーします。

FDMEE と Financial Close Management の統合は、対話モードを使用して実現されます。この種の統合では、Financial Close Management ユーザーは Financial Close Management のタスク・リンク(URL)をクリックして FDMEE のデータ・ロード・ワークベンチにアクセスできます。

このシナリオでは、ユーザーがデータのロード・タスクの電子メール通知に回答できません。ユーザーがメールのリンク(URL)をクリックすると、データのロード元の FDMEE にアクセスできます。

Financial Close Management ユーザーは、データ・ロード・ワークベンチに制御を移して、対話型でルールの実行プロセスを続行できます。

リンク(URL)の例は次のとおりです。

```
http://<YourServer>:19000/workspace/index.jsp?  
module=aif.launch&povLocationName=COMMA7DIM&povPeriodName=Jan-05&povCategoryName=Actual&povRuleName=COMMA7DIM
```

データ・ロード・ワークベンチに渡されるパラメータは次のとおりです。

- povRuleName - データ・ルール名
- povLocation - ロケーション
- povCategory - カテゴリ
- povPeriodName - 期間

URL を Financial Close Management で定義する場合、次の点に注意してください:

- URL にはすべてのパラメータが必要です。
- パラメータにスペースが含まれている場合、パラメータの前後に引用符("")を指定せずに、空白を含めてパラメータを入力してください。(パラメータは、標準の URL 要求形式で渡されます。)
- URL の区切り記号は"&"です。

データ・ロード、同期およびライトバック

次も参照:

- [概要](#)
- [データの同期およびライトバック](#)

概要

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、様々な財務データ・ソースからデータをインポートし、そのデータを変換して検証するための様々な方法をサポートしています:

- データ・ロード - ソース・システムからターゲット・システムへのマッピングの定義、EPM ターゲット・アプリケーションから ERP ソース・システムへのデータのドリル・スルーと表示、ファイルベースのソース・システムから EPM ターゲット・アプリケーションへのデータのロード、ソース・システムからターゲット・システムへのデータの抽出とプッシュの方法を記述したデータ・ロード・ルールの定義を行います。
- 同期 - アプリケーションのディメンショナリティに関係なく、EPM アプリケーション間でデータを移動しますが、その際に EPM ソース・アプリケーションからデータ・ファイルを作成する必要はありません。
- ライトバック - 予算データをすべての EPM アプリケーションからソース・システムの ERP アプリケーションにライトバックします。この機能を使用すると、Oracle Hyperion Planning で作成された予算の Peoplesoft または Oracle E-Business Suite GL へのライトバックあるいは Oracle Hyperion Financial Management から E-Business Suite や Peoplesoft などの ERP システムへの調整仕訳の移行など、大きな利点があります。予算データは、Planning、Oracle ASO Essbase および Essbase ESO のアプリケーションからファイルベースのソース・システムにもライトバックできます。

データの同期およびライトバック

データ・ルールは、Enterprise Resource Planning (ERP) から EPM アプリケーションへのロード、2つの EPM アプリケーション間でのデータの同期または EPM から ERP システムへのライトバックに対して定義する必要があります。

- EPM アプリケーションから EPM アプリケーション(データの同期) - EPM アプリケーション間でのデータの移動。たとえば、レポート用に Oracle Hyperion Financial Management から Oracle Essbase にデータをコピーします。
- EPM アプリケーションから Enterprise Resource Planning (ERP) アプリケーション(ライトバック) - EPM アプリケーションから ERP アプリケーションへのデータの移動。たとえば、Oracle Hyperion Planning で作成された予算を Peoplesoft または Oracle E-Business Suite ERP GL にライトバックしたり、Financial Management または Accounts Reconciliation Manager から E-Business Suite や Peoplesoft などの ERP システムに調整仕訳を移動します

データの同期

データの同期によって、ソースとターゲットの Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションを選択し、データをマッピングするのみで、アプリケーションのディ

メンショナリティに関係なく、EPM Cloud ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションとの間でデータを同期し、マップすることができます。強力なマッピング機能がすでに使用可能な場合、データはあるアプリケーションから別のアプリケーションに簡単に変換できます。

たとえば、データの同期を使用して次のようにデータを移動します:

- Oracle Hyperion Planning 入力キューブからレポート・キューブへ、
- 実績を Financial Consolidation and Close から Planning のレポート・キューブへ (差異レポートのため)。

データの同期によって使用可能になるタスクは、次のとおりです:

- 同期を作成および変更します。
- ソースおよびアプリケーション・アプリケーションを選択します。
- ソースおよびターゲット間のマッピングを定義します。
- レポート目的のために Oracle Hyperion Financial Management から Oracle Essbase へデータをコピーします。
- 今後のプランニングのために Financial Management から Planning に連結データをコピーします。
- 様々な法定報告書用にある Financial Management アプリケーションから別の Financial Management にコピーします。
- Oracle Enterprise Performance Management System から Enterprise Resource Planning (ERP) アプリケーションにデータを書き込みます。
- 同期を検証します。
- 同期を実行します。
- 同期アクティビティのログを表示します。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でのデータの同期ステップの概要は次のとおりです:

ノート:

同期する EPM アプリケーションがターゲット・アプリケーションとして登録されていることを確認してください。

1. **インポート・フォーマット**—ソースおよびターゲット EPM System アプリケーションを選択します

インポート・フォーマットではディメンション・マッピングも定義されます。同期がすべての関連要素を認識できるように、各ソースおよびターゲット・アプリケーションに対応するディメンションをマップします。

 **ノート:**

FDMEE が年次累計(YTD データ)ではなく期別をロードするようにするには、インポート・フォーマットで"Periodic"値ディメンションをハードコードする必要があります。

2. **ロケーション**—新しいロケーションを作成し、インポート・フォーマットに関連付けます。
3. **データ・ロード・ルール**—ソース・フィルタ・パラメータを定義します。
4. **データ・ロード・マッピング** - ソースからターゲットへのアプリケーション・マッピングを定義します。
5. **実行**—データ・ルールを実行すると、ソース EPM System のデータがファイルに抽出されます。データ・ロード・ワークフロー・プロセスを使用し、データをインポートして処理できます。
6. **エクスポート**—データを同期します。

同期でのデータ・ロード・ルールの使用

データを同期する場合、ソース EPM アプリケーションからターゲット EPM アプリケーションへ抽出するレコード(行)を指定します。

さらに、次のことを実行できます:

- ソース・フィルタ・オプションを指定してディメンションを選択し、各ディメンションにフィルタ条件を入力します。
- ディメンション内で、メンバーを参照して選択します。
- データを単一期間または一定範囲の期間にロードします。
- アプリケーションのターゲット・オプションを追加または変更します。

ターゲットの EPM または Enterprise Resource Planning (ERP)システム(ファイルベースのソース・システム)に対してデータ・ロードの詳細を定義するには:

1. **「名前」** に、データ・ロード・ルール名を入力します。
2. **「カテゴリ」** で、カテゴリを選択します。
リストされているカテゴリは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の設定(「実績」など)で作成したカテゴリです。[カテゴリ・マッピングの定義](#)を参照してください。
3. **オプション:** 説明を入力します。
4. **「プラン・タイプ」** で、プラン・タイプを選択します。
FDMEE では、最大 6 つのプラン・タイプ(カスタムおよび Oracle Hyperion Planning アプリケーションを含む)のデータ・ロードがサポートされます。
5. **「期間マッピング・タイプ」** で、「デフォルト」または「明示」を選択します。
6. **オプション:** ソース・フィルタ・オプションを追加または変更します。
[ソース・フィルタの定義](#)を参照してください。
7. **オプション:** ターゲット・オプションを追加または変更します。

ターゲット・アプリケーションの登録を参照してください。

8. 「保存」をクリックします。

デフォルトまたは明示期間マッピング・タイプの使用

1つの期間または期間の範囲に対するデータ・ルールを実行できます。標準のデータ・ロード・プロセスと同様に、ターゲット・アプリケーションのグローバルまたはアプリケーション期間マッピングが使用されます。

ノート:

期間範囲を指定する場合は、開始および終了期間が単一会計年度内にあることを確認します。データ範囲が会計年度をまたがる場合は、データが重複します。

抽出するソース期間は、期間マッピング・タイプによって決定されます。

デフォルトの期間マッピング

デフォルトの期間マッピングは、期間キーに基づくアプリケーションまたはグローバル期間マッピングを使用した、ソース・アプリケーション期間のリストにデフォルト設定されています。ソース期間のリストは、年および期間フィルタとして追加されます。たとえば、Oracle Hyperion Financial Management から Oracle Essbase にロードされたデータをロードできます。

次の例では、期間 Jan-14 から Mar-15 について、Financial Management アプリケーションの期間マッピングが Essbase アプリケーションの期間マッピングにロードされています:

表 3-17 Financial Management アプリケーションの期間マッピング

期間	年	月
1/1/2014	2014	1月
2/1/2014	2014	2月
3/1/2014	2014	3月


表 3-18 Essbase アプリケーションの期間マッピング

期間	年	月
1/1/2014	FY14	1月
2/1/2014	FY14	2月
3/1/2014	FY14	3月

上記の例を使用すると、データがロードされる際に、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は次のようになります:

1. Essbase の期間マッピングを使用して、期間キーのリストを決定します: 1/1/2014、2/1/2014 および 3/1/2014。

2. Financial Management の期間マッピングを決定し、それらを AIF_PROCESS_PERIODS 表に挿入します。

 **ノート:**

ターゲット・アプリケーションの期間(例: 四半期)がソース期間(例: 月別)よりも大きい場合、特定のターゲット Essbase 期間への複数のソース Financial Management 期間マッピングが可能です。

3. 2014 を年フィルタとし、1月、2月、3月を期間フィルタとして追加します。

明示期間マッピング

ソース期間およびターゲット・アプリケーション期間の細分度が異なる場合、明示方法によるデータ・ロードが使用されます。

たとえば、Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションからは月単位、Oracle Hyperion Planning からは四半期単位のデータをロードする必要があります。

次の例では、期間 Jan-14 から Mar-15 について、Financial Management アプリケーションの期間マッピングが Oracle Essbase アプリケーションの期間マッピングにロードされています:

表 3-19 Financial Management アプリケーションの期間マッピング

期間	年	月
1/1/2014	2014	1月
2/1/2014	2014	2月
3/1/2014	2014	3月
4/1/2014	2014	4月
5/1/2014	2014	5月
6/1/2014	2014	6月

表 3-20 Planning アプリケーションの期間マッピング

期間	年	月
1/1/2014	FY14	Q1
4/1/2014	FY14	Q2

このマッピング方法の結果:

表 3-21 Result of loading Financial Management アプリケーションの期間マッピングから Planning アプリケーションの期間マッピングへのロードの結果

期間	年	月	会計年度	四半期
1/1/2014	2014	1月	FY14	Q1
2/1/2014	2014	2月	FY14	Q1
3/1/2014	2014	3月	FY14	Q1
4/1/2014	2014	4月	FY14	Q2

表 3-21 (続き) Result of loading Financial Management アプリケーションの期間マッピングから Planning アプリケーションの期間マッピングへのロードの結果

期間	年	月	会計年度	四半期
5/1/2014	2014	5 月	FY14	Q2
6/1/2014	2014	6 月	FY14	Q2

上記の例を使用すると、データがロードされる際に、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は次のようになります:


1. 期間キー(1/1/2014、4/1/2014)を判別します。
2. これらの期間キーに Financial Management から Financial Management への期間マッピングを判別します。
このマッピングは年: 2014 および期間: 1 月、2 月、3 月、4 月、5 月、6 月を返します
3. 年と期間をソース・フィルタとして追加します。

ソース・フィルタの定義

ソース・フィルタを使用すると、ディメンションを選択して、各ディメンションのフィルタ条件を入力できます。

ソース・フィルタ・オプションを定義して、Oracle Hyperion Planning アプリケーションから抽出して一般会計にロードする予算データのサブセットを指定できます。


EPM ソース・フィルタ・オプションを定義するには:

1. 「ソース・フィルタ」で、 をクリックします。
2. 「ディメンション名」を選択します。
3. フィルタ条件を割り当てるには、次の操作を実行します:
 - フィルタ条件テキスト・ボックスに、メンバー名またはフィルタ条件を入力します。

たとえば、Oracle Essbase 構文を使用してメンバー名またはフィルタ条件を入力します。ディメンションによっては、予算データの抽出に使用するフィルタ条件として 1 つ以上のメンバーを選択できます。たとえば、エンティティ・ディメンションでは、E1、E5 および E6 の各メンバーを選択できます。Essbase 構文の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

 ノート:

代替階層全体で Essbase ソース・ディメンションがメンバーを共有する場合は、ソース・フィルタを使用して重複を削除する必要があります。たとえば、親メンバー Alt_Hier_1 および Alt_Hier_2 が先頭の平行階層全体で、「勘定科目」ディメンションがメンバーを共有する場合は、「勘定科目」に対して次のソース・フィルタ関数を使用して重複を削除する必要があります：
@Lvl0Descendants("Alt_Hier_2")

-  をクリックしてメンバー選択画面を表示し、メンバー・セレクタを使用してメンバーを選択します。次に、「OK」をクリックします。

「メンバー・セレクタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。メンバー・セレクタを使用すると、ディメンション内のメンバーを表示して選択できます。[+]および[-]を使用すると、ディメンション内のメンバーを展開および縮小できます。

「選択」ダイアログ・ボックスには、2つのペインがあり、ディメンションのすべてのメンバーが左側に表示され、選択内容が右側に表示されます。そのディメンションで使用可能なすべてのメンバーが表示される左ペインには、メンバー名および簡単な説明が表示されます(使用可能な場合)。選択内容が表示される右ペインには、メンバー名および選択タイプが表示されます。




それぞれのペインの上の「V」ボタンを使用して、メンバー・セレクタの列を変更できます。

「メンバーのリフレッシュ」をクリックして、最新のメンバー・リストを表示することもできます。

 ノート:

ディメンションにフィルタを割り当てます。フィルタを割り当てないと、サマリー・メンバーから番号も取得されます。


メンバー・セレクタを使用するには:

- 左側の使用可能なディメンションおよびメンバーのリストで、メンバーを選択して  をクリックします。
- メンバーのリストからメンバーの選択を解除するには、 をクリックします。
- メンバーに特殊なオプションを追加するには、 をクリックして、オプションを選択します。

メンバー・オプションで、「(含む)」は選択したメンバーを含むことを意味します。たとえば、「子(含む)」は選択したメンバーを含むメンバーのすべての子を追加し、「子孫(含む)」は選択したメンバーを含むすべての子孫を追加します。「子」を選択した場合、選択したメンバーは含まれず、その子のみが含まれます。

そのメンバーは右側に移動され、「選択のタイプ」列には選択したオプションが表示されます。たとえば、「選択のタイプ」列に「子孫」が表示されます。

 **ヒント:**

選択したリストのすべてのメンバーをクリアするには、 をクリックします。

d. 「OK」を2回クリックして、ソース・フィルタ詳細の定義を続行します。

選択したメンバーは、Essbase 構文で「フィルタ条件」フィールドに表示されます。

4. 「保存」をクリックします。

5. **オプション:** ターゲット・オプションを変更または追加します。




ターゲット・オプションの定義

ターゲット・オプションは、仕訳のインポート・オプションを定義します。

 **ノート:**

ライト・バックのためのデータ・ロード・ルール of 必須ターゲット・オプションの詳細は、[Essbase および Planning のアプリケーション・オプションの定義](#)を参照してください。

ターゲットの Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システム・オプション定義するには:

1. E-Business Suite ソース・システムの場合:
 - a. 予算仕訳を作成するかどうかを選択します。
 - b. 「**予算**」に値を入力するか、 をクリックして予算を選択します。
 - c. 「**予算組織**」に値を入力するか、 をクリックして予算組織を選択します。
2. 「**保存**」をクリックします。
3. PeopleSoft Enterprise Financial Management ソース・システムの場合、次を入力するか  をクリックして選択します:
 - a. **予算シナリオ**
 - b. **元帳グループ**
 - c. **元帳**
4. 「**保存**」をクリックします。
5. データ・ロードのルールを実行します。

データの同期の実行

データ同期は、データ・ロード・ルール画面で「**実行**」をクリックして実行します。データ・ロード・ルールを実行すると、データ・ルールで指定されたフィルタ条件に基づいて Oracle Enterprise Performance Management System アプリケーションからデータが抽出されます。抽出されたデータはデータ・ファイルに書き込まれます。ソース・フィルタで複数の期間が指定されている場合、金額列が複数列として書き込まれます。データ・ファイルには、ヘッダー・レコードと、ファイルに表示される順序でのディメンション・リストが含まれます。ファイルは、データ・フォルダ内に *EPM App Name_PROCESS_ID.dat* という名前で作成されます。

ノート:

データ・ロード・ルールが複数期間に対して実行される場合、エクスポート・ステップは全期間で 1 回のみ発生します。

データのインポート

データ・インポート・プロセスでは、抽出プロセスで作成されたデータ・ファイルをインポートします。インポート・プロセスでは、ファイル内のヘッダー・レコードおよびソースからターゲット・ディメンションのマッピングに基づいてインポート・フォーマットが評価されます。

列の数と順序が特定されると、列の位置がインポート・フォーマット表に格納されます。ファイル・インポート式およびスクリプトはインポート中に引き続き使用できます。

マッピングおよびエクスポート

マッピングおよびエクスポート時に、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では次が実行されます:

- データを Oracle Hyperion Planning からインポートし、FDMEE ステージング表に書き込みます。
- ステージング表で必要な変換を適用します。
- データを Planning からインポートし、FDMEE ステージング表に書き込みます。
- ステージング表で必要な変換を適用します。
- データを FDMEE ステージング表から一般会計インタフェース表にエクスポートします。仕訳インポート表のデータのフォーマットにはマッピングを使用します。
- Oracle Hyperion Financial Management の場合、FDMEE はデータおよび ICP トランザクションを抽出します。FDMEE は、セル・テキストまたはライン・アイテム詳細を抽出しません。

データのライトバックに使用するデータ・ロード・ルールが正常に実行された後、一般会計ソース・システムにログインし、一般会計で予算のインポート・プロセスを実行します。

ソースへのドリルスルー

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition には、Oracle Enterprise Performance Management System アプリケーションから EPM System ソースの

一般会計に戻ってドリル・スルーするフレームワークが用意されています。ドリルスルーは、FDMEE を介してロードされたデータにのみ使用できます。

たとえば、データが Oracle E-Business Suite からロードされた場所から Oracle Hyperion Financial Management へドリル・スルーされた後、Financial Management から Oracle Essbase へドリル・スルーできます。Oracle Smart View for Office で Essbase データを表示している場合、Essbase データ・セルからドリルして FDMEE ランディング・ページに移動できます。

ライトバック

多くの場合、財務予算情報は実績と比較して管理し、一般会計システムに保管する必要があります。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、データ・ロード・プロセスのエクスポート・ステップでライトバック機能を使用できます。この方法では、Oracle Hyperion Planning アプリケーションへのロードと一般会計へのライトバックの両方が、1つの一貫したプロセスとして実行されます。

ライトバック用のデータ・ロード・ルール

Oracle Hyperion Planning で作成された予算を、ERP 一般会計またはフラット・ファイルにライトバックできます。ライトバック機能は、データ・ロード・プロセスのエクスポート・ステップで使用できます。この方法では、Planning アプリケーションへのロードと一般会計へのライトバックの両方が、1つの一貫したプロセスとして実行されます。

アップグレードされたライトバック・ルールに割り当てられたカテゴリはランダムに割り当てられ、ルールの機能において役割を果たしません。ユーザーは、適切なソース・フィルタも割り当てる必要があります。アップグレードされたルールを表示するには、「すべてのカテゴリの表示」を選択します(これにより、「非表示の」ルールが表示される場合があります)。

Oracle E-Business Suite の場合、次の条件で、ライトバックに対するデータ・ロードに複数の元帳を使用できます：

- 元帳は、同じ勘定体系を共有する必要があります。
- 「実績」は複数の元帳に転記できます。
- 「予算」は 1つの元帳に関連付けられています。1つの元帳は 1つのデータ・ロード・ルールからのみ転記できます。

Peoplesoft では、「実績」は予算シナリオを指定せずに転記できます。また、ライトバックを複数のビジネス・ユニットに対して行うことができます。

使用可能なソースからターゲットへのライトバック

ライトバックの対象となるターゲット・システムは、一般会計の勘定体系と一致するディメンションを使用するファイルベース・アプリケーションである必要があります。カスタム・ターゲット・アプリケーション機能を使用して、ファイルベース・アプリケーションを作成できます(カスタム・ターゲット・アプリケーションの作成を参照)。アプリケーションを作成するときは、「ファイルへエクスポート」オプションが「はい」になっていることを確認してください。

ライトバックに対するデータ・ロード・ルールは、ソースとしては Oracle Hyperion Planning、Oracle Essbase 集約ストレージ(ASO)および Essbase ブロック・ストレージ

ジ(BSO) 11.1.2.x アプリケーションに対してのみ定義できる他、次のターゲット・ソース・システムに対して定義できます:

- PeopleSoft Enterprise Financial Management
- Oracle E-Business Suite
- Oracle Hyperion Financial Management から Oracle E-Business Suite へ

予算と実績は、Peoplesoft インタフェース表: PS_HPYPB_ACCT_LN にエクスポートできます。Peoplesoft では予算データに対してのみ仕訳の生成プロセスが提供されます。実績データの仕訳を生成するために事前定義されているプロセスはありません。実績データのカスタム仕訳テンプレートを作成する必要があります。

その他の考慮事項:

- ライトバックに対するデータ・ロードは、Planning、Essbase 集約ストレージおよび Essbase ブロック・ストレージ 11.1.2.x アプリケーションに対してのみサポートされます。前のリリースで作成されたアプリケーションはサポートされません。
- BSO Essbase アプリケーションでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で期間ディメンションを「密」に指定する必要があります。他のディメンションも「密」にできますが、ライトバックに対しては期間を密として指定する必要があります。
- E-Business Suite ソース・システムの場合、予算仕訳の有無にかかわらず予算に対して転記できます。
- ソース・アダプタを提供しているソース ERP にライトバックできるのは通貨金額のみです。統計金額またはその他のデータをライトバックする必要がある場合は、スクリプトを使用します。
- FDMEE は、特定のデータ・インタフェース表にデータをロードします。この場合、E-Business Suite または PeopleSoft Enterprise Financial Management によって提供される予算ロード・ルーチンを実行する必要があります。
- ソース金額から複数のターゲット金額への割当てを行うことはできません。
- ライトバックに対するデータ・ロード・ルールは、最初にデータを General Ledger ソースから EPM ターゲットにロードしなくても実行できます。
- 更新されたルールおよびライトバック・ルールに割り当てられたカテゴリはランダムに割り当てられ、ルールの機能において役割を果たしません。更新されたルールを表示するには、すべてのカテゴリの表示を選択します(これにより、"非表示の"ルールが表示される場合があります)。
- 期間範囲を指定する場合は、開始および終了期間が単一会計年度内にあることを確認します。データ範囲が会計年度をまたがる場合は、データが重複します。

この表は、使用可能なソースからターゲットへのライトバックの組合せを示しています。

表 3-22 使用可能なソースからターゲットへのライトバック

ソース	E-Business Suite 予算	E-Business Suite 実績	PeopleSoft 予算	PeopleSoft コミットメント・コントロール	PeopleSoft 実績	SAP	JD Edwards
Planning	追加設定なしで使用可能	追加設定なしで使用可能	追加設定なしで使用可能	追加設定なしで使用可能	カスタム	カスタム・アプリケーションを使用します。	カスタム・アプリケーションを使用します。
Essbase	追加設定なしで使用可能	追加設定なしで使用可能	追加設定なしで使用可能	サポートされていません	カスタム	カスタム・アプリケーションを使用します。	カスタム・アプリケーションを使用します。
Financial Management	追加設定なしで使用可能	追加設定なしで使用可能	追加設定なしで使用可能	サポートされていません	カスタム	カスタム・アプリケーションを使用します。	カスタム・アプリケーションを使用します。
Oracle Hyperion Profitability and Cost Management	追加設定なしで使用可能	追加設定なしで使用可能	追加設定なしで使用可能	サポートされていません	カスタム	カスタム・アプリケーションを使用します。	カスタム・アプリケーションを使用します。
ARM	サポートされています	サポートされています	サポートされています	サポートされています	サポートされています	サポートされています	サポートされています

ライトバックのセキュリティ・アクセス

次のインタフェース表では、ライトバック・プロセスに対するデータ・ロード・ルール用に書き込みセキュリティ権限が必要です。

E-Business Suite

- GL_INTERFACE
- GL_INTERFACE_CONTROL
- GL_BUDGET_INTERFACE

標準の PeopleSoft — PS_HYPYB_ACCT_LN

PeopleSoft コミットメント・コントロール


- PS_HYP_KK_BD_HDR
- PS_HYP_KK_BD_LN

[FDMEE](#) によって使用されるソース・システム表も参照してください。

ライトバック・マッピングの作成

ライトバック・マッピングを作成するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。

2. 「**ロケーション名**」を入力するか、をクリックしてロケーションに移動して選択します。
3. 「**セグメント**」を選択します。
4. 「明示」タブ、「範囲」タブ、マルチ・ディメンション・タブまたは「類似」タブのいずれかを選択して、マッピングのタイプを選択します。
 - **明示** - ソース値との完全一致がターゲット値に置き換えられます。たとえば、ソース値「ABC」がターゲット値「123」に置き換えられます。「明示」ライトバック・マッピングは、データ・ロード・ルールおよびライトバックに対するデータ・ロード・ルールにも同様に作成されます。「[明示](#)方式を使用したマッピングの作成」を参照してください。
 - **範囲** - ソース値の範囲が1つのターゲット値に置き換えられます。たとえば、001 から 010 までの範囲が 999 に置き換えられます。「範囲」ライトバック・マッピングは、データ・ロード・ルールおよびライトバックに対するデータ・ロード・ルールに対しても同様に作成されます。「[範囲](#)方式を使用したマッピングの作成」を参照してください。
 - **含む** - 「含む」マッピングでは、非シーケンシャルなソース値のリストを1つのターゲット値にマッピングできます。この場合、複数の値が1つのルール内で1つの値にマッピングされ、明示マップでは必要な複数のルールを作成する必要がなくなります。
 - **マルチ・ディメンション** - 複数のソース列値に基づいてメンバー・マッピングを定義します。
 - **類似** - ソース値内の文字列との一致がターゲット値に置き換えられます。たとえば、ソース値 Department が Cost Center A に置き換えられます。「[類似](#)方式を使用したマッピングの作成」を参照してください。

ライトバック・マッピングは、データ・ロード・プロセス中に追加された文字の削除またはストリップの方法を提供します。「類似」ライトバック・マッピングは、逆データ・ロードと同様に作成されます。

ヒント:

「**値のリフレッシュ**」をクリックすると、ソース・システムのドロップダウン・リストに表示されるセグメントまたはチャートフィールド値のリストがリフレッシュされます。これは、ライトバックに対するデータ・ロード・ルールに「明示」、「範囲」、「類似」、「マルチ・ディメンション」のマッピングを作成する場合に特に便利です。

ライトバック・シナリオに対するデータ・ロード・ルールの定義(EPM Cloud/Essbase アプリケーションから Oracle Enterprise Resource Planning (ERP)ソースへのデータ)

アプリケーションから一般会計インスタンスおよび元帳ソースに予算データを抽出するときのライトバックに対するデータ・ロード・ルールを作成します。

ライトバックに対するデータ・ロード・ルールは次の方法で作成できます。


- Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションを選択します。

- Oracle Essbase 集約ストレージ(ASO)または Essbase ブロック・ストレージ (BSO)のアプリケーションを選択します。

プロセスの概要:

1. Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、EPM Cloud からデータをインポートし、FDMEET ステージング表に書き込みます。
2. FDMEET では、ステージング表で必要な変換が適用されます。
3. データは、FDMEET ステージング表からファイルベース・アプリケーションにエクスポートされます。
4. ライトバックに対するデータ・ロード・ルールの実行が正常に完了したら、データ・ロード・ワークベンチを使用して EPM Cloud アプリケーションからファイルへの残高転送の結果を確認します。


ライトバックに対するデータ・ロード・ルールを定義するには:

1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. 「ロケーション名」を選択するか、 をクリックしてロケーション名を選択します。
3. 「追加」をクリックして、ライトバックに対するデータ・ロード・ルールを追加します。
4. 名前を入力します。
5. EPM Cloud アプリケーションの場合: 「プラン・タイプ」を選択します。
FDMEET では、最大 6 つのプラン・タイプ(カスタムおよび EPM Cloud アプリケーションを含む)のデータ・ロードがサポートされます。
6. オプション: 説明を入力します。
7. 「保存」をクリックします。
8. ソースおよびターゲットのオプションを定義します。

ソース・フィルタ・オプションの定義

ソース・フィルタ・オプションを定義して、Oracle Hyperion Planning アプリケーションから抽出して一般会計にロードする予算データのサブセットを指定できます。

ソース・フィルタ・オプションを定義するには:


1. 「ワークフロー」タブの「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
2. データ・ロードのサマリーで、データ・ロード・ルールを選択します。
3. 「ソース・オプション」タブを選択します。
4. 「ソース・フィルタ」領域で  をクリックします。
5. 「ディメンション名」を選択します。
6. フィルタ条件を割り当てるには、次の操作を実行します:

- フィルタ条件テキスト・ボックスに、メンバー名またはフィルタ条件を入力します。選択の構文はソース・システムに基づきます。

たとえば、Oracle Essbase がソース・システムの場合、Essbase の構文を使用してメンバー名またはフィルタ条件を入力します。ディメンションによっては、予算データの抽出に使用するフィルタ条件として 1 つ以上のメンバーを選択できます。たとえば、エンティティ・ディメンションでは、E1、E5 および E6 の各メンバーを選択できます。Essbase 構文の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

ノート:

ソース・フィルタに含まれないディメンションの場合、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition にはレベル・ゼロのメンバーが含まれます。ただし、基本階層の親であるメンバーが共有階層のレベル 0 メンバーでもある **Planning アプリケーションの場合**は代替階層を持つことができます。

-  をクリックして、メンバー・セレクタを使用してメンバーを選択し、「参照」をクリックします。

「選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。メンバー・セレクタを使用すると、ディメンション内のメンバーを表示して選択できます。[+]および[-]を使用すると、ディメンション内のメンバーを展開および縮小できます。




「選択」ダイアログ・ボックスには、2 つのペインがあり、ディメンションのすべてのメンバーが左側に表示され、選択内容が右側に表示されます。そのディメンションで使用可能なすべてのメンバーが表示される左ペインには、メンバー名および簡単な説明が表示されます(使用可能な場合)。選択内容が表示される右ペインには、メンバー名および選択タイプが表示されます。

それぞれのペインの上の「メニュー」ボタンを使用すると、メンバー・セレクタの列を変更できます。

ノート:

ディメンションにフィルタを割り当てます。フィルタを割り当てないと、サマリー・メンバーから番号も取得されます。


メンバー・セレクタを使用するには:

- a. 左側のディメンションおよびメンバーのリストで、メンバーを選択して  をクリックします。
- b. メンバーのリストからメンバーをクリアするには、 をクリックします。
- c. メンバーに特殊なオプションを追加するには、 をクリックして、オプションを選択します。

メンバー・オプションで、「(含む)」は選択したメンバーを含むことを意味します。たとえば、「子(含む)」は、選択したメンバーを含め、メンバーのすべての子を追加します。「子」を選択した場合、選択したメンバーは含まれず、その子のみが含まれます。

そのメンバーは右側に移動され、「選択のタイプ」列には選択したオプションが表示されます。たとえば、「選択のタイプ」列に「子孫」が表示されます。

ヒント:

選択したリストのすべてのメンバーをクリアするには、 をクリックします。

d. 「OK」を2回クリックして、ソース・フィルタ詳細の定義を続行します。

選択したメンバーは、Essbase 構文で「フィルタ条件」フィールドに表示されます。

7. 「保存」をクリックします。

8. ターゲット・オプションを定義します。

ターゲット・オプションの定義(ライトバックに対するデータ・ロード・ルール)

Oracle E-Business Suite ターゲットにライトバックするために、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は「ターゲット・オプション」タブで Enterprise Resource Planning (ERP)オプション(「予算」、「仕訳ソース」、「仕訳カテゴリ」など)をキャプチャします。たとえば、E-Business Suite の実績にライトバックする場合、残高タイプ「A」を選択し、仕訳ソースと仕訳カテゴリも指定する必要があります。または、E-Business Suite の予算仕訳にライトバックする場合は、残高タイプ「B」を選択し、「仕訳の作成」オプションに「Y」を指定し、仕訳ソースを指定します。

必要なデータ・ルール E-Business Suite ターゲット・オプションを次の表に示します。

表 3-23 必要な E-Business Suite ターゲット・オプション

E-Business Suite ターゲット	残高タイプ	予算オプション
E-Business Suite 実績	A	仕訳ソース、仕訳カテゴリ
E-Business Suite 予算仕訳	B	仕訳の作成 = Y、仕訳ソース、仕訳カテゴリ、予算
E-Business Suite 予算	B	仕訳の作成 = Y、予算

必要なデータ・ロード・ルール Peoplesoft ターゲット・オプションを次の表に示します。

表 3-24 必要な Peoplesoft ターゲット・オプション




PeopleSoft ターゲット	オプション
PeopleSoft 予算	元帳グループ、元帳、予算シナリオ

表 3-24 (続き) 必要な Peoplesoft ターゲット・オプション

PeopleSoft ターゲット	オプション
PeopleSoft 実績	元帳グループ、元帳

ターゲット・オプションは、仕訳のインポート・オプションを定義します。

ターゲットの Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システム・オプション定義するには:

1. E-Business Suite ソース・システムの場合:
 - a. 予算仕訳を作成するかどうか選択します。
 - b. 「**予算**」に値を入力するか、 をクリックして予算を選択します。
 - c. 「**予算組織**」に値を入力するか、 をクリックして予算組織を選択します。
2. 「**保存**」をクリックします。
3. PeopleSoft Enterprise Financial Management ソース・システムの場合、次を入力するか  をクリックして選択します:
 - a. **予算シナリオ**
 - b. **元帳グループ**
 - c. **元帳**
4. 「**保存**」をクリックします。
5. ライトバックのデータ・ロード・ルールを実行します。
ルールを実行した後、E-Business Suite および PeopleSoft Enterprise Financial Management で必要なタスクを実行します。

ライトバックに対する E-Business Suite データ・ロード・ルールへの Financial Management の定義

ノート:

必須の Oracle E-Business Suite ターゲット・オプションについては、[表 1](#) を参照してください。

ライトバックに対する Oracle Hyperion Financial Management から E-Business Suite へのデータ・ロード・ルールを定義するには:

1. 「**ワークフロー**」タブの「**データ・ロード・ルール**」で、「**データ・ロード・ルール**」を選択します。
2. **データ・ロードのサマリー**で、データ・ロード・ルールを選択します。

3. 「ターゲット・オプション」タブを選択します。
4. 「予算仕訳の作成」で、「はい」または「いいえ」を選択して予算仕訳を作成します。
5. 「予算」で、予算の値を選択します。
6. 「仕訳ソース」で、ソースの値を選択します。
7. 「仕訳カテゴリ」で、カテゴリ値を選択します。
8. 「予算組織」で、組織値を選択します。
9. 「残高タイプ」で、「実績」または「予算」残高タイプを選択します。
10. 「保存」をクリックします。

ライトバックに対する PeopleSoft コミットメント・コントロール・データ・ロード・ルールの定義

ライトバックに対する PeopleSoft コミットメント・コントロール・データ・ロード・ルールを定義するには:

1. PS_HYP_KK_BD_HDR および PS_HYP_KK_BD_LN インタフェース表に「書込み」権限があることを確認します。
2. PeopleSoft コミットメント・コントロールにライトバックする場合、「データ・ロード・ルール」で、次のパラメータを選択してライトバックに対するデータ・ロード・ルールを定義します:
 - 元帳グループ
 - 元帳
 - 会計日付 - 会計日付は、取引が実際に発生した日付に対照して、取引が認識された時点を示します。会計日および取引日は同じにできます。会計日によって、取引の転記先となる、一般会計内の期間が決定されます。転記先の元帳内のオープン期間に含まれる会計日のみを選択できます。通常、アイテムの会計日は請求書日付です。
 - 現日付 - 検索対象または関数の実行対象のデータが有効である日付。たとえば、予算の決算セットを定義している場合、2016年12月31日を現日付として入力すると、その日付で有効であるまたは有効であった元帳金額に基づいて残高のロール・フォワード計算を実行するように PeopleSoft コミットメント・コントロール・プロセスに指示されます。
 - 取引タイプ - ルールを検証する場合は「確認」を選択し、ルールを検証して転記する場合は「転記」を選択します。
 - 予算取引タイプ
 - 親予算の生成
 - 親予算取引タイプ
 - デフォルト入力日 - 年度の最終日より前の最大有効日の予算定義は、すべての検証および入力イベント・コードに使用される正しい予算定義とみなされます。
3. 「データ・ロード・ルール」で、PeopleSoft にロードする予算データの部分を指定するソース・フィルタを定義します。

4. **オプション: 「ルールの実行オプション」**画面で「**削除**」を選択して、ライトバックに対する以前のデータ・ロード・ルールを削除します。
5. ライトバックに対する PeopleSoft コミットメント・コントロール・データ・ロード・ルールを実行します。

取引タイプに「**転記**」を選択した場合、ルールが検証され、予算がコミットメント・コントロールのインタフェース表に書き込まれ、データの書き込み後に転記処理が起動されます。

ライトバックに対するデータ・ロード・ルールの実行

ライトバックに対するデータ・ロード・ルールを作成した後、データ・ロード・ルールを実行して、Planning アプリケーションから一般会計システムにデータをライトバックする必要があります。

ライトバックに対するデータ・ロード・ルールを実行するには:

1. 「**データ・ルールのサマリー**」で、データ・ロード・ルールを選択します。
2. 「**実行**」をクリックします。

抽出プロセスが成功した後、Oracle General Ledger または PeopleSoft General Ledger にログインして、予算データをインポートする必要があります。

3. ソース EPM アプリケーションからデータをロードする場合、「**ソースからインポート**」を選択します。

このオプションは、ターゲットの一般会計システムに直接エクスポートする前に、ステージング表で情報を確認する場合に選択します。

「ソースからインポート」を選択すると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では EPM ターゲット・アプリケーションからデータがインポートされ、必要な変換が実行されて、FDMEE ステージング表にデータがエクスポートされます。

4. **ターゲットの一般会計システムにデータをエクスポートする場合、「ターゲットにエクスポート」**を選択します。

FDMEE で、一般会計システムにデータが転送されます。

5. 「**実行**」をクリックします。

ノート:

ルールが正常に実行された後、ステージング表で情報を表示します。「**ソースからインポート**」に使用されるステージング表を参照してください。

6. ルールが実行された後、一般会計システムに必要なタスクを実行します。

ターゲットへのエクスポート

「ターゲットにエクスポート」機能を使用して、ターゲット・アプリケーションである Enterprise Resource Planning (ERP) アプリケーションにデータをエクスポートします。このオプションは、データ・グリッド内のデータを見なおし、そのデータをターゲット・アプリケーションにエクスポートする必要がある場合に選択します。

Oracle Hyperion Planning のためにデータをエクスポートする場合、次のオプションを使用できます:

- データの保管 - ソースまたはファイルからターゲット・アプリケーションに値を挿入して、現在存在する値を置き換えます。
- データの置換 - ロードする年、期間、シナリオ、バージョンおよびエンティティ・ディメンションのデータをクリアし、ソースまたはファイルからデータをロードします。Planning アプリケーションに 1 年分のデータがある場合に 1 か月分のみをロードするとき、このオプションを使用すると、1 年分すべてがクリアされてからロードが実行されることに注意してください。
- データの追加 - ソースまたはファイルの値を、ターゲット・アプリケーションの値に追加します。たとえば、ソースに 100 があり、ターゲットに 200 がある場合、結果は 300 になります。
- データの減算 - ソースまたはファイルの値を、ターゲット・アプリケーションの値から減算します。たとえば、ターゲットに 300 があり、ソースに 100 がある場合、結果は 200 になります。

データ・ロードのルールを送信するには:

1. 表アクション・バーの「**データ・ルール**」で、データ・ロード・ルールを選択します。

2.  をクリックします。

3. 「**実行モード**」で、ターゲットへのエクスポートのモードを選択します。

実行モード:

- オンライン - ODI ではデータを同期モード(即時処理)で処理します。
- オフライン - ODI ではデータを非同期モード(バックグラウンドで実行)で処理します。



をクリックし、「プロセスの詳細」ページに移動して、ODI ジョブの進捗状況をモニターします。

4. 「**エクスポート**」で、エクスポート方法を選択します。

エクスポート・オプション:

- 現在のディメンション
- すべてのディメンション
- Excel にエクスポート

5. エクスポート方法が「**現在のディメンション**」および「**すべてのディメンション**」の場合、「**ファイル・ロケーションの選択**」で、エクスポートするファイルに移動し、「**OK**」をクリックします。

「**Excel にエクスポート**」方法の場合、マッピングは Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートされます。

6. 「**OK**」をクリックします。

データをターゲットにエクスポートした後、エクスポートのステータスはデータ・ロードのサマリーのデータ・ロード・ルールの「ステータス」フィールドに表示されます。

サポートされているソース・システムへのデータのロード

ライトバックに対するデータ・ロード・プロセスを完了するには、サポートされているソース・システムに必要なタスクを実行する必要があります。

Oracle E-Business Suite へのデータのロード

ターゲットのソース・システムが Oracle E-Business Suite の場合は、Oracle General Ledger を使用して予算データをインポートする必要があります。

詳細は、E-Business Suite のユーザー・マニュアルを参照してください。全体的には、次のプロセスに従います：

1. Oracle General Ledger を起動します。
2. 仕訳インポート・プロセスを実行します。
「仕訳の作成」オプションを選択した場合：
 - データは仕訳インタフェース表(GL_INTERFACE)に抽出されます。
 - Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ではプロセス ID が GROUP_ID 列に保管されます。プロセス ID でフィルタして作成されたデータを確認できます。
 - エラーがない場合は、仕訳入力を作成されます。「仕訳の作成」オプションをクリアした場合：
 - データは予算インタフェース表(GL_BUDGET_INTERFACE)に抽出されます。
 - データを GL_BUDGET_INTERFACE テーブルにロードする場合は、予算名 (BUDGET_NAME)と予算組織(BUDGET_ENTITY_NAME)を注意して選択してください。
 - エラーがない場合は、予算残高が転記されます。
3. 仕訳または予算残高を確認します。

PeopleSoft Enterprise Financial Management へのデータのロード

ターゲットが PeopleSoft の場合は、PeopleSoft General Ledger を使用して予算データをインポートする必要があります。

詳細は、PeopleSoft Enterprise Financial Management のユーザー・マニュアルを参照してください。全体的には、次のプロセスに従います：

1. PeopleSoft General Ledger を起動します。
2. 仕訳の作成プロセスを実行します。
3. 仕訳要求を作成するときに、次の必須オプションを定義します：
 - 勘定定義名 - HYPDEFN を選択
 - テンプレート - HYP_STDBUD を選択

データは、PS_HPYPB_ACCT_LN インタフェース表でステージングされます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ではプロセス ID が JRNL_LN_REF 表に保管されます。プロセス ID でフィルタして作成されたデータを確認できます。

4. プロセスを実行します。
プロセスでエラーがない場合は、仕訳が作成されます。
5. 仕訳を確認し、調整エントリを作成して、仕訳を転記します。

4

ロジック勘定科目

次も参照:

- [ロジック勘定科目の概要](#)
- [ロジック・グループの作成](#)
- [単純なロジック・グループ内での勘定科目の作成](#)
- [複雑なロジック勘定科目の作成](#)

ロジック勘定科目の概要

ロジック勘定科目は、動的に生成される勘定科目で、ソース・ファイルで提供されない補足値の計算に使用されます。ロジック・グループは、ターゲット・アプリケーションに関連付けられます。(ロジック・グループの値のリストは、作成先のターゲット・アプリケーションに基づいてロケーション・ユーザー・インタフェースでフィルタされます。)他のすべてのソース勘定科目と同様に、ロジック勘定科目をターゲット・システムにマッピングしてロードできます。ロジック勘定科目は様々な関数に使用されます:

- **統計的ロード:** 1つのソース勘定科目を複数のターゲット勘定科目にマッピングします
- **条件マッピング:** ソース勘定科目を値に基づいてマッピングします
- **算術マッピング:** ソース値に対して算術演算を行います

ロジック・グループの作成

ロジック・アカウントを作成する最初のステップは、ロジック・グループを作成することです。次に、ロジック・グループを1つ以上のロケーションに割り当てます。ソース・ファイルまたはソース・システムを1つのロケーションにロードすると、ロジック・グループがロケーションに割り当てられている場合、ロジック勘定科目が生成されます。

ロジック・グループは単純または複雑として定義する必要があります。単純なロジック・グループでは、ロジック・アイテムはソース勘定科目ディメンションからのみ派生できます。複雑なロジック・グループでは、ロジック・アイテムは任意のディメンションの組合せから派生できます。

ロジック・グループを作成するには:

1. 「設定」タブの「データ・ロードの設定」で、「ロジック・グループ」を選択します。
2. 「ターゲット・アプリケーション」で、このロジック・グループのターゲット・アプリケーションを選択します。
3. 「ロジック・グループ」で、「追加」を選択します。
行がグリッドに追加されます。
4. 「ロジック・グループ名」で、一意の名前を入力します。
オプション: 「説明」に、ロジック・グループの説明を入力します。

5. 「**ロジック・タイプ**」で、「**単純なロジック**」または「**複雑なロジック**」を選択します。
6. 「**保存**」をクリックします。

単純なロジック・グループ内での勘定科目の作成

単純なロジック・グループ内で、ロジック勘定科目を個別に作成できます。

単純なロジック・グループ内で勘定科目を作成するには:

1. 「**設定**」タブの「**データ・ロードの設定**」で、「**ロジック・グループ**」を選択します。
2. 「**ロジック・グループ**」サマリー・グリッドから、ロジック・グループを選択します。
選択したロジック・グループ内に現在含まれているロジック勘定科目がリストされます。
3. 「**ロジック・アイテム**」グリッドで「**追加**」をクリックします。
4. 要求された情報を指定します。
[ロジック・グループ・フィールド](#)を参照してください。

ロジック・グループ・フィールド

ロジック勘定科目は、次のフィールドで構成されています:

- アイテム
- 説明
- 条件タイプ
- 条件値
- 演算子
- 値/式
- シーケンス
- エクスポート

アイテム

アイテム・フィールドを使用してロジック勘定科目の名前を指定します。アイテム・フィールドで指定されたロジック勘定科目がソース勘定科目としてワークベンチのグリッドに表示されます。同じ勘定科目をマッピング・ルールでソースとして使用できます。ロジック勘定科目の名前の先頭に"L"または他の文字を付け、勘定科目がソース・ファイルのものであること、またはロジック・ルールで生成されたことを示すことをお勧めします。ロジック勘定科目は、ターゲット勘定科目にマップされている場合、ターゲット・アプリケーションにロードできます。

説明

「説明」フィールドに入力する説明は、ワークベンチの「勘定科目の説明」フィールドに表示されます。

条件タイプと条件値

「条件タイプ」フィールドの演算子は、「条件値」フィールドで指定されるソース勘定科目と連動して、どのソース勘定科目からロジック勘定科目が派生しているかを判別します。1つのロジック勘定科目が複数のソース勘定科目から派生している場合もあります。

タイプ・フィールドの有効な値:

- 範囲
- 類似
- 含む

ソース勘定科目の指定

範囲(条件タイプ) - ソース勘定科目の範囲を「条件値」フィールドで指定するときに使用します。範囲を指定する勘定科目をカンマで区切ります。

表 4-1 「範囲」タイプ・フィールドと、対応する「条件値」フィールドの値の例。

「タイプ」フィールド	「条件値」フィールド
範囲	1000,1999

類似(条件タイプ) - 「条件値」フィールドのソース勘定科目にワイルドカード文字を含めるときに使用します。疑問符(?)をプレースホルダとして使用し、間に入る文字を示すにはアスタリスク(*)を使用します。

表 4-2 「類似」タイプと例

「タイプ」フィールド	「条件値」フィールド
類似	1??0
類似	10*

含む(条件タイプ) - 1つのソース勘定科目または不連続のソース勘定科目のリストを含めるときに使用します。

表 4-3 「含む」タイプと例

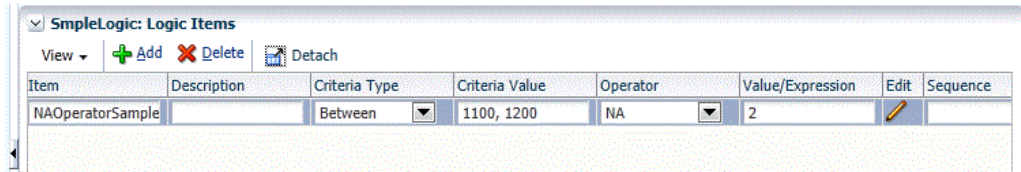
「タイプ」フィールド	「条件値」フィールド
含む	1000
含む	1000,1005,2001

演算子と値/式

NA 演算子

NA (演算子なし)—NA が指定されている場合、「条件値」フィールドで指定されているソース勘定科目が合計されます。たとえば、「タイプ」が「範囲」で、「条件値」が 1100,1200 の場合、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、1100 から

1200 の間のソース勘定科目の値を要約する新規勘定科目を、ソース・ファイルに勘定科目が存在するエンティティごとに 1 つ作成します。

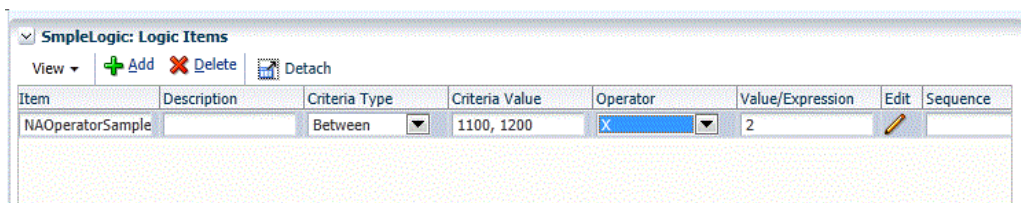


算術演算子

算術演算子(+、-、x、/) - 算術演算子を選択した場合、新しい論理レコードの金額は、指定された値/式で計算された元の金額と等しくなります。たとえば、演算子 x を選択し、「値/式」フィールドに 2 を入力した場合、新しいレコードの金額は元の金額に 2 を掛けた金額となります。

数値演算子を使用して、簡単な算術計算を実行できます:

- NA (演算子なし)
- + (加算)
- - (減算)
- X (乗算)
- / (除算)
- Exp (式の演算子)
- 関数 - [関数](#)を参照



この例では、1 つのエンティティに勘定科目の条件を満たす行が含まれていたため、ロジック勘定科目が 1 つ作成されています。

式および関数

「値/式」フィールドで式を使用して、次の操作を実行できます:

- 単純な計算式を実行します。
- CURVAL パラメータを使用して、ロジック勘定科目演算子の値を指定します。CURVAL パラメータは、論理関数内で使用するように式内でも使用できますが、式では CURVAL をパイプで囲む必要があります。たとえば、CURVAL 式には、|Account| という表記法を使用した勘定科目の指定、およびエンティティ、カテゴリ、期間および勘定科目の POV 詳細を使用した値の指定が含まれます。

関数では **Jython** 構文を使用して **if/else** で単純なロジックを使用できます。**Jython** コマンドは関数で使用でき、式より複雑になる場合があります。

Exp

式の演算子を使用して、「値/式」フィールドで定義されているカスタム論理式を実行します。論理式では、変数または **if** 文を使用できず、論理関数と比べてより単純です。**|CURVAL|** を除いて、式は組み込みパラメータを持ちません。式の場合、値を **RESULT** に割り当てる必要はありません。

式の実行速度は論理関数より高速です。**Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** 参照関数は、論理関数内と同様に式内でも使用できます。カスタム式を記述するには、「値/式」フィールドをダブルクリックして、式エディタを開きます。

```
|CURVAL| + |810| + |238|
```

前述の関数は、**FDMEE** 参照関数を使用して、論理勘定科目の値に 2 つのソース勘定科目を加算します。**CURVAL** パラメータは、論理関数内で使用するように式内でも使用できますが、式では **CURVAL** をパイプで囲む必要があることに注意してください。

```
(|CURVAL| + |000,10,09/30/01,810|) * 100
```

前述の関数は、**FDMEE** 参照関数を使用して、ロジック勘定科目の値に、ソース勘定科目(**810**)と指定したセンターからのソース勘定科目、**FDMEE** カテゴリ、および **FDMEE** 期間を加算し、その結果に **100** を乗算します。

関数

関数演算子を使用して、「値/式」フィールドで定義されているカスタム論理関数を実行します。

関数を記述するには、「ロジック・アイテム」行で「演算子」ドロップダウン・リストから「関数」を選択し、編集アイコンをクリックして編集ウィンドウを開きます。論理関数は通常、条件マッピングおよび複数のソース勘定科目を使用する他の複雑な操作に使用します。論理関数では、変数、**if/elif/else** 文、数値関数およびその他の **Jython** 構造体を含む **Jython** コマンドを使用できます。

論理関数では、事前定義関数のパラメータを使用でき、新たに作成されたロジック勘定科目について値が更新されるよう **RESULT** 変数に値を割り当てる必要もあります。次の関数パラメータを論理関数で使用でき、これらに **|** 表記を使用する必要はありません:

表 4-4 関数演算子と説明

関数演算子	説明
CURVAL	ロジック勘定科目操作のソース値
StrLocation	アクティブな場所の名前
StrCenter	ロジック勘定科目エンティティ
StrCatKey	アクティブなカテゴリ・キー(名前ではない)。このパラメータを使用するには、データベースでカテゴリ・キーを参照する必要があります。
StrPerKey	アクティブな期間
Entity, Category, Period, Account 	参照表記が論理関数で使用できます。これは、論理式で指定される表記法と同じです。

表 4-4 (続き) 関数演算子と説明

関数演算子	説明
スキップ	"Skip"がキーワード RESULT に割り当てられる場合、ロジック勘定科目は作成されません。

関数パラメータは、大文字、小文字、または大文字と小文字を組み合わせて定義できます。ただし、キーワード RESULT は大文字で指定する必要があります。

関数の戻り値の割当て

論理関数の結果は、キーワード RESULT に割り当てる必要があります。RESULT キーワードに戻り値が割り当てられていない場合、論理エンジンにより結果の値が自動的にゼロに設定されます。これによって、計算はスキップされ、ロジック勘定科目は作成されません。

次の関数は、ロジック勘定科目計算がゼロより大きい値を戻す場合、ロジック勘定科目計算の結果を(CURVAL パラメータを使用して)ロジック勘定科目(RESULT)に割り当てます。最初の条件が満たされない場合、キーワード"Skip"により、ロジック勘定科目は作成されません。

```
if CURVAL > 0:

    RESULT = CURVAL

else:

    RESULT = "Skip"
```

ノート:

論理関数に Jython の表記法とインデントを使用する必要があります。

次の関数は、"10"がアクティブな FDMEE カテゴリ・キーの場合のみ、ロジック勘定科目計算の結果をロジック勘定科目に割り当てます。

```
if StrCatKey == "10":

    RESULT = CURVAL

else:

    RESULT="Skip"
```

次の関数は、条件の勘定科目エンティティが"000"の場合のみ、ロジック勘定科目計算の結果をロジック勘定科目に割り当てます。

```
if StrCenter == "000":

    RESULT = CURVAL * 100

else:

    RESULT="Skip"
```

次の関数は、現在の **FDMEE** 期間が **2013 年 12 月**の場合に、**FDMEE** 参照関数を使用してソース勘定科目(**810**)をロジック勘定科目の値に加算します。

```
if StrPerKey == "12/31/2013":

    RESULT = CURVAL + |810|

else:

    RESULT="Skip"
```

次の関数は、アクティブな場所がテキサス(Texas)の場合に、**FDMEE** 参照関数を使用して異なるエンティティの別のソース勘定科目、**FDMEE** カテゴリおよび **FDMEE** 期間をロジック勘定科目の値に加算します。

```
If StrLocation == "Texas":

    RESULT = CURVAL + |000,10,09/30/13,810|

else:

    RESULT="Skip"
```

値/式

計算を実行し、それによってロジック勘定科目の値を導出するには、「演算子」フィールドから「値/式」の値に使用する演算子を選択します。

シーケンス

このフィールドでは、ロジック勘定科目の処理順序が指定されます。順序仕様では、依存勘定科目が最初に処理される場合にかぎり、あるロジック勘定科目を別のロジック勘定科目で使用できます。

エクスポート

「はい」/「いいえ」スイッチでは、ロジック勘定科目をエクスポート勘定科目とみなし、変換表検証プロセスの対象とするかどうかを指定します。スイッチを「はい」に設定した場合、ロジック勘定科目をマップする必要があります。

要約されたロジック勘定科目の作成

デフォルトでは、ロジック勘定科目は、試算表の各センターについて作成されます。たとえば、「条件値」フィールドが **12300** の場合、結果は、勘定科目 **12300** に関連付けられた各ソース・センターについて作成されたロジック勘定科目になります。

「条件値」フィールドで、勘定科目名の後にセミコロンを置き、グループ化する文字数を示す数値を入力することによって、複数のソース・センターを要約するロジック勘定科目を作成できます。

たとえば、「条件値」フィールドの値が **12300;4** の場合、その結果は、ソース・センター名の最初の 4 文字が同じソース・センターをすべて含む要約された勘定科目になります。勘定科目 **12300** に割り当てられたソース・センターは、位置 **1** から始まる 4 文字です。さらに、「条件値」フィールドの値が **12300;3;4** の場合、その結果は、ソース・センターで位置 **4** から始まる同じ **3** 文字を持つソース・センターをすべて含む要約された勘定科目になります。勘定科目 **12300** に割り当てられたソース・センターは、位置 **4** から始まる **3** 文字です。

すべてのソース・センターを要約するロジック勘定科目を作成するには、「条件値」フィールドに、勘定科目名の後にセミコロンを付けてテキスト値を入力します。このハードコード化されたテキスト値は、要約されたロジック勘定科目のセンターになります。たとえば、「条件値」フィールドの値が **12300;Dept100** の場合、その結果は、すべてのソース・センターを含む要約された勘定科目になります。勘定科目 **12300** に割り当てられたソース・センターは、**Dept100** です。

複雑なロジック勘定科目の作成

個々のロジック・アイテムは複雑なロジック・グループ内に定義されます。複雑なロジック・ルール各フィールドは、「条件値」および「計算を含める」フィールド以外単純なロジック・ルールと同様に機能します。複雑なロジック勘定科目では、ユーザーは勘定科目ディメンション以外のディメンションを含む条件値を入力できます。また、グループ化基準およびグループ・レベルを指定して、生成されたロジック勘定科目のワークベンチ内での表示方法を変更できます。

条件値

各ディメンションの条件を入力するには、「条件値」アイコンをクリックして条件フォームを開きます。ロジック・アイテムは、各ディメンションに指定した条件を満たすソース・ライン・アイテムからのみ作成されます。複雑なロジック条件の各フィールドの説明は次のとおりです。

ディメンション

このフィールドでは、使用可能なソース・ディメンションを選択できます。各ディメンションは1回のみ選択できます。

条件タイプ

このフィールドは「ソース・ディメンション」フィールドおよび「条件値」フィールドと合わせて使用し、ロジック・アイテムを導出するソース値を指定します。使用可能な条件タイプは、「含む」、「Between」および「類似」です。条件タイプによって条件値の解釈方法が決まります。

条件値

条件タイプは、このフィールドを使用して、特定のロジック・ディメンションのロジック計算に含めるメンバーを決定します。

グループ化基準

導出されたロジック・アイテムをワークベンチで表示する際、「グループ化基準」フィールドを使用すると、ロジック・アイテムが適切なディメンション・フィールドに表示されているメンバーを上書きできます。「グループ化基準」フィールドに入力した値に基づいて、ディメンションのグループ化を上書きできます。このフィールドを使用して、返されたメンバーをハードコード化したり、「グループ化基準」フィールドにハードコード化されたメンバーとアスタリスク(*)を入力してハードコード化された値を元のメンバーに追加します。

たとえば、ディメンションに選択された勘定科目の行に"Cash"を含めると、インポート・フォームでロジック・アイテムの「勘定科目」フィールドに"Cash"と表示されます。「グループ化基準」フィールドに"L-*"と入力すると、インポート・フォームに"L-1100"と表示されます(1100は、ロジック条件を渡した元の勘定科目です)。

「グループ化基準」フィールドに値を入力しない場合、このディメンションはグループ化されず、一意のディメンション・メンバーごとに別のロジック・アイテムが作成されます。

グループ・レベル

ロジック・アイテムをワークベンチで表示する際、「グループ・レベル」フィールドを「グループ化基準」フィールドとともに使用すると、適切なディメンション・フィールドに表示されているメンバーを上書きできます。このフィールドは数値のみを受け入れます。

「グループ・レベル」フィールドに値3を入力すると、「グループ化基準」フィールドの左から3文字が返されます。「グループ化基準」フィールドに値が入力されていない場合、「グループ・レベル」フィールドに値3を指定すると、元のソース・ディメンション・メンバーの最初の3文字が返されます。インポート・フォームに表示されるロジック・アイテムを、必要なレベルにグループ化できます。

たとえば、「グループ化基準」フィールドにL-*を入力した場合、インポート・フォームでロジック・アイテムに"L-1100"と表示されます(1100は、渡された元の勘定科目です)。ロジック・アイテムをワークベンチで表示する際、「グループ・レベル」フィールドを「グループ化基準」フィールドとともに使用すると、適切なディメンション・フィールドに表示されているメンバーを上書きできます。このフィールドは数値のみを受け入れます。

+では"L-11"と表示されます。この行にグループ・レベル1を入力した場合、インポート・フォームには"L-1"が表示されます。

計算を含める

ロジック・アイテムの条件が満たされる場合、「計算を含める」フィールドを使用すると、ロジック・アイテムで以前に計算された Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 値を計算に含めることができます。

ノート:

各ロジック・アイテムにはシーケンスが付加され、ロジック・アイテムはこのシーケンスで計算されます。2番目以降のロジック・アイテムでこのフィールドが使用可能な場合、以前に計算されたロジック・アイテムは、ロジック条件を満たしていれば含められます。

複雑なロジックの例 1: CashTx

表 4-5 複雑なロジックの例 1: CashTx

ディメンション	条件タイプ	条件値	グループ化基準	グループ・レベル
勘定科目	類似	11*	Cash	0
エンティティ	類似	Tx	Texas	0
ICP	範囲	00,99	ICP	0
UDI	含む	00,01,02	UD1	0

最初の行で、「11」で始まる任意の勘定科目が「Calc Item: CashTx」の計算結果に含まれることが指定されます。

2行目で、ソース・レコードが「TX」のようなエンティティを持つことも指定され、結果が絞り込まれます。

3行目で、ICP 値が 00 から 09 の間のソース・レコードにのみ結果が絞り込まれます。

最後の行で、カスタム 1 (UD1) が 00、01、02 のいずれかのソース・レコードにのみ結果が絞り込まれます。インポートされた行の中でリストされた条件を満たさないものは、計算結果から除外されます。

次の表では、複数のソース・レコードから新規ロジック・アイテムが 1 つのみ導出されます。前のグラフィック例をロジック条件として、およびその後続く最初のグリッドをソースのライン・アイテムとして使用して、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で単一のロジック・アイテムの値を導出する方法を確認できます。「グループ化基準」フィールドに注意してください。各「グループ化基準」フィールドにはハードコード化された値が含まれています。したがって、指定の条件を満たす各行で、元のインポートされたメンバーが「グループ化基準」フィールドにリストされたメンバーで置換されます。

インポート済の値のサンプル

表 4-6 インポート済の値のサンプル

勘定科目	エンティティ	ICP	UD1	金額	含むまたは除外
1150	Tx	07	01	50,401.07	含む
1176	Tx	04	02	10,996.00	含む
1201	Tx	01	00	500.00	除外

インポート済勘定科目名のサンプル

表 4-7 インポート済勘定科目名のサンプル

勘定科目	エンティティ	ICP	UD1	金額
Cash	Texas	ICP	UD1	50,401.07
Cash	Texas	ICP	UD1	10,996.00

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition により、同一のメンバーの組合せを含む行がグループ化され要約されて、次のような結果が作成されます:

最終結果

表 4-8 インポート済勘定科目名および番号

勘定科目	エンティティ	ICP	UD1	金額
Cash	Texas	ICP	UD1	61,397.07

複雑なロジックの例 2: CashTx

表 4-9 複雑なロジックの例 2

ディメンション	条件タイプ	条件値	グループ化基準	グループ・レベル
勘定科目	類似	11*	Cash	0
エンティティ	類似	Tx	Texas	0
ICP	範囲	000,100	*	2
UDI	含む	00,01,02	UD1-*	0

前述の表の最初の行で、"11"で始まる勘定科目が"Calc Item: CashTx"の計算結果に含まれることが指定されます。

2 行目で、ソース・レコードが"TX"のようなエンティティを持つことも指定され、結果が絞り込まれます。

3 行目で、ICP 値が 000 から 100 の間のソース・レコードにのみ結果が絞り込まれます。

最後の行で、カスタム 1 (UD1)が"00"、"01"、"02"のいずれかのソース・レコードにのみ結果が絞り込まれます。インポートされた行の中でリストされたすべての条件を満たさないものは、計算結果から除外されます。

次の表では、「グループ化基準」フィールドおよび「グループ・レベル」フィールドに入力された値によって、2つのロジック・アイテムがソース・レコードから導出されます。「グループ化基準」フィールドのうち2つにリストされた値がハードコード化され、2つにアスタリスクが含まれています。したがって、指定の条件を満たす各行で、勘定科目とエンティティ・ディメンションのインポートされた元のメンバーが「グループ化基準」フィールドにリストされたメンバーで置換されます。その他のディメンションは、「グループ・レベル」の入力に基づいて、元のメンバーの全部または一部を返します。

インポート済の値のサンプル

表 4-10 インポート済勘定科目番号のサンプル

勘定科目	エンティティ	ICP	UD1	金額	含むまたは除外
1150	Tx	070	01	50,401.07	含む
1176	Tx	040	02	10,996.00	含む
1121	Tx	045	02	9,050.41	含む
1201	Tx	100	00	500.00	除外

ロジック・メンバー

表 4-11 ロジック・メンバーのインポート済勘定科目名

勘定科目	エンティティ	ICP	UD1	金額
Cash	Texas	07	UD1-01	50,401.07
Cash	Texas	04	UD1-02	10,996.00
Cash	Texas	04	UD1-02	9,050.41

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition により、同一のメンバーの組合せを含む行がグループ化され要約されて、次のような結果が作成されます。

最終結果

表 4-12 インポート済勘定科目名および番号の最終結果

勘定科目	エンティティ	ICP	UD1	金額
Cash	Texas	07	UD1-01	50,401.07
Cash	Texas	04	UD1-02	20,046.41

5

確認ルール

確認ルールを使用してデータの整合性を強化します。

確認レポートの概要

システム管理者は、確認ルールを使用してデータの整合性を強化します。確認ルールのセットが確認ルール・グループ内に作成され、確認ルール・グループがロケーションに割り当てられます。続いて、データがターゲット・システムにロードされた後、確認レポートが生成されます。

確認エンティティ・グループをロケーションに割り当てた場合、確認レポートは、グループで定義されているすべてのエンティティについて実行されます。確認エンティティ・グループをロケーションに割り当てない場合、確認レポートは、ターゲット・システムにロードされたエンティティごとに実行されます。**Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** 確認レポートでは、ターゲット・システムの値、FDMEE ソース・データまたは FDMEE 変換済データを取得します。

FDMEE は確認レポートを分析し、ステータス・エントリをプロセス・モニタリング表に挿入します。レポートに関連付けられた場所には、確認レポート内のすべてのルールがパスした場合のみ TRUE ステータスが示されます。警告のみに使用されるルールの場合、ルール・ロジックは割り当てられません。

データがロードされると、確認レコードが実行されます。また、レポートを手動で実行することもできます。

ノート:

確認ルールは、Account Reconciliation Manager にロードする場合に適用されません。

ノート:

エンティティ・ディメンションに共有階層がある場合は、Financial Consolidation and Close および Tax Reporting を使用するためのチェック・エンティティ・グループまたはチェック・ルールのデータ・ロード・マッピングで、メンバーを親,子のフォーマットで指定する必要があります。

確認ルール・グループの作成

確認ルール・グループを作成するには:

1. 「設定」タブの「データ・ロードの設定」で、「確認ルール・グループ」を選択します。

2. 「**確認ルール・グループ**」 サマリー・グリッドで、「**追加**」をクリックします。
行が上部グリッドに追加されます。
3. 「**確認エンティティ・グループの詳細**」で、「**名前**」フィールドにグループの名前を入力します。
オプション: 「**説明**」に、グループの説明を入力します。
4. 「**保存**」をクリックします。

確認ルールの作成

確認ルール・レポートの各行は、確認ルールを表しています。

確認ルールを作成するには:

1. 「**設定**」 タブの 「**データ・ロードの設定**」 で、「**確認ルール・グループ**」 を選択します。
2. オプション: **確認ルール** で、「**POV ロケーション**」、「**POV 期間**」 または 「**POV カテゴリ**」 を選択します。
[POV バーの使用](#)を参照してください。
3. 「**確認ルール・グループ**」 サマリー・グリッドで、確認ルール・グループを選択します。
4. 「**ルール・アイテムの詳細**」 グリッドで、「**追加**」 をクリックします。
行がグリッドに追加されます。
5. 各フィールドに確認ルール情報を入力します:
 - **値の表示** - [値の表示](#)を参照してください。
 - **説明(オプション)** - [説明](#)を参照してください。
 - **ルール名** - [ルール名](#)を参照してください。
 - **ルール・テキスト** - [ルール・テキスト](#)を参照してください。
 - **カテゴリ** - [カテゴリ](#)を参照してください。
 - **シーケンス** - [シーケンス](#)を参照してください。
 - **ルール・ロジック(オプション)**
6. 「**保存**」 をクリックします。

例 5-1 値の表示

「値の表示」フィールドは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition が確認レポートのデータ行をフォーマットする方法を制御するもので、ターゲット勘定科目またはレポート・フォーマット・コードの選択に使用します。レポート・フォーマット・コードを含んだフィールドでは、値の参照は行われません。

例 5-2 ターゲット勘定科目を参照

このオプションを選択すると、「**検索して選択: ターゲット値**」画面が表示され、(ターゲットシステム・アプリケーション勘定科目のリストから)ターゲット勘定科目を検索して確認ルール・フォームに挿入できます。

例 5-3 フォーマット・コードの選択

このオプションを選択すると、フォーマット・コードを「ターゲット勘定科目」列に入力できます。

フォーマット・コードにより、確認レポートの表示が決定されます。

表 5-1 フォーマット・コードと、確認レポートで実行される対応するアクション

フォーマット・コード	確認レポートで実行されるアクション
#ModeList	「値の表示」、「説明」および「金額」列の値を表示するようにレポートを設定します。指定がない場合、システムのデフォルトは#ModeRule になります。
#ModeRule	(デフォルト)「ルール名」、「ルール・テキスト」および「金額」列の値を表示するようにレポートを設定します。 このレポートは「ルール・ロジック」列の各式を評価し、各ルールの TRUE または FALSE 条件をテストします。レポートには、各ルールのステータス(OK またはエラー)が表示されます。
#Title	関連付けられている「説明」フィールドのテキストを、確認レポートにタイトル行として挿入します。
#Subtitle	関連付けられている「説明」フィールドのテキストを、確認レポートにサブタイトル行として挿入します。

例 5-4 説明

#ModeList モードの確認レポートのみに表示される「説明」列には、勘定科目の説明が表示されます(これらの説明は、タイトルまたはサブタイトルとして指定されている場合があります)。

例 - 説明

Out-of-Balance Account

例 5-5 ルール名

#ModeRule モードの確認レポートのみに表示される「ルール名」列には、確認ルールの識別子が保管されます。ルール名値は、一意で識別しやすい値にする必要があります。

例 - ルール名

Out-of-Balance Check

例 5-6 ルール・テキスト

#ModeRule モードのレポートにのみ表示される「ルール・テキスト」列では、ルールの背後にある論理が定義されます。確認レポートでは、ルールのプライマリ文は、そのルールに関連付けられた「ルール・テキスト」フィールドのテキストです。

例 - ルール・テキスト

This account must be between [+10 and -10].

例 5-7 カテゴリ

「カテゴリ」列で、FDMEE カテゴリを選択して、確認ルールを1つのFDMEEに限定します。ルールが確認レポートに表示されるのは、ルールに関連付けられた「カテゴリ」フィールドで選択されたFDMEEカテゴリが、POVで設定されたFDMEEカテゴリである場合のみです。POVで設定されたカテゴリにかかわらず確認ルールを確認レポートに表示するには、「すべて」を選択する必要があります。

例 5-8 シーケンス

「シーケンス」列の値(数値)は、フォーマット・コードとルールが処理される順序を判別します。シーケンス番号は、フォーマット・コードおよびルールを挿入する余地を残すために10ずつ大きくすることをお勧めします。

ルール・ロジック

「ルール・ロジック」列は、マルチディメンショナル参照および確認ルール式を作成する場合に使用します。「ルール・ロジック」列は、#ModeRuleまたは#ModeListモードのレポートのみで処理されます。確認レポートでルール・ロジックが処理された後、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Editionではルールに合格または失敗のフラグを設定します。

確認ルール条件式

確認ルール式は、マルチディメンショナル参照を実行する際のターゲットシステム勘定科目残高の検証に主に使用されます。式は、TrueまたはFalseの結果を返します。

たとえば、次の例では、Cash (ターゲット勘定科目)が正の残高の場合 true (OK)を返し、そうではない場合 false (エラー)を返します。

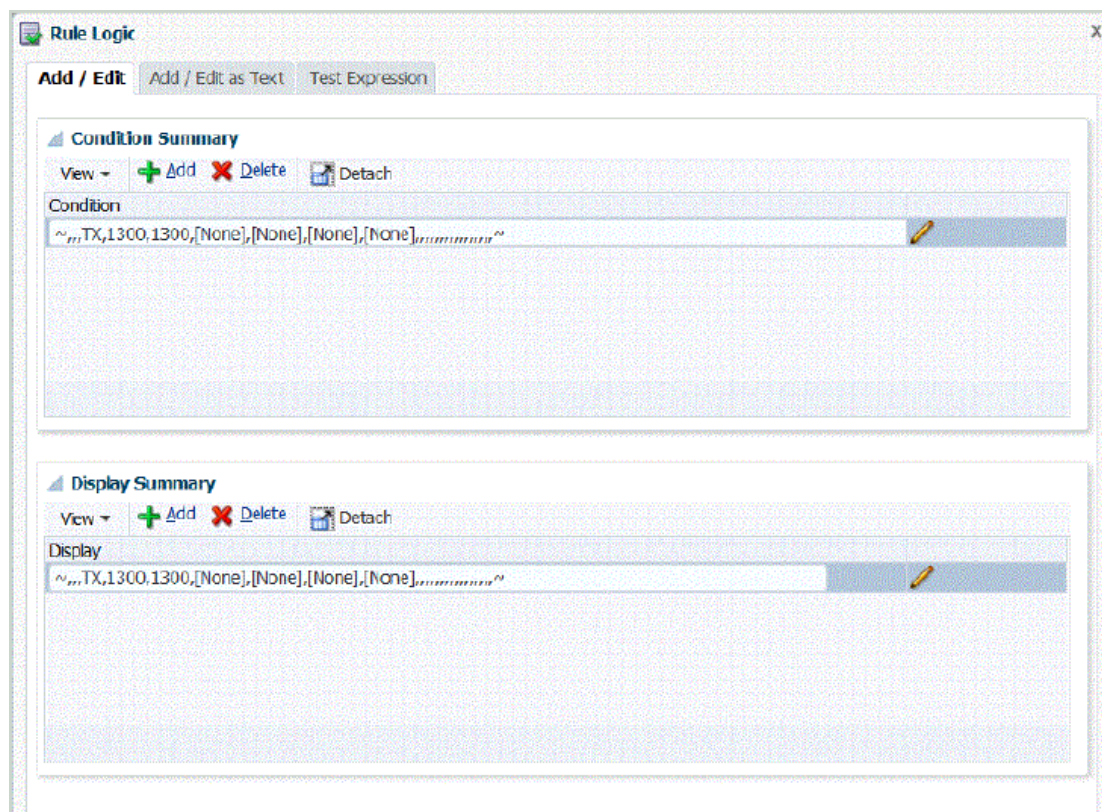
```
|,,,YTD,<エンティティ通貨>,,Cash,[ICPなし],[なし],[なし],[なし],[なし],>0
```

次の例では、確認ルール式は Cash (ターゲット勘定科目) + \$1000 が AccruedTax (別のターゲット勘定科目)の値以上の場合に true (OK)を返し、そうではない場合、false (エラー)を返します。


```
|,,,YTD,<エンティティ通貨>,,Cash,[ICPなし],[なし],[なし],[なし],[なし],>|,,,YTD,<エンティティ通貨>,,AccruedTax,[ICPなし],[なし],[なし],[なし],[なし],>
```

ルール・ロジック・エディタを使用した確認ルールの作成

ルール・ロジック・エディタを使用すると、確認ルールを簡単に作成できます。ルール・ロジックの開発に役立ち、ルール・ロジック・エディタからルールを作成できます。ルール・ロジック・エディタを使用して、確認ルールを変更します。



ルール・ロジック・エディタを開くには:

1. 「設定」タブの「データ・ロードの設定」で、「確認ルール・グループ」を選択します。
2. 確認ルールの「確認ルール・グループ」サマリー・グリッドで、確認ルール・グループを選択します。
3. 「ルール・アイテムの詳細」グリッドから、「追加」をクリックします。
行がグリッドに追加されます。
4. 各フィールドに確認ルール情報を入力します:
 - 値の表示 - 値の表示を参照してください。
 - 説明(オプション) - 説明を参照してください。
 - ルール名 - ルール名を参照してください。
 - ルール・テキスト - ルール・テキストを参照してください。
 - カテゴリ - カテゴリを参照してください。
 - シーケンス - シーケンスを参照してください。
5.  をクリックします。

「ルール・ロジック」画面には、3つのタブがあります:

- ルール・ロジックの「追加/編集」
- ルール・ロジックの「テキストとして追加/編集」
- ルール・ロジック・テスト式

ルール・ロジックの追加

ルール・ロジックの「追加/編集」タブを使用して、メンバー値のリストでルール・ロジック文の各行を追加します。

ルール・ロジックの「追加/編集」タブは、次の要素で構成されます：


- **条件のサマリー** - "true"または"false"に評価される条件式の指定を有効にすることで、確認ルールにロジックが備わります。
「条件のサマリー」に条件が含まれていない場合、「OK」または「エラー」は表示されませんが、指定可能な交差は表示されます。
「条件のサマリー」および「表示のサマリー」オプションはオプションですが、省略すると0.00とのみ表示されます。
- **表示のサマリー** - 表示値として使用されるマルチディメンショナル参照の指定が有効になります。
表示値は無視されます。行にルール・ロジックがまったくなく、表示値のみの場合、行は無視され、レポートは終了します。レポートの「値」列に表示される唯一の値は、「表示のサマリー」に含まれる式です。表示のサマリーはオプションです。
- **追加** - サマリーに行を追加します。
- **削除** - サマリーの行を削除します。

ルール・ロジック文を追加するには：

1. **ルール・ロジック・エディタ**で、**ルール・ロジックの「追加/編集」**タブを選択します。
2. 「**条件**」または「**表示**」サマリー・グリッドから「**追加**」をクリックします。
空白の行が表示されます。
3. テストするルールを入力します。

ノート：

金額を評価するために等号を使用するときは、二重等号(==)を使用してください。

4. **オプション**:  をクリックします。
5. 「**ルール・ロジック**」の「**交差タイプ**」フィールドで、マルチディメンショナル参照の交差タイプを選択します。
使用可能な交差タイプ：
 - ソース交差 - 値を"~"文字で囲みます。
 - 変換されたソース交差 - 値を'文字で囲みます。
 - ターゲット交差 - 値を"|"文字で囲みます。
 マルチディメンショナル参照を参照してください。
6. 「**ディメンション**」から、値の取得元のディメンションを選択します。

7. 「メンバー値」から、ディメンションの値を選択します。
8. 「交差に追加」をクリックします。
メンバー値が「表示」領域に追加されます。
9. 「OK」をクリックします。

ルール・ロジック交差

「ルール・ロジック交差」画面では、ターゲット・システムからディメンションを直接選択できます。これにより、必要なディメンションを正確に入力し順序付けできます。

Rule Logic Intersection

Intersection Type: Target Intersection


Dimension: Account

Search

Member Value
A1_1000
A1_1100
A1_1110
A1_1120
A1_1130
A1_1200
A1_1211
A1_1212
A1_1213
A1_1220
A1_1222

Add to Intersection

OK Cancel

ルール・ロジックの「追加/編集」画面の「条件のサマリー」グリッドまたは「表示のサマリー」グリッドから  をクリックして、「ルール・ロジック交差」画面を表示します。

「ルール・ロジック交差」画面では、ターゲット・ディメンションの取得フォーマットのタイプを選択できます。

ルール・ロジック文にマルチディメンショナル参照が選択されると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では交差タイプが使用されます。マルチディメンショナル参照は、ターゲット・システムの勘定科目値、FDMEE ソース・データ、ターゲット・データまたは FDMEE ソース変換済データを取得します。マルチディメンショナル参照を参照してください。

マルチディメンショナル参照

マルチディメンショナル参照は、ターゲット・システムの勘定科目値、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ソース・データまたは FDMEE 変換済データを取得します。マルチディメンショナル参照は、ルール条件およびルール・ロジックの表示で使用できます。

ルール・データ・ソース

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は次の3つのソースからデータを取得できます:

- ターゲットシステム・データ
- FDMEE ソース・データ
- FDMEE 変換済データ

ターゲット・システム・データ

ルールの開始と終わりにパイプ文字(|)が付く次のフォーマットを使用すると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で任意のディメンションのターゲットシステム値を取得できます。

それ以外で指定しないかぎり、パラメータはオプションになります。

```
|Scenario, Period, Year, View, Value, Entity, Account (Required), ICP, Custom1, Custom2, Custom3, Custom4, Custom5, Custom6, Custom7, Custom8, Custom9, Custom10, Custom11, Custom12, Custom13, Custom14, Custom15, Custom16, Custom17, Custom18, Custom19, Custom20|
```

次の例は、ターゲットシステム値を取得する方法を示します。各例では、残高(Balance)がターゲット勘定科目です。参照されないディメンションについては、プレースホルダとしてカンマを使用する必要があります。

次の点に注意してください。

- 年ディメンションのデフォルトは、POV で設定された年です。
- 通貨ディメンションのデフォルトは 0 です。
- ビュー・ディメンションのデフォルトは YTD です。
- 値ディメンションのデフォルトは <Entity Currency> です。

例 1

POV で設定されたターゲット期間とシナリオ(カテゴリ)に対する残高の値と、ロケーションに割り当てられた **FDMEE** 確認エンティティ・グループの各エンティティに対する残高の値を参照します。例のルールは、ターゲット勘定科目が**\$10** 未満で**-10** より大きい場合に、確認をパスします。

```
|,,,,,Balance,,,,,,,,,,,,,| > -10.00 AND
|,,,,,Balance,,,,,,,,,,,,,| < 10.00
```

例 2

指定されたディメンションの残高の値を参照します。

```
|Actual, March, 2002, YTD, Ohio, Balance, Michigan, Engines, Ford, Trucks,
[None],,,,,,,,,,,,,,USD| > 0
```

例 3

指定されたディメンションおよび前期間の残高の値を参照します。

```
|Actual, -1, 2002, YTD, Ohio, Balance, Michigan, Engines, Ford, Trucks,
[None],,,,,,,,,,,,,,USD| > 0
```

例 4

FDMEE POV で設定されたターゲット・シナリオ(カテゴリ)、前のターゲット期間、およびロケーションに割り当てられた **FDMEE** 確認エンティティ・グループの各エンティティに対する残高の値を参照します。

例 1

現在の年ディメンションが"**2015**"の場合に**+n** および**-n** を使用して確認ルールで相対オフセットを指定する方法を次に示します。

```
-1 result is 2015 - 1 = 2014 (Year - n)
```

```
+1 result is 2015 + 1 = 2016 (Year + n)
```

例 2

現在の期間ディメンションが"**January**"の場合に**+n** および**-n** を使用して確認ルールで相対オフセットを指定する方法を次に示します。

```
-1 result is January - 1 = January
```

```
+1 result is January + 1 = February
```

```
+12 result is January + 12 = December
```

FDMEE ソース・データ

ルールの開始と終わりにティルデ文字(~)が付く次のフォーマットは、ターゲット・メンバーにマッピングされた後に **Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** にロードされたデータから値を取得します。

それ以外で指定しないかぎり、パラメータはオプションになります。UD#と示されているパラメータは、ユーザー定義パラメータです。

```
~FDMEE Category, FDMEE Period, Year (Field Not Applicable), FDMEE
View, FDMEE Location, Source Entity(Required), Source
Account(Required), Source ICP, Source UD1,Source UD2, Source UD3,
Source UD4, Source UD5, Source UD6, Source UD7,Source UD8, Source UD9,
Source UD10, Source UD11, Source UD12, Source UD13,Source UD14, Source
UD15, Source UD16, Source UD17, Source UD18, Source UD19, Source UD20~
```

FDMEE 変換済データ

ルールの開始と終わりに抑音アクセント文字(`)が付く次のフォーマットは、**Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** にロードされたデータからプル値を取得します。特別に指定されないかぎり、パラメータはオプションです。

```
`FDMEE Category, FDMEE Period, Year (Field Not Applicable), FDMEE
View, FDMEE Location, Entity(Required), Account(Required), ICP,
Custom1, Custom2, Custom3, Custom4, Custom5, Custom6, Custom7,
Custom8, Custom9, Custom10, Custom11, Custom12, Custom13, Custom14,
Custom15, Custom16, Custom17, Custom18, Custom19, Custom20`
```

算術演算子

算術演算子(+、-、*、/) - 算術演算子を選択した場合、確認ルールの金額は、指定された式を元の金額に対して計算した金額に等しくなります。たとえば、演算子*を選択し、「ルール」フィールドに **2** を入力した場合、新しいレコードの金額は元の金額に **2** を掛けた金額となります。式に使用可能な算術演算子は次のとおりです:

- + (加算)
- - (減算)
- * (乗算)
- / (除算)
- abs ()

If/Then/Else

確認ルールには If/Then/Else 文を使用でき、「テキストとして追加/編集」タブでより複雑な条件テストを作成できます。この文では、if 文が **true** に評価された場合に実行される第 1 の経路および if 文が **false** に評価された場合に実行される第 2 の経路が指定されます。

If/Then/Else 文を使用すると、警告メッセージやフラグとしてカスタム・フィールドの値をレポートで使用できます。

次の例では、結果が 100 から 1500 のとき、「確認レポート(警告)」に「Amount between 100 and 1500」と出力されます。この例では次の 3 つのデータ勘定科目を参照します:

1. 24000050: 1000
2. 24000055: 500
3. 24000060: 10

この例のこの計算は $1000 + 500/10$ で、結果が 1050 です。

スクリプトは Jython コードによって記述されます:

```
def runVal():

    dbVal=abs((|,,,,,BERLIN,24000050,[ICP None],[None],[None],[None],
[None],,,,,,,,,,,,,|)+(|,,,,,BERLIN,24000055,[ICP None],[None],[None],
```



```
[None], [None],,,,,,,,,,,,,,) / (,,,,,BERLIN,24000060, [ICP None],  
[None], [None], [None], [None],,,,,,,,,,,,,,))
```

```
PstrCheckMessage1=''
```

```
msg2=''
```

```
msg3=''
```

```
if(dbVal<100):
```

```
    RESULT=True
```

```
    PstrCheckMessage1='Amount < 100.'
```

```
elif(dbVal>100 and dbVal<=1500):
```

```
    RESULT=True
```

```
    PstrCheckMessage1='Amount between 100 and 1500.'
```

```
elif(dbVal>1500 and dbVal<=9999):
```

```
    RESULT=True
```

```
    PstrCheckMessage1='Amount between 1501 and 9999.'
```

```
else:
```

```
    RESULT=False
```

```
    PstrCheckMessage1='Amount greater than 9999!'
```

```
return [RESULT,PstrCheckMessage1,msg2,msg3]
```

 **ノート:**

ステータス表にデータを書き込むには、**return** 文とともに **3** つのメッセージ・パラメータを含める必要があります。1 つのメッセージのみを書き込む場合、他の 2 つのメッセージ・パラメータは必要です。

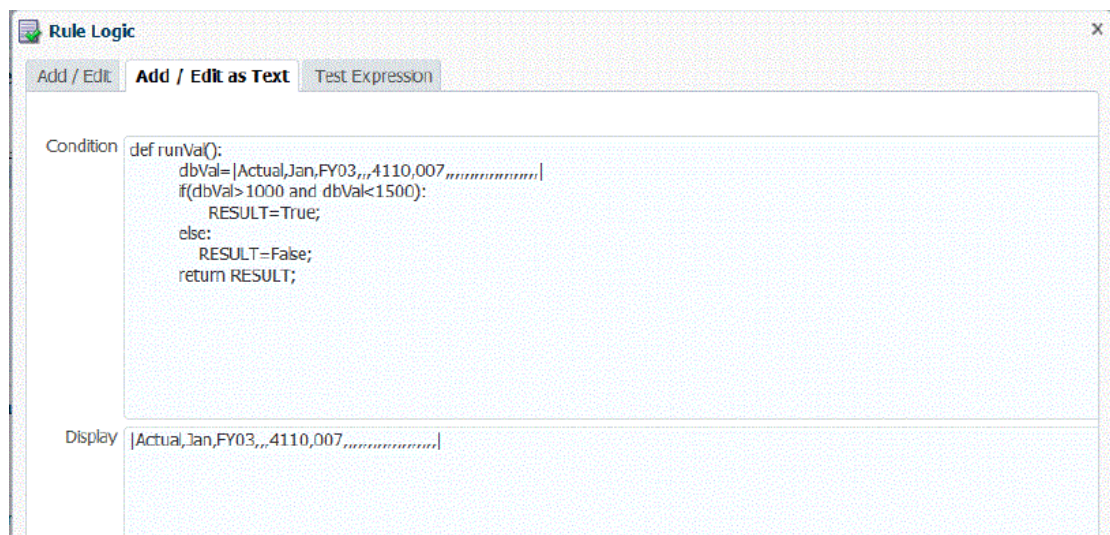
このスクリプトの実行結果は確認レポート(警告あり)に表示されます:

		Location: MultiPer_SSN	
		Category: Actual	
		Period: 2008-05-01	
Validation Group: Check			
Pass			
BERLIN			
Account	Rule Definition	Value	
Ok	24000050	24000050	1,050.00 Amount between 100 and 1500.

フリー・フォーム・テキストとしてのルール・ロジック文の追加

ルール・ロジックの「テキストとして追加/編集」 タブを使用して、手でテストするルールをフリーフォーム・テキストとして追加します。この機能により、確認ルール・ロジックの実績値を表示する方法をシステムに指示できます。これで、いつでも、テキストを 1 行ずつ入力するかわりに、テキストを切り取って貼り付けることができます。表示のサマリーを指定しないと、値"0"がレポートに表示されます。

「表示」領域がアクティブな場合、すべての操作は「表示」領域で行われます。たとえば、ツリーを貼り付けると、すべてのツリー・メンバーが「表示」領域にコピーされます。「ルール」領域がアクティブな場合、すべての操作は「条件」領域で行われます。「検索」タブで行われたすべての変更は、関連するエディタの「ルール」タブに反映されます。



ルール・ロジック文を追加するには:

1. **ルール・ロジック・エディタ**で、**ルール・ロジック**の「テキストとして追加/編集」タブを選択します。
2. 「**ルール**」に、ルールを入力します。
 確認ルールでは、セミコロン(;)は使用しないでください。セミコロンは、ルール値と表示値の間の区切り文字として予約されています。
 金額を検証するために等号を使用するときは、等号(=)ではなく二重等号(==)を使用してください。たとえば、「**a - b=0**」ではなく「**a - b == 0**」を使用します。
3. 「**OK**」をクリックします。

確認ルール式のテスト

「ルール・ロジック」タブの「テスト式」タブでルールをテストし、ディメンションの組合せの条件を検証できます。テスト・チェック・ルールの送信時に、テストされるルールで見つかったエラーを表示できます。

「テスト式」画面には次の要素が含まれます。

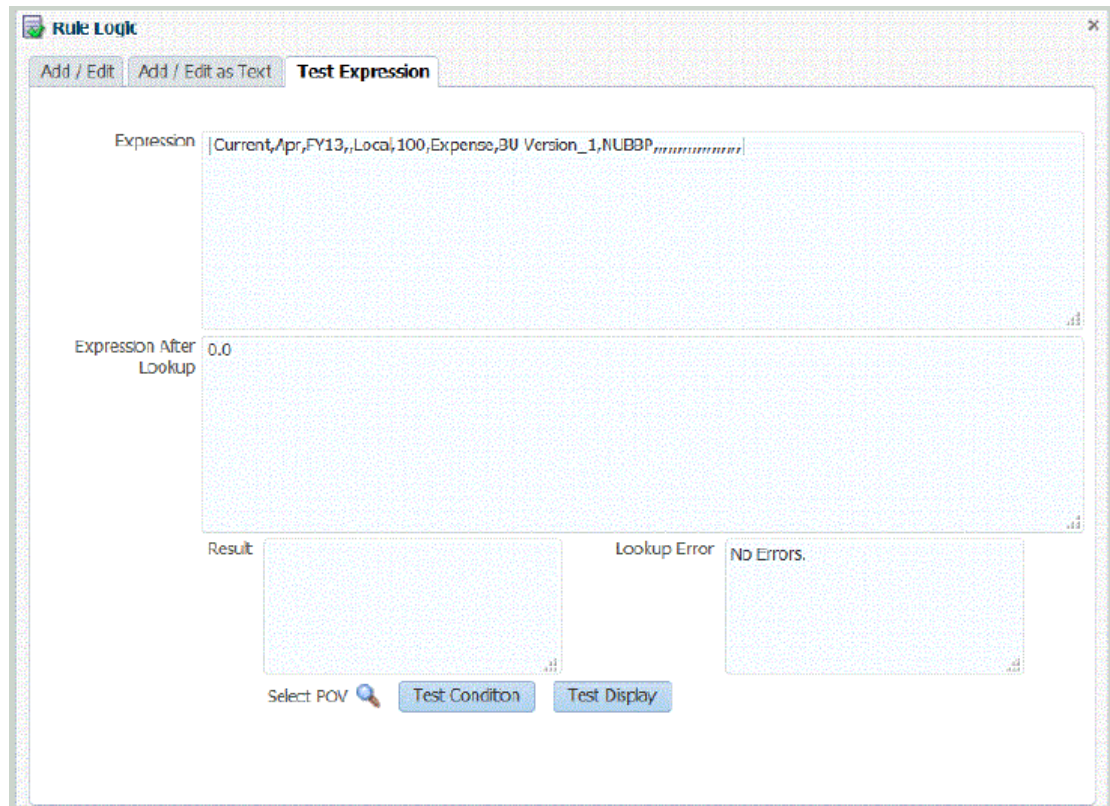
- **式**: テストするルールを表示する領域
- **参照の後の式**(スクラッチ・パッド) - テストされている式の結果を表示する領域。(テキストを選択して右クリックすると、テキストおよび式を一時的に格納するために領域を使用できます。)

「テスト条件」または「表示のテスト」をクリックすると、このフィールドの式は削除されます。
- **結果** - テスト条件の結果(True または False)を表示する領域
- **参照エラー**: テストされている式で見つかったエラーを表示する領域
- **POVの選択**: 確認ルール POV を選択できます。
 「視点の選択」画面で別の POV を選択するか、「メンバー・セレクタ」画面で特定のエンティティを選択します。

ノート:

POV は、データが特定の POV に対するアプリケーションにエクスポートされた後でのみ設定できます。POV を入力し、テストするルールを実行します。入力された POV は、現在のセッションの間設定されたままになります。POV を再設定することなくワークベンチに移動して戻ることができます。

- 「**テスト条件**」および「**表示のテスト**」 - 「ルール」タブの「条件」または「表示」領域でルールを実行するときに使用するボタン



ルール・ロジック文をテストするには:

1. **ルール・ロジック・エディタ**で、「**テスト式**」タブを選択します。
2. 「**POVの選択**」をクリックしてルールのPOVを選択します。
オプションで、「**エンティティ**」参照をクリックし、「**メンバー・セレクト**」画面でメンバーを選択できます。
3. **条件のテスト**または**表示のテスト**をクリックして、他のタブで指定された条件または表示をテストします。
式を編集する必要がある場合、他のルール・タブ(「追加/編集」および「テキストとして追加/編集」)に移動して式を変更します。
4. 「**OK**」をクリックします。

BSO Essbase キューブの確認レポートの実行

BSO Essbase キューブの確認レポートを実行する前に、完全修飾名を使用して、ディメンション内やディメンション間で使用される重複するメンバーを必ず区別してください。重複するメンバー名から完全修飾名を作成するには、ルール・ロジックの「テキストとして追加/編集」画面で完全修飾名をルール・ロジック文として追加します(フリー・フォーム・テキストとしてのルール・ロジック文の追加を参照)。この要件は、Oracle Hyperion Profitability and Cost Management、Financial Consolidation and Close および Tax Reporting に適用されます。

完全修飾メンバー名は、重複するメンバー名または別名、およびディメンション名までのすべての祖先から構成されます。それぞれの名前は大カッコ(())で囲まれ、ピリオド(.)で区切られる必要があります。構文は次のとおりです。

```
[DimensionMember].[Ancestors...].[DuplicateMember]
```

例:

```
[Market].[East].[State].[New York]
```

```
[Market].[East].[City].[New York]
```

『Oracle® Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

確認エンティティ・グループの作成

確認エンティティ・グループは、1つ以上のターゲットシステム・エンティティで構成されます。確認レポートが生成されると、レポート・ロケーションに割り当てられたエンティティ・グループのエンティティが連結され、レポートに表示されます。確認エンティティ・グループをアクティブにするには、ロケーションに割り当てます。確認エンティティ・グループの確認エンティティを定義するには、**確認エンティティ** 画面の確認エンティティ・フォームのフィールドに値を入力します。

「確認エンティティ・グループ」画面は、3つのグリッドで構成されます:

- 確認エンティティ・グループのサマリー - 確認エンティティ・グループの名前がリストされ、新しい確認エンティティ・グループを作成できるサマリー領域です。
- 確認エンティティ・グループの詳細 - 確認エンティティ・グループの名前と説明を指定できる詳細領域です。
- エンティティの詳細 - エンティティの情報を追加できる詳細領域です。

確認エンティティ・グループを追加するには:

1. 「設定」タブの「データ・ロードの設定」で、「確認エンティティ・グループ」を選択します。
2. 「確認エンティティ・グループ」グリッドで、「追加」をクリックします。
グリッドの上部に空白の行が追加されます。
3. 確認エンティティ・グループの詳細領域から、「名前」フィールドに確認エンティティ・グループ名を入力します。
オプション: 「説明」フィールドに、確認エンティティ・グループの説明を入力します。
4. 「保存」をクリックします。

エンティティの詳細を追加するには:

1. 「確認ルール・グループ」サマリー・グリッドで、確認エンティティ・グループを選択します。
2. 「エンティティ」詳細グリッドで、「追加」をクリックします。
空白のオプション行が表示されます。

3. 次のフィールドに入力します:

- 親
- エンティティ
- 連結
- レポート
- シーケンス

4. 「保存」をクリックします。

表 5-2 「エンティティの詳細」のオプションと説明


オプション	説明
親	エンティティを連結する組織を指定します。それ以外のターゲット・システムでは、エンティティの親を選択します。「連結」オプションが選択されていない場合、選択は効果がありません。
スクリプト名	Oracle Hyperion Planning および Oracle Essbase 計算スクリプトの場合は、実行する計算スクリプト名を指定します。 このフィールドは、 Essbase または Planning アプリケーション・オプションで「エンティティ計算方法の確認」が「計算スクリプト」に設定されている場合にのみ使用可能です。
計算スクリプト・パラメータ	 をクリックして計算スクリプトのスクリプトを参照し、「計算スクリプト・パラメータの設定」画面で設定します。「計算スクリプト・パラメータの設定」画面で計算スクリプトを追加することもできます。 確認ルール・プロセスの一部として、 Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition はカスタム計算スクリプトに含まれる計算スクリプト・パラメータを参照します。計算スクリプトとは一連の計算コマンド、等式および式であり、これらを使用すると、データベース・アウトラインによる定義以外の計算を定義できます。計算スクリプトは、 Essbase および Planning ターゲット・アプリケーション・オプションで定義します(詳細は、 計算スクリプトの使用 を参照)。 このフィールドは、 Essbase または Planning アプリケーション・オプションで「エンティティ計算方法の確認」が「計算スクリプト」に設定されている場合にのみ使用可能です。 「エンティティ計算方法の確認」が" dynamic "に設定されている場合、このフィールドは使用できません。
エンティティ	連結して確認レポートに表示するターゲット・エンティティを指定します。「連結」オプションを選択した場合、エンティティは確認レポートに表示される前に連結されます。

表 5-2 (続き) 「エンティティの詳細」のオプションと説明

オプション	説明
連結	<p>これを選択すると、エンティティは確認レポートに表示される前に連結されます。</p> <p>FDMEE では、ターゲット・システムのロード後も連結が実行されます(確認エンティティ・グループがロケーションに割り当てられている場合)。連結されるエンティティは、アクティブなロケーションに割り当てられている確認エンティティ・グループに指定されます。</p> <p>Planning — ターゲット・アプリケーションの「エンティティ 計算方法の確認」プロパティに応じて、デフォルトの計算または計算スクリプト名に指定された計算スクリプトを実行します。</p> <p>Essbase — ターゲット・アプリケーションの「エンティティ 計算方法の確認」プロパティに応じて、デフォルトの計算または計算スクリプト名に指定された計算スクリプトを実行します。</p> <p>Oracle Hyperion Financial Management - Financial Management データベースでデータの連結が発生します。</p>
レポート	<p>「レポート」列で選択したオプションによって、エンティティが確認レポートに表示されるかどうかが決まります。「レポート」が選択されていない場合に「連結」が選択されていると、エンティティは連結されますが、表示されません。</p>
シーケンス	<p>エンティティを連結する順序と確認レポートに表示する順序を指定します。</p> <p>エンティティを挿入する余地を残すためにシーケンス番号を 10 ずつ大きくすることをお勧めします。</p>

6

バッチ処理

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のバッチ処理機能を使用して、次を実行できます:

- バッチ内で 1 つ以上のロード・ルールを組み合わせて、一度に実行します。
- バッチ処理でのジョブ実行をシリアル・モードまたは並列モードで行います。
- バッチのパラメータを定義します。
- POV 設定に基づいた期間パラメータを導出します。
- 異なるパラメータを持つ複数のバッチを含む"マスター"のバッチを作成します。
たとえば、1 つ目はシリアル・モードでメタデータ・ルールを実行するためのバッチ、2 つ目は並列モードでデータ・ルールを実行するためのバッチにできます。
- 使いやすさやセキュリティのためにバッチ・グループにバッチを関連付けます。
- 含まれているジョブを並列モードで送信して制御を返すようにバッチに指示します。
- すべてのジョブが完了している場合のみ、含まれているジョブを並列モードで送信して制御を返すようにバッチに指示します。

バッチ処理オプションは、FDME のタスク・ペインで、またはバッチ・スクリプトを実行することにより使用できます。

FDME タスク・ペインからバッチを処理する場合、「バッチ定義」オプションを使用してバッチを作成し、バッチに含めるパラメータとタスクを指定します。[バッチ定義の操作](#)を参照してください。「バッチ実行」オプションを使用して、バッチを実行します。[バッチの実行](#)を参照してください。

ノート:


FDME バッチ・ロード機能は Account Reconciliation Manager には使用できません。Accounts Reconciliation Manager のロードとスケジューリング機能については、*Oracle Hyperion Financial Close Management ユーザー・ガイド*を参照してください。

バッチ定義の操作

バッチ定義を使用して、バッチ・ジョブとパラメータ、およびバッチに含まれるルールのタイプを定義します。バッチには 1 つのルールしか含まれません。有効なルールのタイプは次のとおりです:

- メタデータ
- データ
- バッチ

- オープン・バッチ

 **ノート:**

バッチ定義を作成できるのは管理者のみです。

別のターゲット・アプリケーションからのデータ・ロード・ルールを含むバッチ定義を作成できます。これにより、メタデータとデータの両方をロードするバッチを使用したり、メタデータ用の1つのバッチおよびデータ用の別のバッチを含む、複数のバッチをまとめたバッチを作成できます。

メタデータ・アプリケーションに関連付けられたデータ・ロード・ルールを操作する場合、**Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** では、フラット・ファイルからのメタデータのロードがサポートされます。詳細は、を参照してください

バッチ定義機能には次の3つの領域があります:

- **バッチ定義の詳細** - バッチ定義の追加および削除を行うことができます。定義を追加または変更する場合、定義名、ターゲット・アプリケーション、処理方法、制御を返す方法および待機パラメータを指定します。
- **バッチ定義パラメータ** - ソースにインポート、「ターゲットにエクスポート」、「POV期間」に基づいた期間パラメータの導出、およびデータ抽出パラメータの指定を行うことができます。パラメータ定義は、バッチ・タイプ「バッチ」および「メタデータ(ルール)」に対して使用できません。
- **バッチ定義ジョブ** - バッチにおけるジョブを追加および削除できます。バッチのタイプに応じて、特定のタイプのルールを使用できます。

バッチ定義を追加するには:

1. 「設定」タブの「バッチ」で、「**バッチ定義**」を選択します。
2. 「**バッチ定義**」サマリー・セクションで、「**追加**」をクリックします。
「バッチ定義」サマリー・グリッドで空白の「名前」フィールドおよび「ターゲット・アプリケーション」フィールドを使用して、バッチ名または検索対象のターゲット・アプリケーションを入力します。
3. 「**バッチ定義**」詳細セクションで、「**定義**」タブを選択します。
4. 「**名前**」に、バッチ定義の名前を指定します。
名前には、英数字またはアンダースコアしか使用できません。空白や他の文字を入力しないでください。
5. 「**ターゲット・アプリケーション**」から、ターゲット・アプリケーションの名前を選択します。
6. 「**タイプ**」から、定義のルールのタイプを選択します。

使用可能なタイプは次のとおりです:

- メタデータ
- データ
- バッチ


- オープン・バッチ - ファイルベースのデータ・ソース
- 開始期間と終了期間を含むオープン・バッチ複数期間ファイルベース・データ・ソース。

複数のターゲット・アプリケーションを含める場合は、ルールのタイプがタイプと整合性があることを確認してください。たとえば、タイプが「バッチ」のバッチには、データ・ルールを含めることができません。バッチのみを含めることができます。タイプが「データ」のバッチには、バッチを含めることができません。

「オープン・バッチ」タイプは、ファイルベースのデータ・ソースのみで使用できます。このタイプにはバッチ・ジョブは含まれません。このタイプのバッチを実行すると、プロセスが、openbatch ディレクトリからファイルを自動的に読み取り、ファイル名に基づいて適切な POV にインポートします。「オープン・バッチ」を実行すると、マスター・フォルダが空になります。

7. 「実行モード」から、バッチ処理方法を選択します。

- シリアル - ファイルは順に処理され、1 つのファイルのプロセスが完了するまで、次のファイルのプロセスは開始されません。
- 並列 - ファイルは同時に処理されます。

 ノート:

並列モードでは、ファイルはロケーションごとにグループ化されません。

8. 並列モードで実行されるバッチ処理については、次のフィールドを指定します。

- **完了の待機** - 「待機する」を選択すると、バッチ処理が終了したときに制御が返されます。

「待機しない」を選択すると、バックグラウンドでバッチを実行します。この場合、すぐに制御を返します。

- **タイムアウト** - ジョブの最大実行時間を指定します。FDMEE はジョブの完了を待ってから制御を戻します。

「タイムアウト」には秒数または分数を指定できます。数値を入力してから、**S** (秒) または **M** (分) を入力します。

9. 「オープン・バッチ」タイプの「オープン・バッチ・ディレクトリ」で Home\inbox\batches openbatch の下にフォルダを指定します。ここに、インポートされるファイルがコピーされます。このフィールドが空白または null の場合、Home\inbox\batches\openbatch 下のすべてのファイルが処理されます。

10. 「オープン・バッチ」の「ファイル名セパレータ」で、オープン・バッチ・ファイル名の 5 つのセグメントを区切るために使用する文字を選択します。

オプション:

- ~
- @
- ;
- -

11. 「データ・ルールの自動作成」を選択すると、ファイルベースのデータ・ロードのためにデータ・ルールが自動的に作成されます。

 **ノート:**

「データ・ルールの自動作成」オプションは、ルール・タイプが「オープン・バッチ」の場合に使用できます。

FDMEE がデータ・ルール名を割り当てるとき、「Location_Category」という名前を含むデータ・ルールが存在するかどうかチェックします。この名前が存在しない場合、FDMEE は次のファイル命名規則を使用してデータ・ルールを作成します:

- ルール名 — Location_Category
- 説明 - 自動的に作成されるデータ・ルール
- カテゴリ — カテゴリ
- ファイル名 — Null
- モード — 置換

12. オプション: 「説明」 フィールドで、バッチ定義の説明を入力します。

13. 「保存」 をクリックします。

14. オプション: 「バッチ・グループ」 で、バッチに関連付けるバッチ・グループを選択します。

詳細は、[バッチ・グループの追加](#)を参照してください。

15. オプション: 「パラレル・ジョブの数」 には、バッチにより送信される並列処理の最大数をいつでも指定できます。

このオプションは、「完了の待機」および「タイムアウト」フィールドとともに使用します。


「完了の待機」とタイムアウト時間のオプションが設定されていて、パラレル・ジョブの数が設定されていない場合、FDMEE では、すべてのバッチ・ジョブの完了を待機してから、コントロールが戻されます。


パラレル・ジョブの数が設定されていて、「完了の待機」/「タイムアウト」モードが有効化されている場合は、一度に処理する、指定された数のジョブが送信されます。すべてのジョブが完了する前に待機時間に達すると、バッチ処理手順が終了します。

「完了の待機」設定は、サブセットごとではなく、バッチ全体が対象になります。たとえば、パラレル・ジョブの数が 4 で、タイムアウト時間が 10 分に設定されているところに、20 のジョブがあるとします。10 分で完了したジョブが 15 のみの場合でも、システムは終了します。

「待機しない」が指定されている場合は、すべてのジョブが送信され、実行中のプロセスの完了を待機せず、送信されたコントロールがすぐに戻されます。

16. オプション: 「バッチ前スクリプト」 に、バッチの前に実行するカスタム・スクリプトの名前を入力します。


 をクリックして、選択画面でカスタム・スクリプトを参照して選択するか、アップロードできます。

 **ノート:**

カスタム・スクリプトがバッチ定義に添付されている"バッチ前スクリプト"で実行されている場合、パラメータが読み取られるように、カスタム表またはファイルにパラメータを格納します。

カスタム・スクリプトは Jython または Visual Basic スクリプトで記述できます。

17. **オプション: 「バッチ後スクリプト」** に、バッチの後に実行するカスタム・スクリプトの名前を入力します。

 をクリックして、選択画面でカスタム・スクリプトを参照して選択するか、アップロードできます。

カスタム・スクリプトは Jython または Visual Basic スクリプトで記述できます。

18. **「保存」** をクリックします。

バッチ定義のパラメータを追加するには:

1. **「設定」** タブの **「バッチ」** で、**「バッチ定義」** を選択します。
2. **「バッチ定義」** の **「バッチ定義の詳細」** で、**「パラメータ」** タブを選択します。
3. **「パラメータ」** で、**「ソースからインポート」** を選択すると、ソース・システムからデータがインポートされて必要な変換が実行され、FDMEE ステージング表にデータがエクスポートされます。
4. **「ターゲットにエクスポート」** を選択すると、データがターゲット・アプリケーションにエクスポートされます。
5. **「POV 期間」** を選択して、POV 設定に基づいた期間パラメータを導出します。

「POV 期間」を選択すると、期間キーの「開始期間」および「終了期間」は無効になります。

このフィールドはデータ・ロード・バッチの場合のみ使用可能です。

バッチを設定する場合は、期間を派生させる POV を選択するか、期間を明示的に入力します。POV を選択すると、「システム」、「アプリケーション」または「ユーザー」設定の「デフォルト POV 期間」設定から取り出されます。

6. **「開始期間」** および **「終了期間」** で日付を指定し、データを処理する期間パラメータを導出します。

ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、MM/DD/YY という形式を使用して日付を入力します。

「開始期間」および「終了期間」を選択すると、「POV 期間」フィールドは無効になります。

このフィールドはデータ・ロード・バッチの場合のみ使用可能です。

7. **「インポート・モード」** ドロップダウンで、期間全体のデータをすべて一度に抽出するモードか、期間中にデータを徐々に抽出するモードのいずれかを選択します。

オプションは次のとおりです:

- **スナップショット** - 期間全体について選択したソース・セットをすべて抽出します
スナップショット・モードの次の動作に注意してください:

- 選択した期間のソース・データが実行されていない場合、データはソースから抽出されます。
- 選択した期間のソース・データが実行されている場合、データはソースからではなく、**FDMEE** ステージング表から抽出されます。これは、ユーザーに同じ **Enterprise Resource Planning (ERP)** ソースから抽出するロケーションが 2 つある場合、データはソースから 1 回のみ(初回のみ)抽出されるということです。

たとえば、選択した期間のデータを **Oracle E-Business Suite** から **Oracle Hyperion Financial Management** にロードしたが、同じソースおよび期間について **ARM** への統合を実行する場合、データはソースから初回のみ抽出されるため、インタフェース表のデータを使用します。この結果、その後のデータ・ロードのパフォーマンスが大幅に向上します。最初の抽出に最も時間がかかり、その後の抽出は速くなります。

- **増分** - 前のデータ抽出後に追加されたレコードを抽出します

ノート:

増分モードを使用して **Peoplesoft** からデータを取得している場合、**PeopleSoft** 一般会計の表の最新の **PROCESS_INSTANCE** エントリに基づいて、取得するレコードが特定されます。たとえば、ジョブを正午に実行するように午前 8 時にスケジュールし、ユーザーが午前 10 時にジョブを実行した場合、午前 10 時に転記されたレコードのみが増分実行で取得されます。増分モードを使用してレコードが取得されなかった場合、完全リフレッシュを実行してすべてのレコードを取得する必要があります。

- **完全リフレッシュ** - ソース・システムからのクリーン抽出を実行し、その結果、指定したソース元帳(またはビジネス・ユニット)およびソース期間の、該当する **FDMEE** ステージング表内の既存のデータ行をクリアします。

複数期間を使用するオープン・バッチのファイル名を定義する場合、10~Filerule~Jan03~Mar03~FR.txt のように、開始期間および終了期間をファイル名に指定します。

単一期間を使用するオープン・バッチのファイル名を定義する場合、10-OBFilerule-Jan03-FR.txt のように、期間をファイル名に指定します。

ノート:

インポート・モードのオプション(スナップショット、増分および完全リフレッシュ)は、標準インポート・フォーマットを使用するロケーションでデータ・ルールに対してのみ適用できます。ソース・アダプタ・インポート・フォーマットが設定されたロケーションのデータ・ルールでは、常に完全データ抽出(完全リフレッシュに類似)が実行され、データは直接 **TDATASEG_T** 表に移入されます。

- 追加 - **POV** の既存の行は変更されず、新しい行が **POV** に追加されます。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 50 行が含まれるとします。この

場合、FDMEE は 50 行を追加します。このロードの後で、POV の行の合計は 150 です。

- 置換 — POV の行をロード・ファイルの行で置き換えます(つまり、TDATESEG の行が置換されます)。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 70 行が含まれるとします。この場合、FDMEE はまず 100 行を削除してから、70 行を TDATESEG にロードします。このロードの後で、POV の行の合計は 70 です。

ノート:

Account Reconciliation Manager (ARM)でデータ・ロードを完全リフレッシュモードで実行する場合は、データがあるすべてのロケーションを選択してください。そうしないと、ARM で選択されていないロケーションのデータが FDMEE には含まれ、ARM には含まれないこととなります。その結果、FDMEE の内容と ARM の内容に不一致が生じます。

このフィールドはデータ・ロード・バッチの場合のみ使用可能です。

8. 「**為替レート**の抽出」を選択して、為替レートを抽出します。

[通貨の処理方法](#)を参照してください。

(このオプションはファイル・ベースのソース・システムには適用されません)。

9. Oracle Essbase、Oracle Hyperion Planning および Financial Management アプリケーションのオプションの場合、「**エクスポート・モード**」ドロップダウンで、データのエクスポート・モードを選択してください。

Essbase または Planning アプリケーションのオプション:

- STORE_DATA
- REPLACE_DATA
- ADD_DATA
- SUBTRACT_DATA
- OVERRIDE_ALL_DATA

このフィールドはデータ・ロード・バッチの場合のみ使用可能です。

Financial Management アプリケーションのオプション:

- 累計
- 置換
- マージ
- セキュリティを基準にして置換

10. Essbase または Planning の場合、「**プラン・タイプ**」ドロップダウンから、アプリケーションのプラン・タイプを選択します。

11. 「**保存**」をクリックします。

バッチ・ジョブを追加するには:

1. 「**設定**」タブの「**バッチ**」で、「**バッチ定義**」を選択します。
2. 「**バッチ定義**」の「**バッチ・ジョブ**」で、「**追加**」をクリックします。

「**ルール名**」に、バッチ・ジョブに関連付けられたルール名を指定します。



を選択し、ルール名を検索して選択することもできます。

3. 「**ジョブ・シーケンス**」で、バッチを逐次処理する順序を指定します。
4. 「**保存**」をクリックします。

バッチ・グループの追加

バッチ・グループを使用すると、バッチを実行する際にセキュリティの適格性を判別できます。

[セキュリティ・オプションの設定](#)を参照してください。

バッチ・グループを追加するには:

1. 「**設定**」タブの「**バッチ**」で、「**バッチ定義**」を選択します。
2. 「**バッチ・グループ**」タブを選択します。
3. 「**追加**」をクリックします。
4. 「**名前**」にバッチ・グループ名を指定します。
5. 「**保存**」をクリックします。
6. **オプション**: 次のようにバッチをバッチ・グループに関連付けます:
 - a. 「**バッチ**」タブを選択します。
 - b. 「**バッチ**」のサマリー・セクションで、バッチ・グループを関連付けるバッチを選択します。
 - c. 「**バッチ**」詳細セクションで「**定義**」タブを選択します。
 - d. 「**バッチ・グループ**」で、バッチに関連付けるバッチ・グループを選択します。
 - e. 「**保存**」をクリックします。

バッチの実行

バッチ実行機能を使用し、割り当てられているバッチ・グループに基づいて、アクセスしたバッチをすべて表示します。バッチ実行機能を使用して、バッチを選択したり、ルールに渡されたパラメータの検証後にルールを実行したりすることもできます。

「バッチ実行」では、割り当てられたバッチ・グループに基づいてアクセスしたすべてのバッチが表示されます。

ノート:

「バッチ実行」オプションには、統合の実行の役割を持つユーザーのみがアクセスできます。

ルールを実行するには:

1. 「ワークフロー」タブの「その他」で、「バッチ実行」を選択します。
2. 「バッチ実行」サマリー領域で、バッチ名を選択し、「実行」をクリックします。
3. オプション: 「スケジュール」をクリックしてジョブをスケジュールすることもできます(ジョブのスケジュールを参照)。「ステータスのチェック」をクリックして、バッチのステータスをチェックできます(プロセス詳細の表示を参照)。

オープン・バッチの使用

オープン・バッチ機能は、ファイルベースのデータ・ソースを読み取り、ファイル名に応じて適切な POV にインポートするために使用されます。ワークフロー・プロセス(データ・ロード・ワークベンチで魚のアイコンが表示される 4 つのステップ(インポート、検証、エクスポートおよび確認)など)の自動化とスケジュール(特に、大量の外部ファイルのロードを処理する必要がある場合の自動化とスケジュール)を可能にするバッチ定義タイプです。オープン・バッチはジョブを含むことはできません。また、オープン・バッチは定期的に行うようにスケジュールできます。

オープン・バッチ機能のプロセスの概要を次に示します:

1. 「バッチ定義」で、「オープン・バッチ」タイプを使用して、新しいバッチ定義を追加します。
2. インポートされるファイルがコピーされる、アプリケーションの `inbox\batches` サブディレクトリに `openbatch` フォルダを作成します。

バッチが処理された後、ディレクトリが作成され、`OpenBatch` ディレクトリ内のすべてのファイルが新規ディレクトリに移動します。新規ディレクトリには一意のバッチ ID が割り当てられます。
3. 「ファイル名セパレータ」文字を選択します。

この文字は、オープン・バッチ・ファイル名の 5 つのセグメントを区切るために使用されます。
4. 「データ・ルールの自動作成」オプションを選択します。
5. バッチ・ファイルの名前形式を使用して、オープン・バッチ・ファイルを `inbox\batches\openbatch` フォルダにコピーして、ファイルをステージングします。
6. 「バッチ実行」でバッチを処理します。

オープン・バッチ・ファイルの名前フォーマット

オープン・バッチ・ファイルの名前は次のセグメントで構成されます:

- POV - ロケーション、期間、カテゴリなど、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition によってデータが処理される視点
- インポート・ロード方法 - `FDMEE` がデータを POV にインポートする方法
- エクスポート・ロード方法 - `FDMEE` がデータをターゲット・アプリケーションにエクスポートする方法

オープン・バッチは `inbox\batches\openbatch` およびサブフォルダ(作成されている場合)にあります。

命名規則

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、次の方法を使用して、オープン・バッチ・ファイルに名前を付けます:

1. データ・ロード・ルールの自動作成 - データ・ロード・ルールが最初に作成される
ときに使用されます。
2. 既存のデータ・ロード・ルール - データ・ロード・ルールが **FDME** で作成される
ときに使用されます。

FDME でデータ・ルール名が自動的に作成される場合、名前が "Location_Category" の
データ・ルールが存在するかどうかチェックされます。名前が存在しない場合、
FDME はファイルの命名規則を使用してデータ・ルールを作成します: ファイル ID~ロ
ケーション~カテゴリ~期間~RR.ext (この例では ~ (チルダ) のファイル名区切りを使用し
ています)。

- ファイル ID - 指定されたロケーションのファイルのソートに使用されるフリーフ
ォームの値。ファイルは、ロケーション別かつロケーション内でソートされ、ファ
イル ID はファイルのソートに使用されます。
- ロケーション - **POV** のロケーション
- カテゴリ - **POV** のカテゴリ
- 期間 - **POV** 期間
- ロード方法 - 2 文字の値。最初の文字はインポート・フォーマットを示し、2 番目
の文字はエクスポート・フォーマットを示します。
インポート・モードの有効な値は **A** および **R** です。
エクスポート・モードの有効な値は **A**、**R**、**M** および **S** です。
詳細は、[オープン・バッチ・インポートおよびエクスポート・ロード方法](#)を参照し
てください。
- ext - ファイル拡張子(txt または csv)

FDME が、データ・ルールがオープン・バッチにすでに存在することを検出すると、
次のファイル命名規則が使用されます: ファイル ID~期間~RR.ext (この例では、~ (チル
ダ) のファイル名区切りが使用されています)

- ファイル ID - バッチ実行のロード順序の定義に使用されるフリーフォームの値。
バッチ・ファイルは、ファイル名のアルファベット順にロードされます。
- データ・ロード・ルール - データ・ロード・ルール名
- 期間 - **POV** 期間
- ロード方法 - 2 文字の値。最初の文字はインポート・フォーマットを示し、2 番目
の文字はエクスポート・フォーマットを示します。
インポート・モードの有効な値は **A** および **R** です。
エクスポート・モードの有効な値は **A**、**R**、**M** および **S** です。
詳細は、[オープン・バッチ・インポートおよびエクスポート・ロード方法](#)を参照し
てください。
- ext - ファイル拡張子(txt または csv)

オープン・バッチ・インポートおよびエクスポート・ロード方法

次のインポート・ロード方法があります:

インポート・ロード方法	ファイルベース	E-Business Suite および PeopleSoft
A	追加	該当なし
R	置換	該当なし
F	該当なし	完全リフレッシュ
I	該当なし	増分
S	該当なし	スナップショット

次のエクスポート・ロード方法があります:

エクスポート・ロード方法	Hyperion Financial Management	Planning/Essbase/Hyperion Profitability
A (ADD_DATA)	累計	該当なし
R	置換	Planning のみに該当
M (STORE_DATA)	マージ	Essbase の場合マージ、Hyperion Profitability の場合完全リフレッシュ。(マージ・エクスポート・ロード方法は Planning では使用できません)。
S	セキュリティを基準にして置換	Planning の場合削除、Essbase の場合置換、Hyperion Profitability の場合増分

次のエクスポート・ロード方法があります:

オープン・バッチの作成

オープン・バッチを作成して処理するには:

1. 「設定」タブの「バッチ」で、「バッチ定義」を選択します。
2. 「バッチ定義」サマリー・セクションで、「追加」をクリックします。
「バッチ定義」サマリー・グリッドで空白の「名前」フィールドおよび「ターゲット・アプリケーション」フィールドを使用して、バッチ名または検索対象のターゲット・アプリケーションを入力します。
3. バッチ定義詳細セクションで、「定義」タブを選択します。
4. 「名前」に、バッチ定義の名前を指定します。
5. 「ターゲット・アプリケーション」ドロップダウンから、ターゲット・アプリケーションの名前を選択します。
6. 「タイプ」ドロップダウンで「オープン・バッチ」を選択します。
7. 「実行モード」ドロップダウンで「シリアル」を選択します。

シリアル実行モードでは、ファイルは順に処理され、1つのファイルのプロセスが完了するまで、次のファイルのプロセスは開始されません。

8. 「オープン・バッチ・ディレクトリ」で `inbox\batches\openbatch` サブディレクトリの下にフォルダを指定します。インポートされるファイルはここにコピーされます。このフィールドが空白または `null` の場合、`inbox\batches\openbatch` 内のすべてのファイルが処理されます。
9. 「オープン・バッチ」タイプの「ファイル名セパレータ」で、バッチ・ファイル名の5つの部分を区切るために使用する文字を選択します。

オプション:

- ~
- @
- -
- ;

10. 「データ・ルールの自動作成」を選択すると、ファイルベースのデータ・ロードのためにデータ・ルールが自動的に作成されます。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でデータ・ルール名を割り当てる際に、名前が"Location_Category"のデータ・ルールが存在するかどうかチェックされます。その名前がない場合は、FDMEEにより、データ・ルールが作成されます。

特定のカテゴリに基づいてデータをロードする事前定義済データ・ルールを使用するには、このフィールドを空白にしておきます。

11. オプション: 「説明」フィールドで、バッチ定義の説明を入力します。
12. 「保存」をクリックします。

13. 次のいずれかの方法を使用して、ファイルベースのデータ・ソース・ファイルを `inbox\batches\openbatch` にコピーしてステージングします。

- 事前定義済データ・ロード・ルール - 特定のカテゴリに基づいてデータをロードする事前定義済データ・ルールを使用するには、「バッチ定義」画面の「データ・ルールの自動作成」フィールドを空白にしておき、データ・ロード・ルールを作成します(データを抽出するためのデータ・ロードのルールの定義を参照)。

次に、`FileID_RuleName_Period_LoadMethod` という形式でオープン・バッチ・ファイル名を作成します。ファイル ID は、ロードの順序を制御するために使用できるフリーフォームのフィールドです。バッチ・ファイルは、ファイル名のアルファベット順にロードされます。

ロード方法は、ロード方法を示す2つの文字コードで定義されます。1つ目のコードはソース・ロードの追加方法または置換方法を表し、2つ目の文字はターゲット・ロードの累計方法または置換方法を表します。

インポート・ロード方法の場合、ソース・システムに応じて、使用可能な値は次のとおりです。

- A — 追加
- R - データの置換
- F — 完全リフレッシュ
- I — 増分

- S — セキュリティを基準にして置換

Oracle Hyperion Financial Management のエクスポート・ロード方法は次のとおりです。

- A — 累計
- R — 置換
- M — マージ
- S — セキュリティを基準にして置換

Oracle Hyperion Planning の場合、エクスポート・モードは次のとおりです:

- A—ADD_DATA
- R—REPLACE_DATA
- M—STORE_DATA
- S—SUBTRACT_DATA

オープン・バッチ・ファイル名の例: a_Texas_Actual04_Jan-2004_RR.txt および b_Texas_Actual04_Jan-2004_RR.txt

- 自動作成データ・ロード・ルール — 任意のロケーションのカテゴリにデータをロードし、FDMEE でデータ・ロード・ルールを自動的に作成するには、FileID_Location_Category_Period_LoadMethod という形式でオープン・バッチ・ファイル名を作成します。

この場合、FDMEE は"Location_Category"という名前を含むデータ・ルールを検索します。ファイルが存在しない場合、FDMEE は"Location_Category"という名前のデータ・ルールを自動的に作成します。

14. **オプション:** オープン・バッチ・ファイルに任意のスケジュール条件を適用します。

[ジョブのスケジュール](#)を参照してください。

15. 「ワークフロー」タブの「その他」で、「**バッチ実行**」を選択します。

16. 「**バッチ実行**」サマリー領域で、オープン・バッチ・ファイルを選択し、「**実行**」をクリックします。

オープン・バッチが処理されると、ディレクトリが作成され、openbatch ディレクトリ内のすべてのファイルが新規ディレクトリに移動し、新規ディレクトリには一意のバッチ ID が割り当てられます。

ノート:

オープン・バッチ機能は Account Reconciliation Manager では使用できません。

E-Business Suite との統合を実行するオープン・バッチの作成

「オープン・バッチ」機能を使用して、Oracle E-Business Suite との統合を実行できます。これを行うには、ファイル名に POV とデータ・ロード・ルールを含む空のファイルを作成し、サーバー上のオープン・バッチ・フォルダに保存します。オープン・バッチ・プロセスを実行すると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、指定されたルールと POV で E-Business Suite の統合を実行します。

複数期間のオープン・バッチの作成

オープン・バッチ機能を使用すると、複数期間のファイルベースのデータ・ソースを読み取り、ファイル名に応じて適切な POV にインポートできます。この機能によって、多数のファイルをロードするプロセスを自動化できます。複数期間のオープン・バッチにジョブを含めることはできません。また、複数期間のオープン・バッチは定期的に行うようにスケジュールできます。

オープン・バッチ複数期間ロードのファイルは、inbox\batches\openbatchml ディレクトリに格納されています。

複数期間バッチ・ファイルの名前は、次に示すセグメントで次の順序で構成されます：

- ファイル ID - ロードの順序を制御するためのフリーフォームのフィールドです。バッチ・ファイルは、ファイル名のアルファベット順にロードされます。
- ロケーション
- カテゴリ
- 開始期間
- 終了期間
- ロード方法 - 2 文字のアイテム(文字 1 = 追加または置換、文字 2 = ターゲットの追加または置換)。有効な値は **A** と **R** です。

複数期間のオープン・バッチのファイル名の例：

a_Texas_Actual_ Jan-2004_ Jun-2004_RR.txt (Loc, Cat, Start Period, End Period)

および

b_TexasDR1_ Jan-2004_ Jun-2004_RR.txt (Data Rule, Start Period, End Period)

オープン・バッチを作成して処理するには：

1. 「設定」 タブの「バッチ」 で、「バッチ定義」 を選択します。
2. 「バッチ定義」 サマリー領域で、「追加」 をクリックします。
「バッチ定義」 サマリー・グリッドで空白の「名前」 フィールドおよび「ターゲット・アプリケーション」 フィールドを使用して、バッチ名または検索対象のターゲット・アプリケーションを入力します。
3. **バッチ定義の詳細** セクションで、「定義」 タブを選択します。
4. 「名前」 に、バッチ定義の名前を指定します。
5. 「ターゲット・アプリケーション」 から、ターゲット・アプリケーションの名前を選択します。
6. 「タイプ」 から、「オープン・バッチ複数期間」 を選択します。
7. 「実行モード」 ドロップダウンで「シリアル」 を選択します。

シリアル実行モードでは、ファイルは順に処理され、1 つのファイルのプロセスが完了するまで、次のファイルのプロセスは開始されません。

8. 「オープン・バッチ・ディレクトリ」で `inbox\batches\openbatchml` サブディレクトリの下にフォルダを指定します。インポートされるファイルはここにコピーされます。このフィールドが空白または `null` の場合、`inbox\batches\openbatchml` 内のすべてのファイルが処理されます。
9. 「オープン・バッチ」タイプの「ファイル名セパレータ」で、バッチ・ファイル名の 5 つの部分の区切るために使用する文字を選択します。

オプション:

- ~
- @
- ;
- -

10. 「データ・ルールの自動作成」を選択すると、ファイルベースのデータ・ロードのためにデータ・ルールが自動的に作成されます。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でデータ・ルール名を割り当てる際に、名前が"Location_Category"のデータ・ルールが存在するかどうかチェックされます。この名前が存在しない場合、FDMEE は、次のファイル名の命名ルールを使用してデータ・ルールを作成します:

- ルール名 — Location_Category
- 説明 - "Auto-created data rule"
- カテゴリ - カテゴリ
- ファイル名 - Null
- モード — 置換

特定のカテゴリに基づいてデータをロードする事前定義済データ・ルールを使用するには、このフィールドを空白にしておきます

11. オプション: 「説明」フィールドで、バッチ定義の説明を入力します。
12. 「保存」をクリックします。
13. 次のいずれかの方法を使用して、ファイルベースのデータ・ソース・ファイルを `inbox\batches\openbatch` にコピーしてステージングします。

- 事前定義済データ・ロード・ルール - 特定のカテゴリに基づいてデータをロードする事前定義済データ・ルールを使用するには、「バッチ定義」画面の「データ・ルールの自動作成」フィールドを空白にしておき、データ・ロード・ルールを作成します(データを抽出するためのデータ・ロードのルールの定義を参照)。

オープン・バッチで連続していない期間にロードする必要がある場合、ソース期間マッピングが定義されているデータ・ルールを作成し、このオプションを使用します。

次に、`FileID_RuleName_Period_LoadMethod` という形式でオープン・バッチ・ファイル名を作成します。ファイル ID は、ロードの順序を制御するために使用できるフリーフォームのフィールドです。バッチ・ファイルは、ファイル名のアルファベット順にロードされます。

ロード方法は、ロード方法を示す 2 つの文字コードで定義されます。1 つ目のコードはソース・ロードの追加方法または置換方法を表し、2 つ目の文字はターゲット・ロードの累計方法または置換方法を表します。

ソースのロード方法では次の値を使用できます:

- A — 追加
- R — 置換

ターゲットのロード方法では次の値を使用できます:

- A — 累計
- R — 置換

オープン・バッチ・ファイル名の例: a_Texas_Actual104_Jan-2004_RR.txt および b_Texas_Actual104_Jan-2004_RR.txt

- 自動作成データ・ロード・ルール — 任意のロケーションのカテゴリにデータをロードし、FDMEE でデータ・ロード・ルールを自動的に作成するには、FileID_Location_Category_Period_LoadMethod という形式でオープン・バッチ・ファイル名を作成します。

この場合、FDMEE は"Location_Category"という名前を含むデータ・ルールを検索します。ファイルが存在しない場合、FDMEE は"Location_Category"という名前のデータ・ルールを自動的に作成します。

データ・ルールの自動作成は連続した期間のロードにのみ適用されます。連続していない複数の期間にロードするには、ソース期間マッピングが定義されているデータ・ルールを作成します。

14. **オプション:** オープン・バッチ・ファイルに任意のスケジュール条件を適用します。
[ジョブのスケジュール](#)を参照してください。

15. 「ワークフロー」タブの「その他」で、「**バッチ実行**」を選択します。

16. 「**バッチ実行**」サマリー領域で、オープン・バッチ・ファイルを選択し、「**実行**」をクリックします。

オープン・バッチが処理されると、ディレクトリが作成され、openbatch ディレクトリ内のすべてのファイルがそのディレクトリに移動します。新規ディレクトリには一意のバッチ ID が割り当てられます。

ノート:

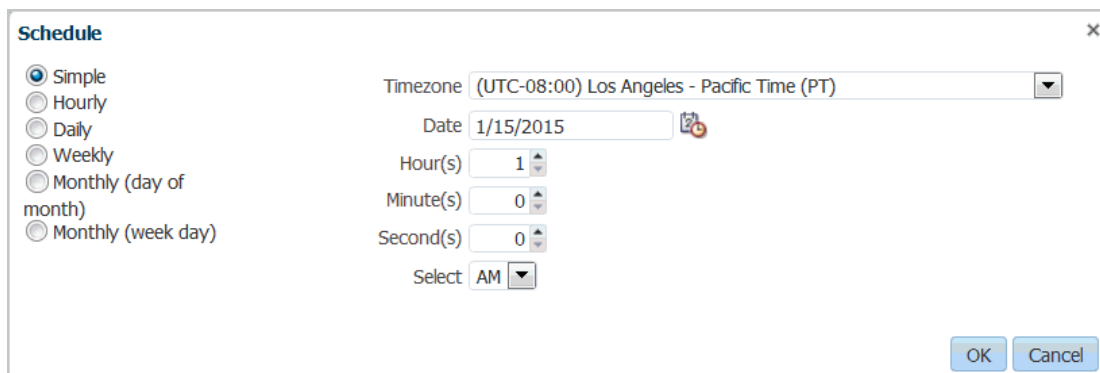
オープン・バッチ機能は Account Reconciliation Manager では使用できません。

ジョブのスケジュール

ジョブのスケジュール機能を使用すると、メタデータ・ロード・ルールおよびデータ・ロード・ルールの実行回数を調整できます。

 ノート:

「スケジュールの取消」を使用して Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ユーザー・インタフェースからジョブを取り消すと、ルールスケジュールの全インスタンスが取り消されます。ルールの個々のスケジュールを選択的に取り消すことはできません。



ジョブをスケジュールするには:

1. 「バッチ実行」画面、「メタデータ」画面または「データ・ロード・ルール」画面から、スケジュールするバッチ名(「バッチ実行」画面)またはルール(「メタデータ」画面または「データ・ロード・ルール」画面)を選択し、「スケジュール」をクリックします。
2. 「スケジュール」で、任意のルール固有のオプションを選択します。
たとえば、「スケジュール」オプションを「データ・ロード・ルール」画面から選択した場合、「ソースからインポート」、「再計算」、「ターゲットにエクスポート」などのオプションを指定します。
3. スケジュールのタイプを指定し、関連する日時のパラメータを選択します。
a を参照してください。
4. 「OK」をクリックします。

表 6-1 スケジュール・タイプおよびパラメータ

スケジュール・タイプ	日時のパラメータ
単純	<p>繰返しはしないが、特定の日に実行するジョブを送信します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • タイムゾーン • 日付 • 時間 • 分 • 秒 • 選択(午前/午後)

表 6-1 (続き) スケジュール・タイプおよびパラメータ

スケジュール・タイプ	日時のパラメータ
時間ごと	<p>取り消されるまで、毎時間指定した分/秒に実行します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • タイムゾーン • 分 • 秒
毎日	<p>毎日、同じ時間に実行します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • タイムゾーン • 時間 • 分 • 秒 • 選択(午前/午後)
毎週	<p>選択した曜日ごとに、特定の時間に実行します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • タイムゾーン • 月曜日 - 日曜日 • 時間 • 分 • 秒 • 選択(午前/午後)
毎月(日)	<p>毎月の選択した日ごとに、特定の時間に実行します。「月の最終日」または「月末の前日」を選択することもできます。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • タイムゾーン • 日 • 時間 • 分 • 秒 • 選択(午前/午後)

表 6-1 (続き) スケジュール・タイプおよびパラメータ

スケジュール・タイプ	日時のパラメータ
毎月(曜日)	<p>第 1 日、2 日、3 日、4 日、5 日、最終日を選択してから、ジョブを実行する特定の日または週を選択できます。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 日 • 日 • 時間 • 分 • 秒 • 選択(午前/午後)

 **ノート:**

「タイムゾーン」オプションは、「毎月(曜日)」スケジュール・タイプに対して使用できません。

スケジュール済ジョブの取消し

「**スケジュールの取消**」を使用して Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ユーザー・インタフェースからジョブを取り消すと、ルールスケジュールの全インスタンスが取り消されます。ルールの個々のスケジュールを選択的に取り消すことはできません。

スケジュールされたジョブを取り消すには:

1. 「**バッチ実行**」画面でバッチを選択します。
2. 「**スケジュールの取消し**」をクリックします。

バッチ・スクリプトの操作

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition には、一連の Windows バッチ・スクリプトおよび UNIX シェル・スクリプトが用意されており、これらを使用してユーザーはコマンド・ラインからデータ・ロードのルールを実行したり、Java コードを記述せずに任意のスケジュールからロードをスケジュールしたりできます。バッチ・スクリプトは、コマンドラインから呼び出すことができます。次に、スクリプトにより **FDMEE** アプリケーション・サーバーのデータ・ロードおよびメタデータ・ロード **API** が呼び出され、データ・ルールやワークベンチで使用される通常のプロセスを使用してルールが実行されます。バッチ・スクリプトは <EPM_ORACLE_INSTANCE>/FinancialDataQuality ディレクトリ内にあります(<EPM_ORACLE_INSTANCE>は通常、C:\Oracle\Middleware\user_projects\epmsystem1 にあります)。

データ・ロード・ルールを実行するためのバッチ・スクリプトの使用には次が含まれます:

- データ・ロード・ルール用バッチ・スクリプトの実行。[データ・ロード・ルール用バッチ・スクリプトの実行](#)を参照してください。
- メタデータ・ルール用バッチ・スクリプトの実行。

ノート:

バッチ・スクリプトで使用する場合、期間名にスペースを含めることはできません。

パスワードの暗号化の使用

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition には、パスワードを暗号化してファイルに保管する Win/UNIX スクリプトが用意されています。スクリプト `encryptpassword.bat/sh` は、EPM ORACLE INSTANCE/FinancialDataQuality ディレクトリにあります。

パスワードを暗号化するには:

1. バッチ・ファイルがあるディレクトリにナビゲートします。
通常、バッチ・ファイルのディレクトリは EPM ORACLE INSTANCE/FinancialDataQuality ディレクトリです。
2. EPM ORACLE INSTANCE/FinancialDataQuality ディレクトリから、コマンド・プロンプトでスクリプト `encryptpassword.bat <passwordfile>` を実行します。
3. プロンプトが表示されたら、パスワードを入力し、「**入力**」をクリックします。
次の点に注意してください。
 - パスワードを入力すると、マスクされます。
 - バッチ・スクリプトを実行するとき、`-f:passwordfile` という形式でパラメータとしてファイル名を使用してパスワードを指定できます。パラメータとして使用されるファイル名は、「システム設定」の「暗号化パスワード・フォルダ」オプションで定義されるロケーションにあります。
 - ファイル名の一部としてディスクまたはディレクトリを指定しないでください。ファイル名のみを入力します。拡張子は付けても付けなくてもかまいません。
 - 実際のファイル名で `[file]` を置き換え、カッコは指定しないでください。
 - スクリプトがパスワードを暗号化し、パラメータとして指定されたファイルに書き込みます。
 - ファイル内のパスワードを使用したデータ・ロード・ルール・バッチ・スクリプトの実行の詳細は、[データ・ロード・ルール用バッチ・スクリプトの実行](#)を参照してください。
 - ファイル内のパスワードを使用したメタデータ・ロード・ルール・バッチ・スクリプトの実行の詳細は、[メタデータ・ルール用バッチ・スクリプトの実行](#)を参照してください。

データ・ロード・ルール用バッチ・スクリプトの実行

プレーン・テキストのパスワードを使用してデータ・ロード・ルール・バッチ・スクリプトを実行するには:

1. Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルを表示します。
2. 次のコマンドを貼り付けて実行します: `loaddata USER PASSWORD RULE_NAME IMPORT_FROM_SOURCE EXPORT_TO_TARGET EXPORT_MODE IMPORT_MODE LOAD_FX_RATE START_PERIOD_NAME END_PERIOD_NAME SYNC_MODE`

ファイル内のパスワードを使用してデータ・ロード・ルール・バッチ・スクリプトを実行するには:

1. Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルを表示します。
2. 次のコマンドを貼り付けて実行します: `loaddata USER -f:PASSWORD_FILE RULE_NAME IMPORT_FROM_SOURCE EXPORT_TO_TARGET EXPORT_MORE IMPORT_MODE LOAD_FX_RATE START_PERIOD_NAME END_PERIOD_NAME SYNC_MODE`

データ・ロード・ルール用パラメータの設定

データ・ロード・ルールのバッチ・スクリプトを実行するために使用されるパラメータは、次のとおりです:

表 6-2 データ・ロード・ルール用パラメータ

パラメータ	値
ユーザー	ユーザー名
パスワード	パスワードまたは-f:パスワード・ファイル名
IMPORT_FROM_SOURCE	Y または N
EXPORT_TO_TARGET	Y または N
EXPORT_MODE	Oracle Essbase および Oracle Hyperion Planning アプリケーションのエクスポート・モード: <ul style="list-style-type: none"> • STORE_DATA • ADD_DATA • SUBTRACT_DATA • REPLACE_DATA • OVERRIDE_ALL_DATA Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションのエクスポート・モード: <ul style="list-style-type: none"> • 累計 • 置換 • マージ • Replace_By_Security

表 6-2 (続き) データ・ロード・ルール用パラメータ

パラメータ	値
IMPORT_MODE	<ul style="list-style-type: none"> スナップショット 増分 完全リフレッシュ ファイルベースのソース・システムのエクスポート・モード: <ul style="list-style-type: none"> 追加 置換
LOAD_FX_RATE	為替レートのロード・フラグ。Y または N
START_PERIOD_NAME	POV 指定の期間値が期間プロファイルから取得される場合は、期間名または POV。
END_PERIOD_NAME	POV 指定の期間値が期間プロファイルから取得される場合は、期間名または POV。
SYNC_MODE	SYNC/ASync <ul style="list-style-type: none"> SYNC - プロセスが即時実行され、プロセス完了時に制御が戻ります。 ASync - ODI ジョブの送信時に、制御が戻ります。ロード・プロセスは引き続き ODI で実行されます。

メタデータ・ルール用バッチ・スクリプトの実行

プレーン・テキストのパスワードを使用してメタデータ・ロード・ルール・バッチ・スクリプトを実行するには:

- Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルを表示します。
- Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルで次のコマンドを貼り付けて実行します: `loadmetadata USER PASSWORD LOCATION_NAME SYNC_MODE`

ファイル内のパスワードを使用してメタデータ・ロード・ルール・バッチ・スクリプトを実行するには:

- Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルを表示します。
- Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルで次のコマンドを貼り付けて実行します: `loadmetadata USER -f:PASSWORD_FILE LOCATION_NAME SYNC_MODE`

メタデータ・ルール用パラメータの設定

メタデータ・ルールのバッチ・スクリプトを実行するために使用されるパラメータは、次のとおりです:

表 6-3 メタデータ・ルール用パラメータ

パラメータ	値
ユーザー	ユーザー名
パスワード	パスワードまたは -f:パスワード・ファイル名
ロケーション	ロケーション名

表 6-3 (続き) メタデータ・ルール用パラメータ

パラメータ	値
SYNC_MODE	SYNC/ASync <ul style="list-style-type: none"> • SYNC - プロセスが即時実行され、プロセス完了時に制御が戻ります。 • ASync - ODI ジョブの送信時に、制御が戻ります。ロード・プロセスは引き続き ODI で実行されます。

HR データ・ルール用バッチ・スクリプトの実行

プレーン・テキストのパスワードを使用して HR データ・ルール・バッチ・スクリプトを実行するには:

1. Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルを表示します。
2. 次のコマンドを貼り付けて実行します: `loadhrdata USER PASSWORD LOCATION_NAME SYNC_MODE`

ファイル内のパスワードを使用して HR データ・ルール・バッチ・スクリプトを実行するには:

1. Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルを表示します。
2. 次のコマンドを貼り付けて実行します: `loadhrdata USER -f:PASSWORD_FILE LOCATION_NAME SYNC_MODE。`

HR データ・ルール用パラメータの設定

HR データ・ルールのバッチ・スクリプトを実行するために使用されるパラメータは、次のとおりです:

表 6-4 人事ルールのパラメータ

パラメータ	値
ユーザー	ユーザー名
パスワード	パスワードまたは-f:パスワード・ファイル名
ルール名	HR データ・ルール名
IMPORT_FROM_SOURCE	Y または N
EXPORT_TO_TARGET	Y または N
現日付	適用できる有効日を決定するために使用される日付。日付は YYYY-MM-DD 形式である必要があります。
ロード・タイプ	ロード・タイプを指定します: <ul style="list-style-type: none"> • データ - データのみをロードします。 • 両方 - データおよびメタデータをロードします。

バッチ・スクリプトの実行によるマッピング・ルールのインポート

importmapping バッチ・スクリプトを使用すると、コマンドラインからマッピング・ルールをインポートできます。

ファイルからパスワードを使用してマッピング・ルールのインポートのバッチ・スクリプトを実行するには:

1. Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルを表示します。
2. 次のコマンドを貼り付けて実行します: `importmapping USER_NAME ENCY_PASS LOCATION_NAME DIMENSION_NAME FILE_PATH REPLACE VALIDATE SYNC_MODE`

マッピング・ルールをインポートするためのパラメータの設定

マッピング・ルールをインポートするためのバッチ・スクリプトを実行するときに使用されるパラメータ:

表 6-5 データ・ロード・ルール用パラメータ

パラメータ	値
USER_NAME	ユーザー名
ENCY_PASS	パスワードまたは-f:パスワード・ファイル名
LOCATION_NAME	ロケーション名
DIMENSION_NAME	ディメンションの名前
File_PATH	ソースのインポート元のディレクトリです。
置換	インポート・モードのロード方法: <ul style="list-style-type: none"> • A — 追加 • R — 置換
検証	Y または N
SYNC_MODE	SYNC/ASync <ul style="list-style-type: none"> • SYNC - プロセスが即時実行され、プロセス完了時に制御が戻ります。 • ASync - ODI ジョブの送信時に、制御が戻ります。ロード・プロセスは引き続き ODI で実行されます。

ノート:

Linux で `importmapping.sh` ユーティリティを使用して Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition マッピングをインポートする際、エラー: 文字列索引が範囲外です: -1 が表示された場合、次に類似したディレクトリを参照してください: `./importmapping.sh admin welcome1 EBS_HFM_LOC account \app\EPM\import\FDMEE\FDMEE_Mapping_Account-PROJMGN.txt REPLACE N SYNC`。次に、ファイルが Windows フォーマットではなく UNIX フォーマットであることを確認してください。 `dos2unix` を実行してファイルを変換し、リロードしてください。

ライトバックに対するデータ・ロード・ルール用バッチ・スクリプトの実行

ソース EPM アプリケーションからターゲット Enterprise Resource Planning (ERP) システムにデータを抽出するには、"Loaddata" スクリプトを使用します。データ・ロード・ルール用バッチ・スクリプトの実行を参照してください。

バッチの実行

プレーン・テキストのパスワードを使用してバッチを実行するには:

1. Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルを表示します。
2. 次のコマンドを貼り付けて実行します: `runbatch USER PASSWORD BATCH_NAME SYNC_MODE`。

ファイル内のパスワードを使用してバッチを実行するには:

1. Windows コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルを表示します。
2. 次のコマンドを貼り付けて実行します: `runbatch USER -f:PASSWORD_FILE BATCH_NAME SYNC_MODE`。

バッチを実行するためのパラメータの設定

バッチを実行するために使用されるパラメータは次のとおりです:

表 6-6 バッチを実行するためのパラメータ。

パラメータ	値
ユーザー	ユーザー名
パスワード	パスワードまたは -f:パスワード・ファイル名
ルール名	バッチ名

7

スクリプトの作成と使用

次も参照:

- [概要](#)
- [Jython の基本概要](#)
- [スクリプト・エディタの使用](#)
- [インポート・スクリプトの使用](#)
- [マッピング・スクリプトの使用](#)
- [イベント・スクリプトの使用](#)
- [カスタム・スクリプトの使用](#)
- [JAVA API の使用](#)
- [Visual Basic](#)

概要

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、Jython および Visual Basic に基づくスクリプト作成機能により優れた拡張フレームワークを提供します。ユーザーは、豊富な API ライブラリのセットを使用して、ニーズを最もよく満たすように製品を拡張およびカスタマイズできます。FDMEE では次の 4 種類のスクリプトがサポートされます:

- **インポート・スクリプト** — ソース・ファイルがインポートされるときに実行されます。Jython スクリプトのみを使用します。
- **マッピング・スクリプト** — 複数のソース列に基づいてターゲット・メンバーを導出するマッピング・ロジック、および IF THEN ロジックを構築するために使用されます。Jython および SQL スクリプトを使用します。
- **イベント・スクリプト** — インポートの前後など、FDMEE に応答して実行されます。Jython および Visual Basic スクリプトを使用します。
- **カスタム・スクリプト** — スクリプトを手動で実行できます。Jython および Visual Basic スクリプトを使用します。

FDMEE によって提供される一連の Java API を使用すると、頻繁に使用されるデータ・ロード・プロパティを検索したり、共通のアクションを実行したりできます。FDMEE では Visual Basic ベースのイベント・スクリプトもサポートされます。

Jython の基本概要

スクリプトを使用する前に、次に示す Jython の重要な概念について理解してください:

- コードのインデント

- データ型宣言なし
- 0 から始まる配列インデックス
- サブistring: `str[Start Position: Start Position + Length]`
- すべての Java ライブラリにアクセス可能

Jython の概念の詳細は、次の URL を参照してください:

- [Jython とは](#)
- [Python](#)

Jython での例外処理メカニズムの使用の詳細は、[例外処理およびデバッグ](#)を参照してください。

イベント・スクリプトでの"try-except ブロック"の使用例は、[イベント・スクリプトのサンプル](#)を参照してください。

スクリプト・エディタの使用

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition スクリプト・エディタの使用方法を説明します。

概要

スクリプト・エディタは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition イベントに応答して、またはファイルのインポート・プロセス中に実行される Jython スクリプトを定義するために使用されます。スクリプトは FDMEE アプリケーションの `data\scripts` ディレクトリに保存されます(Jython スクリプトでは `.py` 拡張子、Visual Basic スクリプトでは `.vbs` 拡張子が使用されます)。インポート・スクリプトは `data\scripts\import` サブディレクトリ、イベント・スクリプトは `data\scripts\event` サブディレクトリ、カスタム・スクリプトは `data\scripts\custom` サブディレクトリに保存されます。スクリプトは、他の FDMEE 環境にコピーし、テキスト・エディタを使用して編集できます。

スクリプト・エディタの起動

スクリプト・エディタにアクセスするには:

1. 「設定」タブで「スクリプト」を選択します。
2. 「スクリプト・エディタ」を選択します。

スクリプト・エディタのレイアウト

「スクリプト・エディタ」の左ペインに、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition スクリプトの 2 つのタイプ「インポート」と「イベント」を含むディレクトリがリストされます。右側のペインでは、スクリプトのコードを作成またはコピーできます。

インポート・スクリプトの使用

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でのインポート・スクリプトの使用方法を説明します。

概要

ノート:

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のインポートの統合は、Jython スクリプト・エンジンを使用して実装されます。Visual Basic スクリプト・エンジンは、インポート・スクリプトでは使用できません。

インポート・スクリプトを使用する場合は、次の点に注意してください:

- インポート・スクリプトは、ソース・ファイルのインポートに合わせて実行されます。
- インポート・スクリプトはファイルベースのデータ・ロードのみで有効です。
- インポート・スクリプトは、Jython 関数のみを使用して作成する必要があります。フォーマットは「def <name>(parm1, parm2)」と戻り値です。
- インポート・スクリプトは **FDMEE** によって 2 つのパラメータを渡します:
 - インポート・フォーマットによって定義されるディメンション値
 - ソースのレコード全体

たとえば、勘定科目列が位置 2 から位置 4 までの文字として定義されているとき、この値がフィールドの値として渡され、入力行全体が第 2 パラメータとして渡されます。サンプル・スクリプト([インポート・スクリプトのサンプル](#)を参照)では、これらのパラメータは **StrField** および **StrRec** の値として指定されています。ただし、最初のパラメータがフィールドで、2 番目のパラメータがレコード全体であると認識しているかぎり、任意の名前を付けることができます。

- 「金額」列のインポート・スクリプトが常に最初に実行されます。
- ファイル名と関数名は同じである必要があります。
- 関数の戻り値は、指定されたディメンションの **TDATESEG** 表のソース列に移入されます。値は 1 つだけ戻すことができます。
- テキスト・エディタを使用してスクリプトを編集してから、**FDMEE** にコピー・アンド・ペーストすることをお勧めします。
- インポート・スクリプトは、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理では処理されません。

インポート・スクリプトの作成

インポート・スクリプトを作成するには:

1. 「設定」タブの「スクリプト」で、「スクリプト・エディタ」を選択します。

2. 「スクリプト・エディタ」画面で、「新規」をクリックします。
3. 「スクリプト・タイプ」で「インポート」を選択します。
4. 「ファイル名」にスクリプトの名前を入力します。
5. 「OK」をクリックします。
6. スクリプト・エディタでカスタム・スクリプトのコードを作成します。
7. 「保存」をクリックします。

インポート・スクリプト・パラメータ

インポート・フォーマット・スクリプトは **Jython** 関数として定義されます。**Jython** 関数名とスクリプト・ファイル名を同じにする必要があります。この関数は、2つのパラメータ(現在のフィールドと処理されている現在の行)を受け取ります。

- **strField** — インポート・フォーマットで定義されているソースファイルの列の値 (たとえば、「金額」列に割り当てられているインポート・スクリプトでは、strField に金額値が含まれ、「勘定科目」列に割り当てられているインポート・スクリプトでは、strField に勘定科目値が含まれます)
- **strRecord** - スキャンされるソースファイル行(レコード)。

次の例では、スクリプトがソース・ファイルの勘定科目コードと勘定科目の説明を連結します。たとえば、ファイルの最初のデータ行は、勘定科目コードが **1110**、説明が「Cash」です。このスクリプトは **1110** と「Cash」を連結して、TDATASEG 表に「1110-Cash」という名前のソース勘定科目を作成します。(TDATASEG 表のリファレンスを参照してください)。スクリプトでは、インポート・フォーマットによって定義されるフィールドと、現在のレコードの位置 **14~34** に定義されるフィールドを選択します。(Jython では列番号は **1** ではなく **0** から開始します。)

Status	Name	Source System	Accounting Entity	Source Adapter
✓	0_MCPLAN1_IF	File		
✓	6_SALESJOURNAL	File		
✓	BRAZIL	File		
✓	CAI IFORNIA	File		

Source Column	Start	Length	Expression	Add Expression	Target
Account	2	4			Account
Account3	47	14			Account

インポート・フォーマットへのインポート・スクリプトの割当て

スクリプト・エディタでスクリプトを作成し保存したら、スクリプトをインポート・フィールド(インポート・フォーマット内の任意のインポート・フィールド)に割り当てます。

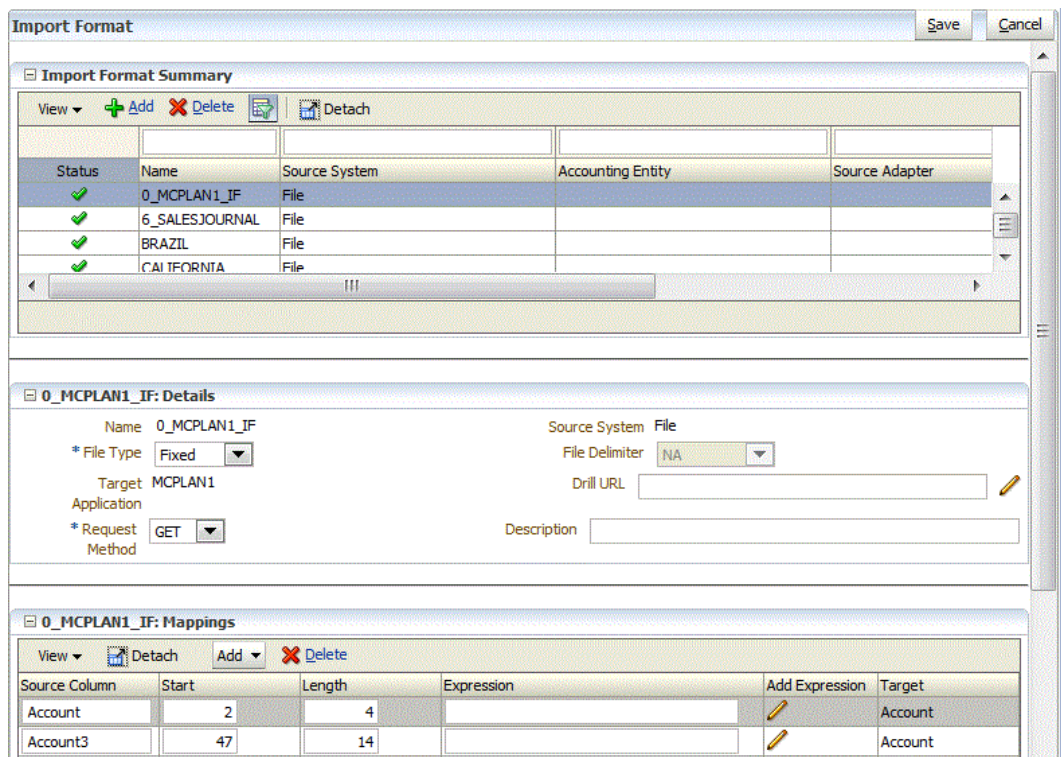
インポート・スクリプトをインポート・フィールドに割り当てるには:

1. 「設定」タブの「統合設定」で、「インポート・フォーマット」を選択します。
2. 「インポート・フォーマット」サマリー・グリッドでインポート・フォーマット名を選択します。



ノート:

インポート・ソースがアダプタの場合は、インポート・フォーマット名に非ASCII文字を使用します。

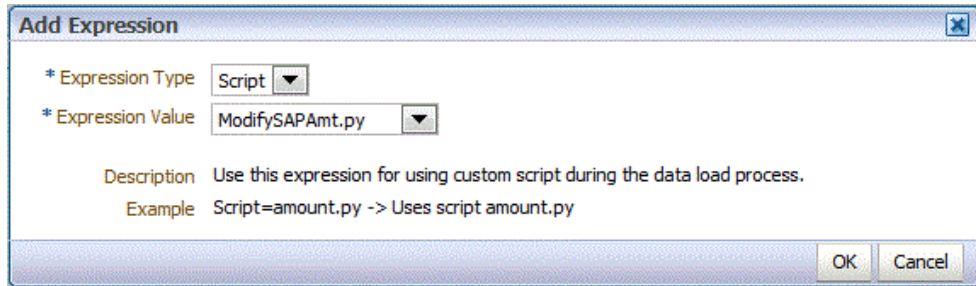
3. 「インポート・フォーマット」詳細グリッドで「式の追加」アイコンを選択します。
式エディタを使用せずに、フィールドに値を直接入力することもできます。



Status	Name	Source System	Accounting Entity	Source Adapter
✓	0_MCPLAN1_IF	File		
✓	6_SALESJOURNAL	File		
✓	BRAZIL	File		
✓	CAI IFORNIA	File		

Source Column	Start	Length	Expression	Add Expression	Target
Account	2	4			Account
Account3	47	14			Account

4. 「式の追加」の「式タイプ」で、「スクリプト」を選択します。
5. 「式の値」で、スクリプトを参照して選択します。



6. 「OK」をクリックします。

スクリプトがインポート・フィールドに割り当てられます。インポート・スクリプトの名前が、「式」列に表示されます。

Source Column	Start	Length	Expression	Add Expression	Target
Account	2	4	Script=ModifySAPAmt.py		Account
Account3	47	14			Account
Amount	114	18			Amount

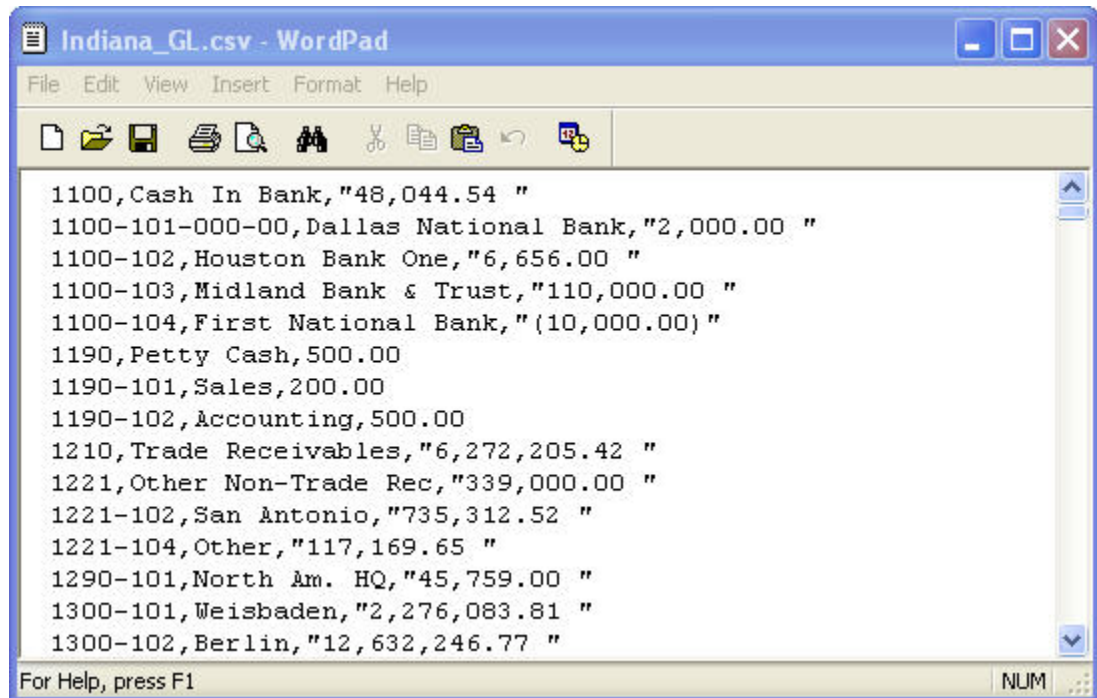
インポート・スクリプト関数の使用

インポート・スクリプト内では、関数を使用して Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でインポートされたデータを操作します。

この項では、問題と解決策の形式により、様々なインポート・スクリプト関数の使用方法を説明します。

先頭文字の抽出

問題: Indiana_GL 画面の勘定科目番号が各行の最初のフィールドにあります。桁数が統一されていません。しかし、ファイルに関連付けられたマッピングで使用されるのは、4桁のみです。



解決策: インポート・スクリプト画面で、次のスクリプトを「勘定科目」行の「式」フィールドに割り当てます。このスクリプトが、各勘定科目番号の最初の4桁(左側の最初の4桁)を Parse_Account に割り当てます:

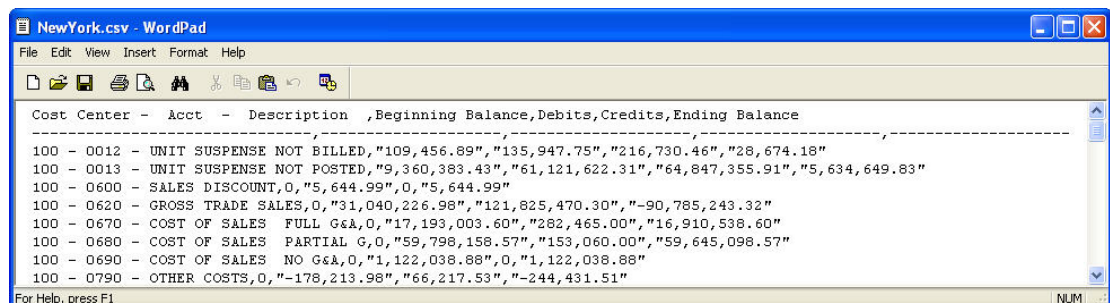
```
def Parse_Account (strfield, strrecord):

    return strField[:4]
```

結果: インポート・ファイルに各勘定科目番号の最初の4桁のみ表示されます。

中央の文字の抽出

問題: NewYork ファイルで、コスト・センター、勘定科目および勘定科目の説明が、3つの文字列ではなく1つの連続した文字列として提示されています。勘定科目文字列をコスト・センター文字列および勘定科目の説明文字列から分ける必要があります。



解決策: 「インポート・フォーマット」画面で、次のスクリプトを「勘定科目」行の「式」フィールドに割り当てます。「インポート・フォーマット」画面で、次のスクリプトを「勘定科

目」行の「式」フィールドに割り当てます。このスクリプトが、勘定科目文字列の文字(文字列の位置7から10にある文字)を抽出して返します:

```
def Parse_Account (strfield, strrecord):

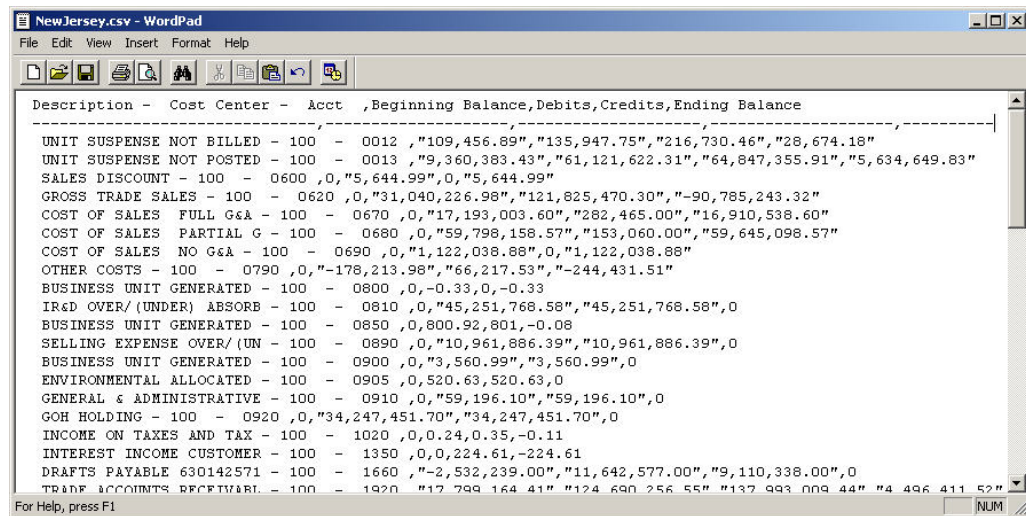
    return strField[6:10]
```

結果:勘定科目文字列が、コスト・センター文字列および勘定科目の説明文字列から分けられます。

結果: インポート・ファイルの「勘定科目」列に、勘定科目番号のみ表示されます。

文字列の末尾の抽出

問題: NewJersey 画面で、勘定科目番号が勘定科目フィールドの最後の4文字として提示されています。勘定科目番号のみ抽出する必要があります。



解決策: 「インポート・フォーマット」画面で、次のスクリプトを「勘定科目」行の「式」フィールドに割り当てます。このスクリプトが、勘定科目番号(勘定科目のフィールドの最後の4文字)を抽出して返します:

```
def Parse_Account (strfield, strrecord):

    return strField[-4:]
```

結果:インポート・ファイルの「勘定科目」列に、勘定科目番号のみ表示されます。

分割関数の使用

問題: NewYork 画面では、コスト・センター、勘定科目および勘定科目の説明が、3つのフィールドではなく、1つのフィールドに表示されます。3つの文字列はダッシュ(-)で区切られています。3つの文字列を3つのフィールドに表示する必要があります。

Cost Center	Acct	Description	Beginning Balance	Debits	Credits	Ending Balance
100 - 0012	-	UNIT SUSPENSE NOT BILLED	"109,456.89"	"135,947.75"	"216,730.46"	"28,674.18"
100 - 0013	-	UNIT SUSPENSE NOT POSTED	"9,360,383.43"	"61,121,622.31"	"64,847,355.91"	"5,634,649.83"
100 - 0600	-	SALES DISCOUNT	0,"5,644.99"	0,"5,644.99"		
100 - 0620	-	GROSS TRADE SALES	0,"31,040,226.98"	"121,825,470.30"	"-90,785,243.32"	
100 - 0670	-	COST OF SALES FULL G&A	0,"17,193,003.60"	"282,465.00"	"16,910,538.60"	
100 - 0680	-	COST OF SALES PARTIAL G	0,"59,798,158.57"	"153,060.00"	"59,645,098.57"	
100 - 0690	-	COST OF SALES NO G&A	0,"1,122,038.88"	0,"1,122,038.88"		
100 - 0790	-	OTHER COSTS	0,"-178,213.98"	"66,217.53"	"-244,431.51"	

解決策: 「インポート・フォーマット」画面で、分割関数をそれぞれ使用する次のスクリプトを、「エンティティ」、「勘定科目」および「勘定科目の説明」の行の「式」フィールドに割り当てます(最初のスクリプトを「エンティティ」に、2番目のスクリプトを「勘定科目」に、3番目のスクリプトを「勘定科目の説明」に割り当てます)。最初のスクリプトは最初のハイフンの前の一連の文字(コスト・センターの値)を戻し、2番目のスクリプトは最初のハイフンの後の一連の文字(勘定科目の値)を戻し、3番目のスクリプトは2番目のハイフンの後の一連の文字(勘定科目の説明の値)を戻します。

```
def NY_ParseCenter (strfield, strrecord):
```

```
    seglist = strfield.split("-")
```

```
    return seglist[0].strip()
```

```
def NY_ParseAccount (strfield, strrecord):
```

```
    seglist = strfield.split("-")
```

```
    return seglist[1].strip()
```

```
def NY_ParseDesc (strfield, strrecord):
```

```
    seglist = strfield.split("-")
```

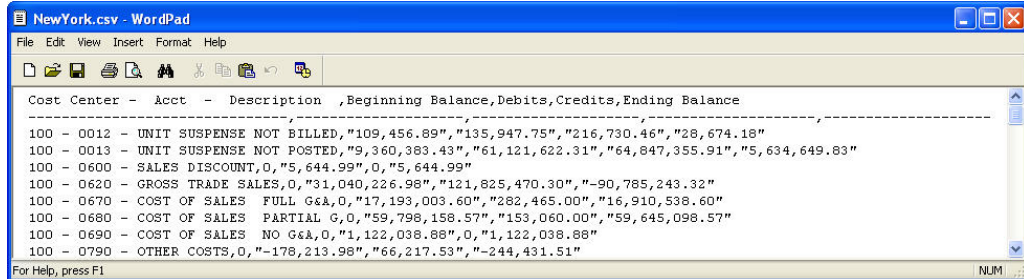
```
    return seglist[2].strip()
```

結果: インポート・ファイルで、コスト・センター、勘定科目および勘定科目の説明の文字列が、3つの個別のフィールドに表示されます。

Skip 関数(条件スキップ)の使用

問題: Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で、06 から始まるエンティティ 値が含まれる NewYork 画面のすべての行をスキップします。

インポート・スクリプトで処理されているファイルの行をスキップするには、関数の戻り値として `fdmSkip` を指定する必要があります。インポート・スクリプトの戻り引数として `fdmSkip` を指定するには、「`return fdmSkip`」を入力します。`fdmSkip` はインポート・スクリプトのみで使用できます。



解決策: インポート・スクリプト画面で、次のスクリプトを「エンティティ」行の「式」フィールドに割り当てます。このスクリプトが、エンティティ列を解析して、ローカル変数を使用します。この変数は、スクリプトの実行後に廃棄されます:

```
def NY_Skip06Center(strField, strecord):

    if strfield.count("-") > 0:

        seglist = split(strField, "-")

        strEntity = seglist[0]

        if strEntity[:2] == "06":

            return fdmSkip

        else:

            return strEntity
```

結果: 06 で始まるエンティティ 値を含んでいる行は、インポートされません。

一時変数の保管と取得

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition によるソース・ファイルのインポート時には、有効な金額がない行はスキップされますが、「金額」列に割り当てられているインポート・スクリプトは金額が有効かどうかにかかわらずすべて実行されます。したがって、**FDMEE** でスキップされる行で実行されるスクリプトを使用して、他のスクリプトで取得できる変数を保管できます。

一時変数の保管

ソース・ファイル内では、すべての行にすべてのフィールドが含まれているわけではありません。たとえば、次に示す **Georgia** 画面では、0565 0565 Test 3 のようなエンティティ値が、**Bus Area/Dept** ラベルの後の各レポート・セクションのヘッダーに表示されますが、すべての行に表示されるわけではありません。したがって、エンティティ値はグローバル変数に保管し、ソース・ファイルの行に割り当てる必要があります。

Georgia ファイルの場合、エンティティ値をグローバル変数に保管するには、「インポート・フォーマット」画面で、次のスクリプトを、「金額」行の「式」フィールドに割り当てます。スクリプトでは、`if..`文と `string` 関数を使用して、行に `Bus Area / Dept` ラベルを含めるかどうかを判別します。行にラベルを含める場合、スクリプトはエンティティ値(位置 33 にあり、4 文字含む)をグローバル変数に保管します。行にラベルを含めない場合、`strfield` を返します。

グローバル変数を使用するには、インポート関数の外部に文字列変数を定義します。インポート関数の内部で変数に値を割り当てるときに、グローバルとして指定します。関数の外部に変数を定義することで、その変数がそのセッションで使用されるすべての関数で使用できるようになります。

グローバル変数は、現在の **Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** データ・ロード・プロセス全体で使用可能になります(現在のスクリプトを閉じると値が失われるローカル変数とは異なります)。したがって、あるスクリプトから保管された値を、他のスクリプトが取得できます。

```
GeorgiaCenter = ""

def GeorgiaGetCenter (strfield, strrecord):

    if strrecord[15:31] == "Bus Area / Dept:":

        global GeorgiaCenter

        GeorgiaCenter = strrecord[32:36]

    return strfield
```

The screenshot shows three trial balance reports for 'Upstream Software' in a Notepad window. Each report includes the following information:

- Report Date: 16-DEC-2003 13:08
- Period: NOV03-04
- Currency: USD
- Balance Type: Year to Date
- Bus Area / Dept Range: 0000 to 0999
- Bus Area / Dept: 0563 0563 - Test1 (for the first report), 0564 0564 - Test2 (for the second), and 0565 0565 - Test3 (for the third).

Each report contains a table with the following columns: Acct, Description, Beginning Balance, Debits, Credits, and Ending Balance.

Acct	Description	Beginning Balance	Debits	Credits	Ending Balance
0010	0010 - Cash	(971,295.74)	951.00	0.00	(970,344.74)
0012	0012 - AP	0.00	2,002.00	2,002.00	0.00
		(971,295.74)	2,953.00	2,002.00	(970,344.74)

Acct	Description	Beginning Balance	Debits	Credits	Ending Balance
0010	0010 - Cash	5,666,682.18	1,282,699.97	6,949,282.15	100.00
0012	0012 - AP	0.00	403.00	403.00	0.00
		5,666,682.18	1,283,102.97	6,949,785.15	0.00

Acct	Description	Beginning Balance	Debits	Credits	Ending Balance
0010	0010 - Cash	44,521,731.20	165,879,142.19	269,201,268.90	(58,800,395.51)

一時変数の取得

保管されたグローバル変数を列のフィールドに割り当てるには、スクリプトを使用します。たとえば、Georgia 画面を使用している場合、最初に次のスクリプトを使用して、グローバル変数 GeorgiaCenter を GeorgiaPutCenter 関数に割り当てます。

```
def GeorgiaPutCenter (strfield, strrecord)
```

```
return GeorgiaCenter
```

次に、「インポート・フォーマット」画面で、スクリプトを「式」行の「式」フィールドに割り当て、グローバル変数の値を「式」フィールドに割り当てます。この場合、エンティティ値はソース・ファイルから読み取られません。

Georgia ファイルにはインポートする必要のない小計が含まれているため、Skip 関数が必要です。

勘定科目番号が付いていない行をスキップするよう Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition に指示するには、空白の「勘定科目」フィールド(15の空白スペース)を認識するように「インポート・フォーマット」の「スキップ行」を構成し、式の「開始」フィールドと「長さ」フィールドを適切に定義します。

インポート・スクリプトのサンプル

このサンプル・インポート・スクリプトは、列の値としてロケーションを返します:

```
#-----

# Sample shows how to use the value from the fdmContext map, In

# this sample return the Location as value for the column

#-----

def getOrgfromLoc(strfield, strrec):

    org = fdmContext['LOCNAME']

    return org

#-----

# Sample to show the Jython string function. The script below is

# used to parse an account column 01-205-4110-0000-000 and return the

# third string

#-----

def getSegfromAcct(strfield, strrec):

    if strfield.count("-") > 0:

        seglist = strfield.split('-')

        result = seglist[2]

        return result
```

```
'Total' :

    return fdmSkip

    return strfield

#-----

# Sample to return the global variable set during amount process

#-----

def getCurrfromGlobal(strfield, strrec) :

    return globalcur
```

マッピング・スクリプトの使用

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でのマッピング・スクリプトの使用方法を説明します。

概要

マッピング・スクリプトは、複数のソース列に基づいてターゲット・メンバーを導出するマッピング・ロジックと、IF THEN ロジックを構築するために使用されます。マッピング・スクリプトは、「データ・ロード・マッピング」画面で追加されます。「範囲」、「含む」および「類似」タイプに対して使用できます。これらは TDATAMAP 表に格納されます。

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理を使用してマッピング・ルールをエクスポートするとき、関連するすべてのマッピング・スクリプトが含まれます。

加えて、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、テキスト・ファイルでのマッピング・スクリプトのエクスポートおよびインポートをサポートします。このサポートには、Jython と SQL のスクリプトの両方が含まれます。このスクリプトは、<!SCRIPT>タグで囲みます。

ノート:

スクリプトが存在する列は、実行するスクリプトに対して更新される必要があります。これは、スクリプト/現在の列値の両方を変更しないかぎり、これらの値に基づいて別の列を更新できないことを意味します。

マッピング・スクリプトの作成

類似マッピングでは、マッピング・スクリプトを作成して条件マッピングを指定できます。このタイプのマッピングでは、ハードコード化されたターゲット・メンバーではなく、スクリプト式へのソース・メンバーのマッピングを指定できます。ターゲット値はスクリプト値で割り当てられます。SQL スクリプトの「ターゲット値」フィールドに#SQL を配置して、マッピング・スクリプトをアクティブにします。(スクリプトを使用する行には、#SQL というターゲット値が表示されます)。次の行には<!SCRIPT>区切り記号と、<!SCRIPT>に続いて、実際のスクリプトがあります。マッピング・スクリプトをディメンション処理順序とともに使用すると、ディメンション・マッピングの結果に基づいたマッピングが使用可能になります。つまり、すでに処理されたディメンション・マッピングです。[マッピング・スクリプトの使用](#)を参照してください。

マッピング・スクリプトを作成するには:

1. 「ワークフロー」タブで「データ・ロード・マッピング」を選択します。
2. オプション: 必要なロケーションを選択します。
3. 「類似」タブを選択します。

マッピング・スクリプトは、「明示」および「マルチ・ディメンション」マッピング・タイプでは使用できません。

4. 「ソース値」を選択します。
5. 「ターゲット・タイプ」で、次のいずれかを選択します:

- Jython ベースのマッピング・スクリプトの場合は、**#SCRIPT** と入力します。
- SQL ベースのマッピング・スクリプトの場合は「**#SQL**」を入力します。

SQL ベースのマッピングの場合、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では特殊値#SQL が「ターゲット値」に設定されます。このため、このフィールドを使用して"IGNORE"の値を指定することはできません。行にフラグを付けるには、VALID_FLAG = "Y" (有効な場合の行)、VALID_FLAG = "N" (無効な場合の行)または VALID_FLAG = "I" (行はユーザー定義条件に基づいて無視されます)のいずれかを使用します。

たとえば、マッピングで null エントリを無視する場合は、ディメンションのデータ表列を指定してから、VALID_FLAG = "I"を指定します。次の例では、UD3 が製品ディメンションのデータ表列を示しています。



```

Edit Script
Script
CASE
  WHEN UD3 is NULL then 'IGNORE'
  ELSE 'PR_'UD3
END

,VALID_FLAG =
CASE
  WHEN UD3 is NULL THEN 'I'
  ELSE 'Y'
END

```

6. 「ルール名」に、マッピングのためのデータ・ルール名を入力します。
7. 「保存」をクリックします。

「スクリプト・エディタ」アイコン()が有効化されます。

8. 「スクリプト・エディタ」アイコンをクリックします。
9. 「スクリプトの編集」にマッピング・スクリプトを入力し、「OK」をクリックします。

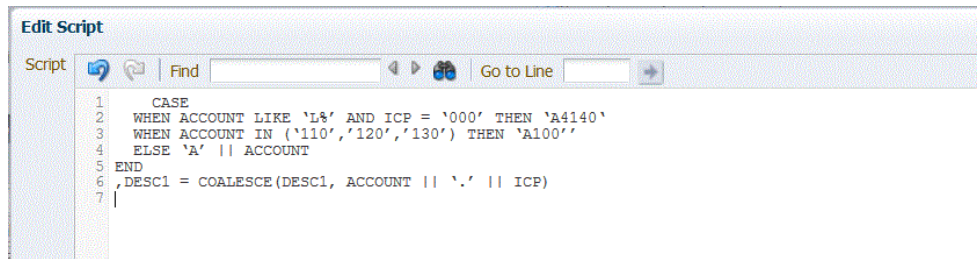
たとえば、次の Jython ベースのマッピング・スクリプトは、勘定科目の最初の 2 文字が 11 と等しく、エンティティが 01 と等しいかどうかを調べます。一致するものがある場合、ターゲットは Cash2 に設定され、ターゲット金額は 0 に設定されます。また、このスクリプトによって TDATESEG 表の attribute1 列も更新されます。(TDATESEG 表の [リファレンス](#)を参照してください)。このスクリプトでは fdmResultMap オブジェクトが使用されます([マッピング・スクリプトでの Jython オブジェクトの使用](#)を参照してください)。

```

Edit Script
Script
1 account = fdmRow.getString("ACCOUNT")
2 entity = fdmRow.getString("ENTITY")
3
4 # Map based on account and dept column values
5 fdmResultMap["ATTR1"] = account + "-" + entity
6 if (account[0:2] == "11" and entity == "01"):
7     fdmResult = "Cash2"
8     fdmResultMap["AMOUNTX"] = 0
9

```

この例で、SQL スクリプトが使用され、ロジックが SQL CASE 文に実装されます。CASE 文は、内部 UPDATE 文の SET コマンドで使用されます。次のマッピング文は、リストされている UPDATE 文に変換されます



```

1 CASE
2   WHEN ACCOUNT LIKE 'L%' AND ICP = '000' THEN 'A4140'
3   WHEN ACCOUNT IN ('110','120','130') THEN 'A100'
4   ELSE 'A' || ACCOUNT
5 END
6 ,DESC1 = COALESCE(DESC1, ACCOUNT || '.' || ICP)
7

```

UPDATE TDATESEG

SET ACCOUNTX =

CASE

 WHEN ACCOUNT LIKE 'L%' AND ICP = '000' THEN 'A4140'

 WHEN ACCOUNT IN ('110','120','130') THEN 'A100'

 ELSE 'A' || ACCOUNT

END

,DESC1 = COALESCE(DESC1, ACCOUNT || '.' || ICP)

WHERE ACCOUNT

マッピング・スクリプトでの Jython オブジェクトの使用

次の事前定義済 Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition Jython オブジェクトをマッピング・スクリプト内で使用します。

表 7-1 マッピング・スクリプトでの Jython オブジェクトの使用

Jython オブジェクト	説明
fdmRow	fdmRow は、マッピング・プロセスによって処理されている現在の行の任意の列へのアクセスに使用されます。TDATESEG 表の任意の列にアクセスできます。列の値にアクセスするには、fdmRow.getString("<COLUMN NAME>")を指定します。たとえば、ENTITY 列の値を取得するには、fdmRow.getString("ENTITY")と指定します。

表 7-1 (続き) マッピング・スクリプトでの Jython オブジェクトの使用

Jython オブジェクト	説明
fdmResult	<p>fdmResult は、マッピング機能から値を返すために使用されます。値は <code>fdmResult = "Cash"</code> のように設定できます。fdmResult は、ターゲット・ディメンションの値を更新するために使用されます。これは、X 列としても参照されます。</p> <p>TDATASEG 表のすべてのディメンションに対して、ソースとターゲットごとに 1 つずつ、2 つの列があります。たとえば、ENTITY はソース値、ENTITYX はターゲット値(マッピング・プロセスの結果)を示します。</p>
fdmResultMap	<p>fdmResultMap は、TDATASEG 表の任意の列の更新に使用されます。TDATASEG 表の列名は、マップのキーとして使用されます。たとえば、ATTR1 列を更新するには <code>fdmResultMap["ATTR1"] = "Asset Acct"</code> を使用します。ターゲット金額を 0 に設定するには <code>fdmResultMap["AMOUNTX"] = 0</code> を使用します。</p>

マッピング・スクリプトのサンプル

このサンプル・マッピング・スクリプトは、勘定科目およびエンティティの列を評価し、ターゲット列の値を割り当てます。また、`fdmResult` マップを使用して現在の行の他の列を更新する方法も示します:

```
#-----  
  
# Sample Jython Mapping Script. Script evaluates account and entity  
  
# columns and assign value for the target column. In addition it  
  
# also shows how to update the other columns of current row using  
  
fdmResultMap  
  
#-----  
  
account = fdmRow.getString("ACCOUNT")  
  
entity = fdmRow.getString("UD1")  
  
# Map based on account and dept column values  
  
fdmResultMap["ATTR1"] = account + "-" + entity  
  
if (account[0:2] == "71"):  
  
    fdmResult = "7110"  
  
elif (account[0:2] == "72"):  
  
    fdmResult = "7210"  
  
elif (account[0:2] == "77" and entity == "205"):  
  
    fdmResult = "7710"  
  
    fdmResultMap["AMOUNTX"] = 0
```

このサンプル・スクリプトでは、SQL CASE 文を使用して、ターゲット列に割り当てられる値を条件付きで処理します。

```
#-----  
  
# Sample SQL script. Script uses SQL CASE statement to conditionally  
  
# process assign value for the target column.  
  
#-----  
  
CASE  
  
    WHEN ACCOUNT LIKE '61%'    AND udl = '205'    THEN '6110'  
  
    WHEN ACCOUNT LIKE '61%'    AND udl = '240'    THEN '6120'  
  
    ELSE '6130'  
  
END
```

イベント・スクリプトの使用

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でのイベント・スクリプトの使用方法を説明します。

概要

イベント・スクリプトは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition イベントに応答して実行されます。任意のカスタム・ロジックを呼び出すことができます。たとえば、カスタム・ロジックを呼び出して、ロードが正常終了した後に電子メール通知を送信したり、検証エラーが発生したときに電子メールを送信したりすることができます。または、データを Oracle Hyperion Financial Management からダウンロードし、データを Oracle Essbase にロードしてレポート作成するときに、電子メールを送信できます。イベント・スクリプトは Jython または Visual Basic に基づいています。Jython スクリプトの拡張子は .py、Visual Basic スクリプトの拡張子は .vbs です。スクリプトに関連付けられているイベントは、イベント・リストでハイライトされます。スクリプトを含むすべてのイベントは、選択されたロケーションでそのイベントに対して実行されます。

 ノート:

イベント・スクリプトは、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理では処理されません。

FDMEE でサポートされているイベント・スクリプト

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、データ・ロード・プロセス時における次の実行イベントをサポートします:

表 7-2 FDMEE イベント

イベント	説明
BefImport	このイベントは、選択したロケーションに対する処理が開始される前の、システムの初期状態です。ユーザーがインポート・スクリプトを定義する場合は、 BefImport イベントと AftImport イベントの間に実行されます。処理のこのステップでは、データが TDATASEG_T 表にロードされます。
AftImport	このイベントが処理されると、データは TDATASEG_T 表に表示されます。
BefCalculate	検証実行の場合にのみ呼び出され、検証プロセスの前に呼び出されます。
AftCalculate	検証実行の場合にのみ呼び出され、検証プロセスの後に呼び出されます。
BefProcLogicGrp	ロジック勘定科目が処理される前に呼び出されます。
AftProcLogicGrp	ロジック勘定科目が処理された後に呼び出されます。
BefProcMap	TDATASEG_T 表でマッピング・プロセスが開始される前に呼び出されます。マッピング・スクリプトは、 BefProcMap イベントと AftProcMap イベントとの間に実行されます。データがすべてマップされた後、これらのイベントの間に、データは TDATASEG_T 表から TDATASEG 表に移動します。監査表の更新も、このプロセスの一部として含まれます。
AftProcMap	マッピングがすべて完了した後に呼び出されます。このイベントが実行された場合、データはすでに TDATASEG_T 表から TDATASEG 表に移動しています。
BefValidate	データが TDATASEG 表にマップされたかどうかを確認します。
AftValidate	BefValidate イベントの後に呼び出されます。

表 7-2 (続き) FDMEE イベント




イベント	説明
BefExportToDat	<p>エクスポートのためにファイルに書き込む前に呼び出されます。Oracle Essbaseでも、「ファイルへのエクスポート」モード機能で実行されます。</p> <div data-bbox="1084 491 1377 758" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p> ノート:</p> <p>このイベントは Account Reconciliation Manager では使用できません。</p> </div>
AftExportToDat	<p>ファイルの作成後に呼び出されます。</p> <div data-bbox="1084 871 1377 1138" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p> ノート:</p> <p>このイベントは Account Reconciliation Manager では使用できません。</p> </div>
BefLoad	<p>ターゲット・アプリケーションにロードする前に呼び出されます。</p> <div data-bbox="1084 1278 1377 1545" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p> ノート:</p> <p>このイベントは Account Reconciliation Manager では使用できません。</p> </div>

表 7-2 (続き) FDMEE イベント




イベント	説明
AftLoad	<p>データがターゲット・アプリケーションに送信された後に呼び出されます。ただし、ターゲット・アプリケーションのロード・プロセスの完了を待機しません。</p> <div data-bbox="1084 491 1380 760" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p> ノート:</p> <p>このイベントは Account Reconciliation Manager では使用できません。</p> </div>
BefConsolidate	<p>Oracle Hyperion Financial Management および Essbase のみ: このイベントは、処理するロケーションに確認ルールが含まれる場合に実行されます。</p> <div data-bbox="1084 955 1380 1224" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p> ノート:</p> <p>このイベントは Account Reconciliation Manager では使用できません。</p> </div>
AftConsolidate	<p>BefConsolidate イベントの後に呼び出されます。</p> <div data-bbox="1084 1362 1380 1631" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p> ノート:</p> <p>このイベントは Account Reconciliation Manager では使用できません。</p> </div>

表 7-2 (続き) FDMEE イベント

イベント	説明
BefCheck	確認ルールの前に呼び出されます。
	<div style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; background-color: #E6F2FF;"> <p> ノート:</p> <p>このイベントは Account Reconciliation Manager では使用できません。</p> </div>
AftCheck	確認ルールの後に呼び出されます。
	<div style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; background-color: #E6F2FF;"> <p> ノート:</p> <p>このイベントは Account Reconciliation Manager では使用できません。</p> </div>

イベント・スクリプトの作成

イベント・スクリプトを作成するには:

1. 「設定」タブの「スクリプト」で、「スクリプト・エディタ」を選択します。
2. イベントをシングルクリックまたはダブルクリックします。
3. スクリプト・エディタ内にスクリプトを記述します。

ノート:

イベント・スクリプトを作成する前に、「アプリケーション設定」で「アプリケーション・ルート・フォルダ」設定を確認します。アプリケーション・レベルでフォルダを指定する場合、「**アプリケーション・フォルダの作成**」オプションを選択します。スクリプト・フォルダを含む一連のフォルダがアプリケーション用に作成されます。アプリケーションに固有のスクリプトをこのフォルダ内に作成します。これはアプリケーション間で異なるイベント・スクリプトの場合、特に重要です。アプリケーション・レベルのフォルダを設定しない場合はアプリケーションごとに異なるイベント・スクリプトを使用できません。

スクリプト内からの FDMEE の実行の停止

スクリプト内から Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition の実行を停止するには:

1. 「設定」タブの「スクリプト」で、「スクリプト・エディタ」を選択します。
2. イベントをシングルクリックまたはダブルクリックします。
3. **RuntimeError の発生** スクリプトおよび表示するメッセージを追加します。

たとえば、

```
if (categoryName == ""):  
  
    raise RuntimeError, "Category name is invalid"
```

4. スクリプトを保存します。

インポート・フォーマットの動的変更

BefFileImport イベントを使用して、ロケーションのインポート・フォーマットを動的に変更できます。次のスクリプトは、インポート・グループを変更します。変更内容は、ファイル名に基づきます。

スクリプトを実装するには、2つのインポート・フォーマットを作成し、そのうちの1つを Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ロケーションに割り当てます。このスクリプトが、ファイル名を評価して、必要に応じてインポート・フォーマットを変更します。

```
if fdmContext["LOCNAME"] == "ITALY":  
  
    filename = fdmContext["FILENAME"]  
  
    if filename[:12] == "ProductSales":  
  
        fdmAPI.updateImportFormat("SALESJOURNAL", fdmContext["LOADID"])
```

イベント・スクリプトにおけるファイル・システム・オブジェクトの使用

Jython ファイル・システム・オブジェクトを使用して、ファイルとフォルダを処理できます。次の例では、ファイル・システム・オブジェクトを使用して、ファイルの作成および既存ファイルから新規ファイルへのコンテンツのコピーを行います。

```
Read the following Input File
```

```
Entity,Currency,ICP,Product,Store,Channel,Custom4,Custom5,Custom6,Custom7,UnitsSold,Sales
```

```
EastSales, USD, [ICP None], H740, Comma_Phone_Stores, Retail_Direct, [None], [None], [None], [None], 127, 9954.103768
```

```
EastSales, USD, [ICP None], H740, Freds, National_Accts, [None], [None], [None], [None], 112, 6610.371552
```

```
EastSales, USD, [ICP None], H740, Good_Buy, National_Accts, [None], [None], [None], [None], 112, 6610.371552
```

```
Write the following Output File
```

```
EastSales, USD, [ICP None], H740, Comma_Phone_Stores, Retail_Direct, [None], [None], [None], [None], UnitsSold, 127
```

```
EastSales, USD, [ICP None], H740, Comma_Phone_Stores, Retail_Direct, [None], [None], [None], [None], Sales, 9954.103768
```

```
EastSales, USD, [ICP None], H740, Freds, National_Accts, [None], [None], [None], [None], UnitsSold, 112
```

```
EastSales, USD, [ICP None], H740, Freds, National_Accts, [None], [None], [None], [None], Sales, 6610.371552
```

```
EastSales, USD, [ICP None], H740, Good_Buy, National_Accts, [None], [None], [None], [None], UnitsSold, 112
```

```
EastSales, USD, [ICP None], H740, Good_Buy, National_Accts, [None], [None], [None], [None], Sales, 6610.371552
```

```
infilename = fdmContext["INBOXDIR"]+"/InputFile.txt"
```

イベント・スクリプトのサンプル

このサンプルのイベント・スクリプトは、データ・ロードの実行中に table_xyz 表を更新します。

```
#-----
-----

# Sample to update table_xyz table during data load rule execution

#-----
-----

query = "UPDATE table_xyz SET accountx = 'SCRIPT_' || account WHERE
loadid = ? and accountx is NULL"

params = [ fdmContext["LOADID"] ]

print fdmAPI.executeDML(query, params, False)

fdmAPI.commitTransaction()

#-----
-----

# Sample to import data from a custom SQL source and upload into FDMEE

# open interface table. This script should be called in BefImport
Event.

# This is alternate to the FDMEE integration import script.

#-----
-----

import java.sql as sql

batchName = "Batch_" + str(fdmContext["LOCNAME"])

insertStmt = ""
```

```

"password");

# Limiting number of rows to 5 during the test runs.

selectStmt = "SELECT * FROM orders WHERE rownum < 6"

stmt = sourceConn.prepareStatement(selectStmt)

stmtRS = stmt.executeQuery()

while(stmtRS.next()):

    params = [ batchSize, stmtRS.getBigDecimal("Customer_Id"),

              stmtRS.getString("Ship_Country"),

              stmtRS.getBigDecimal("Freight"), stmtRS.getString("Ship_Name") ]

    fdmAPI.executedML(insertStmt, params, False)

fdmAPI.commitTransaction()

stmtRS.close()

stmt.close()

sourceConn.close()

#-----
--

# Sample to send email messages using Jython SMTP library

#-----
--

import smtplib

sender = "from@gmail.com"

```

ノート:

次のリンクにあるオンライン **Jython** ドキュメントで、**Jython** 例外のリストの説明、およびスクリプトで例外をトラップする際に使用する構文を参照してください: **Jython** での例外処理メカニズムの使用の詳細は、[例外処理およびデバッグ](#)を参照してください。

このノートはすべてのスクリプト・タイプに適用されます。

カスタム・スクリプトの使用

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でのカスタム・スクリプトの使用方法を説明します。

概要

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、カスタム・スクリプトを使用してデータ・ロード・ルールを実行するなど、FDMEETaskを"必要に応じて"実行できます。

FDMEETask では Jython と Visual Basic のカスタム・スクリプトがサポートされます。カスタム ODI プロセスを実行するには、Jython スクリプトを使用します。FDMEETask ではカスタム・スクリプトは <APP DIR>/data/scripts/custom フォルダに格納されます。

カスタム・スクリプトの作成

カスタム・スクリプトを作成するには:

1. 「設定」タブの「スクリプト」で、「スクリプト・エディタ」を選択します。
2. 「スクリプト・エディタ」画面で、「新規」をクリックします。
3. 「スクリプト・タイプ」で「カスタム」を選択します。
4. 「テクノロジー」で「Jython」または「Visual Basic」を選択します。

Jython で作成されたスクリプトは .py 拡張子が付けられて保存されます。Visual Basic で作成されたスクリプトは .vbs 拡張子が付けられて保存されます。

5. 「ファイル名」にスクリプトの名前を入力します。
6. 「OK」をクリックします。
7. スクリプト・エディタでカスタム・スクリプトのコードを作成します。
8. 「保存」をクリックします。

カスタム・スクリプトの操作

カスタム・スクリプトを登録する前にカスタム・スクリプト・グループを作成する必要があります。

カスタム・スクリプトを登録して、スクリプトが実行されるときに渡されるパラメータを選択します。

カスタム・スクリプト・グループの追加

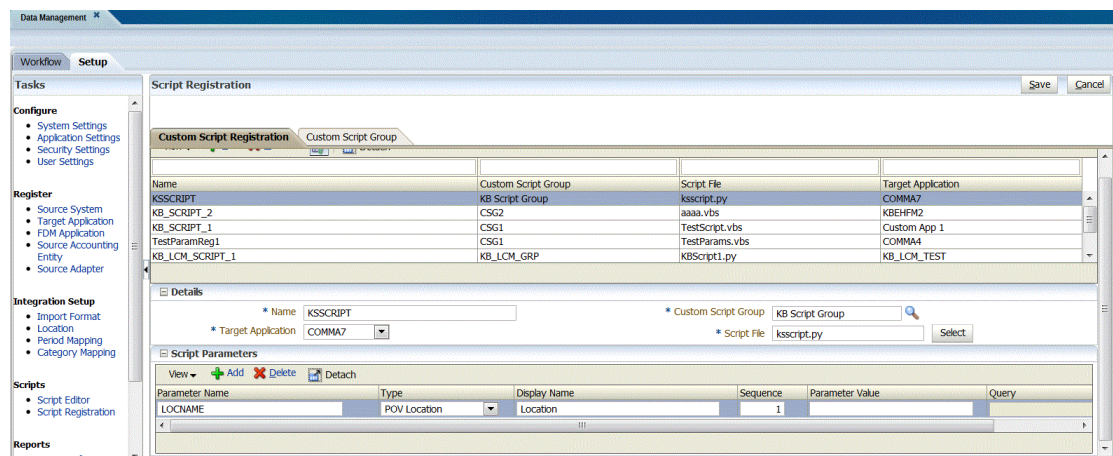
カスタム・スクリプト・グループを使用すると、似たタイプのカスタム・スクリプトをグループにまとめることができ、使用しやすくなります。カスタム・スクリプトを実行する際にセキュリティの適格性を判別するためにも使用されます。

カスタム・グループを追加するには:

1. 「設定」タブの「スクリプト」で、「スクリプトの登録」を選択します。
2. 「カスタム・スクリプト・グループ」タブを選択します。
3. 「追加」をクリックします。
4. 「名前」にカスタム・スクリプト・グループ名を指定します。
5. 「シーケンス」に、登録と実行の際にカスタム・スクリプト・グループが表示されるときに使用される表示順序を入力します。
6. 「保存」をクリックします。

スクリプトの登録

登録されたスクリプトは、スクリプト・ファイル(Jython または Visual Basic スクリプトを含む)とターゲット・アプリケーションに関連付けられます。カスタム・スクリプトが実行されると、スクリプトにパラメータを入力するための値リストがプロンプトで表示されます。



スクリプトを登録するには:

1. 「設定」タブの「スクリプト」で、「スクリプトの登録」を選択します。
「カスタム・スクリプトの登録」画面には次の3つの領域があります:
 - サマリー — すべてのカスタム・スクリプトがリスト表示されます。
 - 詳細 — スクリプト名、関連付けられたターゲット・アプリケーションおよびスクリプト・ファイルが表示されます。

- パラメータ - パラメータ名、パラメータ・タイプ、表示名、シーケンス、パラメータ値、および特定のカスタム・スクリプトの値リストの指定に使用される問合せ定義が表示されます。
2. 「サマリー」グリッドの上で、「追加」をクリックします。
 3. 「詳細」グリッドの「名前」にカスタム・スクリプトの名前を入力します。
 4. 「ターゲット・アプリケーション」で、カスタム・スクリプトに関連付けられているターゲット・アプリケーションを選択します。
 5. カスタム・スクリプトをカスタム・スクリプト・グループに関連付けるには、「カスタム・スクリプト・グループ」でグループを選択します。
 6. 「スクリプト・ファイル」でカスタム・スクリプトに関連付けるスクリプト・ファイルを選択します。

スクリプト・ファイルを検索するには、「選択」をクリックし、「スクリプト・ファイルの選択」画面でスクリプト・ファイルを選択します。

スクリプト・ファイルをアップロードするには、「選択」をクリックします。「スクリプト・ファイルの選択」で「アップロード」をクリックします。「参照」をクリックしてアップロードするスクリプト・ファイルに移動し、「OK」をクリックします。

7. 「保存」をクリックします。

カスタム・スクリプトのパラメータを定義するには:

1. 「サマリー」グリッドから、パラメータを追加するカスタム・スクリプトの名前を選択します。
2. 「スクリプト・パラメータ」グリッドで「追加」をクリックします。

パラメータの追加先の空白の行が表示されます。

3. 「パラメータ名」に、スクリプトで参照するパラメータの名前を入力します。

たとえば、「POV ロケーション」に「POVLOC」、「POV 期間」に「POVPeriod」、「POV カテゴリ」に「POVCAT」、または「ターゲット・カテゴリ」に「POVTARGET」を入力します。

パラメータ名はユーザー定義です。カスタム・スクリプト内でこれらを区別するために接頭辞または接尾辞を選択できます。

4. 「タイプ」でパラメータのタイプを選択します。

使用可能なタイプ:

- POV — POV のロケーション、期間、カテゴリまたはルールに対するプロンプトを表示します。「POV」値のデフォルトは、カスタム・スクリプトを実行した際のユーザーの POV です。
- 問合せ — 「問合せ」タイプでは問合せを作成でき、カスタム・スクリプトの実行時にユーザーはこの問合せによって移入される値リストから値を選択できます。
- 静的 - 「静的」タイプはパラメータが定数または定義済の値であることを示し、パラメータ値がユーザーにより指定されたことを示します。カスタム・スクリプトが実行されるとき、パラメータに別の値を指定できます。

パラメータに対して任意の名前を使用できます。また、現在のスクリプト内でパラメータを区別するために名前に接頭辞または接尾辞を使用することもできます。

パラメータ名は、スクリプトの登録で指定された名前と正確に一致する必要があります。

5. 「表示名」で、「スクリプトの実行」画面でパラメータに表示される名前を入力します。
6. 「パラメータ値」に、静的パラメータ・タイプの値を入力します。

このパラメータ値は、カスタム・スクリプトで次の API を使用して取得する必要があります:

```
fdmAPI.getCustomScriptParameterValue("PARAMETER NAME")
```

7. 「シーケンス」で、「スクリプトの実行」画面でのパラメータの表示順序を入力します。
8. 「問合せ」で、パラメータの値リストを提供する問合せ定義を指定します。
たとえば、「レポートの生成」画面でユーザーが選択するデータ・ルールを表示するには、これらの問合せを定義する問合せ定義を指定します。
9. 「保存」をクリックします。

カスタム・スクリプトの実行

カスタム・スクリプトは、スクリプト実行オプションを使用するか、コマンドラインから実行できます。


スクリプトの実行オプションからカスタム・スクリプトを実行するには:

1. 「ワークフロー」タブの「その他」で、「スクリプトの実行」を選択します。
2. 「スクリプトの実行」の「カスタム・スクリプト・グループ」で、カスタム・スクリプト・グループを選択します。
3. 「スクリプト」グリッドでカスタム・スクリプトを選択します。
4. 「実行」をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、「スクリプトの実行」画面でパラメータ値を入力します。
 - a. 該当する場合、「期間」、「カテゴリ」および「ロケーション」の値を変更します。
 - b. 「実行モード」から、レポートを実行するオンライン方法を選択します。
オンライン方法では、レポートが即時に処理されます。
 - c. 「OK」をクリックします。

コマンドラインからのカスタム・スクリプトの実行

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、コマンドラインからカスタム・スクリプトを実行できます。パラメータあり、またはなしのカスタム・スクリプトを実行できます。パラメータのないスクリプトを実行する場合、FDMEE は、スクリプトに関連付けられているアプリケーションを特定します。パラメータを渡す場合、形式: `Executescript <script name> <Parameter Display Name>=<Value>` を使用してパラメータを追加します。

1. コマンドラインで、実行するカスタム・スクリプトの名前を入力します。
2. 「入力」をクリックしてスクリプトを実行します。

 ヒント:

MaintainFDMEEDataTables.py スクリプトを実行するとき、**Jython** スクリプト名ではなく、タスクの表示名を使用します。

次の例では、スクリプト名が引用符""で囲まれています:

```
"Maintain Data Table by Application" ...
```

次のように、スペースなしで名前を入力することもできます:

```
MaintainDataTablebyApplication ...
```

Jython を使用したカスタム・スクリプトのサンプル

これらのサンプル・カスタム・スクリプトでは、カスタム・スクリプトの内容に関する情報が提供されます。

最初の例では、スクリプトを介してデータ・ロード・ルールを送信する方法を示します。

2 番目の例では、スクリプトを介してバッチ・ファイルを使用し、レポートを送信する方法を示します。

データ・ロード・ルールの送信

次の例では、スクリプトを介してデータ・ロード・ルールを送信する方法を示します。

```
#

This sample Jython script provides code related to custom scripts. All the
messages being logged (meaning printed) are visible in the process lLog
Level profile.

#

# Log the beginning of the script, at the INFO level

fdmAPI.logInfo("=====  
=====")

fdmAPI.logInfo("Custom Script: Begin")

fdmAPI.logInfo("=====  
=====")

# Log the target application name from the context, at the DEBUG level

fdmAPI.logDebug("Target App Name    = " + fdmContext["TARGETAPPNAME"])

# Log the script name from the context at the DEBUG level

fdmAPI.logDebug("Custom Script name = " + fdmContext["SCRIPTFILE"])

# Get all script parameters and log their names and values at the DEBUG
level

fdmAPI.logDebug("Custom script parameter values by name: begin")

fdmAPI.logDebug("The value of parameter CUSTOM_LOCATION is = " +
fdmAPI.getCustomScriptParameterValue("CUSTOM_LOCATION"))

fdmAPI.logDebug("The value of parameter CUSTOM_YEAR is = " +
```

```

fdmAPI.getCustomScriptParameterValue("CUSTOM_YEAR"))

fdmAPI.logDebug("Custom script parameter values by name: end")

# Example submitting a data rule

import os

import subprocess

os.chdir("C:/Oracle/Middleware/user_projects/epmsystem1/
FinancialDataQuality")

myScriptName = "C:/Oracle/Middleware/user_projects/epmsystem1/
FinancialDataQuality/loaddata.bat"

command = '%s "%s" "%s" "%s" "%s" "%s" "%s" "%s" "%s" "%s" "%s" "%s"'
% (myScriptName, "admin", "password", "SRESBA1_DR1", "Y", "N",
"STORE_DATA", "SNAPSHOT", "N", "Jan-2003", "Jan-2003", "ASYNC")

fdmAPI.logDebug("Submitting a data rule via a script using the
following command: " + command)

retcode = subprocess.Popen(command)

fdmAPI.logDebug("Data rule submitted fine.")

# Close the connection and log the end of the script, at INFO level

fdmAPI.closeConnection()

fdmAPI.logInfo("=====")

fdmAPI.logInfo("Custom Script: end")

fdmAPI.logInfo("=====")

```

カスタム・スクリプト実行の出力は次のとおりです:

```
2013-09-25 08:12:26,080 INFO [AIF]:  
=====
```

2013-09-25 08:12:26,081 INFO [AIF]: Custom Script: Begin

```
2013-09-25 08:12:26,082 INFO [AIF]:  
=====
```

2013-09-25 08:12:26,083 DEBUG [AIF]: Target App Name = SRESBA1

2013-09-25 08:12:26,084 DEBUG [AIF]: Custom Script name = SRCustomScript1.py

2013-09-25 08:12:26,087 DEBUG [AIF]: CUSTOM_LOCATION = 1

2013-09-25 08:12:26,087 DEBUG [AIF]: CUSTOM_YEAR = 2013

2013-09-25 08:12:26,088 DEBUG [AIF]: Custom script parameter values by name:
begin

2013-09-25 08:12:26,091 DEBUG [AIF]: The value of parameter CUSTOM_LOCATION
is = 1

2013-09-25 08:12:26,093 DEBUG [AIF]: The value of parameter CUSTOM_YEAR is =
2013

2013-09-25 08:12:26,094 DEBUG [AIF]: Custom script parameter values by name:
end

2013-09-25 08:12:26,535 DEBUG [AIF]: Submitting a data rule via a script
using the following command: C:/Oracle/Middleware/user_projects/epmsystem1/

```
FinancialDataQuality/loaddata.bat "admin" "*****" "SRESBA1_DR1" "Y" "N"  
"STORE_DATA" "SNAPSHOT" "N" "Jan-2003" "Jan-2003" "ASync"
```

```
2013-09-25 08:12:26,596 DEBUG [AIF]: Data rule submitted fine.
```

```
2013-09-25 08:12:26,635 INFO [AIF]:
```

```
=====
```

```
2013-09-25 08:12:26,636 INFO [AIF]: Custom Script: end
```

```
2013-09-25 08:12:26,637 INFO [AIF]:
```

```
=====
```

レポートの送信

次の例では、レポートを送信する方法を示します。スクリプト内にパラメータを直接含めるかわりに、必要なパラメータを含むバッチ・ファイルをスクリプトで呼び出し

ます。パラメータ内で等号(=)を使用してレポート・スクリプトを送信しようとする、スクリプトが失敗します。

```
#

This sample Jython script provides code related to custom scripts. All the
messages being logged (meaning printed) are visible in the process log file
as per Log Level profile.

#

# Log the beginning of the script, at the INFO level

fdmAPI.logInfo("=====  
=====")

fdmAPI.logInfo("Custom Script: Begin")

fdmAPI.logInfo("=====  
=====")

# Execute the subprocess to call and run the batch file

import os

import subprocess

os.chdir("D:/ORCL/MW/EPMSys11R1/products/FinancialDataQuality/bin")

myScriptName = "D:/ORCL/MW/EPMSys11R1/products/FinancialDataQuality/bin/  
myreport.bat"

retcode = subprocess.Popen(myScriptName)

fdmAPI.logDebug("The return code = " + retcode)
```

前述の myreport.bat ファイルには、次のように等号をパラメータとして含むことができます。

```
runreport.bat <username> <password> "TB All Columns (Per,Cat,Loc)"  
"Period=Jan 15" "Category=Actual" "Location=AAA" "Rule Name=AAA"  
"Report Output Format=PDF"
```

JAVA API の使用

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition での JAVA API の使用方法を説明します。

概要

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition では、インポート・スクリプト、マッピング・スクリプトおよびイベント・スクリプトを呼び出す前に、データ・ロード・ワークフローのコンテキスト情報が自動的に初期化されます。fdmContext オブジェクトが、次に示すプロパティのリストを使用して初期化されます。このプロパティには、FDMCONTEXT.GET["<PROPERTY NAME>"]を参照してアクセスします。たとえば、ロケーション名にアクセスするには FDMCONTEXT.GET["LOCNAME"]を使用します。特定のデータ・ロードでスクリプトを実行するには、次のように記述します。

```
if FDMCONTEXT.GET["LOCNAME"] == "ITALY":
```

```
    Write script logic here
```

FDM オブジェクトのプロパティ:

- APPNAM
- APPID
- BATCHSCRIPTDIR
- CATKEY
- CATNAME
- CHKSTATUS
- EPMORACLEHOME
- EPMORACLEINSTANCEHOME
- EXPORTFLAG
- EXPORTMODE
- EXPSTATUS
- FILEDIR
- FILENAME
- IMPORTFLAG

- IMPORTFORMAT
- IMPORTMODE
- IMPST
- IMPSTATUS
- INBOXDIR
- LOADID
- LOCKEY
- LOCNAME
- MULTIPERIODLOAD
- OUTBOXDIR
- PERIODNAME
- PERIODKEY
- PROCESSTATUS
- RULEID
- RULENAME
- SCRIPTSDIR
- SOURCENAME
- SOURCETYPE
- TARGETAPPDB
- TARGETAPPNAME
- VALSTATUS

Java API リスト

表 7-3 Java API リスト

API	説明
BigDecimal getPOVLocation(BigDecimal pLoadId)	LOADID に基づいてパーティション・キーを返します。
BigDecimal getPOVCategory(BigDecimal pLoadId)	LOADID に基づいてカテゴリ・キーを返します。
Date getPOVStartPeriod(BigDecimal pLoadId)	LOADID に基づいて開始期間の期間キーを返します。
Date getPOVEndPeriod(BigDecimal pLoadId)	1つの期間をロードするとき、LOADID に基づいて終了期間の期間キーを返します(開始期間と終了期間は同じです)。

表 7-3 (続き) Java API リスト

API	説明
executePLSQL	<p>Procedural Language/Structured Query Language (PL/SQL)コードのブロックを実行します。この API は次の 3 つのパラメータを取ります:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 文字列 - PL/SQL コードの有効なブロック。 PL/SQL ブロックは二重引用符で囲む必要があります。 • オブジェクト配列 — コードのブロックに対する入力パラメータを表す Java オブジェクト (String、BigDecimal など) の入力配列。 オブジェクト配列は、プレース・ホルダー(疑問符)がある PL/SQL に挿入するために使用されます。 • ブール — コミットを実行するかどうか。 ブール値は True または False です。 <p>PL/SQL の実行例:</p> <pre>fdmAPI.executePLSQL("BEGIN dbms_stats.gather_table_stats(user,?, estimate_percent=>dbms_stats.auto_sample_size,force=>TRUE); END;", ["tDataSeg_T"], True);</pre>

表 7-3 (続き) Java API リスト

API	説明
getBatchJobDetails	<p>getBatchJobDetails は、バッチによって送信されたジョブごとに次の列を戻します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • BATCH_ID • BATCH_NAME • APPLICATION_ID • BATCH_TYPE • BATCH_EXECUTION_MODE • BATCH_WAIT_TIMEOUT • USER_POV_PERIOD • OPEN_BATCH_FOLDER • PLAN_TYPE • FILENAME_SEPARATOR • BATCH_GROUP_ID • BEF_PROCESS_BATCH_SCRIPT • AFT_PROCESS_BATCH_SCRIPT • EXECUTION_DATE • EXECUTED_BY • LOADID • BATCH_LOADID • PARENT_BATCH_LOADID • PARTITIONKEY • CATKEY • START_PERIODKEY • END_PERIODKEY • IMPORT_FROM_SOURCE_FLAG • EXPORT_TO_TARGET_FLAG • RECALCULATE_FLAG • CHECK_FLAG • JOURNAL_FLAG • IMPORT_MODE • EXPORT_MODE • IMPGROUPKEY • PROCESS_NAME • RULE_TYPE • LOG_FILE • OUTPUT_FILE • EPM_ORACLE_INSTANCE • ODI_SESSION_NUMBER • STATUS
int executeDML(String query, Object[] parameters)	<p>任意の DML 文を実行します。問合せおよびパラメータを指定します。パラメータはリストとして指定します。</p>
logDB(String pEntityType, String pEntityName, int pLogSequence, String pLogMessage)	<p>データベース表 AIF_PROCESS_LOGS にメッセージを記録します。</p>
logFatal(String pLogMessage)	<p>致命的なエラーが発生した場合にメッセージをログに記録します。このメッセージはすべてのログ・レベルで表示されます。</p>

表 7-3 (続き) Java API リスト

API	説明
<code>logError(String pLogMessage)</code>	エラーが発生した場合にメッセージをログに記録します。このメッセージは 2 以上のログ・レベルで表示されます。
<code>logWarn(String pLogMessage)</code>	警告条件エラーが発生した場合にメッセージをログに記録します。このメッセージは 3 以上のログ・レベルで表示されます。
<code>logInfo(String pLogMessage)</code>	情報メッセージをログに記録します。このメッセージは 4 以上のログ・レベルで表示されます。
<code>logDebug(String pLogMessage)</code>	デバッグ・メッセージをログに記録します。このメッセージはログ・レベル 5 で表示されます。
<code>Map getProcessStates(BigDecimal pLoadId)</code>	<p>ワークフロー・プロセスのステータスを返します。使用可能なステータス:</p> <ul style="list-style-type: none"> IMPSTATUS - インポート・プロセスのステータスを返します。 0 ステータスは、プロセスがまだ開始されていないか、プロセスが失敗したことを示します。 1 ステータスは、プロセスが成功していることを示します。 VALSTATUS - 検証プロセスのステータスを返します。 0 ステータスは、プロセスがまだ開始されていないか、プロセスが失敗したことを示します。 1 ステータスは、プロセスが成功していることを示します。 EXPSTATUS - エクスポート・プロセスのステータスを返します。 0 ステータスは、プロセスがまだ開始されていないか、プロセスが失敗したことを示します。 1 ステータスは、プロセスが成功していることを示します。 CHKSTATUS - チェック・プロセスのステータスを返します。 0 ステータスは、プロセスがまだ開始されていないか、プロセスが失敗したことを示します。 1 ステータスは、プロセスが成功していることを示します。 PROCESSSTATUS - 正確なエラー・コードを返します。エラー・コードの詳細は、<code>tlogprocessstates</code> 表で確認できます。
<code>Map getPeriodDetail(Date pPeriodKey,String pApplicationName) //returns PERIODTARGET and YEARTARGET</code>	特定の期間キーに対するターゲット期間マッピングを返します。
<code>Object getCustomScriptParameterValue(BigDecimal pLoadId,String pParameterName)</code>	指定のカスタム・スクリプト・パラメータ名と <code>loadID</code> に対する値を返します。
<code>Object getCustomScriptParameterValue(String pParameterName)</code>	指定のカスタム・スクリプト・パラメータ名と初期化ロードされたコンテキストの値を返します。

表 7-3 (続き) Java API リスト

API	説明
ResultSet getBatchDetails()	AIF_BATCHES 表からバッチ定義情報を返します。 getBatchDetails()から返されるフィールド: <ul style="list-style-type: none"> BATCH_ID BATCH_NAME APPLICATION_ID BATCH_TYPE BATCH_EXECUTION_MOD
ResultSet getBatchJobDetails(BigDecimal pLoadId)	指定の loadid についてデータベース表 AIF_PROCESS_LOGS に記録されたエラー・メッセージを取得します。
ResultSet getCategoryList()	結果セット内のカテゴリのリストを返します。 getCategoryList()から返されるフィールド: <ul style="list-style-type: none"> CATKEY CATNAME
ResultSet getCheckEntityGroupList(BigDecimal pApplicationId)	結果セット内の確認グループのリストを返します。
ResultSet getCheckEntityForGroup(String pValGroupKey)	結果セット内の確認グループのエンティティ・リストを返します。
ResultSet getCheckEntityGroupList(BigDecimal pApplicationId)	結果セット内の確認ルール・グループのリストを返します。
ResultSet getCheckEntityForGroup	結果セット内の確認ルール・グループのルールのリストを返します。
ResultSet getCustomDBLog()	現在のプロセスについてデータベース表 AIF_PROCESS_LOGS に記録されたエラー・メッセージを取得します。 getCustomDBLog()から返されるフィールド: <ul style="list-style-type: none"> ENTITY_TYPE ENTITY_NAME LOG_SEQUENCE
ResultSet getCustomDBLog(BigDecimal pLoadId)	指定の loadID について DB からログ文を返します。
ResultSet getCustomScriptParameters()	コンテキストの初期化済 loadID に対する結果セットのカスタム・スクリプト・パラメータ・リストを返します。
ResultSet getCustomScriptParameters(BigDecimal pLoadId)	指定の loadID に対する結果セットのカスタム・スクリプト・パラメータ・リストを返します。
ResultSet getPeriodList()	結果セット内の期間のリストを返します。 getPeriodList()から返されるフィールド: <ul style="list-style-type: none"> PERIODKEY PERIODDESC
ResultSet executeQuery(String query, Object[] parameters)	任意の SQL 問合せ文を実行します。問合せの結果が結果セットとして返されます。問合せおよびパラメータを指定します。パラメータはリストとして指定します。

表 7-3 (続き) Java API リスト

API	説明
ResultSet getImportFormatDetails(String pImpGroupKey)	<p>インポート・フォーマット・キーに基づく結果セットとしてインポート・フォーマットの詳細を返します。</p> <p>getImportFormatDetails(String pImpGroupKey)から返されるフィールド:</p> <ul style="list-style-type: none"> • IMPGROUPKEY • IMPGROUPDESC • IMPGROUPFILETYPE • IMPGROUPDELIMITER • IMPGROUPTYPE • IMPSOURCESYSTEMID • IMPSOURCELEDGERID • IMPSOURCECOAID • IMPTARGETAPPLICATIONID • IMPADAPTERID • IMPDRILLURLID • IMPODISCENARIO • IMPREGENSCEN • IMPDRILLREQUESTMETHOD • IMPDRILLURL • IMPTARGETSOURCESYSTEMID
ResultSet getImportFormatMapDetails(String pImpGroupKey)	<p>指定のインポート・フォーマット・キーに対する結果セットとしてインポート・フォーマット・マッピングの詳細を返します。現在、ファイルベースのインポート・フォーマットのみサポートされています。</p> <p>getImportFormatMapDetails(String pImpGroupKey)から返されるフィールド:</p> <ul style="list-style-type: none"> • IMPSEQ • IMPGROUPKEY • IMPFLDFIELDNAME • IMPFLDFIXEDTEXT • IMPFLDSTARTPOS • IMPFLDLENGTH • IMPFLDSOURCECOLNAME

表 7-3 (続き) Java API リスト

API	説明
ResultSet getLocationDetails(BigDecimal pPartitionKey)	指定のロケーション・キーに対するレコード・セットとしてロケーションの詳細を返します。 getLocationDetails から返されるフィールド: <ul style="list-style-type: none">• PARTITIONKEY• PARTNAME• PARTDESC• PARTNOTES• PARTLASTIMPFIELD• PARTLASTEXPFIELD• PARTIMPGROUP• PARTLOGICGROUP• PARTVALGROUP• PARTVALENTGROUP• PARTCURRENCYKEY• PARTPARENT• PARTTYPE• PARTSEQMAP• PARTDATAVALUE• PARTSEGMENTKEY• PARTCONTROLSTYPE• PARTCONTROLSGROUP1• PARTCONTROLSGROUP2• PARTCONTROLSAPPROVER• PARTCONTROLSAPPROVERPROXY• PARTCONTROLSREDFLAGLEVEL• PARTCLOGICGROUP• PARTINTGCONFIG1• PARTINTGCONFIG2• PARTINTGCONFIG3• PARTINTGCONFIG4• PARTADAPTOR• PARTSOURCESYSTEMID• PARTSOURCELEDGERID• PARTTARGETAPPLICATIONID• PARTPARENTKEY• PARTSOURCEAPPLICATIONID• PARTTARGETSOURCESYSTEMID

表 7-3 (続き) Java API リスト

API	説明
	たとえば、 <code>getLocationDetails</code> API から返されるフィールドを確認する場合は、次のスクリプトを実行します:
	<pre>rs = fdmAPI.getLocationDetails(fdmContext ["LOCKEY"])</pre>
	<pre>i = 1</pre>
	<pre>metaData = rs.getMetaData()</pre>
	<pre>while i <= metaData.getColumnCount():</pre>
	<pre>fdmAPI.logDebug(metaData.getColumnLab el(i))</pre>
	<pre>i +=1</pre>

表 7-3 (続き) Java API リスト

API	説明
ResultSet getRuleDetails(BigDecimal pRuleId)	<p>指定のデータ・ルール ID に対するレコード・セットとしてデータ・ルールの詳細を返します。</p> <p>getRuleDetails(BigDecimal pRuleId)から返されるフィールド:</p> <ul style="list-style-type: none"> • RULE_ID • SOURCE_SYSTEM_ID • SOURCE_LEDGER_ID • APPLICATION_ID • RULE_NAME • RULE_DESCRIPTION • PLAN_TYPE • LEDGER_GROUP • INCL_ZERO_BALANCE_FLAG • BALANCE_SELECTION • AMOUNT_TYPE • BALANCE_METHOD_CODE • BALANCE_TYPE • BAL_SEG_VALUE_OPTION_CODE • EXCHANGE_RATE_OPTION_CODE • EXCHANGE_BEGIN_RATE_TYPE • EXCHANGE_END_RATE_TYPE • EXCHANGE_AVERAGE_RATE_TYPE • DATA_SYNC_OBJECT • DATA_SYNC_OBJECT_ID • PARTCONTROLSAPPROVERPROXY • PARTCONTROLSREDFLAGLEVEL • STATUS • PARTITIONKEY • CATKEY • INCLUDE_ADJ_PERIODS_FLAG • BALANCE_AMOUNT_BS • BALANCE_AMOUNT_IS • AS_OF_DATE • BLANK_PERIODKEY • BR_MEMBER_NAME • BR_MEMBER_DISP_NAME • CALENDAR_ID • CURRENCY_CODE • DP_MEMBER_NAME • FILE_NAME_DATE_FORMAT • FILE_NAME_STATIC • FILE_NAME_SUFFIX_TYPE • FILE_PATH • LEDGER_GROUP_ID • PERIOD_MAPPING_TYPE • VERSION • SIGNAGE_METHOD • DIRECT_FILE_LOAD_FLAG • LOAD_OPTIONS

表 7-3 (続き) Java API リスト

API	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • RULE_ATTR1 • RULE_ATTR2 • RULE_ATTR3 • RULE_ATTR4 • ICP_LOAD • MULTI_PERIOD_FILE_FLAG • IMPGROUPKEY • SOURCE_APP_PLAN_TYPE
showCustomDBLog()	プロセス完了後にユーザー・インタフェースにカスタム・メッセージ・リストを示します。メッセージは、データ・ロード・ワークフロー・ステップ(インポート、検証、エクスポート、確認など)の終了時、またはカスタム・スクリプト実行の終了時に表示できます。プロセスがオンライン・モードで実行される場合のみメッセージが表示されることに注意してください。
showCustomFile(String filePath)	プロセス完了後にユーザー・インタフェースにカスタム・ファイル(ログ・ファイル、レポート・ファイル)を表示します。メッセージは、データ・ロード・ワークフロー・ステップ(インポート、検証、エクスポート、確認など)の終了時、またはカスタム・スクリプト実行の終了時に表示できます。プロセスがオンライン・モードで実行される場合のみメッセージが表示されることに注意してください。
showCustomMessage(String message)	プロセス完了後にユーザー・インタフェースにカスタム・メッセージを示します。メッセージは、データ・ロード・ワークフロー・ステップ(インポート、検証、エクスポート、確認など)の終了時、またはカスタム・スクリプト実行の終了時に表示できます。プロセスがオンライン・モードで実行される場合のみメッセージが表示されることに注意してください。
String getCategoryMap(BigDecimal pCatKey,String pApplicationName)	指定のカテゴリおよびアプリケーション名のシナリオを返します。
String getCustomMessage()	現在のプロセスについて発行された最後のカスタム・メッセージを取得します。
String getCustomMessage(BigDecimal pLoadId)	指定の loadid について発行された最後のカスタム・メッセージを取得します。
String getCustomFile()	現在のプロセスについて作成されたカスタム・ファイルを取得します。
String getCustomFile(BigDecimal pLoadId)	指定の loadid について作成されたカスタム・ファイルを取得します。
String getPOVDDataValue(BigDecimal pPartitionKey)	ロケーションのデータ値を返します。
String getDirTopLevel(BigDecimal pApplicationId)	アプリケーションに基づいて最上位レベル・ディレクトリを返します。
String getDirInbox(BigDecimal pApplicationId)	アプリケーションに基づいて Inbox ディレクトリを返します。
String getDirOutbox(BigDecimal pApplicationId)	アプリケーションに基づいて Outbox ディレクトリを返します。

表 7-3 (続き) Java API リスト

API	説明
String getDirScripts(BigDecimal pApplicationId)	アプリケーションに基づいて Scripts ディレクトリを返します。
String getProfileOptionValue(String pProfileOptionName, BigDecimal pApplicationId, String pUserName)	オプションの値セットを返します。オプションは、「システム設定」、「アプリケーション設定」および「ユーザー設定」で設定できます。優先順位は、ユーザー、アプリケーション、システムです。API によって、適切な適用可能値が判別され、値が返されます。
void writeToProcessLogsDB(BigDecimal pLoadId, String pEntityType, String pEntityName, int pLogSequence, String pLogMessage)	ログ情報を AIF_PROCESS_LOGS 表に書き込みます。エンティティ・タイプとエンティティ名を使用して、記録されたメッセージをグループ分けします。データ・ロード・ワークフロー・プロセスからのみログを作成できます。
void writeToProcessLogsFile(BigDecimal pLoadId, String pLogMessage)	ログ情報をデータ・ロード・プロセスのログ・ファイルに書き込みます。ログはプロセス・ログ・レベルに基づいて書き込まれます。データ・ロード・ワークフロー・プロセスからのみログを作成できます。
void closeConnection()	データベース接続を閉じるために使用します。
void closeResultSet(ResultSet resultSet)	結果オブジェクトを閉じるために使用します。
void updateImportFormat(String pImpgroupKey, BigDecimal pLoadId)	現在の実行のインポート・フォーマットを更新します。これはファイルベースのインポート・フォーマットのみ適用できます。

 **ノート:**

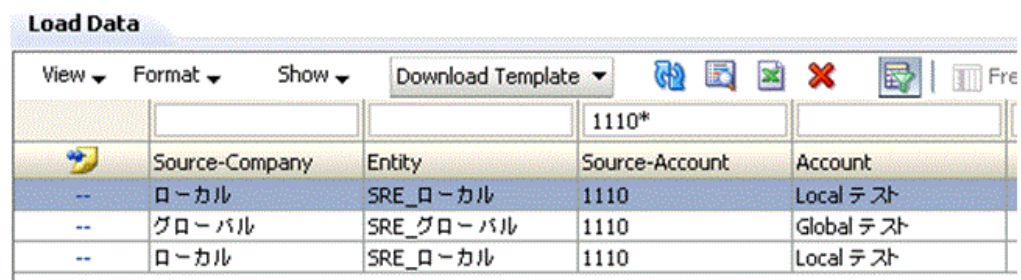
writeToProcessLogsFile API ではなくロギング API (たとえば、logDebug または logInfo API) を使用することをお勧めします。

Jython スクリプトでの UNICODE 文字の使用

スクリプト・コードを Jython テクノロジーで記述するとき、英語以外の UNICODE の文字列を指定するには、文字列を二重引用符で囲み、文字「u」を前に付けます。つまり、文字列を "MyValue" と定義するのではなく、u"MyValue" と定義します。「勘定科目」ディメンションのデータ・ロード・マッピング・スクリプトで使用される次の例を参照してください。

```
entity = fdmRow.getString("ENTITY")
account = fdmRow.getString("ACCOUNT")
if (entity == u"グローバル" and account == "1110"):
    fdmResult = u"Global テスト"
elif (entity == u"ローカル" and account == "1110"):
    fdmResult = u"Local テスト"
else:
    fdmResult = account
```

前述のスクリプトでは、ユーザー定義文字列に「u」接頭辞が使用されています。「u」接頭辞を英語/ASCII 文字列に使用することもできます(つまり、「1110」または u"1110"を使用できます)。ワークベンチに適用されたマッピング結果を次に示します。



Source-Company	Entity	Source-Account	Account
ローカル	SRE_ローカル	1110	Local テスト
グローバル	SRE_グローバル	1110	Global テスト
ローカル	SRE_ローカル	1110	Local テスト

スクリプトを開発するための JAVA IDE の使用

Oracle jDeveloper または Eclipse など一般的な Java IDE ツールを使用して、スクリプトを開発およびテストします。Eclipse を使用してスクリプトを開発する前に、PyDev インタプリタをインストールして構成する必要があります。詳細は、<http://pydev.org> を参照してください。IDE 環境を構成したら、次の JAR ファイルを Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition がインストールされている EPM Server からコピーします(ファイルのロケーション: EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialDataQuality/lib):

1. aif-apis.jar
2. aif-custom.jar

さらに、適切な(Oracle または SQL Server の) JDBC ドライバ JAR もダウンロードします。これらのファイルをプロジェクトの作業ディレクトリにコピーしてから、作成

するプロジェクトに含めます。次に、選択した IDE から実行する際に必要な初期化ステップのサンプルを示します:

```
#Start Initialize Code

#Required for Dev Mode. Not required in production script

import java.math.BigDecimal as BigDecimal

import java.sql as sql

import com.hyperion.aif.scripting.API as API

fdmAPI = API()

conn = None

conn = sql.DriverManager.getConnection("jdbc:oracle:thin:@server:1521:orcl",
"user", "password");

conn.setAutoCommit(False)

fdmAPI.initializeDevMode(conn);

print "SUCCESS CONNECTING TO DB"

fdmContext = fdmAPI.initContext(BigDecimal(1720))

#End Initialize Code Required for Dev Mode. Not required in production script

#Code to be added to production script

print fdmContext["LOCNAME"]

print fdmContext["LOCKEY"]

print fdmContext["APPID"]
```

Visual Basic

11.2.5 の新規インストールから、**Visual Basic** スクリプトの使用はサポートされません。11.2.X より前のバージョンから 11.2.5 にアップグレードしたユーザーは引き続き **Visual Basic** スクリプトを使用できますが、**Visual Basic** の使用を継続するには、インプレース・アップグレードを実行する必要があります。**Visual Basic** のサポートは 11.2.7 ですべてのユーザーに対して削除されます。ユーザーは、スクリプト言語として **Jython** に移行する必要があります。

8

FDMEE レポート

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition には、組織内のビジネス・クリティカルな操作および収益を創出するアクティビティを取り込むレポートが組み込まれています。これらのレポートはメタデータとデータをソースからターゲットに統合する方法に関する重要な情報を提供します。

FDMEE のレポート・フレームワークによって、レポート・グループ割当てを調整し、レポートをレポート・グループに追加または削除し、レポート・セキュリティを制御できます。

FDMEE レポート

ここでは標準の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition レポート・グループについて説明します。各レポートのサブカテゴリの詳細は、[FDMEE の詳細レポート](#)を参照してください。

Base Trial Balance (With Rules)

Location: KS7DIM_FILE
Category: Actual
Period: 2005-01-01
Currency: [NONE]

GL Account	GL Center	GL Account Description	Amount	Acct Rule	Entity Rule
Travel	EastAdmin		2,991.37	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Travel	WestAdmin		1,937.34	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Travel	EastSales		381.33	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Travel	WestSales		1,366.48	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
		Total	6,676.51		
Software	EastAdmin		1,197.38	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Software	EastSales		152.64	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Software	WestSales		547.77	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Software	WestAdmin		775.47	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
		Total	2,673.26		
Meals	EastAdmin		1,000.06	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Meals	WestSales		457.02	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Meals	WestAdmin		648.26	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Meals	EastSales		127.60	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
		Total	2,234.74		
BuildingDepr	EastAdmin		1,509.86	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
BuildingDepr	WestSales		1,600.00	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
BuildingDepr	EastSales		3,838.17	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
BuildingDepr	WestAdmin		183.32	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
		Total	7,131.35		
Advertising	EastAdmin		1,261.62	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Advertising	WestSales		577.16	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Advertising	EastSales		160.82	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
Advertising	WestAdmin		817.08	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
		Total	2,816.68		
TransportationDepr	EastSales		1,584.40	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
TransportationDepr	WestAdmin		75.67	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
TransportationDepr	EastAdmin		623.27	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT
TransportationDepr	WestSales		575.00	ACCT_DEFAULT	ACCT_DEFAULT

2/8/2013 12:44:20 PM

Page 1 of 37

問合せ定義の操作

レポート定義には、2つのタイプの SQL 問合せを使用できます: ベース問合せとパラメータ問合せです。

ベース問合せを使用すると、各種の表からデータを取り込み、データをレポート出力として表示できます。ベースは標準レポートの定義を拡張したもので、複数のレポートで再利用できます。たとえば、1つの問合せ定義を使用して、様々な列またはグループを表示できます。あるレポートで、勘定科目別に金額をリストし、エンティティ別にグループ化したり、エンティティ別に金額をリストし、勘定科目別にグループ化することができます。

パラメータ SQL 問合せを使用すると、レポート定義内のパラメータに対して問合せを実行できます。たとえば、問合せを使用して、ロケーション、期間、カテゴリまたは勘定科目を選択します。

SQL 問合せを構築するために使用できる表や結合の詳細は、付録 G の **TDATASEG 表のリファレンス** および **TLOGPROCESS 表のリファレンス** を参照してください。

TDATASEG 表は、ユーザーによってロードされたデータおよび、ソース・ディメンション・メンバーとマッピング・プロセス結果の変換を保管するために使用されます。TLOGPROCESS 表は、ロケーション、カテゴリおよび期間のワークフロー・プロセス・ステータスを格納するために使用されます。

問合せ定義を XML ファイルとして保存し、それを Oracle Business Intelligence Publisher または Microsoft Word 用の BI Publisher デスクトップ・アドインで使用してカスタム・テンプレートを作成できます。

問合せ定義を追加するには:

1. 「設定」タブの「レポート」で、「問合せ定義」を選択します。
2. 「問合せ定義」で、「追加」をクリックします。
3. 「名前」に、問合せ定義の名前を入力します。

SQL が組み込まれるレポート定義に対応する名前を割り当てることをお勧めします。

4. 「SELECT 句」で、データベースを問合せして、選択した基準に一致するデータを戻すために使用する SQL SELECT 句を指定します。
5. 「WHERE 句」で、戻されるデータを特定の基準にのみ制限するために使用する SQL WHERE 句を指定します。
6. 「GROUP BY/ORDER BY 句」で、GROUP BY 句または ORDER BY 句を指定します。

ORDER BY 句は、結果セット内のレコードをソートします。ORDER BY 句は、SQL SELECT 文でのみ使用できます。

GROUP BY 句は、複数のレコードにわたるデータをフェッチし、1つ以上の列でグループ化された結果を戻します。

7. 「問合せの検証」をクリックします。

問合せ定義が検証されると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition から「問合せ検証が成功しました」というメッセージが返されます。

問合せ定義が検証されない場合、FDMEET は、SQL でエラーが検出されたことを示します。エラーを修正してから、問合せを再度検証する必要があります。

8. 「保存」をクリックします。
9. **オプション:** 問合せ定義を XML ファイルに保存するには、「XML の生成」をクリックします。

レポート定義の操作

レポート定義は、レポートの内容と構造を決定する属性です。「レポート定義」オプションを使用すると、次のことができます:

- レポート定義の詳細の確認
- レポート・グループへのレポートの追加または削除
- レポート・グループへのレポートの関連付け。

レポート・グループの追加

レポート・グループを使用すると、類似するタイプのレポートを使いやすいように 1 つのカテゴリにまとめることができます。


レポート・グループを追加するには:

1. 「設定」タブの「レポート」で、「レポート定義」を選択します。
2. 「レポート定義」で、「レポート・グループ」タブを選択します。
3. 「レポート・グループ」で、「追加」をクリックします。
4. 空白の「名前」フィールドに、レポート・グループのタイトルを入力します。
たとえば、「Base Trial Balance Reports」と入力します。
5. 「シーケンス」に、「レポート定義」画面のレポート・グループの表示順序を示す数値を入力します。
6. 「保存」をクリックします。

レポート・グループへのレポートの関連付け

レポート定義を追加して、レポート・グループ定義にレポートを関連付けるには:

1. 「設定」タブの「レポート」で、「レポート定義」を選択します。
2. 「レポート定義」で、「レポート」タブを選択します。
「レポート」タブには 3 つの領域があります:
 - サマリー - すべてのレポート定義がリストされます。
 - 詳細 - レポート名、関連する基本問合せ定義、レポート・グループ、および関連するテンプレートが表示されます。
 - パラメータ - パラメータ名、パラメータ・タイプ、表示名、シーケンス、パラメータ値、および特定のレポート・パラメータの値リストの指定に使用される問合せ定義が表示されます。
3. サマリー・グリッドで、「追加」をクリックします。
4. 詳細グリッドで、「名前」にレポート定義の名前を入力します。
5. 「グループ」で、定義と関連付けるレポート・グループ名を選択します。

レポート・グループで検索するには、 をクリックし、「検索して選択: グループ」画面からレポート・グループを選択します。

レポート・グループは、「レポート・グループ」タブで作成します。[レポート・グループの追加](#)を参照してください。

6. 「保存」をクリックします。

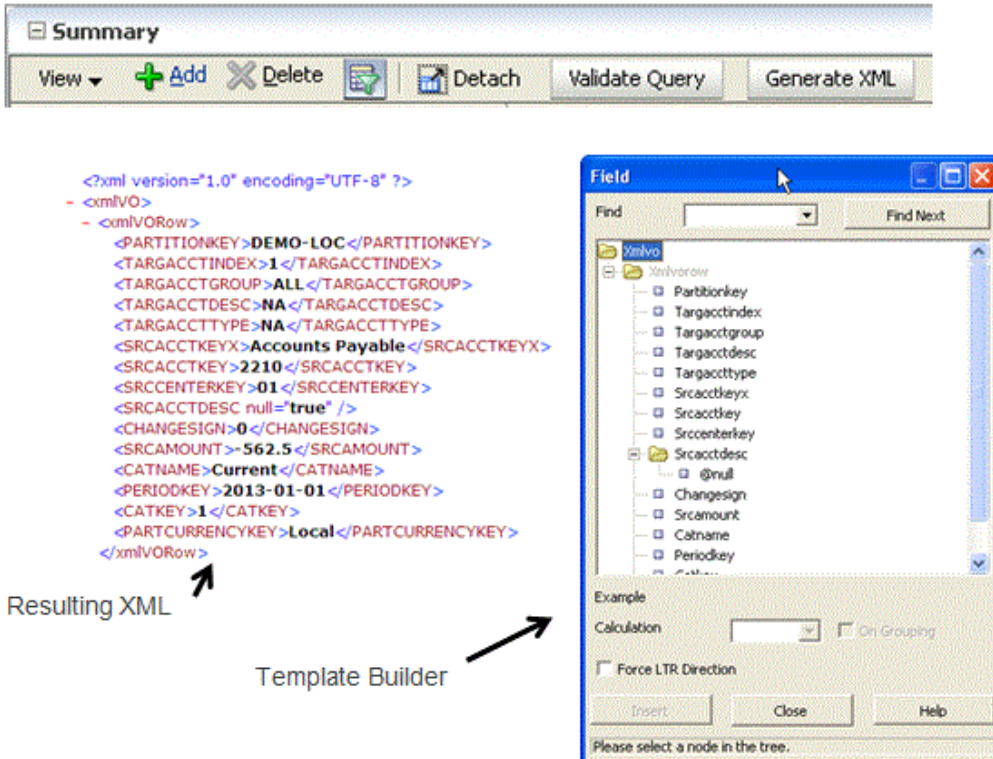
レポートをコピーするには:

1. 「設定」タブの「レポート」で、「レポート定義」を選択します。
2. 「レポート定義」の「レポート」サマリー・グリッドで、レポートを選択します。
3. 「レポート」サマリー・グリッドで、「現在のレポートのコピー」をクリックします。

コピーされたレポートはレポートのリストに追加されます。レポートの名前は、元のレポート名の後に"_copy"を付加したものになります。

レポート・テンプレートの作成

Oracle Business Intelligence Publisher で作成されたレポート・テンプレートは、XML 形式のデータを消費し、レポートを動的に生成します。



The image shows two parts of the Oracle BI Publisher interface. On the left, a toolbar for a 'Summary' report includes buttons for 'View', '+ Add', 'X Delete', 'Detach', 'Validate Query', and 'Generate XML'. Below the toolbar is a snippet of XML code representing a report row. On the right, the 'Field' dialog box is open, showing a tree view of XML nodes under 'XmlVRow'. The 'Example' section has a 'Calculation' field and a 'Force LTR Direction' checkbox. Arrows point from the XML code to the 'Field' dialog and from the 'Field' dialog to the 'Template Builder' label.

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
- <xmlVRow>
- <xmlVRow>
  <PARTITIONKEY>DEMO-LOC</PARTITIONKEY>
  <TARGACCTINDEX>1</TARGACCTINDEX>
  <TARGACCTGROUP>ALL</TARGACCTGROUP>
  <TARGACCTDESC>NA</TARGACCTDESC>
  <TARGACCTTYPE>NA</TARGACCTTYPE>
  <SRCACCTKEYX>Accounts Payable</SRCACCTKEYX>
  <SRCACCTKEY>2210</SRCACCTKEY>
  <SRCCENTERKEY>01</SRCCENTERKEY>
  <SRCACCTDESC null="true" />
  <CHANGESIGN>0</CHANGESIGN>
  <SRCAMOUNT>-562.5</SRCAMOUNT>
  <CATNAME>Current</CATNAME>
  <PERIODKEY>2013-01-01</PERIODKEY>
  <CATKEY>1</CATKEY>
  <PARTCURRENCYKEY>Local</PARTCURRENCYKEY>
</xmlVRow>
```

レポート・テンプレートを作成するには:

1. レポートの問合せ定義を作成します。
 - a. 「設定」タブの「レポート」で、「問合せ定義」を選択します。

- b. 「問合せ定義」で、「追加」をクリックします。
 - c. 「名前」に、問合せ定義の名前を入力します。
SQL が組み込まれるレポート定義に対応する名前を割り当てることをお勧めします。
 - d. 「SELECT 句」で、データベースを問合せして、選択した基準に一致するデータを戻すために使用する SQL SELECT 句を指定します。
 - e. 「WHERE 句」で、戻されるデータを特定の基準にのみ制限するために使用する SQL WHERE 句を指定します。
 - f. 「GROUP BY/ORDER BY 句」で、GROUP BY 句または ORDER BY 句を指定します。

ORDER BY 句は、結果セット内のレコードをソートします。ORDER BY 句は、SQL SELECT 文でのみ使用できます。

GROUP BY 句は、複数のレコードにわたるデータをフェッチし、1 つ以上の列でグループ化された結果を戻します。
 - g. 「問合せの検証」をクリックします。

問合せ定義が検証されると、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition から「問合せ検証が成功しました」というメッセージが返されます。

問合せ定義が検証されない場合、FDMEE は、SQL でエラーが検出されたことを示します。エラーを修正してから、問合せを再度検証する必要があります。
 - h. 「保存」をクリックします。
2. 「XML の生成」をクリックします。
 3. レポート・テンプレートを作成します。
 - a. XML Publisher デスクトップをインストールします。

*Oracle Business Intelligence Publisher のレポート設計者ガイド*を参照してください。\$\$ Microsoft Office 用の Oracle BI Publisher Desktop をダウンロードするには、[Oracle BI Publisher のダウンロード](#)を参照してください。
 - b. ステップ 2 で作成された XML をロードします。

必要に応じてテンプレート・ビルダーのチュートリアルを参照してください。
 - c. テンプレートを保存し、サーバーにアップロードします。
 4. グループ、問合せおよびテンプレートを含むレポート定義を作成します。

翻訳済レポート・テンプレート用の XLIFF ファイルの作成

テンプレート・レイアウトのテキスト文字列の翻訳が必要な場合は、レポート・テンプレートから XLIFF (または RTF) ファイルを生成できます。

翻訳可能な文字列は、公開レポートで表示するテンプレート内の任意のテキスト(表ヘッダーやフィールド・ラベルなど)です。実行時にデータから提供されたテキストや、ユーザーが Microsoft Word のフォーム・フィールドに入力したテキストは翻訳できません。テンプレート XLIFF ファイルは、必要な数の言語に翻訳し、その翻訳を元のテンプレートに関連付けることができます。

XLIFF とは、XML Localization Interchange File Format のことです。ローカライゼーション・プロバイダが使用する標準書式です。XLIFF 仕様の詳細は、[XLIFF 1.1 仕様](#)を参照してください。

XLIFF 翻訳ファイルを作成するには:

1. **Template Builder for Word** がインストールされている **Microsoft Word** でテンプレートを開きます。
2. 「**Template Builder**」メニューで、「**ツール**」、「**翻訳**」、「**テキストの抽出**」の順に選択します。

BI Publisher によって、テンプレートから翻訳可能な文字列が抽出され、XLIFF (.xlf) ファイルにエクスポートされます。

3. プロンプトが表示されたら、ファイルを **TemplateName_<language code>.xlf** or **.rtf** として保存します。ここで:

- **TemplateName** は元のテンプレート名です。
- **language code** は、2 文字の ISO 言語コードです(小文字を使用)。

たとえば、元のテンプレートの名前が **EmployeeTemplate** で、日本-日本語用の翻訳をアップロードする場合、ファイルには **EmployeeTemplate_ja.xlf** という名前を付けます。

ファイル名に地域コードを含める方法に関する詳細は、[Oracle Business Intelligence Publisher レポート設計者ガイド](#)を参照してください。

4. レポート・エディタで、「**レイアウト**」ページを選択して翻訳済 XLIFF ファイルをアップロードします。
5. **<EPM_ORACLE_HOME>\Products\FinancialDataQuality\Templates** フォルダにある言語のサブディレクトリにファイルを保存します。

レポートの実行

レポートを実行するには:

1. 「**ワークフロー**」タブの「**その他**」で、「**レポートの実行**」を選択します。
2. 「**レポートの実行**」の「**レポート・グループ**」で、レポート・グループを選択します。
3. 「**レポート**」で、レポートを選択します。

レポート・グループ内のレポート名で表示リストをフィルタするには、「**名前**」フィールドの上にある空白のエントリ行にレポートの名前を入力し、[Enter]を押します。たとえば、「**勘定科目**」で始まるレポートのみを表示する場合は、「**勘定科目**」を入力して[Enter]を押します。

レポート・グループ内のベース問合せ名で表示リストをフィルタするには、「**問合せ**」の上にある空白のエントリ行に問合せ名を入力します。

4. 「**実行**」をクリックします。
5. 要求されたら、「**レポートの生成**」画面でパラメータ値を入力します。
 - a. 該当する場合、「**期間**」、「**カテゴリ**」および「**ロケーション**」の値を変更します。
 - b. 「**レポートの出力フォーマット**」から、出力フォーマットを選択します。

使用可能な出力フォーマットは次のとおりです:

- PDF
 - HTML
 - EXCEL (.XLS)
- c. 「**実行モード**」から、レポートを実行するオンライン方法を選択します。
オンライン方法では、レポートが即時に処理されます。
- d. **オプション**: スクリプトの実行時にレポートを生成するレポート・バッチ・スクリプトを作成するには、「**レポート・スクリプトの作成**」をクリックします。
- e. 「**OK**」をクリックします。

レポート・スクリプトを作成するには:

1. 「**ワークフロー**」タブの「**その他**」で、「**レポートの実行**」を選択します。
2. 「**レポートの実行**」の「**レポート・グループ**」で、レポート・グループを選択します。
3. 「**レポート**」で、レポートを選択します。

レポート・グループ内のレポート名で表示リストをフィルタするには、「**名前**」フィールドの上にある空白のエントリ行にレポートの名前を入力し、[Enter]を押します。たとえば、「**勘定科目**」で始まるレポートのみを表示する場合は、「**勘定科目**」を入力して[Enter]を押します。

レポート・グループ内のベース問合せ名で表示リストをフィルタするには、「**問合せ**」の上にある空白のエントリ行に問合せ名を入力します。

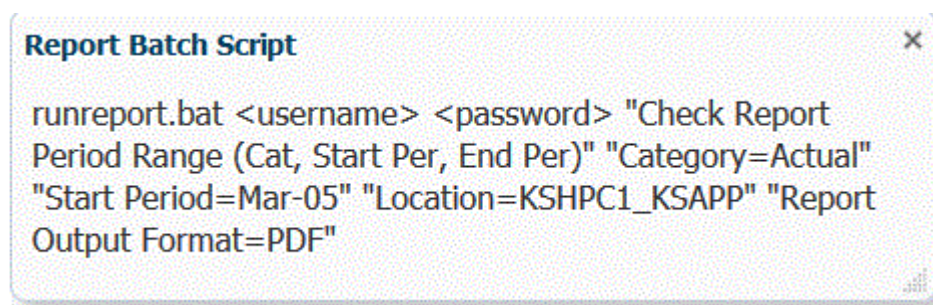
4. 「**レポート・スクリプトの作成**」をクリックします。

ノート:

レポート・スクリプトを作成する前に、パスワードの暗号化が設定されていることを確認してください。[パスワードの暗号化の使用](#)を参照してください。

5. **レポート・スクリプトの生成画面**で、パラメータ値を選択します。
6. 「**レポートの出力フォーマット**」で、バッチの出力フォーマットを選択します。
7. 「**OK**」をクリックします。

レポート・スクリプトのパラメータを示すレポート・バッチ・スクリプト・ウィンドウが表示されます。



```
Report Batch Script
runreport.bat <username> <password> "Check Report
Period Range (Cat, Start Per, End Per)" "Category=Actual"
"Start Period=Mar-05" "Location=KSHPC1_KSAPP" "Report
Output Format=PDF"
```

スクリプトは EPM Oracle Instance/FinancialDataQuality ディレクトリにあります。

- Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で生成されたスクリプトをコピーし、Window コマンド・ウィンドウまたは UNIX シェルで、スクリプトを貼り付けて実行します。

たとえば、Windows のコマンド・ラインで次のように指定します:

```
runreport.bat <username><password> "Check Report With Warnings"
"Category=Actual" "Period=March-05" "Location=PKA_TEST" "Report
Output Format=PDF"
```

ノート:

バッチ・ファイルの実行用にプログラム引数を渡す場合、Jython は、引数の先頭にスペースが含まれていないかぎり、二重引用符(“)を削除します。Jython では、エスケープ用に二重引用符が使用されます。競合を回避するために、引数の先頭にスペースを追加してください。たとえば、"Period=Mar-2003"ではなく" Period=Mar-2003"を渡します。

ノート:

バッチ・レポート・スクリプトからレポートを実行する際には、暗号化されたパスワードを含むファイルを使用できます(例: runreport.bat <username><password> file)。

FDMEE の詳細レポート

次のレポートは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で使用できます。

監査レポート

監査レポートでは、ターゲット勘定科目の残高を構成するすべてのロケーションのすべてのトランザクションが表示されます。このレポートで戻されるデータは、ユーザーに割り当てられたロケーション・セキュリティによって異なります。

勘定科目追跡ワイルドカード(ターゲット勘定科目、期間、カテゴリ)

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のすべてのロケーションに対するインポート済勘定科目が、ワイルドカード使用を可能にする勘定科目の選択に基づいて、FDMEE のロケーション別に小計されて表示されます。

実行対象

FDMEE のすべての場所

パラメータ

「ターゲット勘定科目」、「期間」、「カテゴリ」

問合せ

勘定科目追跡ワイルドカード

テンプレート

Account Chase WildCard.rtf

勘定科目追跡 - フリーフォーム(ターゲット勘定科目、期間、カテゴリ)

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のすべてのロケーションに対するインポート済勘定科目が、FDMEE のロケーション別に小計されて表示されます。

実行対象

FDMEE のすべての場所

パラメータ

「ターゲット勘定科目」、「期間」、「カテゴリ」

問合せ

勘定科目追跡フリーフォーム

テンプレート

Account Chase Free Form.rtf

ロケーションのマップ・モニター

日付範囲に基づいて、ロケーションに対して行われたマッピングの変更、追加および削除のリストを表示します。ユーザー名および変更の日時を表示します。

ノート:

マップ・モニター・レポートは、リリース 11.1.2.4.100 より前の履歴データをキャプチャしません。

マップ・モニター・レポートは、「システム設定」で「マップ監査を使用可能にする」が「はい」に設定されている場合にのみ有効になります。

マップ・モニター・レポートには、次のものからのデータ・ロード・マッピングが含まれます。

- データ・ロード・マッピング・オプション
- テキスト・ファイルのインポート
- Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理のインポート
- Oracle Data Relationship Management

実行対象

すべての Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ロケーション

パラメータ

「ロケーション」、「開始日」、「終了日」

問合せ

ディメンション・マップ問合せ

テンプレート

Dimension Map for POV.rtf

ユーザーのマップ・モニター

日付範囲に基づいて、ユーザーによって行われたマッピングの変更、追加および削除のリストを表示します。レポートは、ユーザー名および変更の日時を示します。

ノート:

マップ・モニター・レポートは、リリース 11.1.2.4.100 より前の履歴データをキャプチャしません。

マップ・モニター・レポートは、「システム設定」で「マップ監査を使用可能にする」が「はい」に設定されている場合にのみ有効になります。

マップ・モニター・レポートには、次のものからのデータ・ロード・マッピングが含まれます。

- データ・ロード・マッピング・オプション
- テキスト・ファイルのインポート
- Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理のインポート
- Oracle Data Relationship Management

実行対象

すべての Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ロケーション

パラメータ

「ユーザー名」、「開始日」、「終了日」

問合せ

POV のディメンション・マップ

テンプレート

Dimension Map for POV.rtf

交差ドリルダウン(期間、カテゴリ)

ターゲットの勘定科目および金額が表示されます。これには、ターゲット勘定科目にマップされたソースの勘定科目および金額のドリルダウン・リストが含まれます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「期間」、「カテゴリ」

問合せ

交差ドリルダウン問合せ

テンプレート

Intersection Drill Down.rtf

確認レポート

確認レポートでは、データ・ロード・ルールの実行時に発生した問題の情報が表示されます。確認レポートは、ターゲット・システムからの集計や計算を含むターゲット・システム値を戻すことに注意してください。

確認レポートを使用する場合、次の点に注意してください:

- 確認レポートを実行し、ワークベンチから開いた場合、サーバー上の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition フォルダには保管されません。
- データ・ルールを実行する際、確認ルール・レポートは自動的に生成されません。この場合、確認レポートを実行する前にデータ・ルールを実行します。
- オフライン・モードでレポートを実行する場合、レポートは FDMEE サーバーの outbox に保存されます。

- データ・ルールおよびレポートをバッチ・モードで実行するには、データ・ロード・ルールをBATファイルから実行し、レポートをBATファイルから実行します。この場合、それぞれを同じBATファイルに含めることも、BATファイルから呼び出すこともできます。

確認レポート

現在のロケーションに対する検証ルールの結果(成功または失敗ステータス)が表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「期間」、「ロケーション」 および 「カテゴリ」

問合せ

確認レポート

テンプレート

Check Report.rtf

確認レポート期間範囲(カテゴリ、開始期間、終了期間)

選択した期間に対する検証ルールの結果が表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「カテゴリ」、「開始期間」、「終了期間」

問合せ

期間問合せ内の確認レポート

テンプレート

Check Report With Period Range.rtf

確認レポート(警告あり)

現在のロケーションに対する検証ルールの結果が表示されます(警告が検証ルール内に記録されます)。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

なし

問合せ

確認レポート(警告あり)

テンプレート

Check Report With Warning.rtf

検証エンティティ・シーケンス別の確認レポート

現在のロケーションに対する検証ルールの結果(成功または失敗ステータス)が、検証エンティティ・グループで定義されている順序でソートされて表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

なし

問合せ

検証エンティティ別の確認レポート

テンプレート

Check Report By Validation Entity Sequence.rtf

基本試算表レポート

試算表レポートには、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition でのソース・データの処理方法の詳細が記載されています。通常、試算表は、一般会計システム内の勘定科目残高を表示するために使用します。データがソース一般会計システムからターゲット EPM アプリケーションにロードされる時、ロードされた残高をソース試算表の金額に対して検証および比較できます。

ノート:

基本試算表レポートを実行する前に、基本試算表レポートを実行するユーザーが、レポートに関連付けられたロケーションにアクセスできることを確認してください。(ロケーションのセキュリティの定義を参照してください)。

TB の現在のロケーション、ターゲットあり(カテゴリ、期間)

インポートされたソース勘定科目(部署)と対応する勘定科目(エンティティ)を表示します。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「カテゴリ」、「期間」

問合せ

現在の試算表、ロケーションあり、ターゲットあり

テンプレート

TB Location With Targets.rtf

TB の現在のロケーション、ルールあり(カテゴリ、期間)

インポートされたソース勘定科目(部署)と、勘定科目が含まれているマッピング・エンティティ・ルール(マップ・ワイルドカード)が表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「カテゴリ」、「期間」

問合せ

TB のロケーション、問合せあり

テンプレート

TB Location with Rules.rtf

TB の現在のロケーション、すべてのディメンション - ターゲット、ターゲット・エンティティ/勘定科目別(カテゴリ、期間)

すべてのディメンションとそれぞれのターゲットを含むすべてのインポート済レコードを表示します: ターゲット・エンティティおよび勘定科目別にグループ化します。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「カテゴリ」、「期間」

問合せ

試算表の現在のロケーション、ターゲットあり

テンプレート

TB/(All Dimensions with Targets) by Target Entity Account.rtf

TB の現在のロケーション、すべてのディメンション - ターゲット(カテゴリ、期間)

すべてのインポート済レコードが、すべてのディメンションおよびそれぞれのターゲットとともに表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「カテゴリ」、「期間」

問合せ

試算表のロケーションのすべてのディメンション。

テンプレート

TB with Transaction Currency.rtf

TB の現在のロケーション、ターゲット勘定科目別(カテゴリ、期間)

インポート済の勘定科目が、ターゲット勘定科目別に小計されて表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「カテゴリ」、「期間」

問合せ

試算表の現在のロケーション、ターゲット勘定科目別

テンプレート

TB With Target Account.rtf

TB の現在のロケーション、ターゲット・エンティティ 勘定科目別 (カテゴリ、期間)

すべてのインポート済レコードおよびすべてのディメンションとそれぞれのターゲットが、ターゲット・エンティティおよび勘定科目別にまとめられて表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「カテゴリ」、「期間」

問合せ

試算表基本トランザクション通貨

テンプレート

Base Trial Balance (All Dimensions with Targets).rtf

TB の変換済の現在のロケーション(ターゲット・エンティティ / 勘定科目別)

元の勘定科目と変換済勘定科目、およびインポート済の勘定科目とエンティティが、ターゲット・エンティティ別に小計されて表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「カテゴリ」、「期間」

問合せ

試算表の変換済のターゲット・エンティティ / 勘定科目問合せ別

テンプレート

TB Converted Current Location by Target Entity Account.rtf

リスト・レポート

リスト・レポートでは、メタデータおよび設定(インポート・フォーマットや確認ルールなど)が現在のロケーション別に要約されます。

ロケーション別のインポート・フォーマット

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーションでソートされたすべてのインポート・フォーマットのリストを表示します。

実行対象

N/A

パラメータ

なし

問合せ

ロケーション別のインポート・フォーマット

テンプレート

Import Format by Location.rtf

ロケーションのリスト

選択した期間、カテゴリまたはディメンションに対するすべてのマッピング・ルールがリストが表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

FDMEE のディメンション、期間、カテゴリ

問合せ

ロケーション・リスト問合せ

テンプレート

Location Listing.rtf

ロケーション分析

ロケーション分析レポートでは、ディメンション・マッピングが現在のロケーション別に表示されます。

ディメンション・マップ(ディメンション)

選択したディメンションに対するすべてのマッピング・ルールがリストが表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

FDMEE の現在のディメンション

問合せ

ディメンション・マップ

テンプレート

Dimension Map.rtf

POV のディメンション・マップ(ディメンション、カテゴリ、期間)

選択した期間、カテゴリまたはディメンションに対するすべてのマッピング・ルール
のリストが表示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

FDMEE のディメンション、期間、カテゴリ

問合せ

POV のディメンション・マップ

テンプレート

Dimension Map.rtf

プロセス・モニター・レポート

プロセス・モニター・レポートでは、データ変換プロセスにおけるロケーションとその位置が表示されます。プロセス・モニター・レポートを使用して、決算手順のステータスをモニターできます。レポートにはタイム・スタンプが付けられるので、時間データがロードされたロケーションを判断するために使用できます。

プロセス・モニター(カテゴリ、期間)

すべてのロケーションおよびその現在のステータス(インポート、検証、エクスポート、ロードまたは確認)が表示されます。(ロケーションがアルファベット順に表示され
ます。)

実行対象

すべての Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ロケーション

パラメータ

「カテゴリ」、「期間」

問合せ

プロセス・モニター

テンプレート

Process Monitor.rtf

プロセス・ステータス期間範囲(カテゴリ、開始期間、終了期間)

すべてのロケーションのリストおよび各ロケーションの現在のロード・ステータスが、期間範囲の期間ごとに表示されます。

実行対象

すべての Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ロケーション、期間範囲

パラメータ

「カテゴリ」、「開始期間」、「終了期間」

問合せ

PMPeriodRange

テンプレート

PMPeriodRange.rtf

プロセス・モニター、すべてのカテゴリ(カテゴリ、期間)

すべてのロケーションのリストおよび各ロケーションの現在のロード・ステータスが、カテゴリごとに表示されます。

実行対象

すべての Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition カテゴリとロケーション

パラメータ

期間

ソース

問合せ

プロセス・モニター、すべてのカテゴリ

テンプレート

Process Monitor All Category.rtf

差異レポート

差異レポートでは、1つのターゲット勘定科目のソースおよび試算表勘定科目が表示され、2つの期間またはカテゴリにわたるデータが示されます。

勘定科目追跡差異

1つのターゲット勘定科目のソース入力勘定科目が表示され、2つの期間またはカテゴリにわたる差異が示されます。

実行対象

すべての Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ロケーション

パラメータ

「ターゲット勘定科目」、「カテゴリ 1」、「第 1 期」、「カテゴリ 2」、「第 2 期」。

問合せ

勘定科目追跡差異

テンプレート

Account Chase Variance.rtf

試算表差異

ソース入力勘定科目がターゲット勘定科目別に小計されて、2つの期間またはカテゴリにわたる差異が示されます。

実行対象

現在の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のロケーション

パラメータ

「カテゴリ 1」、「第 1 期」、「カテゴリ 2」、「第 2 期」

問合せ

試算表差異

テンプレート

TB Variance.rtf

A

FDMEE REST API

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition REST (Representational State Transfer) API を使用して、データ・ルールの実行、バッチの実行、データ・マッピングのインポートとエクスポート、およびレポートの実行を行います。この API は、Web ベースのユーザー・インタフェースで選択したコンポーネントを使用することに代わる手段を提供します。

FDMEE REST API を使用した管理タスクの実行は、相当の技術および機能の専門知識を必要とするユーザー・インタフェースの使用に代わる手段です。技術的に有能な EPM Cloud 管理者およびコンサルタントのみが、FDMEE 管理者の管理タスクを実行する必要があります。

FDMEE および他の Oracle Enterprise Performance Management Cloud REST API の使用の詳細は、[Oracle Enterprise Performance Management Cloud ガイドの REST API](#) を参照してください。

FDMEE の URL 構造

URL 構造

次の URL 構造を使用して、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition REST リソースにアクセスします:

```
https://<SERVICE_NAME>-<TENANT_NAME>.<dcX>.oraclecloud.com/aif/rest/  
{api_version}/{path}
```

ここで:

api_version - 開発に使用している API のバージョン。FDMEE の現在の REST API バージョンは V1 です。

path - リソースを識別します

データ・ルールの実行

開始期間と終了期間および指定したインポートまたはエクスポート・オプションに基づいて、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition データ・ロード・ルールを実行します。

前提条件

- データ・ルール: データ・ロード・ルールでは、Integrations によってファイルからデータをロードする方法を定義します。データをロードするには、データ・ロード・ルールを事前に定義しておく必要があります。
- 特定のデータ・ルールを実行するには必須の権限が必要です。

REST リソース

POST /aif/rest/{api_version}/jobs

要求

サポートされるメディア・タイプ: application/json

パラメータ

次の表は、クライアントの要求をまとめたものです。

表 A-1 パラメータ

名前	説明	タイプ	必須	デフォルト
api_version	操作している API のバージョン(V1 など)	パス	はい	なし
jobType	"DATARULE"に設定する必要があります		はい	なし
jobName	FDMEE に定義されているデータ・ロード・ルールの名前。ルール名に空白が含まれる場合は、引用符で囲む必要があります。		はい	なし
startPeriod	データがロードされる最初の期間。この期間名は、FDMEE の期間マッピングに定義されている必要があります。		はい	なし
endPeriod	データがロードされる最後の期間。この期間名は、FDMEE の期間マッピングに定義されている必要があります。		はい	なし
importMode	データの FDMEE へのインポート方法を決定します。 使用可能な値は次のとおりです： <ul style="list-style-type: none"> • APPEND: FDMEE の既存の POV データに追加します • REPLACE: POV データを削除してファイルからのデータで置換します • RECALCULATE: データのインポートをスキップしますが、更新されたマッピングおよび論理勘定科目があるデータは再処理します。 • NONE: FDMEE のステージング表へのデータ・インポートをスキップします 		はい	なし

表 A-1 (続き) パラメータ

名前	説明	タイプ	必須	デフォルト
exportMode	<p>データの FDMEE へのエクスポート方法を決定します。</p> <p>Oracle Hyperion Planning アプリケーションで使用可能な値は次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> • STORE_DATA: FDMEE のステージング表のデータと既存の Planning データをマージします • ADD_DATA: FDMEE のステージング表のデータを Planning に追加します • SUBTRACT_DATA: FDMEE のステージング表のデータを既存の Planning データから削除します • REPLACE_DATA: POV データをクリアして FDMEE のステージング表のデータで置換します。データがクリアされる対象は、シナリオ、バージョン、年、期間およびエンティティです • NONE: FDMEE から Planning へのデータ・エクスポートをスキップします <p>Financial Consolidation and Close および Tax Reporting アプリケーションで使用可能な値は次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> • MERGE - デフォルトで、すべてのデータ・ロードがマージ・モードで処理されます。すでにアプリケーションにデータが存在する場合は、既存のデータがロード・ファイルの新しいデータで上書きされます。データがない場合は、新しいデータが作成されます。 • REPLACE - まず、データ・ロード・ファイルで参照されているアプリケーションの既存データがクリアされます。次に、データ・ロードがマージ・モードで実行されます。 • NONE - FDMEE から Financial Consolidation and Close へのデータ・エクスポートをスキップします 		はい	なし
fileName	<p>オプションのファイル名。ファイル名を指定しないと、この API によって、データ・ロード・ルールに指定されたファイル名に含まれるデータがインポートされます。データ・ファイルは、データ・ルールの実行前に受信ボックスにすでに存在している必要があります。</p>		はい	なし

URL の例

https://<SERVICE_NAME>-<TENANT_NAME>.<dcX>.oraclecloud.com/aif/rest/V1/jobs

要求本文の例

```
{
  "jobType": "DATARULE",
  "jobName": "aso to bso dr",
  "startPeriod": "Dec-18",
  "endPeriod": "Dec-18",
  "importMode": "REPLACE",
  "exportMode": "NONE",
  "fileName": ""
}
```

応答

サポートされるメディア・タイプ: application/json

表 A-2 パラメータ

名前	説明
status	ジョブのステータス: -1 = 進行中、0 = 成功、1 = エラー、2 = 取消し保留中、3 = 取消し済、4 = 無効なパラメータ
jobStatus	ジョブ・ステータスのテキスト表現であり、次のいずれかの値: "RUNNING"、"SUCCESS"、"FAILED"
jobId	ジョブに対して FDMEE で生成されたプロセス ID
logFileName	この実行のエントリを含むログ・ファイル。
outputFileName	生成された出力ファイルの名前(存在する場合)。
processType	実行されたプロセスのタイプ。すべてのデータ・ルール実行に "COMM_LOAD_BALANCES"が含まれます
executedBy	ルールの実行に使用されたユーザーのログイン名。
details	アプリケーション・エラーが発生した場合に例外スタック・トレースを戻します

応答本文の例

JSON フォーマットの応答本文の例を次に示します。

```
{
  "jobStatus": "RUNNING"
  "jobId": 2019
  "logFileName": "\\outbox\logs\Account Reconciliation Manager_2019.log"
  "outputFileName": null
  "processType": "COMM_LOAD_BALANCES"
  "executedBy": "admin"
  "status": -1
  "links": [1]
    0: {
      "rel": "self"
      "href": "https://<SERVICE_NAME>-
<TENANT_NAME>.<dcX>.oraclecloud.com/aif/rest/V1/jobs/2019"
      "action": "GET"
    }
  "details": null
}
```

}

バッチ・ルールの実行

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で定義されているジョブのバッチを実行します。

前提条件

- EPM 自動化ユーティリティを使用してバッチを実行するには、その前に FDMEE で定義する必要があります。
- 特定のバッチを実行するには必須の権限が必要です。

REST リソース

POST /aif/rest/{api_version}/jobs

要求

サポートされるメディア・タイプ: application/json

次の表は、クライアントの要求をまとめたものです。

表 A-3 パラメータ

名前	説明	タイプ	必須	デフォルト
api_version	操作している API のバージョン(V1 など)	パス	はい	なし
jobType	"BATCH"に設定する必要があります		はい	なし
jobName	FDMEE で定義されているバッチ名。		はい	なし

URL の例

https://<SERVICE_NAME>-<TENANT_NAME>.<dcX>.oraclecloud.com/aif/rest/V1/jobs
要求本文の例

```
{ "jobType": "BATCH",
  "jobName": "BatchDataLoad"
}
```

応答

次の表は、応答パラメータをまとめたものです。

表 A-4 パラメータ

名前	説明
status	ジョブのステータス: -1 = 進行中、0 = 成功、1 = エラー、2 = 取消し保留中、3 = 取消し済、4 = 無効なパラメータ

表 A-4 (続き) パラメータ

名前	説明
jobStatus	ジョブ・ステータスのテキスト表現であり、次のいずれかの値: "RUNNING"、"SUCCESS"、"FAILED"
jobId	ジョブに対して FDMEE で生成されたプロセス ID
logFileName	この実行のエントリを含むログ・ファイル。
outputFileName	生成された出力ファイルの名前(存在する場合)。
processType	実行されたプロセスのタイプ。すべてのデータ・ルール実行に "COMM_BATCH"が含まれます
executedBy	ルールの実行に使用されたユーザーのログイン名。
details	アプリケーション・エラーが発生した場合に例外スタック・トレースを 戻します

サポートされるメディア・タイプ: application/json

応答本文の例

JSON フォーマットの応答本文の例を次に示します。

```
{
  "jobStatus": "SUCCESS"
"jobId": 2016
"logFileName": "\outbox\logs\BATCH1_7595.log"
"outputFileName": null
"processType": "COMM_BATCH"
"executedBy": "admin"
"status": -1
"links": [1]
  0: {
    "rel": "self"
    "href": "https://<SERVICE_NAME>-
<TENANT_NAME>.<dcX>.oraclecloud.com/aif/rest/V1/jobs/2016"
    "action": "GET"
  }
"details": null
}
```

サンプル・コードについては、[データ・ルールの実行](#)を参照してください。

データ・マッピングのインポート

メンバー・マッピングは、ソース値に基づいて各ディメンションのターゲット・メンバーを導出するために使用されます。データ・ロード時にメンバー・マッピングが参照されることにより、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、ターゲット・アプリケーションにロードされるデータをディメンション化する方法を決定できます。メンバー・マッピングでは、単一ディメンション内のソース・メンバーとターゲット・ディメンション・メンバー間の関係が定義されます。メンバー・マッピングは、ターゲット・ディメンションごとに作成する必要があります。

選択した Excel (.CSV または .TXT) ファイルから、メンバー・マッピングをインポートできます。また、テキスト・ファイルに新しいマッピングを作成してインポートすることも可能です。メンバー・マッピングのインポートでは、ターゲット・メンバーに対する検証または検証なしオプションとともに、マージ・モードまたは置換モードもサポートします。

REST リソース

POST /aif/rest/{api_version}/jobs

要求

サポートされるメディア・タイプ: application/json

次の表は、クライアントの要求をまとめたものです。

表 A-5 パラメータ

名前	説明	タイプ	必須	デフォルト
api_version	操作している API のバージョン (V1 など)	パス	はい	なし
jobType	ジョブ・タイプ、MAPPINGIMPORT	パス	はい	なし
jobName	インポートする特定のディメンションのディメンション名 (ACCOUNT など)、またはすべてのディメンションをインポートする場合は ALL	パス	はい	なし
fileName	マッピングのインポート元のファイルおよびパス。ファイル・フォーマットは、.CSV、.TXT、.XLS または .XLSX です。ファイルは、インポート前に、受信ボックスまたは受信ボックスのサブディレクトリのいずれかにアップロードされている必要があります。ファイル・パスに受信ボックス (inbox) を含めます (inbox/BESSAPPJan-06.csv など)	パス	はい	なし
importMode	インポート・モード: 新規ルールを追加する、または既存ルールを置換する MERGE、あるいはインポート前に以前のマッピング・ルールをクリアする REPLACE	パス	いいえ	MERGE
validationMode	検証モード、true または false を使用するかどうか。true のエントリの場合、ターゲット・メンバーがターゲット・アプリケーションに対して検証され、false では、検証なしでマッピング・ファイルがロードされます。検証プロセスはリソースを大量に消費し、検証モードが false の場合よりも時間がかかります。ほとんどのユーザーが選択するオプションは false です	パス	いいえ	false

表 A-5 (続き) パラメータ

名前	説明	タイプ	必須	デフォルト
locationName	マッピング・ルールがロードされる FDMEE ロケーション。マッピング・ルールは、FDMEE のロケーションに固有です	パス	いいえ	なし

要求本文の例

JSON フォーマットの要求本文の例を次に示します。

```
{
  "jobType": "MAPPINGIMPORT",
  "jobName": "ACCOUNT",
  "fileName": "inbox/BESSAPPJan-06.csv",
  "importMode": "MERGE",
  "validationMode": "false",
  "locationName": "BESSAPP"
}
```

サンプル・コードについては、[データ・ルールの実行](#)を参照してください。

応答

次の表は、応答パラメータをまとめたものです。

表 A-6 パラメータ

名前	説明
jobId	ジョブに対して FDMEE で生成されたプロセス ID (1880 など)
jobStatus	RUNNING などのジョブ・ステータス
logFileName	この実行のエントリを含むログ・ファイル(outbox/logs/BESSAPP-DB_1880.log など)
outputFileName	生成された出力ファイルの名前(存在する場合)、それ以外の場合 null
processType	実行されたプロセスのタイプ、IMPORT_MAPPING
executedBy	ルールの実行に使用されたユーザーのログイン名(admin など)
details	アプリケーション・エラーが発生した場合に例外スタック・トレース、それ以外の場合 null を戻します

サポートされるメディア・タイプ: application/json

パラメータ

応答本文の例

JSON フォーマットの応答本文の例を次に示します。

```

{
  "links":
  [
  0]
  "status": "-1"
  "details": "null"
  "jobId": "1880"
  "jobStatus": "RUNNING",
  "logFileName": "outbox/logs/BESSAPP-DB_1880.log",
  "outputFileName": "null",
  "processType": "IMPORT_MAPPING",
  "executedBy": "admin"
}

```

サンプル・コードについては、[データ・ルールの実行](#)を参照してください。

データ・マッピングのエクスポート

メンバー・マッピングは、ソース値に基づいて各ディメンションのターゲット・メンバーを導出するために使用されます。データ・ロード時にメンバー・マッピングが参照されることにより、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、ターゲット・アプリケーションにロードされるデータをディメンション化する方法を決定できます。メンバー・マッピングでは、単一ディメンション内のソース・メンバーとターゲット・ディメンション・メンバー間の関係が定義されます。メンバー・マッピングは、ターゲット・ディメンションごとに作成する必要があります。

メンバー・マッピングを、選択したファイル・フォーマット(.csv、.txt、.xls または.xlsx)にエクスポートできます。

REST リソース

POST /aif/rest/{api_version}/jobs

要求

サポートされるメディア・タイプ: application/json

次の表は、クライアントの要求をまとめたものです。

表 A-7 パラメータ

名前	説明	タイプ	必須	デフォルト
api_version	操作している API のバージョン(V1 など)	パス	はい	なし
jobType	ジョブ・タイプ、MAPPINGEXPORT	パス	はい	なし
jobName	インポートする特定のディメンションのディメンション名(ACCOUNT など)、またはすべてのディメンションをインポートする場合は ALL	パス	はい	なし

表 A-7 (続き) パラメータ

名前	説明	タイプ	必須	デフォルト
fileName	マッピングのエクスポート元のファイルおよびパス。ファイル・フォーマットは、.CSV、.TXT、.XLS または.XLSX です。ファイル・パスに送信ボックス(outbox)を含めず(outbox/BESSAPPJan-06.csv など)	パス	はい	なし
locationName	ロケーション名(BESSAPP など)	パス	はい	なし

要求本文の例

JSON フォーマットの要求本文の例を次に示します。

```
{
  "jobType": "MAPPINGEXPORT",
  "jobName": "ACCOUNT",
  "fileName": "outbox/BESSAPPJan-06.csv",
  "locationName": "BESSAPP"
}
```

サンプル・コードについては、[データ・ルールの実行](#)を参照してください。

応答

次の表は、応答パラメータをまとめたものです。

表 A-8 パラメータ

名前	説明
jobId	ジョブに対して FDMEET で生成されたプロセス ID (1881 など)
jobStatus	SUCCESS などのジョブ・ステータス
logFileName	この実行のエントリを含むログ・ファイル(outbox/logs/BESSAPP-DB_1881.log など)
outputFileName	生成された出力ファイルの名前(outbox/BESSAPPJan-06.csv など)
processType	実行されたプロセスのタイプ、EXPORT_MAPPING
executedBy	ルールの実行に使用されたユーザーのログイン名(admin など)
details	アプリケーション・エラーが発生した場合に例外スタック・トレース、それ以外の場合 null を戻します

サポートされるメディア・タイプ: application/json

応答本文の例

JSON フォーマットの応答本文の例を次に示します。

```
{
  "links":
  [
  0]
  "status": "0",
  "details": "null",
  "jobId": "1881",
  "jobStatus": "SUCCESS",
  "logFileName": "outbox/logs/BESSAPP-DB_1881.log",
  "outputFileName": "outbox/BESSAPPJan-06.csv",
  "processType": "EXPORT_MAPPING",
  "executedBy": "admin"
}
```

サンプル・コードについては、[データ・ルールの実行](#)を参照してください。

レポートの実行

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition レポート・フレームワークは、ソースとターゲットのデータ、テンプレートおよびユーザー定義 SQL 問合せを組み込む統合ソリューションを表します。Oracle Business Intelligence Publisher で作成されたテンプレートは、XML 形式のデータを消費し、レポートを動的に生成します。SQL 問合せを追加して、表からデータを抽出したり、レポート・パラメータと組み合わせて標準レポートの定義を拡張できます。FDMEE レポートは、PDF、Excel、Word、または HTML 出力として生成されます。

REST リソース

POST /aif/rest/{api_version}/jobs

要求

サポートされるメディア・タイプ: application/json

次の表は、クライアントの要求をまとめたものです。

表 A-9 パラメータ

名前	説明	タイプ	必須	デフォルト
api_version	操作している API のバージョン (V1 など)	パス	はい	なし
jobType	ジョブ・タイプ、REPORT	パス	はい	なし
jobName	実行されるレポートの名前(POV のディメンション・マップ(ディメンション、カテゴリ、期間) など)	パス	はい	なし
reportFormatType	レポートのファイル形式(pdf、xlsx、html または excel)	パス	はい	pdf

表 A-9 (続き) パラメータ

名前	説明	タイプ	必須	デフォルト
parameters	レポートに応じて数と値が異なります	パス	はい	なし
Location	Comma_Vision などのレポートのロケーション	パス	はい	なし

要求本文の例

JSON フォーマットの要求本文の例を次に示します。

```
{
  "jobType": "REPORT",
  "jobName": "Dimension Map For POV (Dimension, Cat, Per)",
  "reportFormatType": "PDF",
  "parameters": {
    "Dimension Name": "ENTITY",
    "Category": "Actual",
    "Period": "Jan15",
    "Location": "Comma_Vision"
  }
}
```

サンプル・コードについては、[データ・ルールの実行](#)を参照してください。

応答

次の表は、応答パラメータをまとめたものです。

表 A-10 パラメータ

名前	説明
jobId	ジョブに対して FDME E で生成されたプロセス ID (1885 など)
status	RUNNING などのジョブ・ステータス
logFileName	この実行のエントリを含むログ・ファイル (outbox\logs\BESSAPP-DB_1885.log など)
outputFileName	生成された出力ファイルの名前。この名前を使用して、レポートをダウンロードできます
processType	実行されたプロセスのタイプ、EXECUTE_REPORT
executedBy	ルールの実行に使用されたユーザーのログイン名(admin など)
details	アプリケーション・エラーが発生した場合に例外スタック・トレース、それ以外の場合 null を戻します

サポートされるメディア・タイプ: application/json

パラメータ

応答本文の例

JSON フォーマットの応答本文の例を次に示します。

```
{
  "links":
  [
  0]
  "status": "-1",
  "details": "null",
  "jobId": "1885",
  "jobStatus": "RUNNING",
  "logFileName": "outbox/logs/1885.log",
  "outputFileName": "outbox/reports",
  "processType": "EXECUTE_REPORT",
  "executedBy": "admin"
}
```

サンプル・コードについては、[データ・ルールの実行](#)を参照してください。

B

FDMEE によって使用されるソース・システム表

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で使用されるソース・システム表を示します。FDMEE は、リストされたすべての表を読み取って、GL_BUDGET_INTERFACE および GL_TRACK_DELTA_BALANCES に書き込みます。

また、Oracle E-Business Suite 表のシノニムを作成する方法も説明します。

E-Business Suite ソース・システム表

E-Business Suite ソース・システムの表は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で使用されます。すべての表には、別途記載がない限り、読み取り権限が必要です。

表 B-1 E-Business Suite ソース・システム表

表/ビューの名前	スキーマ	オブジェクト・タイプ	権限	コメント
FND_FLEX_VALIDATION_QUALIFIERS	APPLSYS	表	読み取り専用	
FND_FLEX_VALIDATION_TABLES	APPLSYS	表	読み取り専用	
FND_FLEX_VALUES	APPLSYS	ビュー	読み取り専用	
FND_FLEX_VALUES_TL	APPLSYS	ビュー	読み取り専用	
FND_FLEX_VALUE_CHILDREN_V	APPS	ビュー	読み取り専用	FND_FLEX_VALUE_NORM_HIERARCHY、 FND_FLEX_VALUE_SETS、および FND_FLEX_VALUES_VL に基づくビュー
FND_FLEX_VALUE_NORM_HIERARCHY	APPLSYS	表	読み取り専用	
FND_FLEX_VALUE_SETS	APPLSYS	表	読み取り専用	
FND_FORM_FUNCTIONS	APPLSYS	表	読み取り専用	
FND_ID_FLEXES	APPLSYS	表	読み取り専用	
FND_ID_FLEX_SEGMENTS	APPLSYS	表	読み取り専用	
FND_ID_FLEX_SEGMENTS_TL	APPLSYS	表	読み取り専用	
FND_ID_FLEX_STRUCTURES	APPLSYS	表	読み取り専用	

表 B-1 (続き) E-Business Suite ソース・システム表

表/ビューの名前	スキーマ	オブジェクト・タイプ	権限	コメント
FND_ID_FLEX_STRUC TURES_TL	APPLSYS	表	読取り専用	
FND_LANGUAGES	APPLSYS	表	読取り専用	
FND_NUMBER	APPLSYS	PL/SQL パッケージ	実行	
FND_RESPONSIBILI TY	APPLSYS	表	読取り専用	
FND_RESPONSIBILI TY_TL	APPLSYS	表	読取り専用	
FND_SEGMENT_ATT RIBUTE_VALUES	APPLSYS	表	読取り専用	
GL_BALANCES	GL	表	読取り専用	
GL_BALANCES_DEL TA	GL	表	読取り専用	
GL_BUDGETS	GL	表	読取り専用	
GL_BUDGET_ENTITI ES	GL	表	読取り専用	
GL_BUDGET_INTER FACE	GL	表	読取りおよび書込み 権限が必要です。	
GL_BUDGET_VERSI ONS	GL	表	読取り専用	
GL_CODE_COMBIN ATIONS	GL	表	読取り専用	
GL_CODE_COMBIN ATIONS_KFV	APPS	ビュー	読取り専用	GL_CODE_COMBIN ATIONS に基づくビ ュー
GL_DAILY_BALANC ES	GL	表	読取り専用	
GL_DAILY_CONVERTI ON_TYPES	GL	表	読取り専用	
GL_DAILY_CONVERTI ON_TYPES_V	APPS	ビュー	読取り専用	GL_DAILY_CONVERTI ON_TYPES に基づ くビュー
GL_DAILY_RATES	GL	表	読取り専用	
GL_ENCUMBRANCE _TYPES	GL	表	読取り専用	
GL_INTERFACE	GL	表	読取りと書込み	
GL_JE_CATEGORIES	GL	表	読取り専用	
GL_JE_CATEGORIES _TL	GL	表	読取り専用	
GL_JE_SOURCES_TL	GL	表	読取り専用	
GL_LEDGERS	GL	表	読取り専用	表(R12 のみ)
GL_PERIODS	GL	表	読取り専用	
GL_PERIOD_SETS	GL	表	読取り専用	
GL_PERIOD_STATUS ES	GL	表	読取り専用	
GL_PERIOD_TYPES	GL	表	読取り専用	

表 B-1 (続き) E-Business Suite ソース・システム表

表/ビューの名前	スキーマ	オブジェクト・タイプ	権限	コメント
GL_PERIOD_TYPES_V	APPS	ビュー	読取り専用	GL_PERIOD_TYPES に基づくビュー
GL_SETS_OF_BOOKS	GL/APPS	ビュー	読取り専用	表(11i)/GL_LEDGERS に基づくビュー(R12)
GL_STAT_ACCOUNT_UOM	GL	表	読取り専用	
GL_TRACK_DELTA_BALANCES	GL	表	読取りと書込み	読取りおよび書込み権限が必要です。

PeopleSoft Enterprise Financial Management ソース・システム表

これら PeopleSoft Enterprise Financial Management ソース・システム表は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で使用されます。すべての表には、別途記載がない限り、読取り権限が必要です。

表 B-2 PeopleSoft Enterprise Financial Management ソース・システム表

表/ビューの名前	表/ビューの名前	表/ビューの名前	表/ビューの名前
PS_AFFILIATE_LANG	PS_CHARTFIELD1_TBL	PS_LEDGER	PSDBFLDLABL
PS_AFFILIATE_VW	PS_CHARTFIELD2_TBL	PS_LEDGER_BUDG	PSDBFLDLABLLANG
PS_AFFINTRA1_LANG	PS_CHARTFIELD3_TBL	PS_LOCATION_TBL	PSKEYDEFN
PS_AFFINTRA1_VW	PS_CLASS_CF_LANG	PS_NAMES	PSOPTIONS
PS_AFFINTRA2_LANG	PS_CLASS_CF_TBL	PS_OPER_UNIT_LANG	PSRECDEFN
PS_AFFINTRA2_VW	PS_DEPT_TBL	PS_OPER_UNIT_TBL	PSRECFIELD
PS_ALTACCT_LANG	PS_DEPT_TBL_LANG	PS_PAYGROUP_TBL	PS_TREE_NODE_TBL
PS_ALTACCT_TBL	PS_EARNINGS_TBL	PS_PC_BU_GL_VW	PS_TREE_NODE_LANG
PS_BD_SCENARIO_TBL	PS_FS_CF_TEMPLATE	PS_PC_INT_TMPL_GL	PSTREEDEFN
PS_BOOK_CODE_TBL	PS_FS_FLD_PROMPT	PS_POSITION_DATA	PSTREEDEFNLANG
PS_BU_BOOK_TBL	PS_FUND_LANG	PS_PROD_TBL_LANG	PSTREELEAF
PS_BU_LED_GRP_TBL	PS_FUND_TBL	PS_PRODUCT_TBL	PSTREENODE
PS_BUD_REF_LANG	PS_GL_ACCOUNT_LANG	PS_PROGRAM_LANG	PSTREESTRICT
PS_BUD_REF_TBL	PS_GL_ACCOUNT_TBL	PS_PROGRAM_TBL	PSXLATITEM
PS_BUL_CNTL_BUD	PS_HPYPB_ACCT_LN (読取りおよび書込み権限が必要です。)	PS_PROJECT	PSXLATITEMLANG
PS_BUS_UNIT_LANG	PS_HYP_KK_BD_HDR (書込み権限が必要です。 PeopleSoft コミットメント・コントロールに使用されます)	PS_PROJECT_TBL	

表 B-2 (続き) PeopleSoft Enterprise Financial Management ソース・システム表

表/ビューの名前	表/ビューの名前	表/ビューの名前	表/ビューの名前
PS_BUS_UNIT_TBL_FS	PS_HYP_KK_BD_LN (書込み権限が必要です。PeopleSoft コミットメント・コントロールに使用されます)	PS_REC_GROUP_REC	
PS_BUS_UNIT_TBL_GL	PS_JOB PS_JOBCODE_TBL	PS_REC_GROUP_TBL PS_RT_DFLT_VW	
PS_BUS_UNIT_TBL_HR		PS_RT_INDEX_TBL	
PS_CAL_ADJP_TBL	PS_LED_DEFN_LANG	PS_RT_TYPE_TBL	
PS_CAL_DEFN_TBL	PS_LED_DEFN_TBL	PS_SET_CNTRL_REC	
PS_CAL_DETP_TBL	PS_LED_GRP_LANG	PS_SET_CNTRL_TBL	
PS_CAL_SUMP_TBL	PS_LED_GRP_LED_TBL	PS_SET_CNTRL_TREE	
PS_CF1_LANG	PS_LED_GRP_TBL	PS_SETID_TBL	
PS_CF2_LANG	PS_LED_TMPLT_TBL		
PS_CF3_LANG			

PeopleSoft コミットメント・コントロール・ソース・システム表

これら PeopleSoft コミットメント・コントロール・ソース・システム表は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition で使用されます。すべての表には読取り権限が必要です。

表 B-3 PeopleSoft コミットメント・コントロール・ソース・システム表

表/ビューの名前
PS_KK_BUDGET_TYPE
PS_KK_SUBTYPE
PS_KK_FILTER
PS_KK_KEY_CF
PS_KK_BD_OFFSET
PS_CAL_BP_TBL
PS_LEDGER_KK
PS_HYP_KK_BD_HDR (PeopleSoft コミットメント・コントロールに使用されます)
PS_HYP_KK_BD_LN (書込み権限が必要です。PeopleSoft コミットメント・コントロールに使用されます)

E-Business Suite 表のシノニムの作成

apps ユーザー以外のユーザーが参照される場合は、Oracle E-Business Suite 表のシノニムを作成できます。

ノート:

PeopleSoft 管理者は通常、構成に関する PeopleSoft スキーマ・アプリケーションをユーザーに提供しないため、PeopleSoft のセットアップにはシノニムが必要です。

E-Business Suite 表のシノニムを作成するには:

1. この付録にリストされている E-Business Suite 表のシノニムを作成します。
2. 作成したすべてのシノニムに読み取りアクセス権を割り当てます。
3. 次の表に書き込みアクセス権を割り当てます:
 - GL_Interface
 - GL_Budget_Interface
 - GL_Track_Delta_Balances

EBS_Data_Server の ODI トポロジにおいてユーザーとスキーマの両方についてシノニムを使用できます。

C

Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムでの代替スキーマの作成

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のあらかじめ構築された Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムへの統合では、データ抽出に基本フィルタを使用しており、FDMEE によるアクセスを可能にするための適切なセキュリティが定義されていると想定しています。環境によっては、ソース・システム表への直接アクセスがシステム・ポリシーによって禁止されていたり、FDMEE ユーザー・インタフェースで用意されているものより詳細なソース・システム・フィルタを定義することがあります。

たとえば、Account Reconciliation Manager (ARM)で、ソース・システムから貸借対照表勘定科目またはアクティブな勘定科目のみを抽出する場合などです。そのためには、ソース・システムで代替スキーマを作成します。この方法により、必要なレベルのセキュリティ、異なるソース・システム・フィルタ、またはその両方を提供できます。

Oracle E-Business Suite および Peoplesoft (PSFT)システムの代替階層を作成するには:

1. ソース・システム・データベースで新しいスキーマまたはユーザーを作成します。
2. FDMEE によって使用されるソース表リストに対する **SELECT** または **SELECT/INSERT** アクセスを、新しいスキーマに付与します。
FDMEE によって使用されるソース・システム表で指定されているソース表リストを参照してください。
3. E-Business Suite システムの場合、必要なソース・フィルタを含む **GL_CODE_COMBINATIONS** という名前の新しいビューを作成します。
Peoplesoft システムの場合、**PS_LEDGER** 表を使用してビューを作成します。
ソース表のすべての列を、ビューに含める必要があります。
4. 新しいスキーマで FDMEE がソース・システムから参照する残りのすべてのソース表のシノニムを作成します。
シノニムは、ソース・システム・スキーマのベース表をポイントします。
5. 関連するデータ・サーバーの物理スキーマで新しいスキーマを使用するように、**Oracle Data Integrator (ODI)**を更新します。

たとえば、EBS GL_CODE_COMBINATIONS 表で作成されるビューは次のようになります:

```
CREATE VIEW GL_COMBINATIONS (SEGMENT1, SEGMENT2,.....)

SELECT SEGMENT1, SEGMENT2,....

FROM APPS.GL_CODE_COMBINATIONS

WHERE "ADD FILTERS"
```

新しいスキーマまたはシノニムで作成されるビューにはすべて、**FDMEE**によって使用されるソース・システム表で指定されたとおりの名前を使用する必要があります。表名とビュー名がコア・スキーマと同じであるため、**FDMEE**はODIでスキーマ仕様が変更された更新済のコンテンツにアクセスできます。

SAPの場合は、代替スキーマを作成するのではなく、アダプタでフィルタ定義を変更します。

システムをスムーズに更新できるように、変更を行う前に、Oracle サポートに連絡してプロセスを確認することをお勧めします。

D

ステージング表

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ステージング表について説明します。

FDMEE ステージング表

ここでは、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のステージング表について説明します。

ノート:

Oracle には、情報の挿入、更新および削除に使用できる強力なツールが用意されています。しかし、SQL*Plus または Oracle Data Browser などの Oracle のツールを使用して Oracle Applications のデータを変更した場合、データの整合性が崩れたり、データの変更内容が監査できなくなる恐れがあります。Oracle Applications の各表は相互に関連性があるため、Oracle Applications フォームを使用してなんらかの変更を行うと、多数の表が同時に更新される可能性があります。ただし、Oracle Applications フォーム以外を使用して Oracle Applications のデータを変更した場合は、いずれかの表の行を変更しても、関連する各表で対応する変更は行われません。各表間の相互同期が失われると、間違った情報が取得されたり、Oracle Applications 全体で予測できない結果を招く危険があります。Oracle Applications フォームを使用してデータを変更すると、Oracle Applications はその変更内容が有効かどうかを自動的にチェックします。また Oracle Applications は、情報を変更したユーザーを追跡します。ただし、データベース・ツールを使用して情報をデータベースの表に入力した場合は、無効な情報が格納される可能性があります。また SQL*Plus などのデータベース・ツールは変更内容の記録を保管しないため、情報を変更したユーザーを追跡できません。

したがって、インストール、実装またはオープン・インタフェースの各ガイドで特に指示されている場合を除き、SQL*Plus、Oracle Data Browser、データベース・トリガーなどのツールを使用して Oracle Applications の表を変更しないことを強くお勧めします。

「ソースからインポート」に使用されるステージング表

表 D-1 「ソースからインポート」に使用されるステージング表

表/ビューの名前	説明
TDATASEG_T	データ・ルールの実行時に、ソースからターゲットにデータを変換する場合に使用される一時データ表です。読取りの一貫性を保つために、データは対応するステージング表(たとえば、AIF_EBS_GL_BALANCES_STG、AIF_EBS_GL_DAILY_BAL_STG、または AIF_PS_LEDGER)から抽出され、TDATASEG_T (LOADID によって分割)にコピーされます。その後、この TDATASEG_T は、TDATAMAP_T で指定されたデータ・マッピングに基づいてソース・データをターゲット・データに変換する場合に使用されます。

ドリル・スルーに使用されるデータ表

表 D-2 ドリル・スルーに使用されるデータ表

表/ビューの名前	説明
TDATASEG	データ・ルールの実行におけるデータ変換について説明する監査表です。データ・ルールの実行が正常に行われた場合のみ、TDATASEG_T 内に保管されたデータ変換が TDATASEG にコピーされます。

ターゲットにエクスポートに使用されるビュー

表 D-3 「ターゲットにエクスポート」ビュー

表/ビューの名前	説明
AIF_HS_BALANCES	データ・ルールの実行で、ターゲットのアプリケーションにデータをエクスポートするために使用されるインタフェース・ビューです。このビューは、一意のターゲット・ディメンション・メンバーの組合せ全体にわたってターゲットの量を要約することで TDATASEG_T 表に直接問合せを行います。
AIF_EBS_GL_INTERFACE_V	ライトバックに対するデータ・ロード・ルールの実行で、元の E-Business Suite の一般会計システムにデータをエクスポートするために使用されるインタフェース・ビューです。このビューは、一意のターゲットのセグメント値の組合せ全体にわたってターゲットの量を要約することで TDATASEG 表に直接問合せを行います。

表 D-3 (続き) 「ターゲットにエクスポート」ビュー

表/ビューの名前	説明
AIF_PS_GL_INTERFACE_V	ライトバック・ルールに対するデータ・ロード・ルールの実行で、元の PeopleSoft Enterprise Financial Management システムにデータをエクスポートするために使用されるインタフェース・ビューです。このビューは、一意のターゲット ChartField 値の組合せ全体にわたってターゲットの量を要約することで TDATESEG 表に直接問合せを行います。

E

TDATAMAPSEG 表のアーカイブ

データのインポート時にデータの変換に使用するマッピングは、各視点(POV)の TDATAMAPSEG 表にアーカイブされています。多数のマッピングを使用している場合、この表は期間とともにサイズが大きくなり、データ・インポート処理時にパフォーマンスの問題が生じる可能性があります。パフォーマンスを改善するために、TDATAMAPSEG 表からデータをアーカイブします。

リリース 11.1.1.2.4.220 では、新しいビュー TDATAMAPSEG_ALL を使用できます。このビューは、マッピングを表示するユーザー・インターフェースによって使用されます。

TDATAMAPSEG および ARCHIVE 表を含めるように、ビュー定義を変更できます。次に、Oracle データベースでのデータのアーカイブ方法、インデックスの作成方法およびビューの作成方法を表したサンプル・スクリプト・セットを示します。

```
/* Archive the existing table */

RENAME TDATAMAPSEG TO TDATAMAPSEG_ARCHIVE1

;

/*Create index*/

CREATE INDEX TDATAMAPSEG_N1 ON TDATAMAPSEG (DATAKEY)

;

CREATE INDEX TDATAMAPSEG_N2 ON TDATAMAPSEG (PARTITIONKEY, CATKEY,
PERIODKEY)

;

/* Create a new table */

CREATE TABLE TDATAMAPSEG

AS

SELECT *

FROM TDATAMAPSEG_ARCHIVE1

WHERE 1=2

;

/* Drop existing view */

DROP VIEW TDATAMAPSEG_ALL

;

/* Create a view which is UNION of base table and archive table */
```

類似のプロセスを **SQL Server** に使用できます。複数のアーカイブを長期間にわたり作成でき、ビューを必要に応じて変更できます。

F

PeopleSoft コミットメント・コントロール

PeopleSoft のコミットメント・コントロールは、PeopleSoft General Ledger 製品において、予算の転記をサポートし、顧客が構成したルールに従って予算残高に対して取引をテストする予算コントロール機能です。コミットメント・コントロールを使用すると、総勘定元帳から代替構造を定義し、チャートフィールド(勘定科目セグメント)とカレンダーに基づいて予算を管理できます。たとえば、実際の費用はコスト・センターで月ごとに記録していても、部門レベルで四半期ごとに予算を管理することを選択できます。

さらに、予算に対して大規模な変更を行い、転記するためにその改訂を仕訳としてソース・システムに書き出す一方、当初の予算案、調整、改訂、調整済予算の間で PeopleSoft 予算の区別を維持します。たとえば、Oracle Hyperion Planning を使用して会計年度の開始時に初期予算を準備できます。会計年度全体にわたって予算を改訂するために使用することもできます。予算の準備および改訂を行うと、これを検証し、実際の収益と費用を管理および制御するコミットメント・コントロールに転記する必要があります。

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、ユーザーが Hyperion Planning を使用して予算の準備や維持ができるようにしてコミットメント・コントロールと統合します。統合には次が含まれます:

- コミットメント・コントロールからの実績情報のロード
- コミットメント・コントロール予算定義に対して、準備および改訂中の予算の検証
- コミットメント・コントロールへの初期予算の転記
- 継続的な予算の改訂のコミットメント・コントロールへの転記

FDMEE のコンテキスト内でコミットメント・コントロールを使用するには、次の手順を実行します:

1. 「ソース・システム」で、総勘定元帳と HRMS ソース・システムを登録します。
2. 「ソース・システム」で PeopleSoft コミットメント・コントロールを使用するには、「**コミットメント・コントロールを使用可能にする**」を選択します。
3. 「ターゲット・アプリケーション」で、ターゲット・アプリケーションを選択します。
4. 「インポート・フォーマット」でインポート・フォーマットを定義します。これは、Public Sector Planning and Budgeting アプリケーションのディメンションに PeopleSoft のチャートフィールドをマップする方法を指定します。
5. 「データ・ロード・ルール」で、データのロード元である PeopleSoft 会計エンティティ(ビジネス・ユニット)を識別するロケーションを定義します。
6. 「データ・ロード・ルール」で、期間マッピング・タイプとして「予算」を指定します。
7. 「データ・ロード・ルール」で、グローバル、アプリケーション、およびソースのマッピングを定義します。このマッピングによって、PeopleSoft のカレンダーと期間における期間キーが、Public Sector Planning and Budgeting の予算アプリケーションにおける月、四半期、年などの期間にどのように対応するかが指定されます。次のオプションがあります:
 - 「現日付」を選択します。

「現日付」は、有効な日付のレコード(たとえば予算定義)を決定します。

- 予算がプロジェクト期間に基づく場合、「空白期間のターゲット」を選択します。
- オプションで、「**期間マッピング**」で、カレンダーと期間を **FDMEE** の期間にマッピングして、予算期間をマッピングすることもできます。

コミットメント・コントロールでは、様々なルールで様々なカレンダーを使用できます。カレンダーは、粒度と期間が異なってもかまいません。たとえば、ルールの範囲に使用されるチャートフィールドを **Hyperion Planning** のエンティティ・ディメンションにマッピングできます。明示期間マッピングを指定する場合、カレンダーと期間が **FDMEE** 期間を指すようにして、予算期間をマッピングできます。同じ **FDMEE** 期間を、様々なカレンダーの複数のソース期間にマッピングできます。

8. データ・ロードのルールを実行します。
9. 「**インポート・フォーマット**」で、PeopleSoft 会計エンティティのチャートフィールドに書き込む **Public Sector Planning and Budgeting** データを指定するライトバック・マッピングを含むインポート・フォーマットを定義します。
10. 「**データ・ロード・ルール**」で、ライトバックに対するデータ・ロード・ルールを定義します。

ライトバック期間マッピングは明示的期間マップに基づいています。すべてのエンティティは、異なる予算カレンダーに関連付けられます。

11. 書込みに対するデータ・ロード・ルールを実行します。

G

レポート問合せ表のリファレンス

レポートを作成するとき、基本 SQL 問合せやパラメータ SQL 問合せを使用して、レポートに表示されるデータを拡張できます。基本 SQL 問合せを使用すると、各種の表からデータを取り込み、データをレポート出力として表示できます。たとえば、1つの問合せ定義を使用して、様々な列またはグループを表示できます。あるレポートで、勘定科目別に金額をリストし、エンティティ別にグループ化したり、エンティティ別に金額をリストし、勘定科目別にグループ化することができます。

パラメータ SQL 問合せを使用すると、レポート定義内のパラメータに対して問合せを実行できます。たとえば、問合せを使用して、ロケーション、期間、カテゴリまたは金額のグループを選択できます。あるレポートで、勘定科目別に金額をリストし、エンティティ別にグループ化したり、エンティティ別に金額をリストし、勘定科目別にグループ化することができます。

基本の問合せおよびパラメータ SQL 問合せで使用される Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 表は次のとおりです:

- TDATESEG
- TLOGPROCESS

TDATESEG 表のリファレンス

TDATESEG 表は、ユーザーによってロードされたデータおよび、ソース・ディメンション・メンバーとマッピング・プロセス結果の変換を保管するために使用されます。

ノート:

テキストをロードする場合、ロード先の TDATESEG の列は DATA であり、マップの結果は DATAX にロードされます。

表 G-1 TDATESEG 表のリファレンス

列名	定義	説明
DATAKEY	NUMBER(31,0) NOT NULL ENABLE	データの各行に対してシステムによって生成される一意キー
PARTIONNKEY	NUMBER(10,0) NOT NULL ENABLE	ロケーション・キー。ロケーション情報を取得するために TPOVPARTITION と結合します。
CATKEY	NUMBER(10,0) NOT NULL ENABLE	カテゴリ・キー。カテゴリ情報を取得するために TPOVCATEGORY と結合します。

表 G-1 (続き) TDATESEG 表のリファレンス

列名	定義	説明
PERIODKEY	DATE NOT NULL ENABLE	期間キー Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition と EPM 期間のマッピングの詳細を取得するために TPOVPERIOD と結合します。
DATAVIEW	VARCHAR2(8 CHAR) DEFAULT 'YTD' NOT NULL ENABLE	Enterprise Resource Planning (ERP)システムからデータを取得する場合、ファイルの場合は YTD にハード・コードされ、貸借対照表の場合は YTD、損益計算書の場合は PTD に設定されます。
CURKEY CALCACCTTYPE	VARCHAR2(10 CHAR) DEFAULT NUMBER(6,0) DEFAULT 9 NOT NULL ENABLE	データの通貨コード。 行がソースからインポートされたか、ロジック・グループによって計算されたかを示します: <ul style="list-style-type: none"> • 9=インポートされた • 5=計算されエクスポートされた • 1=計算されたがエクスポートされない
CHANGESIGN	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	インポートされた金額の符号を反転する必要があるかどうかを指定します: <ul style="list-style-type: none"> • 0=変更なし • 1=符号を反転
JOURNALID AMOUNT	VARCHAR2(10 CHAR) DEFAULT NUMBER(29,12) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	仕訳の ID。ユーザー指定値 ソースからロードされる金額
AMOUNTX	NUMBER(29 12) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	変換ルール適用後の金額。この値が、ターゲット・アプリケーションにロードされます。
DESC1	VARCHAR2(240 CHAR) DEFAULT	説明はファイルからインポートできます。
DESC2	VARCHAR2(75 CHAR) DEFAULT	説明はファイルからインポートできます。
ACCOUNT	VARCHAR2(75 CHAR) NOT NULL ENABLE	ソースの勘定科目メンバー
ACCOUNTX	VARCHAR2(4000 CHAR) DEFAULT	マッピング・ルール処理後の勘定科目メンバー
ACCOUNTR	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	このディメンションで使用されるマッピングのキー。TDATEMAPSEG の DATAKEY を参照します。
ACCOUNTF	NUMBER(6,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	マップ・タイプ: <ul style="list-style-type: none"> • 1=例外 • 3=次の値の間 • 4=範囲
ENTITY ENTITYX	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースのエンティティ・メンバー マッピング・ルール処理後のエンティティ・メンバー。この値はエクスポートされます。

表 G-1 (続き) TDATASEG 表のリファレンス

列名	定義	説明
ENTITYR	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	このディメンションで使用されるマッピングのキー。TDATAMAPSEGの DATAKEY を参照します。
ENTITYF	NUMBER(6,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	マップ・タイプ: <ul style="list-style-type: none"> • 1=例外 • 3=次の値の間 • 4=範囲
ICP	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの ICP
ICPX	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	マッピング・ルール処理後の ICP この値はエクスポートされます。
ICPR	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	このディメンションで使用されるマッピングのキー。TDATAMAPSEGの DATAKEY を参照します。
ICPF	NUMBER(6,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	マップ・タイプ: <ul style="list-style-type: none"> • 1=例外 • 3=次の値の間 • 4=範囲
UD1	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD1
UD2	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD2
UD3	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD3
UD4	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD4
UD5	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD5
UD6	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD6
UD7	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD7
UD8	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD8
UD9	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD9
UD10	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD10
UD11	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD11
UD12	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD12
UD13	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD13
UD14	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD14
UD15	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD15
UD16	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD16
UD17	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD17
UD18	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD18
UD19	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD19
UD20	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD20
UD1X	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	マッピング・ルール処理後の UD1。この値はエクスポートされます。
UD1R	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	このディメンションで使用されるマッピングのキー。TDATAMAPSEGの DATAKEY を参照します。
UD1F	NUMBER(6,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	マップ・タイプ: <ul style="list-style-type: none"> • 1=例外 • 3=次の値の間 • 4=範囲

表 G-1 (続き) TDATESEG 表のリファレンス

列名	定義	説明
ARCHIVEID	NUMBER(31,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	将来使用予定
HASMEMOITEM	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	将来使用予定
STATICDATAKEY	NUMBER(31,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	将来使用予定
ATTR1	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR2	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR3	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR4	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR5	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR6	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR7	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR8	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR9	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR10	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR11	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR12	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR13	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR14	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される

表 G-1 (続き) TDATESEG 表のリファレンス

列名	定義	説明
ATTR15-ATTR40	新規列	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
CODE_COMBINATION_ID	VARCHAR2(155 CHAR)	Oracle E-Business Suite との統合に使用されます。
AMOUNT_YTD	NUMBER(29,12)	YTD 金額。E-Business Suite、Peoplesoft データ・ソースに使用されます
AMOUNT_PTD	NUMBER(29,12)	PTD 金額。E-Business Suite、Peoplesoft データ・ソースに使用されます
LOADID	NUMBER(15,0)	この行を作成または更新したプロセス ID。
RULE_ID	NUMBER(15,0)	この行の作成に使用されたデータ・ルール ID。詳細を取得するために AIF_BALANCE_RULES と結合します。
STAT_BALANCE_FLAG	VARCHAR2(1 CHAR)	残高が統計かどうかを示します: <ul style="list-style-type: none"> • Y=統計 • N=残高
VALID_FLAG	VARCHAR2(1 CHAR)	行に有効なマッピングがあるかどうかを示します: <ul style="list-style-type: none"> • Y=有効 • N=無効 • I=無視

TLOGPROCESS 表のリファレンス

TLOGPROCESS 表は、ロケーション、カテゴリおよび期間のワークフロー・プロセス・ステータスを格納するために使用されます。

表 G-2 TLOGPROCESS 表のリファレンス

列名	定義	説明
PARTITIONKEY	NUMBER(10,0) NOT NULL ENABLE	ロケーション・キー。ロケーション情報を取得するために TPOVPARTITION と結合します。
CATKEY	NUMBER(10,0) NOT NULL ENABLE	カテゴリ・キー。カテゴリ情報を取得するために TPOVCATEGORY と結合します。
PERIODKEY	DATE NOT NULL ENABLE	期間キー Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition と EPM 期間のマッピングの詳細を取得するために TPOVPERIOD と結合します。

表 G-2 (続き) TLOGPROCESS 表のリファレンス

列名	定義	説明
RULE_ID	NUMBER(15,0) NOT NULL ENABLE	データ・ルール ID。詳細を取得するために AIF_BALANCE_RULES と結合します。
PROCESSIMP	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	インポート・ステップのステータス: <ul style="list-style-type: none"> 0=未開始または失敗 1=成功
PROCESSIMPNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL	検証ステータスに関するテキスト・ノート: <ul style="list-style-type: none"> インポート成功 再計算 OK インポート・エラー 再計算失敗 マルチロード データ・ロードのバイパス ロジック計算エラー マップ計算エラー
PROCESSVAL	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE,	検証ステップのステータス: <ul style="list-style-type: none"> 0=未開始または失敗 1=成功
PROCESSVALNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL,	検証ステップに関するテキスト・ノート: <ul style="list-style-type: none"> 検証成功 エラー=x レコード(X = マップ・ルールのないメンバーの数) データ・ロードのバイパス
PROCESSEXP	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE,	エクスポート・ステップのステータス: <ul style="list-style-type: none"> 0=未開始または失敗 1=成功
PROCESSEXPNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL	エクスポート・ステップに関するテキスト・ノート: <ul style="list-style-type: none"> 最後の成功エクスポート エクスポート-B 成功 エクスポートに成功 データ・ロードのバイパス
PROCESSENTLOAD	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ロード・ステップのステータス: <ul style="list-style-type: none"> 0=未開始または失敗 1=成功
PROCESSENTLOADNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL	ロード・ステータスに関するテキスト・ノート: <ul style="list-style-type: none"> 成功時の時間日付スタンプ ロード・エラー データ・ロードのバイパス
PROCESSENTVAL	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE,	確認ステップのステータス: <ul style="list-style-type: none"> 0=未開始または失敗 1=成功

表 G-2 (続き) TLOGPROCESS 表のリファレンス

列名	定義	説明
PROCESSENTVALNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL	確認ステップに関するテキスト・ノート: <ul style="list-style-type: none"> • 確認成功 • 確認エラー • データ・ロードのバイパス
PROCESSCERT	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE,	認証ステップのステータス: <ul style="list-style-type: none"> • 0=未開始または未送信 • 1=送信済
PROCESSCERTNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL,	ロード・ステータスに関するテキスト・ノート: <ul style="list-style-type: none"> • 統制送信済 • 統制クリア済 • 未送信 • プロファイルの統制が未検出 • 統制グループ割当てなし • ステータス設定中のエラー
PROCESSASSES	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE,	アセスメント(プロセス・エクスポート)ステップのステータス: <ul style="list-style-type: none"> • 0=未開始または未送信 • 1=送信済
PROCESSASSESNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL,	ロード・ステータスに関するテキスト・ノート: <ul style="list-style-type: none"> • 統制送信済 • 統制クリア済 • 未送信 • プロファイルの統制が未検出 • 統制グループ割当てなし • ステータス設定中のエラー
PROCESSCHILDDONE	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	親ロケーション・ステップの認証状態のステータス: <ul style="list-style-type: none"> • 0=未始前またはすべての子が未完了 • 1=すべての子が完了
PROCESSCHILDDONENOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL	親ロケーションの認証ステータスに関するテキスト・ノート: <ul style="list-style-type: none"> • 子の送信済 • 子なし
PROCESSUD1	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	未使用
PROCESSUD1NOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL	未使用
PROCESSUD2	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	未使用
PROCESSUD2NOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL	未使用
PROCESSUD3	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	未使用
PROCESSUD3NOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL	未使用

表 G-2 (続き) TLOGPROCESS 表のリファレンス

列名	定義	説明
PROCESSUD4	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	未使用
PROCESSUD4NOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL	未使用
PROCESSENDTIME	DATE DEFAULT TO_DATE('01/01/1900', 'MM/DD/YYYY') NOT NULL ENABLE	最終更新日時
BLNWCDIRTY	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	<p>検証前にマップ(WC = WildCard)の再計算の必要性を示すために使用されるフラグ:</p> <ul style="list-style-type: none"> 0=OK 1=ロケーションの再計算 <p>データがインポートされてからマップ・ルールが変更されました。これによって計算フラグが表示されます。</p>
BLNLOGICDIRTY	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	<p>検証前に LOGIC の再計算の必要性を示すために使用されるフラグ:</p>
BLNVALDIRTY	NUMBER(1,0) DEFAULT 1 NOT NULL ENABLE	<p>検証ワークフローの再実行の必要性を示すために使用されるフラグ:</p> <ul style="list-style-type: none"> 0=OK 1=検証の再処理 <p>データがインポートされてからマップ・ルールが変更されました。この場合、計算フラグが表示されます。</p>
INTLOCKSTATE	NUMBER(6,0) DEFAULT 50 NOT NULL ENABLE	<p>ロケーション POV のロック・ステータス:</p> <ul style="list-style-type: none"> 50=オープン 60=ロック済
PROCESSTATUS	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	<p>ロケーション/カテゴリ/期間のワークフローの現在の状態。 tLogProcessStates の有効なステータス</p>

H

システム・メンテナンス・タスク

システム・プロセスを実行して、すべてのランタイム・アーティファクト(プロセス表、ステージング表、Inbox/Outbox フォルダなど)のメンテナンスとクリーンアップを行うことができます。表やフォルダには、不要になった大量のデータが含まれていることがよくあります。システム・メンテナンス・タスク機能では、システム・プロセスをスケジュールして実行し、標準の表やフォルダをパージできます。

ノート:

1つのアプリケーションがパージの対象として選択された場合、フォルダが割り当てられていないすべてのアプリケーションがパージされます。デフォルトのアプリケーション・フォルダは汎用で、パージ・スクリプトは、選択したアプリケーションが含まれるフォルダにフォーカスします。この場合、アプリケーションがパージされないようにするには、個別のフォルダに保存します

パージ・スクリプトを簡単に使用できるように、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition には次が用意されています。

- 一連のカスタム・スクリプトが bin/system ディレクトリに含まれています。
スクリプトには次が含まれます:
 - アプリケーション・フォルダの保守
 - プロセス表の保守
 - EBS GL 残高表の保守
 - PeopleSoft 元帳表の保守
 - FDMEE データ表の保守
- スクリプトは、スクリプトの登録でシステム・スクリプトとして登録されます。
- QUERYID = 0 および APPLICATIONID = 0 の場合、スクリプトはインストールの一部として登録されます。
- スクリプト・グループ"System"が作成され、システム・スクリプトが割り当てられます。
- POV 内のターゲット・アプリケーションに関係なく、ユーザーにアクセス権があれば、「スクリプトの実行」にシステム・スクリプトが表示されます。
- パージ・スクリプトは、「スクリプトの実行」画面から実行できます。
- ODI プロセスは、スクリプトを data/scripts/custom ディレクトリではなく bin/system ディレクトリから実行します。

アプリケーション・フォルダの保守

アプリケーション・フォルダの保持プロセスでは、inbox、outbox および data フォルダのディレクトリからファイルをパージします。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition は、フォルダごとに個別の「保存日数」パラメータを受け入れます。特定のフォルダに値を指定しないと、FDMEE はそのフォルダをスキップします。

また、FDMEE では、それぞれのフォルダの下にある inbox および outbox サブディレクトリを確認して、ファイルがある場合は削除します。data サブディレクトリの scripts ディレクトリにはカスタマ・スクリプトが保持されているため、FDMEE ではこのディレクトリはスキップされます。

プロセス表の保守

このプロセスでは、次の実行表を保守します。

- AIF_PROCESSES
- AIF_PROCESS_DETAILS
- AIF_PROCESS_LOGS
- AIF_PROCESS_PARAMETERS
- AIF_PROCESS_PERIODS
- AIF_PROCESS_STEPS
- AIF_BAL_RULE_LOADS
- AIF_BAL_RULE_LOAD_PARAMS
- AIF_BATCH_JOBS
- AIF_BATCH_LOAD_AUDIT
- AIF_TEMP

パラメータとして保持する日数を受け入れます。

EBS GL 残高表の保守

このプロセスでは、AIF_EBS_GL_BALANCES_STG 表を保守します。EBS 一般会計残高は一般会計残高のスナップショットを含み、一般会計期間に基づいて削除されます。

プロセスでは、開始期間から終了期間までの一般会計期間のリストを特定します。

このプロセスのパラメータは次のとおりです。

- ソース・システム
- 開始期間
- 終了期間

PeopleSoft 元帳表の保守

このプロセスでは、AIF_PS_LEDGER_STG 表を保守します。PeopleSoft 一般会計残高は一般会計残高のスナップショットを含み、一般会計期間に基づいて削除されます。

プロセスでは、開始期間から終了期間までの一般会計期間のリストを特定します。

このプロセスのパラメータは次のとおりです。

- ソース・システム
- 開始期間
- 終了期間

アプリケーションによるデータ表の保守

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition データ表には、監査およびドリルダウン目的でエクスポートされたデータのアーカイブが保管されます。このような表は時間の経過とともに大きくなるがありますが、必要に応じてページできます。メンテナンス・プロセスでは、次の表が削除されます:

- TDATAMAPSEG
- TDATASEG
- TPROCESSLOG

パラメータは次のとおりです。

- ターゲット・アプリケーション
- カテゴリ
- 開始期間
- 終了期間

ページ・スクリプトの実行

ページ・スクリプトを実行するには:

1. 「ワークフロー」タブの「その他」で、「スクリプトの実行」を選択します。
2. 「スクリプトの実行」の「カスタム・スクリプト・グループ」で、「システム・メンテナンス・タスク」を選択します。
3. 「スクリプト」グリッドで、ページ・スクリプトを選択します。
4. 「実行」をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、「スクリプトの実行」画面でパラメータ値を入力します。
たとえば、ターゲット・アプリケーション、開始期間または終了期間を選択できます。
6. オプションで、「スケジュール」をクリックします。
ジョブのスケジュールの詳細は、[ジョブのスケジュール](#)を参照してください。
7. 「実行モード」から、レポートを実行するオンライン方法を選択します。

オンライン方法では、レポートが即時に処理されます。

8. 「OK」をクリックします。

Jython、Eclipse および Python の設定

この付録では、Jython、Eclipse および PyDev を Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition スクリプト・コンポーネントで使用するための設定方法について説明します。

この節は **FDMEE 11.1.2.3.100** リリースに固有の内容です。Jython、Eclipse および Python は、Oracle 製品ではないため、最新の更新や変更についてこれらの製品のマニュアルを必ず参照してください。[Jython への完全なガイド](#)、[Python のマニュアル](#) および [Eclipse のマニュアル](#) を参照してください。

Jython を設定するには:

1. 作業ディレクトリを作成します。
たとえば、C:\FDMEE を作成します。
2. Jython を作業ディレクトリにダウンロードします。
でダウンロードできます。[Jython](#)
Jython のインストーラの jar ファイルをダブルクリックし、次のオプションを選択します。
 - 英語
 - 標準インストール
 - デフォルトのロケーション(C:\FDMEE\jython2.5.1)
 - 現在の Java ホーム
3. 作業ディレクトリに **Eclipse** をダウンロードして抽出します。

Eclipse ダウンロードは <http://www.eclipse.org/downloads> で入手できます

ノート:

Eclipse の他に、Notepad++ と Jython アドイン、または [Python Fiddle](#) サイトを使用して、スクリプトの記述およびテストを行うことができます。[pythonfiddle](#) はイベント・スクリプトの記述に適したサイトであり、[pythonfiddle](#) の推奨ブラウザは **Chrome** です。より高度なスクリプトには、Eclipse または **Jdeveloper** をお勧めします

4. C:\FDMEE\eclipse\eclipse.exe から **Eclipse** を起動します。
5. ディレクトリを選択し、ワークスペースのデフォルトのロケーションを選択します。
たとえば、c:\FDMEE\Workspace を選択します。
6. 「Welcome」ページが表示されたら、右上隅の「Workbench」リンクを選択してそのページをスキップします。

7. 次のメニュー・オプションを選択して、プリファレンスを更新します:
 - a. 「**Windows**」を選択して、「**Preferences**」を選択します。
 - b. 「**PyDev**」を「**Available Software Sites**」に追加します:
これを行うには:
 - i. 「**Install/Update**」を選択し、「**Available Software Sites**」を選択して、「**Add**」をクリックします。
 - ii. 「**Name**」に **PyDev** と入力します。
 - iii. 「**ロケーション**」に次を入力します: **PyDev** サイト。
8. デフォルトのテキスト・エディタのオプションを変更します:
これを行うには:
 - a. 「**General**」、「**Editors**」、「**Text Editors**」の順に選択します。
 - b. 「**Displayed tab width**」に **2** と入力します。
 - c. 「**Insert spaces for tabs**」オプションを有効にします。
 - d. 「**Show print margin**」オプションを有効にします。
 - e. 「**Show line numbers**」オプションを有効にします。
9. 「**Menu**」オプションを選択します。
これを行うには:
 - a. 「**Help**」を選択し、「**Install New Software...**」を選択します。
 - b. 「**Work with**」で、「**PyDev**」を選択します。
 - c. 使用可能なソフトウェア・リスト「**PyDev**」から「**PyDev**」ノードを選択し、「**Next**」をクリックします。
 - d. Eclipse 用の PyDev のインストールを確認して、「**Next**」をクリックします。
 - e. ライセンス条項に同意して、「**Finish**」をクリックします。
 - f. インストールが開始すると、Aptana PyDev;および PyDev; Aptana 証明書に関してプロンプトが表示されます。必ず証明書を選択して、「**OK**」をクリックします。
 - g. **Eclipse** を再起動して、PyDev のインストールを完了します。
10. PyDev プリファレンスの更新:
これを行うには:
 - a. 「**Windows**」を選択して、「**Preferences**」を選択します。
 - b. PyDev によって使用される Jython インタプリタを構成します:
 - i. 「**PyDev**」を選択し、「**Interpreter-Jython**」を選択します。
 - ii. 「**新規**」をクリックします。
 - iii. 「**参照**」をクリックします。
 - iv. C:\FDME\jython2.5.1\jython.jar を選択します。
 - v. 「**OK**」をクリックします。

- vi. SYSTEM python パスに追加するフォルダを選択するように求められたら、選択内容を変更せずに、「OK」をクリックします。
- vii. 「OK」をクリックして「Preferences」ウィンドウを閉じます。